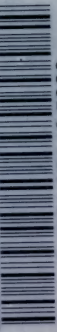


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 5980



等 汗 祖

大 東 出 迎 旗

大清宣統元年...

不 曉

清 宣 統 元 年

...

...

...

昭和六年一月十五日印刷
昭和六年一月十五日發行

國譯一切經寶積部三

編輯者兼

岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者

渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所

日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

不許
複製

發行所

東京市芝區芝公園地七號地十番

大東出版社

振替東京一九四七一
電話芝三〇一四〇番番

索引

(頁数は通頁を表す)

—ア—

阿伽羅香 Agaru 294
 阿合 Āgama 336
 阿竭陀 Agada 65
 阿吒薄拘 Āṭavaka 257
 阿若憍陳如 305
 阿末羅果 Āmalaka 99
 愛別離苦 345
 安浮陀 Arbuda 206

—イ—

伊底訶婆論 Itihāsa 189
 伊尼(鹿王) Aipeya 308
 伊羅婆那龍 330
 竟生人 Manuja 128
 圍山 263
 一間 Ekavīcika 242
 一切種智 263
 一來果 39
 一來向 39

—ウ—

烏瑟尼沙 38
 有數 352
 優波難陀 Upananda 257
 優樓毗螺迦葉 304

—エ—

慧命 305
 壞苦 343

—オ—

黃門 Paṇḍaka 46
 怨憎會苦 343
 遠塵離苦 217

—カ—

伽那 Ghana 207
 伽耶迦葉 304
 迦迦羅婆華 327
 迦遮鄰提迦衣 358

迦旃陵伽衣 327
 迦毗羅國 304
 迦囉吠羅 Kālavēla 103
 迦利 Kari 359
 迦虛陀夷(優波夷) Kalodayi 306
 歌羅邏 Kalala 204
 火光定 254
 羯吒布單那 Kaṭapūtana 239
 羯羅藍 226
 羯利沙婆那 Kārsāpana 189

—キ—

起者 Utthāpaka 10
 鬼趣 62
 祇樹給孤獨園 203
 薑羯羅 Kaṅkara 67

—ク—

苦苦 343
 具壽 Āyusmān 218
 俱虛 Kraśa 69
 郡有 348

—ケ—

化生 Upapāduka 66
 家家 242
 外法 134
 計羅婆論 Keṭabha 189
 健南 229

—コ—

五支(五塵) 304
 五處 211
 五受蘊 132
 五通 164
 五波羅蜜 297
 後有 249
 護世の天王 96
 光音天 320
 劫比羅 Kapilavastu 218
 憍奢耶衣 Kāuśeya 329

香醉山 321
 廣果天 320
 喬答摩 Gautama 247
 金剛杵 308
 金剛喻定 103
 根門 256
 含靈 49

—サ—

作者 Kāraka 10
 三穢 318
 三摩提 348
 三輪 140

—シ—

示教利喜 252
 四依(神足) 304
 四界 229
 四梵住 309
 四流 318
 識 Parijñāna 254
 七覺分 152
 七生預流 242
 質多羅華 332
 室羅婆 221
 悉達多 325
 質多羅波吒梨華 327
 濕生 Saṃsvedaṅga 66
 舍脂 Suci 312
 婆竭羅 Sāgara 257
 娑婆 Sahā 264
 斫迦羅婆山 340
 諸度 97
 商估 Saṅkha 27
 鄒摩羅衣 Saumilika 329
 宗師傅 190
 受者 Vadaka 128
 孺童 Māṇavaka 188
 十號 35
 十地 288
 熟藏 Antra 211
 生者 Jantiu 128

| | | | | | |
|----------------|-----|------------------|---------|------------------|-----|
| 生藏 Āmaśaya | 211 | 中陰 | 203 | 毗盧遮那(阿修羅) | 335 |
| 正勝 | 112 | 長夜 | 265 | 毗樓博叉 Virūpākṣa | 320 |
| 正定聚 | 341 | | | 毗樓勒叉 Virūdhaka | 320 |
| 正法眼 | 334 | —ト— | | 頻跋羅 Vimbara | 67 |
| 正斷 | 41 | 到彼岸 | 152 | | |
| 淨飯大王 | 35 | | | —フ— | |
| 靜慮解脫 | 106 | —ナ— | | 不還果 | 39 |
| 新發意 | 283 | 那提迦葉 | 304 | 福伽羅 | 282 |
| 親教師 Upādhyāya | 256 | 南無 | 295 | 佛乘 | 194 |
| | | 內身 | 247 | | |
| —ス— | | 內法 | 134 | —ハ— | |
| 水輪 | 99 | 難陀(龍王) Nanda | 257 | 閉手 Peśi | 206 |
| 隨信行 | 39 | | | 遍智 | 177 |
| 隨法行 | 39 | —ニ— | | | |
| 隨煩惱 | 126 | 尼伽蘭陀 Nigrantha | 179 | —ホ— | |
| | | 尼健荼書 Nighaṇṭu | 189 | 菩薩戒 | 267 |
| —セ— | | | | 菩薩乘 | 346 |
| 占波國 Campā | 224 | —ネ— | | 法身の菩薩 | 66 |
| 睽婆利(阿修羅) | 334 | 念處 | 41, 312 | 本行 | 83 |
| 贈部洲 | 4 | | | 本生 Jātaka | 179 |
| 鬪底波羅蜜多 | | —ハ— | | | |
| Kṣāntipāramitā | 1 | 波吒梨華 | 327 | —マ— | |
| 善見城 | 221 | 波羅陀(阿修羅) | 332 | 摩訶諾伽那 Mahānāgana | 99 |
| 善法堂 | 315 | 波利質多羅 | 347 | 摩訶摩耶 | 35 |
| | | 波盧沙迦華 | 327 | 曼殊沙華 | 327 |
| —リ— | | 婆留那 Veruṇa | 257 | | |
| 窣堵波 | 56 | 薄伽梵 | 218 | —ミ— | |
| 酥油 | 55 | 縛迦 Jīvaka | 66 | 眉間毫 | 38 |
| 相好 Lakṣaṇa | 255 | 八音 | 33 | 蔑戾車 Mleceha | 45 |
| 相輪 | 255 | 八邪 | 156 | | |
| 蘇摩 Soma | 69 | 伐撻迷伽 Vatsa-megha | 189 | —ム— | |
| 僧佉 Sāṅkhyā | 325 | 跋揮毘盧遮那(阿修羅) | 333 | 牟呼多 Muhūrta | 66 |
| 孫陀羅 Sundari | 218 | 般籌緘婆羅石 | 358 | —メ— | |
| | | 般羅奢佉 Praśākhā | 207 | 迷伽 Megha | 189 |
| —タ— | | | | 滅定 | 269 |
| 多摩羅跋香 | 327 | —ヒ— | | | |
| 馱都 Dhātu | 200 | 非有想 | 11 | —モ— | |
| 胎生 Jarāyuja | 66 | 非無想 | 11 | | |
| 大我(真我) | 75 | 彼岸 | 304 | 目真鄰陀(阿修羅) | 336 |
| 第一義解 | 181 | 毗伽摩 Vigama | 77 | —ヤ— | |
| 第八人 | 39 | 毗舍佉鹿子母 | | 耶輸陀 Yaśodha | 306 |
| | | Visakhāṃrgamatā | 221 | | |
| —チ— | | 毗陀經 | 189 | —ユ— | |
| 中有 | 224 | 毗鉢尸 Vipasyin | 31 | | |
| 中蘊 | 224 | 毗摩質多 Vama-citra | 320 | 瑜伽師地 | 176 |

—ヨ—
 養育 Poṣa 128
 —ヲ—
 羅睺羅(阿修羅) Rāhula 333

卵生 Apāṇaja 66
 —リ—
 離生の位 293
 力輪王 255

—ロ—
 六神通 35
 六道(六趣) 335
 漏盡意解 335

—寶積部三索引終—

世に住すること無量那由劫ならん 彼の佛を同じく無邊慧と號し 一一の諸佛は世に住すること 皆悉く無量なる那由劫にして 佛道を演說して他 して聞かしめん こと。是くの如くに釋迦牟尼佛は 乾闥婆の供養の報を説き 其れに授記を與へて 馬勝の問ふ所の笑の因縁を聞くを得しめたるに 大衆は聞き已つて皆欣喜し 彼の佛記の甚だ衆ふべきを知り 是の等無き佛記を聞き已るや 皆悉く釋迦文に歸依したり

(菩薩見實會第十六未完)

眼の現在したまへる故に欣喜して一切心の疑惑を除かん爲めなれば願はくば大悲もて笑の因縁を説きたまはんことをと。

爾の時に、世尊は偈を以て、慧命馬勝に答へて言はく。

我が現す所の笑を世の爲めの故に善い哉汝の間ふことや正に是れ時にして大衆は善根を當に増長すべし我が微笑の授記の事の爲めに馬勝諦に聽け我が導師の現せる此の微笑を説く所を我れ今當に彼の義を正に説くべければ汝應に欣喜して我が説くを聽くべし

乾闥婆王は佛を敬信し其の心清淨に欣喜を生じて實法に依り法に入り佛の正法に於て希奇を生じたり諸法は寂滅にして不動に安んずるを此等の大衆は實際に趣き乾闥婆城の如くなるに是くの如くにして入り我れを供養するに等あること無し是くの如くに諸法は生ある無く一切亦復盡滅もせずと大衆は幻の住せるが如くに思惟したるを未だ解了する能はずして疑惑を生ずとも法を説くに方便にて説くべからずして我れ眞實を以てする故に是くの如し彼等我が正法に入り已るや大龍象に乗つて佛を供養し菩提を生滅無しと觀察して乾闥婆王は我れを供養せり愚迷の衆生等を悲愍する是の故にて大なる一切智を求めて彼等は發願すらく當に佛と作つて諸の愚迷にして智を失へる者をして眞實の法に入り安住せしめ已つて不死寂滅の句を得しむべしと此等にて是の供養を作し已りたれば鬼身を捨離して心喜悅し定つて天宮の中に往生するを得て恒に帝釋と相ひ親近せんと多くの億那由他に無垢の諸の善逝を供養するに値ふことを得一の佛刹より一の刹に至り諸佛の所に於て法を聞くことを得ん彼等は淨き佛行を修し已れば得る所の佛土も亦清淨にして無量の衆を化して道心を發させ其れをして佛の種子を増長せしめん諸の世間の性の空なるを知り已れば亦此の法を以て他を教導し衆をして一切智に安住せしめ

【四】大衆。此の大衆は乾闥婆の衆を指す。

佛は世諦の爲めに是くの如くに説きたまふ。世諦の諸法は全くは無ならず。世諦の法の體性の如きは住すと。是くの如くに知り已つて衆の爲めに説きたまふ。世尊は是くの如くに諸法を説きたまふに。大悲の作す所甚だ奇特にして。諸法の體性を見るべからざるを。如來は方便もて其の性を説きたまふ。我等願はくば無邊の稱。百福の相を具する大導師と作つて。大悲もて諸の世間を利益せんことを。願はくば世の親と作ること今の佛の如くならんことを。我等願はくば閻障の者。貪の駛欲の流に隨順せる者。渴愛に纏れたる百苦の者に於て。救済して度脱せしむること世尊の如くならんことを。我等願はくば衆苦の者。彼岸を目前して魔に縛せらるる者。走ること猿猴の如き輕躁なる者に於て。救済して度脱せしむること世尊の如くならんことを。我等願はくば盲冥の者。六趣の往來に疲勞せる者に於て。已に自ら業果を壞れる者に於て。救済して度脱せしむること世尊の如くならんことを。と。

爾の時に、世尊は彼の三億六千萬の乾闥婆の衆の、深く信を生ぜるを知り已つて、微笑の相を現せり。爾の時に、慧命馬勝比丘は、偈を以て問うて曰はく。

無邊の威徳にて微笑を現したまへり。導師の是くの如くなるは因無きに非ず。願はくば佛速に此の因縁を説き。衆生の諸の疑網を斷除したまはんことを。今世尊の微笑を見已り。大衆は皆悉く疑網を爲り。一切願はくば微笑の義を聞かんとす。惟願はくば大悲もて衆の疑を斷ちたまへ。誰れか佛の法に於て敬信を生じて。能く諸の疑網を離るるを得たる。佛は衆生の深信を知り已つて。人天の勝者の故に笑を現したまへるならん。誰れか智慧あつて能く。如來の説かれたる眞如の法に隨順せる。其の念慧の解行を知り已つて。大衆の中に在つて微笑を現したまへるならん。一切の大衆は異心無く。唯雄猛の説を聞かんとす。諸の穢濁を離れて憂慮無き。世

三藐三菩提より退かず。音樂を奏せる時に、其の諸の音聲は遍く三千大千世界に滿ち、其の中の衆生の此の聲を聞く者も、亦阿耨多羅三藐三菩提より退かさざるを得たり。

是くの如くに、一一の諸乾闥婆は、各三億六千萬の象王の頭上に於て、其の供養を設け、諸の玉女をして、樂を作す者あり、歌を作す者あり、舞を作す者あらしむるに、彼の諸の玉女の歌舞を作せる時には、諸の大衆をして一心に觀望せしめたり。復玉女の、身手を動す者・梅檀末香を散する者・沈水末を散する者あつて、廣く供養を作すこと、阿修羅の設くる所の事の如くに、等しくして異なる無きなり。

爾の時に、乾闥婆等は、各啞羅婆那大象王の頭上に乗し、虚空の中に於て佛を遊ること三十六匝し已つて、各象より下り、復遶ること三匝し、頭面にて佛を禮し、躬を曲げ掌を合せて、一面に在つて住り、偈を以て讚じて曰はく。

世尊の勝慧は有頂を出で 自ら既に出で已つて復他を度したまふ 一切の世間は佛に如くもの無く 相好光顔極めて端正なり 人中の最妙無邊の稱の 世間に示現したまふことは不思議なり 一法として性相の異なるを見ずして 而も衆生をして善に住せしめたまふ 變異ある無き眞如の法には 但言説のみ有つて餘の義無く 用ふる事用ふる者ある無きも 然りと雖も佛は群生を化したまふ 來らず去らず亦生ぜずと 佛は能く是くの如き法を演説し 諸法の體性の空なるを説くと雖も 世雄は而も道を修習せしめたまふ 一法として自ら作し能ふものある無しと 世間の明者は説きて作す有るも 諸法各各覺知せずと世尊の示現したまふことは一切の作は 車の衆の分支を多く集めて 彼の支は自ら能く作すことを知らざれども 其の車の功用の現に見るべきが如く 佛の諸法を説きたまふことも亦是くの如きなり 諸法は各各相ひ教へず 亦迭互に相ひ覺寤せず 一切亦復相ひ依らず 法本不生にして亦不死なれど

【三】 諸法は各各、乃至、不死なれど。彼の法は、法として教招すべき無く、彼の法は、法として思念すべき無く、彼の法は、法として解脱せしむるもの無く、彼の法は、法として變異せしむるもの無しと。とあり。

乾闥婆授記品第九

爾の時に、復三億六千萬の乾闥婆の衆あり。諸阿修羅・迦樓羅・龍女・新王・鳩槃荼等の、卅尊を供養せるを見、受記を聞き已るや、其の心意に稱ひ、欣喜踊悦して、希有の心を生じ未曾有を得、歡じて言はく。希有・未曾有の事なり。乃至、如來の説きたまへる所の法界は變異あること無けれど。而も善根の増長を作すあることを示し、無作の者なりと雖も而も作業を示したまふことや。と。彼の乾闥婆等は、此の法中に於て是くの如くに知り已り、如來の所にかて心に尊重を生じて、阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。彼れ欣喜し已つて、佛に供ぜん爲めの故に、三億六千萬頭の唵羅婆那大龍象王を化作するに、皆六牙あつて、一一の牙の上に七池を化作し、一一の池中に七つの蓮華を化し、一一の蓮華に千の葉を化作し、一一の葉の上に七つの玉女を化し、一一の葉の間に七つの侍女を化し、天の諸寶を以て莊嚴の具と爲して莊飾に用ひ、復天の香を執つて供養に用ひたり。復、一一の唵羅婆那象王の頭上に於て、三億六千萬の蓋を化作し、七寶の流蘇を蓋の四邊に懸け、七寶の羅網にて以て蓋上を覆へり。復、一一の唵羅婆那象王の頭上に於て、三億六千萬の帳を化作するに、皆是れ諸天の妙香にて成す所にして、繡綵の流蘇を帳の四邊に懸けたり。三億六千萬頭の唵羅婆那大象王を化作し已るや、彼の乾闥婆等は、各其の象に乗つて天の音樂を鼓し、虚空の中に於て如來を旋り遶ること三十六匝し、天の梅檀末・天の沈水末・天の多摩羅葉末・天の眞金末と、曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華・波樓沙華・摩訶波樓沙華・迦迦羅婆華・摩訶迦迦羅婆華を以て、又復七寶の華を化作して佛の上に散じたり。

彼の乾闥婆等の香、華を散ぜる時に、是の香華の氣は、風に逆ひ風に順ひて縱横に皆去り、復種種の天の妙なる香水を雨すに、香水を雨す時に迦毘羅城の縱廣正に六十由旬に等しきに於て皆香泥を成し、其の香泥の氣は三千大千世界に充滿し、其の中の衆生の香氣を聞く者は、皆悉く阿耨多羅

の者ぞ我れ願はくば聞かんことを 誰れか能く魔及び眷屬を降せる 誰れか能く佛心をして欣喜せしめたる 誰れか能く深き有爲の底を得たる 我れ願はくば聞くを得て疑心を斷たんとを 一切の大衆は合掌して住し 如來の笑みたまへる因縁を聞かんと爲す 願はくば一切の疑を斷ち 兩足尊彼の記を説きたまへ と。

爾の時に、世尊は偈を以て、慧命馬勝に答へて曰はく。

善い馬勝是の義を問ふことや 汝世間に於て大利益せり 汝は笑の因縁を問へる故を以て諦に聽け馬勝我れ今説くことを 鳩槃荼の衆は我れを供養して 寂滅の法に於て心住することを得たり 彼等は我れを見て驚き怪ます 心に希有を生じて願求を起したり 彼等今日我れを供養し 其の心に寂滅の法を簡擇し 深心の信を以て大悲を起し 道を失へる者に於て能く導と作らんと 衆生を惑む故に我れを供養し 失道者の爲めにとて慈心を起したり 此等の賢智是れを作し已りたれば 鬼身を捨てて忉利に生るるを得 天主は恒に慈悲心を以て天に在つて數數彼れを教導するに 彼れ諸法に於て疑無きを得て 帝釋の親眷屬と爲るを得ん 彼れ無量恒沙の劫に於て 一一の國土にて修行を行じ 大弘誓の堅固なる鎧を被て 大法を具せる者を供養せん 彼れ無量の諸國土に於て 心に疲倦無く清淨ならしめて 大衆を利益して導師と作り 當に佛と作るを得て 不怪と號すべし 彼れ諸國に於て行を行する時は 是の國人は必ず成佛することを知り 此の方便を以て未來世に 衆生を度すと雖も怪心無ければなり 無上安隱の道を求めて 諸の國土を淨むることを爲すに都べて怪まざれば 作す所の事に於て心著する無く 大菩提に於ても亦是くの如きなり 問ふ所の笑の因を我れ已に答へたり 衆生は疑心を皆斷することを得たらん 大衆は疑を離れて欣喜を得たらん 定つて彼の供養を知るを得たるを以てなり と。

【三】 不怪。
異譯本には「除疑」とあり。

無畏を得たまへる故を以てなり 諸の衆生の但名のみ有り 及び但用のみ有るを觀じて取著せず 導師は寂滅の定を修したまへるを以て 是の故に智者には貢高無きなり 牟尼は世を猶幻の如く 亦夢中に欲樂を受くるが如く 復水月と春時の烟との如しと知り 是くの如くに觀察したまひて悉く餘す無きなり 譬へば 乾城の實ある無く 十方に於て求むとも得べからざる如く 其の城には實無くして但名のみ有りと 佛は世の法を見たまふこと悉く是くの如し 一切人天の供養する所の 寶車寶蓋及び音樂 幢と華と流蘇と合掌等をも 世尊は影と響との如しと觀知したまふ 我等は是の供養を設け已りしが 願はくば我れ當來に作佛を得んことを 亦願はくば我れも世の夢の如きを知り 知り已つて法を説くこと世尊の如くならんことを 我等は諸の苦惱者の 生老病死に逼らるるを見 無比の佛菩提を知り 説いて聞く者をして解脱を得しめんことを願ふ 諸の無智の衆生の所に於て 願はくば菩提を得て法を説くことを爲すに 垢濁ある無き法を演説して 導無き衆の中にて導と作ることを爲さん と。

爾の時に、世尊は諸の鳩槃荼等の深く生ぜる信を知り已り、微笑の相を現せり。爾の時に、慧命馬勝比丘は、偈を以て問うて曰はく。

佛是因無くして微笑を現したまふに非ざるに 一切の希有と爲すを怪みたまはず 如來は怪まずして笑を現したまへり 我れ今此の因縁を聞かんことを願ふ 一切の天と人とは皆疑あり 佛の口中より微笑を現したまへるを見て 惟願はくば諸の疑網を斷除して 世尊の微笑の事を演説したまはんことを 誰れか正法に於て深信を得たる 誰れか能く如法に慈父を見たる 誰れか佛の所にて讃じて供養を行ぜる 人中の勝者我れ願はくば聞かんことを 今日誰れか有爲の行に於て 其の過患を見て能く棄捨せる 今日誰れか能く實際に住して 清淨なる心

【二】乾城の實ある無く。異譯本に「乾闥婆城は本有る無く」とあり。

し。何を以ての故に。深廣なるを以ての故なり。是くの如くに、世尊の、勝供養を得たまひて心に増減無きことも、亦復是くの如し。何を以ての故に。一切の法に於て疑ふ所無き故に。と。

爾の時に、一億八千萬の鳩槃荼等は、供養を爲さん故に、一億八千萬の蓋を化作するに、皆是れ七寶にて成就せられたり。金線の寶蓋・銀線の寶蓋・毘琉璃線の衆寶の蓋・玻瓈珠線の衆寶の蓋・赤眞珠の線の衆寶の蓋・碼磲珠の線の衆寶の蓋・硨磲珠の線の衆寶の蓋なり。彼の諸の鳩槃荼は、衆寶の蓋に於て寶の流蘇を懸くるに、種種の色あり。金線の寶蓋には銀線の流蘇、銀線の寶蓋には金線の流蘇・毘琉璃の蓋には玻瓈の流蘇、玻瓈の寶蓋には毘琉璃線を以て流蘇と爲し、赤眞珠の蓋には硨磲の流蘇、硨磲の寶蓋には赤眞珠の線を以て流蘇と爲し、碼磲の寶蓋には玻瓈の流蘇なり。又復、一億八千萬の衆寶の車を化作したるに、亦種種の色は甚だ奇にして微妙なり。謂はゆる金・銀・琉璃・玻瓈・眞珠・硨磲・碼磲なり。其の車上に於て、復更に一億八千萬の衆寶の蓋を化作して、車と相ひ連らするに、一一の寶蓋に皆、百子あつて、其の諸の蓋の莖に、皆金・銀及び毘琉璃・毘琉璃等を用ひたり。彼の寶蓋に於て、復種種なる寶華の流蘇を化して、其の蓋を嚴飾せり。謂はゆる金華の流蘇・銀華の流蘇・毘琉璃華を以て流蘇と爲し、玻瓈の流蘇・赤寶の流蘇・龍珠の流蘇・赤眞珠華を以て流蘇と爲し、復、赤眞珠の網を以て其の上に彌し覆へり。又復、鳩槃荼の樂を化作して、種種なる聲を出して佛を樂まするに用ひたり。復更に、一億八千萬の衆寶の色を化作し、調伏して、疾に以て其の車を駕せしめたり。

爾の時に、鳩槃荼等は、各寶車に乗り、佛を遶ること三匝し、七寶の華を以て佛の上に散じたり。爾の時に、彼の鳩槃荼等は、車よりして下り佛前に來り至り、頭面にて禮し已り、復遶ること三匝し、躬を曲げ、掌を合せて一面に住り立ち、偈を以て讚じて曰はく。

不增不減の大牟尼の 譬へば須彌諸山王の如くに 此の無上の供養を受けたまへるは 如來は

【一〇】百子。
異譯本に「骨百莖」とあり。

故に 第一の悲心にて憐愍せば 當に佛と作つて其の意に稱ふを得べく 彼等は世間を觀察し已るや 當に導師を成じて無怨と號すべし 彼等の當に甘露を得べき時には 魔の怨ある無く亦餘のもの無く 恒常に無我の法を演説して 一向に世俗の説あること無し 彼の諸の如來は大悲を具して 諸の衆生をして佛智に入らしむるに 是の善逝の説法の時には 一切の衆生は皆信解せん 彼等の世世道を修むる時に 衆生を成熟することは難しと爲さず 彼の成熟せらるるものは法を聞き已つて 當に解脱を得て甘露を證すべく 諸法を聞く者にして悉く解脱せる 是の諸の衆生は皆端嚴なり 一切の衆生は皆能く 彼の諸の如來の説く所の法を知り 一切の鬼神及び畜生も 彼の佛の語を解せざるある無く 一切皆念法を得已つて能く如來の甘露の法を解せん 衆生の佛説を聞くあるもの 時に當つて愛樂の心を生ぜざる無く 彼の佛の所説を愛樂する者は 一切皆悉く甘露を得ん 彼の時の有らゆる化を受くる者は 當に生老病を解脱し 及び死憂悲の苦を解脱するを得べし 佛の説を聞き已つて心に垢無ければなり と。

是くの如くに釋迦牟尼佛の 諸龍の意を説いて佛子に答ふるは 彼れが如き堅智の心中に轉じて 無等の菩提を得ることを爲させん故なり 如來は彼の諸龍に記を授くるや 大衆は聞き已つて皆欣喜し 大衆は喜び已るや佛に歸依して 一切皆悉く心清淨なりき。

鳩槃荼投記品 第八

爾の時に、復諸の鳩槃荼一億八千萬あり。諸の阿修羅・迦樓羅・龍女・龍王等の、如來を供養せるを見、投記を聞き已るや、其の心意に稱ひ、踊躍欣喜して、希有の心を生じ 未曾有を得たり。如來世尊の功德の智慧は、微妙殊勝なり。是等の如き希有の供養を得れども、怪まず喜びたまはざるは、佛の智慧は、諸の智慧に於て最も尊勝なる故を以てなり。譬へば、大海の不増・不減なるが如

【七】 第一の悲心にて憐愍せば。異譯本に「大悲にて諸の有情を愍念し」とあり。
【八】 彼等は、乃至、無怨と號すべし。異譯本に「彼の菴伽沙の劫數を過ぎ、次第に成佛して世間に出て、同じく寂靜慧如來と名け」とあり。

【九】 未曾有を得たり。此の句と次の文の間に、異譯本には「咸共に讚じて曰はく」とあり。然るべし。

於て、種種の色いろの無量なる光明を放つに、其の光は遍く照して、上梵天かみに至り、照し已つて還り來り、佛の頂いただより入るなり。

爾その時に、慧命馬勝比丘めしやうびくは、偈を以て問うて曰はく。

善ぜん哉沙門大牟尼 是れ因いん無くして現あらはしたまへる微笑には非ず 慈悲の導師だうし惟願たいげんはくば 無等の善慧ぜんゑの笑の因縁を説きたまへ 大衆は瞻仰せんがうして求めて 世尊の無量なる功德の行を聞かん

ことを欲し 笑に於て疑心を生じて樂まず 惟願たいげんはくば法王衆の疑を斷ちたまへ 誰れか釋迦佛しやくたかの法中に於て 今敬信を生じて心欣喜する 誰れか今日の魔波旬まはせんをして 心意迷亂めいらんして欣樂せざらしむる 誰れか今日に於て能く 功德の法の父たる大導師に恭事する 誰れか第一の勝供養しょうくやうを作せるかを 願ねがはくば釋師子上の上の説きたまはんことを 此に諸の大衆は指掌しじやうを合せ 皆悉く佛に對し瞻仰せんがうして住せり 惟願たいげんはくば導師疑網ぎむを除き 衆の爲めに笑の因縁を演説したまへ 大衆は聞き已らば欣喜を生じて 能く世尊の正法の教を知らん 大聖世尊衆を喜ばしめて 正教に隨順することに善く安住せしめたまへ と。

爾その時に、世尊は偈を以て、慧命馬勝めしやうに答へて曰はく。

深廣なる智慧の大衆師だいしゆしは 説く時に梵音八種を具し 清淨なる其の心は穢濁ていじやくを離れたり 諦あきらに聽け我れ笑の因縁を説かん 此の諸の龍王は敬信の心もて 我れに於て供を設くること一切に超えたるが 是等は佛菩提を求めて 一切世間を利益することを爲さん故に 悲心ひしんの増上なるにて衆生の 導師ある無くして云何に樂がひ 我れ云何いんかして大菩提を得んかを觀じ 衆生を成熟せんとて疲勞せず 深く寂定じやくぢやうを樂み智慧を具し 安樂乘あんらくじやうに乗じて心清淨しんじやうに 空無相くうむじやう及び無願むげんに於て 無量劫より來久しく已に修したれば 其の心平等に世間を觀すること 佛の得る所の智慧の相の如くにし 慈悲喜心じひきしんは皆平等にして 世間をして 安隱あんいんならしめん爲めの

【六】 安樂乘に乗じて心清淨に。 異譯本に「三種の解脱門に安住し」とあり。

け、合掌して佛に向ひ、五體を地に投じて佛の爲めに禮を作し、衆は共に一音にて、偈を以て讃じて曰はく。

久しく威儀百福の相を修し 悲心にて離垢の行を具足せんと 無盡なる衆寶の地を棄捨して
世尊は迦毘城を出でたまへり 六年の中に於て苦行を修せるに 如來は甘露の道を得たまは
ざりしも 善逝の意の猶退き悶えざりしは 其の久しく智慧を修めたまへる故を以てなり 如
來は眞に是れ天人の師として 世間の爲めの故に苦行を修したまへることを 世人は聞くすら
已に尙堪へざるに 況んや復能く目を以て親しく觀ることをや 牟尼は過去に頭目を捨てて
聖の所ひじりに如いて菩提心を集めたまへることは 我等是れを聞くとも 樂を生ぜず 如來の苦
行を聞く故に由つてなり 佛本忍辱仙もほんにんじゆせんと作り 迦利王か加利わうに爲つて手足を截られ 及び耳鼻を剝
られて悲を生じたまはざりし如きは 我等是れを聞きて忍ぶこと能はず 佛は身を以て秤盤しやうばん
に上せたるは 鳥の歸投を捨棄したまはざりしに爲れる如きは 我等聞くすら已に亦樂まず
如來は過去に甚だ勤苦したまへばなり 何故に我等は心樂まざるか 世尊の極苦を行じたまへ
る故を以てなり 如來の所に於て惡を作す者にすら 惡道に墮せる時に佛は復悲みたまふ
聖慧を具足せる大導師 云何ぞ能く不害の心を行じ 道行を修習して瘡疣無き 惟願はくば
佛安樂の行を説きたまへ 今此の龍衆は已に發心し 善逝に於て菩提の行を求め 佛の所説
の如きを悉く能く行ぜんとす 惟願はくば速に菩提の道を説きたまへ 此の諸の龍衆は甚だ渴
仰して 唯不老不死の處を求めんとす 願はくば如來の安隱の行を説き 此の衆生をして易く
化を受けしめたまへ と。

爾の時に、世尊は諸の龍衆の其の供養を設くるを見、及び願を發すを聞き、深く信するを知り已り、佛、爾の時に於て微笑の相を現せり。諸佛の法として、爾く微笑を現す若きには、即ち面門に

【三】迦利(カ加利)王。闍諍と譯す。過去世に於ける印度波羅奈國の王たり。
【四】佛は身を以て等。異譯本に「時に愚癡の婆羅門あり。來つて身肉を秤つて懸倒す」とあり。

【五】道行を修習して瘡疣無き。異譯本に「昔廣大安樂の因を修めたる故に、身肢を得ること、復故の如し」とあり。

寶柱を覆ひ、無價の寶を以て遍く堂下に布くに、其の寶の柔軟なること、譬へば三十三天の般霽絨婆羅石——其の石の色は毘瑠璃石の如くに、觸れて柔軟なること 迦遮鄰提迦衣の如くに、微妙にして樂むべく人の眼目を撃ち、諸の天人をして愛戀・繫念せしむるものなり。——の如くに、彼の諸寶の等も亦復是くの如きなり。彼の諸種の摩尼寶中には、或は涼冷なる光焰を出すあり、青水を出すあり、赤水を出すあり、白水を出すあり、黃水を出すあり。或は復、雜色の水を出すあり。或は復、涼しく樂しき風を出すあり。或は寶珠の、諸の衆生の須ふる所の事に隨ひ、皆悉く之れを出すあり。或は復寶あつて腹澤を出すあり。或は摩尼あつて明鏡と爲るに堪へたること、一切の衆は皆其の中に現じ、迦毘羅大城の中に於て出入する所の民は、其の多少に隨ひ皆寶中に現じ、一切の衆は皆悉く佛及び聲聞を覩見するなり。此の種種なる神通變化を作すは、彼の摩尼寶の神力の故を以てなり。其の地中よりは、種種なる雜色の寶蓋及び種種なる雜色の寶幢を出し、亦種種なる雜色の寶旛あり。復種種なる雜華の流蘇を出し、亦種種なる雜香の流蘇あり、復種種なる雜寶の流蘇あり、復種種なる眞珠の流蘇を出せり。復種種なる雜色の龍旛を出し、復種種なる衆寶の鈴網を出し、復種種なる雜色の良馬を出せり。諸べて出す所の者は皆是れ龍の力なり。

爾の時に、難陀・優波難陀龍王及び九億の龍は、彼の良馬を驅り、隨つて歩行し、右に遶ること三匝して、妙なる迦遮鄰提迦の柔軟なる寶を以て、世尊に散じたまつるに、彼の堂下地中に於て出づる所の種種なる衆寶も、上に虚空に昇つて如來及び聲聞の上に雨り、復以に諸龍の無量の樂器も、虚空の中に於て、自然に好き微妙なる音聲を出して佛に供養せり。

爾の時に、九億の諸龍は、佛を遶ること三匝し已つて、佛前に在つて合掌し、默然として佛の功德を念じ、如來を瞻仰して目暫くも捨てず。佛の功德を樂みて、深心に阿耨多羅三藐三菩提に安住せん故なり。彼等は、少時合掌し默然として佛の功德を念じ已るや、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著

【一】般霽絨婆羅石。
異譯本には「半拳紺末羅石」と記せり。
【二】迦遮鄰提迦衣。迦旃跋伽衣に同じ。

卷の第六十四

菩薩見實會 第十六の四

龍王授記品 第七

爾その時に、難陀・優波難陀龍王等九億の諸龍は、諸の龍女の妙供養めうぐやうを設けたるを見、及び龍女の授記じゆきを得るを聞き已つて、希有きゆうの心未會有みゆうの心を生じ、是の思惟しゆいを作せり。乃至、如來世尊應正遍知は希有・未有なり。是を以て、如來は諸の衆生の機根こんの深信を知りたまへり。如來には、少分も見ず聞かず證せざるものある無し。如來は、正法を是に其れ善く説きて、能く大衆をして聞き已つて現に知らしむるに時節ある無く、機に隨ひ法を授け、必ず果を得しめたまふなり。諸の智者をして、現に證知を得しめたまふこと、乃至、女人の動轉輕躁うごてんきんそうにして智減淺短ちせんせんたんなるすら、猶佛にほの説かざる深法を解するを得たる如し。況んや餘の智者の、善く如來の法中に安住し能ふ。諸の弟子の衆をやと。諸の女人の、欲心増上に瞋心増上に癡心増上たる如きも、猶能く如來の所説を知ることを得たる是の故に、難陀・優波難陀龍王及び諸龍等は、如來の所に於て、希有の心を生じ未有の心を生じて、供養を爲さん故に、遍く閻浮提の諸山・大海に雲を興して、遍く一切の世間を覆ひ、普く香水を雨して以て香泥を成すに、彼の香泥の氣は三千大千の佛刹に充滿し、其の中うちの衆生の香氣を聞く者は、皆阿耨多羅三藐三菩提あうたくさんびやくさんぼだいより退かず。迦毘羅城の縱廣正に等しく六十由旬なるに於て、赤眞珠を雨して遍く其の地を覆ひ、復、無價なる種種の衆寶もて、尼拘陀園を周匝して遍く覆ひたり。復、龍華を以て妙堂の縱廣正に等しく六十由旬なるを化成し、椽・柱・梁・壁に皆七寶を用ひたり。復、更に無量の樂器を化作して、供養を爲さん故に妙音を撃ち出せり。彼の龍華の微妙なる堂の中に於ては、九億の種種なる雜色の衆華の流蘇を化作して堂上に懸け、毘琉璃の網を以て諸の

無量の那由劫に於て 當に一切の佛を供養し得べく 後未來の星宿劫に於て 諸根寂靜にて

當に佛と作るべし と。

三三 諸の天人龍阿修羅 金翅夜叉乾闥婆 鳩槃荼鬼緊那羅の 一切の大衆は皆欣喜し 彼等は

佛の教化にて 佛法の中に於て力を得已り 皆悉く欣喜して指掌を合せ 稽首して佛足を頂禮

せり。

【三三】 諸の天人等、以下。此の文は、元來、長行の文即ち本文たるべきを、梵原本に於て、既に過つて、偈頌の形を以て附記したる者ならん、斯の例、他の偈頌にも多し。

べく 彼にても善名の能く毀る無きを得 諸の天女の勝供養を爲り 天宮に住すと雖も心著す
 る無く 乃至彼の天の壽限を盡さん 彼の化樂天宮の中に於て 具に彼の天の勝樂報を受け
 彼れ智慧者は命盡き已るや 一切の法に於て究竟を得たれば 他化自在天に往生し 大商
 主と作れども信清淨にして 彼の天中に住すれども心染る無く 是くの如くに法を愛樂せん
 彼等の彼の天の宮殿に居るや 彼の極妙なる五欲の樂を受くれども 愚癡無ければ善道
 に住し 乃至彼の限の壽量を盡して 天の欲を受くと雖も其の過を見て 寂定及び涅槃を樂
 求し 禪定を修習し獲得し已れば 命終るや即ち梵天の中に生ぜん 梵宮の中に於ては善く
 禪を知り 彼の禪果たる寂滅の樂を受け 智慧無等にして住すること一劫に 願うて無上の大
 菩提を求めん 彼の梵宮に住する一劫の時に 善く威儀に住して智慧を求め 方便以て世間
 を利益するに 廣く作すこと無邊にして量あること無し 智にて梵宮に住し樂んで禪に在れど
 も 禪に於て著せずして寂滅なるは 禪樂に著するも亦是れ過なるを知り 諸根の寂定にて
 菩提を求めんとてなり 一切の處に於て心信解し 皆菩薩の行に安住するを得るは 諸の禪
 定の虚誑の相を知り 唯寂滅の大涅槃を求むればなり 彼の諸の佛子は彼の中に於て 安隱
 なる菩提の果を求め 彼の梵宮に在つて心清淨に 世間を利せんと思ひて善く心を調するな
 り 諸の梵天等の自然の教は 彼れ梵教なりと説けども出世のには非ず 唯諸佛の菩提の道
 のみあつて 究竟して能く出世間たるを得るを 梵天は當時信を生じ已つて 發心して佛道に
 安住するなり 彼の梵天の自然の教の 是れ究竟せる出世の道に非ざるを知り 善逝の法に
 於て彼れは相應して 世間に於て是の法を説くを爲すに 彼の法眼にて説く所の果の如くに
 彼の聞く者をして速に能く知らしむるなり 彼等は彼の梵宮に住する時に 諸べて世間を利
 益することを作し已つて 能く無量の那由他 億の衆をして菩提の道に安住せしむれば 彼れ

【一〇】一切の法に於て究竟を得たれば、
 異譯本に「正念と常に相應し、善く三種の解脱門を修め、畢竟じて眞空の法に入解し」とあり。

【三】諸の梵天等の、乃至、出世のには非ず。
 異譯本に「彼の梵天の説く自然の法は、業果の理と相應せず」とあり。

と。

爾の時に、世尊はは偈を以て、慧命馬勝に答へて言はく。

善い哉善い哉慧馬勝 能く如來の笑の因縁を問へり 諸の龍女の供養を見已り 我れ世間を惑

む故に微笑せるなり 我れ今汝が爲めに彼の果を説けば 諸の過惡を離れて至心に聽け 我

れ今爲つて微笑を現す所を 汝馬勝等我が説くを聽け 此の諸の龍女は心は著する無くして

大菩提を求め進行を修め 智慧を以て世間の空なるを修し 決定して菩提の道 此に於ては作

も無く受者も無く 亦生者養育者無く 但諸法有つて餘事無きも 其の法も亦妄なること 焔

と像との如きに安住せり 恩を知るを以ての故に我れを供養し 能く智慧を以て眞實を知らん

とするに 善い哉佛の諸世間を解して 謂はゆる能く空無主を見たるを 彼れ此の空を樂うて

善く修習し 供養を設くと雖も猶幻の如くに 勝菩提に於て發願する所 彼の菩提を觀するに

も亦著する無し 此く無等を以て佛を供養し 亦衆生の空寂を觀じ已りたれば 永く龍道惡

趣の身を離れ 彼の帝釋と與に天中に住し 初利天に在つて極めて樂を受け 彼の天子の壽

命を盡し已り 能く彼の名稱を毀譽する無く 復彼の夜摩天に生ずることを得ん 夜摩天に

居り止る時に 具に彼の天の勝妙の樂を受けて 諸の佛子等は彼の中に住し 乃至彼の天の壽

量を盡さん 此の諸の佛子は具に樂を受けて 彼の夜摩天の壽を盡し已るや 復兜率天に往

生するを得て 彼の處の天と其の類を同じうし 諸の天女に常に圍遶せられて 具に彼の天の

勝妙の樂を受くれども 心に著する所無くして善道に住すること 譬へば蓮華の水に汗れざる

如きは 彼の天は能く大智慧を以て 一切世間の空なるを觀察したれば 猶石に畫ける字の滅せ

ざるが如くに 彼の念の失はざることも亦是くの如ければなり 彼の諸の天子は彼の天に居

り 具に彼の中の勝妙の樂を受け 彼の善道に於て壽を盡し已るや 當に更に化樂天に往生す

【二〇】焔と像との如きに。
異譯本に「陽焔と鏡中の像と
の如し。」とあり。【二一】彼の天子の、乃至、毀
譽する無く。
異譯本に「天の壽量と大名聞
とを具し」とあり。

爾の時に、世尊は諸の龍女の深信を得已れるを知り、微笑の相を現せり。爾の時に、慧命馬勝比丘は、偈を以て問うて曰はく。

世智の中に於て勝れたる智者、最勝なる導師は微笑を現したまへり、尊重堅固の徳山の如きに
今微笑を現したまへるは因無きに非ず、人中最上の勝尊主、願はくば此の笑の因縁を説くを
爲したまへ、天人龍鬼にして若し聞くことを得ば、佛に於て皆大欣喜を生ぜん、世間の導師
世間に於て、常に一切の因縁の法を知りたまひ、一法として佛の解せざるある無く、因縁の種
類を佛は悉く知りたまへり、唯願はくば善逝見に説くことを爲したへ、佛の知りたまふ所の笑
の因縁の如きを、一切の大衆にして若し聞くことを得ば、皆欣喜を生じて疑網を除かん、如
來の妙法に大利あるを、此等の大衆は必ず當に獲べく、大衆にして寂定心を得る若きも、妙
法の利益を味ふ故に由らん、佛力にて分別を斷たしめ已らば、唯菩提を樂うて佛説を聽
かん：若く笑の因縁を聞くことを得ば、當に必ず佛道を成就すべし、若し人法に於て
情に疑あらば、其の心は掉動して苦惱を生ぜん、現に今此の會の大衆是れにして、微笑の因
縁を知らざる故なり、大衆は能く疑網を斷つに堪へたれば、唯願はくば導師除滅せしめたま
へ、速に衆の爲めに説いて我等を度したまへ、何の因縁を以て微笑を現したまへるかにて
誰れか今日に於て心清淨なる、誰れか今日に於て魔怨を降す、誰れか佛所に於て敬信を生
ぜる、誰れか今日に於て佛を供養せるか、唯願はくば導師大衆の前にて、誰れか是くの如
き力を有てるかを演説したまへ、我等聞き已らば喜心を生じ、喜心を生じ已らば安樂を得ん
此の諸大衆は、咸く敬禮して、一切皆疑網の心を有てり、願はくば笑の因縁を説きたまへ、喜を生
ぜしめん故に、唯願はくば世尊衆疑を斷ちたまへ、此の諸の天人は聞くことを得已らば、大衆
は、當に疑網無きを得べく、若く如來の説を聞くことを得ば、一切當に欣喜の心を得べし

衆を覆ふに 寶名威徳の熾然たる光は 普く十方の大千界を照し 彼の諸の龍女は大衆の前にて 淨心に欣喜して佛を供養したてまつる 爾憍に於て無等の心を生ぜるは 安隱なる菩提の果を求めん爲めなれば 願はくば我等をして當に作佛せしめたまへ 一切の衆生を利益せん故にて 我等願はくば 無量の衆に於て 法を説きて諸の煩惱の纏を度せんこと 亦十力大導師の 現に苦惱の衆生等を救ひたまへるが如くならんことを 一切の諸法は 幻と焰との如く 亦水沫の堅實ならざるが如く 又注げる雨にて起る所の泡の如く 當に知るべし諸法には 主ある無きことを 衆生は像の如く亦影の如しと 是くの如くに世間を觀察し已り 惟願はくば我等衆の爲めに 法性眞如及び實際を説かんことを 佛の如くに過無く法を見ば 虚偽の妄相は愚者を誑すのみにて 幻の如き莊嚴の實ある無きは 唯諸の凡夫を惑亂し能ふのみ 衆生は法に於て迷うて智無ければ 諸法の如實の性を知らざれども 導師は已に彼岸の法を見 復能く他の衆生をして解せしめたまふ 虚空に雲を興して遍く地を覆へるに 彼の空雲を見れば猶影の如く 彼れ無體にして實に依る所無ければ 亦復影の如くにして實ある無きなり 是くの如くに衆生も體性無くして 唯能く諸根門を誑惑すと 佛智は是くの如く見るに 有趣の 但能く誑惑せらるるは無智なればなり 世間の尊重の此の業を以て 智慧の人に於て利益を作したまふは 如來の示現したまふことは體性無き 一切衆生の眞實の 故なればなり 唯實の法を以て悅豫する子は 生死の泥中に橋梁を作るものなれど 愚癡の實とする法の境界に非ざるは 聲に著して義を求めざるに由つてなり 佛の無過なるを以て我れは 眞實を具足し示現せる者に歸依す 能く愚夫の與めに親しき救と作りたまへば 舍宅たる善知識に歸趣したてまつる 是くの如くに大菩提を求めん爲めに 我等は尊導師に供養するなり 願はくば作佛を得て他を覺寤し 世間を利益すること猶佛の如くならんことを と。

【六】有趣。生死の果報の境界にして、即ち衆生を指す。
 【七】世間の尊重の、乃至、眞實の故なればなり。
 異譯本に「牟尼は三界に超越して、諸法の性の分別無きことを了したまへば、若し如來の教に依つて奉行せば、一切の世間は皆解脱せん」とあり。

出し、其の聲和雅にして甚だ愛樂すべきこと、譬へば百伎の音楽に、善巧なる伎人の擊作する所に
て出す所の音聲の、和雅にして愛すべきが如くに、彼の大威徳殿、乃至鈴網に於て出す所の聲も、
亦復是くの如きなり。此の聲も亦、三千大千の佛の世界に遍く、其の中の衆生の聲を聞く若き者
は、阿耨多羅三藐三菩提に於て亦退轉せざるなり。

爾の時に、彼の諸の龍女は、復更に種種の天華・種種の天香を雨して、水と俱に下すに、其の香
華の氣は、順風にも逆風にも順ぜず逆はずして、皆悉く能く去り、香水なる故を以て、伽毘羅城
の縱廣正しく六十由旬に等しきに於て、皆香泥を成し、其の香泥の氣も遍く三千大千の世界に満
ち、其の中の衆生は、是の香氣を聞きて亦阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。

爾の時に、彼の諸の龍女は、佛を供養し已り、及び九億六千萬の蓋・九億六千萬の馬・九億六千萬
の音樂・一切の衆寶にて莊嚴せる供具もて、虚空の中に於て、頭面にて佛を禮し、右に遶ること三
匝し、却いて一面に住り、躬を曲げて合掌し、偈を以て讚じて曰はく。

諸の龍女は等しく智慧を有ち 心意踴躍して欣喜を生じ 釋迦牟尼佛を供養したてまつり

安隱なる大菩提を求めんと願す 九億六千萬の 寶善及與び妙莊嚴を化作して 善逝善調

心を供養したてまつり 一切の諸障礙を出離せんとす 復九億六千萬の 妙馬及與び莊嚴の

具を化するに 馬と莊嚴と皆青色にして 亦復更に青色の 幢あり 彼の馬は一切空中に行

き 佛の所に詣つて供養を作し 龍女は咸く信敬の心を有ち 頭面にて如來の足を頂禮したて

まつる 龍宮の中に於て化したる音楽を 供養を爲さん故にて持ち來り 來り已るや釋迦文

供養を受くるに應ぜざる大導師に上げ奉る 善逝は彼の音樂の聲をして 遍く三千大千の界

に滿たしめたまへるに 無量の衆生は聞くを得已るや 皆悉く菩提の心より退かず 彼の諸

の龍女は空中に於て 一大衆寶の殿を化作して 縱廣の由旬六十あるにて 遍く十方の一切の

【二五】善逝善調心。
異譯本に「無上調御師」とあ
り。

龍女授記品 第六

爾の時に、九億六千萬の龍女は、諸の阿修羅・迦樓羅の、世尊を供養し及び記を授り已つて、心に欣喜を生ぜるを見て、彼れも欣喜を得て踊悦を心に稱げ、世尊の所に於て心を起して供養し、化作したる九億六千萬の蓋は皆七寶にて成じ、毘瑠璃の網を以て其の上に覆ひ、赤真珠の寶を以て網の縁と爲し、金を蓋の莖と爲し、毘瑠璃の寶を以て蓋子と爲して數百千あり、雜寶の流蘇を四面に垂れ下げたり。化作したる九億六千萬の馬は、青馬・青色・青形・青光にして、諸の莊嚴の具も一切皆青く、毘瑠璃寶を以て轡鞵と爲したり。上虚空の中に於て化作したる大威德摩尼の寶車は、其の車上に於て、復寶殿の、縱廣正しく六十由旬に等しきありて、其の殿は、遍く諸へて來れる大衆を覆ひ、其の殿の四面に化作したる九億六千萬の衆寶の流蘇は、周遍に垂れ下ること甚だ奇妙にして、其の諸光彩は人の心目を奪ひたり。化作したる寶網は、殿上に彌り覆ふに、復寶鈴の、殿の四の廂に懸れるあり。化作したる七寶の鶴と白鶴とは、次を以て飛行して殿の四面を遮れり。又復、九億六千萬種の諸龍の音楽を化作したる時に、諸の龍女は、彼の青馬に乗り、各寶蓋を擲ひ、虚空の中に於て自然に遊行したるが、是の諸の龍女は、各樂器を取り諸の音聲を奏でつ、佛を遮ること三匝し、天の栴檀末・天の沈水末・多摩羅毘末・天の眞金末及び諸の龍華を以て、并に復種種の華を化作して佛の上に散じ、復、優波羅華の流蘇・種種なる雜色の衆華の流蘇・種種無量なる雜色の流蘇・種種無量なる雜色の衣・種種無量なる雜色の瓔珞を以て、以に用ひて佛に散じ、廣く供養を設けたるは、亦彼の諸の阿修羅王の如くなり。

爾の時、九億六千萬の龍女の、音楽を作せる時に、佛の神力を以て、其の聲遍く三千大千の佛の世界に滿ち、其の中の衆生の是の聲を聞ける者は、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。大威徳の衆寶の殿中及び寶の流蘇・衆鳥の行く間・諸の寶鈴網に於ても、微風吹き撃ちて妙なる音聲を

【三】蓋子。
異譯本に「千骨」とあり。

【三】轡鞵。
異譯本に「轡勒」とあり。

【四】寶蓋を擲ひ。
異譯本に「傘蓋を張り設け」とあり。

未來の果を説かん 善い哉馬勝是の義を問ふことや 我れ微笑を現して世間を惑みたることを 諦に彼れを聽かば報するに悦意を以てし 心當に欣喜して疑網を除くべし 鳥王の我れに於て妙供を設けたるは 無上菩提の果を求めん爲めに於て 十種の智力と四無畏と 彼の法を得る故にて導師を成ぜんとなり 復十八不共の法を求めて 此等の金翅は善逝に供じ 亦堅固不壞の身と 三十二相八十好とを求めたり 佛の淨戒と三摩提と 諸佛の境界たる大智慧とを求め 淨土を成就して世間を度せんと 金翅は此れを求めて我れを供養したり 彼等の信心もて我れに供じ已れる 智者は能く畜生の趣を離れ 當に必ず天上に生ずることを得べく 此れは是れ惡道の最後の身なり 彼等は後に恒沙の如き劫に 常に人中及び天上に生れ 無量の諸佛を供養し已つて 當に佛と作つて諸根を伏すべし 彼の佛の國土には惡趣無く 身相を具足して八難を離れ 彼の佛を同じく普端正と名け 其の劫を名けて須彌幢と曰はん 八億四千萬歳の中 世間を憐愍する故に世に住し 彼の時の一切の諸善逝は 住壽と佛事と皆悉く同じ 彼の佛は熱を離し煩惱を度すること 一一の諸佛に八十會にして 一一の會中の八億の人は 憍慢を離るることに自在を得ん 彼れ本金色の身と大力とを有てるを以て常に憍慢を懷ける故に 後に成佛せん時に衆生の爲めに 憍慢を除斷せんとて法輪を轉ずればなり 彼等は過去に已に會て 極苦の行を修めたる仙人の衆として 其の數八億六千萬にして 凡べて修行する所は神通たりき 彼の諸仙人は通を得たる時に 己れの苦行を歎じて希有なりと爲し 禁戒を犯さず功德を具し 林中に居住したれど憍慢を生じたり 慢の故を以て金翅の中に生れ 通心の故を以て神力を具へ 戒清淨なる故にて佛に見ゆるを得れども 慢の故を以て菩提の心を忘れたりしなり 是くの如くに佛の授くる菩提の記 及び説ける金翅の本の所生を 大衆聞き已らば皆欣喜し 喜び已らば皆菩提の器を成ぜん と。

佛の威儀を得て、他の心をして淨く寂滅を證せしめんことを、願はくば戒、三摩提を具へ持ち、亦諸佛の上智慧を得、願はくば悉く佛と作つて、群有を度すること、佛の今世の導師と作りたまへる如くならんことを、世尊我れ願はくば十力を具し、亦十八不共の岸に到り、佛の智慧の世間に過ぎたるを成ずること、今の如來の上中の上なる如くならんことを、亦衆生の體性無きこと、幻の如く夢の如くにして依る所無きを知り、響の如く虚空の如しと宣説すること、佛の今日衆の爲めに説きたまへる如くならんことを、と。

爾の時に、世尊は諸の烏王の敬信を得已れるを知り、微笑の相を現せり。是の時に、慧命馬勝比丘は佛の微笑を見、偈を以て問うて曰はく。

人中無上なる勝導師は、是れ事無くして微笑を現したまふに非ず、世間の者を惡み我が爲めに、此の微笑を現せるは何の因縁なるかを説きたまへ、彼の諸の烏王は已に佛に供じて、寶殿幢旛を空中に現し、此の天人をして希奇を生ぜしめたり、願はくば兩足尊是の義を説きたまへ、一切の大衆は掌を合せて住し、深心清淨に皆欣喜して、金翅の未來の果を聞かんことを、

願へば、願はくば兩足尊此の義を説きたまはんことを、人中の最勝若し説き已りたまはば、一切の大衆は皆疑を無くせん、大衆の疑を離れて無畏を得るは、如來の智にて能く欣喜せしむればなり、大衆は欣喜して無畏を得ば、諸の過惡を離れて心清淨なれば、彼の衆の如來の説を聞かんと願ふこと、猶弟子の師の言を受くるが如し、願はくば大衆の心の疑ふ所を斷ちたまへ、願はくば佛攝受して欣躍せしめたまへ、大衆は欣喜して皆來集して、金翅の當來の果を説きたまふことを願へば、と。

爾の時に、世尊は、偈を以て慧命馬勝に答へて言はく。
十力は眞實に一切に超え、八枝の梵聲は悉く具足し、諸根を降伏して馬勝の爲めに、金翅の

【二九】 三摩提。三摩地と同じ。
【三〇】 群有。
異譯本に「群生」とあり。衆生。

【三一】 八枝の梵聲。八音を謂ふ。

玻瓈・眞珠・神磈・碼磈にして、其の寶の精奇にして微妙なること第一なり。是の殿堂は、復七寶の羅網を以て上を覆へり。謂はゆる金網・銀網・毘琉璃網・玻瓈寶網・赤眞珠網・神磈の網・碼磈網等に於て、微妙なること第一なり。復更に、八億六千萬の七寶の蓋を化作して、微妙奇特なり。謂はゆる金・銀・乃至、碼磈にして、青幢には黃頭、黃幢には青頭、赤幢には白頭、白幢には赤頭、雜色の幢には純色を頭と爲し、純色の幢には雜色を頭と爲せり。復更に、八億六千萬の七寶の妙旛を化作し、種種の色あつて、嚴淨なること第一なる。復更に、八億六千萬の七寶の帳を化作したり。謂はゆる金・銀、乃至、碼磈の寶もて、線を織り成して微妙なること第一なり。

爾の時に、諸の金翅鳥王は、是の八億六千萬の七寶の殿堂・八億六千萬の七寶の蓋・八億六千萬の七寶の幢・八億六千萬の七寶の旛・八億六千萬の七寶の帳を持ち、悉く以て如來世尊に獻じ奉り、既に獻じ奉り已るや、彼の諸の鳥王及び供養の具は、虚空の中に於て佛を遶ること三匝せり。譬へば、哩羅婆那象王の、三十三天に於て、諸天を頂き戴せ、空に乗じて、波利質多羅樹に遊び詰るが如く、彼の諸の鳥王の、是の殿・堂・蓋・幢・旛・帳を持ち、虚空に飛び騰つて、佛を遶ること三匝せることも、亦復是くの如きなり。

爾の時に、彼の諸の鳥王は、佛を敬ひ遶り已り、却いて一面に住り、躬を曲げて合掌し、衆と共に一音にて偈を以て讚じて曰はく。

生死を出離せる者に歸命したてまつる 生死を救度する人に歸命したてまつる 無等なる堅固の土に歸命したてまつる 無上無等なる聖に歸命したてまつる 願はくば我れ當に堅固の身を得 三十二相自ら嚴飾し 復八十の勝形の好を得べきこと 唯願はくば我等も導師の如くならんことを 願はくば我が圓光に威徳を具し 形顏の功徳を皆成就し 願はくば第一たる

【八】波利質多羅(Pāricita)樹。香通樹と譯す。忉利天上の樹王なり。

こと三匝し、譬へば壯士の臂を屈伸する頃の時の如きに、文殊師利は彼の月光莊嚴世界の中に在つて没して釋迦牟尼佛の前に出で、頭面を足に接して如來を敬禮し、却いて一面に坐して、佛に白して言はく。世尊、昔時の因陀幢如來は、今は即ち世尊是れなり。何を以ての故に。是の世尊は、不可思議なる諸の方便を具足して、能く衆生を成熟し佛國土を淨めて、恒に疲倦せず亦厭足無き故に由つてなり。世尊は衆生を安置せんとて、菩薩乘に住したまふことにも亦厭足無ければ、若し實語の人あつて正語を作さば、勝中の勝・勝中の妙・勝中の上首・最勝中の最勝なるものを佛と言ひ、是くの如き者をば當に釋迦牟尼佛と眞實に異なること無しと知るべし。と。時に、文殊師利は而も偈を説いて言はく。

雄猛なる巧方便にて 諸の世間を憐愍し 大威神力を現して 衆生を成熟せん故に 已に過去
 世に於て 曾て八億の佛と作りたまへり 猶自ら神力あつて 無心に正覺を取り 六十
 一三千も 佛國土を清淨にしたまはん 淺識は佛 牟尼の巧方便を知らざれども 初發心を
 捨てずして 彼の處處に現じ 更に未來世に於て 無量の佛を示現したまはん と。

迦樓羅授記品 第五

爾の時に、復八億六千萬の金翅鳥王あり。諸の阿修羅の、世尊を供養し及び授記を得たるを見已るや、如來の所に於て無等の敬信を生じ、踊躍欣喜して、供養を爲さん故に八億六千萬の殿堂を化作し、純ら諸天の七寶を以て莊飾すること、甚だ奇にして微妙なり。一一の殿堂の七重の枸欄は、四寶にて成ぜられ、微妙なること第一なり。謂はゆる金・銀・琉璃・瓊瑤にして、金の枸欄は、金を尋梁と爲し及び衆柱と作し、銀を曲櫓と爲し、銀の枸欄は、銀を尋梁と爲し及び衆柱と作し、金を曲櫓と爲し、毘琉璃の枸欄は、毘琉璃を以て梁柱と爲し、玳瑁を櫓と爲し、玳瑁の櫓欄は、玳瑁の梁柱と毘琉璃の櫓なり。彼の諸の殿堂は、周匝の四面に七寶の鈴を垂れたり。謂はゆる金・銀・琉璃・

【六】菩薩乘。三無數劫の間、六度の行を修し、更に百劫の間、福相の因を植ふ、以て佛の菩提を證得する者を謂ひ、又、六度の行該の者を指すことあり。大乘と同じ。

【七】曲櫓。原本には「曲櫓」とあれど、意を成さず。且、次次の文に據つて、誤植なること明なり。

諸の比丘に告げて言はく。汝が意に於て云何。頗は、下なる定・少なる定・羸なる定・怯弱なる定・善根に相應するに非ざる定・精進に非ざる定・善く善根を集むるに非ざる定・善趣に非ざる定・善く善根を發すに非ざる定・善迴向に非ざる定を以て、衆生を利益し思惟して樂を與へ能ふや。是くの如き廣大なる佛利を嚴淨にし、及び是くの如き多くの衆生を成熟し能ふや。と。諸の比丘言はく。不なり、世尊。佛、諸の比丘に告げて言はく。諸の比丘、實に是くの如く不なり。少なる善根・少なる戒・少なる信・少なる精進・少なる念・少なる定・少なる慧を以て能く衆生を利益し、及び思惟して樂を與へ善を離れしめんや。能く廣大なる佛利を嚴淨にし、是くの如き多くの衆生を成熟せんや。と。

佛、諸の比丘に告ぐらく。意に於て云何。彼の時の因陀幢如來を、汝は誰れなりと知るか。と。如來の間ひ已れるに、諸の比丘は默然として答へず。爾の時に當り、東方に恒沙の等の如き諸の佛世界を過ぎて、世界の名けて月光莊嚴と曰へるあり。彼の土に佛の高威徳王如來應供正遍知と號するあつて、今現に世に住したり。文殊師利は彼の衆中に在りしが、即釋迦牟尼の心念を知り已つて、即高威徳王佛に白して言はく。今釋迦如來は娑婆世界に在つて説法したまへば、世尊、我れ今彼に往いて釋迦如來を見たてまつり、禮拜し聽法して供養・恭敬せん。と。是の請を作し已る時に、高威徳王如來は文殊師利に告ぐらく。意に任せて去れ。今正に是れ時なり。と。爾の時に、文殊師利童子は座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、頭面にて高威徳王如來を禮し、右に遶る

復諸の比丘に告げて言はく。意に於て云何。下心・怯弱・善根と相應せざる心・精進に非ざる心・善く善根を習ふに非ざる心・善趣に非ざる心・善く善根を發すに非ざる心・善迴向に非ざる心を以て、能く是等の如き衆生を利益せんと思惟して、藥を與へ苦を除き能ふべきや。是くの如き廣大なる佛刹を嚴淨し、是くの如き多くの衆生を成熟し能ふべきや。と。諸の比丘言はく。不なり、世尊。佛、復諸の比丘に告ぐらく。意に於て云何。下なる信・少なる信・羸なる信・怯弱なる信・善と相應せざる信・精進に非る信・善く善根を集むるに非る信・善趣に非る信・善く善根を發すに非る信・善迴向に非る信を以て、是等の如き衆生を利益し、苦を除き樂を與へ能ふや。是くの如き廣大なる佛刹を嚴淨にし、是くの如き多くの衆生を成熟し能ふべきや。と。諸の比丘言はく。不なり、世尊。佛、復諸の比丘に告ぐらく。意に於て云何。下なる戒・少なる戒・羸なる戒・精進に非ざる戒・善く善根を集むるに非ざる戒・善趣に非ざる戒・善く善根を發すに非ざる戒・善迴向に非ざる戒を以て、是等の如き衆生を利益して、苦を除き樂を與へ能ふや。是くの如き廣大なる佛刹を嚴淨にし、是くの如き多くの衆生を成熟し能ふべきや。と。諸の比丘言はく。不なり、世尊。佛復諸の比丘に告げて言はく。意に於て云何。頗は下なる精進・少なる精進・羸なる精進・怯弱なる精進・相應に非ざる精進・精進に非ざる精進・善く善根を集むるに非ざる精進・善趣に非ざる精進・善く善根を發すに非ざる精進・善迴向に非ざる精進を以て、是等の如き衆生を利益して、苦を除き樂を與へ能ふや。及び是くの如き廣大なる佛刹を嚴淨にし、是くの如き多くの衆生を成熟し能ふや。と。諸の比丘言はく。不なり、婆伽婆。佛、復諸の比丘に告ぐらく。汝の意に於て云何。頗は下なる念・少なる念・羸なる念・怯弱なる念・善根に相應するに非ざる念・精進に非ざる念・善く善根を集むるに非ざる念・善趣に非ざる念・善く善根を發すに非ざる念・善迴向に非ざる念を以て、衆生を利益し及び思惟して藥を與へ能ふや。及び是くの如き廣大なる佛刹を嚴淨にし、多くの衆生を成熟し能ふや。と。諸の比丘言はく。不なり、世尊。佛、復

を、智を上首とし智にて順轉し、迴向するに善業を以てしたる故に、愚癡の報は生ぜず。其の愚癡を以ての故に不苦・不樂受を受くるを、彼の諸の衆生は、彼の佛土の中に於て苦受・不苦・不樂受の一向に皆無きは、愚癡を離れたるを以ての故なり。彼の諸の衆生の、彼の國土に生ずる時に、其の因陀幢如來は教化し已るや法に於て敬重し、若しは遊行の時に、法を思量し法を愛欲し法に染著するなり。彼等は心、法に於て愛欲・染著を生ずれば、遊行する時に苦受あること無く、行・住・坐・臥・睡・寤にも、乃至、威儀の苦ある無きなり。彼の諸の衆生の、國土の中に在るや、惡の順すべき無きは、惡無きを以ての故なり。苦の生ずべき無きは、善に於ても著すること無ければなり。是の因縁を以て、彼の諸の衆生には、善の順も無き故に變易の苦は無く、諸法の中に於て貪著を生ぜざる是の故に、壞苦は生ぜざるなり。亦、怨憎會苦は無し。何を以ての故に。彼の衆生は、一切衆生の中に於て平等に住することを得る心の現前するに由り、是の故に怨憎會の苦ある無ければなり。亦、愛別離苦無し。何を以ての故に。彼の衆生は、一切の法に於て著せざる故に由り——其の愛別離の苦は、愛よりして生ず。——是の故に愛別離の苦ある無きなり。苦苦も亦無し。何を以ての故に。樂受に於ても著を生ぜざる故なり。唯、行苦のみあり。謂はゆる無常の苦なり。何を以ての故に。彼の佛は、唯第一義を説ける故なり。彼の佛は、世に住すること恒沙劫を経たれども、彼の佛刹に於て、一の衆生として佛と論を競ふ者の來つて其の國に生じたること無し。何を以ての故に。彼の如來の、本行の菩薩の時に、衆生を成熟せるに由るが故なり。と。

佛は諸の比丘に告ぐらく。意に於て云何。能く下なる善根・少なる善根・善く習はざる善根・善く相應せざる善根・大精進に非ざる善根・善趣に非ざる善根・善後に非ざる善根・善迴向に非ざる善根を以て是等の如き衆生を利益し能ひ、樂を與へ苦を除き能ふべきや。是くの如き廣大なる國土を淨め、是くの如き多くの衆生を成熟し能ふべきや。と。諸の比丘は言はく。不なり、世尊。と。佛、

【10】 壞苦 (Viparināma-dukkhata)。樂の破壊し滅失するに由つて生ずる苦にして、謂はゆる三苦の一なり。
 【11】 怨憎會苦 (Apiya-sam-pnyoga-dukkhata)。怨み憎む者と會遇する苦にして、五苦の一なり。
 【12】 愛別離苦 (Priya-tipratyaya-dukkhata)。愛する者と別離する苦にして、謂はゆる五苦の一なり。
 【13】 苦苦 (Duhkha-dukkhata)。普通は、寒熱・飢渴・病苦等の苦該の者より生ずる苦を謂ふ、三苦の一なり。
 【14】 行苦 (Samskara-dukkhata)。一切の事物、即ち有爲法の轉變不定なるよりして生ずる苦にして、五苦の一なり。
 【15】 謂はゆる無常の苦なり。異譯本に「彼の國の衆生は、有爲にして遷る所に」とあり。

因陀幢如來は、是の衆生を教へて、其れをして發心して一切の惡を止めしめ、其の善法を以て授けて修學せしめられたればなり。是の因陀幢如來の國土の中にては、會てより五種の樂を得たり。謂はゆる、一には、欲の樂を得、二には、出家の樂を得、三には、禪の樂を得、四には、三摩跋提の樂を得、五には、無上菩提の樂を得たるなり。彼の諸の衆生は、其の樂を受くと雖も而も貪著せず。譬へば、蜜蜂の但其の味のみを取つて華の色を取らざるが如くに、彼の諸の衆生も亦復是くの如くに、其の樂を受くと雖も而も著を取らざるなり。譬へば、飛鳥の、空中にて行いて其の空に著せざるが如くに、是の衆生の如きも、其の樂を受くと雖も而も著を取らざること、亦復是くの如きなり。是の因陀幢如來應供正遍知の、其の佛土の中の有らゆる衆生には、憂苦ある無くして唯喜樂のみあり。亦、不苦・不樂の受無く、愚癡無なる故に、唯心に稱へる樂のみあり。何を以ての故に。彼の諸の衆生の、本善を修せる故は、彼の因陀幢如來の、本菩薩の行を修せる時に、諸の相好を現じて、彼の衆生をして一切の惡を作らず、衆生を善法を修習することに安置せしめたるに由り、彼等は次第に諸の惡道を離れて善處に安んじ、彼等は一切の種に於て不善の業を一向悉く無くしたれば、其の作る所の業にて果報を得る時に、心欣樂せずして苦受を生ずる者は、是の處ある無く、惡業を作らず苦果を受けざる故に愚癡無く、故に不苦・不樂受も亦無きなり。彼の因陀幢如來の佛土の中は、一切の時に恒に惡風・暴雨無く、亦毒熱無く、彼の諸の衆生には時節の變易の苦も一切皆無きなり。彼の因陀幢如來は、本菩薩の行を修せる時に、彼の佛土中の其の諸の衆生に、一切の身業は、智を上首とし智にて順轉することを、演説し開示し正顯すること是くの如く、一切の口業は、智を上首とし智にて順轉することを、演説し開示し正顯すること是くの如く、一切の意業は、智を上首とし智にて順轉することを、演説し開示し正顯すること是くの如くなりしかば、彼の諸の衆生は、彼の菩薩に従ひ聞き已つて、彼の諸の衆生も一切の身業・一切の口業・一切の意業

【九】三摩跋提(Samapatti)。普通に「等至」と譯すれど異譯本には「等持」とあり、又成就力とも譯八種あり、八成就力、八解脫、八背捨と稱するもの之れなり。

丘、如來の一一の發心の功德、一切智の纏縁する所の處は、恒沙の如き等の諸佛も恒沙の如き等の劫にても思量する能はず、説いて盡すべからざればなり。何を以ての故に。如來は本菩薩の行を修せる時に、一の發心として、一切の衆生と衆生の攝むる所の者とを利益する爲めならざる無く、一の發心として、一切衆生の爲めならざること無ければなり。衆生界には邊際無く、其の中の衆生も亦邊際無く、有らゆる衆生界の無邊際なるに、如來の一一の發心の功德も、亦無邊際なり。何を以ての故に。衆生界の邊際無きが如く、衆生界の量るべからざる如くに、如來の一一の發心の功德衆の窮め盡すべからざるは、皆一切の衆生を憐愍し利益し安樂にせん故爲ればなり。是の故に、發心に、假に一切の衆生をして供養せしむる時も、如來の一一の發心の功德に報ゆること能はざるなり。何を以ての故に。彼の諸の衆生の如來を供養するは、皆雜食世報を悋望する爲めの故なるに、菩薩の本よりの發心は、雜食に於て世報を求むる心を離れ、衆生を利益し安樂せん爲めなればなり。故に、衆生をして生死に背き涅槃に趣向せしめんと欲し、如來は本菩薩の行を修せる時に、衆生を利益し安樂にせん爲めに、雜食に於て離れ世報を求めざりしなり。

佛は、諸の比丘に告ぐらく。過去世の、無量無邊なる流轉生死の、阿僧祇の不可思議なる、無始世界の不可説なる劫の中に、佛の號して 因陀幢王と曰へるあつて世に出現し、如來・應供・正遍知・明行・足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛婆伽婆たり。彼の佛如來は、一一の發心を以て、恒沙の如き等の世界の中にて、會て衆生の爲めに利益・安樂の思量を作して發心せり。比丘、彼の因陀幢如來の佛と作れる時には、恒河沙の世界は同一の佛刹にして、其の因陀幢如來・應供・正遍知の國土は、嚴淨にして惡趣及び八難を離れたり。是の因陀幢如來應供正遍知の、其の國土の中の有らゆる衆生は 正定・聚に住し、其の邪定の衆生・増上慢の衆生は一向皆無く、不淨の身業・不淨の口業・不淨の意業は一切皆無く、亦惡趣の煩惱と惡趣の業を作ると無かりき。何を以ての故に。

【六】 雜食世報を悋望する爲めの故。異譯本に「心清淨ならず、果報に著する故に」とあり。

【七】 因陀幢王。異譯本には只「帝幢」とあり。

【八】 正定聚 (Sampakka-samyak-sambhava)。正しく涅槃の證果を得べく決定せる者にして、小乘にては、預流向位以上を謂ひ、大乘にては種種不同なり。

の等（こひ）よりも多ければ、華聚（けじふ）を積み満（み）して供養すること、猶（なほ）斫迦婆羅山（せつかばらせん）の如きをも、自然（じぜん）の大士（だいし）の供（く）を受けるに應（お）ずることは、須彌山（しゆみせん）の如き燈明（とうめい）の炷（きり）に、大海（たいかい）以て香油（じゆ）の器（き）と爲し、以て燈（とう）して諸勝者（しよしょうしや）に供養するをも、供養（くよう）を受けるに應（お）ずる大威勢（たいいせい）の、恒河沙（こんがさ）の數（すう）の等（とう）よりも多（おほ）く塔廟（たつぼう）を造立（ぞうたつ）して供養せらるるは、功德（くどく）の彼岸（ひがん）に度（わた）れる故（ゆゑ）に由る、人中堅固（にんぢうけんこ）の供（く）を受けるに應（お）ずることは、諸（しよ）の廣大（くわいたい）なる勝寶蓋（しょうぼうがい）を以て、其（その）の蓋（がい）遍（わた）く三千界（さんせんがい）を覆（おほ）ひ、那由他劫（ないうたけつ）の數（すう）を経（へ）たる幢（ちゆう）の供養する所を以て、遍（わた）く十方（じふぱう）の諸世界（しよせかい）に満（み）ち、無量億劫（むりやういふく）の數（すう）を経（へ）たるをも、廣大なる幡（はた）を以て供養すること、恒河沙（こんがさ）の諸世界（しよせかい）に満（み）ち、無量億劫（むりやういふく）の數（すう）を経（へ）たるをも、如來人師子（にらいにしし）を供養するに、分別（ぶんべつ）を起（おこ）して譬喩（へいよ）を作（つく）さん（さん）に、大論師中（だいろんしちゆう）の師子（しし）をば、諦（あきら）に聽（き）け、諦（あきら）に聽（き）け諸

天人（てんじん）、我（われ）れ及び諸（しよ）べて來（き）つて此（こゝ）に在（あ）る衆（しゆ）、若（ごと）しくは恒河沙（こんがさ）の數（すう）の如（ごと）き、有（あ）らゆる十方世界（じふぱうせかい）の衆（しゆ）は、一切（いっけつ）皆當（けいとう）に作佛（さくぶつ）して、十力（じゆりき）を具足（ぐそく）せる人師子（にらいにしし）たるを得（え）、彼（か）の佛（ぶつ）の頭數（かうすう）は恒沙（こんがさ）の如（ごと）くにして、一一（いちいち）は皆恒沙（こんがさ）の頭（かう）を有（あ）ち、一一（いちいち）の頭（かう）の恒沙（こんがさ）の如（ごと）くなるに於（お）て、各（おの）各（おの）皆恒沙（こんがさ）の口（くち）を有（あ）ち、彼（か）れ一一（いちいち）の無量（むりやう）の口（くち）に於（お）て、無量沙數（むりやうさすう）の舌（ぜつ）を有（あ）ち、以（も）ちたる舌（ぜつ）にて如來（にらい）を讚嘆（さんたん）すべけん

に、彼（か）の諸（しよ）の如來（にらい）は説（と）くとも盡（じん）きじ、功德（くどく）の彼岸（ひがん）には到（いた）るべからず、一切（いっけつ）智（ち）は量（はか）るべからず、功德（くどく）の彼岸（ひがん）に度（わた）りたまへる故（ゆゑ）に由る、と。

爾（その）の時に、世尊（よ）は諸（しよ）の比丘（びくしう）に告（つ）げて言（い）はく、善（ぜん）い哉（や）、善（ぜん）い哉（や）、諸（しよ）の比丘（びくしう）。我（われ）が諸（しよ）の聲聞（しやうもん）は、端直（たんぢく）にて住（すま）し、智（ち）を有（あ）ち法（ぽう）を有（あ）つことも亦（また）梵天（ぼんてん）の如（ごと）くにして、乃（すなは）ち能（よ）く我（われ）が功德（くどく）の海中（ちゆうちゆう）——何（なに）を以（も）ての故（ゆゑ）に。如來（にらい）は、無量（むりやう）の功德（くどく）を具足（ぐそく）し、不思議（ふしぎ）の功德（くどく）を具足（ぐそく）したれば——入（い）りたり。諸（しよ）の比丘（びくしう）、如來（にらい）の功德（くどく）の聚（じゆ）は不可思議（ふかしぎ）なり。諸（しよ）の比丘（びくしう）、如來（にらい）の功德（くどく）の聚（じゆ）は、若（ごと）し是（こゝ）れ色（しき）ならば、一一（いちいち）の發心（はつしん）にて得（え）る所の功德（くどく）は、恒河沙（こんがさ）の等（とう）の世界（せかい）の如（ごと）きも、中（ちゆう）に容（い）れ受けざる所（ところ）なり。何（なに）を以（も）ての故（ゆゑ）に。諸（しよ）の比

【四】斫迦婆羅山（Qalrevata）山、鐵圍山の原稱なり。

【五】諸の比丘、乃至、功德の海中に入りたり。異譯本に「迦攝波、汝今、彼の聲聞衆中に於て、具に梵行を修め、諸法に了達し、現に實際を證し、心に寂靜を得、我が證する所の功德の海中に於て、善く入解し思惟し觀察し能ひたり。」とあり。

卷の第六十二

菩薩見實會 第十六の三

本事品 第四

爾の時に、慧命摩訶迦葉は、諸の阿修羅の、佛を供養せるを見已つて希有の心を生じ、是の思惟を作さく。世尊、本菩薩の行を修したまへる時に、何の善根を作つて是の果報を得たまへるか。と。時に、迦葉は即ち如實三昧に入るに、其の三昧の嚴心の力の故を以て、過去の阿僧祇阿僧祇劫にて如來の修せられたる一切の功德を憶念するに、彼彼の道・彼彼の生の中に於て修せられたる善根は、皆無上菩提を満足せん爲めにして、此の善根を以て不退轉の地に住することを得たまへる彼の諸の善根を、皆念知することを得たり。爾の時、迦葉の、如來の大善根を憶念せる時に、是くの如き心を發せり。佛の習はれたる善根の廣大なる、如來の一一の發心の善根の如きは、十方の世界の恒沙の刹土の、其の中の衆生の皆人身を得、人身を得已れる衆生の、恒河沙劫の如きに善逝を供養する如き、亦、修羅の一一の衆生の、恒河劫の如きに如來を供養し已れる如きも、如來の一發心の善根に報ふること能はず。と。

爾の時に、慧命摩訶迦葉は、三昧より起ちて偈を以て讚じて曰はく。

一一の如來牟尼尊の 發心廣大に菩提に向ひたまへると 此の修羅等の供養せる所とは 佛の迦羅分すとも 一にも及ばじ 世尊應供人中の上の 須彌山の如き梅檀の聚にて 人天の中

にて供養せらるるに勝へたるは 功德の彼岸に度りたまへる故に由るなり 人中の師子の供

を受くるに應ぜることは 諸の恒河沙の數の等にも過ぎたれば 譬へば大海の中に満てる水に 香水を和合して供養するが如きをも 具足功德の供を受くるに應ぜることの 恒河沙の數

【一】 本事品。異譯本には「如來本行品」とあり。當に然るべし。

【二】 如實三昧、乃至、故を以て。異譯本には「一心に觀察し、佛の加持に由り」とあり。

【三】 一一の如來牟尼尊。異譯本には「往昔の牟尼大聖王」とあり。

ければ 汝今一心に善く諦に聽け 諸の阿修羅の佛を供養するは 無上の勝菩提を求めん
 爲めにして 修羅の心意の依る所無きこと 手の空に在つて障礙せざるが如し 此等世尊
 を供養し已れる 阿修羅衆の心は清淨なれば 大智にて皆修羅道を捨て 人天の中に於て久し
 く樂を受けん 此等は其の未來世に於て 恒沙の人師子に値遇し 善名劫に於て成佛する
 を得て 如來を皆號して 善名と爲さん 數六十那由他を滿して 名は十方に振ひて世間を
 照し 無依無著の法を演説して 廣く能く天人の衆を度脱せん 彼の諸佛の土は甚だ嚴淨に
 して 佛の知れる世間は五濁を離れ 佛國土を淨むること三千界にして 六十那由他を滿足
 せしめん 彼の國には諸の三惡趣無く 欣喜の心を以て土田を淨め 彼の佛は勇猛にして諸
 難を除き 無上なる大乘の法を演説せん 彼等諸佛は壽命を得て 世に住すること六十那由
 劫にして 依止する所無き法を演説することは 一一の導師皆亦然り 彼の諸の如來の滅度
 の後に 世間の智者も盡く皆滅すれども 六十那由劫を滿足して 彼の佛の正法は世に住せ
 ん 是の諸の如來は 各 恒河沙の如き衆生の聚を度すれば 彼の諸の如來は無量に等しく
 土と壽と法住とも亦是くの如し 彼の諸の善逝は能く 六十那由他の衆生の數を成熟して
 皆大乘の中に安住して 各各三寶の種を紹繼せしむるなり 今此の授記を修羅の爲めに
 世間を利用する者大仙は説くものの 天人も斯の授記を聞きば 身心踴躍して淨信を得ん

【と】

【五】 修羅の心意の依る所無きこと。
 異譯本に「貪恚の障染を悉く調除せること」とあり。
 【五】 善名劫に於て。
 異譯本には單に「未來に彼の河沙劫を過ぎて」とあり。
 【五】 善名と爲さん。
 異譯本に「最上燈如來」とあり。

悉く夢の如くなるを分別するは

如實の妙三昧を見ることを得たればなり

と。

爾の時、毘摩質多阿修羅王の等に、六十那由他の阿修羅あり。供養を設け已つて、皆各掌を合せ禮を作して住り、欣欣として踊躍の情意充滿し、喜樂心に稱ひ、菩提の心は流注して絶えざりき。

爾の時に、世尊は、彼の諸の阿修羅の信心の供養を知り已つて、諸佛の法の如くに微笑の相を示現して、其の面門より無量の色光を放てるに、青・黄・赤・白・紅・紫・玻璃・赤・金・銀及び雜色の如き、口より出で已り、佛を遶ること三匝し、還つて頂より入れり。

爾の時に、慧命馬勝比丘は座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、佛の爲めに禮を作し、偈を以て問うて曰はく。

雄猛なる牟尼の瑞相を現して 世間を惑みたまふは因無きに非じ 人中の最勝願はくば 大仙の現す所の因縁を説くことを爲したまへ 世間を憐愍して瑞應を現したまへるは 諸の修羅の勝供養を見 修羅に決定の記を授けて 我等の輩をして欣欣を得しめんと欲したまふか

朝に勝心の疑ある無き有り 此の衆中に發心の者有るを 世尊は其の信根を知り已つて 人中の師子は此の瑞を現したまふならん 朝に誰れか清淨心を發し 誰れか人中に於て勝信を生ぜる 有(日)るを 世尊は其の信根を知り已つて 此の最妙の瑞相を現したまふならん 今

此の大衆は皆疑を有つて 皆如來の微笑を現したまへるを見る 誰れか復朝に魔怨を降す 有(日)つて 此の瑞相を現したまふは此の人の爲めなりとも 善い哉降怨の大仙尊 願はくば

大衆の心の猶豫を斷ちたまへ 願はくば尊速に説いて踟躕する勿く 此の大衆の疑網を斷ちたまへ と。

爾の時に、世尊は、偈を以て馬勝比丘に答へて曰はく。

善い哉比丘問ふ所の義の 我が現す所の瑞の世間を利することを 我れ果報を説きて餘ある無

【四】如實の妙三昧を見ることを得たればなり。
異譯本に「當に如幻の三摩地を證すべし」とあり。

【七】有る。「有」は原本に「日」とあれど、音義連せざれば、前偈の句頭に在る「朝有」の「有」と同様の者なるを、「日」と誤寫したる者と認めて解したり。

【四】有つて。此の「有」も、前同様、原本の「朝日」の「日」を、誤寫と認めたるに由る。

【四】善い哉、乃至、諦に聽け。異譯本に「善い哉、馬勝大比丘、汝能く放光の事を請問せり。我れ今衆會の中に於て、最上なる眞實の果を記別せんと欲す」とあり。

明人の思量は得ざる所なり 佛は持戒の心清淨なる故に 人中の師子の所作は成ぜり 如來の智力は更に比無く 以て怖畏無くして三界に勝り 師子王の衆中に吼ゆるが如くに 一切の諸外道に超過したまへり と。

爾の時に、毘盧遮那阿修羅王の設くる所の供養も、亦、毘摩質多阿修羅王の如くにして、供養を設け已つて七寶の車に乗り、佛を遶ること三匝して、手に衆寶を執り以て如來に散じ、復、偈頌を以てして讚嘆して曰はく。

諸衆は皆牟尼の所に集り 淨心にて如來の面を瞻仰したてまつる 一切現前に觀たてまつる世尊は 斯れ則ち如來の不共の相なり 佛は一音を以て法を演説したまふに 種種に心に隨つて各皆解し 世尊の説の衆生の機に應ずるは 斯れ則ち如來の不共の相なり 佛は一音を以て法を演説したまふに 衆生は類に隨つて各解を得 意の欲する所に稱うて其の義を知る 是れ則ち如來の不共の相なり 佛は一音を以て法を演説したまふに 或は修め進むあり 或は調伏し 或は無學果を獲得するあるは 斯れ則ち如來の不共の相なり と。

爾の時に、目眞鄰陀阿修羅王の設くる所の供養も、亦、毘摩質多阿修羅王の如くにして、供養を修め已つて、七寶の車に乗り、佛を繞ること三匝して、手に赤眞珠を執り以て佛の上に散じ、偈を説いて讚じて曰はく。

欣喜して淨心にて佛を敬信し 傲慢を離れて邪見無く 佛の阿舍に順じて放逸ならざる 是れを無比を修行する子と爲す 諸法の自性の不可得なること 夢に欲を行ふに悉く皆虚なるが如く 但想に隨ひ起つて實の有に非ず 世尊の法を知りたまふことも亦是くの如し 秋時の雲と水中の月の如きは 無智の愚なる衆生を迷惑すれども 明智の人 深く佛法を樂うて精進する者を惑す能はず 妙人は最妙をば錯らずに悟り 佛法の中に於て放逸ならず 諸法の

【四】 毘盧遮那 (Vairocana)。現諸相」と譯す。異譯本には「普耀」とあり。

【四】 目眞鄰陀 (Mushindha)「解脱」と譯す。

【四】 阿舍 (Ashana)。無比法」と譯し、又説く所の法の畢竟無に歸するに由り、「無」とも譯す、又傳來の義にて聖教を指示するなり。

自在なるが如し 我れ心調の無畏者を禮したてまつる 能く諸根を調じて怨對を離れ 畏を離れ畏無くして安隱を得 世尊の煩惱は更に發らず 毒害を消伏したまひて悉く餘無し 那羅延力にて善く慈を修め 愛憎の中に於て心平等に 如來は諸の衆生の相を知りたまひて六道の攝むる所と爲らず 諸想の心を離れて有愛を竭し 智慧の光を放つて諸闇を破り 諸法の中に於て心著せず 牟尼の超過したまへることは等倫無し と。

爾の時に、善目阿修羅王の設くる所の供養も、亦、毘摩質多阿修羅王の如くにして、供養を修め已つて、七寶の車に乗り、佛を繞ること三匝して、衆寶の藏を奉り以て佛に獻じ、偈を説いて歎じて曰はく。

大雄は久しく已に 諸法の眞實なる相を知りたまへり 謂はゆる法の名は 各各和合したる假なり 一切諸法の體を 種種に求むれども得られずして 言ふ所の此の法は 唯是れ假名のものを説くのみ 名を離れたるを體性と名け 諸相も亦是くの如く 無相亦無名にして已に 三種の法を離れたり 言ふ所の解脱とは 實に顯説すべきもの無く 說者も說も亦無く 解者も亦復然りと 是くの如くに法を知りたまへるは 無上なる牟尼子にして 諸法に於て著せずして 行を修せる大名稱なり と。

爾の時に、伏三界阿修羅王の設くる所の供養も、亦、毘摩質多阿修羅王の如くにして、供養を修め已つて、七寶の車に乗り、佛を遶ること三匝し、眞珠の瓔珞を用ひ以て如來に奉り、偈を説いて歎じて曰はく。

我れ今佛を歎じたてまつる 顔容端正なると戒智の力とは 一切世間に佛に如くもの無く 無比の身を以て雙對を伏したまふ 色力光明三有を照し 諸の善業を修めて端正を得 布施の力を以て得たる其の相の 八十種好は悉く嚴淨なり 淨く戒力を持ちて能く動くこと無く

【六】六道。又六趣と云ふ。
【七】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上なり。
【八】諸想の心を離れて有愛を竭し。
【九】異譯本に「愛無く憎無く分別無く」とあり。
【一〇】善目。
【一一】異譯本に「妙眼」とあり。
【一二】謂はゆる法の名は等。
【一三】異譯本に「謂はゆる諸法は、因縁の故に縁つて有り」とあり。
【一四】言ふ所の此の法は、乃至、解者も亦然り。
【一五】異譯本に「若し法の説くべきあらば、此れは唯の假名を説くのみ。是くの如き種種の相も、本來常に寂靜にして、名無く亦相も無しと、牟尼の説く所なり。説くと雖も而も無説なることは、少分たりとも不可得にして、說者も既に亦無く、聽者も亦是くの如し。」とあり。
【一六】三種の法。説く人と聞く人と説く事との三なり。
【一七】伏三界。

大仙如來の神妙なる身は 一切の諸天人に超過したまへること 既に須彌を芥子に比するが如く 復大海を牛跡に譬ふるに似たり 如來の顔容は甚だ端正に 衆相の莊嚴は第一の最にして 一切の色中の上に超過したまへることは 日の出現して螢の照を息むるが如し 世尊の無量なる威徳の聚の 一切の威徳の者に超過して 諸の威徳をして現する能はざらしむることは 日の出づる時に螢光の隠るるが如し 大聖世尊の智慧の海は 三有の界を超過し遍覆して 諸の外道を蔽うて現ぜざらしむることは 日の盛に明なるや月光の没するが如きなり と。

爾の時に、跋婆利阿修羅王の設くる所の供養も、亦毘摩質多阿修羅王の如くにして、供養を修め已つて、七寶の車に乗り、佛を遶ること三匝し、摩訶波吒梨華を用ひ、以て佛に散じ、偈を説いて讚じて曰はく。

奢摩他を樂む智慧者は 能く三毒貪瞋癡を除き 衆生を引導して世間より出したまふこと 猶甘雨の塵と烟とを滅するが如し 世尊の熾然たる 正法眼も 亦酥を大盛火に投ずるが如く 能く煩惱の疑網を斷つて盡したまふことも 亦火の大曠野を燒くが如し 顔容端正にして 甚だ微妙に 衆相の莊嚴は最も第一に 一切の諸妙色に超過したまへることは 日の出る時に 螢光の隠るるが如し 如來は諸の善根の 無量億萬那由他なるを乘り持ちて 能く煩惱及び惡業を除きたまへることは 甘露を食ひて身の毒を去るが如し 一切の無明の冥を吹き除きたまふことは 夜の明炬の黒闇を照すが如く 如來の示現したまふ正法眼は 猶珠師の顯す寶價の如きなり と。

爾の時に、樂戰阿修羅王の設くる所の供養も、亦、毘摩質多阿修羅王の如くにして、供養を設け已つて、七寶の車に乗り、佛を繞ること三匝して、衆寶の華を散じ、偈を以て讚じて曰はく。

調じ難き惡心を佛の能く調じたまふことは 勇健の士の勝敵を降し 善く柔軟を得しむるに心

【三】跋婆利。勝樂と譯す。異譯本には「淨戒」とあり。

【四】正法眼。清淨法眼にして、大乘の初地以上の菩薩の人・法・法二空の理を觀見する智なり。

【五】樂戰。異譯本に「喜闘戰」とあり。

くして異なることある無く、衆寶の輦に乗り、右に遶ること三匝して、諸の金粟を散じ、偈を以て讚じて曰はく。

大牟尼尊には等倫無く 天上天下にも亦比無きに 佛は衆生は陽焰の如くにして 眞實の有に非ずして唯想のみ轉ずれば 此に於て作も無く受者も無く 亦士夫無く空無我にして 諸の所作を離れ體性無きを知り 一切寂定の法を説きたまふ 善逝の法に於て信解を得て 一切の法の悉く平等なるを觀ぜば 彼れ當に導師の子と作るを得て 佛の言教に順すること父の説の如くなるべし 我れ今讚嘆して得る所の福を 唯佛の智解のみ能く照知したまふを 我れ福德の悉く餘無きを以て 衆生に廻し施して皆佛と作らせんと。

爾の時に、復、跋鞞毘盧遮那阿修羅王あつて、説くる所の供養も、亦毘摩質多阿修羅王の如くに、等しくして異なることある無く、七寶の車に乗り、佛を遶ること三匝して、散ずるに銀の華を以てして、偈を説いて歎じて曰はく。

我れ今佛の妙好の相の 生死の海を度つて彼岸に到り 自身に度を得て復他を度し 彼岸の無畏の處に安置したまふを禮したてまつる 唯佛の大慧のみ群生の 倒見の叢林を知り無智の者の 焰水に迷惑して計して實と爲すを 無等の悲心にて皆已に知りたまふ 世尊妙人は衆生の 幻陽焰の如く光影の如きを見 牟尼は如法に善者に 三有の中にて不染の行を行することを生ぜしめたまふ 大自在人は 非實を知り 諸法の性は彼此空なるに 愚癡は夢の如くに欲樂を受くるを知りたまふを 佛子は知り已つて諸行を修するなり と。

爾の時、羅睺羅阿修羅王の設くる所の供養も、亦、毘摩質多阿修羅の設くる所の供養の如くにして、七寶の車に乗り、佛を遶ること三匝し、質多羅跋訶梨華を以ち、以つて佛の上に散じ、偈を説いて讚じて曰はく。

【二九】 金粟。異譯本には「金粟」とあり。何づれも不明なり。

【三〇】 跋鞞毘盧遮那 (Bhadrakṛtyaśrīnaga)。異譯本に「大力」とあり。

【三一】 非實を知り。異譯本に「法の皆虚假なるを了し」とあり。

【三二】 羅睺羅 (Rahula) 阿修羅。執月又は障樹と譯す。謂はゆる四種阿修羅王の一つなり。

華・摩訶曼殊沙華・波盧沙華・摩訶波盧沙華・迦迦羅婆華・摩訶迦迦羅婆華・波吒梨華・摩訶波吒梨華・質多羅樹華・摩訶質多羅樹華・金華・銀華・毘瑠璃華・衆寶の雜華を散じ、又、化華を雨し以て佛の上に散じ、又、諸の天の衣服・臂脚の鈴の釧を散じ、以て佛の上に散じたるは、腰の瓔珞・手臂の瓔珞指の環・項の中・七寶の鬘・金の鎖・銀の鎖・眞珠の貫・摩尼の瓔珞・半月珠の瓔・兩肩の上に於ける七寶の衣璉・種種の寶纓・兩耳の璫葉・髮を盛る寶袋・莊嚴せる頂冠・種種なる流蘇・種種なる香の流蘇・種種なる眞珠の流蘇・種種なる摩尼の流蘇にして、或は天の種種なる寶蓋・金末・香水を雨し、又、阿修羅の女の、手に赤眞珠を把り以て佛の上に散じ、又、寶を捉つて散ずる者、又、種種の珠を捉つて散ずる者は、皆佛を供養せん爲めなり。故に、毘摩質多阿修羅王は、其の眷屬と、皆悉く相ひ順じて偈を説いて言はく。

我れ常に是くの如き心にて 佛世尊に值遇し 如來に歸依せん故に 未來にも常に供養せん
と。

爾の時、波羅陀阿修羅王の説くる所の供養も、亦毘摩質多阿修羅王の如くに、等しくして異ることある無く、七寶の車に乗り、右に遶ること三匝して、偈を以て佛を讚すらく。

我れ實の十力を得たる士を禮し 亦怖を離れたる無畏者の 決定して不共の法を得たるを禮し 諸の世間を導引したまふに歸命す 我れ結縛を斷除する者を禮し 亦生死の道を出離せるを禮し 我れ岸に到り陸地に住し 貧乏の衆生を將の導きたまふ師を禮す 我れ深智不思議に 衆と和合して掉動せず 諸趣の中に於て心解脱したまへること 猶蓮華の水に著かざる如きを禮す 牟尼は本諸の空法を修したまひて 諸の簡擇を離れて無相を得 一切の處に於て 願する所無し 我れ空の如くに依る所無きを禮す と。

爾の時に、善臂阿修羅王の説くる所の供養の廣大無量なることも、毘摩阿修羅王の如くに、等し

【六】 質多羅 (Chalala) なる
べきか) 樹華。陸生の蓮華な
らん。

【七】 波羅陀。
異譯本には「極喜」とあり。

【六】 善臂。
異譯本には「妙臂」とあり。

婆に歸依し 此の歸依を以て生 老死に漏らるる大苦惱を求めず 世尊として諸天人の歸と爲らん と。

爾の時、毘摩質多阿修羅王は、偈を以て佛を歎じて、右に繞ること三匝せる時に、彼の諸の馬の瓔珞の莊嚴・彼の諸の車の莊嚴・彼の諸の阿修羅と阿修羅の女との莊嚴・彼の諸の幡幢・寶蓋・鈴網等は、風に爲つて吹れて、深妙の聲を出して、心に稱ひ聽を奪へり。譬へば、具足せる百妓の音樂の、善巧に奏撃して深妙の音を出すに、意に稱へる音聲の、甚だ聽き採るべく人の耳目を奪ふが如く、是くの如くに諸馬の莊嚴の瓔珞、乃至、鈴網は、風に爲つて吹れて微妙なる音を出すこと、巧に百種の音聲を奏撃するが如くにして、甚だ愛樂すべきなり。

爾の時に、毘摩阿修羅王は、佛を遶ること三匝して、天の梅檀末香・優鉢羅末・洗水末香・多摩羅末香・種種なる阿修羅の香末を雨して空よりして下し、天の曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華・波盧沙迦華・摩訶波盧沙迦華・迦迦羅婆華・摩訶迦迦羅婆華・波吒梨華・摩訶波吒梨華・質多羅波吒梨華・摩訶質多羅波吒梨華を雨し、復種種の化華の金華・銀華・毘琉璃華、乃至、七寶の衆華を雨すあつて空よりして下し、天の香水・阿修羅の香水を雨して空よりして下すに、香水なる故を以て、迦毘羅城の内外、縱廣六十由旬は悉く香泥を成して、其の泥香を以て三千大千世界に遍滿するに、有らゆる菩薩の其の香を聞ける者は、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。

爾の時に、毘摩質多阿修羅王は、佛を遶ること三匝するに、佛の神力を以て、虚空の中に於て天の伎樂及び阿修羅の音聲を作し、彼の諸の音樂は、佛の神力を以て、其の音遍く三千大千世界に満ちたるを、皆悉く聞知せるが、有らゆる大乘に住せる者は、其の聲を聞き已るや、悉く阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。無量百千の阿修羅の女は、或は歌ひ、或は舞ひ、或は音樂を奏し、或は身を勤轉して、又、天の梅檀末・優鉢羅末・洗水末・多摩羅末・摩訶跋香・曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙

の伊羅婆那龍象の空に在つて遊行し、俱に毘陀羅婆樹・梨耶多羅樹を持ちて諸天を供養するが如くに、彼の諸の帳幕は、虚空の中に於て右に遶ること三匝すること、亦復是くの如きなり。彼の諸の寶幕・却敵の中及び地上の重閣・殿堂に、諸の門戸・師子の座・莊嚴せる寶蓋・寶幢・旛華あるに、天の梅檀末香・天の優波羅末香・沈水末香を雨し、復曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華・迦迦羅婆華・摩訶迦迦羅婆華・波吒梨華・摩訶波吒梨華・質多羅波吒梨華・摩訶質多羅波吒梨華・金華・銀華・毘瑠璃華・玻瓈華・一切の衆寶の華を雨し、金を雨し、銀を雨し、天樹の衣を雨すは、彼の諸の修羅王の子の手中に、悉く是くの如き寶珠を持ち、珠の力の故を以て、意の須ふる所に隨ひ、皆能く降り雨すなり。

爾の時に、迦毘羅城の四門の外、各各縱廣六十由旬は、阿修羅王の威神の力を以て、光を放つて遍く六十由旬の上を照し、六萬由旬の周圍を照して供養の具に遍滿し、彼の諸の浮遊せる帳幕は、佛を遶つて住れり。時に、迦毘羅城の中には、曼陀羅華を積んで高さ七丈に舉り、天上の香水は泥を成せるに、佛の神力を以て、其の香氣をして遍く三千大千の世界に滿たしむるや、此の三千大千世界の中に於ける有らゆる大乘に住せる者、彼の諸の衆生は、其の香氣を聞き、乃至、初より阿耨多羅三藐三菩提の心を發して不退轉を得たり。沉んや復、久しく修せるものをや。時に、毘摩質多阿修羅王は、七寶・車に乗り、佛を遶ること三匝し、妙なる天の梅檀末を以て、以て佛の上に散じて、讚を説いて曰はく。

我れ今婆伽婆に歸依し 能く天人の無畏者に施したてまつり 最勝なる不可動に歸依して 無上なる妙菩提を希望す 我れ今婆伽婆に歸依し 心に三惡趣に墮せざるを喜ぶ 是の故に我れ今佛に歸依して 無譬の妙菩提を希求す 我れ今婆伽婆に歸依し 能く生死の大苦海を除き 能く曠野を斷ち惱を離れて淨く 能く衆生を引導するに堪へたる師たらん 我れ今婆伽

【四】 伊羅婆那龍 [Ira-varro] 異譯本に「伊羅鉢那大龍象王」とあり、「羊色龍」と譯す。

【五】 天上の香水は泥を成せるに。 異譯本に「其の香水と合し、和して泥を成せるに」とあり。

用ひ、毘瑠璃を闔と爲し、磚礪にて彫り鑿め、碼礪を樞と爲し、赤珠を柱と爲し、白玉を供と爲し、玻璃を地と爲したり。毘瑠璃の門戸は、玻璃を扇と爲し、金を門闔と爲し、銀を戸樞と爲し、白玉を柱と爲し、碼礪を棧と爲し、赤眞珠を地と爲したり。玻璃の門戸には、毘瑠璃を扇と爲し、碼礪を闔と爲し、赤珠を樞と爲し、金を以て柱と爲し、銀を樞樑と爲し、白玉を地と爲したり。碼礪の門戸は、白玉にて莊飾し、赤眞珠寶以て闔扇と爲し、銀を戸樞と爲し、瑠璃を柱と爲し、金を樞樑と爲し、玻璃を地と爲したり。赤眞珠の戸は、碼礪にて莊飾し、白玉の闔・扇にて、銀を戸樞と爲し、毘瑠璃の柱、玻璃の樞樑にて、黄金を地と爲したり。白玉の門戸は、碼礪にて莊飾し、金を闔・扇と爲し、毘瑠璃の樞樑にて、白銀を柱と爲し、玻璃を地と爲し、赤眞珠寶以て樞樑と爲したり。彼の諸の門戸の一一の戸の中には、六十那由他の師子の座の、七寶にて合成せるを化作し、諸の天人・阿修羅の衣を以て其の上に彌し覆うて、或は迦旃陵伽衣を敷き、或は憍奢耶衣を敷き、其の座の兩頭に朱色の枕を置きたり。彼の諸座の前には、七寶の凡あつて、一一の几上に、六億の阿修羅王の種種なる衣服、謂はゆる諸の天樹の衣・芻摩羅の衣・憍奢耶の衣・迦戸迦の衣を施くあり。一一の師子座の上には、各各皆二の修羅の女の、衆寶にて莊嚴せるあつて、一一の女人は、皆七寶の多羅樹の斐を持ち、以て其の扇と爲し、一一の座の中には、皆修羅の子を化して座上に在き、兩の女の、俠侍して七寶の扇を持てるあり。彼の諸の門戸には、亦復六十那由他の七寶の幢蓋を化作して、金の門戸に於ては、青き幢の黄なる柄に玻璃の間錯せるを化作、銀の門戸に於ては、黄なる幢の赤眞珠の柄に白銀の間錯せるを化作し、毘瑠璃の門に於ては、赤眞珠の幢に黄金を柄と爲し、玻璃を交錯せるを化作し、玻璃の門戸には、雜色の寶幢に黄金を柄と爲し、白銀を交錯せるを化作し、青幢には黄頭、黄幢には青頭、赤幢には白頭、白幢には赤頭、雜色の幢には七寶を頭と爲したり。彼の諸の寶幕及び諸の殿堂は、虚空の中に於て、佛を述ること三障するは、猶三十三天

【二】迦旃陵伽衣 (Kāśhira-dhaka) 鷲鷲の類の毛にて織りたる衣。

【三】憍奢耶衣 (Kāśeyā) 絹衣と譯す。

【三】芻摩羅の衣 (Sūmāhīka) なるべきか、羊毛衣と譯す。

以て、或は七寶の項の中及び諸の纓珞・金銀の耳の瑠璃を有ち、或は七寶の髪を盛る袋を以て、以て佛に散じ、或は頂の鬘・臂に在る鈴の動搖して聲を發すを以て、或は七寶にて填めたる鬘に金を以て莊嚴せるを以て、或は金にて填めたるに七寶にて莊嚴せるを以て、金の網を執るあり、金の流蘇を執るあり、摩尼の流蘇を持てるあり、眞珠の流蘇を持てるあり。或は金の蓋・銀の蓋を持ち、或は毘琉璃の蓋を持ち、七寶の蓋を持てる者あり。或は種種なる寶幢を持ち、或は種種なる色旛を持ち、或は香水を雨す者。皆佛を供養せん爲めの故なり。或は合掌して偈を説いて讚嘆するものあり。曰はく。

丈夫調御師に歸命したてまつる 丈夫最勝土に歸命したてまつる 丈夫兩足尊に歸命したてまつる

丈夫無等倫に歸命したてまつる 明照世間者に歸命したてまつる 最上大智海に歸命したてまつる

具足功德林に歸命したてまつる 最勝微妙山に歸命したてまつる 具足功德聚に歸命したてまつる

滅除諸煩惱に歸命したてまつる 修證淨行師に歸命したてまつる 淨行無斷絶に歸命したてまつる

無依不怯弱に歸命したてまつる 無懈無掉動に歸命したてまつる 淨行決定發精進に歸命したてまつる

決定滿足者に歸命したてまつる 無懈無掉動に歸命したてまつる と。

爾の時に、阿修羅王は、亦復六十那由他の七寶の帳幕を化作して、甚だ奇にして微妙なる雜色にて莊嚴せり。一一の帳幕の浮遊せる下にも、亦復六十那由他の七寶の大地を化作し、彼の諸地上にも亦復六十那由他の樓閣の却敵を化作し、七寶にて合成して微妙なること第一なり。一一の却敵に、亦復六十那由他の重閣・殿堂を化作して七寶にて莊嚴し、一一の堂殿に、復六十那由他の門戸・欄牖あつて七寶にて莊飾したり。一一の門戸は、金の門・銀の扇にして雜寶にて莊飾し、其の諸の門闌には、一一皆毘琉璃寶を用ひ、一一の門樞には、皆神磈を用ひ、復神磈を以て柱と爲し、一一の柱の上には、赤眞珠を以て以て以て瑠璃と爲し、礪礪を地と爲したり。其の銀の門には、悉く金の扇を

爾の時、世尊は其の瑞相を現せる是の相の故を以て、時に毘摩質多阿修羅王は是の念言を作さく。我れ今、最初に世尊を供養したてまつらんと。時に、毘摩質多阿修羅王は、其の徒衆六十那由他、婦女の眷屬も亦六十那由他なると與に、其の海中の無價の寶珠を以て、及び餘の海中の所有を悉く採つて供養せり。爾の時阿修羅王は、六十那由他の七寶の車を化作りし、一一の寶車に、復六十那由他の調順の馬を化し、一一の調馬に、復七寶の鈴の網を化して馬上を莊飾し、復眞金の鈴の劍を化し以て馬脚を飾り、一一の馬に、亦復七寶を纏ひたる響と駮と尾とを化作りし、一一の調馬に、復眞金の鞞と響とを以ひ、彼の諸の調馬は皆七寶にて爲れる一角を以る、彼の諸の調馬の車上も七寶もて莊嚴し、軒蓋も皆七寶を用ひて、虚空の中に在つて車に隨つて行き住り、一一の軒蓋には、皆七寶の流蘇の鈴帶を懸け、一一の軒蓋に、皆寶網を化して其の上に彌し覆ふに、彼の諸の車馬と軒蓋と鈴網とは、風に爲つて吹かれて微妙の音を出し、人の視聽を奪へること、猶善く撃つ百妓の音楽の、種種なる聲を出し、人をして喜樂せしめて人の心意を奪ふが如し。一一の寶車は、虚空の中に在つて、地を去ること六十由旬にして、一一の車後に諸の音楽を作せり。一一の車上に、皆阿修羅の女の種種に嚴飾せるあつて、其の車上に在る是の諸女等は、或は立ちて舞ふあり、或は坐して舞ふあり、或は唱歌するあり、或は身を動轉して、或は栴檀末香を散じ、或は優鉢羅の末を散じ、或は沈水末を雨し、或は多摩羅跋香を雨し、或は天の諸の末香を雨し、或は阿修羅香の末を散じ、或は金の末を雨し、或は曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華・波盧沙迦華・摩訶波盧沙迦華・迦迦維婆華・摩訶迦迦維婆華・波吒梨華・摩訶波吒梨華・質多羅波吒梨華・摩訶質多羅波吒梨華を雨すは、悉く皆化作して佛を供養するに用ふるなり。或は金華・銀華・毘琉璃華・玻璃華・赤眞珠華・碼瑙華・磲磲華を散じ、或は七寶を持ち、以て世尊に散じ、衣服に散ずるもあり。或は手の環・臂脚の鈿の釧・寶冠寶鬘の莊嚴の具・金の鎖・銀の鎖・眞珠を繩にて貫ける或は長き或は短きを

【四】角。角は「車」の誤寫ならん。

【五】多摩羅跋(Tamala-pati)香。香草の名にして、菴香と譯す。

【六】曼殊沙華(Mandjuvaka)。赤團花と譯す。

【七】波盧沙迦華(Purusa-ka)。三色華と譯す。

【八】迦迦維婆華(Karikarava)。白色華と譯す。

【九】波吒梨華(Patala)。灰色華と譯す。

【十】質多羅波吒梨華(Ottara-patala)。灰花色華と譯す。

化するなり 王は本より佛の出家を許さず 相師も本より昔童子を相して 家に在らば必ず
轉輪王と作つて 無量億の衆に供養せられ 聖王七種の寶を満足し 亦復四神通を具有し 如
法に正しく國土を治護して 四天下に王たる刹利王たらんと 爾の時に菩薩は是の言を發せ
り 我れ昔より無量那由劫 一切の時に於て常に實語す 大王 諦に我が今説くことを聽きた
まへ 大王は昔より來我が所に於て 實に初より信敬の心無く 輪王を以て我れをして作
さしめ 四天下を以て戀惜を生ぜしめんと欲す 譬へば本昔神龜あつて 海水の潮に隨ひ陸
地に在りしに 其の海潮の水廻り還り去り 龜便ち深き井中に墜墮せるが如きに 井中の舊き
鼈は海の龜に問はく 汝本何處より今此に至れると 廣智の海龜は井鼈に答へて 我れ海潮
に遇うて此の井に墮ちたり 其の海潮の水の源に還る時に 我れの行くこと遲遲として遂に及
ばざれば 斯を以て我れ今時節を失し 此の小井に墜して汝と共に住するなりと 井鼈復海
龜に問うて言はく 其の海は井中の水より多少なりや 豈復此より寬廣なりや 大爲りや小爲
りや願はくば速に説けと 廣智の海龜は井鼈に答ふるく 無智なる人は人の穿鑿せる處に住す
ればなり 我れ大海の水中に於て居り 彼に在つて多くの年載を経歴すれど 猶尙海處の中
を知らず 況んや復其の彼岸に到達することをやと 是くの如くに大王は都べて 我れの神
通の威徳力を知らず 四天下に輪王たる 世間の豪貴を以て我れに戀惜せしめんと欲せり
我れ今現に法輪の王と作り 三千大千の界を統領し 如法に正しく治して刀杖を離れ 八部の
最勝の供を得たり 我れ今昔日を稱頌して言はん故に 應現せる此の大衆を來すに 神通力
を以て其の心を修め 慈悲の念を用ひて衆を召集したるに 一切の諸有皆雲と會り 王の爲め
に淨信を得させざる莫しと。

と。爾の時に、淨飯王は而ち偈を説いて曰はく。

兩足世尊の初めて生れし時に 人の扶持する無きに七歩を行き
き 爾の時に我れは明智者を禮せり 牟尼城を踏えて田村の
れるに 六の天童子は供養を修めたれば 我れ時に復世の應供に禮したり 今是に第三に稽
首して禮し 世間を憐愍する尊に恭敬す 人天の微妙なる供を受くるに堪へたるは 世に佛に
如くは無く何ものか勝るあらん 世尊は本 悉達多と號し 字するまで父母に爲つて喜び
樂れしが 始めて如來の名稱の實にして 願の満足を得て甘露を獲たるを知れり と。

爾の時に、欲界の諸天は世尊の與めに師子座を敷き、天の妙衣を以て座上及び尼俱園に敷き在き、
復天の劫波樹の衣を以て虚空に彌し覆へり。爾の時に、世尊は空よりして下り、師子座に在つて跏
趺して坐せり。時に、淨飯王及び諸の眷屬は、頭面にて足を禮し、退いて一面に坐し、欲・色の二界
の諸天子等も、亦頭面にて足を禮して、虚空の中に於て退いて一面に坐せり。

爾の時に、世尊は而ち偈を説いて言はく。

淨飯大王及び眷屬は 世尊に來詣して供養を設けんとて 迦毘羅の妙城より出でて 尼俱陀の
可樂の園に趣くに 佛は無量の衆の與めに圍遮せられてあり 阿修羅王及び龍王 鳩槃荼王
金翅王 乾闥婆王并に眷屬 夜叉大王鬼神衆 緊那羅王は悉く皆集り 欲界の天王并に天子も

一切皆欣喜の心を生じて 六欲の諸天既に是くの如くなれば 梵輔梵身 梵天の衆 遍淨
の諸天并に眷屬 乃至廣果淨居天 沙門の大衆婆羅門 僧徒・衛世・尼乾子 及び餘の一切の
諸外道 種種の異術を修行したる士 斯等も諸方より皆來集せり 如來は自の神力を示現し

て 淨飯王及び釋種をして 信心欣喜の成ずることを獲得せしめんとて 如來は普く一切の衆
の爲めに 微妙なる語善義の句を以ふれども 世尊の意は淨飯王に在つて 種種の勝神力を現

【10】 悉達多 (Siddhartin, Siddhartin) 正しくは、薩婆易刺他悉他 (Sarvārthasiddhin) と云ひ釋尊の太子なりし時の名なり。

【二】 梵天。大梵天なり。

【三】 僧徒 (Anikeya)。謂はゆる數論外道にして、印度六派哲學中の最高なる者の一なり。

【三】 衛世 (Vaisika)。謂はゆる勝論外道にして、同じく六派哲學中の最高なる者なり。

り、釋提桓因は如來の左に在り、須夜摩天王・兜率陀天王・化樂天王・他化自在天王は、各各種種の天蓋を執持して如來を供養したてまつれり。爾の時に、毘沙門王・提頭賴吒天王は、佛の東面に在つて、偏に右肩を相ひ右膝を地に著け、合掌して佛に向つて恭敬の相を現し、毘樓勒叉王・毘樓博叉王は、佛の西面に在つて、亦偏に右肩を相ひ右膝を地に著け、合掌して佛に向つて恭敬の相を現したてまつれり。爾の時に、四天王・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在の諸天子等は、虛空の中に在つて、天の優鉢羅華・梅檀末香・曼陀羅華を雨し、天の妓樂及び歌舞を作し、復虛空の中に於て諸の香水を雨し、昔より以來未だ會て見聞せざる優鉢羅華・梅檀香末もて、如來を供養したてまつれり。爾の時に、世尊も亦神通を現すに、通力の故を以て、人をして天の差別の相を見しめたり。

時に、淨飯王は、諸の天子の如來を供養せるを見て、希有の心を生じ、復嚴飾せる七寶の重閣の、虛空の中に滿ちたるを見、見已つて是の説を作して言はく、如來の本昔童子なりし時に、四天下の轉輪聖王を以て願戀を生ぜざりき。何を以ての故に。今三千大千世界の中に在つて、大法王と爲つて、天人を統領して富貴自在なればなり。今此の世尊は正法王と爲つて、我れ今此に於て人に爲つて圍遶せらるるに、世尊は乃ち天人に侍衛せらるるあり。と。爾の時に、淨飯王は、偏に右肩を相ひ右膝を地に著け、頭面にて足を禮し、合掌して佛に向つて是の言を作さく、世尊、初めて生れし時に、人の扶持する無きに而も七歩を行き、十方を觀察して是の言を作せり。我れ世間に於て最尊・最勝にして、當に老・病・死の邊を度脱するを得べし。と。我れ爾の時に於て、頭面にて世尊の足を禮せり。復後の時に於て、田村の閻浮樹の下に至つて、清涼にして日西に移つると雖も影初より動かざるに於て坐せるに、復六の天童子の、合掌して禮を作して如來の前に在るあり。我れ爾の時に於ても、頭面にて大牟尼の足を禮することを作せり。我れ今、第三に亦頭面にて世尊の足を禮す。

無き故に。と。爾の時に、世尊は而ち偈を説いて言はく。

其れ迦毘羅妙城の中の 淨飯大王及び眷屬 最勝なる人王は今方に至る 諦に聽け諦に聽け我れ當に説くべし 象馬車乘百千に過ぎ 種種の莊嚴甚だ殊妙なるは 迦毘羅城よりして引き出せる 人王の寶藏及び諸乘なり 青馬と青車と青莊嚴 將從の衣服も悉く青色に靴と帽と刀と 拂とも成亦青く 青鞭と青轡と青鈴網と 青衣の人は青幡蓋を持ち 人馬皆青くして甚だ殊妙なり 黃馬と黃車と黃莊飾 將從の衣服も悉く黄色に 靴と帽と刀と拂とも皆亦黃に 黃鞭と黃轡と黃鈴網と 黃衣の人は黃幢蓋を持ち 人馬皆黃にして甚だ殊妙なり 赤馬と赤車と赤莊嚴 將從の衣服も悉く赤色に 靴と帽と刀と拂とも皆亦赤く 赤鞭と赤轡と赤鈴網と 赤衣の人は赤幢蓋を持ち 人馬皆赤くして甚だ殊妙なり 白馬と白車と白莊嚴 將從の衣服も悉く白色に 靴と帽と刀と拂とも皆亦白く 白鞭と白轡と白鈴網と 白衣の人は白幢蓋を持ち 人馬皆白くして甚だ殊妙なり 雑色の車馬と雜莊嚴 將從の衣服も悉く雑色に 靴と帽と刀と拂とも皆亦雑に 雑色の鞭と轡と鈴網と 雑色衣の人は幢蓋を持ち 人馬皆雜にして甚だ微妙なり 彼の車後の莊嚴せる象は 其の數八十千に足り滿ち 金鞍と金鞵と金莊飾 象背には皆七寶の殿あり 種種に莊嚴せる妙龍馬は 其の數亦八十千に滿ち 七寶の莊嚴甚だ奇麗に 衆の妙服飾にて車後に從ふ 諸の妙華を以て御路に散じ 五種の香を用ひて其の地に熏じ 諸の瓶香并に繪綵を懸け 壯士戲人歌舞の輩は 種種に莊嚴して其の路に過く 諸の音樂を作して王の後に從ふ と。

爾の時に、淨飯王及び諸の侍從は、尼俱樹園に至り、車を下つて入り歩むに、衆の導從は前後に圍遶せり。爾の時に、世尊は、父王の心に深く怨恨を生ぜるを知り、王を度せん爲めの故に、人上を過り虚空の中に在つて自在に遊行するに、如來の行く時に、娑婆世界の主大梵王は如來の右に在

【八】將從。臣下の從者なり。
【九】拂(Camara)。拂は拂子の略なり。

は法を聽かんとするに 人中の最勝王は 八正の語を吐宣したまふなり 虚空は度量すべく

も 海は瓶にて量り盡すべくも 須彌山は稱するべくも 佛徳は知るべき難きなり と。

爾の時に、淨飯王は釋種に白して言はく。諸の仁者、日の出でんと欲するには、先づ瑞相を現すが如く——謂はゆる明星の出づる時には、當に知るべし、日の出づること久しからざるを——迦盧陀夷も亦復是くの如く、佛如來の一切種智に於て、先づ瑞相を見せたるにて、比丘の説く所の如來の功徳は、卽是れ一切智の相なり。諸の仁者、速に好き乗を辦ぜよ。我れ當に往詣して、如來の所に至るべし。と。時に、釋種の臣は言はく。善い哉、大王、今正に是れ時なり。須ふる所の具は、今悉く已に辦ぜり。と。爾の時に、大王は諸臣に勅して言はく。迦毘羅城より乃ち尼俱陀林に至るまで、其の中間に於て、精く道路を治め、好き軟沙を以て遍く其の地に布き、種種の華を散じ、諸の繒綵を懸け、侶伎樂の種種なる歌舞を作せ。と。

爾の時に、大王は好き車乘に乗り、迦毘羅城を出でて尼俱園に詣るに、彼の乗後に於て、八萬の白象あつて、種種の寶を以て間錯し莊嚴せり。其の象の上に於て、各七寶の殿堂を立て、甚だ奇にして微妙なり。其の象の後に於て、各八萬の寶馬を嚴り、其の馬上に於て、各金幢あつて、其の馬及び幢は各七寶を以て莊嚴して、微妙なること第一なり。是の時に、城中に無量の人あつて、車乘を嚴飾するに、諸べて服飾する所は、青馬・青車・青蓋にて嚴飾し、青刀を執持し、衣服は皆青く、鞍・鞵・鞞・轡も悉く亦青色に、各青幢を持ち、一一の車後は、百の青衣の人に圍遶せられたり。復、釋種の等あつて、各種種なる好車を嚴飾するに、青・黄・白・赤の雜色にて莊嚴し、雜色の車馬を雜色にて嚴飾し、一一の車馬に皆百人あつて、雜色にて莊嚴せることも亦復是くの如し。爾の時に、世尊は、遙に王の來れるを見て、諸の比丘に告ぐらく。汝若し三十三天の遊戯の衆を見んと欲せば、當に釋種の迦毘羅城を出づるを觀るべし。何を以ての故に。釋種の遊行は天と異る

十那由他の眷屬の前後に圍遶せると與に、猶壯士の臂を屈伸する頃の如きに、自宮より没して佛の前に住し、頭面にて足を禮し、恭敬の相を現して、却いて一面に住せり。金翅鳥王も、亦八萬六千の迦樓羅衆の眷屬の圍遶せると共に、自宮より没して佛の前に住し、頭面にて足を禮し、及び諸の外道の其の八億あるもの、諸方より來り、而して偈を説いて言はく。

淨き虚空の中に於ける 十五夜の満月は 諸の星衆を超過して 光明獨り顯耀す 佛は淨き月輪の如くに 闇を滅して三垢を除くことの 能く諸の外道に超えたるは 猶空中の月の如し 秋の日の千の光明は 能く諸の闇冥を除き 超出せる明月の光は 蓮華の池に開け布く

佛の光は日よりも過ぎて 普く大千の界を照し 如來は能く 聲聞の蓮華の林に開現したまふ 天主憍尸迦は 善法堂に住在して 諸の天衆に出過し 金剛杵は光り耀く 十力の功徳山 兩足の尊勝王は 諸の外道に超過せること 猶釋天王の如し 須夜摩天王は 天衆に

供養せられ 天衆の中に住在して 光赫として寶座に坐す 十力の無邊の威は 惡道の趣を超過し 無畏の光明の徳は 八正の道を顯説したまふ 兜率天王の如きは 宮に在つて衆に圍遶せられ 諸の天衆に超過せるは 宿善にて是耀するなり 調御人天の師は 八部に供養

せられ 諸の世間を超過せるは 無畏にて法を顯説するなり 化樂天王の如きは 天宮の中に在つて 諸の天衆に超過して 功徳獨り光顯なり 佛は諸の世間に超え 濁を離れ三界を出で 能く未だ調ぜざるを調する王として 十力を具して光照したまふ 自在天王の如きは

天宮の中に住居して 諸の天衆に超過せるは 宿善にて是耀するなり 是の佛の如きは光明 十力の行を具足し 天人の衆に超過せるは 本の善功德の故なり 大梵天王の如きは 諸の梵衆の光耀に超過し 甜美を説きて 八正の路を顯すなり 如來は梵天に勝り 沙門衆

中の王として 光明三界を照し 四諦の法を説くなり 衆の集れるを知見し已るや 天人龍

【七】 而して偈を説いて曰はく。異譯本には「時に彼、衆中の天龍・鬼神・摩睺羅伽等は、一心同聲にて、以に偈を以て讃じて曰はく。」とあり。

卷の第六十二

菩薩見實會 第十六の二

淨飯王詣佛品 第二

爾の時に、世尊は飯食し、手を澡ひ鉢器を洗ひ已つて、其の瑞相を現せるに、即時に毘沙門天王は、無量那由他百千億の衆の夜叉の圍遶せるを以て、譬へば壯士の臂を屈伸する頃の如きに、一念の中に、天宮より没して佛前にて現じ、頭面にて足を禮して北方に住立するに、虚空の中に於て、夜叉の大衆は、前後に圍遶して、合掌して佛及び衆僧を恭敬せり。提頭賴吒天王は、無量百千那由他の乾闥婆衆の前後に圍遶せるを以て、亦壯士の臂を屈伸する頃の如きに、天宮より没し如來の前に於て頭面にて足を禮し、東方に住在して、虚空の中に於て世尊及び比丘衆を恭敬せり。爾の時に、毘樓勒叉天王は、無量百千那由他の鳩槃荼衆の圍遶する所を以て、亦壯士の臂を屈伸する如きに、天宮より没して佛前に在り、頭面にて足を禮して南方に住し、虚空の中に在つて合掌して、如來及び比丘衆を恭敬せり。爾の時に、西方の毘樓博叉天王は、無量百千那由他の諸龍の前後に圍遶せるを以て、亦壯士の臂を屈伸する頃の如きに、天宮より没して如來の前に於て、頭面にて足を禮して西方に住在し、虚空の中に於て合掌して、如來及び比丘衆を恭敬せり。釋提桓因天王も、亦復是くの如くに、無量那由他百千に圍遶せられて、三十三天より没して佛の前に住し、頭面にて足を禮し、虚空の中に於て如來及び比丘衆を恭敬せり。夜摩天王・兜率陀天王・化樂天王・他化自在天王・娑婆世界の主、大梵天王・光音天王・遍淨天王・廣果天王・淨居天王も、各無量百千那由他の天衆の圍遶する所を以て、彼の天より没して佛の前に住し、頭面にて足を禮し、虚空の中に在つて如來及び比丘衆を恭敬せることも亦復是くの如し。爾の時に、毘摩質多阿修羅王は、六

【一】 其の瑞相を現せるに等。異譯本に「威儀に安住し、加臥して坐し、定に入つて父王の將に至らんとするを觀察し、即ち北方の多聞天王を召すに」とあり。

【二】 毘樓勒叉(Viśvānka)天王。南方・增長天(又)増上天との原稱なり。

【三】 毘樓博叉(Viśvapakṣa)。廣目天の原稱なり。

【四】 光音天(Ābhayaṃśā)。

又極光淨天とも云ふ。色界の第二禪の終天なり。

【五】 廣果天(Ārat-phala)。色界第四禪の第三天にして、凡夫の生れ得る最高天なり。

【六】 毘摩質多(Vimāśata)。淨心と譯す。乾闥婆の女を娶つて、帝釋の夫人舍脂を生みたりとの神話あり。

身に於て 大悲遊行して世間を化するに 久濁の心をして清淨を得しむれば 勇猛なる大王應當に信すべし 摩尼寶の水を澄清するが如くに 世間に遊行して衆生を淨め 群迷の競うて亂濁なるを除斷すれば 勇猛なる大王應當に信すべし 摩尼珠の性清淨にして 能く智者をして心歡欣せしむるが如くに 世尊の離惡の心は皎潔にして 諸の明人をして欣び慕ひ樂んで 世間に於て最も信心を起さしめ 能く天人をして苦の擔を離れ 諸有の趣を捨てて寂滅を得しむれば 勇猛なる大王應當に信すべし 功德の聚中にて少分を説けること 虚空に在る鳥の一の跡の如くにして 佛の功德の岸をば我れ知らざれば 大王應當に深く信敬すべきなりと。

爾の時に、淨飯王は慧命優陀夷の、善く世尊の菩薩たりし時に修めし所の功德を説けるを聞き、即ち自ら如來の本誓——我れ得度し已らば、必ず當に王を度すべし。——を念知し、是くの如く念じ已るや、深く敬信を生じ、復、慧命優陀夷に白して言はく。比丘、汝今は即ち是れ我が子の子なれば、汝食すべきこと竟らば、速に佛の所に還り、食を將げて佛に奉れ。我れも今亦當に往いて、世尊に見ゆべし。と。爾の時に、慧命優陀夷は、淨飯王の敬信を得たるを知り、飯食已に訖るや、即ち鉢盂を持ちて如來に上げ奉れり。

爾の時に、佛は諸の比丘に告げて言はく。優陀夷は淨飯王を教化して正信を得しめたり。諸の比丘、今日、諸天世人は大に利益を得たり。と。爾の時に、世尊は優陀夷を讚嘆して言はく。善い哉、善い哉、汝、今日に於て大福德を得たり。淨飯王は敬信を得たまへるを以ての故に。と。爾の時に、佛は諸の比丘に告げて言はく。迦盧陀夷の淨飯王を化して得たる所の功德は、若し是れ色ならば、十方世界の恒沙の佛刹も容受せざる所なり。功德の聚の廣大無量なる故を以てなり。と。』

種の爲めにとて來り 欣欣の事には今方に至れり 人主應當に信心を發すべくば 大王の名稱は必ず増長して 三千大千の界に遍滿せん 汝の子は既に是れ人王の藏にして 十力は慈悲の心を具足して 十方に遊行するに心無礙なること 華の水に在つて染著せざるが如し 自ら四流の諸有を度り已つて 亦人天を四の瀑河より度して 無畏洲の岸上に安置せんとすれば 大王は應當に導師を信すべし 四流三毒の箭を抜き去り 亦群生の勝醫師と作つて 衆醫の中に於て最も尊上なれば 大王應當に深く敬信すべし 亦能く諸の軍衆 魔王眷屬惡の親黨を降伏して 寂滅なる妙菩提を證したれば 大王應當に深く敬信すべし 諸の人天王は咸く勸請するを 衆生を度せんが爲めに妙法を説き 無上なる甘露の藥を敷演すれば 人中の牛王應當に信すべし 一切の外道の衆を隱蔽し 稱量に過ぎたる妙法輪を轉じて 無量億の衆生を化度すれば 大雄人王應當に信すべし 無明の厚く覆へる黑闇の中にて 自眼清淨にして復他を淨めんとて 法を説きて能く諸の盲翳を除けば 大雄人王應當に信すべし 老病死の畏に逼迫せる者には 老病を除き死せざる法を説きて 世間の衆をして善趣に昇らしむれば 大雄人王應當に信すべし 三火に燒かるる世間の衆に 地の洞に然ゆる水を以て滅するが如くに 八正を説いて聖に入ることを爲さしむれば 大雄牛王應當に信すべし 三穢にて諸惡を吐くを除斷し 能く世間の三垢の濁を離れしめんとて 十方に遊行すること甚だ奇妙なれば 勇猛なる牛王應當に信すべし 父の子を愛するが如くに世間を慈み 十力は大慈心にて普く潤し 大悲愍を起して衆生を度すれば 勇猛なる牛王應當に信すべし 調じ難きを能く調する婆伽婆は 應に度すべき所の者を今悉く度し 能く熾然たる諸の煩惱を滅すれば 勇猛なる大王應當に信すべし 衆生の三有の海に墮ちたるを 猶船舫にて能く濟ひ渡すが如くに 十力は大慈もて世間を救へば 勇猛なる牛王應當に信すべし 無量なる功德の端正の

【四流】四流(Catvāro sraṇi)。

又、四瀑河・四瀑・四瀑流とも

謂ひ一には欲流(五見及び無

明を除ける餘の一切の欲界の

煩惱)二には有流(五見・無明

外の餘の一切の上二界の煩惱)

三には見流(三界の身・邊・邪・

見取・戒禁取の五見)、四には

(三界の無明)なり。而して、

流と云ふは、有情は此の四法

のために漂流して止まざるに

由つて名く。

【七】三火に燒かるる等。

異譯本に「能く熾然たる三毒

の火を滅し」とあり。

【四八】三穢。三垢即ち三毒を

謂ふ。

しを 智者は誰れか信ぜざらん 諸の順義の語 諸欲の決定せる句を以て 此れに於ても縛する能はざりしを 智者は誰れか信ぜざらん 諸の軍駕の力 及び種種の護を以てしても 能く妙城を出でたりしことを 智者は誰れか信ぜざらん 妙なる欲樂を棄捨し 甘露を求めん爲めに行じて 菩提を希望したることを 智者は誰れか信ぜざらん 六年修めたる苦行の 勇猛なること能く當るもの無く 勝菩提を求めたることを 智者は誰れか信ぜざらん 六年龜少の食にて 勝菩提を求めて 諸の世間を利安せんとするを 智者は誰れか信ぜざらん 六年魔は擾して 相續して短缺を求めんと爲せし 其の便を得る能はざりしを 智者は誰れか信ぜざらん 五欲の過を遠離し 他物を求めずして 常に世間を利益せんとするを 智者は誰れか信ぜざらん 他に從つて法を聞かず 自然に菩提の 寂定にして覺るべき難きを成せることを 智者は誰れか信ぜざらん 梵天は自ら勸請して 佛世尊に勤求し 請じて演說せしむる如きを 智者は誰れか信ぜざらん 哀憐して我れを惑む故に 來つて 尼俱園に到り 諸の釋種を度せんと爲すを 智者は誰れか信ぜざらん 如來は自ら度し已つて我れを有海に度せんと 本の誓願を憶念するを 智者は誰れか信ぜざらん 今正に利を得る時 佛の一切智を知ること 我れを憐愍するに爲る故なることを 智者は誰れか信ぜざらん 我れ今當に往き詣つて 人導師の身に見ゆべしと 是の思念を作せる時に 自らはれ人王なるを 省ると。

爾の時に、淨飯王は久しく思量し已つて、慧命優陀夷に白して言はく。比丘、汝今此に至れるは更に何を須つ所ぞ。と。時に、優陀夷は偈を以て答へて言はく。

本大王を利益せん爲めの故にて 我れ今通に乗じて此に來り至れるなり 若し 十力に於て一の信だに起さば 男女皆善道に趣くを得ればなり 十力の功德には邊際無く 大仙は諸の釋

【四三】 尼俱園。前出の尼屠陀林に同じ。

【四四】 自らはれ人王なるを省る。異譯本に「身心の清淨を得たり。」とあり。

【四五】 十力 (Dasatva)。茲に佛の異稱なり、十種の智力を具足する故にこの稱あり。

爾の時に、淨飯王は、婆伽婆の道の徳を説けるを聞き已るや、心に是の念を作さく。此れは、乃ち世尊の聲聞の弟子なるに、猶是くの如き大神通・大威力・大功德を有てり。何に況んや、如來をや。と。復念すらく。太子の本生れし時に、大地は六種・十八種——動・遍動・等遍動・踊・遍踊・等遍踊・吼・遍吼・等遍吼・震・遍震・等遍震・起・遍起・等遍起・覺・遍覺・等遍覺なり——に動き、大光明を放ち、人の扶持する無きに七歩を行き、空中の二道より流水注ぎ下つて其の身を洗浴し、自然にして眞金の聖座有り、虚空の中に於て天蓋を化成して、諸天は禮拜せり。乃至、未だ出家せざりし時にも、五欲に爲つて迷惑せられず。凡べて作す所有れば、決定して退かず。説くに隨つて能く作すこと、一切時の中に堅固大力に、妄語を作さず信行に違はず。本よりは是の言を作さく。我れ阿耨多羅三藐三菩提を成じ、自ら度すること已に訖らば、復當に王を度すべし。となり。と。時に、王は佛の菩薩たりし時の本の誓願を念せる故にて、是の偈を説いて言はく。

若く初め生れ已つての 明智の言の虚ならずして 説ける所の事と異らざるありしを 智者は誰れか信ぜざらん 若く初め生れし時に 世に親ら無等にして 必ず天人の尊と作らんと説けるありしことを 智者は誰れか信ぜざらん 若く能く 寶聚の雪山の如くなるをも惜まずして 貪格を離れたる者ありしを 智者は誰れか信ぜざらん 若く能く 夢中に於ても 虚妄の語を作さずして 如説に修行せる如きを 智者は誰れか信ぜざらん 刀劍の如き語も 惱して瞋らしむる能はずして 忿怒の事を離れたりしを 智者は誰れか信ぜざらん 欺き能ふ者ある無く 貪瞋にも亦染らずして、智慧を具足せる王たりしことを 智者は誰れか信ぜざらん 一切の妙なる五欲 及び種種の報も 繫縛し能ふある無かりしを 智者は誰れか信ぜざらん 種種の希有の事 及び衆の妙物にも 能く怖畏するある無かりしを 智者は誰れか信ぜざらん 諸の美妙なる言を以て 明人は善巧に説くとも 能く惑縛するある無かり

【四三】 妄語を爲さず信行に違はず。
 異譯本に「常に正念に住して、誠實の語を説き」とあり。

昔刀劍と弓箭と矛とを以て 健士は執持して常に防衛し 亦寶蓋を用ひて恒に覆ひ蔭せるに
今獨林中にて誰れか守護する と。

爾の時に、優陀夷は偈を以て對へて曰はく。

慈悲と忍辱とにて自ら防衛し 聲聞の弟子眷屬の力と 功德の法の定つて怖無き 十力の雄猛
と四無畏とを以てす と。

爾の時に、淨飯大王は偈を以て證じて曰はく。

善い哉善く我が子の徳の 久しく善法を修して退轉せざるを説くことや 汝進むるを食し訖
り飯を將げて去れ 我れも亦牟尼王に往詣せん と。

爾の時に、優陀夷は復王に白して言はく。大王、婆伽婆は是れ大衆の師として、善く群生を御し

たまへり。是の大仙人は、能く沙門の衆中に善く安住して、沙門中の王として光明を普く照したまへり。譬へば、十五日の夜の淨月の、圓滿にして衆星の圍繞せるを、光明甚だ盛に一切を照耀するが如く、世尊も亦爾く、沙門の衆中に在つて光明もて照耀したまへることも、亦復是くの如し、譬へば、秋日の空中に在つて諸の雲翳無きが如く、彼れ婆伽婆も亦復是くの如くに、大衆の中に在つて光明もて照耀したまふことも、亦復是くの如し。譬へば、帝釋天中の王の、善法堂に坐するに、諸天の中にて光明顯赫なるが如く、彼れ婆伽婆も衆中に在すや、光明の晃耀なることも亦復是くの如し。譬へば、須夜摩天王・兜率陀天王・化樂天王・他化自在天王の、天衆の中に在つて光明顯耀し、威徳獨り尊きが如く、彼れ婆伽婆の、沙門の衆中に於ける威徳の顯赫なることも、亦復是くの如し。猶婆娑世界の主たる大梵天王の、百億の梵衆の與めに圍繞せられて、光明晃耀に威徳獨り尊きが如く、彼れ婆伽婆の、沙門の衆中に在して、光明顯耀に威徳尊勝なることも、亦復是くの如きなり。と。

【三九】 汝進むるを食し訖り等。異譯本に「願はくば今先づ我が供養を受け、復、香飯を持ちて如來に奉れ」とあり。

【四〇】 善法堂。帝釋天の講堂の名なり。喜見城外の西南の角に在つて、三十三天時に此所に集つて、人中の善惡を論ずと云はる。

【四一】 須夜摩天王。夜摩天王の具名なり。

の趣を捨てたるを怡悦すれば愜感せざるなり と。

爾の時に、淨飯王は偈を以て問うて曰はく。

諸の健なる釋種は常に圍繞し 博達多聞以て伴と爲し 殿舎天宮の中にて長養せるに 如何ぞ
今日林間を樂む と。

爾の時に、優陀夷は偈を以て對へて曰はく。

如法の生子は恒に前に現じて 同じく寂止を修して其の側に在り 小閑林にて諸定を修する
を好めば 離畏の導師は山林を樂むなり と。

爾の時に、淨飯王は偈を以て問うて曰はく。

童子昔日宮に在りし時には 天の浴池を以て澡沐し 亦香を用ひて其の身に澤塗せしに 今林
中に在つて誰れか洗を爲す と。

爾の時に、優陀夷は偈を以て對へて曰はく。

諸法の池水と戒善の岸とに 牟尼は自ら浴し并に他に浴せしむるに 己れ及び諸子は浮いて濕
れず 自ら度ること詔ると以に群生に及ぶ と。

爾の時に、淨飯王は偈を以て問うて曰はく。

昔種種の香にて常に體を熏じ 金線と眞珠と以て身を嚴り 常に天子の妙衣服を著けしに 今
林間に在つて何の飾を用ふる と。

爾の時に、優陀夷は偈を以て對へて曰はく。

功德の鬘にて嚴り戒香熏じ 禪定の瓔珞と慚愧の衣 明解脫に通じたるにて自ら莊嚴し 光明
威徳林中に耀けり と。

爾の時に、淨飯王は偈を以て問うて曰はく。

惱を滅する善慧根を 慧にて天人修羅等に施し 光明晃耀たるは王の聖子なり 戒の雲と空
慧の以て 電を爲せるとにて 八支の綢雨にて能く潤澤すれば 牟尼は能く勝苗を與ふる子に

して 王子は猶大龍の雨の如きなり と。

爾の時に、淨飯王は偈を以て問うて曰はく、

勝士安樂を得來れるや 飲食に至つて乏少無く 身に疲勞無く 牀臥具り 華の岸に在つて 蕙

萎せざる如くなりや。

爾の時に、優陀夷は偈を以て答へて曰はく。

禪定の境界は神力を具へたれば 身心の安樂は遍く充滿せり 牟尼の神慮は寂止に依れば 猶

金蓮の枯燥せざるが如し と。

爾の時に、淨飯王は偈を以て問うて曰はく。

昔は旌鼓を以て自ら警悟し 美音なる箏笛及び籥瑟 妙好なる妓女にて以て自ら娛みたるに

今は獨林中にて苦しからざるか と。

爾の時に、優陀夷は偈を以て對へて曰はく。

禪定は寂定を境界と爲し 巧に能く三昧の樂を修學し 行住坐臥諸善に依れば 心常に喜樂

して苦惱無し と。

爾の時に、淨飯王は偈を以て問うて曰はく。

無價の寶牀に常に安臥し 眠る時には美女衆く 側に在り 周圍に廣く明燈樹を設けたるに

如何に闇臥して悒感せざる と。

爾の時に、優陀夷は偈を以て答へて曰はく。

牟尼の眠る時には聖牀に臥し 慈を龔衛と爲し 悲を樂枕と 佛は喜心に住して心常に 三有

【三八】勝士。勝士は釋尊を指す。異譯本に「我が子」とあり。

假使たゞ無知みだりなりとも 有頂三三三に至るまで 此こゝの無我むがを聞ききて皆みな悉しつく怖おそる 盲冥あやみ愚癡ぐちなら人天じんてんの中ちゆうにて 有目うもくの如來にがひは明炬めいこを示しし 明燈めいとうと作なつて愚闇ぐあみを除のぞかん爲ためめに 無上むじやう智ちの光輪くわうりんを興おこし舉あげたまふ 邪正たぢぢの等たうと等たうならざるとを顯示けんじし 世間よこの道みちと道みちに非あるとを教導きやうたうし 失路しつろ者の爲ためめに其そのの路ぢを示しし 欲よくの淤泥うゑいより抜ぬいて岸上きんじやうに置おきたまふ 雲うゑを興おこして枯かれたる池いけを蔭かげし覆ふひ 雨あめを注そぎ原はらに充足じゆうじゆうして曝あして滿みすが如ごとく 是こゝの如ごとくに大王おほの仙聖せんじやう子は 法雨ほふうを興おこ建たして人天じんてんを潤うるしたまふ 水みづの地ぢ及び山川せんせん 并ひらに諸しよの百卉ひゃくけい叢林そうりん樹じゆを沾うるすに 藥草やくそうの條莖ぢやうきやう及び枝蔓しげん 諸しよの華はなの翳蔚おほとして山やまに遍あうして好このきが如ごとく 是こゝの如ごとくに十力じゆりき四無畏しむゐと 具足ぐそくせる十八じはつ不共ふくぎの樹じゆとに 一切いっさい智ちの果華くわを莊嚴じやうげんせるは 王おほの仙聖せんじやう子の微妙めいぼうの身みなり 須彌しゆみ山せんの大海たいかいに處あるに 嚴好げんこう不動ふどうにして天てんの樂らくに居ゐるが如ごとく 斯ごとくの如ごとくに善逝ぜんじ大王おほ王子おほ子は 沙門しやもん海中ちゆうぢゆうにて最もとも第一だいいちたり 切利せつり天主てんしゆ 舍脂しゃぢ夫ふ(天てん)は 天衆てんしゆの中ちゆうに於おて奇特きつてつ妙めうなり 斯ごとくの如ごとくに世尊せそん大王おほの子こも 沙門しやもんの衆しゆ中ちゆうにて最もとも殊妙しゆめうなり 祕奧ひおく甚深じんしんの法ほふを吼說こうせつするに 悲鬘ひまんとを以もて電いでんと一切いっさいに遍あうして 如來にがひ龍王りゆうわうの法雨ほふうを降くだすや 念慮ねんりよの池水ぢすい 細こに注そぎ下くだる 持戒ぢけいの威德ゐとくは日輪にちりんの如ごとく 三昧さんまい力りきを以もて憍闇けうあみを除のぞき 智慧ぢぢの光くわうにて煩惱ぼんノウの愛あいを滅めつせんと 大牟尼だいぶにの日は世間よこを照てしたまふ 念ねん處ぢよ摩尼まにの寶ほうを具足ぐそくし 戒定けいぢやうの船せんに於おて彼岸へんぱんに渡わたり 覺支かくぢの寶鏡ほうきやうと禪ぜんの滂滿ほうまんと 復また 畢叉びさを求もとめて佛海ぶつゑに入いれるなり 清淨ぢやうじやうなる戒けいの根こんは堅かくして動うごし難がたく 三昧さんまいの樹じゆの葉えふと念慮ねんりよの枝し 七しち覺かくの華はなと空くうの堅かき樹身じゆみん 無我むが堅固かんとにして佛樹ぶつじゆを成なじたまへり 戒林けいりん中ちゆうにて大力だうりきを行おする者もの 三昧さんまいにて調伏ぢやうふくして徳山とくさんに依より 三解脱門さんげつだつもんを境界くわいがいと爲なし 佛ぶつの十力じゆりきを 牙がとするは是れ王子おほ王子おほなり 正見ぢやうけんにして著ぢやくする無なき牟尼むに尊そん 能よく強敵きやうてきを除のぞく降くだすこと牛王ぎゆわうに勝かり 種種しじゆんの諸しよの外道げだうを恐怖おそせしめたまふは 是れ大王おほの子この無畏むゐの吼こゝろなり 尸羅しよらの徳藏とくざうの妙莊嚴めうじやうげん 禪定ぜんぢやうの寂滅じやくめつの無量衣むりやうい 具ぐ智ぢの牟尼むにの解脫げだつの境けいは 能よく財物さいぶつを施せすこと長者ぢやうぢやの如ごとし 諸惡しよあくを遠離えんりし諸善しよぜんを集あめ 諸しよの煩ぼん

【三】 有頂。有頂天の略なり。

【三】 舍脂(あぶら)。舍脂は「可愛」の義にして、帝釋夫人の名なり。而して切利天主帝釋天は、即ち舍脂鉢底(あぶらべこ)なり。今、異譯本を見るに、同じく「帝釋主」とあり。故に原本の「夫」は「天」の誤寫かるべし。

【三】 念慮。四念處を指す。

【三】 覺支。七覺支なり。

【三】 畢叉を求めて佛海に入れるなり。

【三】 異譯本に「佛法解脫の海に入らんと欲し」とあり。

【三】 牙。牙は「牙城」の略なるべし。

に怨恨するあるを知り、我れ今何の方便を作して便ち王の所に至らんか。と。是の念を作し已つて、我れ當に高さ七多羅樹を擧り、虚空の中に於て結跏趺坐して、王の所に至るべし。と。

爾の時に、慧命優陀夷は、即如實三昧に入り、其の三昧を以て其の心を莊嚴し、復神力を以ひて高さ七多羅樹を擧り、虚空の中に於て跏趺して坐し、空を飛んで淨飯王の所に往き詣り。時に、王は遙に優陀夷の、神通力を以て、虚空の中に於て跏趺し來れるを見るや、座よりして起ち、合掌し恭敬して優陀夷に向つて偈を説いて言はく。

染服の大師何より來れるか 威儀を成就して見難き者なり 若し須つ所あらば願はくば速に説け 我れ今誠心にて必ず給し奉らん と。

爾の時に、優陀夷は偈を以て答へて曰はく。

我れは是れ大王の子にして 大王は即ち是れ我が祖父なり 我れ如來の爲めに乞食を行

じ 食を得て大善逝に送り奉る 大王は今日善利を獲たまへり 王兒は人天の最も尊上とし

て 威徳光明十方に照すこと 猶秋の月の日中の時の如し 日の空に處つて雲霧を離れ

光明晃耀として普く皆照すが如く 是くの如くに最勝たる王の聖子は 威徳光顯して十方に聞

えたまへり 猶秋の日の初めて出づる時に 諸の螢火を蔽ひて光普く照すが如く 是くの如

くに最勝たる王の聖子は 諸の外道を伏して獨り顯耀したまへり 猶日中の盛に隆熾なるや

星辰を凌いで故より現さざるが如く 是くの如くに最勝たる勝王の聖子は 外道を降伏して

自光を顯したまへり 猶日中の月明を凌いで 月をして光明を失ひて現れざらしむるが如

く 是れ王の聖子の外道を伏したまふや 日の盛にして明月は照を隠すが如し 禽獸の獅子

の吼ゆるを聞きて 水陸も空行も散じて穴に還り 驚奔逃走して諸方に迷ふが如きは 獅子の

聲の忍び難き故を以てなり 大聖如來の震吼したまふ時に 邪の外道は無我の聲を聞くや

【三】我れは是れ、乃至、祖父なり。「我れは是れ聖王子の子にして」とあり。

て、應に得べき所の者を悉く皆墜落せり。と。是の念を作し已つて、諸の釋種に勅すらく。一切、我が兒の所に至つて敬信して法を聽くを得され。若し犯すあらば、當に其の首を斬るべし。と。

時に、釋種の、名けて喜面と曰へるあり。衆中に在らざりしかば王の教を聞かずして、優陀夷を見るや、即其の所に往き、稽首して白して言はく。善く來れり。尊者、平安を得たりや。世尊は安樂にして少病・少惱に、起居輕利にして、路に在つて疲れず、供饌乏しからざるや。と。時に優陀夷は、喜面に報せて言はく。如來は安樂にして、少病・少惱に、起居輕利にして、路に在つて疲れず、飲食も乏しきこと無し。と。時に、釋種の、名けて善覺と曰へるあり。喜面の、優陀夷と共に屏處に在つて語れるを見、亦其の所に詣り、白して言はく。大徳遠くよりして來る。比康吉なりや。世尊は、起居安樂に、少病・少惱にして、路に在つて疲れず、供饌乏しき無きや。と。優陀夷は答へて言はく。如來は、聖御安樂にして、路に在つて疲れず、乏しく少き所無し。と。爾の時に、復二の釋種あり。一を無憂と名け、二を離憂と名けたり。喜面・善覺の、優陀夷と共に屏處に在るを見、亦復衆を棄てて其の所に往き詣り、優陀夷に白して言はく。善く來つて此に至れり。氣力好きか。世尊は起居安樂なりや。遠く涉つて途路に疲無きを得たりや。と。優陀夷は報せて言はく。如來は聖御安樂にして、涉路に疲れず。と。時に二の釋種は、重ねて白して言はく。如來の途路に、何故に乏しき無きや。優陀夷報へて言はく。四天王及び天帝釋・諸の梵天王の、常に來つて供養する故を以て乏しき所無きなり。と。時に諸の釋種は、俱に優陀夷に白して言はく。我等今、佛に詣りて、世尊の所に至つて供養して法を聽かんことを欲すれども、恐くは遂ぐるを獲じ。何を以ての故に。淨飯大王は、向に勅旨するあつて、諸の釋種に勅すらく。悉く皆、佛の所に至つて供養して法を聽くことを聽さず。如し犯す者あらば、當に其の首を斬るべし。と。王憲を慮る故に、禮拜し供養して正法を聽受することを得ざるなり。と。時に優陀夷は、此の語を聞き已るや、其の父王の大

利き刀と劍と稍との如く 亦大猛火の如きなりと 王臣も勸化する時に 堅慧は悉く許さずして 親及び國土を捐て 欲を棄てて出家せり 蛇の故皮を脱ぐが如く 亦涕唾を棄つるが如く 過惡を遠離し 望を絶ちて永く出家せり 堅慧の俗を捨つる時に 臣の子も隨つて出家せしが 其の人を月施と名け 欲を棄てて堅慧に隨ひたり 童子は出家し已るや 并に大臣の子と 四梵住を成就し 五神通を具足し 深く五塵の過を見 欲界を超越して 正妙の法輪を轉じ 直に梵天上に生れたり 童子の出家し已るや 父王は嫌恨を起せしが 月施は王の所に詣り 善く化して王をして喜ばしめたり 優陀夷當に知るべし 昔時の堅慧といふ者の 五欲を遠離したるは 今の即ち我が身是れなることを 優陀夷當に知るべし 彼の時の増實王は 豈異人たらんや 淨飯王是なることを 優陀夷當に知るべし 我れに隨つて出家せる者 月施は汝が身是れにして 亦曾て増實を化したることを 是の故に優陀夷 今應に父王を化すべきに 必ず大利益あるは 昔曾て教化せる故なり とし

爾の時に、慧命優陀夷は、佛の教を受け已るや、默然として許可せり。時に優陀夷は、夜を過し、曉け已るや、食時に至つて、衣を著鉢を持ちて迦毗城に入れり。時に釋種一千餘人あつて、王の門に集在して皆須つ所あり。時に淨飯王は、佛如來の迦毗城に到り尼居林に在るを聞き、嫌恨の意を起さく。此の兒、出家して、我が種族の富貴大樂を退けたり。其の家に在る如くんば、應に金輪を紹ぎ、四天下に王として法の如くに統領し、民命に逆ふ無くして七寶具足し、——其の七とは何ぞ。一を輪寶と曰ひ、二を象寶と曰ひ、三を馬寶と曰ひ、四を摩尼寶と曰ひ、五を女寶と稱し、六を主藏臣寶と曰ひ、七を導師寶と稱す。——千子を具足して、勇健當り難く、顔容美妙にして、能く強敵を摧ぎ、四天下を護るに刀杖を以てせず、國土を料理するに如法に治り、正に自然に泰平なるべく、我れも輪王を得て自在に快樂し、彼れも應に我れを尊重・供養すべきに、兒の出家せる故を以

【10】 四梵住 (Catvāri-brah-mavihārah = Catvāri-āpna-mānasa)。四無量心に同じ。

じて 玩弄するに乏少無きに 云何ぞ樂を受けざるか 汝當に其の意を説くべし 諸趣の善妙なるを 汝寶宅の中に受け 女寶は常に圍繞して 妙境甚だ樂むべきを知れ 諸仙の閑林に處れるも 猶捨て退いて家に還り 諸の色欲を受けて樂むに 況んや汝には乏少無きをや 殊女の衆は圍繞し 王臣は皆隨從し 臺館は天宮の若くなれば 應に五欲の樂を受くべし 諸女は甚だ端正に 美麗なること天人の若くにして 善く歌舞の樂を奏すれば 以て自ら意を娛むべし 目は 優波葉の如くにして 脣の赤きこと丹を含めるが若く 面は滿ち廣くして 黛の眉 平なる額 殊しき咽と頸 膺平にして 缺骨は滿ち 髀は衆王之鼻の如くにして 掌は蓮華の色の如く 指は圓く 臍くして 織好なり 舌は薄く廣くして 紅赤に 美言は甘露の若くにして 齒は素く利くして 齊密なり 珠璣の寶の衣服にて 臍深く腹現れず 脊は 金剛杵の如く 髀股は臍しく圓直に 伊尼鹿王之跡にて 行き歩むこと 鵝王之如く 皆各汝を瞻視す 盛年は甚だ愛すべく 能く後嗣を存するに堪へ 汝及び衆くの麗人は 猶春の華の開けるが如くなれば 盛年の色の未だ退かざるに 應當に速に 樂を受くべしと 堅慧は父王に白さく 王の言は正理に非ず 若し如法の語あらば 勅せらるるものに敢て違はざれど 王我が今説くことを聽きたまへ 善き眞實の語を樂まば 乃至夢中に於ても 淫欲の想を起さじ 父王の今の此の言は 智者の許さざる所にして 愚者は此の事を樂めども 明なる人の常に厭ふ所なり 何故に明目の人にして 盲瞽の導を羨まんや 豈岸上の人 反つて沈溺を樂む者あらんや 何ぞ解脱の人にして 復牢獄を樂むあらんや 豈安樂の人 衆苦を欽羨する者あらんや 我が意にて父王を觀るに 盲と溺と獄との者の如く 夢に五欲を受けて 復欲の爲めに溺さるるが如し 父王は盲の如くに冥けれど 我が目には殊勝を見 王は欲の爲めに漂はさるれども 我れ今甚だ厭ひ賤む 欲は毒藥の器の如く 亦毒蛇の頭の如く

【七】 優波葉(Utpala, Uppala)。優波羅葉の略なり。異譯本に「青蓮葉」とあり。

【八】 金剛杵(Vajra)。古印度の兵器なり。而して密宗にては、此れを以て、其の堅利の智にて煩惱及び惡魔を伏する標器と爲す。種類は、兩頭の分支の如何に由り、獨股・三股・五股・九股などあつて、金石又は木村にて作る。

【九】 伊尼(Arjuna)(鹿王)。詳には伊尼延と書し鹿と譯す。此所は梵漢併稱なり。

よ 王今悟を受くる時には 兼ねて諸の天人を利して 必ず到彼岸を得しむれば 汝當に速に往いて化すべし 釋種淨飯王は 今恨を懷き亂濁して 念慧に住することを行ぜざれば 猶高崖より墜つるが如し 子の高位に戀惜して 悲心盡く迷没したれば 商の重寶を失へるが如く 追念して大苦を生ぜり 天の宮殿より墜ちて 五欲の樂を追戀するが如く 未だ佛の正法を知らざれば 悲哀して大に惱亂す 自ら七寶 及與び 人の四道を失はんことを念ひ 此の聖王の位を憶うて 口より非法の言を出す 王時に悲み亂れて言ふに己れ及び他を覺らざること 精魂を奪ふ鬼の人身を執持して 猶鷄羅山に在るか如く一切見る所無きなり 是くの如き惱恨の障を 應に見るべくして復讐ざること 亦睡眠と死との 己れの心を自ら了せざるが如し 憂恨迷惑の障を 王は自ら善くするを識らずして 婦の夫婦を亡せるが如くに 悲涙して憂惱を生ず 王今癡にて惱亂し 哀戀して大苦を生ずれば 汝具に巧方便もて 往いて淨飯王を化し 邪慢の幢を摧き倒して 當に正法の燈を建つべし 更に能く 淨飯王を化する者ある無く 唯汝優陀夷のみなるは 過去に曾て同行たればなり 優陀夷當に知るべし 曾て大國王の 名けて增長實と曰へるあり 聲名十方に震ひ 如法に國王と作り 一切皆歸化し 能く正法を以て治したることを 王の四天下を領するや 城邑に悉く中に 華果香しき園苑を滿し 諸の賢聖の衆多く 雜惡の人ある無く 芳林甚だ稠密に地淨くして 棘刺無く 淨妙の等に多饒にして 華池の莊嚴好く 人民廣く熾盛にして 惡を棄てて常に善に住し 諸の惡趣の門を閉ぢて 必ず妙なる天道に昇らんとせり 彼の王に昔子ありしが 曾て廣く佛を供養し 備に諸の善根を修め 諸の功德を具足し 名けて妙堅慧と曰ひ 億の衆に供養せられ 常に色欲の過を見 家を棄てて閑靜を樂みたり 父王は子を勅めて言はく 汝五欲を受け 姪女にて自ら娛樂し 寶宮池に遊觀すべし 我れ今汝が爲めに辦

【二】念慧に住することを行ぜざれば。異譯本に「安閑として善を修せざれば」とあり。

【三】人の四道。

異譯本に「四種の兵衆」とあり。四兵又は四軍とあるべきなり、即ち王の率ゆる象・馬・車・歩の四種の軍之れなり。

【四】鷄羅山。鷄羅婆山（Kilima）の略雪山高峰崑崙山なり。

へり。汝、今應當に大勇猛を發し、速に往いて王を化すべし。と。目連の是の語を作し已れる時に、慧命迦盧陀夷は目連に白して言はく。凡庶すら化し難し。何に況んや國王をや。何を以ての故に。刹利種姓にて灌頂せる大王には、自在力あつて化すべき難き故なり。大目連、譬へば衆の柴を聚め積むこと、若しは二若しは三、乃至、千載にして、此くの如く柴の積りたるもの、多くの年歳にて甚だ乾燥したるに、時に于て人あつて、火を放ちて之れを燒きて大火聚を成すが如きは、意に於て云何。此の火の聚は、寧ろ大と爲るや、不や。と。目連言はく。甚だ大なり。若し復人あつて、更に無量の酥油を以て此の火に澆灌せば、増盛するや、不や。目連言はく。轉熾に倍盛ならん。意に於て云何。此の火に近くべきや、不や。目連言はく。近くを得べき難し。是くの如くに、大目連、刹利種姓の灌頂せる大王の、教化すべき難く近くを得べからざることも、亦復是くの如し。大目連、譬へば狂象の牙の如きは、觸るべきや、不と以すや。目連言はく。觸るべからざるなり。是くの如くに、大目連、灌頂せる刹利の教化すべき難きことも、亦復是くの如きなり。と。時に、慧命目連は、復優陀夷に白して言はく。世尊は心に汝の能く往いて淨飯王を化するに堪ふることを念知したまへるなり。と。優陀夷は復目連に白して言はく。世尊は實に顧念を垂れて、我れを能く往いて淨飯王を化する堪へたりと謂ひたまへるか。目連答へて言はく。世尊は實に誠に汝を念じて汝は能く父王を教化するに堪ふと謂ひたまへり。と。爾の時に、世尊は自ら優陀夷に告げて言はく。優陀夷、汝、城に入つて父王を教化すべし。何を以ての故に。唯我れと汝と、能く淨飯王を教化するに堪ふるのみなればなり。優陀夷、我が諸の聲聞の弟子の中にて、汝は能く諸邑・聚落を教化することを最も第一と爲せばなり。と。

爾の時に、世尊は即ち偈頌を以て優陀夷に告げて言はく。

諦に聽け優陀夷

汝能く善教導して 必ず釋種をして喜ばしむれば 往いて最勝なる王を化せ

【二】 汝は今大師の徳を具足すれども。

異譯本に「汝は聲聞に居つて最も上首として、先きに諦義を解して大名稱あり。一切衆生の尊奉すること師の如くなれども」とあり。

【三】 婆提摸(Vepa)。五群比丘の一人なり。

【四】 大名(Mahānāmo)。五群比丘の一人なり。

【五】 耶輸陀(Tisōṭṭa, Yāsoṭṭeva)。

【六】 迦盧陀夷(Kāḷodayi)。優陀夷に同じ。

異譯本に「優陀夷(Uṭṭari)」とあり。

諸の希望を棄てたる棄諸希望の眷屬、自ら修行を得たる盡行の眷屬、自ら事を得られる事訖の眷屬、自ら修めたる自修の眷屬、自ら濁念無き無濁念の眷屬、自ら有覺を斷せる斷有覺の眷屬、自ら身行に倚れる倚身行の眷屬、自ら樂の不動を得たる樂不動の眷屬、自ら心善く解脫せる心善解脫の眷屬、自ら慧の善く解脫せる慧善解脫の眷屬、自ら賢聖を得たる賢聖の眷屬、是等の如き比は、枝葉を離れ皮膚を除去するを得、唯心の實のみ堅固なるあつて住せり。

爾の時、世尊は其の後夜に於て露地にて坐せる時に、比丘の衆は四面に圍遶せり。爾の時に、世尊は默然として住せしが、比丘の衆を觀て諸の比丘に告ぐらく。汝等諸人より、一人の能く往いて淨飯王を化するに堪ふる者を訪ね覓めん。と。爾の時に、慧命 阿若憍陳如は即座より起ち、偏に右肩を相ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、即便に禮を作して、佛に白して言はく。世尊、我れ當に往いて淨飯王を化すべきかと。佛言はく。汝は止めよ、憍陳如。汝は今大師の徳を具足すれども、彼に往くことに應らず。と。時に、慧命 婆提摸及び 大名 耶輸陀・優樓毘螺迦葉・摩訶迦葉・舍利弗・大目連等あり、各佛に白して言はく。世尊、我等は能く往いて淨飯王を化するに堪ふるなり。と。佛 摩訶目連に告ぐらく。汝等且く止めよ。汝等は皆悉く大師たる尊重の法を具足すれども、往いて化するに應らず。と。爾の時に、摩訶目連は即ち是の念を作さく。世尊、今は誰れをして往いて淨飯王を化せしめんと欲するか。と。爾の時、目連は即ち實三昧に入り、三昧の力を以て其の心を莊嚴するに、即佛意の念ずる所は、慧命 迦盧陀夷に、往いて淨飯王を化せしめんと欲するに在るのみなるを見るを得たり。譬へば、重れる閣樓の窓の中に、日の東より入るに光は西壁を照すが如く、是くの如くに、目連は世尊の心の、専ら迦盧陀夷に王を化せしめんと欲するに在るを見ることも、亦復是くの如し。爾の時、慧命目連は即座より起ち、迦盧陀夷の所に往き、到り已るや白して言はく。世尊は心に、汝の能く往いて淨飯王を化するに堪ふることを念知したま

【一〇】自ら盡行を得たる。

異譯本に「善く諸根を寂せる。」とあり。

【一一】自ら事を得訖れる。

異譯本に「信解を決定せる」とあり。

【一二】自ら修めたる。

異譯本に「義利を樂求せる、」とあり。

【一三】自ら濁念無き。

異譯本に「無我を觀察せる、」とあり。

【一四】自ら有覺を斷ぜる。

異譯本に「諸の分別を離れたる。」とあり。

【一五】自ら身行に倚れる。

異譯本に「身行輕安なる、」とあり。

【一六】是等の如き等は、乃至、住せり。

異譯本に「是くの如き衆會は、身意泰然として善利を得るを樂み、乃至、猶、廣大なる鉢羅奢樹の、枝葉繁茂・生長せること圓滿なるが如くに、清淨にして住せり。」とあり。

【一七】慧命。比丘は、智慧を以て命と爲すに由り、其の尊稱とす。具壽と同じ。異譯本には「尊者」とあり。

【一八】阿若憍陳如 (Ajāta-kannhyo)。阿若は名にして、已知又は了本際と譯す。憍陳如は姓なり。

卷の第六十一

北齊 那連提耶舍 漢譯

菩薩見實會 第十六の一

序品 第一

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は、迦毘羅國の尼居陀林に在して、大比丘衆千二百五十人と俱なりき。其の名を、優樓毘螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、摩訶迦葉、舍利弗、大目犍連と曰ひ、一切皆是れ大阿羅漢なり。諸漏既に盡きて復の煩惱無く、其の心自在にして、心善く解脫し慧も善く解脫し、大神象の如くに作す所を已に辨じ、皆重擔を棄てて已利を逮得し、諸の有結を盡し、正教の中に於て心に善解を得、一切の法に於て心に礙る所無く、彼岸に到れるものなり。自ら解脫を得たる解脫の眷屬、自ら調伏するを得たる調伏の眷屬、自ら寂定を得たる寂定の眷屬、自ら度脫を得たる度脫の眷屬、已に彼岸に到れる彼岸の眷屬、已に陸地に到れる陸地の眷屬、自ら安隱を得たる安隱の眷屬、自ら寂滅を得たる寂滅の眷屬、自ら煩惱を破したる破煩惱の眷屬、自ら沙門を得たる沙門の眷屬、自ら惡を息むるを得たる息惡の眷屬、自ら能く度するを得たる能得度の眷屬、自ら諸徳を具せる屬、自ら諸法を了知せる了知諸法の眷屬、自ら能く離五支の眷屬、自ら障を離るを得たる離障の眷屬、自ら煩惱を無くせる無煩惱の眷屬、自ら五支を離れたる離五支の眷屬、自ら障を離るを得たる離障の眷屬、自ら靜意を得たる靜意の眷屬、自ら六通を具せる具六通の眷屬、自ら憎愛を離れて解脫せる離憎愛解脫の眷屬、自ら一心を守護せる守護一心の眷屬、自ら念門の具足せる念門具足の眷屬、自ら四依に依れる四依の眷屬、自ら種種の諸見を離れたる離種種諸見の眷屬、自

【一】 迦毗羅國の尼居陀林。劫比羅國と同じ。尼居陀林は梵語 Nigrodha-vana の譯なり。
 【二】 優樓毗螺迦葉(Urvil-vikāśyapa)。謂はゆる三迦葉の一なり。
 【三】 伽耶迦葉(Gāyī-kāśya-pa)。三迦葉の一なり。
 【四】 那提迦葉(Nādi-kāśya-pa)。三迦葉の一なり。
 以上は三兄弟なり。
 【五】 彼岸(Pāra)。涅槃を謂ふ。一の海に於て、此岸を生死界に、彼岸を涅槃界に喩たるに由る。
 【六】 自ら解脫を得たる等。此の句の前に、異譯本「父子合集經」北宋、日稱等、譯)には「復、種類差別の、邪を捨て正に歸したる外道尼乾子、沙門婆羅門の無數の衆會あつて、皆悉く來集せり。謂はゆる」とあり。
 【七】 五支(五塵)。異譯本に「五塵」とあり。五塵は色・聲・香・味・觸にして、此の五つは、有情の眞性を染汚すること塵の如くなるに由つて名く。
 【八】 自ら念門の具足せる等。異譯本に「諸の正念を具したる具足諸正念の衆」とあり。
 【九】 四依(四神足)。異譯本に「四神足を具したる、」

持し讀誦し、復能く發心して、文殊師利の學ぶ所に躡ひ七歩を行く若きと、此の二の功德にて、前の七寶にて布施する功德に比するに、百分して一にも及ばず。乃至、算數・譬喩も及ぶ能はざる所なりと。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、當に何と此の法門に名け、我等は云何に持ち奉るべきか。佛言はく。此の法門を名けて、諸佛遊戯と爲し、亦諸願究竟と名け、亦文殊師利功德莊嚴佛土と名け、亦令發菩提心菩薩歡喜と名け、亦文殊師利授記と名け、是くの如くに受持せよと。爾の時に、十方より諸べて來れる菩薩は、此の法門を供養せんと欲する爲めの故に、而ち衆の華を雨して讚じて言はく。希有なり、世尊。希有なり、世尊。我等の、乃ち是の不思議なる文殊師利の師子吼の、莊嚴なる法門を聞くを得たることや。と。時に、諸の菩薩は是の語を説きけるや、各本土に還れり。此の法を説ける時に、恒河沙の等の菩薩は不退轉を得、無量の衆生は善根成熟したり。

爾の時に、文殊師利は、即ち菩薩出生光明普照如幻三昧に入り、三昧に入り已るや、此の衆會をして、普く十方の無量無邊なる諸佛の刹中の、一切の如來の一一の佛前に、皆文殊師利あつて、自の佛利の功德莊嚴を説くことを見しめたるに、衆會は見已つて、文殊師利の殊勝なる大願に於て希有の心を生じたり。佛の是の經を説き已りたまふや、彼の一切の菩薩及び諸の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等は、佛の説く所を聞き、皆大に歡喜して、信受し奉行せり。

言はく。文殊師利の發趣は甚大に、修むる所の行も亦復廣大なれば、乃ち爾所の微塵數の劫に於ても疲倦を生ぜざらん。文殊師利言はく。是くの如し、是くの如し。善男子、汝の説く所の如し。意に於て云何。虚空界には、是くの如き念——晝夜・時節・歲月・劫數等を度る——ありや。答へて言はく。不なり。文殊師利言はく。是くの如し、善男子。若し一切の法の虚空に等しきを覺るあらば、彼の微細の智にも分別ある無く、亦是の念——晝夜・時節・歲月・諸の劫數等を度る——無けん。何を以ての故に。彼れは、諸法に於て想念無き故なり。善男子、虚空界の如きは、疲倦及び熱惱の想ある無し。何を以ての故に。設ひ恒河沙劫を過ぐとも、而も虚空界には、亦生起無く亦燒滅無く破壞すべきに非ればなり。何を以ての故に。虚空界は有る所無き故なり。是くの如くに、善男子、若し菩薩にして、一切法の有る所無きを了し已らば、亦熱惱及び疲倦等無きなり。善男子、彼の虚空の名も亦燒滅・熱惱・疲倦無く、亦動搖せずして、不生・不老・不來・不去なれば、文殊師利の名號も亦爾く、熱惱及び疲倦等ある無きなり。何を以ての故に。名字は性を離れたる故に。と。此の法を説ける時に、四大天王・釋提桓因・梵天王等、及び餘の大威徳の諸の天子等は、同聲に唱へて言はく。是に諸の衆生は、此の法門を聞かば大善利を獲ん。何に況んや、受持し讀誦せんをや。當に知るべし、彼等の成す所の善根の極めて廣大なることを。世尊、我等は此の法門に於て、受持し讀誦し廣く宣べて流布せしめん。此の深法を護持せんと欲する爲めの故に。と。

爾の時に、師子勇猛は佛に白して言はく。若し此くの如き法門を聞くを得て、受持し讀誦し思惟するあり、及び此くの如き功徳にて佛利を莊嚴する心を發さば、幾所の福を得るか。佛言はく。善男子、如來は無礙の佛眼を以て見る所の諸佛及び彼の刹土に、菩薩あつて、妙なる七寶を以て彼の諸利に滿して、施を奉つて一一の如來を供養し、各未來の際を盡して、此の菩薩をして、淨戒に安住し一切の衆生に於て平等心を得しむる若きと、菩薩あつて、此の莊嚴功徳佛利の法門に於て、受

千分、百千億分にてても、乃至、算數譬喩の及ぶ能はざる所なり。應に知るべし、彼の善見如來の壽命には算數ある無く、亦限量無きことを。如し一人あつて、三千大千世界を以て碎いて微塵と爲し、第二第三の人も亦大千世界を碎いて以て微塵と爲し、復一人あつて彼の微塵を取り、此れより東に行き、爾所の微塵數の世界を過ぎて乃ち一塵を下し、又爾所の微塵數の世界を過ぎて復一塵を下し、是くの如くにして次第に諸の微塵を盡さん。復、第二人あつて亦爾所の微塵を持ち、此れより南に行いて前の如くに塵を下し、次第に展轉して、乃至、塵盡き、西方・北方と四維上下に各一人あつて、下す所の塵の數も亦復是くの如くならんに、善男子、是の諸の世界は數を知るべきや、不や。答へて言はく。不なり。佛言はく。善男子、是くの如き諸人の、彼の十方に於て經る所の世界の、若しは微塵を著くるも及び著けざる者をも、盡して末として塵と爲さんに、意に於て云何。是の微塵は算計を以て其の數を知るべきや、不や。答へて言はく。不なり、世尊。若し計量の心ありとも、則ち迷亂して了知する能はじ。佛言はく。善男子、諸佛如來は能く彼の微塵の數を了知し、設、此れに過ぎたるをも、如來は亦知れり。と。時に、彌勒菩薩は、佛に白して言はく。世尊、諸の菩薩は、等しく是くの如き大智慧を求めん爲めの故には、大地獄に於て、無量億劫諸の極苦を受くとも、終まで應に是くの如き大智を捨つべからず。と。佛言はく。彌勒、是くの如し、是くの如し。汝の説く所の如し。何ぞ此の大智慧の中に於て欲樂を生ぜるあらん。唯、下劣及び懈怠の者を除く。と。此の智を説ける時に一萬の衆生は菩提の心を發したり。

爾の時に、佛は師子勇猛に告げて言はく。善男子、意に於て云何。彼の十人の、十方の界を經、盡して微塵と爲したるものの如くに、文殊師利は當に爾所の微塵數の劫に於て、菩薩の道を行すべし。何を以ての故に。文殊師利の大願は不可思議にして、趣向も亦不可思議に、菩提を得已つての壽量も亦不可思議に、菩薩衆の會も亦不可思議なればなり。と。爾の時に、師子勇猛は佛に白して

薩は無上法忍を得、八萬四千那由他百千の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、七千の比丘は諸法を受けず諸の有漏を盡して心に解脫を得、九十六那由他の諸天及び人は、諸法の中に於て法眼淨を得たり。

爾の時に、師子勇猛雷音菩薩は佛に白して言はく。世尊、此の文殊師利は、久しくして當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき如くんば、彼の佛の壽命及び菩薩衆の其の數幾何ぞや。佛言はく。善男子、汝當に自ら文殊師利に問ふべし。と。時に、師子勇猛は文殊師利に白して言はく。仁者久しくして當に菩提を得べき如くんば。文殊師利言はく。善男子、若し虚空界にして色界と爲らん時には、我れ乃ち當に無上菩提を得べし。若し幻人にして菩提を得ば、我れ乃ち當に得べし。若し漏盡の阿羅漢にして、即是れ菩提ならば、我れ乃ち當に得べし。若し夢と響と光と影及び化人とにして、菩提を得ん時には、我れ乃ち當に得べし。若し月照つて晝と爲り、日照つて夜と爲らば、我れ乃ち當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきなり。善男子、汝の問ふ所は、應に彼の菩提を求むる者に問ふべし。と。師子勇猛言はく。仁者は豈菩提を求めざるか。答へて言はく。不なり。何を以ての故に。文殊師利は即是れ菩提にして、菩提は即是れ文殊師利なればなり。所以は何ぞ。文殊師利は但名あるのみにして、菩提も亦但名あるのみなるに、此の名にも亦離れて無作なる故に空なり。而して彼の空性は即是れ菩提なればなり。と。

爾の時に、佛は師子勇猛に告げて言はく。汝、頗は阿彌陀如來の聲聞・菩薩の諸衆の會を見聞せりや。唯然り聞見せり。佛言はく。其の數は幾何ぞ。答へて言はく。算數・思議の及び能ふ所に非ず。佛言はく。善男子、摩竭陀國の量の如き一斛の油麻より一粒を擧げ取つて、阿彌陀佛國の聲聞菩薩に喩へ、餘の擧げざる者をば、文殊師利の菩提を得る時の菩薩衆の會に喩へんに、復是の數に過ぎたり。善男子、三千大千世界の微塵數の劫を以て、普見如來の壽量の劫數に比する如くんば、百分。

して諸法を盡し、亦此の法を以て他の爲めに演説せば、是れを一相の法門を説くと名く。と。善思菩薩は曰はく。若し思議を以て不思議に入り、此の不思議をも亦得べからずば、是れを一相の法門を説くと名く。と。妙離塵菩薩は曰はく。若し一切の相に染まざるあれども、亦染に非ず不染に非ず、違ふ無く順ふ無く、亦迷惑無く、一に非ず二に非ず亦種種に非ず、取らず捨てざらば、是れを一相の法門を説くと名く。と。婆竭羅菩薩は曰はく。若し能く、海の如き入り難き甚深の法に入るあれども、而も此の法に於ても亦分別せず。他の爲めに説くと雖も、而も説く想無くば、是れを一相の法門を説くと名く。と。月上菩薩は曰はく。若し一切の衆生に於て、心行の平等なること猶滿月の如くにして、衆生の想無くば、是れを一相の法門を説くと名く。と。離憂闇菩薩は曰はく。云何か衆生の憂箭を抜く。謂はく。我・我所は是れ彼の憂の根なれば、若し能く我・我所の平等なるに住せば、是れを一相の法門を説くと名く。と。無所緣菩薩は曰はく。若し欲界・色界・無色界・聲聞の法・緣覺の法及び諸佛の法を攀緣せずんば、是れを一相の法門を説くと名く。と。普賢菩薩は曰はく。若し法を説く時に、應に平等の法——謂はく。空性の平等——を説くべくして、亦空の想及び平等の想無くば、是れを一相の法門を説くと名く。と。淨三輪菩薩は曰はく。若し法を説く時には、應に三輪を淨むべし。謂はく。爲めにする所の衆生の我を得べからず。亦自ら法師たることを分別せず。説く所の法に於て住著する無きなり。是くの如く法を説かば、是れを一相の法門を説くと名く。と。成就行菩薩は曰はく。若し能く一切の法に於て平等の行を修することを説くあるに、知る所は如實にして文字に非ずんば、説くことは一切の法の言説を離れたるを以てする故に、是れを一相の法門を説くと名く。と。深行菩薩は曰はく。若し能く一切に了達する甚深の法を説くあるに、亦彼の能説と所説と及び爲めにする所とを見ずば、是れを一相の法門を説くと名く。と。是くの如くに無量の諸の菩薩等は、各辯才を以て一相の法門を演説せり。此の法門を説ける時に、三十七億の菩

【二】婆竭羅(Pragya)。海の義なり。

照せり。爾の時に、世尊は諸の菩薩に告げて言はく。善男子、此の四の善き大丈夫の志願の趣く所は、皆思ひ議るべからざれば、應當に尊重して其の法要を請ふべし。而して、彼れの願する所は、諸の菩薩に於て最も殊勝たれば、若し善男子・善女人あつて之れを見ることを得ば、必ず定つて阿耨多羅三藐三菩提を得べく、二十億劫の生死の流轉を棄捨し五波羅蜜を具足し圓滿せん。若し女人の、此の菩薩の名を聞く者あらば、速に女人の身を捨離するを得ん。と。是に於て、世尊は神力を攝むるに、而ち彼の佛利は忽然として現せず。

文殊菩薩は、佛に白して言はく。世尊、一切の諸法は皆悉く幻の如し。何を以ての故に。譬へば、幻師の魔現を幻爲するが如くに、諸法の生滅も亦復是くの如ければなり。而して、此の生滅には即ち生滅無く、生滅無きを以て是れ則ち平等なり。菩薩にして此の平等を修めば、便ち能く無上の菩提を證得せん。と。智上菩薩は、文殊師利に白して言はく。此の菩提に於て、云何に證得するか。文殊師利言はく。此の菩提は是れ得べきに非ず。亦壞るべきに非ず。住すべき者に非ざるなり。智上は白して言はく。而して、此の菩提は住を以て得るに非ず、不住にて得るにも非ず。何を以ての故に。彼の法性は本來無生なるを以て、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、亦壞るべきにも非ればなり。是の故に無得なり。と。文殊師利は、智上等の諸菩薩に謂うて曰はく。云何なるを名けて、一相の法門を説くと爲すか。彌勒菩薩の曰はく。若し蘊・界・處を見ず、亦見ざるに非ず。分別する所無く、亦集散するを見ずんば、是れを一相の法門を説くと名く。と。師子勇猛雷音菩薩は曰はく。若し此れは是れ凡夫の法、此れは是れ二乘法と、種種に分別することを作さずんば、此れ則ち法性に違はずして、一相謂はゆる無相に入るなり。是れを一相の法門を説くと名く。と。樂見菩薩の曰はく。若し眞如の行を修するあるも、而も亦眞如の想を作さず。此の甚深なるに於て分別する所無くば、是れを一相の法門を説くと名く。と。無礙辯菩薩は曰はく。若し能く究竟

の爲のにとて法を演説してあり。是の時に、佛は諸の菩薩に告げて言はく。善男子、汝等は彼の如來の佛刹の莊嚴と菩薩衆とを見るや。と。時に諸の大衆は、同聲に白して言はく。唯然り、已に見たり。我等、當に此の菩薩の行を學ぶこと、文殊師利の修行する所の如くなるべくして、我等も亦當に此の莊嚴の如くなる佛刹を成就すべし。と。爾の時に、世尊は慰怡して微笑せるに、其の面門より種種なる色光を放ち、無量無邊の世界を照し、照しじつて還り來り、佛を遶ること三匝して其の頂より入れり。

爾の時に、彌勒菩薩は佛に白して言はく。世尊、何の因縁を以て此の微笑を現したまへる。と。佛、彌勒に告ぐらく。此の大衆の中の八萬四千の菩薩は、彼の佛刹の莊嚴の事を見て、皆發心して、當に是くの如き佛刹を成就せんと欲すと雖も、然も其の中に於て、十六の善き大丈夫あつて、勝れたる志樂を具して大心を發したれば、彼れ能く文殊師利の起す所の大願の如きを成滿するなり。餘の諸の菩薩も、亦速に當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、得る所の佛刹の功德莊嚴は阿彌陀佛の刹の如くなるべし。彌勒、當に知るべし、諸の菩薩等の志樂の既に勝れたるは、成する所も亦大にして、志樂の勝れたる者は、我れ文殊師利の莊嚴する佛土の如きを成就せんと言ひ、其餘の劣れる者は、信心を以て亦是の語を作すのみなりと雖も、此の語業を以て、猶能く六十億百千那由他劫の生死の流轉を棄捨し、亦五波羅蜜を圓滿するを得ることと。

爾の時に、彌勒菩薩は、四方の光明幢等の四大菩薩の、各瑠璃の光明の樓閣に坐し、百千億の諸天あつて圍遶し、華を雨し樂を奏し、大神變を現し大地を震動して、此に來れるを見たり。時に、彌勒菩薩は卽世尊に白して、其の事を請問するに、佛言はく。善男子、此の四菩薩は、我れを見ん爲めの故に、四方の如來は、各此に至らしむるなり。と。時に彼の菩薩は、既に佛の所に到るや、佛足を頂禮し、右に遶ること三匝し、退いて一面に坐するに、彼の四菩薩の光明は遍く此の大會を

【二〇】五波羅蜜。六波羅蜜の中より、般若波羅蜜を除きたる者。

普見如來の佛刹の莊嚴に喩ふとも、復此れに過ぎたり。何を以ての故に。普見如來の佛刹の莊嚴は思ひ議られざる故なり。と。爾の時に、師子勇猛は佛に白して言はく。世尊、是等の類の如き佛刹の莊嚴は、三世の佛の刹に於て頗る更に有りや、不や。と。佛言はく。有り。善男子、東方に、此を去ること百億恒河沙の世界を過ぎて佛刹あつて住最上願と名く。彼の中に佛あつて普光常多功德海王と名け、彼の佛の壽命は無量無邊にして、常に菩薩の爲めにとて法を演説す。善男子、彼の佛の刹土の功徳莊嚴と、普光佛の刹と等しうして異なる無し。善男子、四の菩薩あつて、不思議なる弘誓の鎧を被て、此の願に於て決定して成滿せり。亦當に此の佛刹の莊嚴の、普見如來の如くなるを得べし。と。時に、師子勇猛は言はく。願はくば、佛、彼の菩薩の名號及び其の住處を説きたまへ。復、願はくば、彼の普光常多功德海王如來の佛刹を示して、此の大衆をして利益する所を多からしめたまへ。何を以ての故に。此の諸の菩薩は、若し見聞し已らば、此の願ふ所に於て當に成滿し得べければなり。と。佛言はく。善男子、汝等諦に聽け。當に汝が爲めに説くべし。善男子、彼の一の菩薩を光明幢と名け、東方の無憂德佛の刹に在り。次を智上と名け、南方の智王如來の佛刹に在り。次を諸根寂靜と名け、西方の慧積如來の佛刹に在り。次を願慧と名け、北方の那羅延如來の佛刹に在り。と。爾の時に、世尊は、神通力を以て普光常多功德海王如來の佛刹を現じて、此の大會をして、彼の如來及び菩薩衆并に其の佛刹の功徳莊嚴を見しめたるに、昔より未だ見ず、亦未だ曾て聞かざる所にして、彼の一切は、皆不思議なる無量百千億那由他の寶もて間錯し莊嚴し、一劫の中に於て説くとも、彼の功徳も亦盡くる能はざるを、衆皆明に見ること掌中の菴摩勒果を觀るが如し。彼の菩薩の身長は四萬二千由旬にして、佛の身長は八萬四千由旬に、光明洞に照すこと閻浮檀金の山の如くに、廣大なる功徳莊嚴を成就して大菩提樹の下に坐し、諸の菩薩衆に恭敬し圍繞せられて、百千億の諸の變化の事を現し、十方の諸の世界の中に往き詣り、諸の衆生

何に況んや、彼の佛土に生ぜん者をや。若し此の文殊師利の授記の法門を聞き、及び文殊師利の名を聞くことを得るある者をば、是れ則ち名けて、面諸佛を見たりと爲さん。と。是の時に、佛は諸の菩薩に告げて言はく。是くの如し、是くの如し。汝の説く所の如し。善男子、若し百千億の諸佛の名號を受持するあると、若しくは復文殊師利菩薩の名を稱するあるとにては、福は彼れよりも多きなり。何に況んや、普見佛の名を稱ふるをや。何を以ての故に。彼の百千億那由他の佛の衆生を利益することは、文殊師利の一劫の中に於て作す所の饒益にも及ばざればなり。と。爾の時に、衆中の無量百千億那由他の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等は、同聲に唱へて言はく。南無文殊師利童子菩薩、南無普見如來應正等覺と。此の語を説き已るや、八萬四千萬那由他の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、無量の衆生は善根成熟して、三乘の中に於て不退轉を得たり。

文殊師利は、又佛に白して言はく。我れに復願あり。我が見る所の如きは、無量無數の百千億那由他の諸佛世尊なり。而して、彼の諸佛の有つ所の、佛利の功德莊嚴の是くの如きを、一切皆我が一佛利の中に置かしめん。唯、二乘及び五濁等を除く。世尊、若し我れ自ら、佛利の功德の種種なる莊嚴を説かば、恒沙の劫を過すとも亦盡すこと能はじ。我が願する所の如きは、唯佛のみ知り能ふ。と。佛言はく。是くの如し、文殊師利。如來は三世の中を知見するに限礙ある無ければなり。と。

爾の時に、衆中に諸の菩薩あつて、是くの如き念を作さく。文殊師利の得る所の佛利の功德の莊嚴と、阿彌陀佛の利と等しと爲んや、不や。と。爾の時に、世尊は彼の菩薩の心の念する所を知り、師子勇猛に告げて言はく。善男子、譬へば人あつて、一毛を析いて百分と爲し、一分の毛を以て、大海の中に於て一滴の水を取る如きに、此の一滴の水を阿彌陀佛利の莊嚴に喩へ、彼の大海の水を

【九】南無(Kumuh, Namu)。又、發願・納莫など書す。歸命・敬禮・救我など譯す。佛に對して、衆生の至心に歸依・信託する義なり。

願積集清淨圓滿と名く。師子勇猛言はく。世尊、彼の佛の世界は何の方所に在るか。佛言はく。南方に在れども、此の娑婆世界も亦當に彼の佛利の中に在るべし。と。

文殊師利は、又佛に白して言はく。我れに復願あり。我が佛利の中は、無量なる妙寶を積集して成ぜられ、復無量なる摩尼の妙寶を以て間錯して莊嚴するに、其の摩尼寶は、十方の界に於て未だ會て有らざる所にして甚だ得難しと爲し、是くの如き寶の名を、俱胝歲の中にて説くとも盡すこと能はず。随つて、諸の菩薩は、彼の利の金にて體を爲せるを見んと樂はば、即金と爲るを見、銀の體を見んと樂はば、即銀と爲るを見、然も金を見るに於て未だ會て損減せず。玻璃・瑠璃・碼碯・赤眞珠等の無量の諸寶を見んと樂はば、各隨つて見られて皆相ひ礙へず。是くの如くに、栴檀香の體・阿伽羅香、乃至、赤栴檀等も各樂見に隨ふこと、亦復是くの如し。又、彼の利中は日月・摩尼・星火等の光にて照見せらるるを以ひずして、彼の諸の菩薩は皆自身の光明を以て千億那由他の利を照さん。又彼の利の中は、華の開くを以て晝と爲し、華の合するを夜と爲せど、諸の菩薩の樂ふ所に隨ひ、時節は即皆之れに應じ、然く寒暑及び老・病・死無からん。若し諸の菩薩にして、其の樂ふ所に隨ひ菩提を證せんと言へば、即餘の利に往き、兜率天に於て壽盡き降生して菩提を證すれば、此の佛の利中には涅槃あること無きなり。百千種の樂は、虚空の中に於て相を現さずと雖も其の音を聞き、此の樂は貪愛に順ずる聲を出さずして、但諸の波羅蜜と佛・法・僧の聲、及び菩薩藏の法門の聲を出し、諸の菩薩の解する所に隨ひ、妙法を皆悉く聞くことを得ん。又、諸の菩薩は、若し佛に見えんと欲せば、詣る所の處に隨ひ、經行にも坐立にも、念に應じて即普見如來の菩提樹に坐するを觀ん。若し諸の菩薩にして、法に於て疑あらば、但彼の佛に見ゆるのみにて、解釋を待たずして、疑網は皆斷じて法義を解了せんとたり。と。爾の時に、會中の無量百千億那由他の諸の菩薩衆は、同聲に説いて言はく。若し普見佛の名を聞くことを得ば、彼の人は便ち最上の善利を得ん。

【八】阿伽羅(Agaru)香。沈香と譯す。

善男子、此の文殊師利の成佛せん時は、名けて普見と爲さん。何の義の故を以て普見と名くるか。彼の如來は、十方の無量百千億那由他の諸佛の刹中に於て、普く皆見令むるを以てなり。若し諸の衆生にして、彼の佛を見ば、必ず定つて當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきなり。普見如來は未だ成佛せずとも、若し我が現在及び滅度の後に其の名を聞くあるものも、亦皆必ず定つて當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。唯已に 離生の位に入れると、及び狭劣なる心の者とを除く。と。

文殊師利は、又佛に白して言はく。世尊、我れに復願あり。阿彌陀佛の刹の如きは、法の喜を以て食と爲せども、而も我が刹中の菩薩の、初めて食念を生起する時には、即便ち百味は鉢に盈満して右の手中に在り。尋いで是の念を作さん。若し未だ十方の諸佛を供養し、及び貧窮苦惱の衆生、餓鬼等の類に施し、其れをして飽き足らしめずんば、而ち我れは決定して應に自ら食ふべからず。と。此の念を作す時に、五神通を得、空に乗じて、疑無く十方の無量無數なる諸佛の刹中に往き、食を以て諸佛如來及び聲聞衆を供養し、又貧苦なる諸の衆生の類に於ても亦皆周く給ひ、復說法を爲して渴愛を離れしめ、一念の頃に於て還つて本處に至らん。となり。復次に世尊、我れに復願あり。我が刹中に於ける諸の菩薩等の、初めて生るる時に須ふる所の衣服は、其の手中に於て意に隨つて皆出で、種種の衣寶は鮮潔にして、體に稱つて沙門の服に應ぜんも、便ち是の念——若し未だ十方の諸佛を供養せずば、應に自ら用ふべからず。——を作し、一念の中に於て十方の無量の佛刹に往き詣り、此の衣寶を以て諸佛に獻じ已り、還つて本處に至つて方に自ら受用せん。となり。復次に世尊、我れに復願あり。我が佛刹の中の諸の菩薩衆の得る所の財寶及び諸の資具は、先づ諸佛・聲聞に分施し、遍く供養し已つて、然る後に受用することを要す。又我が刹中には、八難及び不善の法を遠離して、既に過咎無く亦禁戒無く、苦惱と諸の不悅の意とある無けん。となり。と。時に、師子勇猛は、佛に白して言はく。而して、彼の佛刹を名けて何等と爲すか。佛言はく。彼の刹を隨

【七】 離生の位。三乘の人の見惑を斷じて、永く三界の生を離るる所を謂ふ。但し、異譯本には、「入滅の志にて、道跡を得たる者を除く」とあれば、二乘の離生を謂ふ者なるべし。

の一切の如來に、若し是に我れ、決定せる菩提の心を勸發し、教授・教誡して、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修せしめ、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を得しむるに非んば、我れ菩提に於て終まで應に證すべからず。而して、我れは當に此の願する所を滿して、然る後に乃ち無上菩提を證すべきことを要す。と。時に彼の衆中の諸の菩薩等は、咸く是の念を作さく。文殊師利の無礙の天眼は、幾の如來を見るか。と。是の時に、世尊は、諸の菩薩の心の念する所を知り、即師子勇猛雷菩薩に告げて言はく。善男子、譬へば此の三千大千世界を以て碎いて微塵と爲すが如くんば、意に於て云何。此の諸の微塵は、算計を以て其の數を知るべきや、不や。答へて言はく。不なり、世尊。佛言はく。善男子、文殊師利の無礙の天眼にて、東方の無量なる諸佛を見ることは、復是の數に過ぎたり。南・西・北方の四維と上下とにても、亦復是くの如し。と。

時に、文殊師利は佛に白して言はく。我れに是の願あり。恒河沙の等の諸佛の世界を以て一の佛刹と爲して、無量の妙寶もて間錯して莊嚴せん。若し爾らずんば、我れ終まで無上菩提を證せじ。と。復次に世尊、我れに復願あり。我が刹中に菩提樹あつて、其の量正しく十の大千界に等しく、彼の樹の光明をして此の佛刹に遍からしめん。と。復次に世尊、我れに復願あり。我れ菩提樹に坐し已るや、阿耨多羅三藐三菩提、乃至、涅槃を證得するまでは、其の中間に於て此の座を起たじ。但し、變化を以てしては、十方の無量無數なる諸佛の刹土に遍うして、諸の衆生の爲めにとて法を演說せん。と。復次に世尊、我れに復願あり。我が刹中をして、女人の名無く、純ら菩薩の衆のみにて、煩惱の垢を離れ淨き梵行を具し、初め生るる時に、袈裟は體に隨ひ、結跏趺坐して忽然として現れしめん。是くの如き菩薩は其の刹に遍滿して、聲聞・辟支佛の名ある無く、唯如來の變化する所にて十方に往き詣り、諸の衆生の爲めに三乘の法を説くを除く。と。爾の時に、師子勇猛雷菩薩は佛に白して言はく。世尊、文殊師利は、當來に成佛せば何等と爲すか。と。佛言はく。

以て得と爲し、亦得に非ず不得に非るを、説いて名けて得と爲すなり。と。

爾の時に、師子勇猛雷音菩薩は佛に白して言はく。世尊、善い哉。願はくば、文殊師利の得る所の佛刹を説きたまへ。と。佛言はく。善男子、汝當に自ら文殊師利に問ふべし。と。時に彼の菩薩は、文殊師利に白して言はく。仁者は當に何等の佛刹の功德莊嚴を得べきか。文殊師利言はく。善男子、若し我れ菩提を求めば、汝は其の得る所の佛刹を問ふべし。師子勇猛言はく。仁者も豈菩提を求めざらんや。文殊師利言はく。不なり。何を以ての故に。若し求むる所あらば、則ち染著するあり。若し染まる所あらば、則ち貪愛するあり。若し愛する所あらば、彼れ則ち生ずあり。若し生ずるあらば、是に則ち愛するあり。若し愛する所あらば、終まで中に於て出離する有らざるなり。善男子、我れ是の故に爲つて菩提を求めざるなり。何を以ての故に。菩提は不可得なる故なり。不可得なるを以て是の故に求めざるなり。善男子、然して汝は我れに、何等の佛刹を仁は當に得べき者ぞ。と問へども、我れは説く能はざるなり。何を以ての故に。如來一切智者に對して自の佛刹の功德莊嚴を説くことは、即菩薩自ら己れの徳を講ずるものたればなり。と。佛は文殊師利に告ぐらく。汝は何等の願を以て佛刹を莊嚴するかを自ら説き、諸の菩薩をして、聞き已つて決定して此の願を成滿せしむべし。と。

時に、文殊師利は、如來の教を受け、即ち座より起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に白して言はく。世尊、我れ今佛の神力を承けて、當に宣説を爲すべければ、諸べて大菩提を求めんと欲する者は、皆應に諦に聽くべし。若し此の願を聞かば、當に實の如くに學んで圓滿を得しむべし。と。文殊師利の右膝を以て地に著くる時に當り、十方の各恒河沙の等の諸佛の刹土は、六種に震動せり。時に、文殊師利は復佛に白して言はく。我れ往昔の百千億那由他阿僧祇劫より已來、是くの如き願を起したり。我れ無礙の天眼を以て見る所の、十方の無量無邊の諸佛の刹中

【六】若し愛する所あらば、乃至、出離する有らざるなり。異譯本に「其の恩愛には、則ち受くる所あり。若し受くる所あらば、則ち苦患なり。其の苦患には、則ち謬りある無し」となり。

師利言はく。我れ實に、^{一〇}の衆生をも勸めて菩提に趣かしめじ。何を以ての故に。衆生は有る所無き故なり。衆生の性は自ら離れたる故なり。若し衆生にして得べくんば、則ち菩提に向はしめんも、既に不可得なる故に、勸むる所無きなり。何を以ての故に。平等にして分別無き故に、平等を以てして平等を求めらるるに非ず、亦起る所も無ければなり。是の故に、常に説くなり。應に諸行の、來るに従る所無く、去るに至る所無きを觀すべし。是れを平等と名け、則ち是れ性空なれば、性空の中に於ては求むる所無し。と。善男子、汝の問へるが如くに、我れ忍を得たる已來、一念も心に當に菩提を得べき者無し。善男子、汝は彼の心を見たりや。而して此の心を以て菩提を得たりや。師子勇猛言はく。不なり、文殊師利。何を以ての故に。心は色に非ずして、見るべからざるを以ての故なり。菩提も亦爾く但是れ想に名けたれば、若しは心の名若しは菩提の名には皆所有無ければなり。文殊師利言はく。善男子、汝に説くが如く、我れ一の念をも菩提を得ることに生ぜざるは、是れ密意にて説くなり。何を以ての故に。心は本來生ずることある無きを以ての故に、^五是の故にて生ずること無きなり。既に生ずることある無くんば何を得、何を證せんや。と。師子勇猛は問うて言はく。云何なるを名けて、平等の證入と爲す。答へて言はく。諸法の中に於て繫著する者無きを平等の證と名く。證入と言ふは、彼の微細なる智も亦生・滅せずして、眞如と異る無く分別すべき無き、是れを證入と名くるなり。若しくは正見にて修行し、平等の中に於て、一法として得べき無くして、種種の性を離れ、亦一にも著せざる、是れを證入と名くるなり。若しくは身を以て諸法の無相なるを證し、彼の相の謂はゆる無相なるに明了にして、身・心に於ても亦執著せざる、是れを則ち名けて圓滿の證入と爲すなり。と。師子勇猛は問うて言はく。云何なるを得と名くるか。文殊師利言はく。善男子、世間の言説を以て之れに名けて得と爲せども、諸聖の得る所は言にて説き能ふに非ず。何を以ての故に。法は依止する無く、言説を離れたればなり。復次に、善男子、無得を

【四】菩提も亦爾く、乃至、皆所有無ければなり。異譯本に「道も亦復然り。亦、形色無く復、見るべからず。曰ふ所の道とは、假に號あるのみ。曰ふ所の言の、心及與び佛道は、悉く是れ假託なり。」とあり。

【五】是の故にて生ずること。此の句の中間に、前の「一の念をも菩提を得ることに」の句を挿入して解せば、意義完全せん。

卷の第六十

文殊師利授記會 第十五の三

爾の時に、師子勇猛雷音菩薩は文殊師利に白して云はく。仁者は已に十地を満足し、及び如來の十力・一切の佛の法を悉く皆圓滿せるに、何の故にて阿耨多羅三藐三菩提を成ぜざるか。と。文殊師利言はく。善男子、諸の佛法を圓滿し已らば、更に菩提を證することはある無し。何を以ての故に。已に圓滿するが故に、應に更に證すべからざればなり。と。師子勇猛の言はく。云何に諸の佛法を圓滿せるか。答へて言はく。佛法の圓滿は眞如の圓滿の如く、眞如の圓滿は虚空の圓滿の如く、是くの如くに、佛法と眞如と虚空と亦二ある無きなり。善男子、汝の言ふ所の如き、云何に諸の佛法を圓滿すとは、色の圓滿、乃至、識の圓滿の如くに、佛法の圓滿も亦復是くの如きなり。師子勇猛の言はく。何者は是れ色等の圓滿なるか。文殊師利言はく。善男子、意に於て云何。汝の見る所の色は、是れ常なるか。是れ無常なるか。答へて言はく。不なり。文殊師利言はく。善男子、若し法は常に非ず無常に非ずば、彼れに増減ありや。答へて言はく。不なり。文殊師利言はく。善男子、若く法の不増・不減なる、是れを圓滿と名くるなり。云何に圓滿する。若し諸法に於て了知する能はずんば、則ち分別を生ずれども、若し能く了知せば、則ち分別する無し。若し分別する無くんば則ち増減する無く、若し増減する無くんば此れ則ち平等なり。是の故に、善男子、若し色の平等なるを見ば、即是に色に圓滿にして、受・想・行・識及び一切の法に圓滿なることも、亦復是くの如きなり。と。

爾の時に、師子勇猛雷音菩薩は文殊師利に白して言はく。仁者、法忍を得たる來、一念の心も正覺を成ぜんと願じたること無くして、今何故に乃ち餘の人に勸めて菩提に向はしむるか。と。文殊

【一】云何か諸の佛法を、乃至、亦二ある無きなり。異譯本には「云何か佛法を具足する。答へて曰はく。本無を具する故なり。乃至、備に悉く虚空なるは、乃ち本無を具するなり。虚空及び諸佛法を曉了するに、本無の義は等しくして二ある無く、分別すべからず。」とあり。

【二】汝の言ふ所の、乃至、亦復是くの如きなり。何を以て一切諸法を具すと云ふ。答へて曰はく。五陰を具せば、乃ち能く三界の一切を具足し、普く十方諸佛の法を備ふ。」とあり。

【三】何者か是一色等の圓滿なるか。異譯本に一云何か、諸色を具足する。」とあり。

に於て諸の音樂を奏し、曼陀羅華を雨せり。時に、二十億の衆生の、王に隨從せる者も、皆大に歡喜して、自ら慶して言はく。我等も當に最上の菩提を得べく、即彼の王の菩提心を發せるを學ばん。と。

佛、大衆に告ぐらく。爾の時の普覆王は、豈異人ならんや、今の文殊師利菩薩是れなり。彼れ往昔に七十萬阿僧祇恒河沙劫を過したるに於て、初めて菩提の心を發し、次いで六十四恒河沙劫を過して無生法忍を得て、能く菩薩の十地を具足して、如來の十力と佛地の諸法とを悉く皆圓滿したれども、而も未だ會て一念の心も、我れ當に佛を得べし」と起さざりき。善男子、爾の時の二十億の衆生の、彼の王に隨逐して、雷音佛の所に於て菩提心を發せる者は、皆文殊師利の勸發に出つて、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧に入らしめ、今並に阿耨多羅三藐三菩提を證得して大法輪を轉じ、佛事を作し已つて般涅槃せるに、文殊師利は、皆悉く彼の諸の如來を供養し、亦皆彼の諸佛の法を護持したり。唯一佛の、地持山と號するのみあり。此の下方の四十恒河沙の刹土を過ぎたるに在つて、其の佛世界を名けて地持と曰ひ、亦無數の諸の聲聞衆を有ち、佛の壽は無量にして、今に于いて現在せりと。此の文殊師利の宿縁を説ける時に、衆中の七千の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發したり。」

【二】十地（菩薩の）。菩薩の十地は見を破し二空の理を證つて、歡喜を生ずる歡喜地より、離垢地・發光地・焰慧地・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地を経て修惑をも斷盡して無邊の功を具する法雲地までを謂ふ。

大王汝諦に聽け 我れ當に次第に説くべし 一切の因縁の法は 根欲の行する所に隨ひ 其の有つ所の願の如くに 是くの如き果報を得ることを 我れも亦往昔に於て 菩提心を發起して 諸の衆生の爲めの故に 當に利益を作すこと 我が作す所の願の如くなるべしと願ぜしに 昔發せし所の心の如くに 不退の菩提を得て 意願は速に圓滿したるなり 大王應に堅固に 諸行を修習すべくば 汝當に廣大なる 無上の佛菩提を得べきなり と。

時に普覆王は、佛の説く所を聞き、歡喜踊躍すること未曾有を得、衆會の前に於て、大師子吼して頌を説いて曰はく。

今一切の衆に對して 大菩提心を發す 一一の衆生の爲めに 誓つて未來の際を盡して 無量の生死を受けて 大饑饉を作し 備に菩薩の行を修めて 諸の衆生の苦を救はんと 今よりして若し誓に違うて 貪欲の心及び慳嫉怨恨を起さば 則ち十方の佛を誑すなり 又我れ今日よりして 乃至菩提を成ずるまで 常に當に諸佛に學んで 梵行を修行し 淨き戒律に隨順し 諸の過咎を遠離すべし 又我れ菩提に於ても 亦速には證することを願はずして 當に未來の際を盡して 廣く諸の群生を利すべく 諸の佛刹を嚴淨にし 無量の不思議もて 當に我が名號をして 普く十方の界に聞えしむべし 我れ今自ら授記せる 決定して當に成佛すべしとの 志樂は勝れて清淨にして 此れに於て固より疑無ければ 我れ當に三業を淨めて 諸惡を起さしめざるべし 我れ此の眞實を以て 佛人中の尊を成ずるに 若し此の心にして眞實ならば 地は當に六種に動くべし 若し我が語は誠諦にして 虛妄ある無くんば 當に虚空をして中にて 音樂を自然に奏せしむべし 若し我れに詔曲 及び以て怨恨の心無くんば 此の眞實の故に由つて 當に曼陀華を雨すべし と。

時に、普覆王は、此の頌を説き已るや、心誠實なる故に、十方の億刹は六種に震動し、虚空の中

子・大臣も唯供養を務めて餘に作す所無く、多歳を經と雖も初より疲倦無かりき。是れを過ぎて已後、其の王は、獨り靜處に在つて思惟すらく。我れ今已に廣大なる善根を集めたれども、而も猶未だ迴向する所の處を定めず。帝釋・大梵天王・轉輪王を求むるを爲さんか。聲聞・辟支佛を求むるを爲さんか。と。是の念を作し已るや、空中にて、諸天は大王に告げて言はく。是くの如き狹劣の心を起す勿れ。何を以ての故に。王の集むる所の福德は甚だ多くして、當に阿耨多羅三藐三菩提を發すべければなり。と。善男子、時に普覆王は、是の語を聞き已るや、歡喜して念して言はく。我れ今、此れに於て決定して退かじ。何を以ての故に。天は我が心を知つて、來つて我れに告げたればなり。と。善男子、爾の時に、彼の王は諸の大衆八十億那由他の百千の衆生と、雷音佛の所に往き詣り、頂にて雙足を禮し、右に繞ること七匝し、躬を曲げて恭敬し、合掌して佛に向つて、頌を説いて曰はく。

我れ今最勝に問はん 願はくば當に我が爲めに説きたまへ 云何にして 最上なる人中の尊
 を成就し得べきかを 世間の依止する所を 我れ已に廣く供養すれども 不決定の心を以て
 未だ迴向する處を知らず 已に廣大の福を修めたるを 當に何所に迴向すべきか 梵天の
 位 帝釋轉輪王を求むるを爲さんか 聲聞 及び辟支佛を求むるを爲さんかと 我れ此の
 念を發せる時に 空中にて天は我れに告げて 大王汝 狹劣の迴向心を起す勿れ 一切の衆生
 の爲めに 當に廣大なる願を興して 世間を利益すべきが故に 應に菩提心を發すべしと
 我れ今世尊 法に於て自在なる者に請ふ 願はくば菩提心を 發起する方便を説きたまへ
 菩提心を發し已つて 當に牟尼の如くなるを得べきことを 惟願はくは兩足尊 我が爲めに具
 に宣説したまへ と。

爾の時に、雷音如來は普覆王の爲めにとて、頌を説いて曰はく。

なり。善男子、我れ都べて、心の發つて菩提に向ふあるを見ざるなり。心及び菩提を見ざる故を以て、是の故に發すこと無し。と。師子勇猛言はく。文殊師利、都べて心を見ずとは、是れ何の句義ぞ。文殊師利言はく。善男子、是に都べて見ざるを、説いて平等と名くればなり。又問ふ。云何なるを説いて、平等と爲すか。答へて言はく。善男子、是くの如き平等は、種種の性は皆有る所無きを以て、彼彼の諸法の一味なる故にて説くなり。一味と説くは、謂はゆる離なる故に、染無く淨無く、斷ならず常ならず、生ぜず滅せず、我無く受無く、取らず捨てず。是くの如くにして、説く法をも念せず、我が説くことも亦分別する無きなり。善男子、此の平等法中に於て了知して修行する、是れを平等と名く。復次に、善男子、若し菩薩にして、此の平等に入らば、都べて種種の界の若しは一若しは多有るを見ず。平等の中に於て平等を見ず。相違の中に於て相違を見ず。彼の本來の性の清淨なる故を以てなり。と。

爾の時に、師子勇猛雷音菩薩は、佛に白して言はく。世尊、此の文殊師利は、發心の久近を自ら説くことを肯ぜざれども、此の諸の大衆は、皆樂うて聞かんと欲す。と。佛言はく。文殊師利は是れ甚深の忍の者なり。甚深の忍の中に於ける菩提及び心は、皆不可得なり。不可得なるを以て、是の故に説かざるなり。然れども、善男子、我れ今當に文殊師利の發心の久近を説くべし。善男子、過去の久遠に、七十萬阿僧祇恒河沙劫を過ぎて、佛の雷音如來應正等覺と名くるあつて、世に出現せり。東方に在つて此を去ること七十二那由他の佛刹を過ぎて、世界の無生と名くるあり。彼の雷音如來は、中に於て説法せり。諸の聲聞衆は八十四億那由他あつて、諸の菩薩衆は二倍して前に過ぎたり。善男子、彼の時に、王の名けて普覆と曰へるあり。七寶具足して四天下に王とし、正法もて理化して法輪王たり。而して八萬四千歳の中に於て、衣服・飲食・宮殿・臺觀・僮僕・給侍の一一殊妙なるを以て、恭敬して雷音如來及び諸の菩薩・聲聞の大衆を供養し、其の王の親族・中宮の姪女・王

ことを悉く皆退轉するなり。彼れ若し退轉せば、則ち退轉せず。何の法を退かざる。謂はく。空と無相と無願と實際及び諸の佛法とを皆退轉せざるなり。何をか佛法と謂ふ。謂はく。離れず著かず、及び縁する所無く、入る無く出づる無く、行する所ある無く、亦表示無く、但其の名有るのみ。空にして生ある無ければ、去無く來無く、染無く淨無く、塵無く塵を離れたり。我無く、分別無く、和合無く、執取無く、平等にして違ふこと無し。是れを佛法と爲す。善男子、此の諸の佛法は、法に非ず非法に非ず。何を以ての故に。諸の佛法は無生の處なる故なり。彼の新發意の菩薩は此の説を聞き已らば、若しくば驚怖を生じて速に菩提を得、若しくは分別を起して是くの如き念を作さん。而るに今我等の成する所の菩提は、發心有るに隨つて現證に住して乃ち菩提を得るなれば、若し發心せずんば終まで得ること能はじ。と。是くの如き分別は、皆不生なる故に、菩提及び心は俱に不可得なり。不可得なる故に則ち無分別なり。若し無分別ならば則ち現證も無し。何を以ての故に。現證の因る所は不可得なる故なり。善男子、意に於て云何。虚空に菩提を得べきや。答へて言はく。不なり。又言はく。善男子、如來は豈、一切の法は虚空と同じと説かざるか。答へて言はく。是くの如し、是くの如し。又言はく。善男子、虚空の如くに菩提も亦爾り、菩提の如くに虚空も亦然り。虚空と菩提と、無く別無し。若し菩薩にして此の平等を知らば、則ち知ある無く、亦不知も無く、亦不見も無きなり。と。此の法を説ける時に、一萬四千の比丘は、諸の有漏を盡して心に解脱を得、十二那由他の比丘は遠塵離垢して、諸法の中に於て法眼淨を得、九萬六千の衆生は菩提心を發し、五萬二千の菩薩は無生忍を得たり。

爾の時に、師子勇猛雷音菩薩は、文殊師利に白して言はく。仁者は菩提心を發してより來、幾時と爲すか。と。文殊師利言はく。止めよ。善男子、妄念を生ずること莫かれ。若し無生の法中に於て、是くの如き言——我れ菩提の心を發し、我れ菩提の行を行すと——を説くあらば、大邪見たる

【二】若しくば驚怖を生じて、乃至、是くの如き念を作さん。異譯本には「若し恐怖せば疾く正覺を成じ、若し恐怖せずば正覺を成ぜず。乃至其の恐怖する者には乃ち妄想あり。妄想あるを以て心に自ら念じて言はく」とあり。

に 諸法にも亦然ればなり。善男子、而して汝の間ふ所は佛法に趣向することなれば、我れ今汝に問はん。汝の意に随つて答へよ。意に於て云何。色にて菩提を求むるを爲すか。色の本性にて求むるを爲すか。色の如にて求むるを爲すか。色の白體にて求むるを爲すか。色の空にて求むるを爲すか。色の離にて求むるを爲すか。色の法性にて菩提を求むるを爲すか。善男子、意に於て云何。色にて菩提を得るを爲すや。乃至、色の法性にて菩提を得るを爲すや。答へて言はく。不なり、文殊師利。色にて菩提を求めず。乃至、色の法性にて菩提を求めず。色にて菩提を得ず。乃至、色の法性にて菩提を得ざるなり。文殊師利言はく。意に於て云何。受・想・行・識にて菩提を求むるや。乃至、識の法性にて菩提を得るや。乃至、識の法性にて菩提を得ざるや。答へて言はく。不なり。文殊師利。受・想・行・識にて菩提を求めず。乃至、識の法性にて菩提を求めず。識にて菩提を得ず。乃至、識の法性にて菩提を得ざるなり。文殊師利言はく。意に於て云何。五蘊を離れて我と我所とありや。答へて言はく。不なり。文殊師利言はく。是くの如し、是くの如し。善男子、更に何の法を以てして菩提を求め及び菩提を得ん。と。師子勇猛は言はく。文殊師子、仁者の言ふ所は衆皆誠とし信す。而して今乃ち菩提を求めず、菩提を得ずと説かば、新發意の菩薩は、此の所説を聞きて必ず驚怖を生ぜん。と。文殊師利言はく。善男子、一切の諸法に驚怖あること無く、實際の中に於ても亦驚怖無ければ、如來は驚怖無き者として法を演説することを爲せども、若し驚怖せば彼れ即ち厭を生ぜん。若し厭を生ぜば彼れ則ち欲を離れん。若し欲を離れば彼れ則ち解脱せん。若し解脱せば則ち菩提無けん。若し菩提無くんば、是れ則ち住する無けん。彼れ若し住する無くんば、是れ則ち去る無けん。若し去ることある無くんば、是れ則ち來る無く、則ち願求する無けん。若し願求無くんば則ち退轉せじ。若し退轉せずんば、則ち退轉を爲さん。何の法を退轉する。謂はゆる我と衆生と命者及び福伽羅とを執して、若しは斷若しは常と、相を取つて分別する

【九】 諸法にも。の「諸」は「佛」の誤寫なるべし。然らずば意を成さず。

【一〇】 新發意。初めて菩提を求むる意を發す者を謂ふ。在家と出家とに通用す。

佛の説きたまへる所の如き菩薩の學處を、我れ當に隨つて學び、不放逸に住し、修行成就して大願を満足し、佛刹を嚴淨にすべし。と。爾の時に、世尊は颯怛して微笑せり。時に、舍利弗は佛に白して言はく。世尊、何の因縁を以て此の微笑を現したまへるか。佛、舍利弗に告ぐらく。汝、此の諸の善男子の師子吼せるを見るや、不や。舍利弗言はく。唯、然り、已に見る。佛言はく。舍利弗、此の諸の善男子は、百千劫を過ぎて、各異刹に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、同じく願莊嚴と號すこと亦當來の師子佛等の如く、其の土の清淨なることは無量壽國の如くにして、唯壽の量を除くのみ。と。舍利弗言はく。彼の諸の如來の壽の量は幾何ぞや。佛言はく。彼の一一の佛は、皆壽十劫なり。と。

爾の時に、師子勇猛雷音菩薩は、卽座より起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、白して言はく。是の文殊師利童眞菩薩は、諸佛世尊に常に稱歎せらるること久し。如し當に阿耨多羅三藐三菩提を得べくば、得る所の佛刹は當に復云何なるべきか。と。佛言はく。善男子、汝當に自ら文殊師利に問ふべし。と。時に、師子勇猛は文殊師利に問うて言はく。仁者は、何時當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきか。答へて言はく。善男子、何ぞ我れの菩提に趣くや不やを問はずして、乃ち我れの菩提を成ずるを問ふや。何を以ての故に。我れ菩提に於てすら、尙趣き向はず。何に況んや、當に得べきことをや。問うて言はく。文殊師利、仁者は豈衆生を利せん爲めの故に菩提に趣かざるか。答へて言はく。不なり。何を以ての故に。衆生は不可得なる故なり。若し衆生を是に利益を爲すべくあつて菩提に趣き向ふとも、而も衆生・壽命及び福伽羅は皆有る所無ければなり。是の故に、我れ今菩提に趣かず。亦退轉せざるなり。師子勇猛言はく。文殊師利、仁者は諸佛の法に趣向するや、不や。答へて言はく。不なり。善男子、一切の諸法は皆佛法に趣向すればなり。何を以ての故に。諸法には漏無く繫無く形無く相無くして、爲つて佛に趣向し、佛に趣向する如く

【八】 福伽羅。補特伽羅に同

み、皆熱惱無く、聞く所の法の如くに隨順して修行するなり。

復次に、舍利弗、菩薩は弦歌・鼓吹・種種の音樂もて佛塔を供養し、此の善根を以て佛刹の功徳莊嚴に迴向せば、是の故にて、菩薩の菩提を得る時に、彼の佛刹中の百千の音樂は、鼓さざるに自ら鳴るなり。

復次に、舍利弗、菩薩若し失念の衆生を見て正念を得しめば、是の故にて、菩薩の菩提を得る時に、諸の弟子をして禪悅の食を得しむるなり。舍利弗、是くの如くに、佛刹の功徳は、如來の辯才を具足して、或は一劫或は一劫を過して説くとも盡す能はざるなり。舍利弗、然れども我れ今は、諸の菩薩の樂欲する所に隨ひ、是くの如くに略して説くのみ。勝れたる志樂者にして、聞き已つて趣き向はば、當に佛刹の功徳を圓滿にし得べし。舍利弗、菩薩は三法を成就せば、速に阿耨多羅三藐三菩提を得て、求むる所の佛刹を皆成就することを得ん。何等を三と爲す。一には、大願の殊勝なるなり。二には、不放逸に住するなり。三には聞く所の如き法に正しき修行を起すなり。是れを名けて三と爲すと。

爾の時に、舍利弗は佛に白して言はく。世尊、如來、希有なり、善く此の法を説きたまふことや。世尊、不放逸に住する故にて菩提分の法を得、修行に住する故にて大菩提を得、勝願に住する故にて佛刹の功徳莊嚴を成就するや。と。佛、舍利弗に告ぐらく。是くの如し、是くの如し、汝の説く所の如し。我れの如きも、往昔大願力を以て佛刹を成就し、不放逸の故にて菩提を成ずるを得たるなり。舍利弗、若し但言説するのみにて、放逸に住して修行せずば、彼れは尙聲聞地にも至る能はじ。何に況んや阿耨多羅三藐三菩提を得能ふことをや。是の故に、菩薩は、若し自らは是れ眞の菩薩なるかを知らんと欲せば、菩薩の學ぶ所の如くに應に是くの如くに學ぶべし。と。

爾の時に、會中の四萬の菩薩は、座よりして起ち、合掌して佛に向ひ、同聲にて白して言はく。

至、末香・塗香・衣服・寶の蓋・幢幡・金銀・琉璃・眞珠等の寶を用ひて供養する時も、亦應に是くの如くに、佛刹の功德莊嚴に廻向すべくば、彼の菩薩は戒律に住する故を以て、心の願する所に隨ひ皆成就することを得るなり。

復次に、舍利弗、菩薩は自の樂を求めずして他の樂を得るを喜ばば、是の故にて、菩薩は菩提を得る時に、彼の佛刹中の有らゆる衆生は、悉く皆一向の快樂を具足するなり。

復次に、舍利弗、菩薩は常に應に普く皆十の善業の道を攝め取り、悉く以て一切種智に廻向すべくば、是の故にて、菩薩は菩提を得る時に、彼の佛刹中の有らゆる衆生は、初めて生るるや卽十善業道及び出離の智を具するなり。

復次に、舍利弗、菩薩は至る所に隨ひ、方に諸の衆生に勸めて悉く皆無上菩提に趣かしめ、唯佛乘を讚じて、二乗及び共にする所の法を説かずんば、是の故にて、菩薩の菩提を得る時に、彼の佛刹中の有らゆる衆生は、決定して當に無上菩提を得て、永く聲聞及び辟支佛を離れ、無量の菩薩は其の國に充滿すべし。

復次に、舍利弗、菩薩は他の利養に於て終まで遮斷せず、他の利を得るを見て常に歡喜を生ぜば、是の故にて、菩薩の菩提を得る時に、彼の佛刹中の有らゆる衆生の受用する資具は、恒に斷絶すること無く、具足して大法の光明を獲得するなり。

復次に、舍利弗、菩薩は若し比丘・比丘尼の過犯ある者を見れど、終まで發揚せずして、但自ら正法の中に安住せば、是の故にて、菩薩の菩提を得る時に、彼の佛刹中には、一切過失の名ある無きなり。何を以ての故に。彼の大衆の皆清淨にして、過失無き法を得るを以てなり。

復次に、舍利弗、菩薩は法を樂み法を求め、熱惱を生ぜずして、聞く所の法の如くに正しく修行に住せば、是の故にて、菩薩の菩提を得る時に、彼の佛刹中に衆生の生ずる者は、法を求め法を樂

り。四には、法の師を尊敬するなり。五には、邪命を行はざるなり。六には、平等に惠施するなり。七には、自ら矜り高らざるなり。八には、他を凌蔑せざるなり。是れを名けて八と爲す。

復次に、舍利弗、菩薩は九法を成就せば、願をして退かざらしめて佛刹を嚴り淨むるなり。何等を九と爲す。一には、身の律儀を具するなり。二には、語の律儀を具するなり。三には、意の律儀を具するなり。四には諸の貪欲を滅するなり。五には、諸の瞋恚を滅するなり。六には諸の愚癡を滅するなり。七には、欺誑を行はざるなり。八には、堅固の友と爲るなり、九には、善知識を輕んじ慢らざるなり。是れを名けて九と爲す。

復次に、舍利弗、菩薩は十法を成就せば、願をして退かざらしめて佛刹を嚴り淨めん。何等を十と爲す。一には、地獄の苦を聞いて、但大悲を起して怖畏を生ぜざるなり。二には、畜生の苦を聞いて、但大悲を起して怖畏を生ぜざるなり。三には、餓鬼の苦を聞いて、但大悲を起して怖畏を生ぜざるなり。四には、諸天の衰惱を聞いて、但大悲を起して怖畏を生ぜざるなり。五には、人中の飢饉・賊盜・怨敵・殺害を聞いて、但大悲を起して怖畏を生ぜざるなり。六には、菩薩は是くの如き念を作すなり。我れ此の時に於て當に精進を起すべし。乃至、未だ清淨なる佛刹を得ずんば終まで懈慢せじ。と。七には、我が刹中の飲食・衣服をして、念に隨ひ即得しめん。と。八には、我が佛刹中の諸の衆生は、等しく壽命無量ならん。と。九には、我が佛刹中の諸の衆生は、等しく彼我的心無からん。と。十には、我が佛刹中の有らゆる衆生は、決定して無上菩提に趣向せん。と。是れを名けて十と爲す。

復次に、舍利弗、若し菩薩は妙華を執持して、如來の所或は佛塔の所に詣つて供養を興す時に、是の願言——此の妙華の如きは、色香殊勝にして見る者欣悦すれば、我れ成佛せん時には、我が刹中をして、是くの如き種種の妙華を遍く布き、及び衆の寶樹を周匝し莊嚴せしめん——を作し、乃

【七】堅固の友と爲るなり。異譯本に一慈を行ずること堅固にして、心移り易らず」とあり。

得るなり。二には、慧を得るなり。三には、行を修するなり。四には、辯に迅きなり。五には、陀羅尼を得るなり。六には、善く法の生ずるを知るなり。七には、善く法の滅するを知るなり。八には、戒聚を犯すこと無きなり。九には、諸天は供養するなり。十には、他の好を貪らざるなり。是れを名けて十と爲す。六には、菩薩は善く智慧の等流を知るなり。謂はく、是の念を作すなり。智慧は戒を以て首と爲し、白法の増長するは慧を以て首と爲す。是の故に菩薩は應に智慧を學ぶべきも、世間の有つ所にては作し難く成り難し。一切の工巧一切の醫藥を皆悉く遍く學ぶとも、而も此の智慧にては離欲の寂滅に證入する能はず。亦復菩提に趣向する能はず。沙門に向ふに非ず。婆羅門にも非ず。涅槃に向ふに非ず。是の故に、我れ今應に更に遍く法の藥と工巧とを求むべし。是くの如き智を以てせば、我れをして彼の究竟せる寂滅を得しむ。と。彼の菩薩は、諸法の本を求むるに、少法として能く法を起すを見ず。見ざる故を以て寂滅に住し、寂滅に住する故に則ち熱惱無く、熱惱無き故に生死を了知すれど、衆生の爲めの故にて彼の生を受くるは、諸の衆生をして苦を除滅せしめん故なり。是れを名けて六と爲す。

復次に、舍利弗、菩薩は七法を成就せば、願をして退かざらしめて佛刹を嚴り淨めん。何等を七と爲す。一には、自ら一切を捨つれども、而も施には不可得なる故なり。二には、戒をば缺犯せざれども、戒に計著せざる故なり。三には、忍辱柔和なれども、而も衆生には不可得なる故なり。四には、精進を發起すれども、身心には、不可得なる故なり。五には、禪定を成就すれども、禪に住らざる故なり。六には、智慧圓滿すれども、分別する無き故なり。七には、諸佛を隨念すれども、相を遠離する故なり。是れを名けて七と爲す。

復次に、舍利弗、菩薩は八法を成就せば、願をして退かざらしめて佛刹を嚴り淨めん。何等を八と爲す。一には、涅槃を樂まざるなり。二には、莊嚴の具を施すなり。三には、其の心廣大なるな

【六】涅槃を樂まざるなり。異譯本には「宣ふる所に、無益の言を説かざるなり。」とあり。

是れを十種の功德の具足と爲す。四には、菩薩は善法を成就せんと欲する爲めに、堅固に自ら課して精進を發起し、又一一の衆生の爲めに、未來の際を盡して、生死の中に於て次第に諸の精進行を修行して疲倦せず。自の課業及び此の大悲を以て、一切衆生の爲めに、爾所の時に於て、生死に流轉して衆生を捨てざるなり。舍利弗、菩薩あつて、十方の各恒沙の如き世界の中に滿ちたる七寶を、念念の中に於て如來に上げ奉り、是くの如くに相續して未來の際を盡す若きと、菩薩あつて、大悲心を發して精進の鎧を被る若きとにて、此の功德は復彼れよりも多きなり。舍利弗、菩薩は此の精進を具せば、十種の勝志樂の法を得るなり。何等を十と爲す。一には、凡愚の行を離るるなり。二には、佛の行を攝受するなり。三には、生死の過を見るなり。四には、大悲の心に住するなり。五には、本願より退かざるなり。六には、諸の疾病を少くするなり。七には、諸佛の教に順するなり。八には、姪・怒・癡を薄くするなり。九には、文に隨つて義を了するなり。十には、修行は成就するなり。是れを名けて十と爲す。五には、菩薩は是の思惟を作すなり。諸佛如來は、心常に定に在つて、未だ曾て念を失はず。我れ應に佛の行する所に隨ひながら、若し心散亂せば、終まで佛の行する所の處を證する能はじ。是の故に、應當に一切の心の取著する所を捨離し、亦一切の利養・恭敬・聚落・城邑・飲食・資生及び諸の親友を捨つべし。諸の衆生を利益せんと欲する爲めの故に衆生を捨てざれども、阿蘭若を樂んで寂靜の處に住し、獨り行じて侶無きこと犀の一角の如く、靜處に住し已つて大慈心を起して、初は一方に遍うし、漸く十方に至つて普く衆生に遍うし、慈心遍し已つて禪定に入るを得ん。と。舍利弗、若し在家の菩薩あつて、一切の樂具を以て、恒沙劫に於て一切の恒沙の諸佛及び比丘衆を供養し、若し出家の菩薩あつて、七歩を行いて阿蘭若の寂靜の處に向はんに、而も此の福德は甚だ彼れよりも多きは、能く速に大菩提を得るを以ての故なり。舍利弗、菩薩の樂うて寂靜に住して禪定に入る者は、十種の功德利益を獲。何等を十と爲す。一には、念を

圓滿にす。と。謂ふ所のものは、阿耨多羅三藐三菩提を求むる時には、一切を悉く捨てて心する所無くして、菩提の資糧を具足し成就するものにして、自の身命を捨つるすら尙悔を生ぜず。何に況んや、財産及び妻子等なるをや。となり。舍利弗、何の故にて、如來を一切智と名くるか。謂はく。菩薩の行を行する時に、自の所有に於て一切皆捨て、是の義の故を以て菩提を得已れば一切智と名くるなり。二には、菩薩の若きは在家にても出家にても、寧ろ身命を捨つとも、終まで戒を破らず。此の持戒を以て、諸の衆生を共にして阿耨多羅三藐三菩提に迴向し、是くの如き持戒にて自ら歡喜を覺し、樂んで梵行を修めて晝夜安樂なるに、益求法を加へて正修行に住し、三界を厭怖して出離を希求し、出要を見たと雖も衆生を顧念して、我れの苦む所の如くに彼れも亦皆然れば、我れ當に茲の重擔を荷ひて、衆生を攝取して涅槃たる安樂の處に置くべし。とて、是くの如く持戒にて自ら喜を覺せる時にも大悲の心を獲、乃至、未だ一切種智を得ざれば、精進を捨てずして頭の然ゆるを救ふが如くするなり。三には、菩薩は忍辱の鎧を被て、高慢を離れて大忍力を得、罵辱及び捶打に遇ふ時の若きにも、忍心成就して瞋恨を生ぜず。假使ひ、棒の須彌山の如くなるあるを、人あつて執持して、億劫の中に於て常に打罵するを見るとも、而も亦怨恨の心を生ぜざるなり。何を以ての故に。彼の諸の衆生は、未だ佛に隨つて學ばざるに、而も我れは方に將に佛に隨つて修學せんとす。是の故に、彼れに於て得る所の打罵にて、便ち能く爾所の大悲を増長して、我れは當に諸の衆生の爲めに、弘誓の鎧を被り、衆生を攝取して解脱を得しむべし。是の故に、我れ今應に瞋恨すべからず。と。菩薩は正に是くの如き忍に住せる時に、則ち十種の具足を成就することを得るなり。何等を十と爲す。一には、種性なり。二には、財産なり。三には、眷屬なり。四には、色相なり。五には善捨なり。六には、善友なり。七には、正法を聞くを得るなり。八には、説の如くに修行するなり。九には、命終の時に臨んで諸佛を見るなり。十には、既に佛を見已つて淨信心を生ずるなり。

の人をや。四には、資財を蓄用するに俱に窮盡する無きなり。是れを名けて四と爲す。舍利弗、是れ菩薩は四法を成就したるなり。

復次に、舍利弗、菩薩は五法を成就せば、願をして退かざらしめ、佛刹を嚴り淨めん。何等を五と爲す。一には、彼の菩薩は、說法者に詣つて之れに問うて、何等の行を修めば能く佛刹の清淨なる莊嚴を得んかと言ひ、若し聞くことを得已らば、説の如くに修行するなり。二には、菩薩は清淨なる持戒及び願力の故にて佛國の中に生れ、彼の國に生れ已るや、彼の土の種種の莊嚴・衆寶の資具及び諸の聲聞・菩薩・大衆の諸相の微妙なるを觀察し、如來の所に於て恭敬し尊重して、白して言はく、世尊、菩薩は何等の行を修せば、廣大なる佛刹の清淨なる莊嚴を得るか。と。而して彼の如來は、此の菩薩の志樂の殊勝なるを知り、即ち是くの如き功德にて佛刹を成就することを宣説するを、彼れは聞くを得已つて法の如く修行するなり。三には、菩薩は智あり行あらば、應に其の智を淨むべく、應に其の行を進むべし。云何にして智を淨むる。謂はく。能緣及び所緣の法に於て、聲聞・緣覺の智を遠離する故なり。云何にして行を進むる。謂はく。聞く所の如くに、必ず定つて修行して、不行を離るる故なり。四には、菩薩は善く有因を知り及び出離を知るなり。有因と言ふは、謂はく。不正の思惟は、是れ四轉倒の依り止る所にして、生死の因たる故なり。出離と言ふは、謂はく。正修行は、一切の法に於て分別を起さずして、出離を爲すが故なり。五には、菩薩は、諸佛の體性及び刹土の性は、俱に但名のみに有つて、名も亦寂滅なるを了知し、是くの如くに了知するに、知の想をも起さざるなり。是れを名けて五と爲す。

復次に、舍利弗、菩薩は六法を成就せば、速に阿耨多羅三藐三菩提を得、亦能く一切世界の最上の佛刹を攝取するなり。何等を六と爲す。一には、此に菩薩は大施主と爲り、有つ所の珍玩の愛樂すべき物を、歡喜して布施し、愒み著する所無く、又是の念を作すなり。我れ大施を行じて大乘を

つるなり。五には、諸佛を愛樂するなり。六には、恒に禪定の喜樂を受くるなり。七には、梵行を修むる時に障礙ある無きなり。八には、少しく功力を用ふるのみにて三昧を得るなり。九には、受くる所の教法を未だ嘗て忘失せざるなり。十には、聞く所の法義を皆悉く了知するなり。是れを名けて十と爲す。

復次に、舍利子、菩薩は四法を成就せば、願をして退かさらしめ、佛利を嚴淨にす。何等を四と爲す。一には、説く如くに能く行ひ、行ふ如くに能く説くなり。二には、常に自ら謙下するなり。三には、慳嫉を遠離するなり。四には、他の利を得るを見れば、歡喜を生ずるなり。是れを名けて四と爲す。舍利弗、是に菩薩は、行ずる如くに能く説かば、四種の利益あり。何等を四と爲す。一には、口中に常に青蓮華の香を出すなり。二には、語業は清淨にして、言に錯謬無きなり。三には、一切の世間に共に信受せらるるなり。四には、諸佛の圓滿なる音聲を攝受するなり。是れを名けて四と爲す。舍利弗、菩薩の謙下に四種の利益あり。何等を四と爲す。一には、惡趣畜生等の身を遠離するなり。二には、妙なる快樂を受くるなり。三には、潛謀も暴賊も俱に害する能はざるなり。四には、人天の恭敬禮拜を受くるに堪ふるなり。是れを名けて四と爲す。舍利弗、菩薩は、遠離せば四種の利益あり。何等を四と爲す。一には、施の心を忘れざるなり。二には、飢饉の時に於て大施主と作るなり。三には、持戒の者の來るを見れば、承迎して引き納るるなり。四には、他の施を受け及び他に施す若きに、一人にても嫉妬を生ずることある無きなり。是れを名けて四と爲す。舍利弗、菩薩は、他の利を得るを見て歡喜の心を生ぜば、四種の利益あり。何等を四と爲す。一には、常に是の心——我れ衆生を攝して應に利樂を與ふべし。——を生じ、彼れ既に自ら得るや、故もて歡喜を生ずるなり。二には、有つ所の財物をば、王難・水火・劫賊・怨親も侵奪し能ふ無きなり。三には、生ずる所の處に墮ひ、財寶・諸子皆悉く具足すれども、王は嫉忌せざるなり。何に況んや餘

りも多ければなり。何を以ての故に。舍利弗、聲聞・緣覺に由らずとも、佛種を出現して世に斷たざれども、若し佛無くんば、則ち聲聞及び辟支佛無ければなり。舍利弗、佛の出現するを以て、佛種をして斷たざらしめ、亦復聲聞・緣覺をも出生せしむ。是の故に、舍利弗、菩薩にして、他をして佛乘の中に住せしめば、是等の如き十種の功德を得、清淨なる利を得るなり。

復次に、舍利弗、菩薩は、三法を成就せば、願をして退かざらしめ、佛刹の功德莊嚴を攝受せん。何等を三と爲す。一には、尊重・愛樂して阿蘭若に住するなり。二には、染著する所無くして法を行ふなり。三には、堅固に淨戒律儀に安住するなり。舍利弗、堅く戒律に住せば十の無畏を得。何等を十と爲す。一には、聚落に入つて畏るる無し。二には、衆中にて說法するに畏るる無し。三には、飲食に畏るる無し。四には、聚落に出でて畏るる無し。五には、寺に入つて畏るる無し。六には、大衆の中にて食するに畏るる無し。七には、教授するに畏るる無し。八には、和上・阿闍梨に親近して畏るる無し。九には、自の眷屬に於て慈心もて教誨するに畏るる無し。十には、衣服・飲食・臥具・醫藥を受用するに畏るる無し。戒律に住する者の有らゆる言説は、他をして信じ受けしむればなり。舍利弗、是れを菩薩の十種の無畏と爲す。舍利弗、菩薩にして、法を説いて心に著する所無くば、則ち能く十種の功德を攝め受く。何等を十と爲す。一には、惡欲を生ぜざるなり。二には、他人の識知を求めざるなり。三には、名聞の心を起さざるなり。四には、檀越の家に於て心繫著せざるなり。五には、他の家を占ひ護らざるなり。六には、極めて下劣なる四事の供養に於ても喜生ずるなり。七には、説法は他をして信受せしむるなり。八には、善神は守護するなり。九には、邪覺を生ぜざるなり。十には、佛を念する心を起すなり。是れを名けて十と爲す。舍利弗、尊敬・愛樂して阿蘭若に住せば、十種の功德を成就す。何等を十と爲す。一には、世俗の言論を遠離するなり。二には、専ら閑靜に習ふなり。三には、心定境を緣するなり。四には、諸の營務を捨

【一】 飲食に畏るる無し。異譯本に「衆中にて飯食して恐れず」とあり。

【二】 聚落に出でて畏るる無し。異譯本に「在家にて誦誦するに、心懼るる所無し」とあり。

【三】 大衆の中にて食するに畏るる無し。異譯本に「聖衆に居在して、怯弱を懷かず」とあり。

【四】 他の家を占ひ護らざるなり。異譯本に「種姓を妬せざるなり」とあり。

【五】 邪覺を生ぜざるなり。異譯本に「未だ曾て非宜の想を思念せず」とあり。

を以ての故ぞ。而ち諸の菩薩の最勝なる利益は、謂はゆる出家なればなり。舍利弗、出家を樂ふ者は、則ち能く十種の功徳を攝取す。何等を十と爲す。一には、諸欲に著せず。二には、阿蘭若を樂む。三には、佛の行する所を行す。四には、凡夫の行を離る。五には、妻子及び財産に著せず。六には、惡道の因を離る。七には、善趣の法を修む。八には、宿世の善根を皆損減せず。九には、恒に諸天に爲つて歎羨せらる。十には、一切の鬼神は恭敬して守護す。若し菩薩常に出家を樂はば、是くの如き十種の功徳を獲得するなり。是の故に、舍利弗、菩薩にして菩提を志求し衆生を度せんと欲せば、常に當に出家すべく、是れを菩薩は一法を成就すと名くるなり。

復次に、舍利弗、菩薩は二法を成就せば、願をして退かざらしめて、佛刹を嚴り淨めん。何等を二と爲す。謂はゆる菩薩は、聲聞地を樂まず、聲聞乘を求めず、聲聞乘の處を説くことを愛樂せず、聲聞乘の者に親近せず、聲聞の戒を學ばず、聲聞乘と共に相應する法を宣説することを樂まず、亦他に聲聞乘を行することを勧めざるなり。緣覺乘に於ても亦復是くの如くにして、唯佛の法に爲つて衆生を勸發して、最上なる阿耨多羅三藐三菩提を成就せしむるなり。是れを名けて二と爲す。舍利弗、若し他に勸めて佛乘に趣入せしむるあらば、此の菩薩は則ち能く十種の功徳を攝取す。何等を十と爲す。一には、清淨なる刹の、聲聞及び辟支佛ある無きを得。二には、純一にして清淨なる諸の菩薩衆を得。三には、諸佛世尊に護念せらる。四には、諸佛に名を稱へ讚嘆せられて、說法を爲さる。五には、發す所の心は皆悉く廣大なり。六には、若し天上に生れば、當に帝釋或は梵天王と作るべし。七には、若し人中に生れば、轉輪王と作らん。八には、常に諸佛に見ゆ。九には、諸の天人に爲つて愛樂せらる。十には、無量無邊阿僧祇の功徳を攝め取るなり。何を以ての故に。舍利弗、若し能く三千大千世界の有らゆる衆生をして、一切皆阿羅漢果を得、或は復緣覺の地に置かしむるあり、若しくば、復能く一の衆生を佛の菩提に置くあらんに、此れの功徳は、甚だ彼れよ

卷の第五十九

文殊師利授記會 第十五の二

爾の時に、世尊は、彌勒菩薩摩訶薩に告げて言はく。汝今佛の爲めに法座を嚴り辦ぜよ。我れ當に昇り已つて、往昔志樂して修せし所の諸行の善巧にて、出生する諸の佛刹土の功德莊嚴を説きて、眞實の法門に趣向せしむべし。と。爾の時に、彌勒菩薩は即ち是の念を作さく。今は世尊は、何の義の故を以て、我れをして座を嚴らしめて、阿難・大目連等を使はざるは如何。彼の諸の聲聞を棄捨し、將唯諸の菩薩の爲めにのみ説く——或は彼の聲聞及び辟支佛は、此の法門に於ては而ち器に非る故に——に非ざらんか。是を以て、世尊は我れをして座を敷かしむるならん。と。爾の時に、彌勒菩薩は、即如來の爲めに神通力を以て、衆寶の師子の座を化作するに、高さ四萬由旬にして周圍嚴麗に、柔軟なる天衣を以て其の上に敷き、其の座より種種なる光明を出して、此の三千大千世界を照せり。爾の時に、如來は其の座に昇り已るや、此の世界をして六種に震動せしめたり。

爾の時に、世尊は長老舍利弗に告ぐらく。菩薩は、四法を成就せば、能く願ふ所をして皆満足するを得しむ。何等を四と爲す。一には、勝れたる志樂を發すなり。二には、諸の衆生に於て、悲愍の心を起すなり。三には、精進を發起するなり。四には、善知識に承事するなり。

復次に、舍利弗、菩薩は一法を成就せば、願をして退かさらしめて佛刹を嚴り淨めん。何を一法と謂ふか。是の菩薩は、應當に不動如來の菩薩たりし時に、本修行して弘誓の願を立てし所——我れ當に所在の生處にて、初め生るる時に若し出家せずば、則ち十方の諸佛を欺誑すと爲さん——を樂ひ學ぶべし。是くの如くに、舍利弗、是に諸の菩薩は、應に隨順して、佛の世に出づる若きも、世に出でざらば、若きも、一切の生處にて、皆悉く決定して、家を捨てて出家することを學ぶべし。何

爾の時に、世尊は神變を現し已るや、十方の無量百千億那由他の佛刹の、有らゆる菩薩の來つて集會せる者は、皆此の土の功德莊嚴并に佛の身量、菩薩・聲聞及び受用の具の、自の本刹のと悉く皆同等にして、然も彼此の刹に雜亂無きを知りたり。

爾の時に、彌勒菩薩は、卽座より起ちて衣服を整理し、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌して佛に向つて頌を説いて曰はく。

名は十方に振ひ智は無量にして 大光明を放つて世間を照したまふに 一切の衆生は共に度量すれども 人尊の勝れたる智慧を測ること莫し 十方の無量億の菩薩は 法を求めん爲めの故に感く來集し 而して皆諸の法門を信樂せんとす 願はくば佛演説して歡喜せしめたまへ 如來の戒定及び智慧の 名稱普く十方の國に聞え 法を演ぶるに畏るる無きこと猶師子の如くに 光は虚空に遍きこと日の照すが如くなれば 一切の天龍と羅刹 及び諸の比丘比丘尼 優婆塞の衆優婆夷とは 合掌して如來の説を聞かんことを樂ふ 過去未來及び現在を 世尊は彼れに於て悉く了知し 勝解力を以て群迷を抜きたまへば 願はくば疑惑を決して開曉せしめたまへ 云何にせば菩薩は智慧の行にて 佛刹を嚴淨にして光潔ならしめ 云何にせば諸願を速に成滿するかを 今如來の宣説を爲したまはんことを請ふ 云何にせば慳無く戒に缺くる無く 能く罵辱の諸の難事を忍び 精進に修行して懈倦無く 無量なる苦の衆生を解脱せしむるか 專心に三昧の門に入つて 清淨なる禪の宮殿に遊止するを樂み 世に處つて利益しながら而も染る無きこと 譬へば蓮華の水に著かざる如くなるか 云何にせば智慧は世間に出でて 甚深なる微妙の法を開闡し 一切の諸魔の衆を降伏して 速に能く奢摩他を具足するかをも 』

莫かれ。何を以ての故に。東北方に世界あつて妙莊嚴と名け、彼に現に佛あつて大自在王と號せり。其の土の衆生は、皆悉く一向なる安樂を具足せること、譬へば比丘の滅定ニ三めぢやうに入るが如し。彼の安樂なることも亦復是くの如くなれば、衆生あつて、彼の佛土に於て億百千歳諸の梵行を修する若きは、此の娑婆世界に於て、一つの彈指の頃だも、諸の衆生に於て慈悲の心を起して獲る所の功德の、尙彼れよりも多きに如かず。何に況んや、能く一日一夜たりとも清淨の心に住するに於てをや。と。爾の時に相莊嚴星宿聚王菩薩は、佛に白して言はく。世尊、我等、娑婆世界に往き、釋迦如來及び諸の菩薩に禮觀し承事せんことを欲し、并に法を聽かんと欲す。と。佛言はく。往くべし、今正に是れ時なり。と。爾の時に、相莊嚴星宿聚王菩薩は即ち是の念を作さく。今我れ何の神通の力を以て、彼に往いて釋迦如來に禮動したてまつらんか。と。是の念を作し已つて、虚空の中に於て、寶蓋を化成して此の三千大千世界を覆ひ、百千萬億の珠纒・寶旛を周く匝して垂れ布き、其の蓋の中に於て種種なる華を雨し、百千の音樂を自然に奏したり。復、此の會の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等をして、各自ら、身に三十二相を具して寶蓋の中に現るるを見しめたり。爾の時に、相莊嚴星宿聚王菩薩は、神變を現し已つて、十億の菩薩と、一念の頃に於て、彼の土より没して此の界の中に現れ、如來の所に到つて雙足を頂禮し、右に遶ること三匝して、來れる所の方に隨ひ、願力の故を以て、蓮華を化現して其の上に坐せり。是くの如くに、乃至、遍く十方に於て、各無量阿僧祇の佛刹中の無量阿僧祇百千億の菩薩あつて、大光明を見、響效の聲を聞き、彼の世尊に問うて此の土に來り、佛足を頂禮して各一面に坐せり。亦復是くの如くに、又此の界中の釋・梵・護世の大威徳の天・諸の龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等も、皆光明を見て、咸く佛の所に來つて雙足を頂禮し、却いて一面に坐せり。

【三】 滅定。滅盡定の略なり。

王と名けたり。本願は殊勝にして、若し衆生あつて其の身を見れば、必ず定つて當に三十二相を得べし。となり。時に彼の菩薩は、佛の光明に遇ひ及び其の聲を聞き、便ち佛の所に詣つて雙足を頂禮し、右に遶ること三匝して佛に白して言はく。世尊、何の因縁を以てして此の瑞あるか。と。佛言はく。善男子、此れより南方に六萬三千の佛刹を過ぎて、世界あつて娑婆と名け、佛を釋迦牟尼と號せり。諸の菩薩を召集せんと欲する爲めの故にて、此の瑞を現すなり。と。彼の菩薩言はく。何の故に名けて娑婆世界と爲すか。佛言はく。彼の界にては、貪・恚・愚癡及び諸の苦惱を堪忍す。是の故に名けて娑婆世界と爲すなり。彼の菩薩は言はく。娑婆世界の諸の衆生は、等しく皆能く惡罵・捶打・諸の惱亂を忍受するや。佛言はく。善男子、彼の界の衆生は、少しく能く斯の功德の若きを成就すれども、多く貪・恚・愚癡・怨恨の纏縛に隨順するなり。彼の菩薩言はく。若し是くの如くならば、彼の界をば應に娑婆と名くべからざるなり。と。佛言はく。相莊嚴星宿聚王、彼の佛の刹土にも、亦菩薩乘を行す諸の善男子及び善女人あつて、已に曾て無量の諸佛を供養し、忍辱を成就して將に衆生を護り善く自ら調伏せんとし、若し衆生あつて、諸の苦惱を以てして來つて害を加ふとも、悉く能く含忍して、終まで貪・恚・愚癡に放逸ならず。善男子、此くの如き諸の善丈夫あるに由り、是の故に彼の界を名けて娑婆と曰ふなり。又、彼の界中に、亦衆生の、衆惡を具足して、少しく能く過を悔ゆれども、其の心兇猛にして愧耻する無く、佛を敬はず法を重んぜず僧を愛せずして、當に地獄・畜生・餓鬼に墮すべきあるを、彼の釋迦如來は、此の下劣なる衆生の中に於て、悉く能く罵辱・嫌恨・誹謗・惱亂・惡言・恐惱を忍受して、心地地の如くに動搖すべからずして違逆する所無く、若しくは供養を得ると及び得ざるとに、高下無く亦憎愛すること無し。是の故に彼の界を名けて娑婆と曰ふなり。と。爾の時に相莊嚴星宿聚王菩薩は、佛に白して言はく。世尊、我等、今は大善利を得たり。彼の弊惡・下劣なる衆生の中に於て生ぜざればなり。佛言はく。善男子、是の説を作す

已るや、便ち佛の所に詣り佛に白して言はく。世尊、何の因縁を以てして此の瑞あるか。と。佛言はく。善男子、東方に此を去ること七十二億那由他百千の佛刹を過ぎて、世界あつて娑婆と名け、佛を釋迦牟尼と號せり。諸の菩薩を召集せんと欲する爲めの故にて、斯の瑞を現せるなり。と。時に、勝智願は是の語を聞き已るや、佛に白して言はく。世尊、我等、娑婆世界に往き、釋迦如來及び諸菩薩に禮觀し供養せんと欲し、并に法を聞かんと欲す。と。佛言はく。往くべし、今正に是れ時なり。と。時に勝智願は是の念を作して言く。今我れ何の神變を以ひて、彼に往いて釋迦如來に禮觀せんか。と。是の念を作し已つて即三昧に入り、此の三千大千世界の三惡道の苦をして、悉く皆消滅して無上の樂を得しめたること、譬へば、比丘の諸の禪定を得たるが如し。爾の時に、一切の諸天・世人及び非人は、貪・恚・愚癡・諸見・我慢・分恨・怒害・憍嫉・憍語の覆藏に爲つて逼惱せられずして、皆慈心を發したり。爾の時に、勝智願菩薩は神變を現し已つて、四萬二千の菩薩と、一念の頃に於て彼の土より没して此の界の中に現れ、如來の所に到つて頭面にて足を禮し、來る所の方に隨ひ、願力の故を以て、蓮華を化現して其の上に坐せり。

爾の時に、北方に、此を去ること六萬三千の佛刹を過ぎて、世界あつて常莊嚴と名け、彼に現に佛あつて娑羅起王と號せり。其の佛の刹土には、初より未だ會て女人の稱を聞かず、一切皆是れ蓮華化生にして、袈裟は體に隨へり。時に、佛は彼の諸菩薩の衆の爲めに、佛種性印の法門を説きてあり。何等を名けて佛種性の印と爲すか。謂はゆる最初に菩提心を發し、此れより即ち菩薩戒を具するを爲して菩薩に入り、陀羅尼を得て心散亂する無く、捨を離れずして空性に證入し、正しく無相を修め願求する所無く、性貪染を離れて蘊・界・處に於て能く證入し、隨覺を作す所に佛慧を樂求し、無生の性に於て眞實に了知し、諸法を證して而も分別する無く、正見を具足して妄念を斷ず。是の故に名けて佛種性の印と爲すなり。時に、彼の衆中に一の菩薩あつて、名けて相莊嚴星宿衆

【三】菩薩戒。大衆菩薩僧の戒律にして、謂はゆる三聚淨戒（五・八・十・具足等の戒律を受持する攝律儀戒、一切の善法を修する攝善法戒、一切の衆生を攝益する攝衆生戒）なり。

言はく。彼の土には忿恨・怨望（おんぼう）ありと雖も、我れを傷（や）くこと無けん。假（かり）に一切の衆生をして、未來の際（きざし）を盡（き）して瞋恨（しんこん）し罵辱（まじやく）し、乃至、刀杖・瓦石（わしやく）もて打擲（うちな）せしむとも、悉く能く之れを受けて終まで報（たぐひ）を加へじ。と。爾（そ）の時に、師子勇猛奮迅（しゆじゆうめうぶんじん）如來は、彼の一切の衆菩薩（しゆぼ）に謂（い）うて言はく。諸の善男子、汝等若し能く寶掌（ほうしやう）の如くならば、與（よ）して俱（い）に行（い）くべし。と。是の語を説ける時に、彼の會中に於て、七萬二千の菩薩あつて、同聲（どうせい）に白（ま）して言はく。我等共に娑婆世界（しあは）に往かん。と。寶掌菩薩は、卽是の念（ねん）を作（な）さく。今我れ、何の神變（しんぺん）を以て彼（か）に往（い）いて釋迦如來（しやくぢあ）に禮（らい）觀（くわん）し、復（また）能く無量の衆生を安樂（あんらく）にせんか。と。是の念（ねん）を作（な）し已（お）るや、卽右（い）の手（て）を以て此（こゝ）の三千大千の世界（さんせんぢやうせんせかい）を覆（おほ）ひて、諸の飲食・衣服・車乘（しゆじやうりゆう）・金銀（きんぎん）・瑠璃（るり）・眞珠（しんじゆ）・珂貝（かはい）・珊瑚（さうご）・璧玉（へいぎよく）を雨（あ）して、諸の衆生の心に希望（きやうぼう）する所に隨（したが）ひ悉く能く充滿（じゆんぷん）し、法（はふ）を聞（き）かん（と）樂（が）ふ者（もの）には卽聞（い）く（と）ことを得（え）しめ、復（また）無量の聞法の衆生をして眞實（しんじつ）を證得（じやうとく）せしめ、亦無數（い）の病苦（びやうこ）の衆生をして勝妙（しやうめう）の樂（がく）を受けしめたり。是の時、寶掌菩薩は神變（しんぺん）を現（あら）し已（お）つて、諸の菩薩と、一念（い）の頃（ま）に於て、彼の土（ち）より没（ぼつ）して此（こゝ）の界（がい）の中に現（あら）れ、如來（に）の所に到（いた）つて佛足（ぶつそく）を頂禮（ちやうらい）し、右（みぎ）に遶（めぐ）ること三匝（さんさふ）して、來（きた）る所（ところ）の方に隨（したが）ひ、願力（がんりき）の故（ゆゑ）を以て、蓮華（れんげ）を化現（け）して其（その）の上に坐（ま）せり。

爾（そ）の時に、西方（さいぱう）に、此（こゝ）を去（い）ること七十二億那由他（にじふにじやくにやうた）百千の佛刹（ぶつせき）を過ぎて、世界（せかい）あつて摩尼藏（まにざう）と名（な）け、彼（か）に現（あら）に佛（ぶつ）あつて摩尼積王（まにじやくわう）と號（ごう）せり。其の佛の刹土（せきつち）は清淨（じやうじやう）にして、瑠璃（るり）にて成就（じやうじゆ）せらる。聲聞（しやうもん）・辟支佛（びやくしふつ）ある無く、唯是れ清淨（じやうじやう）なる大菩薩衆（だいぼさうじゆう）にして、去（い）・來（きた）と坐（ま）・立（た）とに、瑠璃（るり）の地（ち）に於て咸（かん）く如來（に）の分明（めいめい）に顯現（けんげん）するを見ること、明鏡（めいけう）の中に於て其の面像（めんざう）を見るが如し。是の諸の菩薩も、彼の地の中に於て佛世尊（ぶつせそん）を見ること亦復（また）是くの如し。見（み）已（お）つて法（はふ）を請（こ）ふに、佛便（ぶつべん）ち説（しやく）くを爲（な）さく。往昔（わうしやく）の大願（だいがん）にて、彼の諸の菩薩は法（はふ）を聞いて忍（にん）を得（え）たればなり。と。爾（そ）の時に、如來（に）は眉間（まゐけん）の毫相（ごうしやう）の摩尼寶中（まにぼうちゆう）に於て、大光明（だいこうめい）を放（は）つて遍（へん）く彼の刹（せき）を照（しやう）すに、其の中に在（あ）る所の日月（にちげつ）の光明（こうめい）は映蔽（えいへい）して現（あら）ぜず。華（け）の開合（けいあひ）を以て晝夜（しゆくや）と爲（な）せり。彼の刹（せき）中に於て、一（ひと）の菩薩（ぼさつ）の勝智願（しやうぢがん）と名（な）くるありしが、斯（か）の光（ひかり）に遇（あ）ひ

【一】忍。安住の忍なり。第一卷忍の解、参照。

彼に現に佛あつて師子勇奮奮迅と號し、無量の大菩薩衆に爲つて恭敬し圍繞せられたり。彼の衆中に於て、一の菩薩あつて、名けて寶掌と曰へり。何の義の故を以て、名けて寶掌と爲すか。謂はく。彼の菩薩は、諸の佛土に於て衆生を化する時に、右手を以て遍く若干の諸佛の世界を捫たんと欲するに、即欲する所に隨つて能く成辦し、其の手より佛法・僧の聲・施・戒・忍・進・禪・慧・慈・悲・喜・捨の聲を出すなり。是等の如き百千億那由他の法寶の聲を出せばなり。爾の時に、寶掌菩薩は、大光明を見、響歎の聲を聞き、彼の佛の所に詣り白して言はく。世尊、何の因縁を以て此の瑞あるか。と。佛言はく。善男子、北方に此を去ること九十六億那由他の佛利を過ぎて、世界あつて娑婆と名け、佛を釋迦牟尼と號せり。佛利の功德莊嚴の法門を演説するに、諸の菩薩を集めて、此の法を聞き功德を攝受せしめんと欲する爲めの故に、斯の瑞を現すなり。と。寶掌菩薩は佛に白して言はく。世尊、我等も娑婆世界に往きて、釋迦如來及び諸の菩薩に禮觀し供養せんと欲し、并に法を聽かんと欲す。と。佛言はく。善男子、寧ぞ用て去ることを爲さん。何を以ての故に。彼の娑婆世界は、三毒の苦惱を具足せる衆生の聚集する所なればなり。と。寶掌菩薩は佛に白して言はく。世尊、彼の釋迦如來應正等覺は、何の義利を見て、嚴淨の刹を捨てて穢土の中に現ざるか。佛言はく。善男子、彼の佛如來は、昔長夜に於て是くの如き言を作せばなり。願はくば、我れ速に大悲を成辨するを得て、常に弊惡の衆生の中に於て、等正覺を成じ妙法の輪を轉ぜん。と。寶掌菩薩は、復佛に白して言はく。世尊、彼の釋迦如來は、乃ち能く往昔是の大悲難發の願を發して、此くの如き惡世界の中に現じたまはば、是くの如き慈尊には甚だ遇ひ難しと爲せば、我れ今當に往いて禮觀し供養すべし。と。佛言はく。爾るべし。今正に是れ時なり。然れども、善男子、汝彼の土に詣らば、應當に謹んで察して、自を毀傷すること無かれ。所以は何ぞ。彼の世界に生ぜる諸の菩薩等には遇ひ難しと爲すと雖も、其餘の衆生の心行は、險諛にして調伏すべき難ければなり。と。寶掌白して

【一〇】長夜。衆生の、生死界に流轉して、長く無明の眠の覺めざる間を、喩言して云ふ。

菩薩藏の法門の陀羅尼金剛句と名けたるを説けり。時に彼の會衆は、咸く念言を作さく。一切の諸法は、但其の聲あるのみ。何を以ての故に。即ち法上菩薩の如くに、身相を見ずして但其の聲を聞けばなり。此の聲にも體無くして、彼の身相の如くに、既に見聞を離れたるを則ち法性と爲すと。此の法を説ける時に、會中の無量の得忍の菩薩は、遙に彼の土の法上菩薩を見、又此の刹の佛の光明を放ち、及び其の聲の彼の界に暨べるを聞きしが、彼の諸の菩薩は、即時に共に集吉祥王如來の所に詣り、佛足を頂禮し、却いて一面に住し、法上菩薩は佛に白して言はく。世尊、何の因縁を以てして此の瑞を現したるか。未曾有なり。と。佛言はく。善男子、西方に、此を去ること八十四恒河沙の等の佛刹を過ぎて、世界あつて、娑婆と名け、彼に現に佛あつて釋迦牟尼と號せり。十方世界の諸菩薩を召集せんと欲する爲めの故に、一切の毛孔より此の光明を放ち、響歎の聲に及べるなり。と。法上菩薩は佛に白して言はく。世尊、我れ今娑婆世界に往きて、釋迦如來及び諸の菩薩を禮觀し供養せんことを欲し、并に法を聽かんと欲す。と。佛言はく。往くべし。今正に是れ時なり。と。爾の時に、法上菩薩は即是の念を作さく。今我れ何の神變を以て、彼に往いて釋迦如來に禮觀せんか。と。是の念を作しじるや、即一切莊嚴身の三昧に入り、是の三昧の威神力の故に由り、此の三千大千世界の中に滿てる妙華をして、積つて膝に至り、百千の音樂を同時に俱に作り、寶の幢幡・蓋を種種に莊嚴し、復妙香を以て普く此の界に熏ぜしむること、猶他化自在天の宮の如くなり。是の時に、法上菩薩は神變を現しじつて、即六十三億の大菩薩衆の與めに前後に圍繞せられ、譬へば壯士の臂を屈伸する頃の如くに、彼の土より没して此の界の中に現じ、如來の所に到り、頭面にて足を禮し、右に遶ること三匝し、來りし所の方に隨ひ、願力の故を以て、蓮華を化現して其の上に坐せり。

爾の時に、南方に、此を去ること九十六億那由他の佛刹を過ぎて、世界あつて離塵と名けたり。

【九】娑婆(Svaha)。又索訶と書し、忍土と譯す。此の世界の衆生は、諸の煩惱に安忍(發生の義)し及び此の世界の菩薩の、諸の苦惱を堪忍(耐受の義)するに由つて名く、これに雜會の義ありとなすは原語を(三三三)會と看做したるが爲めなり。

ありしが、皆共に普闍崛山に往き詣り、如來の所に到つて佛足を頂禮し、退いて一面に坐せり。是に於て、舍利弗は、佛の威神を承け、座よりして起ち、偏に右肩を初き右膝を地に著け、合掌恭敬して佛に白して言はく。如來は、前に已に王舍城の塵肆の内に於て、摧過咎の爲めに、略して菩薩摩訶薩の功德と清淨の佛刹を莊嚴するとを説きたまへり。善い哉、世尊。惟願はくは、廣く諸の菩薩の、不退轉なる菩提の行を行じて、諸の煩惱を息め、佛刹を嚴淨し、大願を圓滿し、具足して諸の波羅蜜を修行して、聲聞・辟支佛の地を遠離し、如來の行ぜる所の跡を履踐し、衆鷹を降伏し、諸の外道を制し、一切智を具して妙法の輪を轉じ、是くの如くに、菩薩は、乃至、未だ一切種智を得ざれども、而も能く決定して無量の衆生を利益し安樂にする如きを説きたまへ。世尊、今此の會中にて菩提を求めんとする善男子・善女人は、是の法を聞き已らば、歡喜して修行せん。と。時に、世尊は是の思惟を作さく。今我が説く所は、但現前の會衆の爲めのみならず。是の故に、宜しく應に神變を示現すべし。と。是の念を作し已るや、百千億の妙色の光明を放つに、一一の光明は、普く十方の百千億の土を照し、彼の諸の佛土に有る所の日月・天龍・摩尼・電火は、光明の映蔽にて現れず。而して彼の一切の大小の圓山・須彌山王及び餘の諸山・叢林・樹木も、佛の光明に爲つて鑿徹せられて、影を現し能ふ無し。是の時に、如來は復威徳なる聲效の聲を現すに、其の聲遍く十方の世界に聞えたり。

爾の時に、東方に、此を去ること八十四恒河沙の等の佛刹にして、世界あつて普光明と名け、彼に現に佛あつて集吉祥王と號せり。而して彼の佛刹には、聲聞・辟支佛の名ある無く、唯是れ菩薩のみ其の土に充滿し、一一の菩薩に、各百億の不退の菩薩あつて眷屬たり。時に、彼の衆中に一の菩薩あつて、名けて法上と曰へり。何の義の故を以て、名けて法上と爲すか。謂はく。彼の菩薩は、衆會の前に於て説法を聞き已るや、虚空に上昇すること高さ七多羅樹にして、自ら其の身を隠して、

【七】一切種智。一切種の法の實相に遍達せる佛智にして、一切智智と同じ。又、法の平等を觀する一切智に對するときは、法の差別相を觀するを一切種智と名く。

【八】圓山 (Gahruvān, Gah-kavān)。輪圍山の略、金剛輪山、鐵圍山に同じ。

過ぎて、此の世界に於て當に成佛することを得て、寂靜調伏音聲と號し、劫を離熱惱と名くべく、彼の佛の刹土の功德・莊嚴及び聲聞・菩薩の衆も、亦不動如來の妙喜世界の如くに、等しうして差別無ければなり。と。

是の時に、世尊は、諸の比丘と阿闍世王の宮に到り已つて、各次第に隨ひ座を敷いて坐せり。時に、王は、即ち種種の飲食を以て、手自ら斟酌して、世尊及び比丘僧に供養して悉く充足せしめ、復上妙なる衣服を以て如來に獻じ奉り、即ち佛前に於て卑き牀に處り、坐して佛に白して言はく。世尊、忿恨・瞋惱、何從りして生じ、愚癡無智は何に由つて滅するか。と。佛は大王に告ぐらく。忿恨・瞋惱は我と我所とにて生ず。若し功德・過失及び我と我所とを知ること能はざるを名けて無智と爲し、若し實の如くに彼の我と我所を知らば、此れ即智に非ず、非智にも非るなり。大王當に知るべし、一切の諸行は來るに從る所無く、去るに至る所無きことを。若し來・去無くば則ち生・滅無く、若し生・滅無くば彼の智も無智も亦復無し。何を以ての故に。少法として能く生と非生とを了知することある無ければ、若し能く知るを離れば、是れを知ると爲せばなり。と。時に、阿闍世王は、佛に白して言はく。世尊、希有なり。應正等覺、是くの如き善説は。我れ今寧ろ法を聞きて中天すべくとも、徒に生きて壽命の相續することを願はじ。と。

爾の時に、世尊は、阿闍世王の爲めに勸發開曉し、歡喜せしめ已り、座よりして去つて耆闍崛山に詣り、足を洗ひ已り座を敷いて坐し、三昧に入れり。是の時、如來は法施を爲さん故に、晡時の間に於て三昧より起つに、諸の大菩薩及び聲聞衆も皆定より出でたり。是に於て、文殊師利は四萬二千の菩薩衆に趣ける諸の天子と俱に、彌勒菩薩は五千の菩薩衆と俱に、勇猛雷音菩薩は五百の菩薩衆と俱に、是くの如き一切の菩薩及び諸の聲聞、并に阿闍世王は、各眷屬の前後に圍遶せるを將ゐて、如來の所に詣り、佛足を頂禮して、退いて一面に坐せり。時に、王舍城に復無量百千の衆生

菩薩は、是くの如くに此の行を修する時にも、亦一切の衆生を捨離せざるなり。何を以ての故に。是れ菩薩は、自の觀する所の如くに衆生の爲めに説けども、而も亦法及び衆生に著せざればなり。善男子、是れを菩薩は一法を成就して速に阿耨多羅三藐三菩提を得、亦佛刹をして圓滿を具足せしむと爲すなり。と。此の法を説ける時に、推過咎菩薩は無生忍を得、歡喜踊躍して、虛空に上昇すること高さ七多羅樹にして、彼の衆中に於ける二千の衆生は菩提心を發し、一萬四千の諸天及び人は遠塵離垢して、諸法の中に於て法眼淨を得たり。是に於て世尊は、照怡して微笑せるに、其の面門より種種の色光を放つて無量の世界を照し、照し已るや還り來つて、佛を遶ること三匝して頂より入り入り。

是の時に、阿難は即座より起つて衣服を整理し、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、世尊の前に於て頌を説いて曰はく。

自在力の導師 諸法の彼岸に到りたまへる 一切智の人尊 何の緣にて微笑を現したまへる

善逝十力の尊 能く諸の利益を爲し 三世に悉く明達したまへり 何の緣にて微笑を現したまへる 衆生の心行の 上中下の差別を了し 諸想を知りたまへること無礙なれば 願はくば佛宣説を爲したまへ 億那由の諸天は 咸く來つて佛を頂禮せり 願はくば微妙の音を發

して 諸の渴仰を充濟したまへ 勝定は彼岸に到り 智慧も亦復然く 錯謬に遠離したまへり 何の緣にて微笑を現したまへる 百千の諸の天衆は 法の爲めの故に來集し 無量な

る諸の比丘は 合掌して皆聞かんことを願ひ 種種の音樂を奏じて 如來を供養したたまつる 善い哉佛世尊 願はくば衆の疑惑を決したまはんことを と。

佛、阿難に告ぐらく。汝今、此の推過咎菩薩の虛空に昇れるを見しや、不や。阿難。白して言は

く。唯、然り、已に見たり。佛言はく。善男子、此の推過咎は、後に却くこと六萬二千阿僧祇劫を

時に、王舍城に菩薩あつて、長者の子にして、推過咎と名けしが、里巷の中に於て、遙に世尊の相好を觀るに、奇特・端嚴・澄暉に、諸根湛寂にして、觀る者厭くこと無く、奢摩他に住して最上に諸根を調伏し防護せること、善く調ぜる象の如く、正念にして亂れざること淨き淵池の如く、三十二相にて其の體を莊嚴せり。彼の菩薩は、既に是れを見已るや、極尊重なる淨信の心を生じ、便ち佛の所に往きて、雙足に稽首し、右に遶ること三匝して、却いて一面に住れり。復無量百千の衆生あつて、同じく佛所に詣り、無數の諸天は虚空の中に住して、合掌して恭敬し尊重し頂禮せり。

爾の時に、推過咎菩薩は、佛に白して言はく。世尊、菩薩は、幾法を成就せば、速に阿耨多羅三藐三菩提を得て、其の願する所に隨ひ佛刹を嚴淨するか。と。是に於て、世尊は、諸の衆生を調伏せんと欲する爲めの故に、推過咎を哀愍せんと欲する爲めの故に、塵肆に往き詣り、大衆の中に於て之れに告げて言はく。善男子、菩薩は一法を成就せば、速に阿耨多羅三藐三菩提を得、其の願する所に隨ひ佛刹を嚴淨せん。善男子、何を一法と謂ふか。此に菩薩は、一切の衆生に於て大悲を行はん故に、勝れたる志樂を以て菩提の心を發すなり。云何なるを名けて、勝れたる志樂を以て菩提の心を發すと爲す。應に是の說を爲すべし。若し已に菩提の心を發す者あらば、乃至、微の惡をも終まで更に作らざるなり。何を作らざる所ぞ。謂はく。貪・瞋・癡及び在家の威儀と調戲とを、悉く皆遠離するなり。若し出家し已らば、復と名利・恭敬を希望せずして、出家の修むる所の行法に安住するなり。云何なるは、出家の修むる所の行法なるか。謂はく。實の如くに一切の諸法に悟入するなり。云何なるは、悟る所の一切の諸法なる。謂はく。蘊・界・處と有爲・無爲となり。云何か悟入する。謂はく。五蘊は寂滅にして幻の如く、空にして有る所無きを觀察し、是くの如く悟る時に、悟することをも見ずして、覺する無く思ふ無く、一切の分別の悉く皆寂滅するなり。若し諸蘊に於て是くの如くに悟入せば、即ち一切の諸法に悟入すと爲し、是れを出家の修むる所の行法と名く。

【六】推過咎。
異譯本「文が師利佛土嚴淨經
(西賢・法法誦、譯)」には棄
惡とあり。

の主と爲り 資財増廣にして量ある無く 眷屬色相悉く倫に超えんと欲せば 彼れ應に釋師
子に供養すべし 已に解脱を得及び當に得べきは 皆佛の寂靜の法を聞くに由れど 彼の
勝尊に値遇すべき難ければ 應に甘露無憂の句を聽くべし と。

爾の時に、王舍城中の男女・長幼・無量の衆生は、此の頌を聞き已るや、即皆開悟して、各香華・
寶蓋・幢幡・無量の音樂を齎して如來の所に詣り、一心に瞻仰し、踊躍歡喜して恭敬供養せり。

是に於て、世尊は將に城に入らんと欲して、足門閭を踏むや、城中の地は六種に震動して、衆の
妙華及び諸の音樂を雨し、城中の衆生の盲せる者は視ることを得、聾せる者は聞くことを得、狂
せる者は心を得、裸なる者は服を得、飢えたる者は食を得、貧しき者は財を得たり。時に、彼の衆
生は亦復、貪欲・瞋恚・愚癡・憍慢に爲つて逼惱せられずして、慈心にて相ひ向ふこと、猶父子の如く
なりき。

彼の樂音の中にて、頌を説いて曰はく。

十力の大丈夫 最勝なる人師子 物を利せんとして都城に入りたまへるに 群生は安樂を得て

盲聾は色を見るを得 聾聵は聲を聞くを得 顛狂は本心に復り 裸露は衣服を蒙り 飢渴は珍

膳に遇ひ 貧窶は資財を得たり 又虚空の中に於ける 諸天百千億は 同じく佛を供養せん

爲めに 競うて諸の樂音を奏す 具徳の十力尊 今此の城内に入りたまふに 城中六種に動

き 謂はゆる遍動等なるに 衆生は怖るる想無く 皆大歡喜を獲 而して今此の城中の 一切

諸の衆生は 貪恚癡 慳嫉に爲つて惱されずして 欣悅身に充遍し 慈念にて相ひ向へば 願

はくば佛速に城に入つて 諸の群品を安樂になしたまへ 世尊城に入りたまふ時に 普く大

光明を放ち 人天咸く樂を奏して 心意を悅暢す 是くの如き諸の奇特は 種種にして量あ

る無く 天人と阿修羅と 皆瞻奉せざる莫し と。

輪の如くにして、白銀を華と爲し、黄金を葉と爲し、毘瑠璃寶を以て其の鬚と爲し、華臺の中に於て、化菩薩あつて結跏趺坐せり。是の諸の菩薩は、寶蓮と俱に王舍城を遶き、右に旋ること七匝して、頌を説いて曰はく。

釋種應供大商主 含識を利樂して安隱ならしめんとて 大威徳寂靜心を具し 世の依怙として

當に城に入るべし 若し老死の苦を遠離し 或は樂んで天宮に遊戲せんと欲し 或は諸の魔

軍を破らんと欲するあらば 應に妙辯なる人中の主に近くべし 名を聞くことをも得難きに

今出現したまへるは 百千劫を経て衆の行を修め 大悲心を以て世間に遊ばんとてにて 如是

の尊は當に城に入りたまふべし 曾て無量無邊の捨を行じ 男女妻室及ひ王位 頭目耳鼻并

に手足 衣服飲食にも亦復然く 已に無量の施の功徳を修め 無上の一切智を證し 施を以て

心を調じ其の行を固め 戒淨く缺くる無き大丈夫 無量の忍の功徳を成就して 心恒に恬恬に

して當に城に入りたまふべし 俱胝劫に勝れたる精進を行じ 衆生の苦を念じて疲倦を忘れ

無量なる無比の禪を具足して 彼の梵音者は當に城に入りたまふべし 智慧無量にして倫

匹無きこと 猶虚空の邊際無きが若き 最勝なる人尊には戒も亦然く 備に衆行を修めて智清

淨に 魔軍を摧壞して能く濟拔し 無憂不動の位に住するを得たまへる 無等の法王法輪を轉

ぜんと 彼の釋師子は當に城に入りたまふべし 若し成佛して世に出興し 三十二相以て莊

嚴せんと欲せば 應に無等の菩提心を發して 如來の所に於て供養を興すべし 若し永く貪志

癡を捨て 及び諸の煩惱を遠離せんと欲せば 速に當に釋師子に親近して 種種なる諸の供

養を施し作すべし 若し速に釋梵王を成じて 各千の眷屬を常に隨從し 恒に天宮の諸の快

樂を受けんと欲せば 彼れ應に釋師子に親近すべし 四洲の聖輪王と爲り 願ふ所の七寶を

皆成就し 最勝なる千子の威く勇健なるを欲せば 應當に彼の勝尊を供養すべし 長者邑中

卷の第五十八

唐 實 又 難 陀 漢 譯

文殊師利授記會 第十五の一

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は王舎城の普闍崛山に在して、大比丘の衆一千人と俱なりき。

菩薩は八萬四千にして、文殊師利菩薩・觀世音菩薩・得大勢菩薩は而ち上首たり。復七十一億の諸天の衆と俱なりしが、悉く皆菩薩の道に趣向せるものなり。復、四天大王・釋提桓因・梵天王等及び其の眷屬の各五萬二千の衆あると俱なりしが、亦皆菩薩の道に趣けるものなり。四の阿修羅王あつて、各眷屬の無量なる衆と俱なりき。復、七萬二千の大龍王と俱なりしが、其の名を「難陀龍王・優波難陀龍王・婆留那龍王・婆竭羅龍王・持大地龍王・無熱惱龍王・高勝龍王・伏魔龍王・最勝龍王・月上龍王」と曰ひ、是等の如きを而ち上首と爲せり。復、無量の夜叉王と俱なりしが、其の名を「金毘羅夜叉王・阿吒薄拘夜叉王・蘇支路摩夜叉王・妙意夜叉王・妙慧夜叉王・妙相夜叉王・普色夜叉王・不動夜叉王・有力夜叉王・大力夜叉王」と曰ひ、是等の如きを而ち上首と爲せり。時に、王舎城の國王・大臣及び諸の四衆・天・龍・夜叉・人非人等は、各衣服・飲食・臥具・醫藥・種種の資具を以て、如來の所に於て、恭敬尊重して供養を爲せり。

爾の時に、世尊は、晨朝の時に於て、衣を著鉢を持ちて、諸の比丘及び天人の百千の衆の與めに前後に圍遶せられて、王舎城の阿闍世の宮に向へるに、佛の威神力にて、百千種の妙色の光明を放ち、百千の音樂は同時に俱に奏し、衆の妙華を雨すに、優鉢羅華・鉢曇摩華・拘勿頭華・芬陀利華は續紛として下れり。是の時に、如來は神通力を以て、行く所の處に隨ひ寶蓮を涌き出さすに、大さ車

【一】難陀 (Nanda) 龍王。歡喜と譯す。

【二】優波難陀 (Upamanda)。善歡喜と譯す。以上の二龍王は兄弟にして、摩竭陀國に住みたりと云はる。

【三】婆留那 (Varuna)。水天又水神と譯す。

【四】婆竭羅 (Vasava)。海龍王と云はる。

【五】阿吒薄迦 (Ajakha)。阿吒薄迦と同じ。

佛の弟子に於て、善く根門を護ること最も第一を爲すか。と。佛言はく。此れは願力に由るなり。難陀苾芻は、迦葉波佛の時に於て、俗を捨てて出家するや、其の親教師として、彼の佛の法中にて善く根門を護ること、稱して第一と爲られ、其の形壽を盡すまで、梵行にて自ら持ちたり。然るに、現身に於ては、竟に證悟する無かりしかば、命終る時に於て、便ち誓願を發さく。我れ佛の所に於て、斯の形壽を盡すまで梵行にて自ら持ちたり。然るに、現身に於ては竟に證する所無ければ、願はくは、我れ此の修行せる善根を以て、此の佛世尊は、未來世に摩納婆あつて、當に正覺を成じて釋迦牟尼と號す。と記したまへば、我れ彼の佛の教法の中に於て、出家して俗を離れ、諸の煩惱を斷じて阿羅漢を獲、親教師として、斯の佛の所に於て善く根門を獲ること最も第一たりしが如く、我れ亦是くの如くに、彼の教中に於ても、根門を守護すること最も第一と爲らん。と。彼の願力に由つて、今我が所の諸の弟子の中に於て、善く根門を守ること最も第一と爲すなり。是くの如くに、苾芻、若し純黒の業ならば純黒の報を得、若し純白の業ならば純白の報を得、若し雜業ならば當に雜報を受くべければ、是の故に、汝等、純黒と雜との業を離れて、純白の業を修せん、是くの如くに應に修すべきなり。と。

【二九】 根門。眼耳等の五根は、種種の妄惑を入れ、種種の煩惱の煩惱を出すこと、門の如くなるに由り名く。

【三〇】 親教師 (Upajitaya)。略して親教と云ひ、又、舊譯には、和尚と云へり。親しく教を受くる師なり。

餘の妙涅槃界を證せり。時に彼の長者は、其の屍骸を取り焚くに香木を以ひ、復乳汁を持ちて其の火を滅し、餘身の骨を收めて新瓶の中に置き、窣堵波を造つて諸の旛蓋を懸け、深く敬信を生じつゝ三十種の衆の妙香水を灑ぎ、并に大願を發して諸の相好を求めたり。汝等、諦に聽きて異念を生ずる勿れ。往時の長者は、即ち難陀是れにして、勝妙なる供養を以て敬信せる業の故に由り、今果報を受けて三十の殊妙なる勝相を得得したるなり。と。

時に、諸の大衆は更に疑念をもち、重ねて世尊に請はく。大徳、難陀、難陀、何の業を作つて、若し出家して塵俗を棄てずんば、必ず當に力輪王の位を紹繼すべきか。佛は諸の苾芻に告ぐらく。難陀の先世に造りし所の業は果報熟する時に、必ず當に自ら受くべきことは、廣く上に説けるが如し。過去世の時、此の賢劫の中、人壽二萬歳なるに、迦葉波佛あつて世間に出現して、十號具足し、婆羅痾斯仙人の隱處たる施鹿林の中に在つて依止して住せり。時に、彼の城中の王を、訖栗枳と名けしが、法を以て世を化して大法王たりしことは、廣く上に説けるもの如し。王に三子あつて、大・中・小と謂へり。彼の迦葉波佛は、化を施す事畢るや、猶火の盡くるが如くに大涅槃に入りしが、其の王は信敬して、佛の遺身を取り、諸の香木——梅檀、沈水、海岸の牛頭天木、香等——を以てて焚燒し、既に訖つて滅するに香乳を以ひ、其の舍利を收めて金寶の瓶に置き、大窣堵波を造るに皆四寶を用ひ、縱廣正等に一踰繕那、高さ半踰繕那にして、相輪を安んぜり。時に、王の中子は、親ら中蓋を上げたり。汝等苾芻、異念を生ずる勿れ。時の王の中子とは、即ち難陀是れにして、昔時敬心にて供養し、中蓋を安置せる斯の善業に由つて、二千五百生の中に於て、常に力輪王と爲つて一洲の内を化するなれば、今此の生の中にも、若し出家せずんば、還力輪王と作つて大自在を得るなり。と。

時に、諸の大衆は、更に復疑をもちて世尊に請問すらく。大徳、難陀、難陀、曾て何の業を作つて、

【四】相好 (Tatparā)。佛の身體に於ける微妙の相形を相と云ひ、其の愛樂すべき細相を好と云ふ、而して、變化の佛身には三十二相・八十種好ありとし、報身佛には八萬四千、乃至、無量の相好ありとせらる。

【五】力輪王。勝力を以て四天下を自在に征伏し得る意に由り、轉輪人王を謂ふ。

【六】婆羅痾斯 (Varāṇasī)。訖栗枳 (Kāśī)。

【八】相輪。又輪相とも云ふ。塔の上の九輪の表相を謂ふ。

佛を請じて浴室の中に入れ、香湯もて澡浴し、淨心にて發願せる彼の善因に由つて、今佛弟と爲つて身は金色を作し、我れ、姪欲の境に耽著せるに於て、強ひて抜いて出でしめれば、俗を捨て家を出で、究竟涅槃して安隱の處に至れるなり。と。

時に、諸の大衆は、更に復疑を有ち、世尊に請うて曰はく。大德、難陀苾芻は、曾て何の業を作つて、今身に三十の大丈夫の相を得得したるか。と。佛は諸の大衆に告ぐらく。彼れの作りし所の業を廣く説くこと前の如くにせば、乃往過去に、聚落の中に於て一の長者ありき。大富、多財にして資生に乏しきこと無く、一苑園を有ちしが、華果茂り盛に、流泉・浴池・林木森聳し、出家の人の棲隱の處に堪へたり。時に獨覺あつて世に出現せしが、衆生を哀愍し、閑靜に處り、世間に佛無ければ唯此れのみ福田なりき。時に于て、一の獨覺尊者あつて、人の間に遊行して斯の聚落に至り、周旋・觀察して彼の園中に屆れり。其の守園の人は、既に尊者を見るや告げて言はく。善く來れり。勞倦を解くを爲せ。と。尊者は此に住せしが、即ち中夜に於て、火光定に入るに、園人見已つて是くの如き念を作さく。此の大德は斯の勝行を成す。と。即便に夜起き、往いて家尊に就いて告げて言はく。大家、宜しく今者に於て慶喜の心を生ずべし。苑園の中に於て、一の大德の來るあつて我れに投じて宿せしが、妙行を成就し、神通を具足し、大光明を放つて遍く園内を照す。と。長者聞き已るや、疾く園中に往き、雙足を禮し已つて、是くの如き言を作さく。聖者、仁、食を求めんと爲さば、我れ福田と爲らん。幸に此の園に住すれば、我れ常に食を施さん。と。彼れ慇懃なるを見て、即便に受くるを爲し、此の園内に住して、勝妙定の解脫の樂に入りしが、復是の念を作さく。我が此の臍身は、生死に輪廻して、應に作すべき所は並に已に獲得したり。宜しく圓寂に入り、永く無生を證すべし。と。是の念を作し已るや、即虚空に昇つて火光定に入り、諸の神變を現して大光明を放ち、上に紅輝を燭し下に清水を流し、此の身を捨て已つて、神識生ぜず、永く無

【三】 火光定。身より火焰を出す禪定を謂ふ。

【三】 識 (Paripanna)。心の、對境に對して、其れ區別し了知する作用を謂ふ。但し、此處に謂ふ神識は、心意・識全部、即ち精神該の者を指す。

王は是の念を作さく。佛來つて城に入りたまはば、我れ當に嚴飾すべし。然れども、我が之の弟の欲に耽つて諫め難きを、佛の今調伏したまへるは、實に誠に希有なり。とて答へて言はく。甚だ善し。汝今去いて、澡浴に須ふる所の物を營み辦すべし。我れ當に力に隨ひ、城隍を嚴飾すべし。と。弟は大喜を生じて、王に辭して去るや、王は諸臣に告げて曰はく。當に唱令して、普く諸人に告ぐべし。明日、世尊は將に城内に入りたまはんとすれば、諸べて舊住の者及び遠方より來れるも、汝等諸人、咸く當に力に隨ひ、城郭を嚴飾し、街衢を灑掃し、諸の香華を持ちて大師を迎へ入るべし。と。臣は王の教を奉じて、普く告げて知らしめ、具に王の勅を宣じたり。時に、諸の人衆は、彼の城中に於て、瓦礫を除去して遍く香水を灑ぎ、諸の妙香を燒き、衆の旛蓋を懸け、華を散じて供養すること、天帝釋の歡喜園の如し。時に彼の王弟は、諸の香湯及び香油等を辦じて浴室を莊嚴し、牀座を敷置したり。毘鉢戶佛の漸く城に至らんと欲するや、王及び諸臣・太子・后妃・宮人・姪女及び諸の人衆は、咸く出でて迎へ奉り、遙に佛足を禮し、隨從して城に入れり。時に彼の王弟は、佛世尊を引いて温室の内に入れ、香水等を授け以て澡浴に充て、佛世尊の身を見たてまつるに、金色の如くにして、三十二相、八十種好にて周遍に莊嚴せり。見已るや、歡喜して深き信心を生じ、洗浴既に竟つて衣服を著け已りたまふや、即便に世尊の雙足を頂禮して、是の願を發して言はく。我れ今、幸に最上の福田に遇ひ、微しく供養を伸べたり。願はくば、此の善因にて、未來世に於て身に金色を得ること、佛と異なるなからんことを。世尊の弟の、欲境の中に於て深く耽著を生ぜる如きを、強ゐて抜いて、出でて安隱なる究竟の涅槃に趣くを得しめたまへば、願はくば、我れも當來に佛弟と爲るを得て、金色の身を獲、亦復是くの如くに我れ欲境に於て耽著を生ぜる時には、強ゐて牽いて愛染の深河を出でしめて、涅槃の安隱なる處に趣くを得しめられたことを。と。汝等茲勿、異念を生ずる勿れ。彼の觀慧王の耽欲なる弟は、即ち難陀苾芻なることに。是れ昔同、毘鉢戶

親侍の大臣及び内宮の女・人民の翊從を將ゐて、佛の所に往き詣り、頂にて佛足を禮し、退いて一面に坐せり。爾の時に、世尊は彼の王衆の爲めに妙法を宣揚するに、示教利喜もて殊勝の解を得しめたり。其の弟は、欲に耽つて背て門を出づることせず。時に、大臣の子及び餘の知友、撫摩の類は、詣つて告げて曰はく。善友、知るや、不や、王及び王子并に諸の内宮・大臣の人衆は、毗鉢尸佛の所に往きて躬ら禮敬を行ひ、妙法を聽受して殊勝の解を得たることを。人身は得難きを、汝已に之れを得たるに、如何ぞ今時に姪欲に耽著して、背て門を出でざる。と。彼れ責を聞き已るや、心に愧耻を生じ、俛仰して相ひ隨ひ、同行して去けり。時に佛弟の苾芻は、諸の徒侶の共行して去くを見、問うて曰はく。何故に、君等は此の一人を將ゐ、同伴して去くか。と。時に彼の同伴は、具に事を以て白すに、苾芻曰はく。我れは是れ佛弟にして、昔家に在りし時、諸の欲境に於て極めて耽著を生じたるを、幸に大師の強ひて牽いて安隱に出でしむるを蒙り、將に究竟の涅槃に越かんとするなり。更には是くの如き愚癡の輩の、我れと相ひ似たるあるを、仁等慈悲もて、強ひて共に將に去くは、誠に大善と爲す。今無上の大師に往詣すべし。佛所に至るを得ば、必ず深信を生ぜん。と。時に彼の同伴は、共に佛所に至るに、佛は彼の類を觀、根欲の性に稱へて法を説くを爲せり。既に聞くを得已るや、深く信心を起し、座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ合掌して、佛に向つて白して言はく。世尊、惟願はくは、大師及び諸の聖衆の、明れば我が家に至つて、溫室に入り澡浴したまはんことを。と。佛の默然として受くるを、彼れは受けらるるを知り已るや。佛の雙足を禮し、辭を奉つて去り、遂に王の所に至り、恭敬を申へ已つて白して言はく。大王、我れ佛所に詣り、法を聞きて信を生じ、姪欲の境に於て厭離の心を起したれば、佛・僧を請じ、明れば我が家に至らせて、溫室に入れて浴せしめ奉らんとするに、如來大師は、慈悲もて受くることを爲したまへり。佛は是れ人天の衆に供養すべき所なれば、王今宜しく街衢を灑掃し、城郭を嚴飾すべし。と。

【一】示教利喜。諸佛・菩薩の説法教導する方便にして、示とは、生死と涅槃・善と惡・二乗と一乘の教・等を分別して示すを謂ひ、教とは、止惡・修行の果報の利益を諭すを謂ひ、喜とは、行者の行ずる所に隨ひ、讚嘆して喜ばせ勵すを謂ふ。

奉行せり。

難陀菟芻は、生死海の險難の處を越えて、能く安隱なる究竟の涅槃に至り、阿羅漢果を獲たれば、自慶の頌を説きて曰はく。

敬心もて澡浴の 淨水及び塗香を奉り 井に諸の福田を修めて 斯の殊勝の報を得たりと。

時に、諸の大衆は、是の説を聞き已つて、咸く皆疑をもち、疑を斷ぜん爲めの故に、大師に請うて曰はく。大德、難陀菟芻は、先に何の業を作り、彼れに由つて金色の身に 三十相を具して以て自ら嚴飾し、世尊の身に望むるに、但四指を少くのみを報ひ得たるに、姪欲の境に於て、極めて愛著を生ぜるか。大師は、生死海を哀愍し、強ひて抜いて出でしめんとて、方便して究竟の涅槃に安置したまへば、惟願はくは、説くことを爲したまへ。と。

佛は諸の大衆に告ぐらく。難陀菟芻の先に作りし所の業の果報の、成熟して皆悉く現前せることを、廣く説かば餘の如しとて、即ち頌を説いて曰はく。

假使ひ百劫を經とも 作る所の業は亡びず 因縁會遇する時に 果報還つて自ら受く。

汝等、諦に聽け。過去世の時九十一劫に、人壽八萬歳なるに、毗鉢尸佛・如來・應供・正等覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊あつて世に出現し、六萬二千の菟芻と、人間に遊行して、親慧城王の都せる所の處に至り、親慧林に往き、即ち此に於て住せり。時に、彼の世尊に異母の弟ありしが、姪欲の境に於て極めて愛著を生じたれば、其の毗鉢尸如來應正等覺は、生死の海に於て勧めて出家せしめ、方便して究竟の涅槃に安置せり。時に、彼の國王を名けて有親と曰ひ、法を以て世を化し、人民熾盛にして豊樂・安隱に、諸の詐僞・賊盜・疾疫無く、牛・羊・稻蔗は在處に充滿せしが、王の異母弟は極めて姪染に耽りたり。王は、佛衆の親慧林に住せるを聞き、諸の王子、

【九】三十相を具して。眉間の白毫相と、頂上の肉髻相とを缺くを謂ふ。

【一〇】世尊の身に望むるに、但、四指を少くのみ。經尊の身長一丈六尺なるに對して、難陀の一丈五尺二寸なるを謂ふ。

二 此れに各根本あつて 其の數亦四分せり 右脅の邊の肋骨は 相ひ連つて十三あり
 左脇も相ひ連り生じて 亦十三骨あり 此等の諸の骨銷は 三三相ひ續いて連り 二二相ひ
 鈎牽し 其の餘は相ひ續かず 左右の兩腿足に 合せて五十骨あり 總べて三百十六にて
 身肉を支へ柱ふ 骨節相ひ鈎綴して 衆生の體を合成するを 實語者は記説す 正覺の知る
 所と 足よりして頂に至るまで 雜穢と不堅牢と 此れに由つて共に身を成ぜば 脆く危き
 こと羣の舍の如し 稍無くして唯骨のみ立ち 血と肉とにて遍く塗り治めたれば 機關の木
 人に同じく 亦玄化の像の如し 應に此の身を觀すべし 筋脉更纏ひ繞り 濕皮相ひ裹み
 覆ひ 九處に瘡門あつて 周遍に常に 屎尿と諸の不淨とを流溢することを 譬へば倉と
 箒とに 諸の穀麥等を盛るが如く 此の身も亦是くの如くに 雜穢其の中に滿ち 運動する骨
 の機關も 危脆にして堅實に非るを 愚夫は常に愛樂すれども 智者は染著すること無し
 漬と唾と汗とは常に流れ 膿血は恒に充滿し 黃脂は乳汁に雜り 腦は鬻膜の中に滿ち 胸膈
 には痰膿流れ 内には生・熱の藏あり 肪膏と皮膜と 五藏諸の腸胃 是くの如き臭爛の等
 諸の不淨の同じく居る 罪身深く畏るべく 此れは即是れ怨家なるに 無識耽欲の人は 愚癡
 にして常に 是くの如き臭穢の身にして 猶朽ちたる城郭の如くなるを保護するなり 日夜
 に煩惱逼り 遷流して暫くも停ること無く 身は城骨は牆壁に 血肉は塗泥を作し 貪暱癡を
 畫彩とし 處に隨つて莊飾すれば 骨身の城に 血肉の相ひ連合せるをすら惡むべきに 常に
 惡知識を被つて 内外の苦にて相ひ煎るなり 難陀汝當に知るべし 我れの説く所の如くに
 晝夜に常に念を繫いで 欲境を思ふ勿く 若し遠離せんと欲せば 常に是くの如き觀を作せ
 勤めて解脱の處を求めて 速に生死の海を超えんと と。

爾の時、世尊の是の入胎經を説き已るや、具壽難陀及び五百の苾芻は、皆大に歡喜して、信受し

の、若しは遠の、若しは近の、有らゆる諸色——は、皆是れ我れに非ず、我れに色を有たず、色は我れに屬せず、我れは色の中に在らず。と、是くの如くに應に正念・正慧を以てして審に觀察すべし。受・想・行・識の、若しは過去、若しは未來、若しは現在、若しは内、若しは外、若しは麤、若しは細、若しは勝、若しは劣、若しは遠、若しは近なる此等も、亦是れ我れに非ず、我れも亦此等を有つに非ず、我れも亦此の中に在る非ず。と、是くの如くに應に正念・正慧を以てして審に觀察すべし。若し我が多聞の聖弟子衆にして、是くの如くに觀察せば、色に於て厭患し、復、受・想・行・識に於ても亦厭患を生じ、若く厭患し已れば即染著せず、既に染著無ければ即解脱を得、既に解脱し已れば、自ら解脱せるを知つて、是くの如き言を作さん。我が生は已に盡き、梵行は已に立ち、所作は已に辦じて、後有を受けじ。と。爾の時、世尊の此の法を説き已れる時に、具壽難陀は、遠塵離垢して法眼淨を得、五百の苾芻は、諸の有漏に於て心に解脱を得たり。

爾の時に、世尊は重ねて伽陀を説いて、難陀に告げて曰はく。

若し人定心無くんば 即清淨智無くして 諸漏を斷ずる能はず 是の故に汝勤修せよ 汝常に妙觀を修めて 諸蘊の生滅を知り 清淨にして若し圓滿ならば 諸天は悉く欣び慶せん

親友と共に觀を交へ 往來して相ひ愛念し 名を貪り利養に著することを 難陀汝應に捨つべし 在家に親近する勿く 及び出家の者に於て 生死の海を超え 苦の邊際を窮め盡さん

とを念ぜよ 初め羯羅藍よりして 次いで肉疱を生じ 肉疱は閉戸を生じ 閉戸は健南を生ず 健南暫く轉變して 頭及び四支を生じ 衆骨聚つて身を成ずるは 皆業因に従つて有るなり

頂骨合すること九片にして 頷車に兩骨連り 齒は三十二あつて 其の根も亦是くの如し 耳根及び頸骨 髑骨并に鼻梁 胸臆と咽喉とに 總べて十二骨あり 眼眶に四骨あり 肩隅も亦兩雙に 兩臂及び指頭に 總べて五十骨あり 項後に八骨あり 脊梁に三十

あり 肩隅も亦兩雙に 兩臂及び指頭に 總べて五十骨あり 項後に八骨あり 脊梁に三十

【八】 後有。死後、次生の生活果報を謂ふ。

の洲渚無く、別の歸處無しと謂ふなり。難陀、若し丈夫あつて、稟性質直にして詭誑を遠離して、曇朝の時に於て我が所に來り至るを、我れ善法を以て機に隨つて教示せば、彼れ暮に至つて自ら得る所を陳べん。暮に法を以て教へば、且に得る所を陳べん。難陀、我れ之の善法を現に證悟するを得たれば、能く熱惱を除き、善く時機に應じて方便を爲し易し。是の自覺の法を善く覆護することを爲し、親しく我が前に對して、所説の法を開きて寂靜に順ぜば、能く菩提に趣かんこと、是れ我れの知る所なり。是の故に、汝今、自利あるを見・他利あるを見・及び二つを俱に利する是の等の如き法を、應に常に修學すべし。出家の法に於て謹慎に之れを行じて、空しく過ぎしむる勿くして、當に勝果たる無爲の安樂を獲べし。他の供給せる衣食・臥具・病藥等の物を受けて、其の施主をして大福利を獲、勝果報たる尊貴・廣大を得しめよ。是くの如くに、難陀、應當に修學すべし。

復次に、難陀、未だ一の色として、是に愛樂すべきものある無し。能く後時に於て變壞せざることは、是の處あること無し。憂悲を起さず煩惱を生ぜざること、亦是の處無きことなり。難陀、汝が意に於て云何。此の色は、是れ常なりや、是れ無常なりや。大徳、體は是れ無常なり。難陀、體は既に無常ならば、是れ苦と爲すや、不や。大徳、是れ苦なり。若し無常・苦ならば、即ち變壞の法なるに、我が諸の多聞の聖弟子は、色は是れ我れなり、我れに諸色あり、色は我れに屬し、我れは色中に在りと計するや不や。白して言はく。不なり、世尊。汝が意に於て云何。受・想・行・識は是れ常なりや、無常なりや。大徳、皆是れ無常なり。難陀、體は既に無常ならば是れ苦なりと爲すや、不や。大徳、是れ苦なり。若し無常・苦ならば即ち變壞の法なるに、我が諸の多聞の聖弟子衆は、受等は是れ我れなり、我れに受等あり、受等は我れに屬す、我れは受等の中に在りと計するや不や。不なり、世尊。是の故に、應に知るべし、凡べて是の諸の色——若しは過去の、若しは未來の、若しは現在の、若しは内の、若しは外の、若しは麤の、若しは細の、若しは勝の、若しは劣

と知らば、即ち解脫と名くるなり。難陀、汝は我を信すること莫れ。我欲に隨ふこと莫れ。我語に依ること莫れ。我相を觀すること莫れ。沙門の有つ所の見解に隨ふこと莫れ。沙門に於て恭敬を生ずること莫れ。是の語をも作す莫れ。沙門、喬答摩は是れ我が大師なり。と。然り而して、但我が自證にて得る所の法に於て、獨り靜處に在つて思量し觀察すべし、常に多く修習して、心を、觀する所の法に用ふるに隨ひ、即ち彼の法に於ける觀想は成就して、正念にて住し、自ら洲渚と爲り、自ら歸處と爲り、法を洲渚と爲し、法を歸處と爲して、別の洲渚無く、別の歸處無きなり。難陀、云何なれば、苾芻は自ら洲渚と爲り、自ら歸處と爲り、法を洲渚と爲し、法を歸處と爲し、別の洲渚無く別の歸處無きこと是くの如きか。難陀、若し苾芻あつて、自らの内身に於て、觀に隨つて住し、勤勇に念を繫いて正解了を得ば、諸の世間の有らゆる悲惱に於て、常に調伏せんことを思はん。是れを内の身は是れ苦なりと觀するに隨ふと謂ふ。外の身及び内外の身を觀する如きにも、亦復是くの如し。難陀、次に集の法に於て、身を觀じて住し、滅を觀じて住し、復、集・滅の二法に於て、身を觀じて住し、即ち此の身に於て能く正念を爲さば、或は但の有の智、或は但の有の見、或は但の有の念には依る無くして住し、此の世間に於ては、取るべきもの無きことを知るなり。是くの如くならば、難陀、是れを、苾芻は自の内身に於て觀に隨つて住すと謂ひ、外身・内外身に觀を爲すことにも亦爾り。次に、内の受・外の受及び内外の受を觀じて住し、内の心・外及び内外の心を觀じて住し、内の法・外の法及び内外の法を觀じて住し、勤勇に念を繫いで正解了を得て、諸の世間の有らゆる悲惱に於て常に調伏せんことを思ひ、集の法を觀じて住し、滅の法を觀じて住し、復集滅の二法に於て法を觀じて住し、即ち此の身に於て能く正念を爲さば、或は但の有の智、或は但の有の見、或は但の有の念を、此の世間に於て取るべき無き知らん。是くの如くならば、難陀、是れを、苾芻は自ら洲渚と爲り、自ら歸處と爲り、法を洲渚と爲し、法を歸處と爲して、別

【六】 喬答摩(Gautama, Gotama)、羅曇と同じ。第一卷同名の解、參照。

【七】 内身。四人にて成立せる自己の身體を謂ふ。此れに對して、他人の身體を外身と稱す。

復次に、難陀、生死の有海は、苦なる哉、痛なる哉。猛焰の燒然、極大なる炎熱に、一の衆生として燒き煮られざるは無し。斯等は皆眼・耳・鼻・舌・身・意の熾盛なる猛火にて、前境の色・聲・香・味・觸法を貪求せるに由つてなり。難陀、云何なるを名けて、熾盛なる猛火と爲す。謂はく、是れ貪・瞋・癡の火にて生・老・病・死の火、憂悲・苦惱・毒害の火を生じ、常に自ら燒き然えて、一も免るを得る無きなり。難陀、憍怠の人の多く衆苦を受くるは、煩惱の嬰ひ纏りて不善の法を作せるにて、輪迴息まずして生死終無きなり。勤策の人の多く安樂を受くることは、勇猛の心を發して煩惱を斷除し、善法を修習して善軌を捨てず、休息の時無ければなり。是の故に、汝今應に此の身の皮肉・筋骨・血脉及び髓の、久しからずして散壞することを觀すべく、常に當に一心にて、憍怠を爲す勿く、未だ證得せざる者をば勤めて證悟せんことを求むべく、是くの如くに應に學ぶべし。難陀、我れ世間と共に諸の諍論を作さず。然り而して、世間は我れに於て強ひて、諍論を爲すなり。所以は何ぞ。諸べて法を知る者は他と諍はず。我、我所を離れたれば、誰れと共に諍を爲さん。見解もて妄執を起す無き故に由る。我れは正覺を證したれば是くの如き語——我れ諸法に於て了知せざる無し——を作すのみ。難陀、我が言ふ所の言説に差異ありや、不や。難陀言はく、不なり、世尊。如來の説には差異ある無し。佛言はく、善い哉、善い哉、難陀。如來の説く所には必ず差異無し。如來は是れ眞語者なり、實語者なり、如語者なり、不異語者なり、不誑語者なり。世間の長夜をして、安樂に大勝の利を獲しめんと欲すれば、是れ知道者なり、是れ識道者なり、是れ說道者なり、是れ開道者なり、是れ大導師なり。如來・應・正等覺・明行・足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊なるを、世間の人は知る無ければ信すること無く、常に諸根の與めにて奴僕と爲り、唯掌中を見て大利を觀せず、易き事をば修せずして難き者をば恒に作すなり。難陀、且く斯くの如き智慧の境界を止めて、汝今應に肉眼の見る所を以て、之れを觀察すべし。見る所の者は皆是れ虚妄なり

難陀、此く諸の有情の生れて人中に在るや、是くの如き無量の苦惱ありと雖も、然れども是れ勝處なり。無量百千俱胝劫の中に於ても、人身は得難ければなり。若しくは、天上に生れば、常に墮せんことを畏れ、愛別離の苦あれども、命終らんと欲する時には、餘の天は告げて言はく、願はくば、汝當に世間の善趣に生ずべし。と。云何なるは、世間の善趣なるか。謂はく、是れ人・天にして、人趣の得難く難處を遠離することは、更に復是れ難きなり。云何なるは惡趣なるか。謂はく、三惡道なり。地獄趣は常に苦の切なるを受けて、極めて不如意の猛利なる楚毒は、譬喩すべき難し。餓鬼の趣は、性頓患多くして柔軟の心無く、詔誑し殺害し血を以て手に塗り、慈悲ある無く、形容醜陋にして見る者恐怖し、設ひ人に近きものも、飢渴の苦にて恒に障礙せらるるを受く。傍生の趣は、無量無邊に無義の行・無福の行・無善の行・無淳質の行を作して、互に相ひ食啖して、強き者は弱きを凌ぐ。諸の傍生の、若しは生じ若しは長じ若しは死すること、皆暗中・不淨の糞尿・垢穢の處に在つて、或は時に暫く明なるのみ。謂はゆる蜂・蝶・蚊・蟻・蚤・虱・蛆蟲の類なり。自餘に復無量無邊なるあつて、常暗に生長す。彼れの先世は是れ愚癡の人にして、經法を聽かず、身・語・意を恣にし、五欲に貪著して衆の惡事を造りしに由つて、此の類の中に生れて愚迷の苦を受くるなり。難陀、復、無量無邊なる傍生の有情あつて、生長及び死は皆水中に在り。謂はゆる魚・鼈・瀆鼈・蟬蛭・蚌蛤・蠃蟁の類にして、先世の業の身・語・意の惡に由ること、上に廣く説くが如し。難陀、復無量無邊なる傍生の有情あつて、屎尿の香を聞くや、速に其の處に往いて以て食飲を爲すなり。謂はゆる猪・羊・雞・犬・狐・猪・驢・騶・烏・蠅・蛾・蠟の禽獸の類にして、皆先生の惡業の招く所に由つて、是くの如き報を受くるなり。難陀、復、無量無邊なる傍生の類あつて、常に艸木及び諸の不淨を以て其の飲食に充すなり。謂はゆる象・馬・駝・牛・驢・騾の屬にして、乃至、命終つて、先の惡業に由つて、是くの如き報を受くるなり。

放逸を爲さず、少しく智慧あつて、臨終に悔無くば、或は是れ七生の預流、或は是れ家家、或は是れ一來、或は是れ一間なり。此の人は、先に善行を修すれば、命終の時に臨んで、苦は來り廻り諸の痛惱を受くと雖も、心は散亂せず。復還正念にて母の胎中に入り、諸法は業に由つて生じ、皆因縁よりして生起するを得ることを了知するなり。廣く説かば上の如くにして、乃至、胎を出づるに、是くの如き諸の極りたる苦楚を受くと雖も、是れ中の利根なる故に由つて、入り住するに正念なれども、不正念にて出づることは、廣く説かば上の如し。乃至、誰れか當に、是くの如き胎中に入ることを樂ふべき。

難陀、誰れか是れ正念にて入胎し、不正念にて住し出づる。難陀、如し一類の凡夫の有情あつて、性持戒を樂み、善品を修習し、常に勝事を爲し、諸の福行を作し、廣く説かば上の如くにして、乃至、臨終に悔無くば、或は是れ七生の預流等なり。命終の時に臨んで、衆苦來り逼つて痛惱を受くと雖も、心散亂せず。復還正念にて母の胎中に入るに、是れ下の利根なる故に由つて、入胎の時には知れども、住と出とは知らざるなり。廣く説かば上の如くにして、乃至、誰れか當に、是くの如き胎中に入ることを樂ふべき。

難陀、誰れか是れ入と住と出とに、俱に不正念なる。如し一類の凡夫の有情あつて、淨戒を毀つことを樂み、善品を修めず、常に惡事を爲し、諸の惡行を作り、心質直ならず、多く放逸を行ひ、智慧ある無く、財を貪り、慳吝にて手を常に拳縮して濟惠を人に舒展する能はず。恒に希望あつて心調順せず、見は轉倒を行じて、臨終に悔い恨み、諸の不善の業にして皆現前せば、死する時に當つて、猛利なる楚毒・痛惱逼切して其の心散亂し、諸の苦惱に由つて、自ら、我れは是れ何人にして、何よりして來り、今何處に去るかを憶ひ識らざるなり。難陀、是れを三時に皆正念無しと謂ひ、廣く説かば上の如きなり。

を被るが如く、亦火にて炙らるるが如くにして、堪へ忍ぶべき難きは能く噉を爲す無きなり。難陀、彼の胎は、是くの如き糞穢の坑中に在つて、衆多の苦は切なりと雖も、利根なる故に由つて、心は散亂せざるなり。復、一類の薄福の有情あつて、母の腹内に在るや、或は横となり或は倒るるは、其の先業の因縁力に由る故なり。或は母の冷・熱・鹹・酸・甘・辛・苦の味、不善の調を食ふ故に由り、或は漿水を飲むこと量に過ぎ、或は多く姪欲を行ひ、或は疾病儲く、或は愁惱を懷き、或は時に地に倒れ、或は打拍せられ、是等の縁に由つて、母の身の壯に熱するや、身の熱する故に由つて胎も亦燒然し、燒然に由る故にて諸の苦惱を受け、是の苦に由る故にて便即ち動轉し、動轉に由る故にて或は身は横に覆つて出づるを得る能はず。善く解せる女人あつて、酥油を以て手に塗り、母の腹中に内れて、緩緩に胎に觸れて本處に安んぜしむるに、手の觸れ著く時に、胎子は即便に大苦惱を受くるなり。難陀、譬へば幼少の男女の人を、利刀を以て皮肉を削り破り、灰を上散すに、斯れに由つて便ち有つ大苦惱の如く、胎子に生ずる楚毒も亦復是くの如し。此の痛を受くと雖も、利根なる故に由つて正念は散ぜざるなり。難陀、此の胎は、是くの如くに、母の腹中に住して斯くの如き苦を受け、又産れんと欲する時に辛苦して出づるに、彼の業風に由つて、手をして交り合はしめ、支節拳縮して大劇苦を受け、母胎を出でんと欲するや、身躰青瘀にして、猶初めて腫れたるに觸著すべき難きが如く、飢渴逼迫しつこ熱惱に懸るなり。業因縁に由り、風に推し出されて、既に胎を出で已つて外風に觸れるるや、塗炭を割るが如く、手衣の觸るる時にも、皆極苦を受くるに、此の苦を受くと雖も、上利の根なる故に由つて、正念は亂れざるなり。母の腹中に於て、入・住・出は悉く皆是れ苦なるを知らば、難陀、誰れか當に是くの如き胎中に入ることを樂ふべき。

難陀、誰れか是れ母の腹に於て、正念にて入り住し、不正念にて出づる。難陀、如し一類の凡夫の有情あつて、性持戒を樂み、善品を修習し、常に勝事を爲し、諸の福行を作し、其の心質直にして、

づるなり。三には、正念にて入り、不正念にて住し、出づるなり。四には、三つ皆不正念なるなり。誰れか是れ正念にて入り、住し、出づる。如し一類の凡夫の有情あつて、性持戒を愛し、數善品を習ひ、樂うて勝事を爲し、諸の福行を作し、極善に防護し、恒に質直を思ひ、放逸を爲さず、大智慧を有つて、臨終に悔無くば、即便に生を、或は是れ七生預流、或は是れ四家、或は是れ一來、或は是れ一間に受けん。此の人は先に善行を修めたる故に由り、命過る時に臨み、苦は來り逼つて諸の痛惱を受くと雖も、心散亂せず正念にて終り、復還正念にて母の胎内に入り、諸法は業に由つて生じ、皆因縁よりして生起するを得、常に諸魔の與めに居止の處とすることを了知するなり。難陀、應に知るべし、此の身は、恒に是れ一切不淨の窟宅にして、體は常住に非るに、是の愚癡の物は、誘誑して人を迷はすことを。此の身は、骨を以て機關と作し、筋脉相ひ連つて諸の孔穴を通じ、脂肉・骨髓共に相ひ纏縛し、皮を以て上を覆ひて其の過を見せざれども、熱窟の中に於て不淨は充滿し、髮毛・爪齒の分位して差別せるに、我・我所を執する故にて、恒に拘牽せられて自在を得ざるなり。常に涕・唾・穢汚の流汗・黃水・痰癢・爛壞の脂膩・腎・膽・肝・肺・大腸・小腸・屎尿の惡むべきを出し、及び諸の蟲類は周遍に充滿し、上下の諸孔には常に臭穢を流し、生・熟の二藏は蓋ふに薄皮を以てすれど、是れ謂はく、行廁なりと、汝應に觀察すべし。凡べて食噉する時は、牙齒もて咀嚼し、濕すに涎唾を以てして喉中に嚥み入れ、髓腦相ひ和して腹内に流津するは、犬の、枯骨を咬んで、妄に美想を生ずれども、食うて隣間に至るや、嘔きて逆に上に覆し、還つて復咽に却けたるもの如し。難陀、此の身は、元羯羅藍・頸部陀・閉尸・健南・鉢羅香佉の不淨の糞物よりして生じ長ずるを得たれば、嬰兒より流轉して、乃至、老・死まで輪迴する繫縛は、黑闇の坑の如く、臭壤の井の如くなり。常に鹹・淡・苦・辛・酸等の食味を以て資養と爲し、又母の腹火にて燒煮すれば、身根は不淨の糞鍋にて常に熱苦に嬰れたり。母若し行・立・坐・臥する時には、五つの縛

【三】七生預流。預流果の聖者は、後に人界と欲天との各七生を受くるのみなるに依り、同果の位を謂ふ。

【四】家家。聖閉の位の一來向中にて前の七生中の五生までを人家天家と轉生する義に由つて同向の位に名く。

【五】一間 (Ekavajika)。斷一間ともあり、聖閉の位の不還向中にて、一種の聖者の、欲界の修惑の猶一品を餘して、更に一度欲界の生を受くるため、不還果と一間を隔つるに由り名く。

の如き痛苦あり。復百一の風病・百一の黃病・百一の痰癘病、百一の總集病あり、總べて四百四病あつて、内よりして生ずれば、難陀、身は癭と筋と如くなり。衆病の成する所も、暫時の停も無く、念念に住せざれば、是れ無常・苦・空・無我なるを體し、恒に死敗壞の法に近けば、保ち愛すべからず。難陀、凡べて諸の衆生に、復是くの如くに生きて受くる苦痛あり。謂はく、手・足・眼・耳・鼻・舌・頭及び支分を斬られ、復、獄囚・枷鎖・杵械・鞭打・拷楚・飢渴の困苦、寒熱・雨雪・蚊虻・蟻子・風塵・猛獸及び諸惡の觸を受くるなり。種種の諸惱の無量無邊なることは、具に説くべき難きに、有情の類は、常に是くの如き堅韌なる苦の中に在つて、愛樂し沈没し、有らゆる欲する所のは、苦を根本と爲せるに、棄捨することを知らずして更に復追求し、日夜に前迫して身心惱を被り、内に燒然を起して休息ある無きこと、是の生の苦・老の苦・病の苦・死の苦・愛別離の苦・怨憎會の苦・求不得の苦・五取蘊の苦の如し。四威儀の中の行住坐臥も、亦皆是れ苦にして、若し常に行く時には、立ち坐し臥されずして、即ち苦を受けて樂無く、若し常に立つ時には、行き坐し臥されず、若し坐せば、行き立ち臥されず、若し臥せば、行き立ち坐せられずして、皆極苦を受けて安樂無きなり。難陀、此等は皆是れ苦を捨てんとて苦を求めたるにて、唯是れ苦の生、唯是れ苦の滅にして、諸行の因縁相續して起るものなることを、如來は了知せるが故に、有情の生死の法は、諸行無常にして眞の究竟に非ず、是れ變壞の法にして保ち守るべからざれば、當に知足を求め、深く厭患を生じて、解脫を勤求すべきことを説くなり。難陀、善趣の中に於ける有情の類の生處にてすら、不淨・苦劇なることは是くの如く、種種に虚誑なることを説くとも盡すべからず。何に況んや、具に三惡趣たる餓鬼・傍生・地獄の有情の、受くる所の楚毒・忍び難き苦を説くことをや。

復次に、難陀、其の四種あつて母體に入るなり。云何なるを四と爲す。一には、有情は正念にて入り、正念にて住し、正念にて出づるなり。二には、正念にて入り、正念にて住し、不正念にて出

するあること無し。假に藥食をして、壽命を資養して年歳を延ぶることを得しむとも、終には死王に殺さるるを免れずして、送られて空田に往くに歸するなり。是の故に、當に知るべし、生は樂むべき無ければ、來世の資糧をば、應に勤めて積集すべきことを。放逸を作す勿くして梵行を精修し、極情を爲す莫くして諸の利の行・法の行・功德の行・純善の行に於て、常に樂うて修習し、恒に自身の善・惡の二業を觀じて、繫いで心に在き、後時に大追悔を生ぜしむる勿く、一切有つ所の愛樂の事を皆悉く別離せよ。善惡の業に隨つて後世に越くことは、難陀、壽命の百年に其の十位あり。初をば嬰兒の位と謂ひ、襁褓に臥す。二をば童子と謂ひ、兒戲を爲すことを樂む。三をば少年と謂ひ、諸の快樂を受く。四をば少壯と謂ひ、勇健にして多力なり。五をば盛年と謂ひ、智あつて談論す。六をば成就と謂ひ、善く思量して巧に計策を爲し能ふ。七をば漸衰と謂ひ、善く法式を知る。八をば朽邁と謂ひ、衆事衰弱す。九をば極老と謂ひ、爲し能ふ所無し。十をば百年と謂ひ、是れ當に死すべき位なり。難陀、梗概の大位を略して説くのみ。是くの如くにして計准するに、四月を以て一時と爲せば、百年の中に三百時あつて、春・夏・冬に於て各其の百あり。一年は十二月なれば、總べて一千二百月あり。若し半月にて數ふることを爲せば、總べて二千四百の半月あつて、三時の中に於ては各八百の半月あり。總べて三萬六千の晝夜あり。一日に再食すれば、總べて七萬二千度の食あり。緣あつて食せずと雖も、亦其の數に在く。不食の緣とは、謂はゆる厭恨して食はざる、苦に遭うて食はざる、求索して得ざると睡眠と持齋と掉戲とにて食はざる事務にて食はざるとなり。食に不食を與れて、共に合集する數には爾許あり、母の乳を飲むをも并せて。人命の百年に、我ハ已に具に年月・晝夜及び飲食の數を説けり。汝應に厭を生ずべし。

難陀、是くの如くにして生成せる長大の身にも衆の病あり。謂はゆる頭・目・耳・鼻・舌・齒・咽喉・胸腹・手足の疥癩・癩狂・水腫・欬嗽・風黃・熱癰・衆多の瘡病・支節の痛苦なり。難陀、人身には是く

安志と名け、二を近志と名く。熱藏に依つて熱藏を食ふ。四戸の蟲あつて、一を鹽口と名け、二を蘿口と名け、三を網口と名け、四を雀口と名く。小便の道に依つて尿を食うて住す。四戸の蟲あつて、一を應作と名け、二を大作と名け、三を小形と名け、四を小束と名く。大便の道に依つて糞を食うて住す。二戸の蟲あつて、一を黒口と名け、二を大口と名く。腓に依つて腓を食ふ。二戸の蟲あつて、一を癩と名け、二を小癩と名く。膝に依つて膝を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて愚根と曰ひ、脛に依つて脛を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて黒頂と曰ひ、脚に依つて脚を食ふ。難陀、此の身の如きは、甚だ厭患すべきは、斯の如くに、色類に常に八萬戸の蟲あつて、日夜に噉食し、此れに由つて、身をして、熱惱し羸瘦し疲困し飢渴せしむればなり。又復、心にも種種の苦惱あつて、憂愁し悶絶して衆病現前し、良醫も除療を爲し能ふことある無ければ、難陀、大有の海、生死の中に於て、是くの如き苦あるに、云何ぞ此れに於て愛樂を生ぜんや。復、諸の神病に執持せらるるを爲すことは、謂はゆる天神・龍神の八部に持せられ、及び諸の鬼神、乃至、羯吒布單那及び餘の禽獸・諸の魅に持せられ、或は日月・星辰に爲つて厄せられ、此等の鬼神の諸の病患を作して、身心を逼惱することは、具に説くべき難し。

佛、難陀に告ぐらく。誰れか生死に於て、母胎に入つて、極りたる辛苦を受くることを樂はん。

是くの如くにして生成し、是くの如くに増長するにも、母の乳血を飲み及び諸の飲食に、妄に美の想を生じて、漸く長成に至り、假ひ身をして安樂にして病無く、衣食情に恣に、壽百歳に滿つるを得しむとも、此の生中に於て、睡眠は半を減じ、初は嬰兒として、次いで童子たり。漸く成長に至るや、憂悲・患難・衆病に逼られて、無量百の苦其の身を觸惱すること、説き盡すべき難ければ、身内の諸苦の忍受し難き時は、存生することを願はずして意に便ち死を求む。是の身の如きは、苦多く樂少く、復暫くは住すと雖も必ず當に謝滅すべきなり。難陀、生ずる者は皆死して、常には存

【二】羯吒布單那(Kataputa-
奇臭鬼又は體臭者と譯す)

と曰ひ、齒に依つて齒を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて木口と曰ひ、齒根に依つて齒根を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて針口と曰ひ、舌に依つて舌を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて利口と曰ひ、舌根に依つて舌根を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて手圓と曰ひ、齧はぐに依つて齧はぐを食ふ。復、二戸の蟲あつて、一を手網しゅまうと名け、二を半屈はんくつと名く。手掌に依つて手掌を食ふ。二戸の蟲あつて、一を短懸たんけんと名け、二を長懸ちやうけんと名く。腕うでに依つて腕うでを食ふ。二戸の蟲あつて、一を遠臂えんべんと名け、二を近臂きんべんと名く。臂ひじに依つて臂ひじを食ふ。二戸の蟲あつて、一を欲吞よくたんと名け、二を已吞いたんと名く。喉のどに依つて喉のどを食ふ。二戸の蟲あつて、一を有怨ゆうえんと名け、二を大怨たいえんと名く。胸むねに依つて胸むねを食ふ。二戸の蟲あつて、一を螺貝らがいと名け、二を螺口らくと名く。肉にくに依つて肉にくを食ふ。二戸の蟲あつて、一を有色うしよくと名け、二を有力うりよくと名く。血ちに依つて血ちを食ふ。二戸の蟲あつて、一を勇健ゆうけんと名け、二を香口かうくと名く。筋すぢに依つて筋すぢを食ふ。二戸の蟲あつて、一を不高ふたかと名け、二を下口したくと名く。脊せに依つて脊せを食ふ。二戸の蟲あつて、俱ともに脂色しじよくと名け、脂あぶらに依つて脂あぶらを食ふ。一戸の蟲あつて、名けて黄色わうじよくと曰ひ、黄わうに依つて黄わうを食ふ。一戸の蟲あつて、名けて眞珠しんじゆと曰ひ、腎じんに依つて腎じんを食ふ。一戸の蟲あつて、名けて大眞珠たいしんじゆと曰ひ、腰こしに依つて腰こしを食ふ。一戸の蟲あつて、名けて未至みしと曰ひ、脾ひに依つて脾ひを食ふ。四戸の蟲あつて、一を水命すいめいと名け、二を大水命たいすいめいと名け、三を針口せんくと名け、四を刀口たうくと名く。腸ちやうに依つて腸ちやうを食ふ。五戸の蟲あつて、一を月滿げつまんと名け、二を月面げつめんと名け、三を暉曜きやうと名け、四を暉面きやうめんと名け、五を別住べつじゆと名く。右の脇わきに依つて右の脇わきを食ふ。復、五つの蟲あつて、名は上に同じく、左の脇わきに依つて左の脇わきに食ふ。復、四つの蟲あつて、一を穿前せんぜんと名け、二を穿後せんごと名け、三を穿堅せんけんと名け、四を穿住せんじゆと名く。骨ほねに依つて骨ほねを食ふ。四戸の蟲あつて、一を大白たいはくと名け、二を小白せうはくと名け、三を重雲じゆううんと名け、四を臭氣しゆうきと名く。脉みやくに依つて脉みやくを食ふ。四戸の蟲あつて、一を師子ししと名け、二を備力びりよくと名け、三を急箭きやくせんと名け、四を蓮華れんげと名く。生藏しやうざうに依つて生藏しやうざうを食ふ。二戸の蟲あつて、一を

【一】黄。黄は前の會には「膽」とあり。然るべし。

卷の第五十七

佛説入胎藏會 第十四の二

爾の時に、世尊は、復難陀に告ぐらく。汝今既に胎の苦・生の苦を知れば、應に凡べて胎生を受くる者の、是に極めて苦惱することを識るべし。初めて生るる時に、或は男或は女は、人の手の内に墮ち、或は衣等に在り、日の中に安在し、或は陰き處に在り、或は搖車に置かれ、或は牀席・懷抱の内に居り、是の因縁に由つて、皆酸辛・禁毒の極苦を受くることは、難陀、牛の、皮を剥れて牆に近きて住せば、蝨蟲の食ふ所を被り、若し樹艸に近かば、樹艸の蟲は食ひ、若し空處に居らば、諸蟲は啖食して、皆苦惱を受くるが如し。初めて生るるも亦爾り。煖水を以て洗ふに、大苦惱を受くること、癩病の人の、皮膚潰爛し膿血横に流るるに、之れに杖捶を加ふれば、極めて楚切を受くるが如し。生身の後には、母の血垢を飲み、而して長大なるを得、血垢と言ふは、聖法律の中に於ては、即ち乳汁是れなり。難陀、既に是くの如き種種なる極苦あつて、一も樂むべきもの無ければ、誰れか智ある者にして、斯の苦海に於て愛戀を生じて、常に流轉して休息ある無きを爲さんや。生れて七日にして、已に身内に即ち八萬戸の蟲あつて、縦横に啖食す。難陀、一戸の蟲あつて、名けて食髮と曰ひ、髮の根に依つて住して、常に其の髮を食ふ。二戸の蟲あつて、一を伏藏と名け、二を魚頭と名く。頭に依つて住して、常に其の頭を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて遮眼と曰ひ、眼に依つて住し、常に眼を食す。四戸の蟲あつて、一を驅逐と名け二を奔走と名け、三を屋宅と名け、四を圓滿と名く。腦に依つて住して、常に腦を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて稻葉と曰ひ、耳に依つて耳を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて藏口と曰ひ、鼻に依つて鼻を食ふ。二戸の蟲あつて、一を遮擲と名け、二を遍擲と名く。脣に依つて脣を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて蜜葉

滑なめらかなる物を以て、其の手の上うへに塗り、即ち中指を以て、薄き刀子の、利きこと鋒かうまう芒こぼの若くなるを夾はさみ、内の、糞ふん・廁かんの如くなる黒闇・臭穢しゅうえの惡むべき坑こう中に、無量千の蟲あつて恒に居り止る所、臭汁常に流れ精血腐爛ふらんして、深く厭患えんすべき薄皮もて覆おほ蓋がいせる惡業の身の瘡かさ、斯の穢處せいちよに於て、手を推して入れしめ、利き刀子を以て兒の身を齧かり割きき、片片ぺんぺんにして抽き出すに、其の母は、斯れに由つて、意に稱はざる極痛辛苦を受け、此れに因つて命終り、設たひ復存するを得とも、死せると異なること無きなり。難陀、若し彼の胎子にして、善業の感ずる所ならば、假かりに顛倒てんたうせしむとも、其の母を損せず、安隱あんいんに生れ出でて辛苦を受けざるなり。難陀、若く是の尋常じんじやうにして此の厄無やくき者も、三八の七日に至つて、將に産せんと欲する時には、母は大苦を受けて、性命せいめい幾んど死せんとして方に出胎しゅたいすることを得るものなることを、難陀、汝は審つみづからに觀みずべく、當に出離しゅりを求むべきなり。と。』

實には此の境無きに、妄に分別を生ずるなり。

難陀、第二十九の七日は、風の腹中に於て、風あつて名けて華條と曰ふ。此の風は、能く胎子を吹いて、其の形色をして鮮白淨潔ならしむ。或は、業力に由つては、色をして黧黑或は復青色に、更に種種なる雜類の顔色あらしめ、或は乾燥して滋潤なる白光・黒光の、色に隨つて出づるある無からしむ。

難陀、第三十の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて鐵口と曰ふ。此の風は、能く胎子の髪の毛・爪甲を吹いて、白・黒の諸光を生長することを得しむるに、皆業に隨つて現すること上に説く所の如し。

難陀、三十一の七日は、母の腹中に於て、胎子は漸く大なり。是くの如くに、三十二の七、三十三の七、三十四の七日已來、廣大を増長するなり。

難陀、第三十五の七日は、子は母腹に於て、支體具足す。

難陀、第三十六の七日は、其の子は母の腹中に住することを樂はず。

難陀、第三十七の七日は、母腹の中に於て、胎子は便ち三種の顛倒ならざる想を生ず。謂はゆる不淨の想・臭穢の想・黒闇の想なり。一分に依つて説くのみ。

難陀、第三十八の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて藍華と曰ふ。此の風は、能く胎子をして、身を轉じて下に向ひ、長く兩臂を舒べて産門に趣き向はしむ。次に復、風あつて趣下と曰ひ、業力に由る故にて、風は胎子を吹いて、頭を下に向け雙脚を上に向けしめて、將に産門を出でんとせしむ。難陀、若し彼の胎子にして、前身の中に於て、衆の惡業を造り并に人胎を墮せるものは、此の因縁に由り、將に出でんと欲する時に、手足横に亂れて、轉じ側く能はず。便ち母腹に於て以て命絶を取るなり。時に、智慧の女人或は善き醫者あらば、煖なる酥油或は榆皮の汁及び餘の

以ての故に。彼れの先世に諸の惡業を造れるに由つて、是くの如き報を獲るなればなり。難陀、其の胎子の、先に福業——施を好んで慳ます、貧乏を憐愍して、諸の財物に於て吝著の心無く、造る所の善業を日夜に増長せる——を修せるに由つて、當に勝報を受くべきことは、若し人間に生れば、受くる所の果報は悉く皆意に稱ひ、若し諸の世人は、長きを以て好しと爲さば則ち長く、若し短きを以て好しと爲さば則ち短く、龜・細は度に合し、支節は直に應じ、多・少と肥・瘦と・勇・怯とも。顔色は愛せざる者無く、六根具足して端正なること倫に超え、詞辯分明にして音聲和雅なる人相を皆具して、見る者有つ所の三業を歡喜し、人に向つて説く時に他は皆信受し、敬念して心に在くなり。何を以ての故に。彼の先世に造れる諸の善業に由つて、是くの如き報を得るなればなり。

難陀、胎は若し是れ男ならば、母の右脇に在つて踞踞して坐し、兩手にて面を掩うて母の脊に向つて住し、若し是れ女ならば、母の左脇に在つて踞踞して坐し、兩手にて面を掩うて母の腹に向つて住す。生藏の下熟藏の上に在つて、生物は下鎮し熟物は上刺して、五處を縛つて尖標に挿み在くが如くなれば、若し母の多食し、或は時に少食するも皆苦惱を受く。是くの如くなれば、若し極膩を食し、或は乾燥を食し、極冷・極熱・鹹・淡・苦・醋、或は太だしき甘・辛と、此等を食する時は皆苦痛を受く。若しくは、母の欲を行ひ、或は急ぎ行き走り、或は時に危坐し・久しく坐し・久しく臥し・跳躑する時も悉く皆苦を受く。難陀、當に知るべし、母胎の中に處つて、是の等の如き種種なる諸苦の、其の身を逼迫するを有つことは、具に説くべからざることを。人趣の中に於てすら此くの如き苦を受く。何に況んや、惡趣・地獄の中の苦は比喩し難からん。是の故に、難陀、誰れか智ある者にして、生死の無邊なる苦海に居て、斯の厄難を受くることを樂まんや。

難陀、第二十八の七日は、母の腹中に於て、胎子は便ち八種の顛倒の想を生ず。云何なるを八と爲す。謂はゆる、屋の想・乘の想・園の想・樓閣の想・樹林の想・牀座の想・河の想・池の想なり。而ち

して皮を生ぜしむ。

難陀、第二十四の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて滋漫じまんと曰ふ。此の風は、能く胎子の皮膚をして光悦くわくならしむ。

難陀、第二十五の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて持城ぢじやうと曰ふ。此の風は、能く胎子の血肉けつじゆをして滋潤じじゆんならしむ。

難陀、第二十六の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて生成じやうじやうと曰ふ。能く胎子の身をして、髮毛さつもう・爪甲つまかみを生じて、此に皆みな一一共に脉みくと相ひ連らしむ。

難陀、第二十七の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて曲鑰まがやくと曰ふ。此の風は、能く胎子の髮毛さつもう・爪甲つまかみをして、悉く皆成就じやうじゆせしむるなり。難陀、其の胎子の先に惡業——慳澁けんじやく・慳惜けんじやくして、諸の財物に於て堅固に執著しやくちやくして、惠施ゑしを肯せず父母・師長の言教を受けず身・語・意を以て不善の業を造つて日夜に増長せる——を造れるに由つて、當に斯の報——若しくは、人間に生れては、得る所の果報は皆意いに稱なぞはず。若しくは、諸の世人は長きを以て好しと爲さば彼れは即ち短く、若しくは、短きを以て好しと爲さば彼れは即ち長く、龜を以て好しと爲さば彼れは即ち細く、若しくは支節しせつの相ひ近きを好しと爲さば彼れは即ち相ひ離れ、若しくは、相ひ離れたるを好しと爲さば彼れは即ち相ひ近く、若しくは、多きを好しと爲さば彼れは即ち少く、若しくは、少きを好しと爲さば彼れは即ち多く、肥えたるを愛せば便ち瘦せ、瘦せたるを愛せば便ち肥え、怯ぢたるを愛せば便ち勇み、勇みたるを愛せば便ち怯ち、白きを愛せば便ち黒く、黒きを愛せば便ち白し。——を受くべし。難陀、又惡業に由つて惡報を感得することは、聾ろう・盲もう・瘡そう・癩ら・瘰癧れいぢ・醜陋しゆうろうにして、出す所の音響は人聞くことを樂はず、手足は攣れんり蹙しやくひて、形は餓鬼がきの如くなれば、親屬すら皆憎んで相ひ見るを欲せず。況んや復餘ふくよの人をや。有つ所の三業さんごふを人に向つて説く時に、他は信受せずして將つて意に在かず。何を

難陀、第十八の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて無垢と曰ふ。能く胎子の六處をして清淨ならしむること、日月の輪を大雲の覆蔽するに、猛風忽ち起つて雲を吹くや、四散して光輪の清淨なるが如し。難陀、此の業風の力の、其の胎子の六根をして清淨ならしむることも、亦復是くの如きなり。

難陀、第十九の七日は、母の腹内に於て、其の胎子をして四つの根、眼・耳・鼻・舌を成就せしむ。母の腹に入る時に、先に三根、謂はく身と命と意とを得たるなり。

難陀、第二十の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて堅固と曰ふ。此の風は、胎の左脚に依つて指節の二十の骨を生じ、右脚にも亦二十の骨を生じ、足の眼に四骨、髀に二骨あり、膝に二骨あり、胫に二骨あり、腰・髀に三骨あり、脊に十八骨あり、肋に二十四骨あり。復、左手に依つて指節の二十の骨を生じ、復、右手に依つても亦二十を生じ、腕に二骨あり、臂に四骨あり、胸に七骨あり、肩に七骨あり、項に四骨あり、頷に二骨あり、齒に三十二骨あり、鬻體に四骨なり。難陀、譬へば、操師或は彼れの弟子の、先づ鞭木を以て其の相狀を作り、次いで繩を以て纏ひ、後に諸泥を安じて以て形像を成すが如く、此の業風の力にて諸骨を安布することも、亦復是くの如きなり。此の中、大骨の數に二百あり、餘の小骨を除く。

難陀、第二十一の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて生起と曰ふ。能く胎子の身上に肉を生ぜしむること、譬へば、泥師の先づ好く泥を調じて牆壁に泥るが如く、此の風の肉を生ずることも亦復是くの如し。

難陀、第二十二の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて浮流と曰ふ。此の風は、能く胎子をして血を生ぜしむ。

難陀、第二十三の七日は、母の腹内に於て、風あつて名けて淨持と曰ふ。此の風は、能く胎子を

【八】髀。は「ヒザボネ」モ「モボネ」なり。而して「前會」には「勝（モモ）」とあり。此の方然るべし。

難陀、第十五の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて蓮華と曰ひ、能く胎子の與めに二十種の脉を作つて、諸の滋味を吸はしむ。身の前に五つあり、身の後に五つあり、右邊に五つあり、左邊に五つあり。其の脉に種種の名及び種種の色あつて、或は伴と名け、或は力と名け、或は勢と名け、色には青・黄・赤・白・豆・酥・油・酪等の色あり。更に多くの色あつて、共に相ひ和し雜れり。難陀、其の二十の脉に、別に各四十の脉あり以て眷屬を爲し、合せて八百の氣を吸ふ脉あつて、身の前後と左右とに於て各二百あるなり。難陀、此の八百の脉に各一百道の脉の眷屬あつて相ひ連り、合せて八萬あつて、前に二萬あり、後に二萬あり、右に二萬あり、左に二萬あるなり。難陀、此の八萬の脉に復衆多の孔穴あり。或は一孔・二孔、乃至、七孔にして、一一各毛孔と相ひ連ること、猶鵝根の多くの孔隙あるが如し。

難陀、第十六の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて甘露行と曰ふ。此の風は能く方便を爲して、胎子の二眼の處る所を安置し、是くの如くに兩耳・兩鼻・口・咽・胸臆にも、食をして入つて停貯を得る處たらしめ、能く氣息を通過・出入せしむること、譬へば陶師及び彼の弟子の、好き泥團を取つて輪上に安在し、其の器物の形勢に隨ひ安布して、差ひ舂く無からしむるが如し。此れは、業風によつて、能く是くの如くに眼等の處に於て、勢に隨ひ安布するを作し、乃至、能く氣息を通過・出入せしめて、亦爽ひ失する無きなり。

難陀、第十七の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて毛拂口と曰ふ。此の風は、能く胎子の眼・耳・鼻・口・咽喉・胸臆・食入の處に於て、其れをして滑澤に出入の氣息を通じて、處る所に安置せしむること、譬へば巧匠若しくは彼の男女の、塵翳の鏡を取つて、油及び灰を以て、或は細土を以て揩り拭ひて淨からしむるが如し。此れも業風に由つて、能く是くの如くに處る所に安布して、障礙ある無きを作すなり。

の始めて生ずるが如し。

難陀、第九の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて分散ぶんさんと曰ひ、此の風の胎に觸るるや、九種の相の現するあり。謂はく、二つの眼・二つの耳・二つの鼻并に口及び下の二つの穴なり。

難陀、第十の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて堅靱けんがうと曰ひ、胎をして堅實ならしむるなり、此の七日に即いて、母胎の中に於て、風あつて名けて普門ふもんと曰ふ。此の風の吹くや、胎藏を脹らすこと、猶浮囊うぶなぶを氣を以て吹き満すが如し。

難陀、第十一の七日は、母の胎中に於て、風あつて名けて疎通そつうと曰ひ、此の風の胎に觸るるや、胎をして通徹して九孔の現するあらしむ。若し母の行・住・坐・臥して事業を作す時は、彼の風は旋轉せうてん虚通して漸く孔をして大ならしむ。若し風は上に向はば、上の孔は便ち開け、若し下に向ふ時は、即ち下の穴を通ずること、譬へば鍛師及び彼の弟子の、蒙扇まうせんを以ふる時に、上下に氣を通ずるが如し。風は事を作し已れば、即便に隱滅いんめつす。

難陀、第十二の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて曲口まがぐちと曰ふ。此の風の胎を吹くや、左右の邊に於て大小の腸ちやうを作ること猶藕絲くわしの如く、是くの如くに身に依つて交絡かうらくして住するなり。此の七日に即いて、復風あつて名けて穿髮せんぱつと曰ひ、彼の胎内に於て一百三十の節を作つて増減ある無く、復風力に由つて、百一の禁處こんじよを作るなり。

難陀、第十三の七日は、母の腹中に於て、前の風力を以て飢渴あるを知る。母の飲食する時に有所の滋味しじの、臍へそよりして入るを、藉りて以て身に資するなり。

難陀、第十四の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて線口せんぐちと曰ひ、其の風は胎をして一千の筋を生ぜしむ。身の前に二百五十あり、身の後に二百五十あり、右邊に二百五十、左邊に二百五十なり。

【七】百一の禁處。前會には「百一の穴」とあり。

あつて名けて遍觸と爲し、先に從つて生じて、彼の胎に觸るる時を頸部陀と名け、狀稠醃の如く或は凝酥の如く、七日の中に於て、内熱に煎煮せられて、四界現前するなり。

第三の七日は、廣く説かば前の如くにして、母の腹中に於て、風あつて刀鞘口と名け、先業に從つて生じ、彼の胎に觸るる時を名けて閉戸と曰ひ、狀は鐵箸の如く或は蚯蚓の如くにして、七日の中に於て四界現前するなり。

難陀、第四の七日は、廣く説かば前の如くにして、母の腹中に於て、風あつて名けて内開と爲し、先業に從つて生じ、胎箭を吹き撃つや名けて、健南と爲し、狀は針椽の如く或は溫石の如くにして、七日の中に於て四界は現前するなり。

難陀、第五の七日は、廣く説かば前の如くにして、母の腹中に於て、風あつて名けて攝持と曰ひ、此の風の胎に觸るるや五つの相の現するあり。謂はゆる兩つの臂兩つの脛及び頭なり。譬へば、春時に天の甘雨を降すや、樹林鬱茂して枝條を増長するが如くに、此れも亦是くの如くに五相は顯現するなり。

難陀、第六の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて廣大と曰ひ、此の風の胎に觸るるや、四つの相の現するあり。謂はく。兩つの肘兩つの膝にして、春雨を降して、萋草に枝を生ずるが如くに、此れも亦是くの如くに四相は顯現するなり。

難陀、第七の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて旋轉と爲し、此の風の胎に觸るるや、四つの相の現するあり。謂はく。兩つの手兩つの脚にして、凝聚沫の如く或は水苔の如くに此の四相を有つなり。

難陀、第八の七日は、母の腹中に於て、風あつて名けて翻轉と曰ひ、此の風の胎に觸るるや、二十の相の現するあり。謂はく。手足の十指にして、此れに從つて初めて生ずること、猶新雨に樹根

【五】 四界。四大界と同じ。

【六】 健南。伽那と同じ。

て芽等の生ずるを得るに非ること。是くの如くに、應に唯父母のみに非ず、但業及び餘の緣あるのみに非ずして、胎の生ずることを得るは、父母の精血と因緣の和合とに由るを要して、方に胎あることを知るべきのみ。難陀、明眼の人の、火を求めん爲めの故に、日光珠を將ちて日中に置き、乾きたる牛糞を以て其の上に置くに、方に火の生ずることあるが如く、是くの如くに、應に父母の精血と因緣合とに依る故にて、方に胎生あることを知るべきなり。父母の不淨にて羯羅藍を成ずるや、之れを號して色と爲し、受・想・行・識は、卽是れ其の名もて説いて名色と爲す。此の藕聚の惡むべきは、名色にて生を諸有に託すればにて、乃至、少分をも刹那にも、我れは讚嘆せざるなり。何を以ての故に。諸有の中に生ずることは、是れ大苦たればなり。譬へば、糞穢は少しにても亦是れ臭きが如く、是くの如くにして應に諸有の中に生ずること少しなりとも、亦苦と名くることを知るべし。此の五取蘊の色・受・想・行・識には、皆生・住・增長及び衰壞あり。生は卽是れ苦、住は卽是れ病、增長・衰壞は卽是れ老・死なり。是の故に、難陀、誰れか有海に於て愛味を生じ、母胎の中に臥して斯の劇苦を受けんや。

復次に、難陀、是くの如きを應に知るべし。凡べて胎に入る者は、大數もて之れを言はば、三十八の七日あることを。初の七日の時に、胎の母の腹に居るや、楯の如く、癪の臥して糞穢に在るが如くにして、鍋の中に處るが如くに身根及び識は同じく一處に居り、壯熱にて煎熬せられて、極めて辛苦を受くるなり。羯羅藍と名くる狀の、粥汗の如く或は酪漿の如くなるもの、七日の中に於て内熱に煎煮せられて、地界の堅性と水界の濕性と火界の煖性と風界の動性と、方に始めて現前したるなり。

難陀、第二の七日は、胎の母の腹に居るや、臥して糞穢に在り。鍋の中に處るが如くに身根及び識は同じく一處に居つて壯熱に煎熬せられ、極めて辛苦を受くるなり。母の腹中に於て、風の自ら起る

非ず。然り粟の因縁の和合に依つて、蟲は乃ち生ずるを得て身は赤色と作ることを。難陀、當に知るべし、父の精・母の血たる羯羅藍の身も亦復是くの如く、因縁和合して大種の根の生ずることを。酪に依つて蟲を生じて身は白色と作るが如きにも、廣く説きて、乃至、因縁和合して大種の根の生ずることを。

復次に、難陀、父母の不淨の羯羅藍に依る故にて、地界は現前して堅韌を性と爲し、水界は現前して濕潤を性と爲し、火界は現前して溫暖を性と爲し、風界は現前して輕動を性と爲すなり。難陀、若し父母の不淨の羯羅藍の身にして、但地界のみあつて水界無くんば、即便に乾燥して悉く皆分散すること、譬へば手にて乾きたる髮・灰等を握るが如けん。若し但水界のみにして地界無くんば、即便に離散して油滴・水の如けん。水界に由る故にて地界は散ぜず、地界に由る故にて水界は流れざればなり。難陀、羯羅藍の身にして、地・水界のみあつて火界無くんば、便ち爛壞すること、譬へば夏月の陰處の肉團の如けん。難陀、羯羅藍の身にして、但地・水・火界のみあつて風界無くんば、即便に増長・廣大なる能はざるなり。此等は皆先業を因と爲し、更に互に縁を爲して、共に相ひ招感するに由つて、識は乃ち生ずるを得て、地界にて能く持ち、水界にて能く攝め、火界にて能く熟し、風界にて能く長するなり。難陀、又、人若しくは彼れの弟子あつて、沙糖を熟調し、即ち氣を以て吹いて、其れをして増廣して内に於て空虚ならしむること、猶藕根の如くならしむるが如く、内身の大種の、地・水・火・風の業力にて増長することも亦復是くの如し。難陀、父母の不淨にのみ羯羅藍の體あるに非ず、亦母腹のみに非ず、亦是れ業のみに非ず、因のみに非ず、縁のみに非ずして、但此等の業縁の和合に由つて、方に始めて胎あることは、新しき種子の、風日の損壞する所を被らず、堅實にして穴の藏する無く、擧げて宜しきに合せるを良田に下し、並に潤澤ある、因縁和合して、方に芽・莖・枝・葉・華・果の次第に増長するあるが如し。難陀、此の種子の、縁合を離れ

り。難陀、云何にして中有は母胎に入ることを得る。若し母の腹淨く、中有現前して欲事を爲すを見て、上に説ける如き衆多の過患無く、父母及び子に相ひ感ずる業あらば、方に母胎に入るなり。又彼の中有の胎に入らんと欲する時には、心即ち顛倒して、若し是れ男ならば、母に於て愛を生じ父に於て憎を生じ、若し是れ女ならば、父に於て愛を生じ母に於て憎を生じ、過去の生に於て造る所の諸業にて、妄想を起して邪解の心を作し、寒冷の想、大風・大雨及び雲霧の想を生じ、或は大衆の鬧聲を聞くなり。此の想を作し已つて、業の優劣に隨ひ、復十種の虚妄の想を起す。云何なるを十と爲す。我れ今宅に入る、我れ樓に登り、我れ臺殿に昇り、我れ草菴に入り、我れ葉舎に入り、我れ草叢に入り、我れ林内に入り、我れ牆孔に入り、我れ離間に入らんと欲す。となり。難陀、其の時に、中有は此の念を作し已るや、即母胎に入り應に知るべし生を受けて、羯羅藍——父の精と母の血とにして、——是の餘の物に非ざる父母の精血の和合に由る因縁を、識の所縁依止と爲して住することを。譬へば醃を瓶に、鑽（攪）めて、人功にて動かし轉して已まざるに依り、酥の出づるあるを得、此れに異らば生ぜざるが如く、當に知るべし、父母の不淨の精血の羯羅藍の身も、亦復是くの如きことを。

復次に、難陀、四つの譬喩あり。汝當に善く聽くべし。青草に依つて蟲は乃ち生ずることを得るが如きも、草は是れ蟲に非ず、蟲は草を離れたるに非ず。然り、草の因縁和合に依つて、蟲は乃ち生ずるを得て身は青色と作るなり。難陀、當に知るべし、父の精・母の血たる羯羅藍の身も亦復是くの如く、因縁和合して大種の根の生ずることを。牛糞に依つて蟲を生ずるが如きも、糞は是れ蟲に非ず、蟲は糞を離れたるに非ず。然り、糞の因縁和合に依つて、蟲は乃ち生ずるを得て身は黄色と作るなり。難陀、當に知るべし、父の精・母の血たる羯羅藍の身も亦復是くの如くに、因縁和合して、大種の根の生ずることを。棗に依つて蟲を生ずるが如きも、棗は是れ蟲に非ず、蟲は棗を離るるに

【三】 羯羅藍。歌純邏と同じ。

【四】 鑽。鑽は「キル」サス」の義なれば攪の誤寫なるべし。

足或は復無足と、其の先業に隨ひ、生を託する處に應じ、感ずる所の中有は、即ち彼の形の如し。天の中有の若きは、頭は便ち上に向ひ、人と傍生と鬼とは横行して去き、地獄の中有は、頭直ぐに下に向ふ。凡べて諸の中有は皆神通を具へ空に乗じて去き、猶天眼の如くに遠く生るる處を觀る。月期至ると言ふは、胎を納るる時を謂ふ。雜陀、諸の女人あつて、或は三日を經し或は五日・半月。一月を經し、或は縁を待ち、經すこと久しく、期水の方に至るあり。若し女人あつて、身に威勢無く、辛苦を多く受け、形容醜陋にして好き飲食無くんば、月期來ると雖も速に當に止息すべきこと、猶乾地に水を灑ぐ時に、即便に燥き易きが如し。若し女人あつて、身に威勢あり、常に安樂を受け、儀容端正にして好き飲食を得ば、有つ所の月期は速に止息せざること、猶澗地に水を灑ぐ時に、即便には燥き難きが如し。云何か入らざる。父の精の出づる時に母の精の出でざる、母の精の出づる時に父の精の出でざる、若しくは俱に出でざるは、皆胎を受けず。若しくは、母は不淨にして父の淨なる、若しくは、父は不淨にして母の淨なる、若しくは、俱に不淨なるも、亦胎を受けず。若しくは、母の陰處の、風病に爲つて持せらるる、或は黃病・痿癰ある、或は血氣胎結ある、或は肉増を爲せる、或は服藥を爲せる、或は麥腹病・蟻腰病なる、或は產門の駝口の如くなる、或は中の多根の樹の如き、或は犁の頭の如き、或は車の轆の如き、或は藤の條の如き、或は樹の葉の如き、或は麥の芒の如き、或は腹の深なる、或は上深ある、或は胎器非る、或は恒に血の出づる、或は復水の流るる、或は彌口の如くにして常に開いて合せざる、或は上下・四邊の闊狭の等しからざる、或は高下・凹凸なる、或は内に蟲あつて食して爛壞不淨なる、若し母に此の過あらば、並に胎を受けざるなり。或は父母は尊貴なれども中は卑賤なるある、或は中は尊貴を有てども父母は卑賤なる、此等の類の如きも亦胎を成さず。若しくは父母及び中有は俱に是れ尊貴なりとも、若し業にして和合せずば亦胎を成さず。若しくは、其の中は前の境處を有つとも、男女の二愛無くば亦生を受けざるな

中に又せん。と。即便に急に走つて、世尊の處に詣れり。佛言はく。汝、地獄を見たりや、不や。と。難陀は悲泣して涙を雨し、哽咽して、言ふに微細の聲を出し、白して言はく。已に見たり。と。佛言はく。汝、何物を見たるか。と。即ち見る所の如く具に世尊に白すに、佛は難陀に告ぐらく。或は人間を願ひ、或は天上を求めて梵行を勤修せば、是くの如き過あり。是の故に、汝は今當に涅槃を求め、以て梵行を修すべく、天に生ずるを樂んで勤苦を致す勿れ。と。難陀は聞き已つて、情に愧恥を懷き、黙して對ふる所無し。爾の時に、世尊は其の意を知り已り、地獄より出て逝多林に至り、即難陀及び諸の苾芻に告げて曰はく。内に三垢あり。謂はく。是れ姪欲・瞋恚・愚癡にして、是れ棄捨すべく、是に應に遠離すべき法を當に修學すべし。と。

爾の時に、世尊は逝多林に住して未だ多くの日を経されども、緣に隨ひ衆生を化せんと欲する爲めの故に、諸の徒衆と占波國に往き、揭迦池の邊に住せり。時に彼の難陀は、五百の苾芻と亦佛に隨ひ至り、世尊の所に往き、皆佛足を禮し一面に在つて坐せり。時に、佛世尊は、衆の坐し定れるを見、難陀に告げて曰はく。我れに法要あり。初・中・後に善く、文義巧妙にして純一圓滿なる清白の梵行なり。謂はゆる入母胎の經なり。汝、當に諦に聽き、至極に作意し、善く之れを思念すべし。我れ今説くを爲さん。と。難陀言はく。唯、然り、世尊。願はくは樂んで聞かんと欲す。と。佛難陀に告ぐらく。母胎ありと雖も入と不入とあり。云何か、生を受けて母胎の中に入る。若し父母染心にて共に姪愛を爲し、其の母腹淨くして月期時至り、中蘊現前せば、當に知るべし、爾の時を名けて母胎に入ると名くることを。此の中蘊の形に其の二種あり。一は形色端正にして、二は容貌醜陋なり。地獄の中有は、容貌醜陋にして焼けたる机木の如く、傍生の中有は、其の色烟の如く、餓鬼の中有は、其の色水の如く、人・天の中有は、形金色の如く、色界の中有は、形色鮮白に、無色界天には元より中有無し。無色を以ての故なり。中蘊の有情には、或は二手二足あり。或は四足・多

【一〇】 占波(Campa)國。又、瞻波と書す。中印度にして、恒河に流する國なり。

【二】 中蘊。中陰と同じ。

【三】 中有。中陰と同じ。

陀に言はく。諸て餘の慈芻の事は見棄つることを容すも、汝は是れ我が弟なり。何ぞ乃ち亦嫌ふか。と。阿難陀曰はく。誠に斯の理あり。然れども仁は別道を行じ、我れは異路に違ふ。是の故に相ひ避く。と。答へて曰はく。何を我が道と謂ひ、云何なるは爾の路なる。答へて曰はく。仁は天に生ずることを樂んで梵行を修し、我れは圓寂を求めて欲染を除く。と。是の語を聞き已るや、倍憂感を加へたり。

爾の時に、世尊は其の心念を知り、難陀に告げて曰はく。汝頗は曾て捺洛迦を見たりや、不や。答へて言はく。未だ見ず。佛言はく。汝我が衣の角を捉ふべし。と。卽便に就いて執るに、佛は便ち將の去つて地獄に往けり。爾の時に、世尊は一邊に在つて立ち、難陀に告げて曰はく。汝、今去いて諸の地獄を觀るべし。と。難陀卽ち去つて先づ灰河を見、次に劍樹・糞屎の火河に至り、彼に入つて觀察して、遂に衆生の受くる種種の苦を見たり。或は鉗を以て舌を抜き齒を振り目を抉り、或る時は鋸を以て其の身を削け解き、或は復斧を以て手足を斫り截ち、或は牟なる鬚を以て身を鑿し、或は棒を以て打ち、硝もて刺し、或は鐵の鎚を以て粉碎し、或は鎔したる銅を以て口に灌ぎ、或は刀の山・劍の樹に上せ、確にて擣き、石にて磨り、銅の柱・鐵の牀にて受くる諸の極苦を見、或は鐵の鑊の猛火沸騰し、熱酸汁に流れて有情の類を煮るを見、是等の如き受苦の事を見たるに、復一つの鐵鑊に於て、空しく煮たる炎熱の中には有情無し。此れを觀るや憂へ惶てて、獄卒に問うて曰はく。何の因縁の故にて、自餘の鐵鑊は皆有情を煮るに、唯り此の鑊中のみ空しく然して沸涌せしむるか。と。彼れ便ち報じて曰はく。佛弟の難陀は、唯天に生ぜんことを願ひて専ら梵行を修すれば、天上に生じて暫く快樂を受くることを得れども、彼にて命終れる後に此の鑊中に入るなり。是の故に、我れ今鑊に然して相ひ待つなり。と。難陀は聞き已るや、大恐怖を生じて、身毛皆豎ち、白汗流れ出でて、是くの如き念を作さく。此れは若し、我れは是れ難陀なるを知らば、生ながら鑊

【九】捺洛迦(Nalagā)地獄の原音なり。

はく。何の因にて、餘の處には男女雜居して諸の快樂を受くるに、汝等には、何故に、唯女人のみ有つて男子を見ざるか。と。天女答へて曰はく。世尊に弟あつて名けて難陀と曰ひ、佛に投じて出家して専ら梵行を修めたれば、命終の後に當に此の間に生ずべきを、我等此に於て相ひ待つなり。

と。難陀は聞き已るや、踊躍歡欣して速に佛の所に還れり。世尊は問うて言はく。汝は諸天の勝妙なる事を見たりや、不や。答へて言はく。已に見たり。佛言はく。汝は何事を見たる。と。彼れ見る所の如くに、具に世尊に白すに、佛は難陀に告ぐらく。天女を見たりや、不や。答へて言はく。已に見たり。此の諸の天女を孫陀羅に比ぶるに、誰れを殊妙と爲すか。白して言はく。世尊、孫陀羅を以て此の天女に比ぶるに、還香醉山の内の陸の獼猴を以て孫陀羅に比ぶるが如くにして、百千萬倍すとも其の一にも及ばざるなり。と。佛難陀に告ぐらく。淨行を修する者には、斯の勝れたる利あり。汝今宜しく堅く梵行を修むべくば、當に天に生ずることを得て斯の快樂を受くべし。と。聞き已るや、歡喜して默然として住れり。

爾の時に、世尊は、便ち難陀と與に、即天より没して逝多林に至れり。是の時に、難陀は天宮を思慕して梵行を修するや、佛は其の意を知り、阿難陀に告げて曰はく。汝、今去いて諸の苾芻に、一人も難陀と座を同じうして坐するを得ざれ。同じ處に經行するを得ざれ。一の竿に衣を置くを得ざれ。一の處に鉢を安じ及び水瓶を著くを得ざれ。同じ處にて經典を讀誦するを得ざれ。と告ぐべし。と。阿難陀は佛の言教を傳へて諸の苾芻に告ぐるに、苾芻は奉行して皆聖旨の如くにせり。是の時に、難陀は、既に諸人の共に同じく聚らざるを見、極めて羞愧を生ぜり。後、一時に於て、阿難陀は諸の苾芻と供侍堂の中に在つて衣服を縫補せるを、難陀は見已つて、便ち是の念を作さく。此の諸の苾芻は、咸く我れを棄てて同一に處らざれども、阿難陀は既に是れ我が弟なれば、豈相ひ嫌ふべけんやとて、即ち去いて同じく坐せり。時に阿難陀は速に即起ちて避けたれば、彼れは阿難

遙に佛を見、相ひ遇ふことを欲せざれば、路傍に樹枝の蔭の低く垂れたるあるを、即ち其の下に於て身を隠して住りしが、佛は其の樹をして枝を擧げて高く上らしめたれば、其の身は露現せり。佛は難陀に問はく。汝、何處より來れる。我れに隨ひ去くべし。と。情に羞耻を生じて、佛に従つて行くに、佛は是の念を作さく。此れは其の婦に於て深く戀著を生じたれば、宜しく捨離せしむべし。と。引接を爲さん故に、劫比羅城を出でて、室羅伐に詣り、既に彼に至り已るや、毘舍佉鹿子母の園に住り、佛は難陀の愚癡・染惑にして、尙其の妻を憶うて愛情を捨てざるを念ひ、應に方便を作して心をして止息せしむべしとて、即ち之れに告げて曰はく。汝、先に曾て香醉山を見たりや、不や。答へて言はく。未だ見ず。若し是くの如くんば、我が衣の角を捉へよ。と。即ち就いて衣を捉ふるに、時に于て、世尊は猶鷲王の虚空に上昇する如くにして、香醉山に至り、難陀を將引して左右を顧盼するに、果樹の下に於て、雌の彌猴の又一目無きもの、即便に面を擧げて世尊を直視するを見たり。佛は難陀に告げて曰はく。汝は此の瞎の彌猴を見るや、不や。佛に白して言はく。見る。佛言はく。汝が意に於て云何。此の瞎の彌猴を孫陀羅に比するに、誰れを殊勝と爲すか。答へて言はく。彼れ孫陀羅は是れ釋迦種にして、猶大女の如く、儀容第一なること世を擧げて雙無く、彌猴を之れに比するに、千萬億分すとも其の一にも及ばざるなり。と。佛言はく。汝は天宮を見たりや、不や。答へて言はく。未だ見ず。更に衣の角を捉ふべし。と。即便ち衣を執ふるに、還鷲王の虚空界に上るが若くにして三十三天に至り、難陀に告げて曰はく。汝、天宮の勝處を觀望すべし。と。難陀は即ち歡喜園・娑身園・龜身園・交合園・圓生樹・善法堂、是等の如き處に往き、諸天の、苑園・華果・浴池・遊戯の處にて殊勝に歡娛するを、悉く皆遍察し、次に、善見城中に入るに、復種種なる鼓樂・絲竹の微妙なる音聲、廊宇の疎通、牀帷・帳設を見るに、處處に皆天の妙なる姪女あつて、共に相ひ娛樂したり。難陀は遍く觀て、一處の唯天女のみ有つて天子無き所を見、便ち天女に問うて曰

【五】 室羅伐。舍衛國に同じ。
 【六】 毘舍佉鹿子母 (Isidharā, Kusumātī)。優婆夷にして、此の婦人の佛に獻じたる堂は、即ち舍衛城外の東園精舍 (Dhārayanaka) なりとせらる。

【七】 香醉山 (Gandhamāna)。香山とも云ひ、謂はゆる無熱池の北に在る閻浮洲中の最高中心地にして、崑崙山是れなりと云ふ。

【八】 善見城。又喜見城とも云ふ。帝釋天の居城なり。

成す。去くを得るに縁無し。我れ今相ひ憶うて或は死を致すべし。如し其の命在らば、曉に至つて方に行かん。と。孫陀羅を憶うて愁苦すること、夜を通せり。爾の時に世尊は、彼れの意を知り已り、阿難陀に告げて曰はく。汝、今宜しく去いて、彼の難陀に、知事の人と作らしめんと告ぐべし。と。卽便に往いて報ずらく。世尊は爾をして知事の人と作らしむ。と。問うて曰はく。云何なるを名けて知事の人と爲し、何事を作すことを欲するか。と。答へて曰はく。寺中に於て衆の事を檢校すべきなり。問うて曰はく。如何か應に作すべき。答へて言はく。具壽、凡べて知事の者は、若し諸の苾芻の出でて乞食する時には、應に寺中の田地を灑掃すべく、新牛糞を取つて次第に淨く塗るに、意を作し防守して失落せしむる勿かるべく、平章の事あらば、當に僧に白すことを爲すべく、若し香華あらば、應に行いて衆に與ふべく、夜は門戸を閉ぢ、曉に至つて當に開くべく、大小の行處をば、常に須く洗拭すべく、若し寺中に於て損壞の處あらば、卽應に修補すべきなり。と。是の教を聞き已るや、答へて言はく。大德、如し佛の言ふ所ならば、我れ皆當に作すべし。と。時に、諸の苾芻は、小食の時に於て、衣鉢を執持して劫比羅城に入り、乞食を行すること爲むるに、時に於いて、難陀は寺に人無きを見、便ち是の念を作さく。我れ地を掃きたらば卽家に還るべし。と。遂に便ち地を掃きたるを、世尊は觀知して、神通力を以て、掃淨の處をして糞穢を還滿たしめたり。復、是の念を作さく、我れ糞穢を除かば、方に言うて歸るべし。と。箒を放つて收持するに、糞穢は盡くること無し。復、是の念を作さく。戸を閉ぢて而ち去らん。と。世尊は、卽ち一房を閉ぢ竟つて更に餘の戸を閉づるに、彼の戸を便ち開かしめたれば、遂に憂惱を生じて、復是の念を作さく。縦ひ賊は寺を損ふとも、此れ亦何ぞ傷まん。我れ當に王と爲つて、更に百千の好き寺を作り、是れに倍過せしむべければ、我れ宜しく舍に歸るべし。若し大路を行かば、恐らくは世尊に見られん。と。是の思量を作して、卽ち小徑より趣くに、佛は其の念を知つて、小道よりして來れるを、既に

宜しく却かへき至いたるべし。若し遅おそ運うせば、金錢五百を罰せんと。難陀曰はく。爾なんだるべしと。即ち門首に至つて佛足を頂禮し、如來の鉢を取つて却かへいて宅中に入り、美食を盛り満みして、持ちて門首に至るに、世尊は遂に去りたれば、即ち阿難陀に與ふるに、世尊は相あひまを現あらわして鉢を取らしめず。如來大師は威嚴尊おんげんなれば、敢て喚よび住すまめられずとて、復更に阿難陀に授與するに、阿難陀は問うて曰はく。汝向に誰れの邊あたにて此の鉢を取り得たるか。答へて曰はく。佛の邊に於て取れり。阿難陀曰はく。宜しく佛に授與すべし。答へて曰はく。我れ今敢て輕かろしく大師に觸れじとて、默然として隨まひ去いき、世尊の、寺に至り手足を洗そひ已まり、座に就いて坐するや、難陀は鉢を持ち以て奉れり。世尊は食たべ已まつて、告げて曰はく。難陀、汝、我が殘せるを食ふや、不いなや。答へて曰はく。我れ食せん。と。佛即ち授與して、難陀の食たべ已まるや、世尊は告げて曰はく。汝出家し能ふや、不いなや。答へて言はく。出家せん。と。然るは、佛世尊の、昔むかし菩薩の道を行ぜし時に、父母・師長及び餘の尊者の有らゆる教令に於て、曾て違逆すること無かりし故にて、今こん時言に違ふ者無きを得るなり。即ち阿難陀に告げて曰はく。汝、難陀の與めに鬚ひげ髮かみを剃除せよ。と。答へて曰はく。世尊の教の如くにせん。とて、即ち髮を剃る人を覺おぼめ、其れに爲なつて髮を落さんとするに、難陀は見已まるや、彼の人に告げて曰はく。汝、今知るや、不いなや。我れ當に久しからずして轉輪王てんりんわうと作るべきことを。汝若し輕かろく爾なんだく我が髮を剃らば、當に汝が腕を截きつべし。と。彼れ便やすち大に怖おそれて、刀具を裏うらみ收とめて、即辭たちして出でんと欲す。阿難陀便やすち往いいて佛に白ますに、佛は便やすち自ら去いいて難陀の處ところに詣まり、問うて言はく。難陀、汝、出家せざるか。答へて言はく。出家せん。と。是の時に、世尊は自ら瓶水びんすいを持ちて其の頂上に灌そぎ、淨じゆん人は即ち剃そりたり。便やすち是の念ねんを作さく。我れ今、世尊を敬奉して且かつく出家を爲せども、暮ゆふには當に舍いに歸るべし。と。既にして目の晩ゆるるに至るや、路を尋ねて行けり。爾なんだの時に、世尊の、其の行路に於て大坑を化作したるを見已まつて、便やすち念ねんすらく。孫陀羅そんたらかは斯ごとく遠とほしと

卷の第五十六

唐 義淨 漢譯

佛説入胎藏會 第十四の一

是くの如くに我れ聞けり。一時、薄伽梵は、劫比羅城の多根樹園に在して、大苾芻衆の無量なる人と俱なりき。

爾の時に、世尊に、弟の名けて難陀と曰へるあり。身は金色の如くにして三十相を具し、佛より短きこと四指のみ。妻を、孫陀羅と名け、儀容端正なること世間に希有に、光華超絶して人に見ることを樂はれたれば、難陀は彼れに於て纏綿戀著して、暫くも捨て離るること無く、染愛の情重くして、命を畢ふるまで期と爲せり。

世尊は、化を受くる時の至れるを觀知するや、即、晨朝に於て、衣を著け鉢を持ち、具壽阿難陀を將つて侍者と爲し、城に入つて乞食し、次いで難陀の門首に至つて立ち、大悲力を以て金色の光を放てるに、其の光は普く難陀の宅中を照して、皆金色の如くにせり。時に難陀は、便ち是の念を作さく。光明の忽ち照すは、定つて是れ如來ならんと、使をして出で看しむるに、乃ち佛の至れるを見、即便に返つて難陀に白して曰はく。世尊は門に在せりと。此の語を聞き已るや、即ち速に出で迎へて世尊を禮せんと欲せり。時に孫陀羅は、便ち是の念を作さく。我れ若し放ち去らば、世尊は必ず定つて其の出家に與せしめんと。遂に衣を捉へ牽いて、出で去らしめず。難陀曰はく。今暫く放つべし。世尊を禮し已らば、我れ即ち却き廻らん。と。孫陀羅曰はく。芒に要期を作して、方に意に隨つて去れと。粧を以て額を濕して、之れに告げて曰はく。此の點の未だ乾かざるに、即

【一】薄伽梵。薄伽婆に同じ。
【二】劫比羅(Kapilavastu)城。淨飯王の都にして悉達太子の生所なり。

【三】孫陀羅(Sundarī)。艶と譯す。

【四】具壽(Jyesthāman)の世間の壽命並に智慧の命を具有する義にして師より弟子を呼び長者より後輩を呼ぶ尊稱にして比丘の總稱なり。

阿難、答へて曰はく。色は卽是れ苦なり。佛、言はく。若く無常・苦にして是れ敗壞の法なるに、若し多聞の諸の聖弟子あつて、是の説を聞き已るとも、此の身の是くの如き色に於て、卽是れ我及び我所を執するや、不や。不なり、世尊。色中には我無く、亦我所も無ければなり。復次に、阿難、意に於て云何。受・想・行・識は是れ常と爲すや、是れ無常なりや。阿難、佛に白して言はく。世尊、皆是れ無常なり。佛、言はく。若し無常ならば、是れ苦と爲すや、非苦と爲すや。阿難、答へて言はく。是くの如き四陰は、卽ち名けて苦と爲す。佛、言はく。若く無常・苦にして是れ敗壞の法なるに、若し多聞の諸の聖弟子あつて、是の説を聞き已るとも、此の身の是くの如き四陰に於て、卽ち是れ我及び我所を執するや、不や。不なり、世尊。此の四陰には、實に我及び我所あるなければなり。復次に、阿難、是くの如くに、我は過去・現在・未來に在らず。若しは内・若しは外・若しは塵・若しは細・若しは勝・若しは劣・若しは近・若しは遠の彼の一切の法も、悉く亦我及び我所に非るなり。阿難、當に知るべし、如實の智を以てして之れを観察せば、諸法は無我なることを。若し多聞の諸の聖弟子あつて、是の觀を作し已り、便ち厭離を生じて解脱を得、涅槃を究竟せんと如是に修學して、此の法身を證せば、生分は已に盡き、梵行は已に立ち、所作は已に辦して後有を受けざるなり。と。

佛の是の經を説き已りたまふや、尊者阿難は、遠塵離垢して法眼淨を得、五百の比丘は諸法を受けず、漏盡・意解せり。時に、諸の大衆は、佛の所説を聞き皆大に歡喜して信受し奉行せり。

【七】 遠塵離垢。塵垢を遠離する義にして、塵垢は煩惱の總名なれど、今は八十八使の見惑を斷じて正見を得るを謂ひ、又、得法眼淨とも云ふ。而して、其の位は、二乗の初果と菩薩の初地なり。

【八】 漏盡意解。一切の煩惱の斷盡して心意の解脱するを謂ふ。小乘阿羅漢果の證なり。

共に起るもの復百一なり。是くの如き四百四病の、其の身を逼切するを、名けて内苦と爲す。復、外苦あつて此の身に加害す。謂はゆる、或は空獄に在つて搗打・楚撻・椎械・枷鎖・繫縛せらるる諸苦、或は耳・鼻を剝れ及び手足を削れ、其の頭を斫截せらる。諸天に爲つて守護せられずんば、即ち非人・諸の惡鬼神・夜叉・羅刹をして其の便を得しむ。復、蚊・虻・蜂等の毒蟲に爲つて啖食せられ、寒熱・飢渴・風雨並に種種の苦惱に至るまで其の身を逼切す。人中すら尙爾り。況んや、惡道の苦難は具に説くべけんや。是の故に、當に知るべし、皆過去の諸の不善の業に由つて、是くの如き報を受くることを。若しくは、刀杖に加害せらるるに爲つて城壁及び諸の牆壁を造つて其の身を防衛し、惡風雨・蚊・虻・蜂に螫るるに爲つて屋舎を求め、四百四病の内苦・外苦に爲つて、飲食・臥具・醫藥・山園・室宅・金銀・七寶・奴婢・車乘・資生の具の供給を求むれども、須つ所は其の心に稱はずして便ち苦惱を生ず。設ひ珍財を獲とも、慳貪・吝惜して常に守護を加へ、或は時に散失して復大苦を生ずるなり。阿難、此の五陰の身の一一の威儀、行住坐臥は皆苦ならざる無し。若し長時に行きて暫くの休息もせずば、是れを名けて苦と爲す。住及び坐・臥の各各長時なるも、亦復皆苦なり。若し長時に行きて、暫くの住を得て便ち樂の想を生ずとも、其の實は樂に非ず。若しくは、長時に住じて暫く坐することを得、若しくは、長時に坐して暫く臥すことを得て、妄に樂の想を生ずとも、實は樂あること無し。是の故に、當に此の五陰の身を、皆名けて苦と爲すことを知るべし。若し復人あつて、或は自利を爲し、或は利他を爲し、若しくは、自他を俱に利せんには、應當に是くの如き諸苦を厭患して、出家・修學して、則ち涅槃・解脫の法に於て唐捐ならざるを爲すべし。若し復人あつて、或は衣服・臥具・醫藥・資生の具を以て、彼の者に供養せば、大果報の威徳・名聞を得ん。

佛、阿難に告ぐらく。意に於て云何。色は是れ常なりや、是れ無常なりや。阿難、佛に白して言はく。世尊、色は是れ無常なり。佛、言はく。若し無常ならば、是れ苦と爲すや、非苦と爲すや。

一を黒面と名け、二を可畏面と名く。醉に依つて醉を食ふ。二戸の蟲あつて、一を疾癩と名け、二を小癩と名く。膝に依つて膝を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて愚根と爲し、膊に依つて膊を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて黒頭と爲し、脚に依つて脚を食ふ。阿難、我れ今汝が爲めに略して説ける八萬戸の蟲は、此の身に依止して晝夜食噉し、亦復能く氣力虚羸し、顔容憔悴し、種種の病苦をして皆此の身に集らしめ、復其の心をして憂悲・熱惱せしむれば、良醫ありと雖も、亦迷惑を生じて、何の薬の能く此の病を治するかを知らざるなり。誰れか智者にして、生死の海に於て、當に是くの如き身を愛樂すべきあらん。

復次に、阿難、初め生れし時より乃ち長大に至るまで、衣食もて資養して此の身を成立するに、然も其の壽命は、或は百年を経るも、或は復短促なり。百年の中に於ては三百時あり。謂はく。春・夏・冬にして春を熱の際と爲し、夏を雨の際と爲し、冬を寒の際と爲す。此の三時の中に各四月あつて、一年の中に十二月あれば、百年の中に於て千二百月なり。黒月と白月とにて二千四百、凡べて晝夜を経ること三萬六千一なり。一日に再食して七萬二千、或は食せざることありとも亦其の數に在く。謂はゆる或は病み、或は酔ひ、或る時は斷食し、或は復、瞋・恨・睡・調戲・諸の餘の事務及び母の乳を飲むと、此の因縁を以て名けて不食と爲す。是くの如き身は、壽百年なりと雖も必ず磨滅に歸すれば、誰れか智者にして、生死の海に於て當に愛樂すべきあらん。

復次に、阿難、此の身を受くるや、二種の苦あり。云何なるを二と爲す。一には、衆病の身に集るを名けて内苦と爲す。二には、人と非人とに煩惱せらるるを名けて外苦と爲す。何者を名けて、衆病身に集ると爲す。謂はゆる眼・耳・鼻・舌・咽喉・牙齒・胸腹・手足に諸の病の生ずるあり。或は復、風癩・涕唾・癡狂・乾消・上氣・肺逆・小便・淋瀝・疥癩・癰疽・痔瘻・惡瘡・膿血・煎寒・壯熱と、種種の諸病は皆此の身に集る。復百一の心黄の病・百一の風病・百一の痰病あつて、風・黄・痰等の和合して

【二五】黒月と白月と。
異譯本に「其の明白と青冥と
の部を分てば」とあり。

【二六】復百一の、乃至、内苦
と爲す。
異譯本に「地・水・火・風一つ増
さば、則ち百病を生ず。風適
に多くば則ち百病を生じ、熱多
くば則ち百病を生じ、寒多く
ば則ち百病を生じ、食多くば
則ち百病を増す。三事合會し
風寒熱聚つて、四百四病同時
に俱に起る」とあり。

名けて利口と爲し、舌根に依つて舌根を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて手圓と爲し、齶に依つて齶を食ふ。二戸の蟲あつて、一を手網と名け、二を半屈と名け、手掌に依止して手掌を食ふ。二戸の蟲あつて、一を遠臂と名け、二を近臂と名け、臂に依つて臂を食ふ。二戸の蟲あつて、一を鐵と名け、二を近鐵と名け、咽喉に依止して咽喉を食ふ。二戸の蟲あつて、一を金剛と名け、二を大金剛と名け、心に依つて心を食ふ。二戸の蟲あつて、一は羸と名け、二を羸口と名け、肉に依つて肉を食ふ。二戸の蟲あつて、一を具色と名け、二を具稱と名け、血に依つて血を啜ふ。二戸の蟲あつて、一を勇健と名け、二を香口と名け、筋に依つて筋を食ふ。二戸の蟲あつて、一を不高と名け、二を下口と名け、脊骨に依止して脊骨を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて脂色と曰ひ、脂に依つて脂を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて黄色と曰ひ、膽に依つて膽を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて眞珠と曰ひ、肺に依つて肺を食ふ。一戸の蟲あつて、之れを名けて菝と爲し、脾に依つて脾を食ふ。五百戸の蟲あつて、一戸の蟲、之れを名けて月と爲し、一戸の蟲を名けて月口と爲し、一戸の蟲を名けて輝耀と爲し、一戸の蟲を名けて輝面と爲し、一戸の蟲を名けて廣大と爲す。左邊に依止して左邊を食ふ。復、五百戸の蟲あつて、亦是くの如くに名け、右邊に依止して右邊を食ふ。四戸の蟲あつて、一を少穿と名け、二を大穿と名け、三を骨穿と名け、四を骨面と名く。骨に依つて骨を食ふ。四戸の蟲あつて、一を大白と名け、二を小白と名け、三を吸力と名け、四を虎道と名く。脉に依つて脉を食ふ。四戸の蟲あつて、一を意樂と名け、二を師子力と名け、三を兔腹と名け、四を耽欲と名く。牛藏に依止して生藏を食ふ。二戸の蟲あつて、一を勇猛と名け、二を勇猛主と名く。熟藏に依止して熟藏を食ふ。四戸の蟲あつて、一を鹽口と名け、二を網口と名け、三を蘊口と名け、四を鳥口と名く。小便の處に依つて小便の處を食ふ。四戸の蟲あつて、一を應作と名け、二を大作と名け、三を碎末と名け、四を臆皴と名く。大便の處に依つて大便の處を食ふ。二戸の蟲あつて、

て便ち命を捨て、母は此の時に於て大苦惱を受け、或は復命終る。若し前世に於て、諸の善業を修めて長壽の因を作さば、生れんと欲する時に臨んで、母子安隱にして、上の如き惡業の諸苦ある無きなり。

三十八の七日を過ぎ已つて、胎を出でんと欲する時にも、種種の苦を受けて乃ち生ずることを得。是の故に、當に知るべし、此の身を受くるは實に大苦と爲すことを。初めて胎を出づる時に、若しは男若しは女の、適に生じて地に墮つるや、或は手を以て捧げ、或は衣にて承け接し、或は牀席に在ぎ、或は屋中、或は復地上、或は適露の處に在ぎ、或は日中に在かれ、或は冬・夏の時の冷・熱・風觸と、此の身の初めて生れて大苦惱を受くること、生ら剝れたる牛の、牆壁に觸れ、或は復露地にて、在る處に隨せて蟲に爲つて食はるが如く、亦人あつて、蚊・虻諸蟲に啖食せられ、復杖・楯を加へて之れを鞭撻せらるるが如し。初めて胎を出でし時に、煖水を以て其の身を洗觸せらるる時に受くる所の苦も、亦復是くの如し。兒の既に生れ已るや、漸漸に増長するまで、母身より出す所の雜血の乳にて之を養育せらるることは、我れ諸の餘の經中に先に已に廣く説けるが如し。是の故に、當に知るべし、此の身は皆是れ不淨と衆苦との成就する所なることを。誰れか智者にして、生死の中に於て、當に是くの如き身を愛樂すべきあらん。

復次に、阿難、初め胎を出でし時に七日を経るや、八萬戸の蟲は身に從つて生じて、縱横に食瞰するなり。二戸の蟲あつて、名けて虱髮と爲し、髮に依つて髮を食ふ。二戸の蟲あつて、眼に依つて眼を食ふ。四戸の蟲あつて、一を鞍乘と名け、二を有鬪と名け、三を發病と名け、四を圓滿と名け、頭に依つて頭を食ふ。一戸の蟲あつて黒稻葉と名け、耳に依つて耳を食ふ。一戸の蟲あつて、名けて藏口と爲し、鼻に依つて鼻を食ふ。二戸の蟲あつて、一を遙擲と名け、二を週擲と名け、脣に依つて脣を啜ふ。一戸の蟲あつて、名けて針口と曰ひ、舌に依つて舌を食ふ。一戸の蟲あつて、

【一四】八萬戸。
異譯本に「八萬種」とあり。

二十八の七日、母胎に處る時には、八種の顛倒の想を生ず。何等を八と爲す。一には乘騎の想、二には樓閣の想、三には牀榻の想、四には泉流の想、五には池沼の想、六には河の想、七には園の想、八には苑の想なり。是の故を、名けて八種の想と爲す。

二十九の七日、母胎に處る時に、復感する業風を、名けて華條と曰ふ。此の風力に由つて、此の胎身をして、光色潤澤に諸相分明ならしむるに、皆過去に造りし所の諸の業の差別に由つて同じからず。其の形類に隨ひ種種の色あつて、或は白色を作し、或は復黑色、或は不白・不黒の色、或は青色を作し、或は乾枯の色、或は潤澤の色と、是くの如き色相を而ち成就することを得るなり。

三十の七日、母胎に處る時に、復感する業風を、名けて鐵口と爲す。此の風力に由つて、髮毛・爪甲は皆增長することを得、亦復能く白・黒の諸光を現することは、業の緣起に従つて此の相を生ずるなり。

三十一の七日、乃至、三十五の七日、母胎に處る時に、身相は長大に漸漸増廣して、人相具足するなり。

三十六の七日、母胎に處る時に、厭離の心を生じて以て樂を爲さす。

三十七の七日、母胎に處る時に、便ち五種の顛倒ならざる想を起す。何者を五と爲す。一には、不淨の想なり。二には、臭穢の想なり。三には、圜圓の想なり。四には、黒闇の想なり。五には、厭惡の想なり。其の子は胎に處つて、是等の如き厭離の心を生ずるなり。

三十八の七日、母胎に處る時に、復感する業風を、名けて拘緣と曰ふ。此の風力に由つて、即便に迴轉す。復一風の名けて趣下と爲すあり。能く其の身をして、頭は下に向ひ、長く兩臂を伸して、漸く出生せんと欲せしむ。然るに、其の此の子、或は前世に於て、曾て墮落の業を積集するを經ば、其の此の身の手脚をして、縱横に顛倒する能はざらしめ、惡業の緣の故にて、母の腹中に於

二十七の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて曲鑰と爲す。此の風力に由つて、其の身相をして漸く成就することを得しむるに、或は先世に於て、諸の惡業を造り、諸の資具に於て慳貪^{けんこん}悋惜^{りんしやく}して惠施することを肯ぜず、或は復、父母・師長の教誨を受けざりしならば、是の業に由る故にて種種の不如意の身を得るなり。若し長大・肥白・柔軟の身を以て端正と爲す者には、而も便ち短小・瘦黑・堅鞭の身を受得し、若し短小・瘦黑・堅鞭の身を以て端正と爲す者には、而も便ち長大・肥白・柔軟の身を受得し、若し其の身の支分の中に於て、高下・多少・疎密を端正と爲す者には、而も便ち高下・疎密ある無き不具足の身を受得し、或は復、瞶・盲・瘡・癩・手足癱瘓・諸根不具にて、有つ所の音聲は人聞くこと喜ばず、是の身醜陋にして猶俄鬼の如くなるを受得し、惡業の故を以て、種種なる不如意の身を受けて、父母・親屬すら尙見ることを喜ばず。況んや、復餘の人をや。若し前世に於て、十善業を造り、好んで惠施を行ひ、慳貪・譎誑の心ある無く、父母・師長の有つ所の言教を即ち皆信受し、是の因縁を以て若し人と爲ることを得ば、則ち上の如き諸の惡業の身を受けずして、便ち種種なる殊妙の身を獲得し、顏容端正に、諸相具足し、有つ所の言音は而ち衆人に爲つて愛樂せらるるなり。是の故に、當に知るべし、善業に由る故にて、便ち是くの如き勝妙なる果報を得ることとを。阿難、是くの如き身は、若し是れ男ならば、母の腹に右脇に踞居して坐し、兩手にて面を掩ひ、脊に向つて住し、若し是れ女ならば、左脇に踞居し、兩手にて面を掩ひ、脊に背いて住し、生藏の下・鞞藏の上にて、内熱にて煎煮せられ、五處は繫縛せられて革囊に在るが如くにして、其の母の多食、或は復小食・甘食・澁食・乾食・膩食・辛鹹・苦醋・冷熱の食、或は復姪欲・急行・跳躑・久臥・久坐に皆苦惱を受くるなり。是の故に、當に知るべし、母胎に處る時に、是くの如き等の衆苦の逼迫あることを。我れ今略して人中を説くすら尙爾り、何に況んや、地獄ならば驗を爲すべき難ければ、誰れか智者にして、生死の海に於て、當に此の身を樂ふべきあらん。

- 【一】 生藏 (Janakaya)。胃を謂ふ。
- 【二】 熟藏 (Antro)。腸を謂ふ。
- 【三】 五處。兩手兩足及び胴體を謂ふ。

中に於て種種の骨を生ずること、左脚の中に於て二十骨を生じ、復右脚に於て亦二十を生じ、足の根には四骨、踵に二骨あり、膝に二骨あり。髀に二骨、腰・膀に三骨、脊に十八骨、肋に二十四、胸に十三骨、左右の二手に各二十骨あり。臂に四骨あり、肩に二骨あり、頷に二骨あり、鬲胸に四骨、及び齒根等に三十二あるなり。譬へば、塑師及び其の弟子の、先づ堅木を以ひ、後に繩を以て纏うて諸の形状を造るに、未だ泥を有たずと雖も、是くの如き時を名けて骨相と爲すが如くに、業風力を以て諸骨を生ずる時も亦復是くの如し。是の故に當に知るべし、七日の中に於て、其の小骨を除いて、大骨を生ずる者に數二百あることを。

二十一の七日、母胎に處る時に、復感ずる業風を、名けて生起と爲す。此の風力に由つて、能く其の子をして身肉を生ぜしむ。譬へば、泥師及び其の弟子の、善く泥を調じて諸の牆壁を泥し能ふが如く、此に業風に由つて能く身肉を生ずることも、亦復是くの如し。

二十二の七日、母胎に處る時に復感ずる業風を、名けて浮流と曰ふ。此の風力に由つて能く身血を生ずるなり。

二十三の七日、母胎に處る時に復感ずる業風を、名けて淨持と爲す。此の風力に由つて能く身の皮を生ずるなり。

二十四の七日、母胎に處る時に復感ずる業風を、名けて持雲と曰ふ。此の風力に由つて、其の皮膚をして皆調均を得て、光色潤澤なるを得しむるなり。

二十五の七日、母胎に處る時に復感ずる業風を、名けて持城と曰ふ。此の風力に由つて、其の子の身をして、血肉増長して漸漸に滋潤ならしむるなり。

二十六の七日、母胎に處る時に復感ずる業風を、名けて生成と曰ふ。此の風力に由つて、便ち能く髮毛・爪甲を生じて、一一皆諸脈と相ひ連るなり。

是れなり。是の八萬の脈は、一脈に一根にして、其の根上に於て一孔或は復二孔、乃至、七孔を生じ、一皆毛孔と相ひ連ること、猶藕根の諸の孔穴を生ぜるが如し。

十六の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて甘露と爲す。此の風力に由つて、此の眼、耳・鼻・口・胸・臆・心藏・四邊の九孔の處をして悉く開發して、出入の氣息をして、上下通徹して障礙ある無からしめ、若し飲食するあらば、其の身を滋潤し、停積する處あらば復能く銷化して下より流出すること、譬へば箒師及び其の弟子の、能く善く泥を調じて輪繩に安布して下上に迴轉するに、造る所の器物は而ち成就することを得るが如し。此れも亦是くの如くに、皆風力及び善惡の業に由つて、眼・耳等をして漸漸に具足せしむるなり。

十七の七日、母胎に處る時に復感する業風を、髻牛面と名く。此の風力に由る故に、其の兩眼をして光潔を得、耳・鼻の諸根を漸漸に成就せしむること、譬へば鏡の塵翳に覆はるるあるに、或は埴末及び油灰を取り、磨拭して淨からしむるが如し。是の故に當に知るべし、業風の力を以て、其の眼等を吹きて明淨なるを得しむること、亦復是くの如きことを。

十八の七日、母胎に處る時に復感する業風を、大堅強と名く。此の風力に由つて、其の諸根をして漸漸に成就して復明淨ならしむること、猶日月を雲霧の覆蔽するに、猛風卒に起り吹きて四散せしめ、而ち此の日月の忽然として大に明なるが如し。是の業風の其の諸根を吹くを以て、轉更に明淨なることも亦復是くの如きなり。

十九の七日、母胎に處る時に、前の風力に由つて眼・耳・鼻・舌の四根は成就す。初胎に入れる時に、已に三根——一には身根、二には命根、三には意根——を具せしが、是くの如くにして諸根を悉く已に具足するなり。

二十の七日、母胎に處る時に、復感する業風を、名けて堅固と曰ふ。此の風力に由つて、能く身

て便すなはち息滅す。

十二の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて曲口まがぐちと爲す。此の風力に由つて、左右の脇間に大小腸ちゆうちゆうを生ずること、猶藕絲くわし及び緊紡きんぼうの線の、地に置き在るが如く、十八周轉し身に依つて住す。復、一風の名けて穿髮せんぱつと爲すあり。此の風に由る故に、三百二十の支節及び百一の穴は生じて身中に在り。

十三の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて飢渴きかつと作す。此の風力に由つて、胎身は虚羸こゝろして飢渴の想おぼを生じ、其の母の飲食して有つ所の滋味を、身穴中に於て及び臍輪せりんを以て資持し潤益くわんするなり。

爾その時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

其の子の母胎ぼたに處るや 已まに十三の七を經ば 身は即ち虚羸こゝろを覺え 便ち飢渴の想を生ず 母の有つ所の飲食もて 胎中に於て滋益し 此の身命の存するに由つて 漸漸ぜんぜんに而ち增長すと。

十四の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて線口せんぐちと爲す。此の風力に由つて、九百の筋を身の前後及び左右に生じて、之れを交へ絡かふ。

十五の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて蓮華れんげと爲す。此の風力に由つて、二十の脈みやくを生じて、飲食の滋味は此の脈に流入して其の身を潤益するなり。何者か二十なる。身の前後及び左右に於て、各五脈あり。此の一一の脈に、皆四十の枝派の小脈あり。是等の如き脈に、各各復一百の枝派あつて、身の前の二萬を名けて商佉じやうこと曰ひ、身の後の二萬之れを名けて力と爲し、身の左の二萬を名けて安定あんていと爲し、身の右の二萬を名けて具勢ぐしと爲す。是くの如くにして、八萬の大支脈は此の身に生ずるなり。其の脈に復種種の色あつて、謂はゆる青・黄・赤・白・酥そ・酪らく・油の色、

をして轉じて 伽那と爲さしめ、狀泥石の如し。内熱煎煮して四大漸く増す。

第五の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて攝持と爲す。此の風力に由つて、能く伽那をして轉じて 般羅奢佉と爲さしめ、諸胞開剖し、兩脛・兩肩及び其の身首は而く便ち出現す。春陽の月に、天時雨を降して、樹木枝條而く便ち出生するが如くに、業風の力に因つて諸胞の現する時も、亦復是くの如し。

第六の七日、母胎に處る時に復感する業風、之れを名けて飯と爲す。此の風力に由つて四相は出現す。云何なるを四と爲す。謂はゆる雨膝・雨肘を名けて四相と爲すなり。

第七の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて旋轉と爲す。此の風力に由つて四相は出現す。謂はゆる 手足の掌の縷の相にして、其の相の柔軟なること猶聚沫の如し。

第八の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて翻轉と爲す。此の風力に由つて二十相は現す。謂はゆる手足の二十の指の相の、而く便ち出生するなり。天の雨を降して、樹木の枝條の漸く増長するを得るが如くに、業風の故にて諸相の現前することも亦復是くの如し。

第九の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて分散と爲す。此の風力に由つて九種の相を現す。云何なるを九と爲す。謂はゆる眼・耳・鼻・口・大小便の處を名けて九相と爲すなり。

第十の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて堅韌と爲す。此の風力に由つて即便に堅實なり。復、一風の名けて普門と爲すあり。其の胎身を吹いて悉く脹滿せしむること、猶浮囊の如し。

十一の七日、母胎に處る時に復感する業風を、名けて金剛と曰ふ。此の風力の、胎中に在つて或は上り或は下るに由つて、其の身孔をして皆通徹を得しめ、又風力を以て、懷胎の者をして、或は復悲喜して、行・住・坐・臥に其の性を常より改めて手足を運動せしめ、胎身の孔をして漸漸に増長し、其の口中に於て黒血を出し、復鼻中よりして穢惡の水を出さしむ。此の風は諸根に廻轉し已つ

【八】伽那(Ghana)。凝厚・肉圓などと譯す。

【九】般羅奢佉(Parasika)。五支・形位などと譯す。

【一〇】手足の掌の縷の相。異譯本には「兩手の曼・兩足の曼」とあり。曼は長廣の義なり。

するを得ざるなり。是の故に、當に知るべし、父母従りして此の身ありと雖も、諸縁の中に求めて皆得べからず、和合力の故にて便ち生を受くることを。

復次に、阿難、譬へば、明眼の人の、日光珠を持ちて日中に置き、乾きたる牛糞を以て其の上に懸けて、珠を去ること遠からずんば、火は便ち出生すれども、即ち牛・糞及び以て日光の、各能く火を生ずるにあらずして、亦相ひ離れざる因縁力の故にて、火は便ち出生するが如く、父母に従つて生ずる所の身も亦復是くの如し。歌羅邏の身、之れを名けて色と爲し、受・想・行・識、之れを説いて名と爲し、名色の五陰にて刹那に身を受け已るや、諸の苦を経ることは我れ讚嘆せず。沉んや復、長時に諸有に輪廻することをや。譬へば、少糞の如きすら獨尙臭穢なるを、何に沉んや多きに於てをや。是くの如くに、五陰の歌羅邏の身を誰れか當に愛樂すべけんや。

復次に、阿難、是くの如き身は、母胎に處在すること凡そ三十八の七日を經已つて、方に乃ち出生するなり。

第一の七日、母胎に處る時を歌羅邏と名く。身相初めて現すること、猶生酪の如し。七日の中に内熱煎煮して、四大漸く成る。

第二の七日、母胎に處る時に感ずる所の業風を、名けて遍滿と爲す。其の風微細に母の左脇及び右脇より吹き、歌羅邏の身相をして、漸く狀の稠酪の如く或は凝酥に似たるを現せしめ内熱煎煮して便即ち安浮陀身と轉じ爲す。是くの如くにして四大は漸漸に成就す。

第三の七日、母胎に處る時に復感ずる業風を、名けて藏口と爲す。此の風力に由つて、漸く其の安浮陀を凝結せしめ、轉じて閉手と爲し、狀藥杵の如くにして復短小なり。其の胎中に於て内熱煎煮し、是くの如くにして四大は漸漸に増長す。

第四の七日、母胎に處る時に復感ずる業風を、名けて攝取と爲す。此の風力に由つて、能く閉手

【六】安浮陀(Arduḍa)。痲子と譯す。受胎後第二の七日間の稱なり。

【七】閉手(Cesā)。閉戸・凝結と譯す。

すが如きは、諸縁の中には皆得べからざれども、和合力の故に蠶は乃ち生ずるを得るなり。歌羅邏の身も亦復是くの如き因縁力の故にて、便ち受胎するを得るなり。

復次に、阿難、譬へば青草・牛糞及以び糞・酪に依止して各蟲を生ずれども、一一の中には蠶は得べからずして、因縁力の故にて蠶は乃ち生ずるを得、此の蟲の生ずる時に青・黄・赤・白と各依る所に随つて其の色を作すが如し。是の故に、當に知るべし、父母の不淨にて此の身を生ずるに、諸縁の中に求むとも皆得べからざれども、亦縁を離れざる和合力の故にて便ち胎を受け、此の身の生ずる時には、其の父母の四大種の性と亦差別無きなり。謂はゆる、地にて堅性を爲し、水にて濕性を爲し、火にて熱性を爲し、風にて動性を爲すなり。歌羅身にして、若し唯地界にして水界無くば、譬へば、人あつて、乾きたる粉灰を握るが如くにして、終まで和合せず。若し唯水界にして地界無くば、譬へば、油水の其の性潤濕にして堅實ある無ければ、即便に流散するが如し。若し唯地・水にして火界無くば、譬へば、夏月の陰處の肉團の、日光の照す無きは、則便に爛壞するが如し。唯地・水・火のみにて風界無くば、則ち増長せざること、譬へば、人及び其の弟子あつて、善く糖を吹く有らゆる所作を能くして、其の内をして悉く空虚ならしめんとせしむとも、若し風力無くんば終まで成就せざるが如し。是くの如くに、四大は互に相ひ依持して建立することを得るなり。是の故に、當に知るべし、歌羅邏の身の、父母の四大の業風に因つて生ずるを得ることも、亦復是くの如くにして、衆縁の中には皆得べからざれども、和合力の故にて便ち身を受くるものなることを。

復次に、阿難、譬へば、新淨なる種子を善く能く積集せば、蟲に爲つて食れず、爛壞・乾焦・穿穴するある無きが如く、或は復人あつて、良田潤沃の處を選択して此の種子を下さば、一日の中に芽・莖・枝・葉をして扶疎蔭映し、華・果をして滋茂せしむることを皆具足するや、不や。不なり、世尊。佛、阿難に告ぐらく。歌羅邏の身も亦復是くの如く、皆因縁より次第に生長し、一時に諸根の具足

或は下く、或は復短小及び諸の雜病と、若し是くの如くんば、入胎するを得ず。若しくは、父母は尊貴にして大福德あるに中陰は卑賤なる、或は中陰は尊貴にして大福德あるに父母は卑賤なる、或は俱に福德なれども相ひ感ずる業無き、若し是くの如くんば、亦受胎せず。是くの如くにして、中陰の受胎せんと欲する時には、先づ二種の顛倒の心を起す。云何なるを二と爲す。謂はゆる父母の和合する時に、若し是れ男ならば、母に於て愛を生じて父に於て瞋を生じ、父の胤を流す時に、是れ己れの有なりと謂ふ。若し是れ女ならば、父に於て愛を生じて母に於て瞋を生じ、母の胤を流す時に亦己が有なりと謂ふ。若し此の瞋・愛の心を起さずんば、則ち受胎せざるなり。

復次に、阿難、云何にして母胎に入るを得る。謂はゆる、父母は愛染の心を起し、月期調順し、中陰現前し、上の如き衆多の過患ある無くして、業縁具足せば、便ち入胎するを得。是くの如くにして、中陰の入胎せんと欲する時に、復二種あり。云何なるを二と爲す。一には、福德ある無きもの、二には大福德有るものなり。其の福無き者の覺觀の心の起るや、見る所の境界に便ち是の念を作すなり。我れ今風寒・陰剛に値遇し、大衆は憤鬧して衆威もて來り逼ると、便ち恐怖を生じ、我れ今應當に草室及び葦室に入り、或は牆根に隠れ、或は山澤・叢林・窟穴に入るべしと。復、更に種種の諸想を生じ、其の見る所に隨せて便ち母胎に入るなり。大福德の者は、亦是の念を生ず。我れ今風寒・陰雨、大衆の憤鬧して衆威もて來り逼るに値遇すと、亦恐怖を生じ、即ち高樓に上り、或は大閣に登り、或は殿堂及び牀座に入ると。亦諸餘の種種なる想を生じ、其の見る所に隨せて便ち母胎に入るなり。

佛、阿難に告ぐらく。是くの如く中陰の初めて受胎する時を 歌羅邏と名く。皆父母の不淨及び過去の業に依つて受くるを得たる身なり。是くの如き業及び父母の諸縁の中、各自のみにて生ぜず。和合力の故にて便ち身を受くること、譬へば器を以て醴及び以て細等を盛るに、即便ち醴を出

【五】歌羅邏(Kālah) 凝滯と譯す。父母の兩精和合して受生後、七日間の物の稱なり。

卷の第五十五

唐 菩提流志 漢譯

佛爲阿難說人處胎會 第十三

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は舍衛國の 祇樹給孤獨園に在せしが、尊者 阿難は、日の
哺るる時に於て禪定より起ち、五百の比丘と俱に佛の所に詣り、合掌し恭敬して佛足を頂禮し、却
いて一面に住れり。爾の時に、世尊は、即阿難及び諸の比丘に告ぐらく。我れに法要の、初・中・後
に善なるあり。其の義は微妙に純一無雜にして、清白なる梵行の相を具足せり。謂はゆる入母胎藏
の修多羅の法なり。應當に諦に聽きて、善く之れを思念すべし。我れ今汝が爲めに分別して解説
せん。と。阿難、佛に白して言はく。唯然り、世尊、願はくば、聞かんことを樂欲す。と。

爾の時に、世尊は阿難に告げて言はく。若し衆生あつて、胎に入らんと欲する時に、因緣具足せ
ば便ち身を受くることを得れども、若し具足せずんば則ち身を受けず。云何なるを名けて、緣の不
具足と爲す。謂ふ所のものは、父母の愛染の心を起すや、中陰は現前して生を受くる處を求む。然
るに、此に父母の赤白の和合するに、或は前或は後にして俱時ならざるか、復は身中に於て 各諸
患あるか。若し是くの如くならば、則ち入胎せず。其の母の胎藏は、或は風黃を患へて血氣閉塞し、
或は胎は閉塞し、或は肉は増結し、或は鹹病あり、或は麥腹病、或は蟻腰病、或は駝口の如く、或
は車轆の曲木、或は車軸の如く、或は車轂の口、或は樹葉の如く、或は曲透・旋轉して狀 藤笋の如く、
或は胎藏の内は猶麥の芒の如く、或は精血多く泄れて暫くの停住もせず、或は滯下つて水を流し、
或は胎藏の路澁り、或は上に尖り、下に尖り、或は曲り、或は淺く、或は復穿ち漏れ、或は高く、

佛爲阿難說人處胎會第十三

九九七

【一】祇樹給孤獨園。祇陀林の給孤獨園なり、第二卷 同名の解、参照。

【二】阿難。阿難陀の略なり。異譯本、佛說胞胎經(西晉、竺法護、譯)には「難陀」とあり。

【三】初・中・後に善なるあり。異譯本に「初語も亦善く、中語も亦善く、竟語も亦善く」とあり。

【四】中陰。中有と云ふ。死して次に生ずるまでの中間にて受くる陰(蘊)形にして、趣生する處の形に同じとせらる。但し、大乘にては、極善・極惡の者には中陰無しと立つ。

爾の時に、世尊は而ち頌を説いて曰はく。

業の應に知るべき業に於て 報の應に知るべき報に於て 業無く亦報無きは 是れ安隱の涅槃なり
なり 諸の有爲は皆苦にして 中に於ては智ある無し 是の故に智の生じ已るや 有爲は皆
解脱す と。

爾の時、世尊の是の頌を説き已りたまふや、長老舍利子及び大苾芻并に諸の天・人・健達縛・阿素
洛等の一切の衆生は、佛の所説を聞き、皆大に歡喜して信受し奉行せり。」

【二五】業の應に知るべき業に於て、乃至、安隱の涅槃なり。異譯本に「業及び業の報に於て、應當に是くの如く知るべし。若し非業非報ならば、現前に出離を獲んと。」とあり。

の淨信を生じ已らば、當に最勝なる如來の果を得べし。若し最勝なる諸の供養を修めば、速に最勝の善道に登り、及び最勝尊の正見を證し、能く最勝なる微妙の法を宣べん。若し人中の聰敏者の親しく持てる諸佛の清淨なる法を樂ひ、當に修すべく、猛利に正しく欲樂し、多く聞きて理の如くに正しく思惟せば、轉輪の聖主を得るあり、或は帝釋梵天王と爲つて、廣く無量の勝功德を修めて、定つて無餘の大寂滅に趣かん、と。

爾の時に、世尊は、是の頌を説き已るや、長老舍利子に告ぐらく。若し大乘に安住する諸の善男子及び善女人あつて、疾く阿耨多羅三藐三菩提を證得せんと欲せば、當に是くの如き大菩薩藏の微妙なる法門に於て、猛利清淨なる欲樂を發生して、殷重に聽聞し受持し讀誦して、義趣に通達し、廣く他の爲めに説きて分別開示すべし。何を以ての故に。若し是の經に於て受持し讀誦し、乃至、他の爲めに分別して説かば、能く三寶をして永く斷絶せず、常に四無量の行を遠離せず、常に勤めて六到彼岸を修し、恒に正方便にて四攝の法を以て衆生を攝化せしむればなり。舍利子、是の大乗大菩薩藏の微妙なる法門の如きは、當に知るべし、即是れ、諸の菩薩道なることを、所以は何ぞ。是の經典は、善く能く阿耨多羅三藐三菩提を攝持する故なり。舍利子、是の經は乃ち是れ諸の菩薩等の聖珍寶の藏なれば、我れは是の經に依つて正しく修學し已るや、畢竟して生死の永斷を證得し、又一切の波羅蜜多を證し、是れを證する故に由つて即無上正等覺者と號せるなり。舍利子、如來は一切の波羅蜜多に於て、皆已に畢竟したり。如來は一切の所作の地に於て、皆已に靜息したり。如來は無量の諸地に於て、皆已に證得したり。又復、更に無邊の地を證したり。何を以ての故に。佛は是の諸の波羅蜜多を證する故に由つて、能く究竟して一切の到彼岸の法に安住したればなり。是の故に諸の菩薩摩訶薩は、應當に是の大菩薩藏の微妙なる法門に於て、精進に修行して、我が證せる所の如くなるべし、と。

【四】 諸の菩薩道。
異譯本には「菩提の道」とあり。
或は然るべし。

を。阿難、當に知るべし、是の六萬の衆の中にて、具に滿千人は、我が滅後に正法に盡くるに於て、又彼の刀兵の中劫を過ぎて、慈氏如來の未だ出現せざる前、衆生の壽命の漸く增長する時に、爾の時、臍部に八萬の獨覺の世に出現するに當り、是の一千の人は皆値遇するを得、供養して、善を修め、後に於て復慈氏如來に値ひ還供養するを得是れより已後、二十五拘那含那多劫を經るまで惡趣に墮せず、最後の人身にて、諸の善根力に覺曉せらるる故にて、淨信にて家を捨てて非家に趣き、便ち緣覺の菩提を證悟するを得ることを。阿難、當に知るべし、此の衆中に於て十千の人あつて、具に聖見を生じ、餘の千人等は同じく阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、復六十那由他の諸天子あつて、等しく速摩離垢して、諸法の中に於て淨法眼を生ずることを。是くの如くなれば、阿難、誰れか斯の殊特なる勝利を見て、佛の所に於て、淨信を生じ愛樂し恭敬して希有の心を發さざらん。唯愚癡不肖の士を除くのみ。何を以ての故に。彼の諸人等は、如來の所に於て、但是くの如き微細の善根を修むるすら、乃ち能く如來の大利を獲得し、或は復無上涅槃に證入すればなり。と。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

佛所に於て諸の供養を修せば 斯くの如き勝功德を獲得す 若し高大なる果を希求するあらば 當に導師に於て供養を修むべし 若し佛の現在に供養を修め 或は復佛の涅槃の後に於て 馱都を供養すること芥子の如くなりとも 當に諸の如來に侍し奉るを得ん 若し復諸の供養を修せんと欲して 如來の住世或は涅槃に 馱都を供養すること芥子の如くなりとも 平等を行する心ならば果も平等なり 若し具に平等心を修めて 平等人中の上を供養するあらば 當に平等の勝報を成じ 及び平等なる妙菩提を證すべし 若し諸の善趣を攝し 衆の惡道を遮障し絶除せんと欲し 及び涅槃の路に趣向せんと欲するあらば 是くの如きを獲得すること難しと爲さず 佛の具せる最勝の淨尸羅と 佛の具せる最勝の三摩地とに 若し最勝

【三】馱都(Dhātu)。法界の體性の義にして舍利を指す。佛の身界を金剛不壞の實體と觀するに由るとあり。原語は Dhātu は實體の義なるが複數形 dhātuyo となりて所謂舍利と同義に用ひられ遂にその單數形にても舍利(遺骨)を意味するに至れり。

して禮を作し、佛に白して言はく。世尊、何の因縁あつて此の微笑を現したまへる。我れ惟ふに、如來の現したまへる神相には因縁無きに非ず。と。佛、阿難に告ぐらく。汝今當に知るべし。此の長者子那羅達多・七婦・男女・並に奴婢等の三十六人は、我れを供養せる善根力の故に由り、當來の世に千拘胝劫を経るまで惡趣に墮せず、人天の往返にて諸の快樂を受け、是の劫を過ぎ已るや、佛の出世して、名けて商主如來・應・正等覺・明・行・圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と曰へるに値ひ、是の佛の所に於て、供養し恭敬し尊重し讚嘆して廣く梵行を修め、是れより已後、復二十拘胝劫を経るまで惡道に墮せざることを。阿難、當に知るべし、是の長者子の七婦・七女及び七婢は、此に命終してより便ち女身を捨てて男子を成ずるを得、恒に那羅達多と相ひ捨離せずして菩薩の道を行じ、當來の世間に於て處ること一劫にして、阿耨多羅三藐三菩提を成じ得ることを。阿難、當に知るべし、長者子那羅達多菩薩摩訶薩の當に成佛せんとする時に、平等心如來應正等覺と號して、世に出現して十號具足し、是の大菩薩の有つ所の眷屬の當に成佛せんとする時に、皆同一に阿若末若如來應正等覺と號して十號を具足し、是の五百の樂工は、我れを供養せる善根力の故を以て、當來に又阿僧企耶劫を経るまで惡趣に墮せず、又彼の滿千拘胝を経るまで、轉輪聖王として翼從せらるることを。阿難、當に知るべし、是の五百の樂工を大略して言はば、是の劫中に於て十千の諸佛に値ふを得て、皆親承し供養して空しく過ぐる者無きを得、是れより已後に、同一の劫中に阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得て、皆美音と號し、是の十千の人は、我れを供養せる善根力の故を以て、中の四百人は、當に慈氏如來に值遇するを得て、彼の佛の所に於て淨く梵行を修し、諸漏を盡して便ち般涅槃するを得べく、餘る所の人等は、當來に又殞伽沙の等の是くの如き大劫を経るまで惡道に墮せずして、漸次に千拘胝の佛に値ふを得、彼の佛の所に於て廣く諸行を修め、爾の後に一切阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得て、皆同一に號して甚希有と名くること

圍遶すること、今の如くにして異なる無きを願ふことを憶持したまへ。又復、世尊、我等は唯來世に無量なる苦逼の衆生を度脱すること、今の如くにして異なる無きを願ふことを憶持したまへ。と。時に、長者子及び諸の來衆并に五百の樂工は、是の誓を作し已つて、復種種の微妙なる音樂を以て如來を供養し、右に遶ること三匝せり。爾の時に、世尊は此等を感む故に、虚空に上昇して結跏趺坐せり。時に五百の樂工は、既に如來の現せる此の神變を觀て、世尊の所に於て倍淨信を生ぜるに、佛の威力を以て、諸の音樂の器は、擗持を假らずして自然に上に踊つて空中に住任して、憑據する所無きに衆の伎樂を作して、樂會・充溢しつつ右に如來を遶れり。時に長者子と俱に來れる大衆は、感神變を觀て未曾有と歎じ、心に慶悅を生じて踊躍歡喜し、皆共に合掌して敬を如來に致せり。爾の時に、空中の周圍正に一踰羅那に等しきに、復無量百千の音樂あつて、亦執持する無きに自然にして現ざること、猶蜂房の虚空に懸り處るが如くにして、偈伎樂を作して微妙の音を發せり。爾の時に、長者子は、其の眷屬及び五百の樂工、十千の城人、及び先に來つて法を聽ける衆の内の六十千の人、諸の苾芻衆千二百五十人と、佛の威力の故にて皆空中に踊れり。又、佛の神力にて、上空の中に於て五百の樂臺は自然に出現せしが、是の諸の臺の中にて皆妙法を説けり。又、四つの大樂臺あつて佛の前に現ぜしが、莊嚴・彫飾は世の瑤異を窮めたり。又、無量百千拘胝の諸の天子衆あつて、空中に列り住して、天の曼陀羅華を以て佛の上に散ぜしが、佛の神力の故にて、散ずる所の花は虚空の中に於て變じて八萬の高妙の花臺を成ぜり。時に諸の大衆は上の臺中に是等の如き廣大なる莊嚴あるを觀、如來の所に於て、倍淨信・愛敬の心を生じて未曾有と歎じたり。

爾の時に、世尊は、諸の大衆の其の心の清淨なるを知り、又復那羅達多及び俱に來れる衆の増上なる意を了知し已り、便ち微笑を現ぜることは、前に廣く説くが如く、乃至、其の光は還つて頂よりして沒せり。時に、長老阿難は、既に微笑を觀るや、一つの肩衣を披き、佛に向つて合掌し恭敬

し、復千變の淨妙なる珍服を以て、以ひて佛の上に覆へり。時に長者子は是の奉を作し已つて、歡喜すること無量にして、即ち佛前に於て伽陀の讚を説けり。其の頌に曰はく。

第一なる有情微妙者 清淨行の上菩提を成じ 能く無邊なる勝智見を發したまへり 是くの如きに我れ今供養を修したてまつる 昔無量劫に多く修行し 衆生を利せんが爲めに大覺を求め 法の自在を證して現に佛を成じたまへり 是くの如きに我れ今供養を修したてまつる

我れ妻子眷屬の衆と 含識を利せんが爲めに菩提を求め 并に多千の人民等と 同じく共に大覺者に歸依したてまつる と。

爾の時に、長者子は是の伽陀を説き已つて、便ち佛に白して言はく。世尊、我れ今此の諸の有情等と如來の所に至り、皆已に阿耨多羅三藐三菩提に安住す。唯願はくば、世尊、此等を哀愍して、復法を説くに爲つて、當に一切をして阿耨多羅三藐三菩提に於て復とは退轉せざらしめたまへ。又、我れ今は、佛の所に於て諸の善根を種ゑんと欲すれば、唯願はくば、世尊、現に我が爲めに當に是くの如き善根力の故もて諸の衆生をして平等に速に阿耨多羅三藐三菩提を證せしめ、又無量なる廣大の佛法を獲ること、亦今者の現に在す世尊の如くならしむべきを證したまへ。と。時に長者子は、諸の眷屬・五百の樂工・十千の人衆と、一心に同聲にて佛に白して言はく。世尊、我等今は如來の前に於て、同じく共に至誠もて、佛に歸依し法に歸依し僧に歸依したてまつる。唯願はくば、世尊、我等是の鄔波索迦の、始今日より、乃至、壽の終るまで、寧ろ身命を棄つとも、清淨に歸趣する信心を捨てざることを憶持したまへ。又復、世尊、我等の、始今日より、乃至、菩提まで、阿耨多羅三藐三菩提の爲めの故に、増上なる勇猛の心を發起することを憶持したまへ。又復、世尊、我等は唯速に阿耨多羅三藐三菩提を證して、諸の衆生の爲めに正法を宣説すること、亦今者の如來の如くにして異なる無きを願ふことを憶持したまへ。又復、世尊、我等は唯來世に成佛の時に、大衆の

於て 今日の世尊の如くならんことを 此の乗は大乗として 最上なれば佛は稱讚したまひ

我れ與に等しき無きを觀る 故に菩提を欣樂す 危厄を拔濟せんが爲め 三惡趣を脱せん

が爲め 是の如來を求めんが爲め 世に出でて佛を現成せんことを と。

爾の時に、長者子・那羅達多是、是の頌を説き已つて便ち自ら思惟すらく。我れ今明に廣大なる佛法に達せり。如何かして以て妻子、諸の眷屬等を教化せずんば、此れ我れの宜に非るなりと。

是の念を作し已るや、即座より起ち、佛足を頂禮し、右に遶ること三匝して、速疾に家に還り嚴に種種なる諸の供養の具を辦じ、其の七妻・男・女・奴・婢各七人あると千雙の上妙なる衣服及び諸の華香、供養の具を齎し持ち、又五百の樂人とを相ひ隨へて、疾く王舍大城を出でたり。薄伽梵に見え奉らんと欲せんとする故なり。時に、王舍城に多くの人衆ありしが、長者子の、其の眷族と速疾に馳せ出づるを見、因つて問うて曰はく。汝等、今は何の匆遽あつて、諸の眷屬と將に何所に往かんとする。と。長者子言はく。諸の善男子、豈知らざるか。今は如來應正等覺は鷲峯山に止つて、無量なる百千の天人大衆は前後に圍遶し、無數なる方便もて、諸の衆生の爲めに廣大なる佛法を分別して開示する故に、我れ今は眷屬を率領して將に佛の所に往き、是くの如き廣大なる佛法を求むるを爲し、思議すべからず稱量すべからざる諸佛の智慧を成辦せんと欲するを爲し、無上正等菩提の善根を種植せんと欲するを爲さんとするなり。汝等、若し廣大なる諸佛の法を成就せんと欲せば、共に同じく彼の如來の所に詣るべく、當に共に是の廣大なる佛法の無上の善根を種うべきなり。と。爾の時に、王舍城中の人民の類は、長者子の是の語を説くを聞き已るや、十千の人あつて、皆樂うて隨從して佛の所に往き至れり。時に、長者子那羅達多是、其の眷屬及び隨從せる滿十千の人と同時に佛に見え、佛足を頂禮し却いて一面に住れり。時に長者子は、諸べて俱に來れる有らゆる大衆と、花鬘・塗香・末香・衣蓋・幢幡を齎し持ち、偈伎樂を作して如來を歌詠し讚嘆し供養

藐三菩提は、甚だ證信し難く甚だ修習し難きを、汝今乃ち能く深く是の意を發せり。と。時に、長者子は、佛に白して言はく。世尊、無上菩提は復甚だ證信し修習し難しと雖も、然れども我れ今は是くの如き勇猛なる精進を發起したれば、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を修習すること、以て難しと爲さざるべく、又我れ此の阿耨多羅三藐三菩提に於て奉修すること牢強にして、定つて退轉する無からん。世尊、我れ今者大弘誓を發すに於ては、假に菩提心を發すことをして、殑伽河の數の如くにして、方に無上正等覺を證する者ならしむとも、我れは是の事に於て彌精進を増さん。乃至、上の如き一一の發心は、殑伽沙の等の劫を經、乃至、是に菩提心を發すに隨ひ、一一發す所には、要す殑伽沙の等の身分の頭首を斬るに由つて方に能く起る者は是れ菩提心ならば、復是くの如き勤苦を經履すと雖も、我れは是の中に於て倍精進を加へて、終まで無上菩提を放捨せじ。何を以ての故に。縦ひ是くの如き諸の苦難の事に逢ふとも、猶應に修習して、斯の縁を藉る故にて、必ず菩提を證すべきに、何に況んや、無上菩提を證する爲めに諸の安樂を受くることにして、修學せざらんや。所以は何ぞ。阿耨多羅三藐三菩提は、其の性高廣にして、周く大なる無上の佛法を具足して、思議すべからず、稱量すべからず、涯際ある無く、宣説すべからず。復、諸佛の障礙無き智にて、百千拘胝那庾多劫を經歷して、諸の言音を以て此の菩提を説くと雖も、易く盡すべきに非れはなり。と。

爾の時に、長者子那羅達多是、即ち佛前に於てして、頌を説いて曰はく。

百千拘胝の劫にも 乃ち菩提心を發し 衆苦に迫らると雖も 含生界を捨てじ 菩提心を發すに隨ひ 諸の身首を斷つを要すること 聚量 迷樓より高くとも 我れ亦能く堪忍せん

我れの菩提に安住するは 含生を利樂せん故なれば 願はくば我れ來世に於て 今日の世尊の如くならんことを 彼の聲聞乘と 兼ねて下乘を濟す者とに 遠り 願はくば我れ來世に

【二】迷樓(Meru, Sumeru) 須彌山に同じ。

ることを得んと欲せば、當に是くの如き大菩薩藏の微妙なる法門に於て、殷重に聽聞し受持し讀誦して義趣に通達し、廣く他の爲めに説きて分別開示して、正行——謂はく。無相の行・無功用の行・無所得の行、是等の如き法を名けて正行と爲す——に安住すべきなり。と。

爾の時に、大衆の中に、長者子の那羅達多と名くるあり。薄伽梵に従ひ、是くの如き大菩薩藏の微妙なる法門を説くを聞き、又諸佛菩薩の勝功德を讚嘆するを聞き已るや、即座より起ち、一の肩衣を披き、右膝の輪を以て地に安置し、佛に向ひて合掌し頂禮し恭敬して、佛に白して言はく。世尊、先に諸の長者等の爲めに、廣く諸法の相續して絶えざること説きて、是くの如くに開示し是くの如くに教導し、皆阿羅漢果を證得して、即此の生に於て老・死の際を盡さしめたまへり。而して、未だ大菩薩藏の微妙なる法門を説き、諸佛菩薩の功德を讚嘆したまふを聞かざりしに、我れは大利を幸して、今具に聞くことを得、竊に是の念を生じたり。是くの如き大乘は、尊と爲し勝と爲し、上と爲し妙と爲し、上ある無しと爲し、更に上に過ぐる無き謂はゆる阿耨多羅三藐三菩提なり。我れ今現前に親しく佛説を聞き、受持し領悟して諸法を開顯せり。是くの如き法は、諸法を分別するに、依り執ふる所無く、我・我所無く、攝受ある無し。と。世尊、我れ是の念を作せり。是くの如き妙法は、尊と爲し勝と爲し上と爲し妙と爲し、上ある無しと爲し、更に上に過ぐる無き是くの如き法をば、我れは當に修集すべし。と。世尊、我れ今思惟すらく。一切の乗中にて無上と爲す者は、謂はゆる二佛乘にして、諸佛如來も亦此の乘を説きて、最も第一と爲し最も無上と爲せば、我れは今日より無上正等覺の心を發起し、多くの衆生を利し安んぜんと欲する爲めの故に、諸の世間を悲愍せんと欲する爲めの故に、無量の天・人を利益し安樂にすること佛の建立したまふ如くならんと、諸の大菩薩の有つ所の學處を、我れ今皆當に悉く依り隨つて學ぶべし。と。是の語を説き已るや、爾の時に、世尊は、長者の子に告ぐらく。善い哉、善い哉、善男子。阿耨多羅三

【二】佛乘。一切衆生の悉く成佛すべき教法を謂ひ、又、三乗中の二乗に對して、菩薩乘をも謂ふことあり。

行せざる者ある無く、是くの如き無量の勤苦を作せりと雖も、然も佛の、我が爲めに記を授くるを蒙らざりしなり。所以は何ぞ。修する諸行の、皆有相なりしに由る故なり。是れより已後は、我れ方に是の大菩薩藏の微妙なる法門に於て、聞く所に隨ひ已に正行に安住せるが、是の行の如きは無相の行・無功用の行・無所得の行と謂ひ、是等の如き無相の行を行じ已りたれば、放光如來は乃ち授記を爲したまへるなり。舍利子、我れ憶ふに、往昔最初に放光佛に見ゆるを得たる時に、便ち一切の有相・有用の行を超過することを得、又初めて佛に見ゆるや、便ち能く一切の法性を隨覺し、又一切の諸法の自性の無性なるに通達することを得、是れよりして以後、放光如來は乃ち授記を爲して、是くの如き言——迷伽儒童、汝、來世に於て阿僧企耶劫を過ぎて、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼如來應正等覺と號すべし——を作したまへるなり。舍利子、記を授かる時に當つて、我れは便ち無生法忍を證得したり。舍利子、何等の無生法忍を證得せる。謂はゆる、一切の色法の得る所無き忍を證得し、受・想・行・識の法の得る所無き忍を證得し、蘊・界・處の法の得る所無き忍を證得せるなり。舍利子、忍を得と言ふは、是れ則ち、諸法は都べて得る所無し。と。忍受するを爲すに名くるなり。何を以ての故に。是くの如き忍を證得する時に於て、世間の法にして復現行するもの非ず。異生の法非ず。諸學の法非ず。無學の法非ず。獨覺の法非ず。菩薩の法非ず。諸佛の法にして復現行するもの非ざるなり。所以は何ぞ。一切法の現行せざる故に由つて、説いて忍を得と名け、一切法に畢竟じて得ること無く、亦所得も無き故に由つて、忍を得と名ければなり。又、是の忍は、一刹那に於て一切の相及び諸の所縁を盡す故に、忍と名くるを得るなり。又、是の忍は、眼を忍せざれども、眼及び諸の所縁を壞らざる故に忍を得と名け、耳・鼻・舌・身・意を忍せざれども意を壞らざるなり。是くの如き忍は、境界を盡すこと無く、是くの如き忍は、境界に趣くに非る故に忍を得と名くるなり。是の故に、舍利子、若し菩薩摩訶薩あつて、速に如來に授記せられて、是の忍を證す

を。と。又、堅固なる勢力の弘誓を發して、是くの如き言を作さく。若し如來をして、足趾を以て金色の髮を踏み、手を授けて安慰せず、及び我れに菩提の記を授けざらしめば、我れは終まで起たずして、即ち此の地に於て乾枯して命終らん。と。舍利子、爾の時に放光如來應正等覺は、遍照の眼・遍照の智を具して、三世の中に於て事として達知せざる無ければ、彼の迷伽の意欲を解し已り、便ち足趾を舉げて其の髮の上を踏み、即便に右に顧みること龍象の如くに廻り、諸の聲明一切の大衆に告ぐらく。汝等苾芻は其の髮を踏む勿れ。所以は何ぞ。此の儒童は、却いて後阿僧企耶劫を過ぎて、當に如來應正等覺を成じ、釋迦牟尼と號すべければなり。と。舍利子、是の時に迷伽は佛の授記を聞くや、歡喜踊躍して上虛空に上ること高さ七多羅樹にして百千那庾多拘胝の無動の諸定を證得し、又神通智力を以て、東方の刹伽沙の等を過ぎたる無量の諸佛の、皆授記を爲して、是くの如き言——儒童、當に知るべし、汝、來世に於て阿僧企耶劫を経て、當に佛を作して釋迦牟尼と號すべし——を作し、是くの如くに南・西・北方の四維・上下と、十方に周遍せる各刹伽沙の如き等の無量の如來も、皆東方の諸佛の如くに授記せるを觀見したり。舍利子、迷伽儒童は、既に諸佛の授記を蒙り安慰し已り、虛空より下り來り佛の所に詣り、信を以て家を捨てて非家に趣き、堅固なる清淨の梵行を修習せり。舍利子、汝、今此れに於て疑惑を生ずる無かれ。彼の往世の迷伽儒童と謂ふは、是れ餘人なるかと。是の觀を作す勿れ。即ち我れは彼れ儒童菩薩たればなり。我れに於ては、爾の時に是の五莖の青色の蓮華を以て彼の佛に散じ奉り、復金髮を解いて道上に敷き置き、如來の行くに與り、便ち授記を蒙りぬ。是の故に、舍利子、若し菩薩摩訶薩あつて、速に如來の記を受けんと欲せば、當に是くの如き大菩薩藏の微妙なる法門に於て、殷重に聽聞し受持し讀誦して義趣に通明し、廣く他の爲めに説きて分別開示すべく、復應に無相の正行を修行すべきなり。何を以ての故に。我れ憶ふに、往昔未だ放光佛に值遇するを得ざりし前には、一切の白淨の行法として修

女人は華を持ちて授け與へたるに、迷伽は花を取るや、便即到放光佛の所に往き詣るに、遙に如來の、無量百千拘匪那庾多の衆生に前後に圍繞せられ、威儀庠序として衆を導いて前み、乃至、無量百千の功德莊嚴を以て、彼よりして來れるを見たてまつり、世尊の所に於て心に淨信を生じ、無量種の清淨なる歡喜と深き愛重の心とを以て、前んで佛の所に詣り、恭敬・禮拜して欣慶に勝へず。又多くの人の、諸の大價の微妙なる衣服を以て、佛に供ぜん爲めの故に敷きて行道に施せるを見、便ち是の念を作さく。我れ今上妙なる衣服無く、唯著くる所の弊れたる鹿皮の衣ありと雖も、當に道中に敷きて如來の足を藉るべしと、是の念を作し已るや、衣を脱いで地に布けり。爾の時に、諸人は競うて皮の衣を取つて遠く他所に棄てて、咸嗤笑を生ずらく。云何ぞ、是の含靈中の寶として、此くの如き弊れたる鹿皮の衣を敷き設くることを爲すかと。時に彼の迷伽は、即便に馳せて、四衢の道邊の泥濕の處に往き、鹿皮の衣を取つて其の上に敷き置きて、是くの如き念を作さく。放光如來、大慈悲者、哀憐を我れに加へ、遍照の眼及び遍照の智を以て、希願を爲す所に觀を賜り、足を以て我が衣の上を踏みたまへ。と。爾の時に、如來は其の念する所を愍み、便ち足趾を以て鹿皮の衣を踏めるを、迷伽は見已るや、心に慶悅を生じて踊躍歡喜し、即持つ所の毘鉢羅華を以て、用ひて佛の上に散じたり。時に於て復無量の天子あつて、虚空の中に住りしが、天の曼陀羅華・毘鉢羅華・鉢摩華・拘賀陀華・奔荼利華及び天の栴檀末香を以て、俱に佛の上に散じ、天の音樂を作し、天の清歌を詠すること、遍く虚空に滿して大に供養を興せり。時に、彼の迷伽の散ぜる所の華は空中に列り住りしが、乃ち復無量千數の毘鉢羅の華葉と變成し、皆垂れ下つて華蓋を合成し、佛に隨つて行くを、迷伽は見已るや、倍復踊躍して心に淨信を生じ、如來の前に於て、十二年の金色の髮髻を解き、以て地に布き、便ち無上菩提の大願を發すらく。若し我れ、來世に當に如來應正等覺を成すべきこと、審に虚しからずば、唯願はくば、今は放光如來手を授けて安慰したまはんこと

更に財用を求めて師の徳に酬ゆべし。と。舍利子、爾の時に當り一の女人あつて、七莖の瓊鉢羅華を齎し持ちて市よりし來りしが、迷伽は告げて曰はく。何處にて此の水生の華を得來れるか。と。女曰はく。我れ某處の花鬘を賣る所に於て、五百羯利沙鉢那を以て此の華を買ひ得たり。と。迷伽告げて曰はく。今本の價を酬いば、華を與へ能ふや不や。女曰はく。然らず。又曰はく。若し許さずば、今五百羯利沙鉢那あり。汝當に獨にて此の七莖の華を取るべきか、二人にて當に共に爲すべきは爾るべきや、不や。と。女曰はく。卿此の華を用ひて何等を作さんとする。告げて曰はく。將に放光如來に散じ奉るに用ひんとす。女曰はく。卿の言ふ所の如くんば今より已往、諸の有趣に於て常に能く降り、及び我が夫とならば、當に此の華の持用を以て相ひ委すべし。と。爾の時に、迷伽は便ち女に報じて曰はく。止めよ、止めよ、女人。是の説を作す勿れ。何を以ての故に。汝、女人は、性掉動し輕轉して、諸の放逸多し。汝の言ふ所は收採するに足らず。又我れ阿僧企耶劫に於て佛法を修集するに當り、廣く布施を行するに、或は金・銀・珍寶・珊瑚・末尼・眞珠・琉璃・螺貝・璧玉・象・馬・駝・驢・牛・羊・群畜を以てし、乃至、或は大國の王位・車輅・服飾・內宮の妃后・男女・眷屬を捨て或は手・足・耳・鼻・皮・肉・骨・髓・髻中の明珠・眼目・頭首をも捨てん。大略して言はば、一切の内外の物にて、我が施の門に於てして捨てざる者ある無ければ、或は復時あつて當に汝をも捨つべし。佛法の中に入るには、信を以て出家して非家に趣くに、汝が性は掉動・輕轉・放逸なれば、或は爾の時に當つて、我が大捨に於て障礙を爲さん。と。其れに女は報じて曰はく。審に言ふ所の如くんば、我れは大利を爲さん。縦ひ卿をして今我れの此の身を賣つて、乃至、一羯利沙婆那に充てしむる者にも、終まで、異心して施に於て礙を留むること無けん。或は復、我が身を割截すること段段にして施に捨つとも、定つて、佛法を修集することに礙を留むる無けん。と。迷伽は告げて曰はく。若し能く是くの如くならば、此に則ち宜しく速に華を與ふべきを可と爲さん。と。爾の時に、

【六】 伊底訶婆 (Tithāa) 論。古傳説なり。

【七】 宗師傳。

異譯本に「軌範師」とあり。

【八】 迷伽 (Megha)。

異譯本には「寶雲」と譯用したり。

【九】 伐撻迷伽 (Vatsar-mog-
ha)。

【一〇】 羯利沙婆那 (Kāṣṭhā-
ra, Kāṣṭhāna)。

錢量の名なり。

童は以て弟子と爲り、衆人に宗とせられ、名徳遠く被り、善く藝術を持ち、三毘陀經に於て彼岸に達し、又尼毘茶書に於て及び五けい計羅婆論・分別字論・伊底訶婆論・五分記論・隨順世論・祠祀呪論・丈夫相論と、是等の論に於て皆善く通達し、及び自ら三明の大教に宗宗師傳として其の理趣を曉り、妙識もて開遮せり。舍利子、是の婆羅門に一僮童の、近く住せる弟子あつて、名けて迷伽迷伽と曰ひしが、學の珍寶を受けて備に幽旨に通じ、藝術・經論並に皆明達し、智は師と等しくして導首と爲るに堪へたり。時に彼の迷伽は、其の師に白して曰はく。大師、當に知るべし、學ぶ所の經論に皆已に通達したることを。我れ今當に自ら生れし所の地に返るべきも、云何にして大師の恩徳に酬い奉らんか。と。時に、師は告げて曰はく。伐菟迷伽、夫れ弟子として師の恩を報ぜんと欲するならば、當に財寶を以て方に原意を陳べし。謂ふ所のものは何等ぞ。若し五百羯利沙鉢那を辦ぜば、深心を表するに足らん。と。舍利子、爾の時に迷伽僮童は、師の教を受け已るや、敬を致して右に遶り、辭退して行き、遍く村城・亭館・國邑・王都に遊び、處處にて師に謝する財寶を追ひ覺め、既に具へ集め已りたれば、將に酬報を陳べんとして、漸漸に往いて盛蓮華城に詣りしが、遙に王都の種種の嚴飾の、華麗を明發して甚だ愛樂すべきを見、即ち傍人に問はく。今此の王都に何の盛事あつてか、榮飾して周く莊嚴を布くこと、乃ち爾る。と。傍人答へて曰はく。卿は知らざるか、今日、放光如來應正等覺は、八十拘陁の大阿羅漢、八萬四千の諸大菩薩と、將に此の城に入らんとすれば、其の中の人民は、當に大施を行ふべく、當に大福を興すべく、斯の事の故に由つて此の莊嚴を致せることを。と。時に迷伽僮童は、忽として是くの如き佛名の聲を聞くや、廣大なる歡喜と淨信とを獲得し、竊に自ら惟ひ付らく。諸佛如來の出世は甚だ難く、値ふことを得難きこと烏曇華に過ぎ、又盲龜の浮孔に遇ひ難きに似て、百千大劫の時に或は一遇はんのみ。我れ今見奉るは甚だ希有たり。應に此の五百羯利沙鉢那を以て華を質ひ、散じて放光如來に奉るべく定め、當に

【三】三毘陀經に於て、乃至、丈夫相論。
 異譯本には只「三種の曼多囉法、謂はゆる彌誹吒法・該訶婆法・惡利囉鉢捺法」とあり。而して、謂はゆる曼多囉(Mandara)とは、毘陀中の「歌羅」にして、同經中の婆羅摩(Brahman)即ち「儀式」に對する稱なれば本經の所説と一致せず。

(三) 毘陀經(Yoda)。「毘陀」は、印度に於ける最古の記載にして、且、婆羅門教の根本聖典と云はる。普通之れを(一)リケ吡陀(Berjeda) (太古の讚美歌を集めたる者) (二)サーマ・毘陀(Sama-yoda) (讚歌に樂譜を附して祭式の用に供せる者) (三)ヤジェル毘陀(Yajur-yoda) (祭祀の儀式・呪文を集めたる者) (四)アタル・毘陀(Atharva-yoda) (禳災・祈念の修法に用ふる祭歌を集めたる者)の四毘陀と稱すれど、若し三毘陀と云ふ時は、前の三つを指す者とす。
 【五】 尼毘茶書(Nig. ang. Nigantū) 漢譯に一切物名ともありて物名の字書なるべし。
 【五】 計羅婆論(Ketubhā, Ketubha) 文典の一種なり。

* 分別字論。文典なり。

軍衆を備へて佛後に隨從し、種種の上妙なる衣服・餽膳・飲食・麻敷・醫藥及び餘の資具を辦具して佛及び僧に供じ、乃至、如來に隨逐して、王の領せる國界の際に到り已るや、便ち佛足を禮し、遊ること無數匝にして、涕泣し哽噎して辭退し還りぬ。時に勝怨王は、放光如來の、諸の大衆と、將に此の盛蓮華城に來り詣らんとするを聞かや、即便に都する所の大城を嚴飾するに、一切の沙磧・瓦石を除去して清淨・夷坦にし、街巷道路を掃灑・修治して極めて華麗ならしめ、又、香水を以て重ねて霑灑を増し、名花を散布して量・人の膝に齊しくし、妙香の瓶を以て列ねて道に薰じ、種種の微妙なる寶衣を敷き置き、上虚空に於て幡蓋を張り施き、倡伎樂を作して騰舞充滿せしめたり。舍利子、時に勝怨王は、是等の如き莊嚴を作して、盛蓮華城の大王の都を綺飾し已るや、又、嚴勅を下し、鼓を撃ちて宣令すらく。此の王の都城の内外に於ける有らゆる花鬘・塗香等を、人の輒く自ら受用し并に將ち出でて賣らんとするある無く、一切皆當に放光如來に奉獻・供養すべし。若し此の令に違はば、當に重罰を加ふべしと。舍利子、時に勝怨王は、種種の花鬘・塗香・末香・珍妙なる衣服・幢幡・寶蓋を齎し持ち、種種の妙音樂を鼓し撃ち、又羽儀を設けて大嚴備を現し、王の威勢を以て都する所の城を出で、彼の如來を瞻仰せんと欲する爲めの故に并に禮を申べて諸の供養を拜陳せんとて、四種の軍及び王城内の有らゆる婆羅門・長者・居士・豪族の類等と佛の所に往き詣れり。既に彼に到り已るや、時に勝怨王は、最も先に彼の如來の足を頂にて禮し、復種種の花鬘・塗香・末香・上妙なる衣服・幢幡・寶蓋を以て如來を供養し、自ら供養し已るや、復、王子・大臣及び諸の侍衛・婆羅門・長者・居士等をして、亦大王の如くに廣く供養を修めしめたり。舍利子、時に勝怨王は、既に供養し已るや、歡喜の心を具し、妙善の心を具し、離蓋の心を具し、適悅の心を具して、諸の群臣と而ち佛後に隨ひたり。

舍利子、爾の時に、婆羅門の名けて珍寶と曰へるあつて、大雪山王の側に住せしが、五百の儒

【二】僮童(Mānavaṅka) 童子の總稱なり。

大王の宮に安處して、能く清淨なる勝功德を生ずと謂ふこと非れ、要す仙幢袈裟の相を假りて無上なる妙菩提を果證せよ。盛壯は須臾にして流るるが若く逝き、迅速なること大猛風に過ぎたり、喜樂すべからず弊衰老は、世間の愛する所を摧壞すれば、衰老は能く勢力を薄からしめ、欣樂を得難ければ非家に趣け、大仙今は極めて盛年なれば、宜しく當に時に及んで精進を發すべし、善い哉善い哉大慧の者、善い哉善い哉大超悟、善い哉善い哉速に出家せば定つて堅固なる正等覺を成ぜん、と。

舍利子、時に放光菩薩摩訶薩は、淨居天に爲つて開悟せられ已るや、清淨の信を以て非家に趣きしが、出家する夜に當つて即、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり。時に彼の世尊は、便ち是くの如き廣大なる名稱を以て世間に出現し、號して放光如來と曰ひ、十號具足して、諸の天人の讚頌する所と爲れり。時に勝怨王は、光主王の子の出家・修行して無上正等菩提を證得し、名けて放光と曰へるを聞くや、即便に往いて光主王に告げて言はく、我れ聞く、卿の子は出家して成佛せりと。不審し、世尊の大慈悲の故にて、能く來り降るや、不や。若し愍を垂れて此に至らずば、我れ當に嚴しく四種の力軍を備へて如來の所に往き、躬ら奉敬を事とせん。と。舍利子、時に光主王は、即大臣と守衛の軍衆とを集めて、具に是の事を宣ふるに、諸の大臣は言はく、王今に於ては、應に自ら往いて放光如來に詣つて、是の事——大悲なる世尊は、衆生を愍む故にて、彼の勝怨王の所に往かんと欲するを爲すや。往かざるを爲すや——を諮問すべし。と。時に光主王は、即便に嚴駕して、諸の大臣・侍衛・導從と如來の所に往き、既に彼に到り已るや佛足を頂禮し、即上の事を以て具に世尊に白せり。時に放光如來は、父王に告げて曰はく、大王、當に知るべし、我れ今往いて勝怨王の所に詣らん。衆生を愍む故に。と。舍利子、時に放光如來は、樂欲する所に隨ひ、別に一處——勝怨王の都——に往せんとて、即二十拘陁の大阿羅漢と出でて彼の國に詣れり。爾の時に、父王も亦四種の強力な

に廣大なる菩提の勝願を起すと雖も、然れども彼の如來は我れに記を授けて、來世に於て當に佛を作して、釋迦牟尼如來應正等覺と號すと云はざりき。

舍利子、寶性如來の滅度の後より阿僧企耶劫を経て、佛あつて世に出で、名けて放光如來・應・正等覺・明・行・圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と曰へり。舍利子、何の義の故を以て、佛を放光と名けたるか。舍利子、爾の時に當り、王の世に出でて名けて勝怨と曰へるあり。都する所の大城を盛蓮華と名け、安隱・豐樂に、人民熾盛に、財寶・衆具は充積流溢せり。王に大臣あり。婆羅門種にして、名けて光主と曰ひしが、其の家は巨富にして、財産は倉庫に具足し充滿せり。而して是の大臣は、勝怨王に爲つて偏に其の徳を愛重・欣慕せられ、常に見遇せられて情に厭逆無かりき。舍利子、時に勝怨王は、王の國とする所の四分の一を割きて此の大臣に賜ひ、封じて以て王と爲せり。時に光主王は、小國を治するに、法を以て世を御して邪枉を行はざりき。舍利子、是の光主王は後の異時に於て太子を誕生せしが、形貌端正にして衆に樂觀せられ、第一圓滿なる淨色を成就し、三十二の大丈夫の相の具足を以て莊嚴せり。又、王子の一切の身分に於て、皆光明を放つこと、猶日輪の照曜する所の如くなりしかば、因んで號を立つるを爲して、名けて放光と曰へるなり。舍利子、時に光主王は、國中の諸の婆羅門の、善く相を占ふ者を召し集め、皆悉く集り已るや、便ち王子を示して、其れをして之れを相せしむるに、諸の婆羅門は既に相を觀已るや、便ち是の言を作さく。今此の王子は、定つて當に佛と作るべしと。時に光主王は、即ち王子を以て諸養母に付せしが、其の後久しからずして、身相は長大に聰敏は明達せり。時に淨居天の、色究竟天宮に處るもの、通智力を以て、是の王子の將に正覺に登らんとするを知り、便ち彼より洩し來つて、放光王子菩薩の止る所の處に至り已るや、右に菩薩を遶り、即ち其の前に於て、是の頌を説いて曰はく。

【一】放光(Dharmakara)。異譯本には「然燈」とあり。即ち、後に成佛して、釋尊の因位に成佛の記別を授けたり。

舍利子、大蘊如來の滅度の後より阿僧企耶劫を経て、爾の時に佛あつて世に出興し、名けて寶性如來・應・正等覺・明・行・圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と曰へり。舍利子、寶性如來に八十那由他の聲聞の弟子あつて、共に說法に會せり。一切皆是れ大阿羅漢にして、諸漏已に盡きて復の煩惱無く、乃至、其の心自在にして、第一なる波羅蜜を證得したり。時に、彼の世の中に、轉輪聖王の名けて善見と曰へるあり。七寶來り應じて、謂はゆる金輪、乃至、主將兵の寶を成就せり。是の善見王は、其の輪寶を以て四天下を威し、正法もて世を治められたれば、名けて法王と爲し、仁徳物を育して、衆に欣び重んぜられたり。國界の人民の居住は寬博にして、治むる所の大城を名けて圓滿と曰ひ、東西長さ十二踰繕那、南北廣さ七踰繕那なるが、安隱・豐樂に、人民熾盛にして甚だ愛樂すべく、諸の財寶多くして資具は充溢せり。爾の時に、城中に、大長者の名けて善慧と曰へるありしが、其の家且に富んで財寶は充積せり。已に曾て過去の諸佛を供養して、衆の徳本をも殖えたりき。舍利子、時に薄伽梵、寶性如來は、是の長者の深心に解を欲するを見て、是の思惟を作さく。此の大長者は善根已に熟して、是くの如き大菩薩藏の法門の器たるに堪へたり。又是れ諸佛の正法の器なりと。既に了知し已るや、便ち其の所に往きて大神變を現し、上つて虚空に住して結伽趺坐し、彼の長者の爲めに菩提の道を聞き、又復過去・未來・現在の諸佛を讚說せり。舍利子、爾の時に、善慧は佛の大菩薩道を開示するを聞き、又、三世の佛を讚說するを聞き已るや、廣大なる歡喜と淨信とを獲得し、即上妙なる衣服・餽膳・飲食・及び餘の資具を以て、以て用ひて寶性如來及び弟子の衆に獻じ奉り、千歳を経るまで供養し恭敬し尊重し讚嘆し、又復阿耨多羅三藐三菩提の微妙なる大願を興起し、是くの如くに、廣く衆の行を發すことを作すと雖も、然れども彼の如來は未だ授記を爲さざりき。舍利子、汝、爾の時の善慧長者を、豈異人なりと謂はんか。餘の異疑する勿れ。即ち我が身是れなり。我れ爾の時に於て、種種の供養を以て佛及び僧に奉り、并

波羅蜜多なり。愛語と言ふは、謂はゆる尸羅波羅蜜多及び毘摩底波羅蜜多なり。利行と言ふは、謂はゆる毘利耶波羅蜜多なり。同事と言ふは、謂はゆる靜慮波羅蜜多及び般若波羅蜜多なり。復次に、童子、布施と言ふは、初發心の一切の菩薩を謂ふなり。愛語と言ふは、已に行を發せる一切の菩薩を謂ふなり。利行と言ふは、退轉せざる一切の菩薩を謂ふなり。同事と言ふは、謂はゆる一生に繋屬せる諸の大菩薩なり。復次に、童子、布施と言ふは、菩提の根本を堅固にせんと欲するを爲すなり。愛語と言ふは、菩提の萌芽を成就せんと欲するを爲すなり。利行と言ふは、菩提の妙華を開發せんと欲するを爲すなり。同事と言ふは、菩提の勝果を成熟せんと欲するを爲すなり。是くの如くなるを、童子、是れを菩薩摩訶薩の四種の攝法と名け、菩薩摩訶薩は大菩提を修行せんと欲する爲めの故に、是等の如き四攝の法を以て、長夜に處つて衆生を攝受する、是れを菩薩摩訶薩は攝法に隨ひ轉ずと名く。童子、是くの如き攝法の無量無邊なるを、皆説いて菩提の道と名くるなり。

舍利子、爾の時に、薄伽梵、大蘊如來應正等覺は、是の精進行童子の爲めに、是くの如き大菩提の道を開示せる時に、彼の童子は、具に佛の所に於て是の法を聞き已り、又、過去・未來・現在の諸佛を讚説するを聞きて大歡喜を得、即ち上妙なる衣服・餽膳・飲食・牀敷・醫藥・什物・衆具を以て、大蘊如來及び聲聞衆に獻じ奉り、是くの如くすること乃ち九十六拘胝歳を経て、供養し恭敬し尊重し讚嘆し、又復菩提の大願を興して是くの如き無量なる功德を作すと雖も、而も大蘊如來は、未だ童子の與めに阿耨多羅三藐三菩提の記を授けざりき。舍利子、汝、彼の時の精進行童子を、豈異人なりと謂はんか。餘の疑を作す勿れ。即ち我が身是れなり。我れ彼の佛の所に於て、諸の供養を以て、佛及び僧に奉ること、爾所歲にして、又復大菩提の願を發起したり。然れども彼の如來は我れに記を、汝、來世に於て當に佛と作るを得て、釋迦牟尼如來應正等覺と號すべし。と授けたまはざりき。

施と言ふは、謂はく。慈心に随つて捨を行ふなり。愛語と言ふは、常に歡喜の心を捨離せざるなり。利行と言ふは、大悲を成就して心に恒に衆生を利する事を欣樂するなり。同事と言ふは、捨を修むること平等にして、高下ある無く、心恒に一切智智に迴向するなり。復次に童子、布施と言ふは、法の如くにして財を求め、常に捨を行ひて貧乏を拯濟せんことを思ふなり。愛語と言ふは、既に財を施し已り、重ねて復安處して法義に住せしむるなり。利行と言ふは、自利・利他を平等に攝取るなり。同事と言ふは、諸の衆生を利益せんと欲する爲めの故に、究竟して一切智心を發起するなり。復次に、童子、布施と言ふは、一切有つ所の内外の諸法を、悉く皆捨離するなり。愛語と言ふは、一切法の功德・智慧に於て秘惜する所無きなり。利行と言ふは、自利を棄捨して専ら利他を務むるなり。同事と言ふは、財物を總攝すること掌中に置くが如くにして、縁に随ひ恵み施すに、情に憂感無きなり。復次に、童子、法施と言ふは、聞く所の如くに法を廣く他の爲めに説くなり。愛語と言ふは、無染の心を以て分別して開示するなり。利行と言ふは、他の爲めに經典を授誦し、乃至、説法して厭倦ある無きを謂ふなり。同事と言ふは、一切智を捨離せざる心を以て、含生を正法の所に安置するなり。復次に、童子、言ふ所の法施は、若し往返して法を聽かんことを求むるを爲す者には、佛の正教の如くに不亂に宣説するなり。愛語と言ふは、微妙なる音を以て正法を開示するなり。利行と言ふは、衣服・飲食・牀敷・醫藥及び餘の隨ひ用ふる什物・衆具を以て、法を求むる者及び法を説く者に於て、但匱乏あらば即便に給施するを謂ふなり。同事と言ふは、常に深心を起して間無く説法するなり。復次に、童子、法施と言ふは、是の菩薩は法施を了知するに由つて、諸の施の上として常に法施を行ふなり。愛語と言ふは、利益を演説する所の事を謂ふなり。利行と言ふは、其の義を演暢するに文に依らざるなり。同事と言ふは、一切の佛法を圓滿ならしめんと欲し、常に衆生の爲めに、應ずる如くに化を敷くなり。復次に、童子、布施と言ふは、謂はゆる檀那

卷の第五十四

菩薩藏會 第十二の二十

大自在天授記品 第十二

爾の時に、佛は舍利子に告ぐらく。往昔過去に、大蘊如來應正等覺は、精進行童子の爲めに、廣く是くの如き四無量の法を説き、及び六波羅蜜多を説き已り、爾の時に、彼の佛は復精進行童子に告ぐらく。云何か菩薩摩訶薩は、攝法に隨ひ轉ずる。童子當に知るべし、菩薩摩訶薩は是くの如き四攝の法を具足し、是の法に由る故にて、菩薩摩訶薩は恒に長夜に處つて諸の衆生を攝すること。何等を四と爲す。謂はゆる布施・愛語・利行・同事、是くの如きを四種の攝法と爲すなり。童子、云何なれば名けて、是くの如きを攝法と爲す。童子、言ふ所の施とは、具には二種あり。一には財施、二には法施にして、是れを布施と爲す。愛語と言ふは、謂はく。一切諸の、來つて求め乞ひ或は法を聞かんことを樂ふに於て、菩薩は悉く能く愛の語もて慰諭するなり。利行と言ふは、謂はく。能く若しは自若しは他の有つ所の意樂を満足するなり。同事とは、己が有つ所の智及び功德に隨ひ、他の爲めに演説し攝受して、一切衆生に、其れをして若しは智若しは法に安住せしむるを建立するなり。復次に、童子、布施と言ふは、來つて乞ひ求むる諸の衆生の所に於て、心意の清淨なるなり。愛語と言ふは、來つて乞ひ求むる諸の衆生の所に於て、善言もて安慰するなり。利行と言ふは、諸の衆生の有つ所の義利に隨ひ、皆成熟せしむるなり。同事と言ふは、來つて乞ひ求むる諸の衆生の所に於て、平等の心にて其の義利を成ずることを行ふなり。復次に、童子、布施と言ふは、謂はく。諸の菩薩の、意を發して捨を行ふなり。愛語と言ふは、方便して斷つこと無きなり。利行と言ふは、深心にて悔ゆること無きなり。同事と言ふは、大乘に迴向するなり。復次に、童子、布

是くの如き大經王だいぎやうおうを持するに由る 常に豐饒なる法の寶藏ほうざうを獲て 恒に欣悅きんえつの意にて法施ほふせを行ひ 最上なる勝歡しょうくわん喜を發生するは 是くの如き大經王だいぎやうおうを持するに由る 多くの衆生は法を説く者の 斯の廣大なる勝功德しょうこんどくを證せるを聞き 我れ當に云何いかににせば是の法を説くこと 持經者の獲る所の如くなるべきかと 諸しよべて斯くの如き最勝の慧けいを獲て 正法の所に於て終まで壞る無く 念ねんに由つて微妙なる智を發生して 能く無上智の依る處を説くは 善く説ける正法の句の 最勝なる衆聖の稱讚する所を勤求し 常に聞いて超勝ちやうせうなる行を發起して 是くの如き大經王だいぎやうおうを持せるに由る 慧者は聞き已まつて深義しんぎを持し 諸の文句に於て妄執まうしやくする無く 常に理趣りそに隨つて觀照くわんしやくせば 妙智を増長すること量無邊りやうむへんなり 無邊の妙智もて無邊の義第一義解だいいちぎげの諒りやうに思しひ難きを 遍あまねく十方に遊んで廣く稱讚せば 經を聞くものの勝利は窮盡する無し 極めて善く貪願こんがん癡ちを微薄みはくにし 第一の心清淨しんじやうじやうを獲得するは 是くの如き大經王だいぎやうおうを聞くに由つて 功德の勝利に邊際無ければなり 勝財しやうさいを得と雖も放逸はういつ無く 財の義を稱ほかするに誰か堅固けんこなる 深く世財の實有るに非るに達し 財に於て戀こふる無くして非ひけに趣おもむき 出でて閑靜かんじやうに詣り山林しんりんに住し 彼の惛沈こんしんに於て常に遠離りやくし 淨法じやうぽうを聽聞しやうもんして曾て厭いとふ無く 靜慮じやうりょ正教しやうきやうに慳恪けんかく無く 疑難ぎなんを世の導師に請問きんもんし 聞き已まつて他の爲めに廣く開釋かいしやくせば 斯れに由つて微妙の智を増長し 白淨はくじやうの法に於て終まで退くこと無きなり

是くの如くに、舍利子、諸の菩薩摩訶薩ぼつさつまがさの、般若波羅蜜多ぼんねはらみだを修行せんと欲する爲めの故に、是の經典に於て精勤しやうきんに修學しゆがくして、菩薩ぼつさつの行を行ずるもの、是れを菩薩摩訶薩ぼつさつまがさは、般若波羅蜜多ぼんねはらみだに於ける方便ぼんぱんに、正法の要を修學しゆがくすと名くるなり。」

【三〇】 念ねんに由つて、乃至、説くは。異譯本に「復、勝念力に於て、能く無上の句を演ぶ。」とあり。

【三一】 第一義解だいいちぎげ。第一義とも第一義諦とも勝義諦とも云ふ。【三二】 第一の心清淨しんじやうじやう。異譯本に「最上の清淨心」とあり。

【三四】 靜慮じやうりょ正教しやうきやうに慳恪けんかく無く。異譯本に「法施に倍ある無く」とあり。

稱讚すべき利益を得ることを。何等を十と爲す。一には、機速の慧を成就するなり。二には、捷辯の慧を成就するなり。三には、猛利の慧を成就するなり。四には、迅疾の慧を成就するなり。五には、廣博の慧を成就するなり。六には、甚深の慧を成就するなり。七には、通達の慧を成就するなり。八には、無著の慧を成就するなり。九には、常に現前に一切の如來を見、既に見るを得已つて、清美の頌を以てして讚嘆を爲すなり。十には、善く能く如理に如來に請問し、又能く如理に疑難を開釋するなり。舍利子、是れを十種の功德の稱讚すべき利益を獲得すと名く。

復次に、舍利子、是の善男子・善女人等にして、是の經を受持して、讀誦して義を解し、乃至、他の爲めに廣く分別して説かば、當に知るべし、是の人は、復是くの如き十種の功德の稱讚すべき利益を獲得することを。何等を十と爲す。一には、常に諸の不善の友を遠離することを樂むなり。二には、常に諸の善知識に親近することを樂むなり。三には、能く諸魔の有つ所の繫縛を緩むるなり。四には、諸魔の有つ所の軍陣を摧殄するなり。五には、善く一切の煩惱を訶厭し能ふなり。六には、一切の行に於て心恒に捐捨するなり。七には、一切樂趣に向ふ道に違背するなり。八には、一切涅槃に趣く道に歸向するなり。九には、善く一切生死を越度する清淨の施を説くなり。十には、巧に善く一切の菩薩の行する所の軌則を隨學し、又能く諸佛の教勅を奉行するなり。是くの如きを名けて、十種の功德の稱讚すべき利益と爲す。舍利子、若し善男子・善女人あつて、能く是くの如き大菩薩藏の微妙なる法門に於て、殷重に聽聞し受持し讀誦して義趣を研尋し明了に通達して、復能く他の爲めに廣く説きて開示せば、當に知るべし、是の人は則ち上の如き功德の稱讚すべき利益を獲得するを爲すことを。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

諸の總慧者の慧の無邊にして 妙に能く法及び義に通達し 尊勝なる文詞を善く圓具するは

せば、大梵王となるなり。十には、生ずる所の處に在つて、常に大菩提の心を遠離せざるなり。舍利子、經を受持する者は、則ち十種の功德の稱讚すべき利益を獲得するを爲すなり。

復次に、舍利子、是の諸の善男子・善女人等にして、是の經を受持して、殷重に聽聞し讀誦して義を解し、乃至、他の爲めに廣く説きて開示せば、當に知るべし、是の人は、復是くの如き十種の功德の稱讚すべき利益を得ることを。何等を十と爲す。一には、尼伽蘭陀の邪論と相ひ雜らざるなり。二には、我見を起さざるなり。三には、有情の見無きなり。四には、命者の見無きなり。五には、數取の見無きなり。六には、斷見を起さざるなり。七には、常見を起さざるなり。八には、一切の世務をば、情として顧み及ぶこと無きなり。九には、恒に勝心を發して出家を樂欲するなり。十には、若し經典を聞かば、速に能く受持して恒に深義を悟解するなり。舍利子、是れを十種の功德の稱讚すべき利益を獲得すと名く。

復次に、舍利子、是の善男子・善女人等にして、是の經を受持して、殷重に聽聞し讀誦して義を解し、乃至、他の爲めに廣く分別して説かば、當に知るべし、是の人は、復是くの如き十種の功德の稱讚すべき利益を得ることを。何等を十と爲す。一には、正念を成就するなり。二には、正覺を成就するなり。三には、正趣を成就するなり。四には、志勇を成就するなり。五には、正慧を成就するなり。六には、無難を具するを得るなり。七には、本生の事を憶するなり。八には、性として貪欲を薄くし、猛利の貪無く、重貪に爲つて燒惱せられざるなり。九には、性として瞋毒を薄うし、猛利の瞋無く、重瞋に爲つて燒惱せられざるなり。十には、性として愚癡を薄うし、猛利の癡無く、重癡に爲つて燒惱せられざるなり。舍利子、是れを十種の功德の稱讚すべき利益を獲得すと名く。復次に、舍利子、是の善男子・善女人等にして是の經を受持して、殷重に聽聞し讀誦して義を解し、乃至、他の爲めに廣く分別して説かば、當に知るべし、是の人は、復是くの如き十種の功德の

【三】 尼伽蘭陀(Nigamhata)。又尼乾陀といふ。三界の繫縛を離るとの義にて、離繫と譯す。裸形・塗灰等の苦行を修すれば、裸形外道とも云ふ。

【四】 正覺。【五】 正趣。異譯本には次での如く「聰利」總持とあり。

【六】 本生(本生記)。普通には、佛の過去に菩薩たりし時の事を指せど、又一般に、前世の事を云ふに用ふ。異譯本にも單に「宿住」とあり。

の平等なるを覺悟する義は、當に知るべし、是れ到彼岸の義たることを。最勝に決擇せる善巧の義は、當に知るべし、是れ到彼岸の義たることを。遍く一切の衆生界に行ずる義、是れを則ち名けて到彼岸の義と爲す。無生法忍に圓滿なる義、是れを則ち名けて到彼岸の義と爲す。不退轉地に究竟滿なる義、是れを則ち名けて到彼岸の義と爲す。清淨に諸の佛土を修治する義、是れを則ち名けて到彼岸の義と爲す。一切の衆生を成熟する義は、是れ則ち名けて到彼岸の義と爲す。道場に往詣して菩提の座に昇る義、是れを則ち名けて到彼岸の義と爲す。畢竟して諸の魔軍を摧伏する義、是れを則ち名けて到彼岸の義と爲す。一切の佛法に皆圓滿なる義、是れを則ち名けて到彼岸の義と爲す。舍利子、若し是くの如き大菩薩藏の微妙なる法門に於て、正しく修學し已らば、我れは説かん、是等は則ち一切の波羅蜜多に於て皆究竟するを得たり。と。

復次に、舍利子、若し大乘に安住する諸の善男子及び善女人あらば、皆當に是の大菩薩藏の微妙なる法門に於て、殷勤に請求し受持し讀誦して義理に通達して、廣く他の爲めに説きて分別顯示すべし。何を以ての故に。舍利子、若し是の菩薩藏經に於て殷重に聽聞し受持し讀誦して、乃至、他の爲めに分別して解説するあらば、當に知るべし、是の人は必ず定つて十種の功德の稱讚すべき利益を獲得すればなり。何等を十と爲す。一には、在在の生ずる所にて、一切の微妙なる功巧の業處に、究竟して通達するなり。二には、生ずる所の處に在つて、常に高族に居つて當世に榮望せらる。三には、生ずる所の處にて、大威嚴あつて勢力自在なり。四には、凡そ言ふ所は、一切をして皆從はしめて信伏せざる無し。五には、生ずる所の處にて大豪富を具ふるなり。六には、生ずる所の處に在つて、恒に天・人に爲つて愛敬を加へらるるなり。七には、生れて人中に處るや、常に輪王と爲つて大自在を得るなり。八には、生ずる所にて常に天帝釋となるを得るなり。九には、若し色界に生

【三】 遍く一切の衆生界に行ずる義。
異譯本に「有情界に於て一切を引導し等」とあり。

【三】 在在の生ずる所にて等。
異譯本に「是の生を過ぎ已つて、一切の事業に通達するを得」とあり。

無滅の慧にして、常に廣く見る故なり。是れ解脱道の慧にして、永く一切の取執の縛を斷する故なり。是れ不離處の慧にして、一切の煩惱障の法と同じく止らざる故なり。舍利子、是くの如き慧相は、我れ今略して説けるなれば、當に知るべし、菩薩摩訶薩には更に無量無邊なる諸の慧あることを。何を以ての故に。舍利子、是の、乃至、一切衆生の有つ所の心行の如くに、當に知るべし、菩薩摩訶薩にも亦爾所の慧業の智行あることを。是の、乃至、一切衆生の有つ所の欲解の如くに、當に知るべし、菩薩摩訶薩にも亦爾所の觀察智あることを。是の、乃至、一切衆生の有つ所の諸の煩惱門の如くに、當に知るべし、菩薩摩訶薩にも亦爾所の廣大なる慧門あることを。是の、乃至、一切の聲聞・獨覺及び正等覺の有つ所の遍智の如くに、當に知るべし、菩薩摩訶薩にも亦爾所の慧の所行の處あることを。舍利子、是等の如き一切の慧處に、諸の菩薩摩訶薩は、皆其中に於て精勤に修學するを、是れ則ち名けて菩薩の妙慧と爲せばなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の到彼岸の義と爲す。舍利子、是の、乃至、一切知る所の諸の妙善なる法の、能く彼岸に到る者の如きは、當に知るべし、皆是れ到彼岸の義なることを。又、舍利子、上に廣く説ける如き一切の慧の句は、應に知るべし、皆是れ到彼岸の義なることを。又、諸の菩薩の修行の差別の圓滿なる義は、當に知るべし、皆是れ到彼岸の義なることを。是くの如くに、一切智智の圓滿なる義は、當に知るべし、皆是れ到彼岸の義なることを。諸べて一切の爲と爲爲との法に於て執著する無き義は、當に知るべし、皆是れ到彼岸の義なることを。能く無量なる生死の大過失を善く覺悟する義は、當に知るべし、皆是れ到彼岸の義なることを。一切の諸法にて能く不覺の者を開悟するある義は、當に知るべし、皆是れ到彼岸の義なることを。能く窮盡無き法の寶藏を開示する義あらば、當に知るべし、是れを到彼岸の義たることを。解脱の圓滿に障無き義ならば、當に知るべし、是れ到彼岸の義たることを。布施・持戒・忍辱・精進・靜慮・慧

【八】 不離處の慧にして等。異譯本には「諸の煩惱及び障礙の法を離れて、悉く共に住せず」とあり。或は「不」の字は、衍字ならざるか。

【九】 遍智。遍く一切の法を知る智慧を謂ふ。

【三】 諸の菩薩の修行の差別の圓滿なる義。異譯本に「菩薩の行に於て殊勝圓滿なる」とあり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて菩薩摩訶薩の妙慧と爲し、云何なるを名けて到彼岸の義と爲す。舍利子、言ふ所の慧とは、謂はく。能く一切の善法を解了するに、是れ現見の慧にして、一切の法に隨順して通達する故なり。是れ眞量の慧にして、如實に一切の法に通達する故なり。是れ通達の慧にして、一切の見趣、諸の纏縛の法の障を爲さざる故なり。是れ離願の慧にして、永く一切の欲求の願を離るる故なり。是れ安悅の慧にして、永く一切の諸の熱惱を息むる故なり。是れ歡喜の慧にして、法を緣じて喜樂斷絶する無き故なり。是れ依趣の慧にして、諸の義智に於て皆現見する故なり。是れ建立の慧にして、一切の覺品の法を建立する故なり。是れ證相の慧にして、其の乘する所に隨ひ果を證得する故なり。是れ了相の慧にして、善く照了し能ふ是の智性の故なり。是れ濟度の慧にして、一切の諸の暴流を救ひ度する故なり。是れ趣入の慧にして、能く正性たる無生の法に趣く故なり。是れ策勵の慧にして、一切の諸の善法を振ひ發す故なり。是れ清淨の慧にして、先の瞋眠・煩惱の濁を離るる故なり。是れ最勝の慧にして、一切の諸法の頂にして、雜染なる三界の法無き故なり。是れ攝受の慧にして、一切の賢聖の攝受する所なる故なり。是れ斷願の慧にして、一切の相の分別を除遣する故なり。是れ捨逸の慧にして、一切の愚なる黑闇を遠離する故なり。是れ方便の慧にして、一切の瑜伽師地の者の成就する所に安住する故なり。是れ發趣の慧にして、當に一切の聖智の道に住すべき故なり。是れ照明の慧にして、一切の無明暴流の翳・闇・膜を除滅する故なり。是れ施明の慧にして一切を開導すること猶眼の如くなる故なり。是れ無漏の慧にして、慧眼は邪僻の路に超過する故なり。是れ勝義の慧にして、如是の大理諦を照了する故なり。是れ無別の慧にして、善く調順する故なり。是れ光明の慧にして、諸智の門なる故なり。是れ無盡の慧にして、遍く一切に於て隨行して照す故なり。是れ

【五】善く照了し能ふ是の智性の故なり。
異譯本に「智を以て諸法の體性を照解す。」とあり。

【六】瑜伽(योग)師地。瑜伽は相應と譯す。相應には境・行・理・果・機の五つの義あり。次に、瑜伽師とは、此の瑜伽の修行者、即ち觀行の人を謂ひ、其の人の依る所、行ずる所の境界十七ある、之れを瑜伽師地と云ふ。

異譯本には「一切の相應の行地を成就す。」とあり。

【七】遍く一切に於て隨行して照す故なり。
異譯本に「一切處に遍して相違ある無し。」とあり。

するなり。何等を五と爲す。謂はゆる、布施・持戒・忍辱・精進・靜慮の波羅蜜多、是れを有爲と名く。若し般若波羅蜜多の無爲の智に由る故ならば、則ち五つの到彼岸をも厭毀すべからずして、此の如き妙智にて、又能く諸の到彼岸の資糧善法を積集して、無漏の無上菩提を信解し、及び一切の智に廻向する、是れを則ち名けて無爲の善巧と爲すなり。復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の有爲の善巧とは、謂はゆる無礙の光を以て諸の衆生を照し、四攝の法を以て諸の衆生を攝する、是れを有爲と名く。若し諸法の無我・無有情・無取・無執を觀ずれども四攝の方便善巧に於て愛樂し、無爲の等覺を信受し、及び一切智に廻向せば、是れを則ち名けて無爲の善巧と爲すなり。復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の有爲の善巧とは、謂はゆる能く生死をして相續せしむる煩惱を斷ぜず(不)して、復永く能く生死をして相續せしむる煩惱を斷じて菩提を任持し、結縛の相續は一分の結縛も復現行せざる、是れを有爲の善巧と名く。若し復空・無相・無願を修習するに、諸法の正智にて善巧を現觀し、無上菩提は他の縁に由らず無爲法に於てして復證を作す、是れを則ち名けて、無爲の善巧と爲すなり。復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の有爲の善巧とは、謂はく、諸の菩薩は三界に行ずと雖も、而も彼の三界の煩惱に爲つて染汚せられざる、是くの如きを有爲の善巧と爲す。具に一切の三界の出離の法に通達すと雖も、而も出離界の中に墜墮せざる、是れを則ち名けて無爲の善巧と爲すなり。舍利子、菩薩摩訶薩の一切法の善巧とは、是れ則ち名けて一切智智と爲す。若し諸の菩薩にして圓滿に一切智智に證入せば、即一切の時の智慧の善巧をば、即此に名けて諸法の善巧と爲せばなり。舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、是くの如き一切法の善巧を修習することは是くの如し。舍利子、若し菩薩藏に依つて般若波羅蜜多を修行する菩薩摩訶薩あらば、般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、慧の分別の善巧の通達に依らんとて、是くの如き十種の善巧を修習するなり。

【三】能く生死をして、乃至煩惱を斷じ。

異譯本には、「諸行の相續の繫縛を斷じ、即ち輪回及び煩惱の縛を斷じ」とあり。原本の「不」は、或は衍字なるべし。

【三】空無相、乃至、現觀し。異譯本に「空、無相、無願に於て、智を以て伺察して、善く諸法の因縁を解し」とあり。

【四】慧の分別の等。異譯本に「勝慧の分に於て、是くの如き十種の善巧を獲得するなり」とあり。

知するなり。是くの如きを名けて、緣起の善巧と爲す。舍利子、菩薩摩訶薩は又是の念を作さん。何の滅に由る故にて彼の諸の法は滅するか。と。既に思惟し已つて、便ち自ら了知すらく。不如理の作意の滅する故に由つて無明は滅し、無明の滅する故に諸行は便ち滅し、諸行の滅する故に、乃至、純大なる苦の聚は滅す。と。舍利子、若し能く是くの如き法智を了知せば、是れを則ち名けて緣起の善巧と爲すなり。舍利子、是の諸の菩薩は、又是の念を作さん。正法に因とし依り、諸緣に依止し、和合に依止して諸の善を修するを得るも、是の法にして、若し諸因の和合と依止の諸緣とに由るならば、則ち此の法は等しく我に依止せば、有情に依らず、命者に依らず、數取に依らずして、是れ則ち此の法は稱量すべからざるなり。と。舍利子、諸の菩薩等にして、若し能く是くの如くに理の如くに觀察せば、是れ則ち名けて緣起の善巧と爲すなり。又復、一切の佛法は皆菩提の相にして緣にて起る所の相なるを觀察し、諸の緣起は皆盡滅の相なるを觀すれども、能く諸の衆生を觀待する故を以て畢竟の寂滅に趣入せざるは、是れ則ち又緣起の善巧と名くるなり。舍利子、是の諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、是くの如き緣起の善巧を修習するなり。

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の一切法の善巧なる。舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故に、一切法に於て遍く一切の有爲と無爲とを攝し、菩薩摩訶薩は是等の如き有爲、無爲の一切の諸法に於て、應に善巧を修すべし。舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の有爲の善巧なる。謂はゆる妙善なる身の行・妙善なる語の行・妙善なる意の行、是れを則ち名けて有爲の善巧と爲すなり。云何なるを名けて、無爲の善巧と爲す。即ち是くの如き妙善なる身・語及び意の行を以て、畢竟なる無爲菩提に廻向し、無爲菩提の妙觀に廻向し、又復薩伐若に廻向せば、是れを則ち名けて無爲の善巧と爲すなり。復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の有爲の善巧とは、卽是れ五つの到彼岸を積集

き法に於て、作助を假らずして自ら能く建立せば、謂はん。我れ獨り一にして等しき者ある無く、當に堅固なる勝金剛の座に坐して、自ら勢力を以て魔軍を摧伏すべし。一刹那に相應する妙慧を用ひて、當に無上正等の菩提を證すべし。と。舍利子、若し諸の菩薩にして、是の等の如き欲解の方便・決定の觀察を起さば、是れを菩薩摩訶薩は一道の善巧に趣くと名く。舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、是くの如き一道の善巧に趣くことを修行するなり。舍利子、諸、是の等の如き道の善巧の相を、諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、是くの如き道法の善巧を修行するなり。

復次に、舍利子、云何なるは、菩薩摩訶薩の緣起の善巧なる。舍利子。謂はく。諸の菩薩の、般若波羅蜜多に依つて緣起を修する者は、密靜の室に處つて是の思惟を作さん。是くの如き世間の純大なる苦の聚は、何所よりして集起することを得たるかと。既に思惟し已つて、便ち自ら了知すらく。是くの如き苦の聚は、不合理的の作意の集に由る故に無明の集起り、無明の集の故に諸の集起り、諸の行の集の故に諸の識の集起り、諸の識の集の故に名色の集起り、名色の集の故に六處の集起り、六處の集の故に諸の觸の集起り、諸の觸の集の故に諸の受の集起り、諸の受の集の故に諸の愛の集起り、諸の愛の集の故に諸の取の集起り、諸の取の集の故に諸の有の集起り、諸の有の集の故にて生の集起り、生の集の起る故に老・死・愁・歎・憂・苦の逼惱皆悉く集り起る。と。舍利子、菩薩摩訶薩は復是の念を作さん。彼の諸法の如きは復集り起ると雖も、作も無く用も無く主宰ある無し。是くの如き諸法は、諸善を因と爲し、不動を因と爲し、涅槃を因と爲し、彼の一切の法は、緣より生起して主宰ある無きこと、亦復是くの如し。諸の衆生の若きも、下根を因と爲し、中根を因と爲し、上根を因と爲し、諸業を因と爲して、因果の流轉することも亦復是くの如し。と。舍利子、是くの如くに一切取る所ある法は、因縁の和合にて集起するを得ることを、菩薩は一切悉く能く了

【三】一刹那に相應する妙慧を用ひて。異譯本に「一刹那の頃に勝慧と相應し」とあり。

見ざればなり。舍利子、若し諸の菩薩にして是の觀を作さば、如實の觀と名け眞實の見と名け、又毘鉢舍那の善巧方便を證得すと名くるなり。舍利子、菩薩摩訶薩は、此の觀の中に於て復是くの如き觀解を發起すと雖も、而も彼の爲作する所無きには墮せず。亦善根の加行にも遠離せざるなり。若し諸の菩薩にして是れを成就せば、是れを菩薩摩訶薩の毘鉢舍那と名く。舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故には、精勤して奢摩他・毘鉢舍那の道法の善巧を修習するなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の道の相は是くの如きも、我れ若し略して菩薩の道を説かば、則ち唯一つの、道に趣く善巧あり。舍利子、何等は是れなるか。謂ふ所のものは、菩薩は獨り衆の表に拔んでて與に等しきものある無く、伴助を假らずして、阿耨多羅三藐三菩提を證せん爲めの故に、自ら精進なる勢力と清淨なる欲解とを攝受することに由り、堅固の鎧を被ることなり。何を以ての故に。是の菩薩は、他に由らずして悟り、他に緣らずして、自らの建立する所・自力の起す所に出つて、是くの如き堅固なる甲鎧を嚴備すればなり。舍利子、是の諸の菩薩は是の念を興發せん。是くの如き甲鎧は、一切の衆生の擐く能はざる所なるを、我れ今獨り擐けり。是くの如き甲鎧は、一切の賢聖の諸の新發意、未だ正位に住せざる諸の菩薩等の、未だ曾て擐かざる所なるを、我れ今獨り擐けりと。爾の時に、菩薩は又是の念を作さん。我れ今に於ては嚴備せること是くの如ければ、豈布施をして自在に我れを度せしめんや。我れ當に自在に彼の布施を度すべし。是くの如くに、持戒・忍辱・精進・靜慮及び般若等も、豈自在にして我れを度せしめんや。我れ當に自在に先づ彼れを度すべしと。又是の念を作さん。我れ今に於ては、豈波羅蜜多をして我れを發起せしめんや。我れは當に波羅蜜多を發起すべし。是くの如くに廣く説かんに、一切の善根は、皆當に我に因つて便ち發起して、善根をして我れを發起せしめざるべし。と。舍利子、若し諸の菩薩摩訶薩にして、是くの如

【三〇】豈布施をして等。異譯本に「一切の施し難きを能く施し」とあり。

を密に護つて諸の詠曲を離れ、調順堪能して常に獨り處ることを樂み、彼の諸闇を離れて遠離の行を樂み、身に塵染無く心に惑亂無く、寂靜の門に於て思惟・作意して諸の惡欲を離れ、希望する所無くして諸の大欲に遠り、歡悅して足ることを知つて正命清淨に、正行圓滿にして密に威儀を護り、時を知り分を知つて養ひ易く滿し易くして善く其の量を知り、常に思擇の高る無く下る無きを樂み、弊・鄙・麤の言性にも能く堪忍し、相應の門の發心に於て安住し、樂んで閑室に處つて靜慮の分に於て作意し、緣念にて大慈を生起し大悲を引發し大喜に安住し大捨を修習し、初靜慮よりして、乃至、八定まで次第に證入するなり。若し諸の菩薩にして此れを成就せば、是くの如きを名けて奢摩他の道と爲す。舍利子、菩薩摩訶薩に、復無量なる諸の奢摩他の資糧の正行あつて、諸の菩薩等は此の資糧の方便に於て趣入するなり。是くの如きを又奢摩他の道と名く。

復次に、舍利子、云何なるを名けて毘鉢舍那の道と爲す。謂はく、諸の菩薩は、妙慧の分に於て聖道を修習するに、諸法の中に於て、是くの如き無作の觀智を發起するなり。又復、無我・無有情・無命者・無數取の觀智を發起し、諸蘊の中に於て法の觀智を起し、諸界の中に於て法界の觀智を起し、諸處の中に於て空なる聚落の觀智を起し、諸眼の中に於て照了の觀智を起し、緣起の中に於て不相違の觀智を起し、諸見の趣に於て遠離の觀智を起し、諸の因果に於て業報の觀智を起し、應に得べき所の果に於て作證の觀智を起し、入る所の正性に於て趣入の觀智を起すなり。舍利子、毘鉢舍那とは、謂はゆる、諸法の中に於て如理の見を起し、諸法の中に於て眞實なる見を起し、諸法の中に於て不變異の見を起し、諸法の中に於て空の見を起し、諸法の中に於て無相の見を起し、諸法の中に於て無願の見を起すなり。又、舍利子、毘鉢舍那とは、有因を以てする故の觀に非ず。無因を以てする故の觀に非ず。生・滅・住を以て因とする故の觀に非ず。有所得を以て因とする故の觀に非ず。何を以ての故に。菩薩は此に於ては都べて觀する所無くして復觀察し、見ずして見、見て

【三】 調順堪能。異譯本に「心は一の境性に」とあり。

【三】 時を知り、乃至、其の量を知り。

異譯本に「資養を具足するに時を知り分を知り及び數量を知り」とあり。

【四】 相應の門の發心に於て安住し。異譯本に「轉た復、深心に」とあり。

【五】 妙慧の分に於て聖道を修習するに。異譯本に「智慧の分に於て、諸法の空なるを觀するに」とあり。

【六】 諸蘊。五蘊を謂ふ。

【七】 諸界。十八界を謂ふ。

【八】 諸處。十二處を謂ふ。

【九】 諸眼の中に於て、乃至、觀智を起すなり。

異譯本に「眼等の根の、境に隨つて別轉するを觀じ、諸の緣起の、相ひ違背せざるを觀じ、衆生の見の、畢竟遠離なるを觀じ、又復、因の、必ず果報を招くを感じ、果の、現前に證得せるが如くなるを觀じ、諸の正達の、轉た復、超越なるを觀するなり」とあり。

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の正精進なる。舍利子、是の諸の菩薩は、聖者に於て開許せざる所の貪・瞋・癡等の煩惱・隨眠及び諸の邪行の若き、是の法中に於て勤精進を發す者は、菩薩は精進を行することを樂はず。諸の正勤の、聖諦の攝と爲つて聖道に趣入し、能く涅槃に至るまで正行を引發する若き、是くの如き精進を、諸の菩薩の樂うて修學する所と爲さば、即此の法を以て正精進と名くるなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の正念と爲す。舍利子。謂はく。諸念あり。極善に安住して性下劣に非ず、心善く正直にして邪曲ある無く、能く生死の有つ所の過患を觀じて大涅槃を與つて歸趣の路と爲す。若し諸の菩薩にして、是くの如き念に於て恒に正に憶持せば、聖道をして忘失せざらしむる故に爲り、即ち此の法を以て名けて正念と爲すなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の正三摩地と爲す。舍利子、三摩地とは、若し正性なる平等に於て、則ち一切法の平等に於て、諸の菩薩は等しく是くの如き三摩地に安住し已らば、一切の衆生を解脱せんと欲する爲めの故に、正性に趣入す。是くの如き正定は是れ無盡の道なれど、過去・未來・現在の諸佛は、諸の菩薩に觀を證現することを爲させん故に宣説・開示するなり。是れを則ち名けて、菩薩の正定と爲す。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の八聖道分と名く。若し諸の菩薩摩訶薩にして般若波羅蜜多を修行せんと欲するを爲さば、應に勤めて是の八聖道分の善巧を修すべきなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故を以て、道の善巧を修するなり。道の善巧には復二種あり。何等を二と爲す。謂はく。奢摩他及び毘鉢舍那是れを名けて二と爲す。舍利子、何等を名けて奢摩他と爲す。舍利子。謂はく。諸の菩薩は、其の心寂靜に、深極の寂靜に、最極の寂靜にして散亂するある無く、諸根憍怕にして掉かず舉らず、諸の躁擾及び憒沈を離れ、安靜

【二】若し正性なる平等に於て、乃至、正性に趣入す。異譯本に「平等即ち諸法の平等に正達して等持に安住し、彼正達に於ても能く超越す。乃至、等持に安住して一切の有情を解脱せしむるに、前の正達に於て亦能く超越す」とあり。

の正見と爲す。

復次に、舍利子、云何なるは、菩薩摩訶薩の正思惟なる。舍利子、若し諸の菩薩は、此の思惟に由らば則ち能く貪・瞋・癡等の一切の煩惱を發起すと、是くの如く思惟せば、終まで發起せず。若し諸の菩薩は、此の思惟に由らば便ち能く戒・定・慧・解・脫・解・脫・見・聚等の諸の功徳を生長せば、是くの如き思惟をば、諸の菩薩等は恒常に發起するなり。舍利子、若し菩薩あつて此の法を成就せば、是れを則ち名けて正思惟の分と爲す。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の正語と爲す。舍利子、謂はく。諸の菩薩は、是くの如き、語言は、自ら損惱せず、他を損惱せず、衆生と共に相ひ交諍せずば、是れに由つて菩薩は、是の語を成就して能く聖道に入るなり。故に説いて名けて、菩薩の正語と爲す。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の正業と爲す。舍利子、謂はく。諸の菩薩は、終まで黒黒の報業を造作せず。若し業の能く白淨の果報を感じ、若し業の能く一切の諸業を盡さば、是くの如き業をば方便して發起するなり。舍利子、是の諸の菩薩は、即ち此の業の而く白業たる業を以て依趣と爲し、精勤の方便もて平等の業を修する、是くの如きを名けて菩薩の正業と爲すなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の正命と爲す。舍利子、謂はく。諸の菩薩の有つ所の聖種たる杜多の功徳は、誑はず誑さず浮詐を懐く無く、諸の乞求の性に於て、逼切を離れて満ち易く養ひ易く、彼の軌則に於ては、則ち奉じて修行するに慢緩を生ぜず、他の利養に於て嫉妬を興さず、自の利養に於て知足を生じ、聖の開く所に於て深く染著せずして、常に清淨に自ら命行を守るなり。舍利子、若し諸の菩薩にして此れを成就せば、是れを則ち名けて菩薩の正命と爲すなり。

【九】 黒黒の報業を造作せず。異譯本に「黒の業報に於て造作する無からしめ」とあり。本文の下に「黒」は「業」の誤寫なるべし。

【一〇】 聖の開く所に於て深く染著せず。異譯本に「其の得る所に隨つて喜樂を生ぜず」とあり。

にして此れを成就せば、是れを則ち名けて安覺分の法と爲す。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の三摩地の覺分と爲す。謂ふ所のものは、菩薩は是の定心を以て法を覺知するに、不定の心非ず。何を以ての故に。若し心に定を得て諸法を覺了せば、終まで諸の愛見等の纏障・邪覺を發起せず。唯法に於ける平等なる實性を除き、心定つて趣入して一切法の平等の性を覺すればなり。舍利子、若し諸の菩薩にして此れを成就せば、是くの如きを名けて三摩地の覺分の法と爲す。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の捨覺分の法と爲す。謂ふ所のものは、菩薩は能く憂・喜分の法に順ずるに於て心に執著無く、諸の世法に於て心に攝受せず。高らず下らず、安住して動かす。欣ぶ無く厭ふ無く、愛づる無く恚る無く、唯能く隨順して聖道を修習するなり。若し諸の菩薩にして此れを成就せば、是れ則ち名けて捨覺分の法と爲すなり。是くの如くにして、舍利子、菩薩摩訶薩は、是等の七覺分の法に於て通達すること善巧ならんと欲する故に、便ち般若波羅蜜多を修行することを樂み、精勤に覺分の善巧を修習するなり。

復次に、舍利子、云何なるは、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する道分の善巧なるか。舍利子、菩薩摩訶薩は是くの如き八つの聖道の分を具足するなり。何等を八と爲す。謂はゆる、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正三摩地、是くの如きを名けて、諸の菩薩等の八つの聖道の分と爲すなり。舍利子、云何なるを名けて菩薩摩訶薩の正見と爲す。舍利子、衆の賢聖の出世間の見を謂ふなり。是くの如き見は、我見にて起るに非ず。有情の見にて起るに非ず。命者の見にて起るに非ず。數取者の見にて起るに非ず。斷見にて起るに非ず。常見にて起るに非ず。有の見にて起るに非ず。無有の見にて起るに非ず。善の見にて起るに非ず。不善の見にて起るに非ず。乃至、涅槃の見にて起るに非るなり。舍利子、若し諸の菩薩にして此の見に遠離せば、是れを則ち名けて菩薩

薩摩訶薩は、念力に由る故に、一切の諸法の體相を隨覺するなり。舍利子、何等を名けて、諸法の自覺の相に了達する智と爲す。謂はく、念力に由つて、一切法の自體の相の空なることを覺するなり。諸の菩薩の此れに通達する若きをば、是れ則ち名けて念覺分の法と爲す。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の擇法覺分と爲す。謂はく、諸の菩薩は、八萬四千の諸の法藏を簡擇する智を具足して、彼の諸法の應當に簡擇すべきに隨ひ、是くの如くに簡擇するなり。謂はゆる、了義ならば、是くの如くにして了義なりと、不了義なるに由つて、不了義の者と。世俗義なるに由つて、世俗義の者と。勝義義なるに由つて、勝義義の者と。假の施設なるに由つて、假の施設の者と。勝決擇なるに由つて、此れ勝決擇なりと。是れを簡擇と名く。舍利子、若し諸の菩薩にして此れを成就せば、是くの如きを名けて擇法覺分と爲すなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の精進覺分と爲す。謂はゆる菩薩は、即ち是の念・擇法・喜・安・定・捨の智の攝受に於て欣樂して、勇猛なる勢力もて退滅無く正勤に策勵せんと欲し、善扼を捨てず、道の現ぜん爲めに正勤を發す所を觀るなり。舍利子、若し諸の菩薩にして此れを成就せば、是くの如きを名けて精進覺分と爲すなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の喜覺分と爲す。謂はく、菩薩は、法に於て喜を生ずるに由り、便ち法を喜悅し、法を喜悅する故に由り心沈沒せず、沈沒せざる故に清淨なる喜を生じ、喜清淨なる故に由り身心安隱にして諸の煩惱を離るるなり。舍利子、若し諸の菩薩にして此れを成就せば、是くの如きを名けて喜覺分の法と爲す。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の安覺分と爲す。謂はゆる菩薩は、身の安きに由る故に心の安きを獲得し、心の安きに由る故に諸の煩惱を息め、一切有つ所の蓋障を遠離し、緣する所の境に於て其の心安住し、是くの如くにして便ち三摩地に入るなり。舍利子、若し諸の菩薩

諸法にて、第二の靜慮を障ふること能はず。是の諸の菩薩は、復生する所に安住すと雖も、歡喜にて、第三の靜慮を障ふること能はず。是の諸の菩薩は、一切の衆生を成熟せん爲めに正法を攝受すと雖も、捨に住せざることにて、第四の靜慮を障ふる能はざるなり。舍利子、菩薩摩訶薩は、是くの如き四種の靜慮に安住するに、一切の靜慮にて對治せらるる法にて、制伏すること能はざるなり。又、是の菩薩は、三摩地に於て不捨に安住すと雖も、而も彼の定力に受の生ずることには隨はざるなり。舍利子、是くの如きを名けて、菩薩摩訶薩の三摩地力と爲す。

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の慧力なるか。舍利子、是の智慧力の堅固にして伏し難きことは、謂はゆる一切の世間・出世間の法の制伏せざる所なり。是くの如き智力は、又、是の菩薩の生生の處、乃至、世間にて已に行はるる正行の工巧の業處にては作し難く解し難きを、而も諸の菩薩は、彼の一切に於て、師教に由らずして現前に了知するなり。舍利子、是の諸の菩薩は、又一切の出世間の法、謂はく、能く諸の世間を救度する者に於て、菩薩摩訶薩は、智慧力を以て悉く能く攝受して、一切の世間、天・人に爲つて制伏せられざるなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の慧力と名く。此等の如き相、是れを名けて菩薩摩訶薩の五分道の善巧と爲すなり。舍利子、是の諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、精勤に是くの如き五分道の善巧を修習するなり。

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜多を修行する多くの覺分の善巧なるか。舍利子、菩薩摩訶薩に七種の覺分あり。何等を七と爲す。謂はゆる念覺分・擇法覺分・精進覺分・喜覺分・安覺分・等持覺分・捨覺分、是れを菩薩摩訶薩の七種の覺分と名く。舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の念覺分と爲す。謂はゆる諸の菩薩は、是くの如き正念の力に依る故に由り、諸法を隨覺し、諸法を觀察し、諸法を尋思し、諸法に了達し、諸法を簡擇し、諸法を鑒照するなり。是の菩

【七】 是くの如き四種の靜慮に、乃至、受の生ずることには隨はざるなり。

異譯本に「四禪の行に於ては、彼の對治の法にて破壞する能はず。彼の定處に於て亦遠離せざれども、三摩地に於て愛著を生ぜず。」とあり。

【八】 是の菩薩の、乃至、現前に了知するなり。異譯本に「一切の工巧、乃至、世間の種々の技藝の、若しは近若しは遠の、作し難きを、能く作す。」とあり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜多に依る故を以ての道の善巧には復五分あり。何等を五と爲す。謂はゆる信力・精進力・念力・慧力、是れを名けて五と爲すなり。舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の信力と爲すか。舍利子、是の諸の菩薩は、清淨なる勝解の信受にして決定するや、堅固にして壞り難く制伏すべからず。設ひ惡魔あつて、化して佛の像となり、菩薩の所に到つて障礙を作し、是の菩薩をして正法の智及び勝解脫に於て、遠離の情もて欲樂せざらしめんと欲するを爲し、又、是の言——是の法の如きは佛の正教に非ず。——を作すとも、舍利子、假に四大の性をして互に相ひ轉變せしむとも、終まで信力を成就せる勝解の菩薩をして、魔の惑の爲めの故に信力を傾動せしめ能はざるなり。舍利子、是くの如きを名けて菩薩摩訶薩の信力と爲す。

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の精進力なるか。舍利子、謂はゆる菩薩は、勤精進の方便を發して一切の善法を修習するや、彼の諸の處に於て堅固に住持する力を獲得するなり。是の力に由る故にて、乃至、彼の處にて爲す所の事の未だ終に究竟せずんば、其の中間に於て、一切の天及び世間は、是の菩薩の住持の力に於て、能く移動して本處に住せざらしむることある無きなり。舍利子、是くの如きを名けて、菩薩摩訶薩の精進力と爲す。

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の念力なるか。舍利子、諸の菩薩等は、彼彼の法に於て念に安住するに由つて、心をして安住して能く移動・散亂せしむることある無からしむ。是の菩薩摩訶薩は、念持の力に由つて、善く能く一切の煩惱を摧滅して、能く此の念を制伏することある無きなり。舍利子、是くの如きを名けて菩薩摩訶薩の念力と爲す。

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の三摩地力なるか。舍利子、諸の菩薩は、等しく遠離に安住し諸の靜慮の支にて復一切の音聲を觀察すと雖も、諸の語業の道及び音聲の刺にて最初の靜慮を障ふる能はず。是の諸の菩薩は、是くの如き一切の善法を以て尋伺すと雖も、推求する無量の

【六】等しく遠離に安住し、乃至、第四の靜慮を障ふる能はざるなり。獨り閑靜に處つて諸の憍闍を離れ、一切の語言音聲を皆遠離し、攀緣對治するある無きを、最初の禪定と名く。善く尋伺に於て、障礙無きを得るを、第二の禪定と名く。喜樂の行に於て、障礙無きを得るを、第三の禪定と名く。正法を攝受し有情を化度するに於て、棄捨する無きに、障礙ある無きを得るを、第四の禪定と名く。とあり。

切諸法には、我無く有情無く、但是れ言説の假立する所にして、唯空・無相・無願の相なること——を信受するなり。此の信に由る故に、有情の 見趣及び諸の隨眠を復増長せざるなり。四には、是くの如き力・無畏等の一切の佛法を信受するなり。既に信受し已れば、疑を離れ惑を離れて、一切有つ所の佛法を修習するなり。舍利子、是等の相の如き、是れを菩薩摩訶薩の信根と名く。舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する精進根と爲すか。謂はゆる信する所の法を信するは、精進根に由つて生起することを得れば、即此の法を以て精進根と名く。舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する念根と爲すか。謂はゆる諸法は、精進の積集する所に於て念根の力を以て失壞せざるに由れば、即此の法を以て念根と爲すなり。舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する定根と爲すか。謂はゆる諸法は念根の力に由つて失壞せざる所なるは、即彼の諸法は、定根の故を以て攝められて一縁に住する 故なれば、定根と名く。舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する慧根と爲すか。謂はゆる諸法は、定根に由る故にて一縁に攝住するは、即彼の諸法を慧根の力を以て觀達・明了する 故なれば、慧根と名くるなり。舍利子、菩薩摩訶薩にして、是くの如き五つの増上なる根を具して、無間に相續して正行を修行する若くんば、能く速に一切の佛法を圓滿し、亦速に記別を授かる地に趣入するなり。舍利子、譬へば外道の、五通を具せる仙に、若し諸の胎藏・男女の二根にして猶未だ生起せずんば、終まで彼れが爲めに妄に記を授くることあらざるが如く、如來も亦爾り。若し諸の菩薩にして、未だ是くの如き五根を成就して、無間に相續することを具せずんば、終まで彼れが爲めに而ち授記せざるなり。舍利子、是等の如き相、是れを菩薩の五つの分道の法と名け、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、便ち能く是くの如き五分道の善巧を修習するなり。

【三】 見趣。異譯本に「諸見の造作」とあり。

【四】 謂はゆる諸法は、乃至、失壞せざるに由れば。異譯本に「此の精進にて諸法を積集するは、其の念根に於て、破壞する所無きに由る」とあり。

【五】 五通。五神通の略なり。

心を攝持して平等に安住すと爲すか。舍利子、是の義の如きは、文句は無量なり。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は、無量の善法をば皆應に積集すべく、是れに由つて文句も而ち量あること無ければなり。舍利子、當に知るべし、菩薩の一切の善根は、樂欲を本と爲し、精進に由る故にて、便ち一切の善根を積集し能ふことを。何を以ての故に。是くの如き法の攝持に由つて安住する故に、一切の善根は皆究竟することを得ればなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の第三の正勝と名く。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、已に生ぜる善法をば、不忘に住して修習すること圓滿ならしめんとて便ち欲樂を生じ、乃至、心を攝持して平等に安住すと爲すか。舍利子、是の義の如きは、當に知るべし、卽是れ菩提に迴向するものなることを。何を以ての故に。菩提に迴向する有らゆる善根には、復失壞無きに由る故なり。所以は何ぞ。彼の菩薩は、三界に依らずして發心する故を以てなり。舍利子、若し諸の菩薩は、三界に依らずして善根を修習し、又復一切智に迴向せば、當に知るべし、有つ所の一切の善法は、則ち究竟を爲して能く盡くすることある無きことを。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の第四の正勝と名く。舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、精勤に是くの如き四種の道分の善巧を修習するなり。

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の五つの分道の善巧なるか。舍利子、何等を五と爲す。謂はゆる信根・精進・念根・定根・慧根、是れを名けて五と爲すなり。舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する信根と爲すか。舍利子、是くの如き信は、四種の法を信するなり。何等を四と爲す。一には、是くの如き處——生死の中の間——の正見を信受するなり。此の信に由る故にて、菩薩摩訶薩は依越の業報に、乃至、失命の因縁にも、終まで諸の惡業を造ること意を興さざるなり。二には、是くの如き諸の菩薩の行を信受するなり。此の信に由る故に、終まで餘の乘を證することに意樂を起さざるなり。三には、是くの如き勝義・了義——甚深なる緣起の一

【二】是くの如き處の正見を信受するなり。異譯本に「正見を起して、世間及び輪廻の行あるを信するなり。」とあり。

何なるを名けて、戒の對治する所と爲す。舍利子、對治と言ふは、謂はゆる犯戒及び餘の一切の發起にて尸羅の法を毀犯するは、諸の妙戒衆の對治する所なり。是くの如きを名けて、戒の對治する所と爲す。舍利子、何等を名けて、定の對治する所と爲す。謂はゆる軌則を違犯し及び餘の一切に心を引れて法を亂すは、諸の妙定の衆の對治する所の法なり。是くの如きを名けて、定の對治する所と爲す。舍利子、何等を名けて慧の對治する所と爲す。謂はゆる見に於て毀犯し、及び餘の一切の、能く諸見の纏・障・蓋の法を引くは、諸の妙慧の衆の對治する所なり。是くの如きを名けて、慧の對治する所と爲す。舍利子、諸べて是等の如きを並名けて惡・不善の法と爲すを得、諸べて有らゆる如理の作意の、是くの如き惡・不善の法をして生起するを得しめざる若き者、是れ則ち名けて惡・不善の法は復現行せずと爲すなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の第一の正勝と名く。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、已に生ぜざる惡・不善の法を永く斷たん爲めの故に、乃至、心を攝持して平等に安住すと爲すか。舍利子、諸の惡・不善の法の心に積集する若きは、方も無く處も無く、及び諸の惡・不善の法の現行の覺心は、因縁に依止し、所縁の境にて生起することを得るなり。何等を名けて、緣境の生起と爲す。謂はゆる、淨妙の相を因として貪の心を起し、損壞の相の故にて瞋の心を起し、無明の相の故にて癡の心を起せばなり。爾の時に、菩薩は便ち是くの如き如理の思惟に住せん。不淨の相なる故に、貪欲は寂靜なり。慈悲の相なる故に、瞋恚は寂靜なり。緣起の相なる故、愚癡は寂靜なり。と。是に諸の煩惱は、作意永く息滅する故に、假に言説を立てて名けて寂靜と爲すと雖も、而も實には寂靜として別に得べきもの無きは、但斷滅を爲せる平等性なる故なり。現に諸法を觀するに、即ち此の法を以てするを而ち正勝と名くるなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の第二の正勝と名く。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、未だ生ぜざる善法を、生ぜんと欲する爲めの故に、乃至、

【一】不淨の相なる故に、乃至、愚癡は寂靜なり、異譯本に「不淨觀を以て貪欲を對除し、慈悲觀を以て瞋恚を對除し、緣生觀を以て諸闇を對除し」とあり。

卷の第五十三

菩薩藏會 第十二の十九

般若波羅蜜多品 第十一の四

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の四つの正勝道の善巧なる。舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修するを以ての故の道に四種あり。何等を四と爲す。一には、未だ生ぜざる惡・不善の法は、生ぜざらん爲めの故に、便ち欲樂・勇猛・策勵・發勤・精進を生じて、心を攝持して平等に安住するなり。二には、已に生ぜざる惡・不善の法は、永く斷たん爲めの故に、便ち欲樂・勇猛・策勵・發勤・精進を生じて、心を攝持して平等に安住するなり。三には、未だ生ぜざる善法を、生起せん爲めの故に、便ち欲樂・勇猛・策勵・發勤・精進を生じて、心を攝持して平等に安住するなり。四には、已に生ぜざる善法をば、不忘に住して修習すること圓滿ならしめんとて、便ち欲樂・勇猛・策勵・發勤・精進を生じて、心を攝持して平等に安住するなり。舍利子、是くの如き四種を、又亦名けて四種の正勝と爲すなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、未だ生ぜざる惡・不善の法をば生ぜざらん爲めの故に、乃至、心を攝持して平等に安住する爲すか。舍利子、言ふ所の未だ生ぜざる惡・不善の法をば生ぜざらん爲めの故に、便ち欲樂・勇猛・策勵を生ずとは、是れ理の如くに作意する故を謂ひ、發勤・精進とは、是れ理の如き作意を捨てざる故を謂ひ、心を攝持して平等に安住すとは、是れ則ち名けて理の如き觀察と爲すなり。何を以ての故に。理の如き方便に由る故に、惡・不善の法は復現行せざればなり。舍利子、何等を名けて惡・不善の法と爲し、復何の義を以て惡・不善の法は復現行せざるか。舍利子、惡・不善の法とは、謂はゆる尸羅戒の對治する所・定の對治する所・慧の對治する所なり。云

を以ての故に。安住する所の念を即、法界と名け、若し法界に住せば即、有情界に住し、若し有情界に住せば即ち虚空界に住し、是くの如きに由る故に、此に諸法と虚空と等しきを説けばなり。舍利子、是くの如くに隨法觀に住する菩薩摩訶薩は、佛法に依り趣くが故に、諸法は即、是れ佛法なるを信解し、復是くの如き靈智を發起すと雖も、而も無爲盡滅の法に於て能く證することを作さず。又、無生の智を發起すと雖も、諸の含識を惑んで受生を現じ、又、無生の實際を捨離せざるなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、諸法の中に於て念に安住する故に、遍く能く二乗の諸法を攝受し、一切の假立の諸法に於て念に安住すと雖も、而も此の正念は散ずる無く失する無く、乃至、後際までも、一切の法に於て、法に隨ひ觀察して念住を修習し、能く無量の言説を以て、不平等の境を説く所にて平等に一切の佛法に趣入して、能く一切の衆生をして心喜ばしめ、能く一切の堅固なる魔軍を摧き、是れに因つて自然の大智を證得するなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故に、一切の法に於て、法に隨ひ觀察して念住を修習すと名くるなり。是れを則ち名けて、四種の念住善巧の法と爲す。是くの如くなれば、舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行することを得んと欲せば、應當に念住の善巧を修習すべきなり。」

多に依つて一切の心に於て、心に隨ひ觀察して念住を修習すと名くるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時に、云何か法に於て、法に隨ひ觀察して念住を修習する。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、聖慧の眼を以て諸法を觀見し、乃至、道場に坐するまで、其の中間に於て迷失ある無し。是の菩薩は、一切の法に於て隨法觀に住するに、少法をも見ざれば、空を遠離し、無相を遠離し、無願を遠離し、無生を遠離し、無起を遠離し及び無加行者を遠離し、又重ねて觀察するに、少法をも見ざれば、緣起を遠離するなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は是くの如き隨法觀に安住する故に、法及び非法を觀するなり。此の中の何者、之れを以て法と爲す。謂はく、我無き義、是れを法の義と名け、有情無き義・命者無き義・數取趣無き義、是等の如き義、是れを名け法と爲すなり。復何等を以て非法の義と爲す。謂はゆる我の見・有情の命・命者・數取趣の見・斷の見・常の見・有の見・有無き見、是等の如き見、是れを非法と名く。又、舍利子、要を擧げて言はば、一切の諸法は、或は名けて法と爲し、或は非法と名く。何を以ての故に。若し能く是くの如き諸法の、皆空・無相及び無願なるを了知せば、即ち一切の法は並名けて法と爲せども、若し我及び我所の諸見の隨眠に計著するあらば、即一切の法は並非法と名くればなり。舍利子、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多に依る故に隨法觀に住し已るや、一法として佛法に非ず、而して是れ佛に非ず、而して是れ道に非ず、而して解脱に非ず、而して出離に非ざる者を見ざるなり。是の菩薩摩訶薩は、諸法を了知して皆出離し已り、又復無障の大悲を獲得して、諸の衆生の有らゆる煩惱は皆虛假の妄想よりして生ずるを觀じて、諸の煩惱の體性の自ら離るるを知るなり。何を以ての故に。是の諸の煩惱の等は了義に趣かば、少しの煩惱も積るべき集るべき無しと、是くの如くに隨覺するは即是れ菩提にして、煩惱の性は即菩提の性なればなり。菩薩は是くの如くに念に安住すと雖も而も住する所無く、憶ふに非ず忘るるに非ずして、能く念の安住する所を了知するなり。何

【三四】是の諸の煩惱の等は、乃至、即、菩提の性なればなり。異譯本に「其の了義の如くに平等に入解せば、人・法、俱に空にして、煩惱の積集する所ある無く、而して、能く彼の煩惱の自性は即菩提の性にして、此の菩提の自性は即煩惱の性なることを覺悟するなり。」とあり。

利子、心の本性は取得すべからず觀見すべからざれども、是の心の法性にて能く一切の靜慮解脫・三摩地・三摩鉢底を修習して、諸佛の勝三摩地に迴向する、是れを則ち名けて善根の積集と爲すなり。又、舍利子、此の心性を觀するに、本より色相に非れば、見る無く對する無く了知すべからざれども、是の心の法性にて能く一切の慧句を差別して説く智を修習して、圓滿なる諸佛の智慧に迴向する、是れを則ち名けて善根の積集と爲すなり。又、舍利子、心は緣する所無く生ずる無く起る無きも、是の心の法性にて能く無量の善法を建立して色相を攝受する、是くの如きを名けて善根の積集と爲すなり。又、舍利子、心は因とする所無く亦生ずる所無きも、是の心の法性にて能く覺分の法因を攝受する、是れを則ち名けて善根の積集と爲すなり。又、舍利子、心性は六種の境界を遠離し亦生起せざれども、是の心の法性にて能く菩提の境界の因つて生ずる所の心を引發する、是れを名けて善根の積集と爲すなり。舍利子、是くの如きを名けて、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多に依る故に、一切の心に於て心の觀察に隨ひ念住を修習すと名くるなり。

復次に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は、又般若波羅蜜多に依る故に、一切の心に於て隨心觀に住し、勝神通を證得することを求めん爲めの故に、其の心を繫縛して通智を修學し、神通を得已るや、但一心を以てして能く善く一切の心相を知り、既に了知し已るや、心の自體に依つて諸法を宣説するなり。舍利子、是くの如くに隨心觀に住する菩薩摩訶薩は、大悲の力を以て其の心を制御し、衆生を成熟して厭倦する無し。是の菩薩の、隨心觀に住する故に由り、心の靈を爲さず心の滅を爲さずして心を安住するは、但心をして生死相續の結縛より遠離して心を安住せしむるを爲すなり。又復諸の心念の智力を以て諸法の無生・無起・正決定の性に安住して、二乘地の中に退墮せざるなり。又是の力を以て心を持つこと相續して、乃至、一切の佛法を成滿し、一刹那の心も妙慧と相應して、

阿耨多羅三藐三菩提を覺悟するなり。是くの如くにして、舍利子、是れを菩薩摩訶薩は般若波羅蜜

【二〇】 是の心の法性にて、乃至、修習して。

異譯本に「智を以て分別して、一切の清淨なる句義を宣説して」とあり。

【二一】 心は因とする所無く、亦生ずる所無き。

異譯本に「心因つて生ずる無き」とあり。

【二二】 覺分の法因を攝受する。異譯本に「菩提分の法に因つて起る所」とあり。

【二三】 六種の境界（六境）。六根即ち六處の對象たる、色・聲・香・味・觸・法を謂ふ。

【二四】 隨心觀に住し。異譯本に「心行を觀する時に」とあり。

【二五】 但一心を以てして、乃至、宣説するなり。

異譯本に「一心の中に於て、能く一切の有情の心の趣く所を知り、知り已つて、其の本性に隨つて説法を爲すなり。」とあり。

自ら了すること能はされば、云何ぞ此の心にて能く是の念——我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を證すべし——を作さんや。何を以ての故に。此の心體は了する能はず。心は心を觀る能はずして、自心に通達し能はざるを以ての故に。と。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、復是の念を作さん。若し菩提の心は、善根の心の失ふことある無きに由らば、則ち善根の心は迴向の心の迷失することある無きに由る。若し迴向の心は菩提の故（心）の失ふことある無きに由らば、則ち阿耨多羅三藐三菩提は失ふことある無しと爲す。と。是の菩薩摩訶薩は是の觀を作し已つて、迷失する無く恐れず怖れざるなり。復、是の念を作さん。此の緣起の法は因も果も壞れず。復是の心の法性には、自性ある無く作用ある無く主宰ある無しと雖も、然れども此の諸法は、因緣に依止して生起することを得れば、我れは當に其の欲する所に隨ひ善根を積集し、既に積集し已つて相應の行を修めて、終まで是の心の法性を捨離せざるべし。と。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、云何か此の中にて積集する相なる。舍利子、是の諸の菩薩摩訶薩は、是くの如くに積集の相を觀するを作さん。是の心の本性は猶幻化の如くにして、一法として施すべき者ある無きも、是の心の法性にて能く一切衆生に布施し、積集を迴向して佛土を莊嚴するは、是れ則ち名けて善根の積集と爲すなり。と。又、舍利子、是の心の本性は、夢の見る所の如く其の相寂靜なれども、是の心の法性にて能く尸羅を守護することを積集して、皆神通の作用に迴向することを爲す、是れを則ち名けて善根の積集と爲すなり。又、舍利子、是の心の本性は猶陽焰の如くにして、究竟して盡滅すれども、是の心の法性にて能く一切の樂ふべき忍辱の力を修習して、積集を迴向して菩提を莊嚴する、是れを則ち名けて善根の積集と爲すなり。又、舍利子、心の本性は水中の月の如くにして、究竟して積集の相を遠離すれども、是の心の法性にて能く一切の正勤を發起して、迴向して無量の佛法を成熟する、是れを則ち名けて善根の積集と爲すなり。又、舍

【五】故。原本には「故」とあれど、「心」の誤記なるべし。

【六】心の本性。異譯本には「覆障心」とあり。

【七】心の法性。異譯本には「法性心」とあり。

了別となり。或は四つの受を説けり。謂はゆる地・水・火・風界の差別の了別なり。或は五つの受を説けり。謂はゆる是くの如き五蘊を思惟すればなり。或は六つの受を説けり。謂はゆる是くの如き六處を分別すればなり。或は七つの受を説けり。謂はく七識住なり。或は八つの受を説けり。謂はゆる八相の方便の相なり。或は九つの受を説けり。謂はゆる九位の衆生の居る所なり。或は十の受を説けり。謂はゆる十善の業道等なり。舍利子、是くの如く廣く説きて、乃至、無量なる一切の諸受は、縁する所の境に隨ひ、作意する所に隨ひ、限量の分齊に爾所の受あり。然れば、諸の如來は受を説くこと無量なるなり。何を以ての故に。衆生の無量なる故にして、衆生あるに隨ひ各是くの如き無量なる諸受を具すればなり。舍利子、是くの如き菩薩摩訶薩は、云何か受に於て隨受の觀に住する。舍利子、諸の菩薩の清淨智の方便を以て、善く一切衆生の有つ所の諸受の生と滅と住と異とを攝し、及び善く、一切衆生の善・不善等に於て有つ所の受を了知する智を謂ふ。若く諸の菩薩の是くの如くに隨觀する、是れを受に於て觀察を具すと名く。舍利子、是くの如きを名けて、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故に、一切の受に於て、受の觀察に隨ひ念住を修習すと名くるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時に、云何か心に於て心の觀察に隨ひ念住を修習する。舍利子、是の諸の菩薩摩訶薩は、忘念ある無く密に護り防ぎ守つて、諸の散亂を離れて、心を觀察するに、生滅散壞して念念に住らず。内に於ても外に於ても住らず轉ぜざる、是れを菩薩は正しく心を觀すと名く。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、復是の念を作さん。我れ最初に曾て發す所の心を憶ふに、是の諸の心の如きは、生じ已るや即滅し離散し變壞して、何の場所に詣りしかを了知すべからず。又、我が有つ所の無量なる諸心に善根を積集するも、生じ已るや即滅し、離散・變壞して方所あること無し。又、我が有つ所の無量の心相にて菩提に迴向するも、而も心の體相は

【二】 是くの如き五蘊を思惟すればなり。
異譯本に「五蘊の作意」とあり。

【三】 八相の方便の相なり。
異譯本に「八相と相應するなり」とあり。八相とは、八正道の反對にして、邪見・邪思・惟・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定を謂ふ。

【四】 九位の衆生の居る所なり。
異譯本に「九有情居」とあり。
「九衆生居」と同じ。

【四】 又我が有つ所の無量の心相にて、乃至、自心に通達し能はざれば、
異譯本に「又是の心に於て、菩提に迴向するに、自體の相に於て、心の了する所無く、心の觀る所無く、心の入る所無し」とあり。

の如き觀解力くわんげりきを具足せる故に由り、受じゆに隨つて行するに、念住ねんじゆを修習すれば、受くる所の諸受の、若しは苦・若しは樂・不苦不樂ふくふらくに、善く諸受の出離を觀察し能ひ、又能く彼の一切の衆生をして、受の遍智へんちなる寂滅じやくめつの法を證せしむるなり。又、是の念を作さん。此の諸の衆生は、煩惱を具する故に智慧ある無くして、諸受の出離を了知する能はざるなり。何を以ての故に。若し樂を受くる時は便ち貪愛こんあいを生じ、若し苦を受くる時は便ち瞋恚しんこんを生じ、若し不苦不樂を受けば便ち愚癡ぐぢを起せば、而く「我が輩諸菩薩等の、智慧に隨つて行して、一切受くる所の諸の過失の法は皆已に息滅したれば、豈當に受じゆに於て更に煩惱を起すべき」に況んや。我れ今に於ては、應に具つづに方便善巧ほうべんぜんこう及與および大悲を發起して、諸の衆生を攝さつして、諸受に於て皆息滅することを得しむべしと。舍利子、是くの如き菩薩は、何の因縁の故にて、諸の受に於て能く隨はずと説くか。舍利子、諸受に於て、智慧にて簡擇けんたくして、能く樂らくを引きて苦を引かざるを謂ふなり。舍利子、復何等の智慧を以て簡擇する。謂はく。是の菩薩は此の中を觀察するに、能く受くる者——若しは我・若しは有情・若しは命者・若しは數取等——無く、是に於て觀察するに、能く受くるもの無くして唯受くる者のみあり。何等の受ある。謂はゆる執しやくの受・攝さつの受・取との受・有得いうとくの受・顛倒てんたうの受・分別ぶんべつの受・見けんの隨眠ずいみんの受・眼想がんじやうにて生ずる所の受、乃至、意想いじやうにて生ずる所の受、色想しきじやうにて生ずる所の受、乃至、法想ほふじやうにて生ずる所の受、及び彼の種種の眼觸がんじゆくにて生ずる所の受と、是くの如く廣く説きて、若しは内若しは外の有らゆる諸法、乃至、諸の觸の縁にて生ずる所の受の、若しは苦・若しは樂・不苦不樂の、是等の如き相、是れを名けて受と爲すなり。

復次に、舍利子、諸佛如來は、諸受しよじゆの無量なる諸門の差別の相さうを分別せり。舍利子、如來は、或る時は説いて一つの受と爲せり。謂はゆる、一の心にて諸境しよじやうを了別すればなり。或は二つの受を説けり。謂はく。内ない及び外げなり。或は三つの受を説けり。謂はゆる過去の了別と未來の了別と現在の

【三〇】 分別の受・見の隨眠の受。
異譯本に「遍計の受・惡見の受」とあり。

訶薩は般若波羅蜜多に依つて是の身を觀察するに由り、是等の如き大義用を有つ故にて、此の身の體性はれ苦なるを觀ずと雖も、而も是くの如き苦の身を厭患せず。是の身の究竟して盡性なるを觀ずと雖も、而も流轉の受生を厭患せず。是の身の其の性無我なるを觀ずと雖も、而も衆生を成熟することを厭患する無し。是の身の我の寂滅性なるを觀ずと雖も、而も彼の永く捨てて寂滅なるに墮せず。身の空・無相なるを觀じて遠離すと雖も、而も遠離の邊際に墮せざるなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、此の身法に於て、隨身觀に住して是の身の實も無く堅も無きを觀察し、又、内身に於て隨身觀に住すれば、内に隨つて行するも、諸の煩惱に於て復容受すること無く、又、外身に於て隨身觀に住すれば、外に隨つて行するも、諸の煩惱に於て與して共に住せざるなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は是くの如き身念住を成就し已るや、其の身は清淨にして染汙ある無く、一切の清淨なる身業を具して清淨なる相、莊嚴の身を得、既に是くの如き莊嚴の身を具する故にて、諸の天人に爲つて歸仰せらるるなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故に、此の身法に於ては、身の觀察に隨ひ念住を修習すと名くるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時に、云何が受に於て受の觀察に隨ひ念住を修習する。舍利子、菩薩摩訶薩は、是の思惟を作さん。諸べて有つ所の受は一切皆苦なれば、我れ今者に於ては、覺慧の力を具して、是くの如き受に於て、當に善く決擇——智を以ての決擇慧を以ての決擇・方便もての決擇——すべしと。是の菩薩摩訶薩は、既に是くの如き勝・決擇の力を具するや、樂を受くと雖も、樂に觸るる時に當り、即一切の善道の衆生に於て大慈の心を起して、貪欲の隨眠に爲つて惱されず。苦を受くと雖も、苦に觸るる時に當り、即一切の惡道の衆生に於て大悲の心を起して、瞋恚の隨眠に爲つて惱されず。復諸の不苦・不樂を受くと雖も、觸れ受くる時に當り、無明の隨眠に爲つて惱されざるなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多に依つて是く

【一九】隨身觀。
異譯本に「身を以て身を觀ぜば」とあり。

には、受に於ては、受の觀察に隨ひ念住を修習するなり。三には、心に於ては、心の觀察に隨ひ念住を修習するなり。四には、法に於ては、法の觀察に隨ひ念住を修習するなり。舍利子、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行する故に、云何か身に於て身の觀察に隨ひ念住を修習する。舍利子、菩薩は、身に於ては、隨身念に住して、是の身の前際の過咎を觀察するなり。是の菩薩摩訶薩は是の思惟を作さん。是くの如き身は、顛倒せる業より起り、因縁の生ずる所にして、本より主宰無く攝受する所無きこと、彼の卉木・叢林・諸の藥草等、因縁より生じて、本より主宰無く攝受する所無きが如し。此の身は又、館舎の起る所は、皆草木・墻壁の衆縁に由つて共に合成する所なるが如し。此の身も亦爾り。但蘊・界・處等に爲つて攝持せられて、其の本性は空にして我ある無く我所ある無く、無常・無恒にして堅住を有つこと無く、不變の法に非れば、我れ今應に是の身分に於て妄に計する所あるべからず。是の故に、我れは今當に是くの如き不堅の身を以て、用ひて堅身に質へん。何等の身をば名けて堅實と爲す。謂はく。如來の身は是れ堅實の身なり。我れ是の身を觀するに、極つて虚偽たり。當に如來の身を成辯すべきを要す。何を以ての故に。如來の身は即是れ法身なれば、金剛の身・不可壞の身・堅固の身にして、三界を超えたる最勝の身なればなり。と。又、是の念を作さん。我が此の身は、無量の過咎にて雜染せられたれば、我れは當に諸の過染を離れたる如來の身を證せんことを求むべし。と。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、諸の覺慧の揀擇の力を以ての故に、是の身の、四大種の攝にして、諸の隨眠を爲つて依らるる窟宅なるを觀察し、是の故に、我れ今當に此の身を以て諸の衆生の爲めの驅役・給使に當てん。何を以ての故に。譬へば、世間の外の四大種、謂はゆる地界・水・火・風界の如きは、種種の門、無量なる差別の衆具・資財を以して、一切の衆生を饒益し養育すれば、我れも今亦爾く此の四大にて合成せられたる身を用ひて、種種の門、無量なる差別の境界・資財と以して、當に衆生の爲めに受用せらるべければなりと。舍利子、是の菩薩摩

能く智徳の資糧の善巧と爲すなり。何等を四と爲す。謂ふ所のものは、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多に依る故を以て、到彼岸の道・七覺分の道・八聖支の道・一切智者に趣向する智道を具足して修行するなり。舍利子、是くの如き四種の正法の道は、能く智徳の資糧の正行と爲るなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に、復智徳の資糧の善巧あり。謂はく、四種の厭足無き法を具して、則ち善く智徳の資糧を集め能ふなり。何等を四と爲す。謂ふ所のものは、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行する故を以て、正法の無量の聽聞を奉持するに厭足あること無く、衆の爲めに法を説くに厭足あること無く、理義を觀察するに厭足あること無く、智慧の方便に厭足あること無きなり。舍利子、是くの如き四種の厭足無き法は、能く智徳の資糧を集むる正行なり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の是くの如き智徳の資糧の善巧は、一切の行處に隨つて過く入るなり。何を以ての故に。舍利子、當に知るべし、布施は智の資糧に由つて成就する故に。是くの如くに、持戒・忍辱・精進・靜慮・正慧も、亦是れ智徳の資糧にて成就し、乃至、慈・悲・喜・捨と、一切の善法も亦智徳の資糧に因つて成就すればなり。何を以ての故に。舍利子、菩薩摩訶薩の有らゆる發起する堅固の正行は皆智に依止し、彼の一切の行は智を前導と爲せばなり。是れに由つて、菩薩は大智を具し、故に諸の無智の爲めに歸趣せられて、一切の惡魔は其の便を得ず、諸佛如來に共に加護せられて、將に一切智智に趣入することを得るなり。舍利子、是れを菩薩の智徳の資糧の善巧の行と爲す。若く諸の菩薩摩訶薩の、是くの如き福・智二種の資糧の善巧を成就することは、當に知るべし、般若波羅蜜多を修行する故に、是の資糧の善巧の力を獲るものなることを。

復次に、舍利子、云何なるは、菩薩摩訶薩の念住の善巧なる。舍利子、謂ふ所のものは、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故に、四種の念住を具し修習して、則ち能く方便の善巧を成就するなり。舍利子、何等を四と爲す。一には、身に於ては、身の觀察に隨ひ念住を修習するなり。二

【七】 到彼岸の道等。

異譯本に「波羅蜜多七菩提分八聖道支及び一切智智等」とあり。

【八】 七覺分。「七助道法」と同じ。

善く空・無相・無願の法を信解し能ふなり。舍利子、是くの如き四種の含受の忍法にて、能く智徳の資糧の行を爲すなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に、復智徳の資糧の善巧あり。謂はく、能く四種の精進を具足して、能く智徳の資糧の善巧と爲すなり。何等を四と爲す。謂ふ所のものは、菩薩摩訶薩は、堅固に精進して正法を聽聞し、堅固に精進して正法を任持し、堅固に精進して正法を演説し、堅固に精進して正行を修行するなり。舍利子、是くの如き四種の堅固の精進を、能く智徳の資糧の行と爲すなり。復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に、復智徳の資糧の善巧あり。謂はく、能く四種の靜慮を、法に於て修習することを具足して、能く智徳の資糧の善巧と爲すなり。何等を四と爲す。一には、菩薩は常に樂んで遠離の法を行するなり。二には、樂んで獨專一に靜を山林に守るなり。三には、常に樂んで神通の靜慮を尋求するなり。四には、常に勤めて廣大なる佛智を修行するなり。舍利子、是くの如き四種の正法の靜慮にて、能く智徳の資糧の行を爲すなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に、復智徳の資糧の善巧あり。謂はく、能く四種の正法の智慧の光明を具足して、能く智徳の資糧の善巧と爲すなり。何等を四と爲す。謂ふ所のものは、菩薩摩訶薩は、是くの如き智慧の光明——斷に住せず、常を説かず、緣起に違はず、無我を信解す。——を修行するなり。舍利子、是くの如き四種の諸の智慧の光明は、能く智徳の資糧の正行と爲るなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に、復智徳の資糧の善巧あり。謂はく、能く四種の正法の無上なる方便を成就して、能く智徳の資糧の善巧と爲すなり。何等を四と爲す。謂ふ所のものは、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行する故に、世間に隨順し、經典に隨順し、妙法に隨順し、淨智に隨順するなり。舍利子、是くの如き四種の正法の方便は、能く智徳の資糧の正行と爲るなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に、復智徳の資糧の善巧あり。謂はく、能く四種の法道に進越して、

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に、復四種の智徳の資糧を任持する善巧あり。何等を四と爲す。謂ふ所のものは、菩薩摩訶薩は、説法者に於て、法を以て任持し、智を以て任持し、財を以て任持し、菩提の功徳を以てして任持に用ふるなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、四種の任持する智徳の資糧と爲す。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、復五種の勝力を有つて、能く智徳の資糧の善巧と爲すなり。何等を五と爲す。謂ふ所のものは、菩薩摩訶薩は、信力を具足して、信解の心を成就せんと欲するを爲す故なり。進力を具足して、善知識を求めて多聞を成ずる故なり。念力を具足して、菩提の心をして忘失する無からしむる故なり。定力を具足して、審諦に觀察して平等に覺する故なり。慧力を具足して、久しく修習せる多聞力に由る故なり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、五力の智徳の資糧の善巧と名く。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に、復智徳の資糧の善巧あり。謂はく。四種の清淨なる尸羅を具して、善く智徳の資糧を積集し能ふなり。何等を四と爲す。謂ふ所のものは、菩薩摩訶薩は、法の尸羅を樂み、法の尸羅を求め、法の尸羅を觀じ、菩提の尸羅に廻向するなり。舍利子、菩薩摩訶薩にして、若し是くの如き四種の清淨なる尸羅を具せば、智徳の資糧を善く積集する善巧の行を能くせるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に、復智徳の資糧の善巧あり。謂はく。四種の忍の法を具足して、能く智徳の資糧の善巧と爲すなり。何等を四と爲す。一には、菩薩摩訶薩は法を勤求する時に、善く一切の愚惡・非法なる言説を忍受し能ふなり。二には菩薩摩訶薩は法を勤求する時に、善く一切の風日・寒熱・飢渴を堪忍し能ふなり。三には、菩薩摩訶薩は法を勤求する時に、阿遮利耶・毘波陀耶の二勝師の所に於て、訓誨あるに隨ひ頂戴し領受するなり。四には、菩薩摩訶薩は法を勤求する時に、

き故^こり。甚深の義を備へて、善く隨ひ行ずる故なり。妙慧を具足して道に隨順する故なり。堅固勇猛に外縁を防衛する故なり。内に羞恥を懷き慚愧し莊嚴する故なり。佛趣に隨ひ行き非智を離るる故なり。愚癡の蹟を捨てて、慧眼清淨に善く覺悟する故なり。覺慧寬廣にして、是くの如き覺に於て狭劣無き故なり。妙覺明顯して智を證現する故なり。——を修習するなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩の有つ所の功德は、他に隨はざれども、自の功德に於て増上慢無く、他の功德に於て嫉まず毀らず、善く行業を修して業の報を輕んぜず。是くの如き故に由つて、清淨なる智を具足し成滿するなり。舍利子、是等の相の如きを具足し圓備する、是れを菩薩摩訶薩の智徳の資糧の善巧の行と名くなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に復智徳の資糧の善巧あり。謂はく。能く四種の施法を具足せば、便ち智徳の資糧を成就することを得。何等を四と爲す。一には、菩薩摩訶薩は、若し是の經典の如きを書寫するを見れば、葉紙・筆墨の衆の事を給施するなり。二には、菩薩摩訶薩は、説法者を請じて深妙なる義を演べしむるなり。三には、菩薩摩訶薩は、諸の利養・恭敬・名聞・讚頌・稱揚を以て説法者に奉ずるなり。四には、菩薩摩訶薩は、説法の師に於て、正法を攝受するに、詔曲ある無く彼れの意を諍説して、應に是の言を施すべし。善い哉、善い哉。と。舍利子、若し菩薩摩訶薩あつて、是の四種の清淨なる布施を行ぜば、當に知るべし、善く智徳の資糧を積集する善巧を能くせることを。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に、復四種の無盡の智徳の資糧を積集するあり。何等を四と爲す。一には、菩薩摩訶薩は、巧に能く説法者の身を守護するなり。二には、巧に能く有つ所の衆善を守護するなり。三には、巧に能く其の止る所の處を守護するなり。四には、巧に能く彼の説法者の有つ所の徒衆を守護するなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、四種の積集する智徳の資糧と爲す。

【二〇】佛趣に隨ひ行き、非智を離るる故なり。異譯本に「佛道に趣向して、無明、暗蔽し」とあり。

なり。是の故に名けて智徳の資糧と曰ふ。舍利子、是くの如くに智を攝するに、何等の法を以て因と爲し縁と爲す。舍利子、當に知るべし、菩薩摩訶薩は厭倦無く精進に智を尋ね求めんと欲して、行の性に隨ひ、善友に親近して、諸佛の智に趣いて聲聞及び獨覺の智に趣かず、彼の善友に於て、情に橋慢無く恭敬・愛重すること、大師を愛するが如くにするなり。而して是の菩薩は、彼の善友の、諸の欲解を具するも、少分も智に順じて言説することある無きを知らば、而ち彼の善友の者に諮受せざれども、又、菩薩の是れ法器なるを知り已つて、卽宣説を爲して中に暫くも斷つこと無くんば、是の諸の菩薩は、是くの如き正法の資糧と相應する行を説くを聞き、精進に尋思し方便して修習するなり。舍利子、諸べて是くの如き相、此れを則ち名けて智徳の資糧と相應せる正行と爲すなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の正法の資糧と相應する正行と爲す。舍利子、正法の資糧とは、謂はゆる菩薩摩訶薩は、具に正行を修せん故に、嗜欲・饕餮を善く能く節儉し、事緒・緣務を善く能く減約し、言説・談話を善く能く遠離し、諸の音聲に於て善く能く棄捨し、初夜・後夜に睡眠を有つ無く、精勤に相應の正行——是れ菩薩摩訶薩の、理義を稱量して、鄭重に尋思する故なり。心に濁穢無くして、諸蓋を制伏する故なり。毀犯する所に於て善く出離することを知り、詔詐を有つ無く、現に除悔する故なり。追求する所無くして、堅く正行を修むる故なり。正法に隨順し正法に趣向し正法に俯臨するに、法に於て勇猛なること、常に彼の頭衣の熾然なるを救ふが如くなる故なり。妙智を勤求して暫くの休息も無く、愚暗に處らざる故なり、慢緩を有つ無く、善觀を棄てざる故なり。憒闇を遠離して、常に獨處を樂む故なり、宴默して、聖種を思惟し足ることを知る故なり。杜多の有つ所の功德を捨てずして、法樂を愛樂する故なり。常に樂んで世間の法を尋求して、世間に隨順せる文章・呪術を寶玩することを思はざる故なり。正念を成就して、忘失無

なる園林を施し奉り、佛道場を莊嚴せんと欲する爲めの故に、備に善根を修めて退轉するある無く、淨く生死の法を除かんと欲する爲めの故に、一切の諸業の煩惱に染らず、珍寶の手を獲得せんと欲する爲めの故に、一切の珍寶を布施することを修行し、無盡の財及び無盡の藏を獲得せんと欲する爲めの故に、愛する所の重物を先づ用ひて施を行じ、諸の衆生をして暫く見て便ち清淨の信を起さしめんと欲する爲めの故に、顔を舒べて先づ問うて諸の擧蹙に遠り、平掌の相を獲得せんと欲する爲めの故に、諸の衆生に於て平等の照を起し、無邊の諸の光網を放たん爲めの故に、不學識の諸の衆生の所に於て情に輕蔑せず、又捨て置くこと無く、受生をして清淨なるを得しめん爲めの故に、積集せる清淨なる戒福を常存し、胎藏をして清淨なるを得しめん爲めの故に、諸の毀犯に於て善く能く清淨にして、天人の中に生れんと欲する爲めの故に、清淨なる十善の業道を修治し、無知を遠離して往還・進止せん故に、諸の教誡に於て妄分別する無く、法財の富逸自在なるを得ん爲めの故に、深奥なる法性に於て藏愷する無く、諸の世間に爲つて瞻仰せられん故に、清淨なる増上の欲解を修治し、廣大なる法の勝解を得ん爲めの故に、微少の行に於ては修證せず、一切の福を攝受せんと欲する爲めの故に、心恒に一切智者を思惟し、七聖財に圓滿なるを得ん爲めの故に、佛の正法に於て信を前導と爲し、諸の淨法を攝受せんと欲する爲めの故に、己が身命に於て曾て願録すること無く、諸の世間に爲つて委任せられん故に、先に許す所に於て必ず令く果し遂げ、一切諸佛の妙法をして圓滿なるを得しめん爲めの故に、圓滿に一切の佛法を修習するなり。舍利子、若し菩薩摩訶薩にして、是くの如き相を具足し成就せば、是れを菩薩摩訶薩の福德の香糧の善巧と名くるなり。

復次に、舍利子、云何なるは、菩薩摩訶薩の智徳の香糧の善巧なる。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行する時に、是くの如き是くの如き因縁の法に住する故に由つて、智を攝取する

の福の作る所の事に廻向するなり。是の菩薩摩訶薩は、未だ大菩提心を發さざる諸の菩薩等あるを見るや、方便して教へて菩提心を發さしめ、若し已に菩提心を發せる者あらば、說法・示教して教へて成熟せしめ、諸の貧窮の者をば、攝むるに財物を以てし、若し疾病の者ならば、施すに醫藥を以てして殷勤に瞻視し恭敬もて承事し、暴惡の者に於ては、心に忍受を生じて、犯す所の戒品をば、覆藏するある無く諸過を發露して、善く能く罪を除かしめ已に殷潔せる諸佛世尊には、一切の時に於て常に供養を修め、鄔波陀耶及び阿遮利耶に於ては、敬ふこと大師の如くにし、正法の所に於ては、勤精進を發して追ひ尋いで請問し、說法の師に於ては、敬愛し尊奉すること猶佛に事ふるが如くにし、說法の會あるには、已れを去ることの遠きこと百踰繕那より多しと雖も、要す其の所に往き、正法を聽聞して厭足するある無く、或は衆生の來つて疑滯を請ふあらば、無染の心を以て淨法を宣説し、父母の所に於ては、承つて供養を修め、恩を知り恩を了して變悔ある無く、一切の諸の清淨の福を積集する修行の建立には、情に厭倦無く、諸の律檢を以て身を防護して身に詭詐無く、語を防護して言を發することと和雅に、心を防護して心に詭誑無く、梵福を攝めんと欲する故に、諸の如來の爲めに制多を營構し、三夫の相をして圓滿を具せしめん故に、遮る無き大祠の法會を積集し、隨顯の相を圓滿ならしめん爲めの故に、種種なる善根の資糧を積集し、身を莊嚴せん爲めの故に、憍慢を捨離し、語を莊嚴せん爲めの故に、諸の語の過に遠り、心を莊嚴せん爲めの故に、一切の憎嫉を遠離して覺慧し、大に佛刹土を莊嚴せん爲めの故に、神通の轉變自在なるを化現し、諸の法相を莊嚴せんと欲する爲めの故に、無上の妙智を善く勝清淨にし、大法衆を莊嚴せんと欲する爲めの故に、一切の離間・龜惡・破壞の語言を遠離し、一切の法に取著せざらん爲めの故に妄分別を離れ、說法者をして憂感無からしめん故に、歡喜して善哉の言詞を授與し、說法者をして唐捐無からしめん故に、諸蓋を遠離して恭敬して法を聽き、菩提の樹を莊嚴せんと欲する爲めの故に、諸佛に清淨

【三】 丈夫の相。三十二相を謂ふ。

【四】 隨顯の相。八十種好を指す。

【五】 心を莊嚴せん爲めの故に等。

異譯本に「勝解を決定して一心を莊嚴し」とあり。

【六】 諸の法相を莊嚴せんと欲する爲めの故に等。

異譯本に「清淨智を以て法相を莊嚴し」とあり。

し、諸の平等・不平等の中に於て、妙に善く平等なる、是の等の如き相、是れを法性と名くるなり。又、法性とは、分別ある無く、所縁ある無く、一切の法に於て、決定して究竟せる體相を證得する、是くの如きを名けて諸法の實性と爲すなり。舍利子、若し法性に依趣する者あらば、則ち諸法の性に依趣せざる無し。菩薩摩訶薩は是くの如き門に證入するに由る故にて、一切の法に於て、一切法の性に依趣するなり。故に舍利子、是くの如きを名けて、菩薩摩訶薩の四種の依趣と爲し、若し菩薩摩訶薩あつて、此の法の中に於て能く通達せば、是れを則ち説いて依趣に善巧なりと名く。舍利子、是くの如きを名けて依趣の善巧と爲し、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行せんと欲する故に、精勤に依趣の善巧を修習することを爲すなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の資糧の善巧と爲す。舍利子、當に知るべし、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故に、善く二種の資糧に通達し能ふことを。何者か是れなるか。謂はく、福及び智なり。舍利子、云何なるを名けて福德の資糧と爲す。謂はゆる、布施の體性の福の作る所の事・尸羅の體性の福の作る所の事・諸の修の體性の福の作る所の事及び大慈の定・大悲の方便なり。菩薩摩訶薩は、福の作る所の諸の事業を作さん故に、諸の善根の、若しは自若しは他なるに於て、志を勵して奉修して悉く能く興起し、三世に積集せる有らゆる諸惡を悉く皆發露し、又、一切の衆生の有らゆる功德・一切の學・無學の有らゆる功德・一切の獨覺の有らゆる功德・一切の菩薩の、初發心より廣く諸行を修め不退轉を得一生に繫屬せる、是等の如き無量無邊の菩薩摩訶薩の、有らゆる功德に於て、菩薩は、普く皆心に隨喜を生じ、又、去・來・現在の一切の諸佛薄伽梵の所の一切の善根に於ても、菩薩は亦皆心に隨喜を生ずるなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、又復善く俱生の福の作る所の事を隨喜し、復善く能く一切の諸佛を勸請して妙法輪を轉じ及び諸の賢聖に勝法を演べしめて、俱生の福の作る所の事を勸請し、復能く諸の善根を以て菩提に迴向して、俱生

【二】布施の體性の、乃至、大悲の方便なり。異譯本に「布施の福行、持戒の福行、修觀の福行等、慈の心・大悲の相に住して」とあり。

有情・無命者・無養者・無數取趣者及び三解脱門を説く、斯くの如き言教、是れを了義と名けて、則ち依趣すべきことを能く分別するなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故に、了義に依趣して不了の義に趣かずと名くるなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩は法に依趣して數取者に依趣せずと爲す。舍利子、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多に依る故に、諸の經教に於て、善く有らゆる不了義を宣説する經は、即、補陀伽羅の義たれば、是くの如き言教には應に依趣すべからず、有らゆる了義は即、如性の法の義なれば、是くの如き言教には此に應に依趣すべきことを能く分別するなり。又、舍利子、復何等を以て名けて法に依ると爲し、云何なるを名けて數取趣者と爲す。舍利子、若し數取の見に依止して諸べて法を緣する所あらば、是くの如き相を數取者と名け、此の數取の見にて緣する所の法の、性の法性に住する、是くの如き相をば、是れを名けて法と爲すなり。數取と言ふは、謂はゆる凡夫の數取・善凡夫の數取・隨信行の數取・隨法行の數取・第八の數取・預流の數取・一來の數取・不還の數取・阿羅漢の數取・獨覺の數取・菩薩の數取なり。舍利子、復一つの數取者あつて世に出現して、無量の衆生を利益し安樂にし、世間を悲愍して諸の天人の義利・安樂の爲めにす。是くの如き數取は、謂はゆる如來應正等覺なり。舍利子、是くの如き一切の數取の名言は、如來は世俗諦に依つて、衆生の爲めに説くものなれば、衆生あつて此の言教に於て執著を起す若きも、是等の類の如きに應に依趣すべからず。何を以ての故に。如來は彼に於て正しく依趣せしめんと欲する故に、佛薄伽梵は是くの如き法を説けばなり。汝等、諸法の實性に依趣して、宜しく彼の數取者に依趣すること無れ。

と、舍利子、何等を是れ諸法の實性と爲す。舍利子、謂はゆる變異ある無く、増益ある無く、作も無く不作も無くして、無根本に住せざる、是くの如き相、是れを法性と名くるなり。又復、一切の處に於て通照すること平等なれば、諸の平等の中に善く平等に住し、不平等の中にも善く平等に住

【二〇】第八。第八人の略にして、八人地とも云ふ。異譯本には「八輩」とあり。

蜜多を修行する故に、智に依趣して識に依趣せずと名くるなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩は、不了義經に依趣せずして了義經に依趣すと爲す。舍利子、諸の菩薩は、等しく善く即ち先に説くが如き有らゆる廣文、是れを則ち名けて不了義經と爲し、是くの如き廣文には應に依趣すべからず、即ち先に説くが如き有らゆる廣義、是れを則ち名けて了義經の際と爲し、是くの如き廣義には則ち依趣すべきに能く通達すべきに能く通達するなり。又、舍利子、何等を、經中にて以て了義と爲し、何等を、經中にて不了義と名くる。舍利子、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多に依る故に、善く、若しくは、諸經の中にて道を宣説する、是くの如き言教を不了義と名け、若しくは、諸經の中にて果を宣説する、是くの如き言教を名けて了義と爲し、若しくは、諸經の中にて世俗諦を説くを不了義と名け、勝義諦を説くを名けて了義と爲し、若しくは、諸經の中にて作業・煩惱惑染を宣説するを不了義と名け、若しくは、煩惱・業の盡くるを宣説するある、是れを了義と名け、若しくは、諸經の中にて染汙を呵責する法を宣説するを不了義と名け、若しくは、清淨を修治することを宣説するある、是くの如き法をば是れを了義と名け、若しくは、諸經の中にて、生死に厭背し涅槃を欣樂することを宣説する所あるを不了義と名け、若しくは、生死と涅槃との二つの無差別なることを宣説するある、是れを了義と名け、若しくは、諸經の中にて、種種の文句差別を宣説するを不了義と名け、若しくは、甚深にして見難く覺り難きを説くもの、是れを了義と名け、若しくは、諸經の中にて、文句の廣博にして、能く衆生の心意をして踊躍せしむるもの、是れを了義と名け、若しくは、文句及び心の皆同じく灰燼することを宣説するある、是れを了義と名け、若しくは、諸經の中にて我・有情・命者・養者・數取趣者・意生・摩納婆・作者・受者ありと宣説し、又種種の受蘊ありて主宰ある無しと説立する、是くの如き言教を不了義と名けて、應に依趣すべからず、若しくは、諸經の中にて、空・無相・無願・無生・無起、亦、無出現・無有我・無

を了知するなり。又、舍利子、是の菩薩摩訶薩は、二法の善巧に由つて、便すなはち能く般若波羅蜜多を修行するなり。何等を二と爲す。謂はく。識及び智なり。舍利子、何等を識と爲し、何等を智と爲す。舍利子、言ふ所の識とは、四つの識任を謂ふ。何等を四と爲す。一には、色の趣にして、識の依止する所なり。二には、受の趣にして、識の依止する所なり。三には、想の趣にして、識の依止する所なり。四には、行の趣にして、識の依止する所なり。是くの如きに識の住する、是れを名けて識と爲し、應に依趣すべからず。言ふ所の智とは、五取蘊の識に於て安住せずして、諸蘊に遍き智、是れを名けて智と爲し、此れに應に依趣すべし。言ふ所の識とは、謂はく。能く地界・水界・火界・風界を了知する、是くの如き了知を則ち名けて識と爲し、應に依趣すべからず。若し説いて四種の識任を言ふことありとも、識の安住せざるを、此に則ち名けて識の法性と爲し、若し法性に於て雜亂せざる智ならば、是れを名けて智と爲し、則ち依趣すべし。又復、識とは、謂はゆる眼の識る所の色・耳の識る所の聲・鼻の識る所の香・舌の識る所の味・身の識る所の觸・意の識る所の法を了別する、是くの如き了別、是れを名けて識と爲し、言ふ所の智とは、内處に於ける若きは心慮寂靜に、外處に於ける若きは尋伺を行ぜず、智に依趣して、一法に於ても分別を生ぜざる、是等の相の如き、之れを名けて智と爲すなり。又復、識とは、緣する所の境従りして識を生じ、諸の作意従りして識を生じ、遍き分別従りして識を生ずる、是等の相の如き、之れを名けて智と爲すなり。又復、の智とは、取る無く・執ふる無く・了別する無く・分別する無き、是れを名けて智と爲すなり。又復、識とは、諸べて一切の有爲の行法に於て識の依り趣く所、是れを名けて識と爲し、言ふ所の智とは、無爲の法に於て識の能く行する無き、此の無爲の智、是れを名けて智と爲すなり。又復、識とは生あり滅あり住ある識なる故に名けて識と爲し、應に依趣すべからず。生無く滅無く亦住する所も無き、是れを名けて智と爲し、此れに應に依趣すべし。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は般若波羅

【七】内處に於ける若きは、乃至、分別を生ぜざる。

異譯本に「内身寂靜に、外に通く行する無く、智能く法に隨順して、取る所無き」とあり。

【八】行法。此の行は、造作・惡流の義なり。異譯本に「又復、識は生滅・有爲の行法に住す。」とあり。

【九】行する無き。此の行は、造趣の義なり。異譯本に「無爲は、識の通く行するある無き故に。」とあり。

を發起すべきを演ぶるものにして、言ふ所の義とは、取る無く捨つる無くして精進に住する無きなり。言ふ所の文とは、靜慮解脫・等持・等至を宣説するものにして、言ふ所の義とは、滅盡定の智なり。言ふ所の文とは、一切の聞持——諸慧の根本——にして、言ふ所の義とは、説くべからざる義なり。言ふ所の文とは、能く 三十七覺分——聖道の正法——を開示するを謂ひ、言ふ所の義とは、菩提分法たる正行の果を證得するなり。言ふ所の文とは、能く苦と集と道との諦を開示するを謂ひ、言ふ所の義とは、滅に於て證を作すなり。言ふ所の文とは、無明を初と爲し、乃至老・死を開示するものにして、言ふ所の義とは、無明滅するが故に、乃至老・死も亦滅するを謂ふ。言ふ所の文とは、止・觀——資糧の正法——を宣説するものにして、言ふ所の義とは、明解脫の智なり。言ふ所の文とは、貪・瞋及び癡・等分行の法を宣説するものにして、言ふ所の義とは、無分別なる心解脫の智を謂ふ。言ふ所の文とは、一切の障礙の法を開示するものにして、言ふ所の義とは、障礙無き解脫の智を謂ふ。言ふ所の文とは、三寶稱讚の功德を開示するものにして、言ふ所の義とは、欲法の性を離れたる無爲・無著の功德の正行なり。言ふ所の文とは、菩薩の初發心より乃ち道場に至るまでの、功德を修學し正行を發起することを宣説するものにして、言ふ所の義とは、刹那の心とも相應して一切智智を證覺するを謂ふ。舍利子、要を擧げて之れを言はば、如來の演ぶる所の八萬四千の法藏の聲教を皆名けて文と爲し、諸一切の言音・文字を離れて、理の説くべからざる、是れを名けて義と爲すなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故に、義に依趣して文に依趣せずと名くるなり。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は、智に依趣して識に依趣せざる。舍利子、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多に依る故に、善巧に、有らゆる言教の數取趣の義は、是れを名けて識と爲し、此に應に依るべからず、有らゆる言教の如法性の義は、即ち是れ智なるに於つて、此れに應に依趣すべき

【四】取る無く捨つる無くして、精進に住する無きなり。異譯本に「彼の精進に於て、入らず住せず」とあり。

【五】三十七覺分。三十七道品と同じ。

【六】無分別なる心解脫の智。異譯本に「解脫に於て心動く所無き」とあり。

卷の第五十二

菩薩藏會 第十二の十八

般若波羅蜜多品 第十一の三

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の、依越の善巧なる。舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故にて、四つの依越に於て善く具足し能ふ。何等を四と爲す。謂はゆる、義に依越して文に依越せず。智に依越して識に依越せず。了義經に依越して不了義經に依越せず。法に依越して數取趣の者に依越せざるなり。舍利子、云何なるを名けて、義に依越して文に依越せずと爲し、復何等を以て文と爲し義と爲す。舍利子、言ふ所の文とは、諸の世間の諸の法に、作り用ひ傳へ習へる文詞を謂ひ、言ふ所の義とは、出世間に通達する所の法を謂ふ。言ふ所の文とは、布施を樂ひて寂靜に調順すべきを宣示する言詞にして、言ふ所の義とは、布施し寂靜に調順する所は、決定して朽壞する無きを了知する智を謂ふ。言ふ所の文とは、生死を訶毀する分別の言詞にして、言ふ所の義とは生死に染ます法性を徹見するなり。言ふ所の文とは、涅槃の功德を稱揚し讚嘆するものにして、言ふ所の義とは、諸法の性と涅槃と分別無き性を謂ふなり。言ふ所の文とは、諸乘に隨順して建立する言說にして、言ふ所の義とは、一理趣の法に善く通達する智なり。言ふ所の文とは、諸の所有の法を捨離することを宣說するものにして、言ふ所の義とは、是の三輪究竟して清淨なるを謂ふ。言ふ所の文とは、律儀たる身・語・意業を受持する學處・杜多の功德を宣說するものにして、言ふ所の義とは、身・語・意業の皆不可得にして、加行の尸羅の清淨に由らざるなり。言ふ所の文とは、瞋恚を忍受し、忿・憍慢・傲逸を裁ち、能く是の忍を行ふを善丈夫と名くることを宣說するものにして、言ふ所の義とは、善く無生法忍を證得することを謂ふ。言ふ所の文とは、諸の善根に精進

【一】 依越。
異譯本に「隨順」とあり。

【二】 諸乘。
異譯本に「三乘」とあり。

【三】 三輪。此所の三輪は、佛菩薩の身・口・意の三業を指す。其の三業は、能く衆生の惑業を破き摧くに由つてなり。

辯・迅の辯・捷疾の辯・不可動の辯・不鈍の辯・隨問對の辯・無退怯の辯・不相違の辯・無靜論の辯・可樂法の辯・住忍力の辯・妙甚深の辯・種種差別の辯・種種微妙の辯・世俗勝義の辯・一切の布施・持戒・懷忍・正勤・靜慮・般羅若を建立する辯・一切の念住・正斷・神足・根・力・覺支・道分・奢摩他・毘舍舍那を建立する辯・一切の靜慮解脫・三摩地・三摩鉢底を建立する辯・廣大智の辯・一切聖人の所乘の辯・一切衆生の心行の辯・樂吃の言無き辯・極訛の言無き辯・輕掉の言無き辯・龜嶺の言無き辯・愛潤の言の辯・清淨の言の辯・横逸の言の辯・無著の言の辯・教詔の言の辯・三摩呬多の言の辯・妙相應の言の辯・無關闕の言の辯・美妙の音言の辯・柔滑の音言の辯・譏訶を致す無き言の辯・衆聖に讚ぜらるる言の辯を獲るなり。舍利子、菩薩摩訶薩は、是等の如き有らゆる言辯を以て、遍く無邊の諸佛の刹土に告ぐるに、發する所の言音は、一切の梵音・言詞に超過し、是くの如き言音は明了清淨にして、諸の如來に爲つて印可せらるれば、是の諸の菩薩は、具足せる才辯にて、是の言音を以て、諸の有情及び多數取者を惑み、廣く微妙の正法を宣説して、能く是等をして、生死を出離して永く衆苦を盡さしむるを爲すなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、辯の無礙の解と名く。舍利子、是くの如きを名けて、無礙解の善巧と爲し、此の無礙解の善巧を由ひん故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行するに、精勤して無礙解の善巧を修習するなり。

【三〇】一切聖人の、乃至、心行の辯。

異譯本に「一切の乘を悟る辯才、一切の有情の心行を解する辯才」とあり。

【三一】横逸の、乃至、教詔の言の辯。

異譯本には「解脫の語言の辯才、無障の語言の辯才、尊重の語言の辯才」とあり。

【三二】無關闕。異譯本に「無缺漏」とあり。

羅蜜多を修行する故に、是くの如き詞の無礙の解、謂はゆる言詞に於て證入する智を具足するなり。是の智を獲へるや、而も能く諸天の言詞・諸龍の言詞・藥又の言詞・健達縛の言詞・阿素洛の言詞・搗路茶の言詞・堅捺洛の言詞・牟呼洛伽の言詞・人の言詞・非人の言詞、乃至、五道の衆生の一切の含識の有つ所の言詞・音聲・響議を了知するに、菩薩は悉く能く智を以て證入し、又能く是の言音を以て、彼の衆生の爲めに正法を宣説するなり。舍利子、是れを則ち名けて、菩薩摩訶薩の詞の無礙解と爲す。又、舍利子、復詞の無礙解あり。謂はく、諸の菩薩は、善く是くの如き言詞は唯應に是くの如き法を顯了すべく、是くの如き言詞は唯應に是くの如き法を隨辯すべく、是くの如き言詞は應に是の字を以て是の法を隱藏すべきを了知し能ふなり。菩薩摩訶薩は、又是の解を以て、當應に是れは一の名言、是れは二の名言、是れは多の名言なりと了知し、又能く是れは女の名言、是れは男の名言、是れは非男・非女の名言なりと了知し、又能く、是れは略の名言、是れは廣の名言、是れは好の名言、是れは悪の名言なりと了知し、又能く、過去の名言・未來の名言・現在の名言を了知し、又能く、是の等の如き相は一字の増益にして、是の等の如き相は多字の増益なるを了知すべし。若かく諸菩薩の善く了知し能ふを、是れ則ち名けて詞の無礙解と爲すなり。又、舍利子、復詞の無礙解をもたば、菩薩摩訶薩の發す所の言詞は、無量の功德にて共に集成せらる。何等は是れなるか。舍利子、諸の菩薩等の發す所の言詞には微弱ある無く、即ち此の言詞を善巧に施設して、繁重ある無く、急速ある無く、詞は極めて明了に、文義は圓備して大衆を順悅せしめ、種種美妙に深奥なる世俗と勝義との所を顯示して莊嚴するに、自心の智見の通達無礙なることは、諸佛は印可し、衆生を悅豫せしむるなり。舍利子、是くの如くに具足する、是れを菩薩摩訶薩の詞の無礙解と名くるなり。

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の、辯の無礙の解なる。舍利子、菩薩の辯とは、謂はゆる菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故に、是の言詞無礙の辯・無滯記別の辯・宣暢無斷の辯、速の

【三】是の等の如き相は、乃至、多字の増益。異譯本に「一字の相應、多字の相應」とあり。

なるあり。又、舍利子、或は衆生の、聲・香に食にして味に食に非ざるあり。或は衆生の、味に食にして聲・香に食に非ざるあり。或は衆生の、聲・香・味に俱に食なるあり。復次に、或は衆生の、聲・香に食にして觸に食に非ざるあり。或は衆生の、觸に食にして聲・香に食に非ざるあり。或は衆生の、聲・香・觸に俱に食なるあり。又、舍利子、或は衆生の、香・味に食にして觸に食に非ざるあり。或は衆生の、觸に食にして香・味に食に非ざるあり。或は衆生の、香・味・觸に俱に食なるあり。又、舍利子、或は衆生の、色・聲・香に食にして味に食に非ざるあり。或は衆生の、味に食にして色・聲・香に食に非ざるあり。或は衆生の、色・聲・香・味に俱に食なるあり。復次に、或は衆生の、色・聲・香に食にして觸に食に非ざるあり。或は衆生の、觸に食にして色・聲・香に食に非ざるあり。或は衆生の、聲・香・味に食にして觸に食に非ざるあり。或は衆生の、觸に食にして色・聲・香・味に食に非ざるあり。或は衆生の、色・聲・香・味に俱に食なるあり。舍利子、食にして色・聲・香・味に食に非ざるあり。或は衆生の、色・聲・香・味・觸に俱に食なるあり。舍利子、或は衆生の、色・聲・香・味に食にして觸に食に非ざるあり。或は衆生の、觸に食にして色・聲・香・味に食に非ざるあり。或は衆生の、色・聲・香・味・觸に俱に食なるあり。舍利子、是等の如くに、無量の衆生の、具に各是の無量の食相を起して食行に入るに、菩薩摩訶薩は是の門に證入せる故に由つて、諸の衆生の二萬一千の食行の門・二萬一千の瞋行の門・二萬一千の癡行の門・二萬一千の等分行の門に入るなり。舍利子、若し菩薩摩訶薩は是くの如き八萬四千の煩惱行の門に證入せば、當に知るべし、是くの如き菩薩摩訶薩は、心廣大なる智及び行に隨つて説く智・不増不減に説く智・時を過たずして説く智・根器にして差別ある智・言を立つるに虚説ならざる智を具足し成就すること。舍利子、菩薩摩訶薩の是くの如き諸の勝智を具足する故、是れを菩薩摩訶薩の法の無礙解と名くるなり。

復次に、舍利子、云何なるは、菩薩摩訶薩の、詞の無礙の解なる。舍利子、菩薩摩訶薩は、般若波

て、遠離の義をば説いて名けて義爲し、一切の法には遍く有情無く、命者無く、數取無きを以て、數取無き義を説いて名けて義と爲せばなり。菩薩摩訶薩は、若し能く是の相の如き義に隨入せば、是れを則ち名けて義の無礙解と爲すなり。舍利子、若し菩薩摩訶薩あつて、是の義を説かば、當に知るべし、是れ無住の法を説き、無盡の法を説き、即、一切の顯説する所を説き、即、一切智者の諸の無礙解にて簡擇する所の義を説くを爲すことを。當に知るべし、是の人は、即、諸佛世尊に印可し、是れ諸處の簡擇に無礙なる慧と爲すことを。舍利子、菩薩摩訶薩の、是くの如くに了知する、是れを名けて義の無礙解と爲すなり。

復次に、舍利子、云何なるは、菩薩摩訶薩の法の無礙解なる。舍利子、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜多を修行する故にて獲る。是の法の無礙解とは、諸法の中に隨つて證入する智を謂ふなり。何等を名けて、隨つて證入する智と爲す。舍利子、諸法の中に證入する所あるを謂ふなり。何等か諸法なる。謂はく、善と不善・有罪と無罪・有漏と無漏・世間と出世間・有爲と無爲・染汙と清淨の、生死及び涅槃に隨順するある若きものなり。是等の如き一切の法中に於て、隨つて能く法性の平等菩提の平等なるに證入する、是くの如き智性を、是れ則ち名けて法の無礙解と爲すなり。

復次に、舍利子、法の無礙解とは、菩薩摩訶薩の、是くの如き解の心智を以て、是くの如き貪行に證入することは、是くの如くに假立の貪行に入證し、或は復方便の貪行に入證し、或は復堅固の貪行に入證し、或は復微薄の貪行に證入し、或は復非處の貪行に證入し、或は復營求の貪行に證入し、或は復宿世の貪行に證入し、或は復無邊なる異相の貪行に證入し、或は復現在の衆縁の貪行に證入するなり。又、舍利子、菩薩摩訶薩は、諸の有情の是くの如き貪の相を了するなり。謂はゆる、或は衆生の、内は貪にして外の貪に非ざるあり。或は衆生の、外は貪にして内の貪に非ざるあり。或

【一九】一切の顯説する所を説き、異譯本に「説く所の義に於て證知するを得」とあり。

【二〇】法の無礙解とは、乃至、貪行に證入することは、異譯本に「法の正知とは、彼の貪行に於て、心能く正知するなり」とあり。

する智・實際に安住する智・空法の中に於て隨つて覺觀する智・無相の法に於て所觀の如くなる智・無願の法に於て願行を起す智・無加行に於て加行を起す智・一理趣の觀に於て入證する智・無有情の觀に於て入證する智・無我法の觀に於て入證する智・無命者に於て一向に入る智・無數取の觀に於て勝義なる智・過去世に於ける觀に無礙なる智・未來世に於ける觀に無邊なる智・現在世に於て一切處を觀する智・諸蘊の法に於て幻化の如くなるを觀る智・諸の界の法に於て毒蛇と等しと觀る智・諸の處の中に於て空盛の如しと觀る智・諸の内法に於て寂靜を觀る智・諸の外法に於て所行無しと觀る智・諸の境界に於て所有無しと觀る智・諸の念住に於て安住を觀る智・彼の諸趣に於て隨行を觀る智・諸の緣起に於て現見を觀る智・諸の諸法に於て通達を觀る智・一切の苦に於て無生を觀る智・一切の集に於て加行無きを觀る智・一切の滅に於て離相を觀る智・一切の道に於て拔濟を觀る智・諸法の中に於て句の分析を觀る智・諸根の法に於て證入を觀る智・諸力の法に於て屈伏する無きを觀る智・奢摩他に於て依る所の處を觀る智・毘鉢舍那に於て明照を觀る智・諸の幻事に於て虛集なるを觀る智・諸の陽焰に於て迷亂なるを觀る智・夢の所に於て虛見なるを觀る智・彼の傳響に於て縁合を觀る智・彼の光影に於て無動を觀る智・差別の相に於て一相を觀る智・諸の繫縛に於て離縛を觀る智・諸の相續に於て無相續を觀る智・聲聞の智に於て聲に隨つて入るを觀る智・獨覺の智に於て廣大なる緣生にて一境に入るを觀る智・佛の大乗に於て一切の善根の資糧を觀知して能く積集する智・舍利子、是等の如き一切の觀智は、是れを菩薩摩訶薩の義の無礙解と名くるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩に復義の無礙解あり。謂はゆる依趣の義にして、諸の法性の依り趣く所なるを以てなり。何を以ての故に。一切の法は遍く皆是れ空なるを以て、空性の義をば説いて名けて義と爲し、一切の法は遍く皆無相なるを以て、無相の義をば説いて名けて義と爲し、一切の法は遍く皆無願なるを以て、無願の義をば説いて名けて義と爲し、一切の法は遍く皆遠離なるを以

【二五】 内法 【二六】 外法。

異譯本に「内身」「外」とあり。謂はゆる内身・外身にして、精神と身體とを指す。

【二七】 彼の諸趣に於て隨行を觀る智。

異譯本に「所入無きに達する智」とあり。

【二八】 諸法の中に於て句の分析を觀る智。

異譯本に「一切法の句を分別する智」とあり。

於て實の如くに了知する、是れを菩薩の苦の集の聖諦と名く。云何なるは滅諦なる。諸の受永く息んで受を覺ゆる所無き、是れを滅諦と名け、受の滅を觀すと雖も、而も證することを作さずして、是の如くに通達する、是れを菩薩の苦の滅の聖諦と名く。云何なるは道諦なる。善く受を離るる聖道を修習する若き、是れを道諦と名け、譬へば船筏の如くに、受に於て求めざれど亦道をも求めざる、是れを菩薩の趣苦の滅行たる聖諦と名く。是くの如くに、舍利子、若し菩薩摩訶薩あつて、是くの如くに現觀するに、寂靜の定に依つて四種の見を發し、而して此の四見は畢竟淨に非れども、若し能く此くの如き法に通達せば、是れを菩薩摩訶薩の諸法の善巧と名くるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、是の諸法の善巧に於て通達して、若し滅を證せば則ち苦は生ぜずと觀する無生智、是れを苦智と名く。舍利子、有爲の生緣には此に非有・非無あることを觀察する、是くの如き智を名けて集智と爲す。舍利子、一切の生は即ち是れ無生なりと、此れを了知する故に都べて滅する所無き、此の無滅の智を盡滅の智と名く。舍利子、若し是くの如き道を、稱量する所無く追尋する所無く觀察する所無くば廣大の智と名け、是くの如き智を名けて道智と爲す。舍利子、菩薩摩訶薩の、此の諸法に於て善く能く建立し、而して、諸智に於て住著する所無き、是れを菩薩摩訶薩の諸法の善巧と名くるなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故に獲る無礙解の善巧と爲す。舍利子、菩薩摩訶薩は、具に般若波羅蜜多を修學する故を以て、四種の無障礙の解を具足するなり。何等を四と爲す。謂はゆる、義無礙解・法無礙解・詞無礙解・辯無礙解なり。舍利子、何等を名けて義の無礙解と爲す。舍利子、諸の菩薩は般若波羅蜜多に依る故に、是の義無礙の解を獲るなり。謂はく。一切法の勝義處の智、是れを觀する智は即義に無礙なる解なり。是くの如くに、諸の覺智たる、因智・緣智・和合智・遍く隨行する智・廣大なる緣生の智・法性の無雜の智・如來に隨入

【三四】 因智、乃至、一理趣の觀に於て入證する智。

異譯本には次第に「因智・緣智・集智・通達無邊なる智・緣起に入解する智・法界を分別する智・眞如に隨順入解する智・實際に住せざる智・如實に法空なる智・無相を伺察する智・願無願に於ける智・行無行に於ける智・一正理に入る智」とあり。

の一諦に於て明了に通達して増益するある無く、既に通達し已るや、増益に處る諸の含生等の爲めに、是くの如き一諦の法を宣説して、彼れをして修學して無増益を悟らしむるなり。故に、舍利子、若し菩薩あつて是くの如くに知ることを作さば、是れを菩薩摩訶薩の諦法の善巧と名く。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は復應に諦法の善巧を修學すべし。舍利子、諦の善巧とは、善く諸の聖諦に通達する故を謂ふ。何等を名けて、聖諦に通達すと爲す。舍利子、苦の聖諦とは、謂はく、五受蘊の其の性は實に苦なる、是れを苦諦と名け、菩薩摩訶薩は、是の諦中に於て、五蘊は皆苦相たれど、夫の苦相は即、空相たりと通達する、是くの如きを則ち名けて、苦の聖諦と爲すなり。舍利子、集の聖諦とは、五受蘊の因たる隨眠、愛見是れを集諦と名け、菩薩摩訶薩は、此の因法に於て、若しは愛若しは見を増益するある無く、取る無く迷ふ無く、明了に通達する、是くの如きを則ち名けて、集の聖諦と爲すなり。舍利子、滅の聖諦とは、若し五受蘊は究竟して滅盡せば、是れを滅諦と名け、菩薩摩訶薩は、是の諦法の前に於て失せず後際に往かず現在に住せざるを觀じて、明了に通達する、是くの如くなるを則ち名けて、滅の聖諦と爲すなり。舍利子、道の聖諦とは、若し彼の道に於て、苦智・集智・滅智を證得して、第二智無くば是れを道諦と名け、菩薩摩訶薩の、是くの如き諦に於て、明了に通達して分別するある無き、是れを則ち名けて、趣苦の滅行たる聖諦と爲すなり。是の故に、舍利子、菩薩摩訶薩は、若し此の諦に於て、智を以て觀察し、亦衆生をして觀察、解了せしめば、是れを菩薩摩訶薩の諦法の善巧と名く。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、是の諦法に於て、又應に是くの如き四諦を觀すべし。云何なるは苦諦なる。諸べて一切に於ける能受と所受とは皆是れ苦諦なるを、是くの如き中に於て善く當に揀擇すべく、即ち此の智性にて善く揀擇して覺し、明了に通達する、是れを菩薩の苦の聖諦と名く。云何なるは集諦なる。是の因に從つて諸蘊の集起する若きは、皆是れ集諦なるを、此くの如き因に

【三】五受蘊。五取瓊にして、五蘊とも五陰とも云ふ。

【三】彼の道。の道は八正道を謂ふ。

【三】第二智無くば、乃至聖諦と爲すなり。異譯本に「智を以て相續し、能く引趣を善く調伏する正行を、道聖諦と爲す」とあり。

復次に、舍利子、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故にて、能く諸法の善巧に通達する。舍利、當に知るべし、菩薩摩訶薩は、四種の行にて諦の善巧に入るを有つことを。何等を四と爲す。謂はゆる、苦智・集智・滅智・道智なり。舍利子、云何なるを名けて、苦智、乃至、道智と爲す。謂はく、諸蘊に於て本より生ずること無き智、是くの如き智を名けて苦智と爲す。諸の染愛に於て永く斷滅する智、是くの如き智を名けて集智と爲す。謂はく、一切に於て生ずる無く壞する無き、是くの如き智を名けて滅智と爲す。一切時の諸の所縁の法に於て損益するある無き、是くの如き智を名けて道智と爲すなり。舍利子、菩薩摩訶薩の若きは、是の四諦に於て是等の如き智慧を以て了知して復明達すと雖も、而も證すること作さざるなり。何を以ての故に。諸の衆生を成熟せんと欲する爲めの故なり。是くの如くに具足するを諦の善巧と名く。又、舍利子、菩薩摩訶薩の諦の善巧には、復三種あり。何等を三と爲す。一には世俗諦なり。二には勝義諦なり。三には相諦なり。舍利子、世俗諦とは、當に知るべし、乃至、世間の有つ所の語言・文字・音聲・假説、是くの如き等の相を世俗諦と名くることを。勝義諦とは、謂はゆる是の處に於ける若きは、尙心行をも非とす。況んや復文字にて能く陳説することをや。是くの如き等の法を勝義諦と名く。相諦とは、謂はゆる、諸相は即、是れ一相にして、是くの如き一相は即、是れ無相なりと、是くの如く説く者を名けて相諦と爲すなり。舍利子、菩薩摩訶薩は、世俗諦に於て、衆生の爲めの故に説きて厭倦する無く、勝義諦にては、中に於て證を作して退墮する無く、彼の相諦に於て、深く本性に達して無相を了知するなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、精勤して諸法の善巧を修學すと名くるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、精勤して諦の善巧を修學する者は、實の如くに、當に知るべし、復一諦あつて第二ある無きことを。何等の一諦なる。謂はゆる滅諦なり。舍利子、諸佛如來は、此

【二〇】諸蘊に於て、乃至、苦智と爲す。
異譯本に「蘊を起さざる故に、是れを苦智と爲す。」とあり。

【二一】是くの如き等の相。
異譯本に「乃至、世間に行ずる所のもの」とあり。
【二二】心行。
異譯本に「心の緣ずる所」とあり。

の法は平等に、變異無き平等の故にて一切の法は平等なり。又、舍利子、若し有爲界の證入・無爲界の證入に、是くの如きを宣説するあらば、則ち無量無邊なるあり。若し諸の菩薩摩訶薩は、是の揀擇を作して法界に證入せば、是れを則ち名けて界法の善巧と爲すなり。舍利子、是くの如くに、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故には、應に勤めて界法の善巧を修習すべきなり。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する故にて、能く處法の善巧に通達する。舍利子、處法の善巧とは、眼は是れ空にして我・我所無しと爲し、菩薩摩訶薩は實の如くに是くの如き眼の性を了知するなり。乃至、意も是れ空にして我・我所無しと爲し、菩薩摩訶薩は實の如くに是くの如き意の性を了知するなり。菩薩摩訶薩は諸の處に於て不善を積集せずして善を積集すと雖も、然も善・不善の中に於て二相を起さざるなり。是くの如くに了知する、是れを菩薩摩訶薩の處法の善巧と名く。又、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は、眼處・色處に於て能く通達して善巧に了知する。舍利子、謂はく、眼の色に於ける觀見に欲を離るれども、然も欲を離るることに於て證することを作さざるなり。是くの如くに了知する、是れを菩薩の處法の善巧と名く。是くの如くに耳の聲・鼻の香・舌の味・身の觸・意の法と、即ち此の意の法の觀見に欲を離るれども、然も欲を離るることに於て證することを作さざるなり。是くの如くに了知する、是れを菩薩の處法の善巧と名く。又、舍利子、諸佛如來は微妙の法を説くに、或は聖處を説き或は非聖處を。聖處と言ふは、道法を受くるに堪へ、非聖處とは道法を遠離するなり。菩薩摩訶薩は、道に安住して、道を離れて住せる諸の衆生の所に於ても、大悲を獲得して道處を捨てざるなり。若し菩薩あつて、是くの如くに了知して善く通達せば、是れを菩薩摩訶薩の處法の善巧と名く。舍利子、諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故には、應に勤めて處法の善巧を修學すべきなり。

【七】 眼の色に於ける觀見に等。異譯本に「是の眼にて色を見て厭離を生ずる如きも、是くの如き厭離は則ち正行に非ず。」とあり。

謂はく。無常の性・苦の性・無我の性、是等の如き性を名けて蘊の性と爲し、是くの如き蘊の性は即ち世間の性なり。菩薩摩訶薩、若し是の中に於て善巧に知らば、是れを則ち名けて蘊法の善巧と爲すなり。舍利子、若し菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜多を修行せんと欲するを爲すあらば、故もて、精勤して蘊法の善巧を修習するなり。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行して、能く界法の善巧に通達する。舍利子、界法の善巧とは、謂はゆる、法界は即、地界たり。何を以ての故に。彼の法界は堅鞞の相に非るを以ての故に。又、法界は即、水界たり。何を以ての故に。彼の法界は濕潤の相に非るを以ての故に。又、法界は即、火界たり。何を以ての故に。彼の法界は成熟の相に非るを以ての故に。又、法界は即、風界たり。何を以ての故に。彼の法界は搖動の相に非るを以ての故に。舍利子、菩薩摩訶薩は、若し是の中に於て實の如くに了知せば、是れを則ち名けて界法の善巧と爲すなり。又、舍利子、法界と言ふは即、眼識の界なり。何を以ての故に。彼の法界は明を照す相に非るを以ての故に。又、法界は即、耳識の界なり。何を以ての故に。彼の法界は聲を聞く相に非るを以ての故に。又、法界は即、鼻識の界なり。何を以ての故に。彼の法界は香を躋ぐ相に非るを以ての故に。又、法界は即、舌識の界なり。何を以ての故に。彼の法界は味を嘗むる相に非るを以ての故に。又、法界は即、身識の界なり。何を以ての故に。彼の法界は觸を覺する相に非るを以ての故に。又、法界は即、意識の界なり。何を以ての故に。彼の法界は分別の相に非るを以ての故に。舍利子、菩薩摩訶薩は、若し是の中に於て實の如くに了知せば、是れを則ち名けて界法の善巧と爲すなり。又、舍利子、是くの如くに、我界と法界と平等に、有情界と法界と平等に、欲界・色界及び無色界と法界と平等に、生死界・涅槃界と法界と平等なり。是くの如くに、乃至、虚空界と法界及び一切の法界と皆悉く平等なり。舍利子、何の義の故を以て平等なるを得る。謂はく。空平等に由るが故にて一切

【五】法界は即地界なり等。異譯本には「地界は即法界なり」とあり。

【六】法界と言ふは即眼識の界なり等。異譯本には「眼識界は即法界なり」とあり。

如しと。何を以ての故に。舍利子、即ち此の聚沫には、本より我あること無く、亦有情無く、生者無く、命者無く、數取無く、養育無く、意生無く、摩納婆無し。聚沫の性は、即、色の自在なるを以てなり。菩薩摩訶薩は、是くの如き法に於て善巧に之れを知るを、是れ則ち名けて蘊法の善巧と爲すなり。又、舍利子、我れは説く、此の受は喩へば水泡の如しと。何を以ての故に。舍利子、即ち此の水泡には、本より我あること無く、亦有情無く、生者無く、命者無く、數取無く、養育無く、意生無く、摩納婆無くして、水泡の性は、即、受の自性なるを以てなり。菩薩摩訶薩の、是くの如き法に於て善巧に之れを知るを、是れ則ち名けて蘊法の善巧と爲すなり。又、舍利子、我れは説く、此の想は、喩へば陽焰の如しと。何を以ての故に。舍利子、即ち此の陽焰には、本より我ある無く、亦有情無く、生者無く、命者無く、數取無く、養育無く、意生無く、摩納婆無くして、陽焰の性は、即、想の自性なるを以てなり。菩薩摩訶薩の、是くの如き法に於て善巧に之れを知るを、是れ則ち名けて蘊法の善巧と爲すなり。又、舍利子、我れは説く、此の行は、喩へば芭蕉の如しと。何を以ての故に。舍利子、即ち此の芭蕉には、本より我ある無く、亦有情無く、生者無く、命者無く、數取無く、養育無く、意生無く、摩納婆無くして、芭蕉の性は、即、行の自性なるを以てなり。菩薩摩訶薩の、是くの如き法に於て善巧に之れを知るを、是れ則ち名けて蘊法の善巧と爲すなり。又、舍利子、我れは説く、此の識は、喩へば幻事の如しと。何を以ての故に。舍利子、即、此の幻事には、本より我ある無く、亦有情無く、生者無く、命者無く、養育無く、數取無く、意生無く、摩納婆無く、作者無く、受者無くして、芭蕉の性は、即、行の自性なるを以てなり。菩薩摩訶薩の、是くの如き法に於て善巧に之れを知るを、是れ則ち名けて蘊法の善巧と爲すなり。又、舍利子、我れは説く、此の識は、喩へば幻事の如しと。何を以ての故に。舍利子、即、此の幻事には、本より我ある無く、亦有情無く、生者無く、命者無く、養育無く、數取無く、意生無く、摩納婆無く、作者無く、受者無くして、幻事の性は、即、識の自性なるを以てなり。菩薩摩訶薩の、是くの如き法に於て善巧に之れを知るを、是れ則ち名けて蘊法の善巧と爲すなり。舍利子、言ふ所の蘊とは、説いて世間と名け、世間の法は即、敗壞の相なり。是の故に、當に知るべし、諸の世間の性は即、蘊の自性なることを。舍利子、何等を名けて世間の性と爲すか。

【一】生者(Mānuṣya)。有情には、來り生ずる所の我れ、又衆事を生起する我れは、常住すと主張する者にして、十六神我の一なり。

【二】養育(Pitṛa)。有情には、養育せらるる我れ、養育する我れは、常住すと主張する者にして、十六神我の一なり。

【三】意生(Mānuṣya)。又、人も人生とも譯す。人間には、人と云ふ。意志ある我れは常住して、人より生れ、又、人を生ずと主張する者にして、十六神我の一なり。

【四】受者(Yātarka)。有情には、後身に罪福の果報を受くべき我れは常住すと主張する者にして、十六神我の一なり。

佛の差別の性・有情の差別の性・諸法の差別の性と同じく止らず。乃至、一切の差別の性に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、無智と同じく止らず。智識たる世俗と勝義とに與せず。乃至、一切の有情の相貌・作意に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、慧の不現行と同じく止らず。無身・無形・無相・無爲と同じく止らず。乃至、一切の思惟たる心・意識に安住せる等の法に與して共に同じく止らず。舍利子、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する時に有つ所の般若は、微妙清淨にして、是くの如き無量無邊なる有爲の行法に與して共に同じく止らず。舍利子、是くの如きを名けて、般若波羅蜜多を修行すと爲し、菩薩摩訶薩の般若の相を應に是くの如くに學ぶべし。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、大乘の大菩薩藏に安住して般若波羅蜜多を修行する時に、般若の分別の善巧を獲得するなり。當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、即ち此の法を以て、諸法の中に於て明了に通達して、善巧を獲得することを。舍利子、云何なるを名けて、是くの如き般若の分別の善巧と爲す。舍利子、是くの如き善巧は無量無邊なり。吾れ今略して十種の善巧を説かん。何等と爲す。謂はゆる蘊法の善巧・界法の善巧・處法の善巧・諦法の善巧・無礙解の善巧・依趣の善巧・資糧の善巧・道法の善巧・緣起の善巧・一切法の善巧なり。舍利子、是くの如き十種の、微妙なる善巧の有つ所の分別に、若し通達せば、是れを則ち名けて般若の分別と爲せば、菩薩摩訶薩は是の善巧に於て應當に修學すべし。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行する故にて、能く蘊法の善巧に通達する。舍利子、蘊法の善巧とは、謂はゆる、諸の蘊の法に依つて言説を起すなり。何等か言説なる。舍利子、是くの如き言説は、猶幻化・陽焰・夢中・傳響・光影の如し。是の故に、如來は無礙辯を以て、諸の衆生の爲めに是くの如き法を説くなり。舍利子、我れは説く、此の色は喩へば聚沫の

【九】 心意識に安住せる等の法。
異譯本に「心意識の造作する所の者」とあり。

【一〇】 無礙解の善巧、乃至、一切法の善巧。
異譯本に「正知の善巧、隨順、知識、菩提分、聖道、緣生の善巧」とあり。

る。舍利子、謂ふ所のものは、是くの如き般若は、無明に與して共に同じく止らず。諸行に與して共に同じく止らず。是くの如くに廣く説きて、乃至、老・死に與して共に同じく止らざるなり。舍利子、是くの如き般若は、身見に與して共に同じく止らず。乃至、身見を本と爲せる六十二見の趣に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、高慢に與して共に同じく止らず。下劣に與して共に同じく止らず。世間の八法に與して共に同じく止らざるなり。舍利子、是くの如き般若は、蘊・界・處の法に與して共に同じく止らず。乃至、一切縁する所の作意に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、慢と同じく止らず。下慢・邪慢と同じく止らず。乃至、隨煩惱等の二十一法に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、微細なる下劣・中・上品の貪に與して同じく止らず。乃至、一切の煩惱に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、愚暗・翳昧・障蓋の諸纏と同じく止らず。乃至、退分に隨順せる諸法に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、欲諍の穢濁なる煩惱魔と同じく止らず。蘊魔・死魔・天魔と同じく止らず。乃至、一切の魔業に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、執我と同じく止らず。有情・命者・數取・養育・意生・摩納婆等と同じく止らず。乃至、我見等に住せるに與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、業障と同じく止らず。煩惱障・法障・見障・報障・智障と同じく止らず。乃至、一切の隨俗の習氣に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、思惟分別と同じく止らず。相貌・所緣の見聞・念識と同じく止らず。乃至、一切の結縛の増益に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、慳捨と同じく止らず。持・犯と忍・慧と勤・怠と靜・亂と愚・慧と同じく止らず。乃至、一切の波羅蜜多の能治・所治の諸法の智性に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、遠離と同じく止らず、不遠離と與に住せず。邪性と正性・善及び不善・有罪と無罪・生死と涅槃と同じく止ることも。乃至、一切の相對治の法に與して共に同じく止らず。是くの如き般若は、種種の差別の性と同じく止らず。國土の差別の性・諸

【五】隨煩惱等の二十一法。

異譯本には、「二十の隨煩惱」とあり。即ち根本六大煩惱に隨つて起る者にして、忿・恨・惱・覆・誑・諂・誑・青・嫉・慳の十隨惑、無慚・無愧の中隨惑、不信・懈怠・放逸・憍沈・掉舉・失念・不正知・散亂の大隨惑の二十なり。

【六】隨俗の習氣。

異譯本に「相續の習氣」とあり。

【七】相貌・所緣の見聞・念識。異譯本に「見聞・覺知・語の所纏縛」とあり。

【八】慳・捨、乃至、愚・慧。異譯本に「饜貪・布施・毀戒・持戒・斷惑・忍辱・懈怠・精進・散亂・禪定・無慧・勝慧」とあり。

言ふは、即、是れ無起なり。無起と言ふは、照す所無きに名くるなり。舍利子、是くの如くに次第に法を轉ぜば、廣く前に説くが如し。乃至、名けて菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を修行する故と爲すなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行する時に、云何に應に如理の正觀を學ぶべきか。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、應に是くの如くに諸法を正觀することを作すべし。謂はゆる、我れは如理なる故に、則ち諸法の一切如理なるを觀る。我れは無我なる故に、則ち諸法も亦復無我なるを觀る。衆生は無我なる故に、則ち諸法も亦復無我なるを觀るなり。舍利子、菩薩摩訶薩の、是の觀を作す者を如理の觀と名く。舍利子、如何に菩薩摩訶薩は如理の方便を修行する。舍利子、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、如理の生死の性と彼の如理の涅槃の性と、共に相ひ交雜すとは觀せざることを。是くの如き觀を作すを、是れ則ち名けて如理の方便と爲すなり。又、是の菩薩は、煩惱の性と涅槃の性と、同一合の相にして差異あること無しと觀じ、亦相應と違背とを分別せざるなり。是くの如き觀を作すを、是れ則ち名けて如理の方便と爲し、亦名けて如理の正觀と爲すことを得るなり。舍利子、當に知るべし、菩薩摩訶薩の有つ所の一切の如理の方便は、皆無量の衆生の處に於て起し、若しくは、衆生の處を棄捨せず、諸法に於て破壞せざることを。是れを菩薩の如理の方便と名く。舍利子、菩薩摩訶薩は、應に知るべし、是くの如き相を、是くの如く聞き、是くの如く如理に證入し、是くの如く如理に觀察し、是くの如く如理に正見する等の流、是れを菩薩の如理の正慧と名くることを。舍利子、菩薩摩訶薩の、應當に是くの如くに正行を修行すべきは、皆般若波羅蜜多を成滿せん爲めの故なり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜多を修行する時に有つ所の般若の自性は、清淨にして、一切の有爲の行法に與して共に同じく止らざるなり。舍利子、何等の諸法と與に同じく止らざ

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時に、云何に是の正法たる如理の句を學ぶか。舍利子、菩薩摩訶薩は、當に是くの如くに知るべし。如理の句とは、即、出生の句なり。即、趣理の句なり。即、法門の句なり。即、面門の句なり。即、是れ因の句なり。即、積集の句なり。即、不相違の句なり。即、無諍論の句なり。即、是れ捨の句なり。即、無執取の句なり。即、無棄捨の句なり。即、無戲論の句なり。即、無捨の句なり。即、無誹謗の句なり。即、無輕蔑の句なり。即、隨足の句なり。即、無諍の句なり。即、無退轉の句なり。即、無對治の句なり。と。又、舍利子、如理の句とは、實性の句なり。如性の句なり。非不如性の句なり。眞如の句なり。如理の句なり。三世平等の句なり。離分別の句なり。又、舍利子、如理の句とは、色の識に依住する無き句なり。受・想・行・識の、識に依住する無き句なり。眼色・眼識の性に依住する無き句なり。耳・聲・耳識の性に依住する無き句なり。鼻香・鼻識の性に依住する無き句なり。舌・味・舌識の性に依住する無き句なり。身・觸・身識の性に依住する無き句なり。意・法・意識の性に依住する無き句なり。又、舍利子、如理の句とは、即、義に依る句に名け、即、法に依る句に名け、即、智に依る句に名け、即、了義に依る句に名くるなり。舍利子、是等の無量の法門の如き、是れを則ち名けて、如理の句と爲す。是の故に、如理に證入せんと正勤に方便する菩薩摩訶薩は、是くの如き觀を作す時に、亦能觀の者あるをも見ずして、應に理の如くに觀すべし。謂はゆる、觀するに非ず、觀せざるに非るなり。故に、若し菩薩あつて、是の觀を作さば如理の觀と名け、若し他觀せば非理の觀と名くるなり。舍利子、如理に方便する菩薩は、少法に於ても愚迷あるに非ず、少法に於ても障礙を生ずるに非ず、少法も解脫の門に非るある無く、少法を斷ぜん爲めの故にて勤精進を發すに非ず、小法を證せん爲めの故に勇勵に正勤せず。と。應に是くの如き如理の正見を具して、其の見る所の如くに諸法を正觀すべし。何等か正觀なる。謂はく、見る所無きなり。見る所無きは、即、是れ無生なり。無生と

【四】色の識に依住する無き句なり。乃至、眼・色・眼識の性に依住する無き句なり。異譯本に「分別して色・受・想・行・識に住せざるを是れ道とし、眼界・色界・眼識界に住せざるを是れ道とし」とあり。

卷の第五十一

菩薩藏會 第十二の十七

般若波羅蜜多品 第十一の二

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時に、是くの如き深極なる妙善・清白の覺慧を求めん爲めの故に、是の妙・善・淨の法明門に由り、精勤の方便にて、理の如くに證入し、理の如き句を觀するなり。舍利子、云何なるを名けて、如理の證入と爲し、復何等を以て如理の句と爲す。舍利子、菩薩摩訶薩の如理の證入とは、謂はく。奢摩他に依つて證入し、毘鉢舍那にて證入し、正行にて證入し、如理にて證入し、身の遠離にて證入し、心の調順にて證入し、非斷にて證入し、非常にて證入し、因縁にて證入し、緣起にて證入し、無有情・無命者・無數取者にて證入し、未來・已來の、若しは有若しは無にて證入し、轉移ある無き因果不壞なるにて證入し、空・無相・無願を修集して證入すと雖も、而も空・無相・無願の證を取らざる故に、三摩地・三摩鉢底に於て證入すと雖も、而も是等の如き力にて受生する證ならざる故に、神通智を取れる證入なりと雖も、而も諸漏を盡す證ならざる故に、無生を觀察せる證入なりと雖も、而も一切の衆生の怖るべきを觀ぜざる證入なりと雖も、而も故に諸有を取る證なる故に、寂滅・離欲に於ける證入なりと雖も、然も離欲の法に於て證を作さざる故に、樂妙の欲を捨つる證入なりと雖も、而も法を樂むを捨てざる證なる故に、一切の戲論・思覺を捨てたる證入なりと雖も、而も善巧の方便を捨てざる證なる故なり。舍利子、是くの如きを名けて如理の證入と爲し、菩薩摩訶薩は、是くの如き如理の證入を得んと欲せば、應當に般若波羅蜜多の故を修學すべきなり。

【一】 正に決定に趣く證。
異譯本に「出離の行處」とあり。

【二】 離欲の法に於て證を作さざる故に。
異譯本に「貪法を現行する處を離れず」とあり。

【三】 樂妙の欲。
異譯本に「五欲の樂處」とあり。

のは、觀に非ず不觀に非る故なり。若し菩薩あつて、是の觀を作さば如理の觀と名け、若し他の觀ならば非理の觀と名くるなり。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は、應に是くの如き如理の方便を學ぶべき。舍利子、菩薩摩訶薩の如理の方便は、少法に於ても愚迷あるに非る故に、如理の方便は、少法に於ても障礙を生ずるに非ず、如理の方便は、少法も解脫門に非るある無し。如理の方便は、少分の法を斷ぜん爲めの故にて勤精進を發することある無く、如理の方便は、少法を證せんが爲めの故にて勇勵に正勤せざるなり。舍利子、菩薩摩訶薩は、應に是くの如き如理の正見を以て、其の見る所の如くに正しく諸法を觀すべし。舍利子、云何なるを名けて、其の見る所の如くに諸法を正觀すと爲す。舍利子、謂はく、見る所無きを、諸法を觀すと名くるなり。何等を是に、見る所無しと爲すか。舍利子、無所見とは、名けて無生と爲し、無生と言ふは、是に無起と爲し、無起と言ふは、照す所無きに名く。是の故に、如來は是の正法に依つて、是くの如き言を説くなり。若し菩薩あつて、一切の行を觀じて無生を見る時に、卽是れ正しき性決定に趣入すと。夫れ正見とは、能く正性決定に趣入するを謂ふなり。舍利子、彼の菩薩摩訶薩は、是の思惟を作さん。何の因縁の故にて、當に正性決定に趣入するを得べきかと。舍利子、菩薩摩訶薩は、應に是くの如くに學ぶべし。若し我見を平等たりと觀ぜば、卽是れ一切の諸法は平等なりと。若し是の觀を作さば、當に正性決定に趣入するを知るべし。是の故に、諸の菩薩摩訶薩にして、若し正性決定に趣入せんと欲せば、當に是くの如き大菩薩藏微妙なる法門に於て、殷重に聽聞し受持し讀誦して義趣を研窮すべく、復應に他の爲めに法の如くに廣く説くべし。便ち當に是の法門に於て、理の如き方便にて作意し修學すべし。舍利子、是くの如きを名けて、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提の爲めの故に、般若波羅蜜多を修行して菩薩の行を行すと爲すなり。」

【四〇】一切の行を觀じて、乃至、正しき性決定に趣入す。異譯本に「諸行の無生無作を正見の中に觀察し、是れに由つて正出離の行を獲得す。」とあり。

【四一】若し我見を、乃至、平等なりと。

異譯本に「謂はく、一切法は卽、佛法たり。」とあり。

一切は皆不可得なる故なり。又復、菩薩は是の音聲の前際・後際を觀するに、何従りして生じ滅して何所に往くかと、是くの如くに觀察するに、了に不可得なり。又更に推求するに、此くの如き聲は、已に在るを説くとせんか、今に在るを説くとせんか、當に在るを説くとせんか、又、重ねて推求するに、是くの如き聲は、若しは已に説かるるか、若しは今説かるるか、若しは當に説かるるか。是くの如き聲は、若しは斷の爲めの故に已に説くか、若しは斷の爲めの故に今説くか、若しは斷の爲めの故に當に説くか。是くの如き聲は若しは證の爲めの故に已に説くか、若しは證の爲めの故に今に説くか、若しは證の爲めの故に當に説くか。と是の菩薩は、是くの如くに一切聲を尋求し、已るとも、都べて得る者無きなり。又更に觀察するに、若しは過去の相、若しは未來の相、若しは現在の相を、是くの如くに觀已るに、皆不可得なり。舍利子、菩薩摩訶薩の、是くの如く正しく觀察する時の若き、是れを理の如き方便にて作意すと名く。是の故に、理の如き方便をば、菩薩摩訶薩は、是くの如き觀に於て應に具に修學すべきなり。

復次に、舍利子、云何なるは、菩薩摩訶薩の理の如き觀なるか。諸の菩薩等は、云何に應に學ぶべきか。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、一切法の自性の息滅なるを觀ぜんか、若し是くの如く觀ぜば、如理の觀と名く。若し諸法の自性の寂靜なるを觀ぜば、是れを則ち名けて如理の正觀と爲す。若し諸法の畢竟じて空寂なるを觀ぜば、是れを則ち名けて如理の正觀と爲す。若し諸法の平等性入れるを觀ぜば、是れを則ち名けて如理の正觀と爲す。若し諸法の畢竟じて無生なるを觀ぜば、是れを則ち名けて如理の正觀と爲す。若し諸法の畢竟じて不生なるを觀ぜば、是れを則ち名けて如理の正觀と爲す。若し諸法の畢竟じて寂滅なるを觀ぜば、是れを則ち名けて如理の正觀と爲す。舍利子、是の菩薩摩訶薩の、是の觀を作す時に、亦能觀の者あるをも見すと、應に是くの如くに觀すべし。謂ふ所のも

【九】此くの如き聲は已に在るを説くとせんか、乃至。是くの如くに觀已るに、皆、不可得なり。
異譯本に「若し過去に説かるる音響に通達せば、則ち過去は已に滅せり。若し未來に説かるる音響に通達せば、則ち未來は未だ至らず。若し現在に説かるる音響に通達せば、則ち現在には住らず。是くの如くに已説・未説・當説を一切處に通して尋求すとも、俱に得べからず。」とあり。

死し之れに爲つて沈溺・流轉して息まざることを、脱するを得んや。是の諸の衆生は、實に解脱せるに非ずして便ち自ら我れ已に解脱せりと謂ひ、實に未だ苦を離れずして、便ち自ら衆苦を出離せりと謂ふ。是の故に、如來は是の人の故に依り、實の如くに法を説かく。若し能く他に從ひ隨順して聽聞せば、是に則ち諸の老・死等を解脱すと。復是の言——我れ先に薄伽梵に聞けるを説けるが如き——を作せり。

多聞は法を解了し 多聞は惡を造らず 多聞は無義を捨て 多聞は涅槃を得 善く聽かば聞を増長し 聞は能く慧を増長し 慧は能く淨義を修め 義を得ば能く樂を招く 聰慧は義を得已るや 法の涅槃を證現し 法を聞いて黯慧を淨め 第一の樂を證得するなり と。

是の故に、舍利子、諸の菩薩摩訶薩は、是くの如くに思ひ已つて、當に大菩薩藏の微妙なる法門及びび聖法毘奈耶の教に於て、殷重に聽聞し受持し讀誦して、廣く他人の爲めに敷演開示すべきなり。

復次に、舍利子、若し諸の含識は、菩薩藏の微妙なる法門に於て復聽聞すと雖も、而も理の如き方便にて作意せずば、當に知るべし、是の人は彼の聖道に於て正行する能はざることを。是の故に、如來は是の人の故に依り、正法の要を説いて是くの如き言を作せり。若し生・老・病・死を解脱せんと欲せば、當に具に内に自ら理の如くに思惟すべしと。諸の菩薩等は應に是くの如くに學ぶべし。舍利子、云何なるを名けて理の如き方便を爲し、何等を菩薩は理の如くに作意して能く修學する。舍利子、菩薩摩訶薩の 理の如く方便すとは、一法の若しは合ひ若しは離るある無きなり。

何を以ての故に。理の如き方便は方便に非る故なり。又、舍利子、菩薩摩訶薩は若し理の如き方便及びび作意に安住するあらば、當に此の相は但是れ音聲なることを知るべし。而して、此の音聲の性は、起る所無く、亦 轉起し、及び 彼れに由る故にて音聲を發さざるなり。何を以ての故に。彼の

【五】 理の如く方便すとは等異譯本に「相應及び不相應を遠離するは、是れ相應の意なり。」とあり。

【六】 起る所、毘陀論外道の「毘陀の聲音は、梵天の生起する所」と云ふを指す。

【七】 轉起し。轉起は緣起なり。聲顯論外道の「常住なる聲は緣に依つて顯る。」と云ふを指す。

【八】 彼れに由る故にて音聲を起す。聲生論外道の「緣に依つて聲は初生して常住なり。」と云ふを指す。

成ずること、是くの如し。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜多の正行の相と名く。と。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

謂はゆる説法者をば 即ち善知識と爲し 恭敬して法を聽聞し 正行に安住するなり 欲解

は常に退く無く 精進は常に高勇にして 淨慧を常に修治し 智に於て常に安住するなり

自然に諸法に達して 信行に隨はず 智を以て法を觀する 是れを諸佛の説と爲す 智者

の分別せる句に 義に趣いて善く學を加へ 白黒品の等に於て 常に修め常に遠離するなり

心に會て厭倦する無く 法に於て退没する無く 身欲も並に輕安にして 速に心の精進を得る

なり 法を聞くに由つて智を増し 智増して退念無ければ 智は恆に念に依つて住し 淨穢

の法を了知するなり 無上の法を學び 勝れたる念慧力に趣いて 衆生の欲解を了せんとして

自ら長夜に學ぶなり 法を學び已れば昇進し 極つて進んで智清淨なるに進み 衆生の欲解を

了して 解するが如くに便ち開示するなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行する時に、菩薩藏の微妙なる法門に於て、

是くの如くに尋求して覺慧に通達するに、是の清淨なる善法の明門に依つて、菩薩は常に應に是く

の如く修學すべし。舍利子、若し菩薩摩訶薩あつて、法に於て修學せば、應に是の念を作すべし。

二因・二緣は能く正見を發すと。何等を二と爲す。謂はゆる、他の聞音に従ひ、及び内に自ら理

の如くに作意し、彼れ復思惟するなり。他の聞音に従ひ、理の如くに作意し、何等の相にて、尋い

で重ねて思惟するを爲す。若し定を樂み相應の行を修むる諸の菩薩等あつて、未だ會て大菩薩藏の

微妙なる法門を聽聞せず、又聖法の律教を聽聞せずして、但三摩地中に於て知足の想を生ぜば、當

に知るべし、是の人は慢力の故を以て増上慢を起せることを。我れ是の人を、生・老・病・死・愁・歎・

憂・苦・諸の熱惱等を解脫する能はずと説くなり。既に諸の熱惱等の苦を脱せず。豈彼の五門に生

【三】 自然に諸法に達して信行に隨はず。異譯本に「自ら正法を了知して、淨信運せざる無く」とあり。

【四】 五門に生死し。異譯本に「五欲の樂に著し」とあり。

重に聽聞し、乃至、他の爲めに法の如くに説き已らば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、一切の法に於て光明を獲得して、能く一切の無明の黑闇及び諸の翳膜を破れることを。舍利子、是くの如き光明は、即智慧と爲す。何を以ての故に。善・不善の法を皆能く明了に、實の如くに知れる故なり。是の菩薩摩訶薩は、是くの如き法を修して明慧を獲得已るや、乃至、命難にも、衆苦の因縁として、決定して諸の不善の法を造らざるなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、永く不善の法を滅せんと欲する爲めの故に、聞く所の法に隨ひ極めて善く通達し、既に通達し已つて、是れを則ち説いて牟尼寂靜と爲すこと、是くの如し。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜多を修行する時の正行の相と名くるなり。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

人の闇室に入るに 覆蔽して光明を絶つが如く 衆の色像ありと雖も 明眼の見る所には非ず

是くの如くに人の 内に諸の明解を具するありと雖も 正法を聞かずんば 善惡を何ぞ能

く曉らん 多聞は法を解了し 多聞は惡を造らず 多聞は無義を捨て 多聞は涅槃を得

善く聽かば聞を増長し 聞は能く慧を増長し 慧は能く淨義を修め 義を得ば能く樂を招く

聰慧は義を得已るや 法の涅槃を證現し 淨覺の法と相應して 第一樂を證得す 菩薩藏を聞き已つて 正法に善く安住せば 世の大光明と爲つて 菩提の妙行を行ぜん。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、能く菩薩藏經を受持せる正行の人の所に於て、深く敬心なる善知識の想を起し、既に想を生じ已つて、又、大菩薩藏の微妙なる法門に於て、倍復尋求して、此の法門をして轉明淨ならしめん。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、菩薩藏を求めん爲めの故に、信欲を發生し、正勤を策勵し、其の心を檢攝して定安住ならしむるなり。是の菩薩摩訶薩は、四正斷の方便に於て、一切の法中に障礙無きを得ることを修

相として還應に説くを可とすべし。何を以ての故に。無相も有相も皆無相なる故に、説いて、此れは有相たり此れは無相たりと言ふべからざればなり。舍利子、若し菩薩摩訶薩あつて、能く是くの如き一切法の相は、卽是れ無相にして、見るを得べからず執取すべからずと悟つて、法の如くに了知せば、是れを正行と名け、菩薩摩訶薩は、是くの如き正法の行を勤修し已つて、當に諸法に於て無障・照明の慧に證入すべし。是くの如くなるを、舍利子、是れを菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多の正行の相と名く。と。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

正行に安住せる聰敏者は 菩薩藏に於て善く決定す 此の人は法に於て執を起さざるにて 執取無き行相は是くの如し 諸法を證得するに空と爲さざれば 諸法に於て空平等とするに非ず 又空法に執るる有るにも非ず 執る無き正行の相は是くの如し 法に於て取る無く亦捨つる無く 亦取るに非る法を以て法と爲して 取ることも無き是れを諸法の相と名け 取る無き正行の相は是くの如し 若し諸法に於て智は無礙ならば 此の智にて焚燒せざるある無きも 焚燒の智に於ても執る所無し 諸法の正行の相は是くの如し 智者は遠離の徳に安住すれども 法に於ては應に勤精進を起すべく 若し能く軌則の行に依止せば 爾の時に當に清淨の門に入るべし 是の清淨の門は諸法に通じ 亦有情の諸の欲解を了して 智者は觀ずる所のもの無きを知ると雖も 而も能く是くの如き法を演宣す 甚深なる法に於て勝義を了し 常に深義に於て勝決擇し 無邊なる功徳の行を踊現し 明智多聞は大海の如し 彼れの説く所の諸の文義に於ては 究竟して能く證得する者無きは 彼の文義の俱に無邊にして 眞實の正行の恒に無動なるを以てなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を修行する時に、菩薩藏の微妙なる法門に於て、殷

【三】 諸法を證得するに、乃至、空平等とするに非ず。異譯本に「法は不可得なり」と雖も、空の解を作す勿れ。況んや、此の正妙法は、虛空に同じからざれば」とあり。
【三】 亦取るに非る法を以て法と爲して取ることも無き。異譯本に「是の故に、法と非法とに、應に執取を生ずべからず」とあり。

て、其の心は阿耨多羅三藐三菩提に趣入せば、此の人は、是くの如くに法の如くに聽聞し、既に聽聞し已つて便ち能く解了し、既に解了し已つて正行を行ぜるなり。舍利子、我れ已に是の四十一法を説きたり。聞相に趣入せんとする諸の菩薩摩訶薩は、當に中に於て學ぶべし。舍利子、是くの如きを名けて、菩薩摩訶薩の修行する般若波羅蜜多の聞慧の本相と爲すなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜多を修行して菩薩の行を行する者は、應に是くの如き大菩薩藏の微妙なる法門に於て、鄭重に聽聞し受持し讀誦して、其の義を思惟して旨趣に到達し、復他人の爲めに廣く分別して是の行の資糧を説くべし。舍利子、云何か菩薩摩訶薩は、是くの如き法に於てして正行を起す。舍利子、菩薩の、法に於て正行を起すとは、謂はゆる、説の如くに修行し建立して住する、是れを法に於て正行を起すと名け、若しくは復、能き一切の不取を有つ、是れを法に於て正行を起すと名くるなり。何を以ての故に。舍利子、若し法に於て取らば即ち邪行と名くれれば、處無く位無きに、法を執取する人の、是くの如き法に由つて出離を得能ふことは、必ず是の處なければなり。何を以ての故に。無取の行人は、法の無に於て行するすら、尙應に疑を生ずべし。無の作用の故に。況んや、法を取る行にして、邪行に非ざらんや。是の故に、應當に諸法を取らずして正行を行すべければなり。又、舍利子、若しくは、諸法に於て障礙ある無き、是れを正行と名け、若しくは、諸法に於て輕蔑せざる者、是れを正行と名け、若しくは、諸法に於て取らず捨てず生ぜず滅せざる、是れを正行と名け、乃至、若しくは諸法に於て合する無き散ずる無き、是れを正行と名くるなり。又、舍利子、我が説く所の如きに若く是の處あるは、少法として見聞すべきものある無く、亦説くべきもの無く、是くの如き一切の諸法は見得べきに非ず、執取すべきに非ればなり。何を以ての故に。一切の諸法は、皆是れ一相にして謂はゆる無相なればなり。又、舍利子、一切の諸法は性本より無相なれば、若し菩薩あつて無相を説くとも是れも則ち無

【三】 諸法に於て障礙ある無き。異譯本に「此の正法に於て、隨順承受して障礙無き」とあり。

を行ぜるなり。三十には、若し菩薩あつて、法を聽聞し已つて、其の心勇銳ならば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。三十一には、若し菩薩あつて、大乘經を聞き心に信欲を生ぜば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。三十二には、若し菩薩あつて、攝法を聞き已つて其の心趣入せば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。三十三には、若し菩薩あつて、念住を説くを聞き便即身に受・心・法に趣かば、此の人は、則ち聽聞・解了して正行を行ぜるなり。三十四には、若し菩薩あつて、正勝を説くを聞き、便ち惡法に於て已に生ぜるにも未だ生ぜざるにも、若しは背き若しは捨て、若しくは、彼の善法の已に生ぜるにも未だ生ぜざるにも、覺轉せば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。三十五には、若し菩薩あつて、神足を説くを聞き、即能く奉行して身の輕性を生じ、心の輕性を生じ、欲の輕性を生ぜば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。三十六には、若し菩薩あつて、靜慮を説くを聞き、便ち靜思惟に其の心趣入せば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。三十七には、若し菩薩あつて、諸の法中にて輕蔑せざる行を聞き、便ち衆生に於て大慈心を起し、苦に入れる者に於て大悲の心を起し、正法に於て大喜の心を起し、不善の所に於て大捨の心を起せば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。三十八には、若し菩薩あつて、根を説くを聞き已つて、其の心は、彼の諸根、謂はゆる信根・精進根・念根・慧根・三摩地根に趣入せば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。三十九には、若し菩薩あつて、覺分を説くを聞き、其の心趣入して法性を覺了せば、此の人は、則ち聽聞・解了して正行を行ぜるなり。四十には、若し菩薩あつて、道支を説くを聞き、其の心涅槃の正路に趣入せば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。四十一には、若し菩薩あつて、如來の力・無所畏・大慈・大悲・大喜・大捨・無礙辯才・十八不共の佛法及び餘の無量なる諸佛の正法を説くを聞き、皆聽き已つ

【△】攝法を聞き已つて等。攝法は四攝の法を指す。異譯本には「攝受の事を聞き、心に攝受を行す」とあり。

【△】覺轉。異譯本に「發起」とあり。

十四には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て珍寶の想を起さば、此の人は即聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。十五には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て良藥の想を起さば、此の人は即聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。十六には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て貪・瞋・癡を息滅する想を起さば、此の人は則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。十七には若し菩薩あつて、多聞の所に於て聞き已つて能く持せば、此の人は則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。十八には、若し菩薩あつて、法に趣覺せば此の人は則ち聽聞解了を爲して正行を行ぜるなり。十九には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て其の智慧を樂はば、此の人は則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。二十には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て聞き已つて覺悟せば、此の人は則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。二十一には、若し菩薩あつて、聞くに厭足する無くば、此の人は則ち聽聞解了を爲して正行を行ぜるなり。二十二には、若し菩薩あつて、陀那を説くを聞き便ち捨を増長せば、此の人は則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。二十三には、若し菩薩あつて、尸羅を説くを聞き便ち戒を守護せば、此の人は則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。二十四には、若し菩薩あつて、屢底を説くを聞き便ち能く忍を修せば、此の人は則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。二十五には、若し菩薩あつて、毘梨耶を説くを聞き便ち正勤を起して無倦に精進ならば、此の人は則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。二十六には、若し菩薩あつて、靜慮を説くを聞き、便ち靜慮に入つて其の心散ぜずんば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。二十七には、若し菩薩あつて、般維若を説くを聞き、其の心決定して便ち智慧を修めて諳漏を盡さんと爲さば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。二十八には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て大歡喜を生ぜば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行を行ぜるなり。二十九には、若し菩薩あつて、法を聽聞し已つて身調適ならば、此の人は、則ち聽聞・解了を爲して正行

【三七】法に趣覺せば。
異譯本に「諸法に於て旨趣に
通達せば」とあり。

を相と爲すことすくの如し。

舍利子、當に知るべし、菩薩摩訶薩は、若し此れに於て聽聞せば、卽此れに於て解了し、若し此れに於て解了せば卽此れに於て正行することを。何を以ての故に。舍利子、菩薩摩訶薩の、菩薩藏の微妙なる法門に於て、聞相にて趣入する方便の若きは無量なればなり。吾れ今、略して四十一種を説かん。舍利子、何等を相と爲す。一には、若し菩薩あつて、此の法門に於て欲樂を生ぜば、當に知るべし、此の菩薩摩訶薩は、卽聽聞を爲し、聞いて便ち解了し、既に解了し已るや、便ち正行を行せることを。二には、若し菩薩あつて、此の法門に於て欲解を生ぜば、當に知るべし、此の人は、卽是れ聽聞し解了して、正行を行せることを。三には、若し菩薩あつて、此の法門に於て方便して趣入せば、當に知るべし、此の人は卽是れ聽聞し解了して、正行を行せることを。四には、若し菩薩あつて、善友に親近せば、此の人は卽聽聞・解了を爲して正行を行せるなり。五には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て心に慢ある無くば、此の人は卽聽聞・解了を爲して正行を行せるなり。六には、若し菩薩あつて、多聞を恭敬せば、此の人は卽聽聞・解了を爲して正行を行せるなり。七には、若し菩薩あつて、多聞の者に於て尊重の心を生ぜば、此の人は卽聽聞・解了を爲して正行を行せるなり。八には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て旋り遶つて奉敬せば、此の人は卽聽聞・解了を爲して正行を行せるなり。九には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て謙下の心を行ぜば、此の人は卽聽聞・解了を爲して正行を行せるなり。十には、若し菩薩あつて、多聞に親近せば、此の人は卽聽聞・解了を爲して正行を行せるなり。十一には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て耳を擗めて諦聽せば、此の人は卽聽聞・解了を爲して正行を行せるなり。十二には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て承事し迎逆せば、此の人は卽聽聞・解了を爲して正行を行せるなり。十三には、若し菩薩あつて、多聞の所に於て義趣を思惟し心定つて亂れずば、此の人は卽聽聞・解了を爲して正行を行せるなり。

【六】此れに於て。異譯本に「菩薩藏の正法に於て」とあり。

爲し、欲解するを相と爲し、方便を相と爲し、善友を相と爲し、無慢を相と爲し、多聞の所に於て、恭敬するを相と爲し、尊重するを相と爲し、旋遠するを相と爲し、謙敬するを相と爲し、親観するを相と爲し、諦聞するを相と爲し、承事するを相と爲し、思惟するを相と爲し、不亂なるを相と爲し、珍寶とする想を相と爲し、良藥とする想を相と爲し、諸の病想を息むるを相と爲し、念器を相と爲し、趣覺を相と爲し、大慧を樂ふを相と爲し、覺に證入するを相と爲し、聞いて厭足する無きを相と爲し、捨の増益を相と爲し、調順・離薪を相と爲し、多聞者に親近するを相と爲し、諸の作事に於て喜愛するを相と爲し、身の調適するを相と爲し、心の勇銳なるを相と爲すなり。又、舍利子、菩薩摩訶薩は、聽法の衆たるに於ては、倦む無くして聽聞するを相と爲し、正義を聽聞するを相と爲し、正法を聽聞するを相と爲し、正行を聽聞するを相と爲し、證智を聽聞するを相と爲し、波羅蜜多を聽聞するを相と爲し、菩薩藏の法を聽聞するを相と爲し、諸の攝法を聽聞するを相と爲し、方便善巧を聽聞するを相と爲し、梵住を聽聞するを相と爲し、神通を聽聞するを相と爲し、正念・正智を聽聞するを相と爲し、念住を聽聞するを相と爲し、正勝を聽聞するを相と爲し、神足を聽聞するを相と爲し、緣起を聽聞するを相と爲し、無常を聽聞するを相と爲し、苦の法を聽聞するを相と爲し、無我を聽聞するを相と爲し、寂靜を聽聞するを相と爲し、空を聽聞するを相と爲し、無相を聽聞するを相と爲し、無願を聽聞するを相と爲し、無加行を聽聞するを相と爲し、善根の加行を聽聞するを相と爲すなり。又、舍利子、是くの如きに自在なるを相と爲し、法を聞くを相と爲し、雜染を對治するを相と爲し、一切の煩惱の想を制伏するを相と爲し、智者を讚美するを相と爲し、聖者に親観するを相と爲し、非聖に遠離するを相と爲し、聖者に聽聞するを相と爲し、諸根を聽聞するを相と爲し、修習隨念を聽聞するを相と爲し、覺分を聽聞するを相と爲し、聖の八支道を聽聞するを相と爲し、如來の力・無所畏・大慈・大悲・大喜・大捨・無礙の辯才・十八不共の佛法を聽聞する

【七】趣覺を相と爲し。
 異譯本に「菩提に通達する相」とあり。
 【八】捨の増益を相と爲し。
 異譯本に「法施を集むる相」とあり。
 【九】調順離薪を相と爲し。
 異譯本に「施し已つて悔ゆる無き相」とあり。
 【一〇】梵住を聽聞するを相と爲し。
 異譯本に「梵行を樂聞する相」とあり。
 【一一】正勝。四正斷なり。
 【一二】無加行。
 異譯本に「不善を積集せざる行」とあり。
 【一三】五根。信・勤・念・定・慧の五根なり。
 【一四】修習隨念。
 異譯本に「隨念觀察」とあり。
 【一五】如來の力等。
 異譯本に「如來の十力、四無所畏、四無量、十八不共佛法の相を樂聞す」とあり。

名け 或は歡喜莊嚴土と名け 或は悅豫樂生意と名け 或る定を名けて一切時 順菩提道三摩地と爲す 或る定を名けて到彼岸 覺分華嚴施寶髻 或は施甘露堅解脫 或は風無動 盛光明と爲し 或は海潮溝寶藏 諸那羅延山峯力と名け 或は神通廣大義 妙善攝受三摩地と名け 或る定を名けて大通照 諸佛如來之境界と爲す 斯くの如き寂靜の定 及び餘の拘臆の邊ある無きを證得し 靜慮を修行して彼岸に到れる 菩薩の功德の廣きことは無量にして 行住恒に靜慮の境に遊び 其の心擾るる無く常に澹泊に 若しは坐若しは臥も定中に止り 威儀として定に在らざるある無く 定に處つて能く大音聲をも發せども 諸法の性の恒に寂靜なるを以て 異分別無く自在無く 我無く命無く分別無く 是くの如くに及び餘の滄際無く 數量ある無き功德の海に 聰叡の菩薩は含靈を愍み 靜慮を修行して彼岸に到るなり と。

般若波羅蜜多品 第十一の一

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多にして、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提の爲めの故に、此れに依つて勤めて菩薩の行を修行する。舍利子、菩薩は般若波羅蜜多を行ぜん故に、菩薩藏の微妙なる法門に於て、殷勤・鄭重に聽聞して受持し、若しは讀み若しは誦して義理を思擇し、既に能く通達するや、復他人の爲めに廣く宣べて敷演し、其の要を開示するなり。舍利子、若し菩薩摩訶薩あつて、我が説を聞き已り、法の如くに奉行し、菩薩藏の微妙なる法門に於て、殷勤・鄭重に聽聞し受持し讀誦し研尋して其の義に通達し、他の爲めに宣説して廣く開示し已らば、當に知るべし、是の人は、是くの如き無盡の慧相を證得することを。舍利子、是くの如き慧とは、何等の相と爲し、云何か證に入る。舍利子、言ふ所の慧とは、聞を以て相と爲し、菩薩の人は理の如くに證入すれば、是の故に説いて、無盡の慧の相と爲すなり。又、舍利子、是くの如き相を、我れ當に廣く説くべし。謂はく。此の相は、菩薩摩訶薩は、正法を求めんが爲めに、欲樂するを相と

【二】異分別無く。異譯本に「亦、分別、非分別無く」とあり。

して菩薩の行を行することを修學すべきなり。と。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

靜慮解脫にて彼岸に到る 此の行を勤行すること多劫海ならば 其の心清淨にして濁穢無く

世法に染まざること蓮華に喩へん 大靜定の遍照と名くるあり、此の定は修するに依つ

て彼岸に到る 又月光淨莊嚴と名け 復電光所嚴飾と名け 或は高行と名け或は心勇と

或る定を名けて無垢光 或は戒德窟或は無憂と爲し 或は諸法自在轉と名け 或は法炬或は法

勇と名け 或は山威法自在 或は正法智自然超 或は持正法妙清淨と名け 或は觀察他心定と

名け 或は正法寶光明と名け 復滅惑嚴勝幢と名け 定の名けて摧魔力と爲し 或は斷疑及

び無著と名くるあり 或る定を名けて寂靜燈 或は力高勝或は十力と爲し 或は敬手大

名稱と名け 或は持山善安住 或は蘇迷盧大明燈と名け 或は無勝勝彼勝と名け 或は智炬

及び慧行 或は無邊智或は自在と名け 或は發慧寂靜定と名け 或は月淨日音聲 或是那

羅延摧惱慢 或は善調龍師子吼と名け 或は遠離種種想と名け 或は旋轉或は返還 或は無噴

眼力清淨と名く 或る定を名けて念諸佛と爲し 或は念法或は念僧と名け 或は智轉或は

入空と名け 或は無相或は無願 或は金剛喩或は靜地 或は金剛地或は高勝と名け 或は山王

或は不噴 或は無轉變或は淨音 或は離煩惱或は觀察 或は虚空妙或は如空 或は發廣大諸

功德 或は趣覺慧或は念慧 或は辯無盡或は相續 或は無邊說詞無盡 或は無壞善作所作と名

け 或は觀察或は衆悅と名け 或は慈現或は悲廣 或は入歡喜或は欣慶 或は捨或は脫二種礙

と名け 或は法光或は法義 或は金剛幢或は智海 或は解脫堅或は衆喜と名け 或は智炬無動

定と名く 或る定を名けて勝蓮華 或は簡集法或は無動と曰ひ 或は慧上及び寂靜 或は無

邊光或は佛海と名け 或は解脫或は智授と名け 或は如來妙莊嚴と名け 或は無邊勝光焰と

一切の色・無色界を映發する故なり。菩薩の靜慮は、是れを寂靜、最勝の寧靜と爲し、寂靜に於て聲聞・緣覺の定を映發するに近き故なり。菩薩の靜慮には、分別ある無く、極めて妙清淨を究滿するを爲す故なり。菩薩の靜慮は、行品最勝にて、習氣の相續を永く除滅する故なり。菩薩の靜慮は、慧を以て超度し、一切の諸の世間を超度する故なり。菩薩の靜慮は、諸の含生の欲解の導首として、善く能く諸の含生を度脱せんと爲す故なり。菩薩の靜慮は、最も高顯なる三摩呬多を常に前に現するを爲す故なり。菩薩の靜慮は、自在にして轉じ、有らゆる所作を善く圓滿する故なり。菩薩の靜慮は、是れを大我と爲し、妙智慧を以て大我と爲す故なり。舍利子、是くの如き無量なる菩薩の靜慮は、皆是れ菩薩摩訶薩の、靜慮波羅蜜多に依つて心に集起する所なり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の靜慮波羅蜜多は何等の法にて前導を爲すか。舍利子、靜慮波羅蜜多是心靜に智を觀するを、以て前導と爲し、心一縁に住するを、以て前導と爲し、心散動する無きを、以て前導と爲し、其の心安住するを、以て前導と爲し、心奢摩他なるを、以て前導と爲し、心三摩地なるを、以て前導と爲し、三摩地の根を、以て前導と爲し、三摩地の力を、以て前導と爲し、三摩地の覺分を、以て前導と爲し、正三摩地を、以て前導と爲し、靜慮解脫を、以て前導と爲し、九次第定を、以て前導と爲し、九滅除法を、以て前導と爲し、一切の善法を、以て前導と爲し、煩惱の怨を伏するを、以て前導と爲し、三摩地蘊の具足圓滿を、以て前導と爲し、菩薩摩訶薩の諸の三摩地を、以て前導と爲し、佛薄伽梵の諸の三摩地を、以て前導と爲すなり。舍利子、是等の如き無量なる靜慮は、皆靜慮波羅蜜多の前導の法と爲す。舍利子、復無量無邊なる證寂靜の法あつて、並に是れ靜慮波羅蜜多の前導とする所なり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の靜慮波羅蜜多と名け、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提の爲めの故には、當に是の中に於て勤精進を起し、具足

の故に、欲界を厭離す」とあり。

【三】菩薩の靜慮は、乃至、大我と爲す故なり。異譯本に「又、禪定に於て悉く所受無し。見の緣を以ての故に、大智慧を得」とあり。

【四】心三摩地なるを、乃至、正三摩地を以て前導と爲し。異譯本に「三摩地心を先と爲し根等持を一力等持を、正等持を先と爲し」とあり。

【五】九滅除法。

異譯本「不相違」とあり。

と雖も而も心に縁する念無く、亦意を作す無く、四正斷を行すと雖も而も心に生滅無く、如意足を行すと雖も而も心に戲論無く、淨信を行すと雖も而も心繫著する無く、正勤を行すと雖も而も心恒に遠離し、念を行すと雖も而も心恒に自在に、三摩地に住すと雖も而も心に平等を證し、般羅若を行すと雖も而も心本より無相に、諸力を行すと雖も而も心に摧伏する無く、覺分を行すと雖も而も菩提を解析し、道分を修すと雖も而も心に修する所無く、奢摩他を行すと雖も而も心恒に寂滅に、毘鉢舍那を行すと雖も而も心に定觀無く、聖諦を修行すと雖も而も畢竟じて遍知し、衆生を成熟すと雖も而も心本より清淨に、正法を攝受すと雖も而も法性を壞らず、佛國土を淨むと雖も而も心は虚空に等しく、無生の法を證すと雖も而も心に得る所無く、不退轉地に行くと雖も心性退く無く、諸の妙相を獲と雖も而も性の無相なるを知り、道場を莊嚴すと雖も而も心は三界に遊び、常に處つて周く輪り、魔軍を降伏すと雖も而も諸の含識に於て摧伏する所無く、諸法は即菩提の性なるを知ると雖も而も心隨つて覺了し、法輪を轉すと雖も而も心は法性に住して還る無く轉する無く、復次般涅槃を現すと雖も而も生死の性に於て心は常に平等なること、是くの如し。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は是くの如き希奇・未曾有の法に隨覺し通達することに平等に證入すと名け、當に知るべし、修行せる靜慮波羅蜜多の成就する所なることを。

復次に、舍利子、何等を名けて、菩薩摩訶薩の靜慮波羅蜜多に依つて修學せる菩薩の靜慮の相と爲す。舍利子、菩薩の靜慮は、自性に住せずして如是の三摩地を滿すを爲す故なり。菩薩の靜慮は、愛味ある無く、自の安樂に貪著するを爲さざる故なり。菩薩の靜慮は、大悲を緣じて一切衆の煩惱を斷ぜんとして爲す故なり。菩薩の靜慮は、定を退轉する無くして、欲性の増上を緣する性なる故なり。菩薩の靜慮は、神通を發して、衆生の諸の心行に了達する故なり。菩薩の靜慮は、心欣び愛悅して、善く能く心の自在を顯發する故なり。菩薩の靜慮は、一切の三摩鉢底を了知して、

- 【四】淨信、乃至、心、本より無相には「五根に就いて云ふ。異譯本には單に「信・進・念・定・慧に彼の無礙を起し等」とあり。
- 【五】諸力。前の「五根」に關する五分なり。
- 【六】覺分を行すと雖も、等異譯本には「七覺支に於て、彼の菩提を分別する心を起し」とあり。
- 【七】道分。八正道即ち八支道なり。
- 【八】聖諦。四諦、又、四聖諦なり。
- 【九】不退轉地に行くと雖も、心性退く無く。
- 異譯本に「不退轉地に於て轉無轉の心を起し」とあり。
- 【一〇】菩薩の靜慮は、乃至、滿すを爲す故なり。
- 異譯本に「諸の菩薩は、彼の禪定に於て耽著する所無く能く如來の三摩地に於て圓滿なるを得。」とあり。
- 【一一】菩薩の靜慮は、乃至、貪著するを爲さざる故なり。
- 異譯本に「又復、禪悅の味を樂まず。諸の菩薩は、復、身に於て滄悅すと雖も、而も取著する無し。」とあり。
- 【一二】菩薩の靜慮は、乃至、緣する性なる故なり。
- 異譯本には「又、禪定に於て等持を退かず。是の緣を以て

し、若し善く能く義を計せざるあらば、是に則ち義と非義とは現前せざる故に、義を見ずんば、一切の處に於て覺慧は無礙なるなり。是の菩薩摩訶薩は、若し能く是くの如くに覺の無礙を了せば、則ち無障礙の覺を獲得するを爲し、若し無障礙の覺あらば則ち一切に於て著する所無く、若し著する所無くば則ち住する所無く、若し住する所無くば乏しき所無く、若し乏しき所無くば則ち癡無く求無く、若し癡無く求無くば則ち迷無く惑無く、若し迷無く惑無くば則ち我所無く、若し我所無くば則ち攝受する無く、若し攝受する無くば則ち執する所無く、若し執する所無くば則ち諍論無く、若し諍論無くば是れ則ち無諍沙門の法なり。若し無諍沙門の法あらば、是れ則ち一切無障・無礙にして、等しきを虚空に求めん。若し能く等しきを彼の虚空に求めば、則ち欲界・色界及び無色界に繫屬せず、若し諸處に於て繫屬する無くば、則ち色相及び形量無く、若し其に是の色相・形量無くば則ち能く是くの如くに隨覺し、若し能く是くの如くに隨覺せば則ち能く是くの如くに通達するなり。舍利子、云何なるを説いて隨覺・通達と名く。舍利子、菩薩摩訶薩にして、若し能く隨覺・通達せば、是の處に少法も得べきある無く、此れを則ち説いて隨覺・通達と名くるなり。舍利子、諸の菩薩摩訶薩は平等の證入に由つて、是くの如くに隨覺・通達する故に、是れを菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多に依つて希奇・未曾有の法を成就すと説くなり。

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の成就する希奇・未曾有の法と爲す。舍利子、菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多に依る故にて、大慈を行すと雖も、而も恒に無我を觀じ、大悲を行すと雖も而も無衆生を知り、大喜を行すと雖も而も命者無きを知り、大捨を行すと雖も而も數取無きを知り、廣大施を行すと雖も而も心恒に調順し、境を緣するに淨戒なりと雖も而も心は常に寂靜に、辱に隨ひ忍を行すと雖も而も心に窮際無く、精進を勤加すと雖も而も心に能く簡集し、諸の靜慮に入ると雖も而も正心にて觀察し、遍く智慧を行すと雖も而も心に行ずる所無く、四念住を行す

【三】若し能く是くの如くに、乃至、住する所無く。異譯本に「若し智無礙ならば則ち通計無く、若し通計無くば則ち對ある無く、若し對ある無くば則ち住する所無く」とあり。

卷の第五十

菩薩藏會 第十二の十六

靜慮波羅蜜多品 第十の二

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多を修行する故に、是くの如き無退の神通を獲得して、善く能く智にて作す所の業を建立す。舍利子、當に知るべし、菩薩摩訶薩の是の通智を得ることとは、清淨の心・鮮白の心・明潔の心・無濁の心・隨煩惱を離るる心・善き調順の心・善き寂靜の心・善き修治の心に由り、是くの如き心相の由つて生ずる所は、靜慮解脫・三摩地・三摩鉢底の發起する所なることを。舍利子、是の菩薩摩訶薩の世界に處るや、故に意生を作して繫縛生に非れば、繫縛に由らずして命終し受生するなり。何を以ての故に。是の菩薩摩訶薩は、一切の虚妄なる分別を解脫せる故に、一切の非眞實なる煩惱の縛を解脫せる故に、一切の轉倒せる妄執に依止せらるるを解脫せる故に、是の故に、此の菩薩摩訶薩は、世界に現するに隨ひ解脫して生じて、解脫の命終・解脫の受生なればなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、受生を現じ已るや、大乘を成辦し、一切の諸佛の正教を圓滿し、遍く十方に遊んで廣く佛法を求め、志に求むる所ありと雖も、而も取も無く得も無く、諸佛の法に入るに隨ひ即一切の法を爲し、一切の法に入るに隨ひ即諸佛の法を爲し、是くの如くにして菩薩は、佛法及び一切の法に入るに隨ひ、然も彼の法と非法との行に隨はざるなり。舍利子、諸の菩薩摩訶薩にして、若し能く實の如くに諸法を求むる時に、無取及び無得に安住せば、是れ則ち一法として算數に入るべきものある無し。何を以ての故に。一切の諸法は算數の道を超過せる故なり。若し能く法の平等性に達せば、是に則ち法と非法とに執せられず。何を以ての故に。一切諸法の性に執無き故なり。若し中に於て義ありと計せば、是に則ち廣大なる無義を獲得

【一】 靜慮解脫。
異譯本には禪定解脫とあり。
禪定の別稱なり。

【二】 若し中に於て、乃至、獲得し。
異譯本に「若し義に著せば大義利に非ず」とあり。

り。此の神通は、善く能く音聲の法門に隨ひ入り、前際の音聲にも平等なる性の故なり。此の神通は、衆生の一切の心行を觀じて、彼の性を現見する故なり。此の神通は、善く能く一切の諸劫を隨ひ念じて、前・後の際を分別し了知する故なり。此の神通は、善く能く無量の神變を示現して現に前に在くに、加行の相無き故なり。此の神通は、漏盡を了知し、迦羅及び三摩耶を觀待して時を過さざる故なり。此の神通は、是れ世に聖出して、一切の法に於て決擇する分なるが故なり。又、舍利子、是くの如き神通は、微妙甚深なること、聲聞・獨覺の測る能はざる所にして、是くの如き神通には大威徳あつて、善く能く一切の有情を調伏し、是くの如き神通には大功業あつて、^三灌頂を證得して一切の諸法を自在に轉ずる故なること是くの如し。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に依る故にて、是の無退の諸の勝神通を獲て善く能く智にて作す所の業を建立し、彼の慢力の發起する所に非ずと名くるなり。』

〔三〕灌頂を、乃至、自在に轉ずる。異譯本に「灌頂位に至つて、法の自在を得。」とあり。

又、舍利子、若し定にて、彼の増上の境界を緣じて、一切の増上の善根を發起せば、是れを方便と名け、若し能く無根・無住なるを觀察せば、是れを名けて慧と爲す。又、舍利子、若し定にて、佛土を修治して前に現せば、是れを方便と名け、國土と虚空と等しきを觀察せば、是れを慧と爲す。又、舍利子、若し定にて、道場を發起し莊嚴せば、是れを方便と名け、若し寂の靜慮にて諸法を知ることに住せば、是れを名けて慧と爲す。又、舍利子、若し定にて、發起して正法輪を轉ぜば、是れを方便と名け、若し轉ずる所の法輪は起ること無しと觀ぜば、是れを名けて慧と爲す。又、舍利子、是の無量の覺分の資糧（三四）の如きに平等に證入して觀察の現前する、是れを方便と名け、是の無量の諸惑の如きは、寂滅して熱惱を息除し、如來の有つ所の靜慮の妙樂にて、諸法に與つて共に相應することをせずして諸相を有つ無く、諸相を遍く知りながら一切の所緣の境界を遠離することは多くの如きは、皆菩薩の正定にて有つ所の靜慮に入れるにて、舍利子、菩薩摩訶薩にして、若し能く是くの如き觀察の具足せば、是れを智慧と名く。舍利子、若し菩薩摩訶薩は、是くの如き無盡の靜慮を成就して靜慮波羅蜜多と相應する故に、一切の惡魔は便を得る能はずば、即ち諸佛の法器に安住すと名くるなり。舍利子、是くの如き方便是くの如き妙慧をば、是れを菩薩摩訶薩の靜慮波羅蜜多の具足成就と名くるは、皆是れ妙慧と方便との發起する所なればなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多に依る故に、不退の神通を具足し成就して、善く能く智にて作す所の業を建立して——彼の慢力の發起する所の遊戲の神通には非ず。——世間に示現し、一切の作用は神通に安住して、世間の一切の大事を發起するなり。又、舍利子、此の神通は、大智の相を爲して、世・出世間の微妙なる作用を具足する故なり。此の神通は、大慧の相を爲して、世・出世間の一切の諸法を現見する故なり。此の神通は、無盡の相を爲して、一切に隨ひ過ぎこと虚空の如くなる故なり。此の神通は、等しく諸色を見て色・無色の中を平等に見る故なり。

〔三四〕無量の覺分の資糧。異譯本には「菩提分の行」とあり。

に等しうし、心すふに水すゐに等しうし、心を火かに等しうし、心を風かぜに等しうし、心を虚空こくうに等しうして、高下たうげある無く亦また委屈ゐくつする無く、安住あんじゆし善住ぜんじゆして無動搖むどうぎやくを證あかしすれば、諸しよの威儀ゐぎに於ても心恒こころねに定さだまつて、又住すする所の威儀ゐぎを分別ぶんべつせず、心性しんじやう純熟じゆんじやくして深定しんぢやうに處るを樂たのしみ、掉たうかず舉あげらず飄轉ひょうてんある無く、諸しよの愚鈍ぐどんに遠とほざり、言ことに雜亂ざらん無く、義ぎを知り法はふを知り、善ぜんく諸時しよじ謂いはゆる 迦維吠羅かゐべいら及び三摩さんま耶やを識しり、巧たくまに能あたり一切いっけつの世間せけんに隨順ずいじゆんして而も世間せけんの性じやうと相あひ雜まらず、世間せけんの利等りとうの八法はふはふを超越ちやうえつすれば、諸しよの煩惱ぼんごう惑ごつも染汙せんごする能はず、憍闍けいせつの處ところを離はなれ所行しよぎやうに遠とほざり唯常ゐ常に平等びやうどうなる法性はふじやうに安止あんぢし、深定しんぢやうを捨すてずして世間せけんの一切いっけつの作業さぎやうを現あらわするなり。舍利子せりし、是れを菩薩摩訶薩ぼさつまかさつは、靜慮波羅蜜多じやうりよばらみだに依る故ゆゑに是の妙慧めうゑ及び方便べんぽうなるか。舍利子せりし、菩薩摩訶薩ぼさつまかさつは、大悲力だいひりきを以て心を境きやうに繋つないで衆生しゆじやうを度あせんとする、是れを方便べんぽうと名なけ、寂靜じやくじやう・最極さいごくなる寂靜じやくじやうに證入ぢやうにんする、是れを名なけて慧ゑと爲す。又、舍利子せりし、若し能あたり佛智ぶつちの無礙むがいに證入ぢやうにんせば、是れを方便べんぽうと名なけ、一法いつぽうとして慮知りぢすべきある無くば、是れを名なけて慧ゑと爲す。又、舍利子せりし、若し能あたり諸法しよぽうの攝觀しやくくわんに證入ぢやうにんせば、是れを方便べんぽうと名なけ、若し法性はふじやうに於て雜思惟ざしゆゐ無くば、又、舍利子せりし、若し能あたり諸法しよぽうの攝觀しやくくわんに證入ぢやうにんせば、是れを方便べんぽうと名なけ、一法いつぽうとして慮知りぢすべきある無くば、是れを名なけて慧ゑと爲す。又、舍利子せりし、若し能あたり佛身ぶつじんの莊嚴じやうげんに證入ぢやうにんして現あら前に在る、是れを方便べんぽうと名なけ、法身はふじんの性じやうの處ところる所無なきを觀察くわんさつする、是れを名なけて慧ゑと爲す。又、舍利子せりし、平等びやうどうに佛の演えんぶる所の言詞ごんじ・梵音ぼんおんの聲等しやうどうに證入ぢやうにんし憶念おくねんする、是れを方便べんぽうと名なけ、法性はふじやうの言說ごんじすべからざるを觀察くわんさつする、是れを名なけて慧ゑと爲す。又、舍利子せりし、平等びやうどうに其の心こころに證入ぢやうにんして 金剛喻定こんごうぎよぢやうに安住あんじゆする、是れを方便べんぽうと名なけ、念ねんに散亂さんらん無く法性はふじやうを觀察くわんさつする、是れを慧ゑと名なく。又、舍利子せりし、若し是この如ごとき定ぢやうにて本願ほんがんに安住あんじゆして衆生しゆじやうを成熟じやくじゆせば、是れを方便べんぽうと爲し、衆生しゆじやうの皆我性がじやう無なきを觀察くわんさつせば、是れを慧ゑと名なく。

【三】迦維吠羅(Kāśyapa)實時を謂ふ。第二卷「迦羅」の解、參照。

【三】金剛喻定。又、金剛定。金剛三昧・金剛心とも云ふ。其の體堅固に、其の用銳利にして、一切の煩惱を斷じ得る義にして、三乘を通じて最後の禪定なり。故に、聲聞乘にては、阿羅漢向の最終にして、菩薩乘にては佛果直前の等覺位なり。

て平等に是の處を引攝することに安住するを説いて三摩呬多と名く。舍利子、云何なるを名けて平等の引攝と爲す。舍利子、三摩呬多とは、有情を引攝するに平等の性なる故に、此の定を三摩呬多と名く。舍利子、三摩呬多は、其の心を引攝するに平等の性なる故に、又、三摩呬多は、欲解を引攝するに平等の性なる故に、又、三摩呬多は、方便を引攝するに平等の性なる故に、又、三摩呬多は増上なる欲解を引攝するに平等の性なる故に、又、三摩呬多は陀那を引攝するに平等の性なる故に、又、能く尸羅・廉提・毘梨耶・靜慮・般羅若を引攝するに平等の性なる故に、又三摩呬多は一切の諸法を引攝するに平等の性なる故なり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、三摩呬多の深妙なる靜慮にて引攝するに諸法に平等なる性の故と名く。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に依る故にて獲る所の靜慮は、微密深妙にして唯智のみ能く入るを、亦名けて三摩半那と爲すを得。舍利子、何等を名けて三摩半那と爲す。舍利子、是くの如き妙定は諸法の性と等し。所以は何ぞ。若し菩提は平等ならば即是れ一切の有情も平等に、若し一切の有情は平等ならば即是れ諸法も平等なるを、若し能く平等に是の平等の性に證入せば、是れを則ち名けて三摩半那と爲す。又、舍利子、若し空性平等ならば即諸法平等なるを、若し能く是の平等なる性に證入せば、是れを則ち名けて三摩半那と爲す。是くの如くに、無相・無願及び無行の性は皆平等ならば、即諸法平等なるを、若し能く是の平等の性に證入せば、是れを則ち名けて三摩半那と爲す。又、舍利子、若し心性は平等ならば即諸法も平等なるを、若し能く是の平等の性に證入せば、是れを則ち名けて三摩半那と爲す。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、是の靜慮、三摩半那の平等の性を獲るは、皆靜慮波羅蜜多に因る故と名くるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に依る故にて、是の平等・微妙なる靜慮を獲るや、諸の含識に於て、恩有るにも恩無きにも皆平等心を生じて簡約する無し、是の故に、菩薩は心を地

【一九】三摩呬多は、乃至、增上なる欲解を引攝するに平等なる性なる故に。

異譯本に「心常に平等なる、是れを三摩呬多と名く。意常に善巧に」。意中極深に——等とあり。

【二〇】若し菩提は、乃至、三摩半那と爲す。

異譯本に「若し一切法の平等なるに於て、即、一切の有情は平等に、及び一切の菩提は平等なりと、是くの如くに普遍に入解せば、此れを説いて名けて三摩半那と爲す」とあり。

【二一】若し空性平等ならば、乃至、三摩半那と爲す。

異譯本に「又若し、普遍に諸法の虚空の等の如きに入解せば、此れを説いて、名けて三摩半那と爲す」とあり。

て神通と曰ひ、若し能く色像の盡じんの法ほふたるを了知すれども、而も盡じんを證しやうせざる、是れを名けて智と爲すなり。又、舍利子、若し能く一切の聲響しやうかうを聽聞せば、是れを神通と名け、若し能く聲響の實際じしつの本不可説なるを了知せば、是れを名けて智と爲す。又、舍利子、若し能く衆生の心行しんぎやうに了達せば、是れを神通と名け、若し能く心性しんしやうの寂滅じやくめつなるを了知しながら彼の滅を證せずば、是れを智と爲す。又、舍利子、若し能く過去の邊際を隨念せば、是れを神通と名け、若し能く三世の無礙むがいなるを了知せば、是れを名けて智と爲す。又、舍利子、諸の佛土に於て若しは往き若しは來たる、是れを神通と名け、若し國土等の虚空こくうの相さうなるを知らば、是れを智と名く。又、舍利子、法の興起を了する故に、名けて神通と爲し、法の平等びやうとうなるを觀する、是れを智と爲す。又、舍利子、諸の世間に明達する故に神通と名け、諸の世間に雜ざせざる、是れを名け智と爲す。又、舍利子、威勢は一切の釋はんにん・梵ぼん・護世の諸天を映奪えいじやくする故に神通と名け、一切の聲聞・緣覺の其の證しやう下劣げうじやくなるを了知する、是れを名けて智と爲す。舍利子、是くの如き等の、若しは通若しは智の、其の徳は無量にして不可思議なり。是れを菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に依る故に、精勤して是くの如き神通智業じんぎやうぢぎふの圓滿なるを獲得すと名くるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に依る故に、無邊の深妙なる靜定じやうぢやうを證得するなり。何を以ての故に。舍利子、菩薩摩訶薩は、乃至、爾所にそこの無數の煩惱ぼんごうの積集じくじふせる心こころをば捨つるに、菩薩は彼れに於ても亦爾所にそこの無數の靜慮の資糧じじやうりやうの功徳くどくを有もちて其の心を安住し、又、舍利子、菩薩摩訶薩は、乃至、爾所にそこの一切衆生の、煩惱ぼんごうの心を以て諸の散亂を生ずるにも、菩薩は彼れに於ても亦應に爾所にそこの靜慮の資糧の功徳を積集すべければなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の證する所の靜慮の無量無邊なるは、皆靜慮波羅蜜多の發起する所に由ると名く。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の證する所の定ぢやうは、極めて善く深妙にして、菩薩は時に應おこじ中に於

薩は若し加念して、深廣なる大海を牛跡の如くならしめんと欲せば、即其の念の如くに、是の大海の量をして牛跡の如くならしめ、又、加念して、微淺なる牛跡を猶大海の如くにせんと欲せば、即其の念の如くに、是の牛跡の量をして大海に同じからしむるなり。又、舍利子、菩薩摩訶薩は、若し加念して、劫燒の大火を水聚に成さしめんと欲せば、即ち其の念の如くに、便ち水聚と成し、水災を火災と成さしめんと加念せば、即其の念の如くに火災は便ち起るなり。舍利子、要を以て之れを言はば、一切加念神足の門には、菩薩摩訶薩は、念を之れに加ふるに隨ひ、皆成就することを得るなり。又、舍利子、菩薩摩訶薩は、若し念を下・中・上の法に加ふるあらば、互に相ひ轉易することは、即其の念に隨つて皆成就することを得るなり。又、舍利子、菩薩摩訶薩は、凡べて加念する所の神通を物に被らすに、貞固にして壞り難く轉變すべからざること、一切の世間にて搖動隱沒せしめ能ふものある無く、若しは沙門・若しは婆羅門・諸天・帝釋・魔王・梵王及び餘の世間も、皆法の如くに搖動及び隱沒し能ふ者ある無く、唯法主たる諸佛世尊を除くのみ。舍利子、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩の、是等の如き加念持力を以て、但種種なる廣大・奇特の變現を尊重することを爲すは、諸の衆生等に正法を宣べん爲めの故に、威神を現するものなることを。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多を修行する故に、是くの如き如意神足の無退自在なるを獲得するや、諸魔・煩惱の境界に超過し、一切の諸佛の境界に趣入すれば、是に諸の衆生は、方便に惱ますして一切の善根の資糧を積集し、一切の魔王及び魔軍の衆、諸の威徳の天も遮斷すること能はざるなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に依る故に、是の如意足作證神通の智業の圓滿なるを獲と名くるなり。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に依る故に是の神通を得る。此の神通とは、何等の義理ぞ。復、何等を以てして名けて智と爲す。舍利子、菩薩摩訶薩は、若し色像を觀せば名け

るなり。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は如意足道にて諸の威力を現する。舍利子、菩薩摩訶薩は、諸の衆生の、力増上慢・忿恚・憍逸を極めて懐くこと深重なれど、是くの如き力に由らば調伏を得る者なるを觀るや、菩薩摩訶薩は、其の應ずる所に隨ひ、便ち是くの如き神力を示現するを爲し——或は摩訶諾伽那力を現し、或は那羅延力の四分の一を現し、或は那羅延力の全分の半を現し、或は那羅延力の具足せる全分を現す。——是くの如くに、乃至、漸く兼ね倍するを致して、彼の衆生をして調伏・化度せしむるなり。舍利子、菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多の如意足神通力を以ての故に、能く二指を以て蘇迷盧の最大山王を舉げて、軽く轉ずることの自在なるは、猶一の阿末羅果を取るが如く、復山王を以て他方の無邊なる世界に擲ち置くに、舍利子、此の山王の擲がる如きは、高さ一十六萬八千踰繕那量に、廣さ八萬四千踰繕那量にして、四寶にて成ぜられ高廣第一なれども、是の菩薩の住せる如意足に由つて、異方に擲つと雖も、菩薩の力に於ては損も無く減も無きなり。又、舍利子、菩薩摩訶薩は如意足に住せる故に、又能く此の三千大千世界の是くの如き縱廣を、其の際量を盡して、水輪の聚より上有頂に至るまでを以て、掌中に鑿け置きて住むること一劫を經とも、諸の威儀に妨礙ある無きを現するなり。舍利子、是くの如くに、無量なる不可思議に、菩薩摩訶薩は、悉く能く應ずるに隨ひ神變を示現するなり。舍利子、菩薩摩訶薩の、是くの如き大力を化現し成就するは、力増上慢・忿恚・憍逸の極重なる衆生をして、菩薩の顯現せる神變を見聞して、有つ所の恃力・懷慢・忿恚・憍逸を、悉く皆摧滅せしめん爲めなることを菩薩は了知し、既に調伏し已るや、其の應ずる所に隨ひ法要を説くを爲すなり。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は、如意足通にて加被する智を證得する。舍利子、菩薩摩訶薩は即ち是くの如き加被の智力を以て、加念する所に隨ひ即便に成就するなり。舍利子、菩薩摩訶

【二六】摩訶諾伽那(Mahānaga)の(三)力。大龍象力と譯す。異譯本には「大壯士力」とあり。

【二七】阿末羅(Mahāra)果。葉は小棗に似、花は白くして少く、果は胡桃の如くにして、味は酸く甜く、薬用に供すと云はる。經中に、往々、掌中を見るに喩ふる者は是れにして、別に食用の菴沒羅(Mahā)と云ふ物あり。

【二八】水輪。一世界を成立せしめ居る謂はゆる四輪の第三にして、即ち空・風輪の上に在り。此の水輪の上層の凝結したる物は即ち金輪にして、地球の山海は此の金輪上に在りとせらる。

を。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多に依る故にて、是の宿住神通は成就し具足し、智業は圓滿なるを得と名くるなり。

復次に、舍利子、云何なるは菩薩摩訶薩の如意足の作證智神通にして、何等を復如意足通の智業の圓滿と名くる。舍利子、菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に依る故にて、是の欲三摩地斷行にて、如意足を修するを成就し、是くの如くに、勤と心と觀との三摩地斷行にて、如意足を修するを成就することを獲るなり。舍利子、是れ菩薩摩訶薩は、是等の欲・勤・心・觀の如きにて助發せる定法に依つて、極めて善く修治し極めて善く成立して自在に轉ぜるが故に、能く善く四如意足を修習したればなり。舍利子、菩薩摩訶薩は、四種の如意足を成就し已るや、其の願欲に隨ひ、如意の神通を證得し現前するに、能く一に非ざる種種の神變を示すなり。菩薩摩訶薩は、無量の神通變化を現すと雖も、皆諸の衆生を度脱せん爲めの故にて之れを修習したるなり。舍利子、是に諸の衆生は、應に是くの如き神通變化にて調伏を受くる者を見るべし。菩薩摩訶薩は、彼の應ずる所に隨ひ、即便に是くの如き神通の無量の變化——或は色相を現し、或は威力を現し、或は冥加を衆生に被らす——を顯示し、是れに因つて度脱に従はしむることを。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は、如意足通にて諸の色相を現じて衆生を調伏する。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、諸の衆生の、是等の如き諸の色像の現ざるを、若しは見若しは聞くに由つて、方に調伏に従ふを觀するや、菩薩は即便に其の念ずる所に隨ひ、斯の色像を現じ、——或は如來の色像を現じ、或は獨覺の色像を現じ、或は聲聞の色像を現じ、或は天帝の色像を現じ、或は梵王の色像を現じ、或は護世天王の色像を現じ、或は轉輪聖王の色像を現す。——是等の如くに、諸の餘の色像を、菩薩摩訶薩は化度する所に隨ひ皆能く示現し、乃至、畜生の色像及び餘の一切を現ずること由つて調伏する者には、即便に是くの如き色像を示現して、諸の衆生の爲めに正法を宣説す

【三五】是の欲三摩地斷行にて乃至如意足を修するを成就し、異譯本に「諸行を斷除して能く欲の神足定を具足し修習し、等」とあり。

受けて樂著することを希求する憍逸ある無く、諸の之れを欲する王の富樂を希求する憍逸ある無く、唯衆生を成熟せんと欲する爲めに、便ち願力の故を以て諸有を受けしことを除くのみ。舍利子、是くの如くに、菩薩摩訶薩は、一切は皆無常・苦・無我に趣くを了知せる故に、過去世に於て、煩惱の諸行を善く能く訶責し輕毀し厭惡せしが、現在世に於ても、更に是くの如き煩惱、乃至、命難、重苦の因縁を容納せず、終まで不善の法及び諸の惡業を造作せざるなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、先に集めし所の一切の善根を、皆悉く阿耨多羅三藐三菩提に迴向して、其れをして増廣ならしめ、現在集むる所の諸の善根等にて一切の衆生を攝受せんと欲するに一切の不平等の迴向を遠離せん爲めの故なり。是の菩薩摩訶薩は、是等の如き諸の善根を具し已るや、三寶の種を結ぎて斷絶せざらしめんとて、皆一切智智に迴向するを爲すなり。舍利子、當に知るべし、菩薩摩訶薩の念定の力は、乃ち能く是くの如くに、無量の微妙なる善法を成就することを。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、靜慮波羅蜜多を修行する故にて、是の宿住の妙緣・隨念を獲て極めて善く安住するは、法界に住せる故なり。是くの如く隨念の堅固にして不動なるは、方便の善巧を簡擇して集めたる故なり。是くの如く隨念に掉亂ある無きは、已に善く靜慮の業を修治せる故なり。是くの如く隨念に躁擾ある無きは、妙なる奢摩他を善く住持せる故なり。是くの如く隨念に諸の迷謬無きは、毘鉢舍那を善く攝受せる故なり。是くの如く隨念の性に魯樸無きは、善く清淨な二現妙智を證せる故なり。是くの如く隨念を能く善く憶持するは、久遠の諸念を忘失する無き故なり。是くの如く隨念に大寶の伏藏するは、福德の資糧を善く積集せる故なり。是くの如く隨念して他に隨はざるは、智慧の資糧を善く積集せる故なり。是くの如く隨念の已に彼岸に到れるは、諸度の資糧を善く積集せる故なり。是くの如くにして、舍利子、當に知るべし、無量無邊の諸の妙善法は、皆念力に由つて任持せらるる故に、過去世及び現在世に於ける發起の憶念に忘失の法無きこと

【三】 現妙智。

異譯本に「現量智」とあり。

【四】 諸度。六度（波羅蜜）を謂ふ。

劫・成劫、若しくは成壞劫・非一の壞劫・非一の成劫、非一の成壞劫と、是の無量なる如きを皆能く了知するなり。菩薩摩訶薩の又知ることは、是の衆生の如きは、曾て彼の處に於て、是くの如き名を有ち、是くの如き姓、是くの如き種類、是くの如き色相、是くの如き狀貌、是くの如き形像、是くの如き飲食を有ち、是くの如く久住し、是等の如き苦樂の事を受けたり。と、菩薩摩訶薩は、宿住智を以て皆能く隨念するなり。又能く了知することは、是の衆生の如きは、此處に命終して彼處に受生し、彼處に命終して此處に受生す。と、是くの如くに、此彼に命終し此彼に受生する、若しくは自若しは他の、是くの如き一切の有らゆる行相有らゆる處所の、一に非ざる種種の諸の宿住の事を、菩薩摩訶薩は、悉く能く隨念して分別し了知するなり。

復次に、舍利子、是の菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に依る故の宿住の念力を以て、善く能く隨念して、前際の有らゆる自の宿住の事を、悉く能く了知するなり。又、能く隨念することは、前際の有らゆる他の諸の有情・他の數取趣の受けし所の、一に非ざる無量なる種種の諸の宿住の事を、皆能く隨念して之れを知ることを得るなり。菩薩摩訶薩は、又能く前際の因の、自の善根を生ぜし因を隨念し、又能く一切の含識の前際の因の、他の善根を生ぜし因を隨念し、是くの如くに一切を隨念して了知するなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、宿住の智力にて、無量の方便もて自の善根を以て菩提に迴向して、能く衆生をして、各々有つ所の善根を自ら憶識せしめ、又衆生をして、菩提心に於て勤行して攝受せしめしことを、是くの如くに一切隨念して能く知るなり。又能く先の世に有ちし所の諸の苦樂の因を隨念して、善く此の因は皆無常・苦・無我等に越きしを知るなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、既に是れを知り已れば、菩薩の行に於て、色の嬌逸無く、財の嬌逸無く、眷屬の嬌逸無く、自在の嬌逸無く、轉輪聖王を希求する嬌逸ある無く、帝釋天主を希求する嬌逸ある無く、梵世の天王を希求する嬌逸ある無く、護世の天王を希求する嬌逸ある無く、諸の處に生を

【二】前際の因の等。異譯本に「自の宿因たる善根の念力、及び他の宿因たる善根の念力」とあり。

【三】護世の天王。又護國天王とも云ふ。四王天を指す。

如くに癡心を離れたりと知るなり。又復能く知ることとは、彼の是くの如き、是くの如き諸の煩惱の惑に由り、是くの如き、是くの如き諸の衆生の心を覆障することを、菩薩摩訶薩は皆是等に於て實の如くに了知し、既に了知し已るや、彼の是くの如き諸の煩惱の等に隨ひ、出離の正法を而ち宣説するを爲すなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、既に是くの如き他心通智を具して、將に説法せんと欲して大衆の中に往くや、先づ應に一切の大衆の諸の根・行等の差別の相を觀察し、既に了知し已つて、彼の衆生の應に行すべき所の行の如くにして説法を爲すなり。舍利子、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、衆生の根心の勝劣の智を了知するを以て、能く悉く衆生の根心の勝劣の性を了知することを。舍利子、當に知るべし、是くの如き菩薩は、妄に自心の相及び他心の相を輕毀せざるなり。何を以ての故に。此の菩薩摩訶薩は、智を以て簡集する心相續するに由るが故に、是くの如くに、念を以て簡集し、趣を以て簡集し、慧を以て簡集し、覺を以て簡集するが故に、煩惱の習を離れて相續すること斷絶し、清淨にして垢無く、明徹して染無く濁無く躁無く、諸法を擇照し、衆生は一切の心行に隨入し、是くの如くに簡集する心相續する故なり。舍利子、菩薩摩訶薩は、若し能く是くの如き一切の心法の智に悟入せば、是れを菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多を修行する故に、是の他心の神通智業を圓滿に成就せる法を獲たりと名くるなり。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多を修行する時に、宿住隨念作證智の神通智業の圓滿なるを獲得する。舍利子、菩薩摩訶薩は、是くの如き宿住隨念の智力を具する故を以て、十方に遍周せる世界の有らゆる衆生の、一に非ざる種種なる諸の宿住の事を盡して、悉く能く隨念すること、是くの如くなれば、一生・十生・百生・千生、若しくは百の千生・非一百の生・非一千の生、非一百千の生と、是くの如くに次第に皆能く了知するなり。菩薩摩訶薩の又能く了知することは、壞

【一】妄に自心の相及び他心の相を輕毀せざるなり。
【二】異譯本に「自心に住著する所無く、及び彼の他心にも亦住する所無し」とあり。
【三】趣。「趣向」とあり。
【四】異譯本に「諸法を擇照し、乃至、心相續するなり」。
【五】異譯本に「一切の法に於て分明に了解し、一切の有情の心行の差別に於て、極めて能く入解して、心、住する所無きなり。」とあり。

の因を生ずる所の根あり。是の衆生の如きは、未來世に於て當に獨覺乘の因を生ずる所の根あるべきも、現在世に於ては而ち大乘の因を生ずる所の根あり。是の衆生の如きは、未來世に於て當に大乘の因を生ずる所の根あるべきも、現在世に於ては聲聞乘の因を生ずる所の根あり。是の衆生の如きは、未來世に於て當に聲聞乘の因を生ずる所の根あり。是の衆生の如きは、未來世に於て當に獨覺乘の因を生ずる所の根あるべきも、現在世に於ては當に獨覺乘の因を生ずる所の根あるべきも、現在世に於ては聲聞乘の因を生ずる所の根あり。是の衆生の如きは、未來世に於て當に獨覺乘の因を生ずる所の根あり。と、是くの如くに、舍利子、前に説く所の如く、諸べて因行を有ち及び縁を有ちて、未來世に於て一切衆生の當に有すべき是の根を、菩薩摩訶薩は、他心智の通力を以ての故に、若しは因・若しは行・若しは縁を、皆能く實の如くに分別して了知するなり。舍利子、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、未だ成熟せざる諸の衆生の所に於て、正勤を發起して、方便化導して厭倦を生ぜず、彼の衆生の心に隨ひ、能く悟入して正法を説くを爲すことを。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は、善く是くの如き正法の器なるを知り已るや、即便ち是くの如き正法を説くを爲すに、説法の業に常に差失無ければ、是の故に、皆之れを號して不虛説法者と爲せばなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多を修行する故に是の他心智業通證を獲るや、現在世に於ける一切衆生の心及び心法の次第に生起すること、是の無量なる如きを、悉く皆了知するなり。舍利子、云何なるを名けて、心及び心法の次第に轉起するを、而ち能く知ると爲すか。舍利子、菩薩摩訶薩は、諸の含識に於て貪心あらば、實の如くに、貪心ありと知り、貪心を離れば、實の如くに、貪心を離れたりと知り、瞋心あらば、實の如くに、瞋心ありと知り、瞋心を離れば、實の如くに、瞋心を離れたりと知り、癡心あらば、實の如くに癡心ありと知り、癡心を離れば、實の

【七】 心及び心法。心・心所、又は心・心數法に同じ。

は方便ほうべんの因いんに由り、下賤げせんの家に生る。是の衆生の如きには、強かうき方便力ほうべんりきあれば、廣大くわうだいなる善因ぜんいんを成就じゆじゆせずと雖も、然も此の衆生は、更に因力いんりきを植うゑゑて廣大くわうだいなる家に生なぜん。と、是くの如くに一切を皆能みなく了知するなり。菩薩摩訶薩の又能またく了知することは、是の衆生の如きは、欲解よくげ清淨きやうじやうなれども、方便ほうべん清淨きやうじやうに非ず。是の衆生の如きは、方便ほうべん清淨きやうじやうなれども、欲解よくげ清淨きやうじやうに非ず。是の衆生の如きは、欲解よくげ清淨きやうじやうに非ず。是の衆生の如きは、欲解よくげ清淨きやうじやうなれども、方便ほうべん清淨きやうじやうなり。是の衆生の如きは、欲解よくげ清淨きやうじやうに非ず、方便ほうべん清淨きやうじやうに非ず。と。舍利子、菩薩摩訶薩は、是の通力とんりきを以ての故に、是くの如くに一切を皆能みなく了知するなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の靜慮じやうりよ波羅蜜多はらみだを修する時に、是の他心通智たしんつうちを獲る故にて有つ所のものは、一切の衆生の「前際ぜんざいの因根いんこん・心行しんぎやうの智、及び諸行しよぎやうに隨したがひ説法せつぽうする智にして、是くの如きを皆菩薩摩訶薩の他心通智たしんつうちと名くるなり。舍利子、菩薩摩訶薩は是の智を具する故に、彼の後際ございの心を以ても智通ちつうに入り、悉く能く了知することは、是の衆生の如きには、未來世みらいせに於て當に戒かいの因あるべく、現在世げんざいに於ては而ち戒かいの因あり。是の衆生の如きは、未來世みらいせに於て當に戒かいの因あるべく、現在世げんざいに於ては而ち戒かいの因あり。是の衆生の如きは、未來世みらいせに於て當に戒かいの因あるべく、現在世げんざいに於ては而ち戒かいの因あり。是の衆生の如きは、未來世みらいせに於て當に慧えの因あるべく、現在世げんざいに於て是の衆生の如きは、未來世みらいせに於て當に慧えの因あるべく、現在世げんざいに於て是の衆生の如きは、未來世みらいせに於て當に慧えの因あるべく、現在世げんざいに於て是の衆生の如きは、未來世みらいせに於て當に慧えの因あり。と。是くの如くに、一切無量いっせきむりやうの因行いんぎやうを悉く實じつの如くに知り、明了みやうりやうに通達つうだつするなり。菩薩摩訶薩の又能またく了知することは、是の衆生の如きは、未來世みらいせに於て當に出世しゆつせの行因ぎやういんあるべきも、現在世げんざいに於ては世間げんざうの行因ぎやういんあり。是の衆生の如きは、未來世みらいせに於て當に世間の行因げんざうのぎやういんあるべきも、現在世げんざいに於ては而ち出世しゆつせの行因ぎやういんあり。と。是くの如くに、一切を悉く能く了知するなり。菩薩摩訶薩の又能またく了知することは、是の衆生の如きは、未來世みらいせに於て當に大乘だいじやうの因を生ずる所の根こんあるべきも、現在世げんざいに於ては獨覺どくかく乘じやう

【五】、欲解清淨なれども、方便清淨に非ず。異譯本に「意中清淨なれども、工巧清淨なるに非ず。」とあり。

【六】、前際の因根、心行の智。異譯本に「往昔の根因、心の所の智」とあり。

證智の神通にして、何等を復他心の神通智業の圓滿と名くる。舍利子、菩薩摩訶薩は、是の清淨なる他心智通を以ての明了の及ぶ所は、十方の諸の世界の中の有らゆる含識の無量の心相を盡して、菩薩は悉く能く實の如くに了知するなり。諸の衆生の前際の心相・後際の心相・現在の心相の若きも、菩薩は中に於て皆能く曉了するなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、是くの如き他心智通を具足する故に、過去の心智を以て、悉く能く一切の含識の因及び因の差別に隨へる心に解入するなり。

何を以ての故に。能く、是くの如き衆生の是の廣大の因つて生ぜる所の心因、是くの如き衆生の是の中品の因つて生ぜる所の心因、是くの如き衆生の是の下劣の因つて生ぜる所の心因を了知せるに因つて、是くの如きを、一切皆實の如くに知るなり。菩薩摩訶薩の又能く了知することは、是の衆生の如きは施の欲解と相應せる根を有ち、是の衆生の如きは、戒の欲解と相應せる根を有ち、是の衆生の如きは、忍の欲解と相應せる根を有ち、是の衆生の如きは、精進の欲解と相應せる根を有ち、是の衆生の如きは、靜慮の欲解と相應せる根を有ち、是の衆生の如きは、智慧の欲解と相應せる根を有つと、是くの如くに、一切の諸根の相應を、菩薩は悉く能く實の如くに明了するなり。菩薩摩訶薩の又能く了知することは、是の衆生の如きは慈行の根を有ち、是の衆生の如きは悲行の根を有ち、是の衆生の如きは喜行の根を有ち、是の衆生の如きは捨行の根を有つと、悉く能く了知して實の如くに分別するなり。菩薩摩訶薩の又能く了知することは、是の衆生の如きは佛乘の行の根を有ち、是の衆生の如きは獨覺乘の行の根を有ち、是の衆生の如きは聲聞乘の行の根を有つと、是くの如くに一切皆能く了知するなり。菩薩摩訶薩の又實の如くに知ることは、是の衆生の如きには、強き因力あつて、大乘に趣向する善因は成就し、是の衆生の如きには、強き緣力あつて、大乘に趣向する緣因は成就すと、皆能く實の如くに分別して了知するなり。菩薩摩訶薩の又實の如くに知ることは、是の衆生の如きには、強き因力あつて大乘に趣向する善因を成就せり。然るに、此の衆生

【三】是くの如き衆生の、等。異譯本に「或は此の有情の最上の心因―中分の心因―最下の心因を了知す。」とあり。
 【四】是の衆生の如きは、等。異譯本に「此の有情の根性は布施と相應す。」とあり。

訶薩は妙に能く利他の方便に隨順し、無量の善巧にて、自ら其の心を淨くして便ち授記することを善く了知するなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多を修行する故に、天耳の清淨徹聽の力は、諸の聲の相を知つて、或る時は、是くの如き相の聲——應に須く隨喜して聽聞すべき——を具有する者は、菩薩摩訶薩は即便に是くの如き相の聲を聽聞し、或る時は、是くの如き相の聲——應に隨喜して聽聞すべからざる——を具有する者は、菩薩摩訶薩は便ち是くの如き相の聲を聽かざるなり。又、舍利子、菩薩摩訶薩は、若しくは、大衆に處つて說法する時に、衆生の耳識の清淨なる能はざるには、便ち神力を以て彼れに加被して、其れをして說法の音聲を解了せしめ、若しくは、諸の衆生の、一切の法に於て皆領解せんと欲するには、便ち是くの如き法の聲を聞くことを得しめ、若しくは、諸の衆生の、諸法を欣ばずして既に欲解無きには、便ち是くの如き法の聲を聞かざらしむるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多を修行する故にて獲得する、是くの如き天耳通智の聞く所の音響は無量無邊なり。又、舍利子、天耳の性は能く諸法をして皆明淨ならしむる故に、天耳の性は能く智慧の性をして清徹ならしむる故に、天耳の性は能く菩薩をして自ら清淨ならしむる故に、天耳の性は能く衆生の性をして清淨ならしむる故に、天耳の性は極めて善く察察すること其の文字の如くにし、説く所の音詞を而ち能く聽聞して明了に通暢するなり。又能く五趣の生に於ける、有らゆる含識の種種の言詞の音聲の差別に悟入し、菩薩は悉く能く其の類音に同じうして説法を爲すなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩の天耳性の通は、唯能く如來の天耳に趣き向ひて、必定して諸の餘の乘の行には趣かざるなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多を修行する故に、天耳性の徹聽、神通智業の圓滿を獲と名くるなり。

復次に、舍利子、云何なるは、菩薩摩訶薩の、靜慮波羅蜜多を修行する故に是れを獲たる他心作

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多を修行する故に、天耳通智の清淨明達なることは、十方の世界の聖及び非聖の有らゆる音聲を皆悉く聽聞し、復能く分別して錯謬あること無し。聞聽し已ると雖も、聖の音聲に於て欣愛を起さず、非聖の聲に於て嫌嫉を生ぜず。又、聖の聲に於て聽聞して知る故に大慈を獲得し、非聖の聲に於て聽聞して知る故に大悲を獲得するなり。又、十方の諸聲の一時に無量なるも、菩薩摩訶薩は前後の分齊の智力を以て、天耳亂る無くして皆實の如く知るなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、淨天耳を以て周く廣く聽聞することは、十方の一切世界の如來の遊化する刹土の處にて佛薄伽梵の說法する言音を盡して、悉く皆聽聞し、既に聞くを得已るや、念器忘れずして一切を能く持して流散せしめざること、器中に處くに堅く住つて溢れざるが如し。

是くの如くに舍利子、菩薩摩訶薩の如來の聲を聞くことも亦復是くの如く、悉く能く堅不堅の法を了知するなり。又、舍利子、是の菩薩摩訶薩は、法を聽かん爲めの故に、一佛の説く所の法音に於て遍く領受するに、第二佛の説く所の法音に於て、纏縛障礙せらるること非ず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は法を聞くに厭くこと無き故と、復、前後の一切の如來の説く所の法音と雖も、皆能く任持して錯謬あること無ければなり。又、菩薩摩訶薩は、淨天耳を以て悉く能く十方世界の善不善の聲を聽聞し、此の諸聲の中にて顯說する所あるに、時・非時の語の、是の無量なる如きを、皆實の如くに知るなり。舍利子、何等を名けて時・非時の語と爲す。舍利子、諸佛菩薩は善く時宜を知つて、或る時は衆の爲めに廣く法要を説き、或る時は衆の爲めに略して法要を説くに、菩薩摩訶薩は是くの如き諸聲を皆悉く聞き已り、一の音聲を以て、其應する所に隨ひ廣略に開演するなり。又、舍利子、菩薩摩訶薩は、能く或は實に記すべき法ありとも、若し説くを爲さば他を惱さん恐るる故にて記別せず。或は實に記すべきに非る法——謂はく、能く無義を引くもの——なりとも、菩薩摩

【三】堅不堅の法を了知するなり。異譯本に「諸法の平等一味なるを了知す」とあり。

依つて故勤修せるを以て、是の天耳性の徹聽清淨なること人に超過せるを獲得し、二種の聲——人と非人との等——の、若しは遠き若しは近きあるを、皆聞くことを顯現するなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は天耳の性を以て、能く十方の無量無邊なる諸の世界の中の一切の聲響、謂はゆる、天の聲・龍の聲・藥叉の聲・健達縛の聲・阿素洛の聲・揭路荼の聲・緊捺洛の聲・牟呼洛伽の聲・人非人の聲を聞き、及び賢聖の説法の聲・如來の聲・獨覺の聲・聲聞の聲、是等の如き一切の聲響を聞くに、菩薩摩訶薩は天耳性の徹聽の力を以て、悉く現に聞知するなり。又、能く諸の弊惡の趣の有らゆる音聲たる地獄の聲・畜生の聲・焰魔界の聲、是等の如き無量無邊なる一切の聲響を了知するに、菩薩摩訶薩は天耳性の徹聽の力を以て、悉く能く現に聞くなり。又、諸の小蟲、蚊・虻・蠅・蟻、乃至、微細なる有命の類の發す所の聲に隨ひ、菩薩摩訶薩は天耳性を以て悉く能く現に聞くなり。又、舍利子、菩薩摩訶薩の天耳の清淨なることは、諸の衆生の、心の緣する所に於て善・不善を起して發生する語業の若きを、天耳の性を以て悉く能く了知し、又能く或は諸業の善因の攝受なるあり、或は諸業の不善因の攝受なるある、是くの如き一切を悉く能く了知するなり。菩薩摩訶薩は、又能く、或は語業の、貪隨眠の故にて瞋恚の發起せるあり、或は語業の、瞋隨眠の故にて貪し、又能く、或は語業の、貪瞋の隨眠の故にて愚癡の發起せるあり、或は語業の癡隨眠の故にて貪瞋の發起せるあるを了知し、又能く、或は語業の、貪隨眠の故にて貪欲の發起せるあるを了知し、是くの如くに、一切言説あるに隨ひ、音聲の顯す所のものを悉く能く了知するなり。又能く、或は語業の、意解は清淨なれども方便の染礙なるあり、或は語業の、方便は清淨なれども意解の染礙なるあるを了知するなり。是くの如くに、一切有る所の音聲を、菩薩摩訶薩は、無礙なる天耳の大神通智を以て、諸の遠近に隨ひ皆實の如くに知るなり。

見能ふ故に。是の眼は無著にして、一切の色に於て執著無き故に。是の眼は解脱にして、一切の隨眠の眼を解脱せる故に。是の眼は清淨にして、性清徹なる故に。是の眼は無依にして、諸の境界に依る所無きを以ての故に。是の眼は無受にして、煩惱隨眠を執受せざる故に。是の眼は無翳にして、疑惑無き故に。是の眼は無縛にして、障法を離れたる故に。是の眼は明了にして、法明を證せる故に。是の眼は智に依つて行じ、識には非るが故に。是の眼は無染・無恚・無癡にして、一切の煩惱の濁を遠離せる故に。是の眼は勝・決擇分に隨順し、以て聖行の根とする所たる故に。是の眼は無礙相にして、一切の衆生に於て等しく神光を放つ故に。是の眼は清朗にして、聚散を離れたる故に。是の眼は無垢にして、性皎淨なる故なり。又、舍利子、是の菩薩の眼は、佛眼の性虚空の如くなるを引きて退捨する所無し。是の菩薩の眼は、無著・無縛にして、諸の愛・恚に於て皆悉く遠離す。是の菩薩の眼は、義の境界に行くに、等しく正法清淨なる智道を行けど、諸の衆生に於ては善く能く高廣なる大悲に安住す。是の菩薩の眼は、來り求むる者に於ては悲礙する所無し。是の菩薩の眼は、犯戒の者に於ても曾て譏毀すること無し。是の菩薩の眼は、諸の愆失に於ても能く隨つて守護す。是の菩薩の眼は、彼の懶惰なるに於ては能く策進を施す。是の菩薩の眼は、心亂るる者に於ては靜慮分を示す。是の菩薩の眼は、惡慧の者に於ては正慧の眼を施す。是の菩薩の眼は、邪道を行ふ者には正路を開示す。是の菩薩の眼は、彼の下劣を信樂する衆生に於ては、如來の廣大なる佛法を示現す。是の菩薩の眼は、一切智智・高廣なる神通・妙覺の現前、乃至、道場に趣いて、退轉あること無し。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多に依る故に、是の天眼神通作證の智業の圓滿なるを得と名くるなり。

復次に、舍利子、云何にして菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多を修行する故に、是の天耳性の作證智神通を獲る。復、何等を以て神通智業の具足圓滿とする。舍利子、菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に

【七】眼は智に依つて行じ識には非るが故に。

異譯本に「智慧に隨つて、識の境界を離る。」とあり。

【八】勝・決擇分に隨順し等。

異譯本に「能く諸根の幻化するを決擇す。」とあり。

【九】清朗にして聚散を離れたる故に。

異譯本に「清淨にして雜思惟を離る。」とあり。

【一〇】佛眼の性、等。

異譯本に「其の心意に隨つて能く成熟せる佛眼を現前す。」とあり。

【一一】義の境界に行くに、等。

異譯本に「義の境界に於ける修行の法式は、如實と相應し、又、有情に於ては、大悲に安住す。」とあり。

最と爲し、勝と爲し、是の一切の那伽・一切の藥叉・健達縛・阿素洛・有學・無學及び阿羅漢・諸の獨覺等の得る所の眼の如きにも、菩薩の彼の得る所の天眼に於ける作證智通は、最と爲し、上と爲し、尊と爲し、勝と爲し、妙と爲し、明清徹と爲すこと第一なり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、靜慮波羅蜜多を修行する故に獲る所の天眼は、諸の出離の道の發生する所なれば、此の天眼を以ては、極めて善く明了に徹視して顯現する故に、有らゆる十方の無量無邊なる諸の世界中の、龜細・勝劣、若しは近き若しは遠き、一切の諸色を實の如くに明見するなり。又、是の眼を以ては、彼の十方の無邊無際なる諸の世界中の、有らゆる含識の、一切の趣——無色界を除き——に生ぜるに於て、彼の一切の類を、皆能く實の如くに了知し明見するなり。又、是の眼を以ては、善く衆生の有らゆる業因及び業の果報を知り、又善く彼の諸の衆生の有つ所の、諸根及び諸根の因・諸根の差別を了知するに、悉く能く分別して實の如くに了知するなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多を修行する故に、又是の眼を以て、能く十方の無量無邊なる諸佛國土の功德の莊嚴を觀するに、皆目に對して、前にて悉く能く現見す。既に現見し已るや、清淨に所行の戒聚を修治し、即以て成ずる所の佛土の、清淨なる功德の莊嚴する所に迴向するなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は、天眼を具足して尸羅に安住し迴向を圓滿すと名く。又、舍利子、菩薩摩訶薩の天眼は、清朗にして人に超過したれば、實の如くに一切の諸佛及び菩薩僧を明見し、既に現見し已るや、彼の諸の正士の有つ所の軌則・景行・根念・正智・威儀・聖法・解脫の智住にて證得せる總持の勝智・巧妙の智慧・方便の善權、是くの如き一切の勝妙の法行に趣入することを、菩薩は悉く能く實の如くに明見し、便ち勤修して圓滿ならしめんと志すなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、靜慮波羅蜜多を修行する故に得る所の天眼は、清淨にして人に超えたる無量の功德にて成就せらる。何を以ての故に。是の眼は無障にして、一切の色に於て悉く

【六】彼の正士の、乃至、圓滿ならしめんと志すなり。異譯本に彼の正士の正念、正知にて、境界・威儀・道行及び解脫法に通達して總持門を得、智慧・善巧方便に安住したるにて、能く入解すること一切圓滿なり。とあり。

智通・天耳作證智通・他心智作證智通・宿住憶念作證智通・如意足差別作證智通なり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の五種の神通と名け、菩薩は中に於て智業の圓滿なるを具足し成就するなり。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩の天眼性の作證智通にして、云何か神通智業は圓滿なる。舍利子、菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜多を修行する故に、是の天眼智業の圓滿なるを得るは、是くの如き定心は、清淨明白にして、又濁穢無く隨煩惱を離るる故に、含識の死生に於ける作證智の神通に、其の心は善く趣くなり。又、舍利子、是くの如くに、菩薩摩訶薩の天眼は清淨にして、明亮に顯照すること人に超過したれば、諸の含識の、若しは死、若しは生、好色・惡色・善趣・惡趣、若しは劣、若しは勝を觀するに、諸の衆生の業の積集する所に隨ひ、悉く能く了知することは、是くの如くに、淨天眼を以て、諸の衆生の、身の惡行を成就し、語の惡行を成就し、意の惡行を成就し、賢聖を誹謗し、邪見を發起し、彼れ邪見の業に由り因を受くる故にて、身壞れ終つて後に、惡趣に墮ち、地獄の中に生じ、是くの如き衆生の、身の妙行を成就し、語の妙行を成就し、意の妙行を成就し、賢聖を誹謗らず、正見を發起し、彼れ正見の業を以て因を受くる故にて、身壞れ命終つて、善趣、天世界の中に往生することを見るなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、天眼清淨にして人に超過し、諸の衆生の業の積集する所に隨ひ、悉く能く明見すと名くるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、靜慮波羅蜜多を修行する故に獲る所の天眼は、明徹なること最勝にして、諸の含生の得る所の天眼に過ぎたり。舍利子、是れに由つて菩薩の獲る所の天眼は、極めて善く明朗に徹視することは、有らゆる色相の、若しは麁、若しは細、若しは勝、若しは劣、若しは遠、若しは近の、是くの如き諸の境の、皆目前に對するを顯現して、悉く能く明見するなり。又、舍利子、菩薩摩訶薩は是の眼に由る故に、一切の障ある諸の色像等も、菩薩の眼を経るや、徹視・明朗にして皆障礙無し。是の故に、舍利子、此の菩薩摩訶薩の獲る所の天眼は、諸天の中に於て

卷の第四十九

菩薩藏會 第十二の十五

靜慮波羅蜜多品 第十の一

復次に、舍利子、云何なるを名けて、菩薩摩訶薩は精勤に靜慮波羅蜜多を修學して、衆生の爲めの故に菩薩の行を行すと爲すか。舍利子、菩薩摩訶薩は、衆生の爲めの故に、四種の靜慮を具足し勤修するなり。何を謂うて四と爲す。舍利子、菩薩摩訶薩は、欲を離れ惡・不善の法を離れん故に、尋するあり伺するあつて、離れて喜と樂とを生ず。是れを菩薩は、第一の具足せる靜慮に安住すと名く。又、舍利子、菩薩摩訶薩は、尋と伺とを滅せるが故に、内正等に淨く、心一趣なる體にて、尋無く伺無く、定にして喜と樂とを生ず。是れを菩薩は、第二の具足せる靜慮に安住すと名く。又、舍利子、菩薩摩訶薩は、喜を離れたる爲めの故に便ち捨に住し、正念正知にして身に正しく樂を受く。衆聖の説く所の、捨有り念有つて樂に住して喜に住するもの、是れを菩薩は、第三の具足せる靜慮に安住すと名く。又、舍利子、菩薩摩訶薩は、樂を斷ぜん爲めの故に苦を斷ずるを先と爲し、及び憂も喜も没して、苦ならず樂ならず捨念清淨なり。是れを菩薩は、第四の具足せる靜慮に安住すと名く。舍利子、菩薩摩訶薩は、是の靜慮に於て、定心清白にして穢濁ある無く、隨煩惱を離れ、深定を捨てずして能く一切の靜慮の種の作業を發起するなり。是れを菩薩摩訶薩は、靜慮波羅蜜多に依るが故に是くの如き四種の靜慮を勤修すと名く。

復次に、舍利子、云何なるか菩薩摩訶薩の靜慮の作業なる。謂はゆる、神通を成就して智業圓滿するなり。舍利子、云何なるを名けて菩薩の神通と爲し、復何等を以てして智業と爲す。舍利子、通智と言ふは、菩薩摩訶薩の成就する通智に五種を具足す。何等を五と爲す。謂はゆる、天眼作證

- 【一】 欲を離れ、乃至、安住すと名く。異譯本に「應に先づ染欲・過失・諸の不善の法を遠離すべく、彼れに於て尋伺して、喜樂を發生する、是れを初禪定の行に入解すと名く。」とあり。
- 【二】 尋と伺とを、乃至、喜と樂とを生ず。異譯本に「次に當に尋伺を遠離し、内に於て清淨潔白なる心一境性を引生すべく、彼等に於て持して、喜樂を發生す。」とあり。
- 【三】 喜を離れたる爲めの故に、乃至、喜に住するもの。異譯本に「次に當に貪愛の行を捨離し、念・正知にして、唯、妙樂を身に受くべく、正知なりと雖も、彼の聖人の觀察の如くに、捨念・離喜・妙樂の行なる故に」とあり。
- 【四】 樂を斷ぜん爲めの故に、乃至、捨念清淨なり。異譯本に「次に當に、是くの如くに先づ苦樂・適悦の煩惱を斷じ、無苦・無樂にして、捨念清淨なるべし。」とあり。
- 【五】 深定を捨てずして、乃至、作業を發起するなり。異譯本に「等持を離れずして、能く彼の禪定の事業を作す。」とあり。

三菩提を證得して大精進と名けたり。舍利子、是の大精進如來の壽量は半劫にして、其の佛の説法は無量の大會なりしが、一一の集會に十二那由他の聲聞の弟子あつて、純ら阿羅漢なりき。

舍利子、是くの如くに、無倦精進なる菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故に、鄭重・殷勤に是くの如き大菩薩藏の微妙なる法門を尋ね求めて、聽聞し受持し、若しは讀み若しは誦し、思惟研究して義理を開析し、廣く含生の爲めに宣示演説することを、惟れ功めて已まずんば、遂に佛を成ずるに至り、大精進如來應正等覺と名けて世に出興し、廣く法化を宣べて衆生を饒益すること、上に説く所の如きなり。是の故に、舍利子、若し善男子・善女人あつて、大乘の微妙なる正行に安住して、疾く阿耨多羅三藐三菩提を證せんと欲せば、應當に勇猛なる精進を奮發して、鄭重・殷勤に、是くの如き菩薩藏の法を尋ね求め、即ち遇ひ奉つるを得ば恭敬して聽受し、乃至、廣く含生の爲めに宣説・開闡すべし。何を以ての故に。舍利子、勇猛精進なる菩薩摩訶薩は、必ず大菩薩藏の微妙なる法門を尋ね求むることに因つて、方に毘梨耶波羅蜜多を成滿することを得る故なり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は、勇猛精進に毘梨耶波羅蜜多を勤修して、衆生の爲めの故に菩薩の行を行すと名け、若し菩薩摩訶薩にして、精進に是の菩薩の行を修行せば、一切の衆魔の魔民も天子も、此の菩薩に於ては燒亂する能はず、又彼の異道・他論に爲つて能く推屈せられざるなり。

時に當り、彼れに教化せられたる六十八拘胝の天人の大衆の皆成熟せる者は、彼に於て命終し、亦菩薩に隨つて此の佛土に生れ、是の菩薩に與して眷屬となれり。

舍利子、爾の時に當り、此の方の世界に、佛の世に出でて、最高行如來・應・正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と名くるあり。其の佛の壽命は八十拘胝歳を満足し、爾の時の人の壽量は佛と等しかりき。舍利子、最高行如來應正等覺の世に處つて說法するや、一の歳の中に一の大會ありしが、一の大會に皆八十拘胝の諸の聲聞衆ありたれば、其の佛には凡べて八十拘胝の聲聞の大會あつて、純ら是れ大阿羅漢なりき。爾の時に、菩薩は王子として時の名を勇施と曰ひ、多聞・聰叡・勝觀を成就せしが、其の眷屬六十八拘胝の、是くの如き大衆の與めに前後に圍遶せられて、薄伽梵、最高行如來應正等覺の住する所の處に往き、既に彼に到り已るや佛足を頂禮し、遶ること無數匝にして、却いて一面に坐せり。

舍利子、爾の時に、最高行如來は、勇施王子の増上なる信樂に了達し、即便に二四本行相應の微妙なる勝法を開示せり。時に、勇施王子は、佛の開示せる是くの如き法を聞き已るや、豁然として意解けて清淨信を得、心清淨なる故に、即六十八拘胝の眷屬と、信を以て家を捨てて非家に趣き、既に出家し已るや、其の壽量を盡して淨く梵行を修めたり。舍利子、時に勇施王子は、彼の佛の法中にて精進に菩薩道を経め行ひ、其の心に無上菩提を證せんとせる時に、最高行如來は、便ち授記を爲して諸の大衆に告ぐらく、今此の必芻勇施菩薩摩訶薩は、我が滅後に次いて、當に阿耨多羅三藐三菩提を證して世間に出現し、大精進如來・應・正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と名くべし。と。舍利子、是の最高行如來は、彼れに記を授け已つて便ち般涅槃するや、勇施菩薩は佛の滅度を見て戀慕増感し、恭敬して如來の舍利を供養し、廣く靈廟を起して衆生を利益し、正法を住持して開化すると云無量なりしが、其の後久しからずして、阿耨多羅三藐

【四】本行。
本來修むる所の行法を謂ふ。

の故にて、便すまはち不可思議最勝無上なる不忘の總持すまは・多聞の具足を成就するを得、六十年中身に化導を行ひて、村城・王都・國邑、乃至、亭館を巡歴し、處處に化を流して、正法を宣説して衆生の疑を斷じ、是くの如き大菩薩藏の微妙なる法門を開示すること六十歳に過ぎて、天人の一拘馱くていに滿ちたるを、或は聲聞に住し、或は獨覺に住し、或は復無上の佛智に安住することに安置したり。

舍利子、是の得念菩薩は、衆生を化をばし已まはつて命終みんじゆうに臨める時に、復是の言を發せり。願はくば、我れ未來に人中じんぢゆうに生れ、正信にて出家せん。と。彼れ命終みんじゆうし已まはるや、還かへつて此の界の大王の家に生れたり。初めて生れし時に、復天神の大聲に唱へ告ぐるあり。此の有情界うじやうかいに、依法菩薩よほふぼさつは世に出現せり。と。是くの如きを再び返せり。爾の時に、衆人は天の告を聞き已まはるや、便すまはち王子を名けて、以て依法よほふぼと爲せり。舍利子、依法菩薩は、是くの如くに漸漸ぜんぜんに諸根狀を成滿し、二十歳にて、信を以て、家を捨てて非家ひけに趣き、纔わづかに出家し已まはるや、宿習しゆくじゆの力の故にて、便すまはち無間斷むけんだんなる念念にんねんの力持りきぢを成就するを得、故に大菩薩藏の微妙の法門は自然に現前せり。舍利子、依法菩薩は而すまはち苾芻びつしゆと作つて、五十年の中遊行教化するに、一の聚落じゆらくより一の聚落に至り、一の村墟そんこより一の村墟に至り、城じやうより城に至り、館くわんより館に至り、國より國に至り、一の王都わうとより一の王都に至り、諸の衆生の爲めに、是くの如き菩薩藏の法を開示して疑惑を斷除し、五十歳に於て、四拘馱しやくていの諸の天人衆をして、聲聞乘に住し、獨覺乘に住し、或は無上なる諸佛の大乘に住せしめたり。

舍利子、是の依法菩薩摩訶薩よほふぼさつまかさつは、是れより命終みんじゆうして、東方の寶藏如來佛の世界に生れしが、初めて生れし時に、即不可思議無上なる多聞たもんを成就する得、六十八拘馱くていの諸の天人衆を教化けふ・示導して、皆三乘みなに安住せしむることを成滿し得たり。

舍利子、是の依法菩薩摩訶薩よほふぼさつまかさつは、彼の寶藏如來の法中に於て衆生を化をばし已まはり、命終みんじゆうするや還かへり來つて、此の世界、亦蓮華勝佛の土とたりし贍部洲けんぶぢゆうの中に於て、大王の家に生れたり。初めて生ぜる

ひ、躬みづから村城・王都・國邑、乃至、亭館の處處に至つて化を施し、諸の衆生の爲めに是の法を開示し、六十歳に於て天人を教化すること拘臆衆に滿ち、三乘の中に於て皆已に或は聲聞乘に住し、或は獨覺乘に住し、或は無上の大乘に住する者を成熟せり。

舍利子、彼の時に、法行苾芻は衆生を化し已つて命終に臨める時に、復是の言を發せり。願はくば、我れ未來に當に人と爲つて、出家して法を聞くことを得べし。と。既に命終の後に、願力の故を以て、此の世界の臆部洲中に於て王の家に生れたり。彼れ初めて生れし日に、上空の中に於て、天神は唱へて言はく。此の衆生界に、法勝菩薩は世に出現せり。と。又是の言を唱へたり。此の衆生界に法勝菩薩は世に出現せり。と。爾の時に、衆人は天の告を聞き已り、便ち王子を號して以て法勝と爲せり。舍利子、法勝王子は是くの如くにして漸漸に諸根狀を成熟し、年二十にして、淨信にて、家を捨てて非家に趣き、既に出家し已るや、衆人は便ち法勝苾芻と號せり。舍利子、法勝苾芻は大なる念慧力に持せらるる故にて、大菩薩藏の微妙なる法門の自然に現前せるを、精勤に修習し能く善く永く衆生の疑惑を斷じ、六十年中躬ら巡化を事とし、村城・王都・國邑・乃至、亭館を遊歴して、諸の衆生の爲めに是の法を開示し、六十歳に於て拘臆の諸の天人衆を成熟して、悉く阿耨多羅三藐三菩提の心に安住せしめたり。

舍利子、法勝苾芻の將に命終せんと欲するや、復是の言を發せり。願はくば、我れ來世に人道の中に生れ、正信にて出家せん。と。適に願を發し已つて便ち命終に就きしが、還つて此の界の臆部洲中の大富長者の家に生れたり。彼れ初めて生れし時に、復天神の大聲に唱令するあり。此の世界に於て、得念菩薩は今日出現せり。と。是くの如くに再び返せり。爾の時に、衆人は天の告を聞き已り、皆共に之れを號して、名けて得念と爲せり。舍利子、是の得念菩薩の諸根の成滿せる狀は、二十の盛年の者の如くなりしが、淨信にて、家を捨てて非家に趣き、纒に出家し已るや、宿習の力

處に於て結伽趺坐し、我れ若し赤蓮華勝如來より、現前に大菩薩藏の微妙なる法門を聽聞せずば、要す當に此の坐を解かじ、此の處を起たじ。と。舍利子、時に法行 王仙苾芻は、精進堅固に是くの如き誓を發して、結伽趺坐すること七日を過ぎ已れるに、東方の世界に、薄伽梵の、名けて寶藏如來應正等覺と曰へるありしが、法行王仙苾芻の爲めの故に、彼よりして來つて其の身の前に現れ、説いて 八門の句法を開示するを爲し、因つて又告げて曰はく。王仙苾芻、汝今當に八門の句法に隨つて、大菩薩藏の微妙なる法門を精勤に修行すべくんば、則ち諸佛の法は遂ぐるを得難からじ。と。時に王仙苾芻は、佛の教を聞き已るや、精勤して八門の句法を修習したれば、後に於て久しからずして、便ち不可思議無上なる多聞を成就するを得たり。即ち地より起ち、本坐する處を離れ、廣く毘梨耶波羅蜜多を行ぜんと欲する爲めの故に、勇猛に正勤して諸の村城・王都・國邑・乃至、亭館に往き、一一の處より一一の處に至り、展轉して、是くの如き大菩薩の微妙なる法門を宣說顯通すること六十歳に滿ち、是くの如き時に於て教化せる衆生の、天人の等の衆は拘胝に滿ちて、皆三乘の中に安住するを得たり。

舍利子、彼の王仙苾芻は、衆生を化し已つて命終に臨める時に、是くの如き言を發せり。願はくば、我れ還つて此の佛世界の人趣の中に生れて、當に法行を修むべし。と。是の願を作し已るや、便ち命終に就きしが、願力の故を以て、此の世界の瞻部洲中に於て居士の家に生れたり。彼れ初めて生れし日に、便ち是の言を唱へたり。我れ今者に於て當に法行を修むべし。と。又、是の言を作さく。我れ今者に於て當に法行を修むべし。と。爾の時に衆人は、其の述ぶる所に因り本の號を立てて還法行と名くるを爲せり。舍利子、是の法行童子は、形八歳如にして、淨信にて家を捨てて無上の道に趣きしが、出家して久しからざるに、宿習の故を以て、大菩薩藏の微妙なる法門の無上の深義は自然に現前せり。法行苾芻は、是くの如き大菩薩藏に安住して、六十歳の中廣く法化を行

【三】王仙。轉輪王の、出家して五神通を具する者を謂ふ。

【三】八門の句法。異譯本には「八種の法門」とあり。

時に法行王子は漸漸に長大し、諸根狀を成滿し、年二十にして、淨信にて家を捨てて無上道に趣き、既に出家し已るや、獨り幽閑・空寂なる林中に止つて、靜室に安處せり。時に虛空の中に大神の來るあつて、之れに告げて曰はく。苾芻、當に知るべし、汝今若し如來の佛果の、聲稱・高遠・尊上なる法を求めば、但當に大菩薩藏の微妙なる法門を勤めて學び、若し未だ獲ずんば精進を捨つる勿く、專志に尋求して果さざらしむる無かるべし。と。舍利子、時に法行苾芻は、彼の天神より斯の語を聞き已るや、心大に歡喜し、踊躍すること無量に、身意悅豫し、即行いて菩薩藏の法を尋訪せんとて、躬ら村城・王都・國邑、乃至、亭館に詣り、展轉して尋ね求むれども了に得る所無かりき。爾の時に、法行苾芻は、復更に經歷して諸の僧坊に往き、或は苾芻・苾芻尼を見るや、便ち其の所に至り、是くの如き言を作さく。善い哉、仁者。何處に當に大菩薩藏の微妙なる法門の、菩薩摩訶薩は之れに依つて修學せば、無量の諸佛の妙法を出生するものあるべきか。と。彼れ便ち答へて言はく。苾芻、當に知るべし、我れ初より、何等を名けて大菩薩藏の微妙なる法門と爲すかを聞かず。我れ今者に於ては、汝の説くに因る故にて、方に大菩薩藏の法門の名字の、我が耳に來り入るを聞けるのみ。と。舍利子、爾の時に、法行苾芻は、重ねて自ら思念すらく。是くの如き法門、諸佛の妙法をば、應に天神は妄に説く所あるべからず。我れ今に於ては、要す當に勇猛なる精進を捨てず、乃至、未だ大菩薩藏の法門を聞かざる已來は、中に懈廢する無かるべし。と。便ち更に彼の苾芻等に請ひ問はく。赤蓮華勝如來の般涅槃の時の、梵身の地は何所に在りと爲す。汝當に我れに此の地の方面を示すべし。我れ當に彼に往いて精進の業を行すべし。と。彼の苾芻等は即之れに告げて言はく。苾芻、當に知るべし、是くの如き方面は、是れ薄伽梵、赤蓮華勝如來の梵身の地なり。と。爾の時に、法行苾芻は、即其の所に往き、到り已るや頂禮し、右邊すること無數にして、即ち一面に退いて結伽趺坐し、一心に念を攝めて彼の佛に想對して、是の誓言を作さく。我れ此の

器は何よりして來れる。當に知るべし、菩薩の法財の寶篋の中より來れることを。又、舍利子、是くの如き菩薩の寶篋は何よりして來れる。當に知るべし、大菩薩藏の法門の中より來れるに異らざること。是の故に、舍利子、無倦精進なる菩薩摩訶薩の、毘梨耶波羅蜜多を修行せんと欲する爲めの故には、應に極めて至誠に是くの如き大菩薩藏の法門を尋求して、經典を聽聞し受持し、若しは讀み若しは誦して義理を研究し、廣く衆生の爲めに宣說・開示すべし。舍利子、汝又應に知るべし。是くの如き相を吾れ今當に説いて、重ねて其の義を顯すべく、若し諸の無倦精進なる菩薩摩訶薩は、毘梨耶波羅蜜多を修行せん故に、我が説を聞き已らば、是の經典に於て、應に極めて至誠に義理を尋求して、他の爲めに開示すべきことを。舍利子、乃ち往古の世に、阿僧企耶劫の廣大・無量・不可思議にして度量すべき難きを過ぎ、乃至、是等の數に過ぎ、又復是等の量に過ぎて、爾の時に當り、此の世界に於て、佛の出現して、赤蓮華勝如來・應・正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と名くるありき。舍利子、彼の佛の聲聞の弟子は、一大集會に其の數具に八十拘胝を滿し、皆是れ大阿羅漢にして諸漏已に盡き、乃至、諸心自在なる最勝波羅蜜を獲得したり。舍利子、彼の佛の壽量は八十歳を滿して便ち般涅槃し、正法世に住ること五百歳を經、像法の世に住ることも亦五百歳にして、舍利の流布せることも、我が今者般涅槃の後に供養せらるる舍利の當に流布すべき相の如かりき。舍利子、彼の佛の世を去つて涅槃に入れる後、將に百年に滿たんとせるに、一菩薩の、他方の界に終つて此の世界の大王の家に生れしありしが、適に初めて生れ已るや、便ち是の言を唱へたり。奇なる哉、今は非法の處に生れたり。と。又、是の言を作さく。奇なる哉、今は非法の處に生れたり。と。是くの如くに唱へ已つて、復是の言を作さく、我れ今に於ては、當に法行を行すべし。我れ今に於ては、當に法行を行すべし。と。爾の時に、衆人皆疑怪を生じ、其の述ぶる所を以て、同じく共に之れを號して、名けて法行と爲せり。舍利子、

聞き已つて、但一切の貪・瞋・癡等の諸の大重病をして、皆悉く除滅せしむるのみに非ずして、是くの如くに除滅することは、一百の衆生のに非ず、一千の衆生のに非ず、一百万の衆生のに非ず。是くの如くに除滅することは、一拘胝の衆生のに非ず。一百万拘胝・千拘胝・百千拘胝の衆生のに非ず。是くの如くに除滅することは、一拘胝那庾多の衆生のに非ず、一百万拘胝那庾多・千拘胝那庾多・百千拘胝那庾多の衆生のに非ず。一童子・一童子羅の衆生のに非ず。是くの如くに除滅することは、乃至、不可説・不可説の衆生の有つ所の三毒の大患を、皆除滅することを得るなり。

復次に、舍利子、大雪山の中に、大藥王の、名けて 毘伽摩と爲すありて、若し其の聲を聞かば、一切の世間の猛烈なる毒熱は皆悉く消滅し、若しくは藥の住る所の百踰繕那は、其の威の盛なる故に、諸の惡毒をして皆勢力無からしめ、若し藥王を以て大螺鼓に塗り、若しくは撃ち若しくは吹くに、其の聲の及ぶ所の諸有の衆生の、或は毒藥を飲み、或は毒螫・毒塗・毒刺の衆の毒惱を被る者も、但是くの如き螺鼓の聲を聞き、暫く耳に至るのみにて、一切の諸毒は皆除滅することを得るが如し。舍利子、是の毘伽摩の大妙藥王の如きは、一切の世醫は皆識る能はずして、唯時縛迦大醫王は、方に色性を知るをば除く。舍利子、無倦精進なる菩薩摩訶薩も亦復是くの如し。毘梨耶波羅蜜多を行ぜん故に、是くの如き無上正法の阿闍陀の膏藥を積集すること、聲聞・獨覺の法とは共ならず。唯、如來、無上正法の大醫の王の、能く衆生の有らゆる病者を滅するに、無上正法の阿闍陀の膏藥を以て、用ひて大法の螺に塗り、塗り已りて之れを吹いて、聲を三千大千世界に告ぐるに、其の中に有つ所の一切衆生、乃至、不可説不可説等は、是の聲を聞き已るや、貪・瞋・癡等の諸の重大患は、悉く寂滅するを得て遺餘ある無きを除く。

復次に、舍利子、是くの如き無上正法の阿闍陀の膏藥は、何所よりして此に來集せる。舍利子、當に知るべし、是くの如き膏藥は、大菩提の法器の中より來れることを。又、舍利子、彼の菩提の

【三】 毘伽摩 (Vigama) 普去
などと譯す。

復次に、舍利子、無倦精進なる菩薩摩訶薩の、毘梨耶波羅蜜多を修行する時には、當應に是くの如き正心にて修學すべし。舍利子、世間には、諸醫の、世界に充滿するありと雖も、三種の大患を了知する能はず。何を以ての故に。彼れは皆不善又無智なる故にて、貪・瞋・癡等の三種の大患を識る能はざればなり。舍利子、彼の無智の醫は、惟三種の大患を識らざるのみに非ず、又、三大の良藥の、三患を對治することを了知せざるなり。何等を三と爲す。謂はゆる、貪欲の大患を不淨の良藥にて對治を爲し、瞋恚の大患を慈心の良藥にて對治を爲し、愚癡の大患を緣起の良藥にて對治を爲すことを了知する能はざるなり。舍利子、是くの如き諸醫は、惟能く一二の別の病を療治すれども、善く一切の衆病を治する能はず。惟能く暫く少時の降損を治すれども、病を盡し畢竟じて除瘥することを爲すに非るに、菩薩摩訶薩は是くの如き念を作さん。我れ今、毘梨耶波羅蜜多を行ぜん故に菩薩道を修すれば、豈當に是の諸醫の如きに隨學すべけんや。我れは當に、諸佛世尊、善く諸法の無上に達せる大醫の王に依り隨つて、畢竟じて一切の病者を療治すべし。是の大醫王に我れ今隨從し依憑して修學す。既に修學し已らば、我れは應に善く一切の病苦を治すべく、豈當に別別の諸病を療治すべけん。我れは應に畢竟じて衆病の本を除くべく、豈當に暫く瘥すのみにて病の本を除かざるべけんや。と。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、復是の念を作さん。我れ應に是くの如き無上の正法の阿闍陀の膏藥を積集すべく、當に一切の衆生をして、藥の聲を聞き已るや、貪・瞋・癡等の極重大患を自然に消滅せしむべし。と。是の故に、舍利子、無倦精進なる菩薩摩訶薩の、毘梨耶波羅蜜多を行ぜん故に、是くの如き無上正法の阿闍陀の膏藥を積集して、一切の病ある衆生に塗傳することは、聲聞・獨覺の法と共ならず。惟、如來、無上大醫の王の、善く一切法に達せる者の、無上の正法たる阿闍陀の膏藥を以て、遍く吹く所の大法の藥に塗り、是くの如く塗り已るや、便ち就いて之れを吹き、其の聲遍く三千大千世界に告ぐるに、中に於て有つ所のものは、一の衆生の是の聲を

摩訶薩は、諸の生死の了知すべき難きに於て、身に生あり死あるを示現するなり。何を以ての故に。諸の衆生を成熟せんと欲する爲めの故に、終盡しんじんを示現すれども、然も此の菩薩摩訶薩は、諸法には終盡ある無きを了知し、生有るを示現すれども、諸法には起作ある無きを了知し、生起を現すと雖も、諸法の畢竟びつぎやうして無生なるを了知すればなり。又、此の法身は、法を以て食と爲し、法力にて持せられ、法の本願力に依止する故に、功用ある無くして衆生を成熟するなり。舍利子、法身の菩薩摩訶薩の是等の如き相は、皆無倦精進むけんしんじんに毘梨耶波羅蜜多びりやばらみだを修行せる故に由つて、便ち證入せるなり。と。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

身は金剛の損すべからざる如くなるに 時を知り化を設けん故にて身を現するなれば 毒惡刀火も燒害するに非ずして 燒害を見る者は化す所の衆のみ 病あるに則ち良藥たるを見 饑渴の衆生には飲食と見ゆれども 諸法の性には分別無きを以て 法身も無身も一の理證なり 一の法も縁より生ずるを了知せば 摩納婆意生等無く 衆縁有る故に苦輪連れども 衆縁無き故に苦輪斷つなり 色の堅ならざるは衆沫の如しと了し 諸受の浮泡に等しきを思惟し 想は熱時の陽焰の動の如く 芭蕉の諸行と應に觀察すべし 世の幻舞戯を善くする者の刹那に便ち諸の色像を現する如く 識の用も亦是くの如しと了知し 智者は彼れに於て皆願ふ無きなり 世財は箭の弦を離れたるが如く 復電の飛び山水の瀑するに似 暫く乘れども還散すること空の雲に類せるを知り 智者は彼れに於て皆願ふ無きなり 諸有に都べて衆生ある無きも 未だ會て天の諸樂を受けて 復地獄に墮ちて更に貧苦せずんばあらざるを佛子は觀じ已つて天を求めざるなり 彼れの心の依る無きこと空に遊ぶに似 有に非ず無に非ずして依止を離れ 諸有に生ずると雖も生死無きは 老死無き 大我を證せる故なり。

【一】 諸法の性には、乃至、理證なり。

【二】 異譯本に「乃至、法界には分別無く、惟、一法身にして、餘の身無し」とあり。

【三】 摩納婆意生等無く、異譯本には「人無く、我無く、孺童無し」とあり。

【四】 大我。

又、眞我と云ふ。佛の證する所の涅槃の、一切の繫累を離れて、萬法に於て自在なる所を謂ふ。異譯本には「大法身」とあり。

既に證するを得已れば、又能く蘊・界・處の身を示現するものにて、當に知るべし、是の身は法身の所顯なることを。是の故に、舍利子、一切の衆生にして、若し是くの如き法身に備遇するあつて、若しは見若しは聞かば、即皆調伏せられ、彼の身に觸るる時には、能く衆生をして諸の義利を作さしむるなり。

復次に、舍利子、時縛迦大醫王の如きは、衆藥を衆集して和して形相を爲し、女像の妍質・華美・淨色なるを變成して人を悅ばすは、是の醫王の善き能作の故にて、妙に善く成就し、善く嚴節を加ふるに由れるなり。舍利子、是の藥女像には、思慮無く又分別無しと雖も、而も能く往・來・住止若しは坐若しは臥を示現し、有らゆる豪貴たる大王・王子・大臣・長者及び諸の小王の、病惱ある者の、時縛迦大醫王の所に至るや、爾の時に、醫王は其の治する所を觀、即藥女を以て賜ひて九匹と爲すに、彼の諸人等は既に患るるを蒙るや、便ち藥女を執へ、暫く身もて交觸するに、一切の患苦は自然に消除し、無病・安樂にして變異ある無きなり。舍利子、此の時縛迦大醫王の、世間の諸病を療治する妙智は、餘に有る世醫の與に等しき者無し。舍利子、法身の所顯たる菩薩摩訶薩も亦復是くの如く、乃至、一切衆生の、若しは男・若しは女・童男・童女の、貪・恚・癡の熱惱の病ある者、菩薩の所に至り、暫く其の身に觸るるや、一切の病苦は皆消滅するを得、又其の身の、諸の熱惱を離れたるを覺るなり。何を以ての故に。諸の菩薩摩訶薩の、本發せる大願の善清淨なる故に由るなり。

復次に、舍利子、法身の菩薩摩訶薩は、搏食を食ふ故に由つて身は安住を得るにはあらず。復、一切の飲食の本より有る所無きを了知すと雖も、衆生を慰む故にて食を受くるを現し、現に之れを食ふと雖も、情として耽著する無く、其の自身に於て未だ曾て願戀せざるなり。何を以ての故に。法身の力は、退く無く減る無く、飲食を以て其の身を安住せざればなり。又、舍利子、法身の菩薩

【七】搏食の搏は、搏食の誤記なるべし。

菩薩の肉を食噉せる者は、是れより已來、乃至、一人たりとも惡趣に墮つるある無く、彼にて命終るや皆三十三天に生れしが、宿業の力の故にて、我れと俱に生ぜり。舍利子、我れ爾の時に於て、復彼の天の爲めに、其の應する所に隨ひ、法化を敷演し示教して讚喜せしめ、皆聲聞乘の中或は獨覺乘に安住し、或は阿耨多羅一切智の乘に安住せしめれば、是等の衆の如きは、我が法を開ける故にて、或は已に般涅槃し、正に般涅槃し、當に涅槃すべき者あり。舍利子、汝觀ぜよ。是くの如くに、法身に安住せる菩薩摩訶薩は、毘梨耶波羅蜜多を行ぜん故に、是くの如き大神通力を成就し、是くの如き大威徳力を成就し、是くの如き大勢の力を成就して、乃ち能く但一身を捨つる惠にて、大に無邊の衆生を成熟して、皆三乘に住して不退轉を得しむることをと。

爾の時に、長老舍利子は、佛に白して言はく。云何が、菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜多を行ずる時に精勤して修獲する法身の相なる。唯然り、世尊、願はくば解説を爲したまへ。と。佛、告ぐらく。舍利子、菩薩摩訶薩の法身の相は、生無く死無く、堅固にして壞り難きこと、猶金剛の如く不可思議なり。而して諸法身の菩薩摩訶薩は、身壞の衆生を化度せんと欲する爲めの故に、壞身を現じ、又諸身の不壞なる者を化せんと欲して不壞身を現す。然り、此の法身の圓成具足せるは、火の燒く所に非ず、刀の割き能ふに非ず、彼の金剛の如くに堅固にして壞れ難きなり。舍利子、法身に安住せる菩薩摩訶薩の、毘梨耶波羅蜜多を行ぜん故に無倦精進なるや、功用あるに非ずして、但其の身を以て則ち能く無量の衆生を成熟し、其の心の思量・分別を假らざるは、即ち此の菩薩の身は、自ら能く諸の身相を知了して自身の眞如法性に隨入し、自身の眞如は諸法の眞如に隨入し、諸法の眞如は自身の眞如に隨入し、自身の眞如は諸佛の眞如に隨入し、諸佛の眞如は自身の眞如に隨入し、自身の眞如は去・來・現在の眞如に隨入し、去・來・現在の眞如は自身の眞如に隨入し、又、過去の眞如は未來の眞如に違はず、亦、未來の眞如は過去の眞如に違ふにも非ず、又、過去の眞如

行はざりしことを。我れは亦、婦人・丈夫・童男・童女・奴婢・僕使の爲めに、身肉の施を行はざりしことを。我れは亦、園林・池苑・宮殿・樓觀の爲めに、卿の病苦を愍んで身肉の施を行はざりしことを。我れは亦、卿等、當に知るべし、我が本、卿の病苦を愍んで、身肉の施を行へる所以は、衆生をして不善の業を離れしめん爲めなりしことを。卿等、但能く我が爲めに、殺生の業を永く斷ち永く離れ、不與取の業を永く斷ち永く離れ、欲邪行の業を永く斷ち永く離れ、是くの如くに虚誑語の業・離間語の業・龜惡語の業・綺飾語の業・貪欲・瞋恚・諸の邪見の業を永く斷ち永く離れよ。卿等、此れに於て永く斷ち離れば、是れ利益たり、是れ報恩たり。と。舍利子、爾の時に、帝釋は復大衆の爲めに伽陀を説いて曰はく。

我れ珍寶の聚の 其の量の高廣の 迷盧に等しきをも求めん爲めには非ず 亦天の玉女 及び諸の衣食牀敷の事を求めん爲めならず 蘇摩の大神に奉せんと欲せば 但當に同和合を尊重し 慈心を展轉して相ひ敬視し 専ら淨妙なる十業道を修むべし 卿等當に十の業道に於て但當に和合して堅く防ぎ守るべし 是れを大に法を興す供養と名く 菩薩は世の財を求むるに非る故に 我れは諸の世の財寶たる 芳羞飲食妙衣服 象馬車乘牛羊等 牀敷姪女資生の具を用ひざるなり 卿等但共に同じく和合して 善く清淨なる十の業道を持ち 展轉して大慈心を發起して 彼れ此れ利義の意を熏修せよ と。

舍利子、爾の時に、瞻部洲内の無量の衆人は、我が是の勸發の言を説くを聞き、恩徳を感じざる故に、我が足を頂禮して、皆悉く十種の清淨妙善なる業道を受持せり。舍利子、我れ爾の時に於て、彼の大衆の爲めに、廣く正法の示教を宣べて讚喜せしめ、便ち天の身を隠して世に現ぜざりき。是くの如くにして、舍利子、我れ正に往昔の世の時を憶念するに、瞻部洲中の有らゆる人民の、蘇摩

【二五】迷盧(Meru, Sumeru) 蘇迷盧山の略なり。

舍利子、爾の時に、瞻部洲内の一切の衆生は、病逼る故に、段段に菩薩の身を割き截り、或は擔ひ持ち去り、或は就いて食ふ者を爲して、害を加へらると雖も、願力の故を以て、隨つて割けば隨つて生じて、缺減ある無きなり。舍利子、是の諸の衆生は、蘇摩菩薩の肉を噉食し已るや。一切の病患は悉く皆除滅し、病既に除瘥したれば、復衆生をして、心に安樂を得、形に變易無からしめたり。是の諸の衆生は、身心安樂なるや、聲を展轉して遍き瞻部洲に告ぐらく。來つて肉を食し已らば、病は皆除愈して、變易ある無く身心安樂ならん。と。舍利子、爾の時に、一切の瞻部洲中の人民の類の、若しは男・若しは女・童男・童女の、菩薩の肉を食ひて病の除愈せる者は、是の菩薩に於て深く恩惠を懷き、競うて自ら思惟すらく。是の蘇摩は極めて重恩あり。我が病苦を除き、我れに安樂を施して變易無からしめたり。我れ當に云何か施設し供養して、斯の厚澤に酬ゆべきか、と。是の念を成し已り、咸く共に集會して、俱盧大城の蘇摩菩薩の本身の所に詣り、既に彼に到り已るや、皆共に圍遶し、其の恩を感戴して自ら勝ふる能はず、伽陀を説いて曰はく。

仁は舍宅を爲し救護を爲し 仁は良醫妙藥者を爲せり 惟願はくは哀憐して教勅を垂れたまへ
我等如何にして供養を修せんかを と。

舍利子、我れ爾の時に於て、是の本身を爲して衆生の是くの如き病苦を救濟し、是の無量なる諸の衆生等の我が重恩を衡み、我れに歸依し已れるを知るや、便ち現す所の蘇摩の本身を滅して帝釋の形に復し、衆生の前に住して、威光顯盛にて之れに告げて曰はく。卿等、當に知るべし。若く病苦を爲し、我が身肉に由つて除差を得たるに、卿等恩を懷き、將に報ぜんと思はんとせば、卿等當に知るべし、我れは本、村城・館邑・王都・國土・田宅・舍屋・住處等の事の爲めに、卿の病苦を慇んで身肉の施を行はざりしことを。我れは亦、金・銀・末尼・瑠璃・眞珠・珂貝・璧玉・珊瑚等の寶の爲めに、身肉の施を行はざりしことを。我れは亦、象・馬・牛・羊・放牧・畜産の爲めに、身肉の施を

誨に隨ふべし。と。舍利子、我れ爾の時に於て、淨天眼の、人天に超過せるを以て、諸の衆生を見るに、種種の疫病其の身を逼惱し、煩冤纏繞して救濟ある無く、又、天耳の、清淨にして人に過ぎたるを以て、衆生の號訴の聲を徹聽するに、極めて悲怨を爲して、酸楚なること聞き難し。舍利子、我れ彼の時に於て是れを見聞し已るや、是の衆生に於て深く大悲を起し、卽是の念を作さく。一何ぞ苦なるや。是くの如き無量無邊なる衆生は、是の重病に遭ひながら、舍無く、宅無く、救無く、護無く、歸依する趣無く、能く療する者無し。我れ今決定して、諸の衆生の爲めに、舍となり、宅となり、救となり、護となり、歸依する處となり、醫療者となりて、必ず病惱をして普く皆平復せしめん。と。舍利子、我れ爾の時に於て、便ち帝釋の高廣なる形を隠し、瞻部洲の俱盧の大城より遠からざるに於て、化生なる大衆生の身を受け、名けて蘇摩と曰ひ、既に生を受け已るや、虚空の中に住し、伽陀の頌を以て、遍く瞻部洲の内の有らゆる衆生に告げて、其の頌を説いて曰はく。

俱盧の大城を遠からずと爲して 大身の者あつて蘇摩と名く 若し衆生の其の肉を噉ふあらば 一切の病惱は皆除愈せん 彼れに瞋恚と諸の忿害と無く 良醫と作らん爲めに瞻部に生れ たらば 汝當に欣踊して驚き疑ふ勿く 意に隨ひ肉を割きて衆惱を除くべし と。

舍利子、爾の時に、瞻部洲内の有らゆる諸城、八萬四千の村落・市肆、又無量千の一切の含識の、病惱を爲せる者は是の聲を聞き已るや、一時に皆俱盧大城なる蘇摩菩薩の大神の所に往き、競うて利刀を以て、彼れの身肉を、或は割き或は截りたり。舍利子、蘇摩菩薩は、精進行を行ぜんとす、當に割かるる時に、其の身肉に於て大音聲を出して、伽陀を説いて曰はく。

若し此に能く實に菩提を證せば 智藏は當に盡くる無きを成すべしと 我が發せる諦誠の言に隨ひ 亦願はくは身肉も常に盡くる無からんことを と。

【一】 俱盧(Krāva)。

【二】 蘇摩(Suma)。
異譯本に「蘇牟」とあり。

を息滅し能ふなり。

復次に、舍利子、我が先に説くが如く、法身を證得し成就せる菩薩摩訶薩の、願力にて身を持して良藥を爲し、用ひて無量不可説の衆生の煩惱の熱病を滅する、是の等の如き相を、吾今更に説かん。汝當に諦に聽くべし。舍利子、我れ往昔を念ふに、無數劫を過ぎて佛の世に興つて名けて、然燈如來・應正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と曰へるありき。

舍利子、爾の時に、然燈如來應正等覺は、我が爲めに授記して是くの如き言を作さく。汝、摩納婆、當來の世の阿僧企耶劫を過ぎたるに於て、當に佛と作るを得、釋迦牟尼如來應正等覺・乃至・佛薄伽梵と號すべし。と。舍利子、彼の然燈佛の我れに記を授け已るや、爾の時に、便ち法身の成就を證せしが、佛の滅度の後に、我れは帝釋と爲り微妙眼と名け、三十三天に於て大自在を得、大神道を具し、大威徳をもち、宗族熾盛なりき。舍利子、是の時、瞻部洲の中に八萬四千の大城あり、無量千の村邑、聚落、市肆の居止あり、復無量なる百千拘胝那庾多の一切の衆生あつて、是くの如き處に住して、人物繁く擁り、極めて興盛を爲せり。舍利子、爾の時に當り、大疫病あつて中劫に出現し、多く衆生あつて重病に遭遇し、身體の潰爛・癰腫・瘰癧・疥癬・惡瘡・風熱・痰癘は互に相ひ違返せり。要を以て之れを言はば、一切の病苦は畢く集らざること無し。時に於て、復無量の百千の諸の醫藥の師あつて、是くの如き病苦を治療せんと欲するを爲し、勤めて功用を加へ、極つて疲倦を致せども、衆生の病は愈ゆる者ある無かりき。舍利子、彼の諸の無量の病苦の衆生は、良醫に遇はず、病に爲つて弊られ、救護ある無く、歸趣ある無く、皆共に呼嗟するに聲を失して號哭し、涕泣横流して、是くの如き言を作さく。我れ今、此の無量なる重病を受くるに、何處にか當に天・龍・藥叉・健達縛及び諸の羅刹・人非人等の、大慈悲を以てして、能く見て我が病を除くを爲す者有るべきか。若し能く我が病を除く者あらば、我れ當に一切の財寶を慍ますして、厚く其の恩に報い其の教

【三】摩納婆(Maravata)。摩納ともあり、普通に傭童と譯す。婆羅門の青年の稱なり。

を作らんと。一の衆生の貪・瞋・癡の熱惱の病を懐くあるは、我れ醫王として勤めて功用を加へば、當に除滅を爲すべし。と。是くの如くにして、舍利子、設使ひ彼等一一の諸醫は、皆清涼なる妙藥を持つこと、其の量の高廣、蘇迷盧山王の如くにして、並に、又勤めて功用を加へて、將に一の衆生の貪・瞋・癡の惱を滅さんとし、又彼の諸醫は、是の清涼の藥分の山王を、摩して以て末と爲し、其の劫壽を盡して一の衆生に塗り、一切の醫王は、其の功術を盡して、並に悉く疲倦し、乃至、藥分の山王を末に用ひて塗り盡すとも、皆亦一の衆生の貪・瞋・癡等の諸の惱熱の病を滅する能はざるなり。

復次に、舍利子、諸佛如來の、世に出興して、諸の衆生の煩惱の病を具するを見るや、如來は但一不淨觀を説ける無上の正法の阿闍陀の膏藥を、用ひて以て塗傳するに、無量の衆生の貪欲の熱惱は除滅せざる無し。是くの如く、無量の百の衆生、無量の千の衆生、無量の百千の衆生、無量の拘胝の衆生、無量の百拘胝・無量の千拘胝、無量の百千拘胝の衆生、無量の拘胝那庾多の衆生、無量の百拘胝那庾多・無量の千拘胝那庾多・無量の百千拘胝那庾多の衆生、是くの如くにして、無量の薑羯羅の衆生、無量の頻跋羅の衆生、乃至、無量の不可説・不可説の衆生も、一の不淨觀を聞く故を以て、貪欲の熱惱は同時に靜息するなり。舍利子、如來は但一慈悲觀を説ける無上の正法たる清涼の妙藥を、用ひて以て塗傳するに、無量の衆生の瞋恚の除滅することを得、乃至、不可説・不可説の衆生の瞋恚の除滅することも、亦復是くの如きなり。舍利子、如來は但一因緣觀を説ける無上の正法たる清涼の妙藥を、用ひて以て塗傳するに、無量の衆生の愚癡の熱惱は皆止息することを得、乃至、不可説・不可説の衆生の愚癡の止息することも、亦復是くの如きなり。又、舍利子、法身を證得せる菩薩摩訶薩も、亦大願を以て自ら身を嚴持して法の良藥を爲し、善く無量の衆生の三毒の熱惱を息滅し、乃至、不可説・不可説の無量の衆生の、貪・瞋・癡等の諸の惱熱の病

【一〇】 薑羯羅 Kankary。
數の一名なり。
【一一】 頻跋羅 (Vidyurya)。
同じく數量の名稱なり。

しむるに非ず。惟、如來、無上勝妙の大法醫王、及び法身を證せる菩薩摩訶薩の、大願力を以て自ら身を嚴持し、良藥を爲し已つて、乃ち能く一切の衆生の貪・瞋・癡等の諸の熱惱の病を除滅するを除くのみ。

復次に、舍利子、汝は能く是くの如き法門を解了するや。謂はゆる、一切の衆生の貪・瞋・癡の病は餘の醫藥にては瘥愈し能ふに非ずして、惟如來無上の醫王と法身の菩薩とのみあつて、大願力を以てして除滅し得ることを。舍利子、汝が意に於て云何。衆生界多きや、地等の界多きや。舍利子、佛に白して言はく。世尊、我れ佛の所説の妙義を解する如くば、衆生界の多きことは大地球には非ず。亦、水界・火界・風界も比類し能ふ所に非るなり。佛言はく。是くの如し、是くの如し。汝の説く所の如く、衆生界の多きことは大地球には非ず。乃至、衆生界の多きことは彼の風界にも非るなり。舍利子、我れ今更に是くの如き相を説かん。舍利子、諸の衆生の身形は微細にして觀見すべき難きものあつて、佛法外の諸の神仙の眼の及び能ふ所に非ず。亦、聲聞・獨覺の天眼の境界にも非ず。惟是れ如來の清淨なる天眼のみ照了し能ふ所なり。舍利子、如來は淨天眼を以て、明に車輪の量の如くに見る有らゆる微細なる含識衆生の其の數の無量なることは、三千大千世界に於ける人天の趣の、諸の受生の者よりも多きなり。舍利子、是くの如き無量無邊なる諸の有情界、乃至、三千大千世界の一切の有情の、若しは卵生、若しは胎生、若しは濕生、若しは化生、若しは有色、若しは無色、若しは有想、若しは無想、若しは非有想・非無想・若しは可見、若しは不可見、是くの如くにして、乃至、有らゆる假名にて建立せる諸の有情界を、設使ひ一刹那、或は一羅婆、或は一牟呼多の頃に於て、前に非ず後に非ずして皆人身を得、彼の諸人等は並に良醫を成し、壽命一劫にして、方術を明に練り、醫道に通じ閑ひ、大醫師として善く衆病を療すること、皆今者の時の縛迦醫王の如くならしむとも、舍利子、彼の醫王は、同じく共に集り議して、是くの如き言

【二】法身を證せる菩薩摩訶薩。又、菩薩大士とも云ふ。一分の無明を斷じて一分の法性を顯現せる者にして、初地以上の菩薩を謂ふ。

【三】卵生 (Anjāna) 卵殼中に體を成して後、出生する者にして鳥類此れに屬す。

【四】胎生 (Jarayujā) 母體に在つて體を成して後に出生する者にして、人獸の類此れに屬す。

【五】濕生 (Sañjivandhā) 濕に依つて生を受くる者にして一般の蟲類は此れに屬すとせらる。

【六】化生 (Upapātika) 生を受くるに、依託する處無く、唯、業力にて忽として現する者にして、諸天と地獄の有情と劫初の衆生と此れに屬すと云はる。

【七】羅婆 (Rāpa) 刹那 (Kāṇa) の如く瞬間をいふ。

【八】牟呼多 (Muhuta, Mānūta) 牟呼羅多と同じ。

【九】縛迦 (Dhruva) 時縛迦の略にして耆婆と同じ。

卷の第四十八

菩薩藏會 第十二の十四

毘梨耶波羅蜜多品 第九の四

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、精勤無倦に毘梨耶波羅蜜多を修習する時には、諸の衆生に於て病者の想を起すなり。何を以ての故に。一切の衆生は常に是れ病者にして、恒に三種の熱惱に爲つて燒き惱さるる故なり。舍利子、何等を名けて三種の熱惱と爲す。謂はゆる貪欲の熱惱・瞋恚の熱惱・愚癡の熱惱なり。菩薩摩訶薩は是くの如き念を作さん。我等、今は應に是くの如き無上正法の阿闍陀の膏藥を以て、是くの如き熱惱の衆生に塗傳すべし。何を以ての故に。是の無上正法の清涼・微妙なる膏藥を、用ひて塗傳する故に由つて、一切の衆生の貪・瞋・癡等の諸の熱惱の病は、皆悉く除滅すればなり。と。舍利子、諸の菩薩摩訶薩は、是の正法の良藥を以て衆生に塗傳して、三毒をして滅せしめんが故に、是の菩薩摩訶薩は無倦正勤に毘梨耶波羅蜜多を修行することを、應に是くの如くに學ぶべし。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜多を修行するに、其の相は無量なり。我れ今當に説くべし。舍利子、菩薩摩訶薩は常に是の念を作さん。謂はゆる、一切の衆生は皆是れ病者なり。何を以ての故に。三毒に常に熱惱せらるる故に由つてなり。若く衆生あつて地獄に生ずる者も、亦是くの如き貪・瞋・癡等に爲つて燒惱せらる。是くの如くに、傍生に生ずる者、焰魔世界・人中・天上の有らゆる衆生は是の三毒に爲つて燒惱せざるは無し。若く衆生あつて疑・見等の諸の煩惱を成ずる者も、亦常に貪・瞋・癡等に爲つて燒惱せらるるなり。と。舍利子、是の諸の衆生の煩惱の病を具するや、餘の良醫及び勝妙の藥を若しは塗り若しは傳くること、能く貪・瞋・癡等の熱惱をして靜息せ

【一】阿闍陀(Ashtada) 無病・不死などと譯す、醫藥の義なり。

する菩薩摩訶薩は、是くの如き慳・嫉等の相、惡趣に往く業を聽聞し、既に是れを聞き已るや、便ち自ら家慳等の事を行はざれば、況んや復他に此の法を開示することを爲さんや。舍利子、是くの如きを名けて、菩薩摩訶薩は精勤・無倦にて毘梨耶波羅蜜多を修行すと爲し、應に是くの如くに學ぶべきなり。」

修して趣く天道の法を樂はず、又、常に相ひ言うて鬪訟・譏刺・離間・諍論する事を勤修し、復、樂うて心の不淨信なる諸の惡友を攝受し、空靜の林を捨て村落の白衣の俗人に依り泊して朋黨となるや、舍利子、諸の在家の者は是くの如き言を作さん。是の長老の如きは、數我が家に来つて我れと好を同うすれば、我れ當に供給して其れに衣服・飲食・臥具・病緣の醫藥・諸餘の資具を施すべし。彼の空閑に住せる諸長老等は、既に俗人に於ては素より周接無ければ、我等如何ぞ之れと言問せん。と。

此の事を以ての故に、是の諸の苾芻と在家の者と轉相ひ親狎し、更互に談説するにも但世事を叙して繁雜に戲論するなり。舍利子、是の惡苾芻は、無良の人と共に同じく止り遊び涉ることを樂み、久著の住處を會て移轉する無くして多く朋黨を覓め、及び多くの食家を數數瞻視し、躬ら行いて慶・弔するなり。此の事に由るが故に、密に親愛を懷き、設ひ客苾芻の來るありとも、都べて供給すること無く、先づ毀訾・非法の言を行ふなり。而して、客苾芻は實に是れ賢なりとも、是の惡苾芻も亦汝は多聞・具戒清淨たりと稱説せず。汝は是れ預流・一來・不還・阿羅漢果なりと、是等の如き言にて全く稱説せざるなり。舍利子、是の惡苾芻の我が法中に在るや、我が法を修めずして更に餘事無く、惟毀訾・訶罵を樂んで息まざるなり。舍利子、彼の諸の俗人の朋黨を爲す者も、又是の言を作さん。

諸の客苾芻は、未だ會て我れと共に住し・久しく處り・周旋することをせずして還り往けど、舊住の苾芻は、我れと久しく住して、情事相ひ委ね、使命を通致し、緣務を經理す。是の義を以ての故に、我れ當に諸の舊住の苾芻の與に共に悋を相ひ護り、假りて威勢を爲くべし。と。舍利子、是等を以ての故に、諸の惡苾芻は、是の經典に於て若し解すとも解せずとも、一切時の中にて、皆悉く誹謗・毀訾して信ぜざるなり。又、舍利子、若し復あつて、如來の説く所の經典の是くの如き文句、差別の法門を聽聞するに、常に樂んで聽聞し、聞いて便ち信解して疑惑無き者は、必ず能く是くの如き衆生を捨離し、及び應に惡趣に往くべき業を捨てん。是くの如くに、舍利子、無倦の精進を修行

報を脱することを願はざるを爲すに非ずして、常に中國の人趣に生れんことを願へばなり。我等聲聞も、深く家慳を離るる法を樂聞せんことを欲す。惟願はくば、世尊、無縁の怨を捨て、我等を捨てずして、必ず宣説を爲したまはんことを。

爾の時に、佛は舍利子に告ぐらく。善い哉、善い哉、舍利子。甚だ希有たり、汝等の乃ち能く浮詔無きに住して、如來に是くの如き義を請問することや。諦に聽け、諦に聽け。當に汝が爲めに説くべし。舍利子、若し衆生の、如來に隨つて佛法を修學せんと欲するあらば、我れは當に彼れが爲めに、應ずる如くに顯説すべし。何を以ての故に。諸の衆生にして能く佛に隨つて學ばば、如來は彼れの意に違はずして、必ず其の前に現じて説くことを爲すを以ての故なり。又、舍利子、若し衆生の、佛に隨つて正法を修學することを樂はざるあるに、若し彼れが爲めに説かば、是の人は聞き已るや、則ち當に鬪諍の根本を成立すべければなり。舍利子、是くの如くにして、淨信を成就せる菩薩摩訶薩は、毘梨耶波羅蜜多を行ぜん故に、諸佛の法に於て廣く淨信を生じ、長久の深夜にも常に樂んで觀察し、沈溺せる衆生を救濟せんと欲する爲めの故に、如來の所に往いて殷勤・鄭重に疑を諮ひ義を問ひ、凡べて敷演する所を聽聞せんと樂欲し、既に法を聞き已るや、復廣大・清淨なる深信を獲、歡喜・踊躍して倍精進を加へ、正法を受持して説の如くに修行するなり。又、舍利子、當來の世の我が諸の弟子には、苾芻の、深心に散涅槃寂靜の法に趣くことを希樂することあること少きは、多く三事に依つて以て常業と爲せばなり。何等を三と爲す。一には、常に世間の名利を追求するなり。二には、朋黨を貪食し食家を追求して、往還すること絶たざるなり。三には、華飾の房宇を追求し、財富・什物・資具を貯積することを喜樂するなり。是れを依止・追求する三事と名く。舍利子、是の諸の苾芻は、是くの如き三種の事に依る故を以て、終まで三種の惡趣を解脱せざるなり。舍利子、是くの如き苾芻は、地獄・傍生・焰魔・鬼趣を解脱し、而して喜樂に返し、滅盡を勤

【一〇】 惟願はくば等。斯の句の前に、異譯本には、佛舍利弗に告ぐらく、因縁無き故に、且く是の事を止めよ。の文あり。

【一一】 鬼趣。

餓鬼道に同じ。五趣の一なり。

【一二】 喜樂に返し、滅盡を勤修して趣く天道の法。

聲聞乘の不還果位以上の者の、心心所を暫滅する禪定を修する者にして、非想天に屬せり。

て菩薩の道を行ずるには、應當に律儀菩薩摩訶薩の、勇猛なる無倦精進の波羅蜜多を修學せるに依り隨ふべく、應に彼の枯れたる骨瓊に依り附ける住慳の衆生として修學を爲すべからず。舍利子、若し菩薩摩訶薩あつて菩提を樂求せば、應に他家にて慳吝を生ずべからず。若し復失念して慳吝を起せる時には、應に樂うて三種の怖畏を觀察すべし。何等を三と爲す。謂はく、他家に於て數來往を致し、或は乞食に因み、或は復談話纏綿已ますして、遂に親好を成じ、彼の第二の賢善なる苾芻を見るや、貪著を以ての故に便ち慳嫉を生じ、或る時は、微しく起せる一念の恚心もて相ひ隨順せず。是の縁に由るが故に、當に知るべし、地獄の諸苦の業道を攝受することを。當に知るべし、生盲の種を其の心田に下すことを。當に知るべし、邊地に生るる業を具足し攝受することを。舍利子、我れ今汝が爲めに更に其の相を説かん。謂はく、彼の菩薩は、諸の賢善・清淨なる苾芻の來つて其の所に至るを見るや、輒ち嫉妬・瞋恚の心を生じて、内に忿結すと雖も而も外に清白を現し、與に言論を交ふれども心には乃ち慳吝して、身は恒に將に隨事の俱擬に遇はんとし、或は私に隱屏に處り怒眼にて之れを視、或は不實の事を以て用ひて誣謗を加ふ。舍利子、是の因縁を以て、是くの如き菩薩は、當に知るべし、地獄の業道を攝受し、生盲の種子を其の中心に植ゑ、人道に生ると雖も、復邊地に在つて諸の苦楚に遭ひ、生盲の報を受けて多く誣謗せられ、他に役使せられて晝夜辛勤すること初より停息する無きことを。舍利子、若し諸の菩薩は、設にも他家に於て慳嫉を起せる時には、應に此の三種の怖畏を思惟すべし。と。

爾の時に、如來の是の語を説き已るや、長老舍利子は佛に白して言はく、甚だ奇なり、世尊。未曾有なり、是に諸の菩薩摩訶薩の極めて希有を爲むることや。乃ち能く善く如來の是の家慳の要の法を説きたまへるに遇へばなり。善い哉、世尊。願はくは、我等諸の聲聞衆の爲めにも、正法の要たる家慳を離るる相を説きたまへ。所以は何ぞ。我等も佛法中に於て地獄・生盲・邊地・誣謗の果

はしめられたる 諸欲財寶及び王位を 一切一時に皆棄捨し 卽如來の聖教中に於て 専ら務めて無上道を精修せん 誰れか智者の當に親附すべきあらば 誰れか學藏を行ずるを行と爲すあらば 我が修行をして精進ならしめ已つて 速に成佛して諸欲に耽らざらしめよ 是の故に我れ諸の欲樂を捨て 王位財寶を皆除斷して 佛教に歸し非家に趣くを要するなり 佛菩提の因縁を爲さん故に と。

舍利子、爾の時に、輪王は伽陀を説き已るや、卽熾然精進佛の所に於て、鬚髮を剃除し、袈裟の衣を服し、淨信心を以て、家法を棄捨して非家の道に趣き、空靜處に住して梵行を勤修せり。時に於て、復六十拘胝百千の衆生あつて、彼の輪王の、家を出でて道を學べるを聞くや、亦淨信を懷きて俗相を除き捨て、王に隨ひ出家して諸の梵行を修めたり。舍利子、時に熾然精進如來は、世に處つて化を垂ること久しうして乃ち涅槃せるに、輪王苾芻は佛の滅度を見て悲感充塞し、如來の遺身たる舍利を接ひ奉るに、窣堵波を起して嚴飾し供養せり。其の後久しからずして、便ち命を致め終つて 觀史多天に生れ、天の報を受け盡して、還つて瞻部洲中に生れしが、卽ち是の劫に於て阿耨多羅三藐三菩提を成じ、名けて妙行如來・應・正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と曰へり。其の佛の、世に住せること拘胝歲に滿ち、聲聞の弟子は拘胝那庾多あつて、共に集會せり。皆是れ大阿羅漢にして、諸漏已に盡き、乃至、一切心に自在を得、已に究竟第一の彼岸に到れるなり。妙行如來は、百千の菩薩摩訶薩を阿耨多羅三藐三菩提に於て復退轉せざらしむるに安住し、又、無量無數の諸の衆生等の爲めに妙法を宣揚し、應に作すべき所已つて般涅槃に入り、正法の世に住すること餘の一切を經、舍利を流布して衆生を饒益せることも、亦我が今般涅槃の後に舍利の廣く流るるが如くに、等しうして異なる無かりき。

爾の時に、佛は舍利子に告ぐらく。諸の菩薩摩訶薩は毘黎耶波羅蜜多を行ぜん故に、正勤に安住し

【九】觀史多天(Anisita)。
兜率陀天と同じ。

所として、熾然精進如來に於て極めて深信を起し、種種の上妙なる衣服・節膳・飲食・病緣の醫藥・什物の衆具を以て、供養し恭敬し尊重し讚嘆して、三月の中に於て彼の佛及び苾芻僧に獻じ奉れり。

舍利子、爾の時に、熾然精進如來應正等覺は、供養を愛づと雖も、彼の輪王を覺悟せしめんと欲する爲めの故に、其れをして憶念せしめんとて、伽陀を説いて曰はく。

若し諸佛の法を證得せんと爲さば 勇猛なる精進を最も上と爲す 五欲に貪著する諸の 含生は 凡べて求むる所ありとも果し遂げ難し 若し義利を五欲に於て求めば 智者は當に義利無きことを知るべし 汝今無義の中に處在して 勝義利を求むとも得べからじ 我れ昔汝と兄弟となり 俱に弘誓を起して菩提に趣かんとて 爾の時競うて至誠の言を列ねたり 誰れか速に初に在つて正覺を成ぜんかと 今汝我が菩提を證して 勝梵輪を大衆に轉ずるを見ながら 汝は猶五欲の家に沈溺して 女色に淫荒することを恒に守護せり 過去の諸佛も常に宣説す 智者は應に弊欲を保つべからずと 是の故に我れは恒に勤めて遠離して 曾て未だ放逸を追

求し行はざりき 汝惡慧を攝め無義を行ひ 汝常に無義の業に安住せば 欲法は苦を引いて 汝は長く迷はんも 欲を離れて清淨ならば聖に讚ぜられん と。

舍利子、時に彼の輪王は、熾然精進如來の伽陀を説けるを聞き已り、大覺悟を生じ、深く欲の過を見て出家を希求し、竟に諸妻子・眷屬・長者・僚宰・大小の諸王に辭せず、亦、國王・人民・財寶・府藏を願戀せず、即、座より起ちて如來の前に往き、一心に合掌して伽陀を説いて曰はく。

我れ當に悉く家國を捨てて 空閑に往きて命終に至るを要すべし 寧ろ肌肉をして並に乾枯せしむとも 佛菩提の因緣の爲めの故には 復當に勇猛なる大精進もて 無量なる諸群生を利益すべく 家法を棄捨して非家に趣き 當に虚靜無爲の處に住すべく 五欲の弊惡に緣附して 誑惑せらるる彼の愚夫たるを欣はじ 我れ欲泥の中に陷没せる故に由り 面を掩うて後に隨

【二〇】含生。含靈と同じ。

して 無上なる佛菩提を勤求すべし 財寶色欲及び王位は 無常の迅速なること須臾の頃なれば 智者は斯れに於て欣樂せずして 上妙なる佛菩提を勤求するなり 若し財寶に於て樂を生ぜずして 含識を利せんが爲めに菩提を證せんには 應に疾く欲を捨て出家を求めて勝妙なる諸の梵行を修行すべし 我れ過去の無量劫に 五欲に耽滞して功德と爲し 若しくは天上及び人中に生るるや 未だ曾て彼の生に於て厭くことを知らざりき 故に應に欲及び王位 父母眷屬諸の財寶を捨て 及び國城大軍衆を捨て 出家して勤めて菩提を證すること を求むべし と。

舍利子、時に彼の菩薩の身相の端正なること、十六の少童の如くなりしも、俗網を樂ますして常に過患を思ひ、卽鬚髮を剃り、袈裟の衣を服し、清淨なる信を以て、家法を棄捨して非家に趣き、二十千歳梵行を勤修し、後命終し已るや、復梵世に生れ、彼に於て壽盡るや、還臚部に生れたり。舍利子、爾の時に當つて、此の瞻部洲に佛の出世せるあり。名けて、妙香如來・應・正等覺・明・行・圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・善調御士・天人師・佛薄伽梵と曰へり。時に彼の菩薩は、既に佛に遇ひ已るや、卽法中に於て鬚髮を剃除し、袈裟の衣を服し、清淨なる信を以て、家法を棄捨して非家に趣き、拘胝歳を滿して梵行を修行せり。是くの如くに、次第に十千の如來は世に出現せるに、律儀菩薩は皆值遇するを得て、諸佛の所に於て衆の徳本を植ゑ、常に勤精進して梵行を修行せり。彼の住律儀菩薩も、常に其の兄と同じく一處に生れて、諸の聖道を修せしが、唯一佛に於て梵行を修せざりしかば、是の因を以ての故に、律儀菩薩は先づ成佛するを得て世に出現し、名けて、熾然精進如來・應・正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と曰ひ、世に住して教化すること九十拘胝歳を經、聲聞の大衆は九十那庾多あつて、共に會せるに法を説けり。舍利子、熾然精進如來の世に興れる時に、彼の住律儀菩薩は、轉輪王として威は四域に加はりしが、福徳の被る

を奮發して、前の經行に復せんと欲するに、再び其の心を刀刃に縁ぜざるに轉じたり。舍利子、時に彼の菩薩摩訶薩の魔怨を降し已るや、如是の威儀に住し、如是の妙行を行じ、如是の道迹を修し、如是の大悲を起し、如是の勇猛精進を興して、未だ會て休廢せざりき。

復次に、舍利子、彼の二大士は、彼の法中に於て毘梨耶波羅蜜多を行ぜん故に、俱に是の威儀・行迹・大悲・勇猛を成就し、又千歳に於て、空閑の林に住して、佛の隨念を修したり。是れを過ぎて已後に、勝現王如來の涅槃に入るに方り、爾の時に、諸天は便ち來り告げて曰はく。善男子、豈知らざるか、如來今は已に般涅槃したまへることを。と。時に二大士は天の告を聞き、即便に勝現王如來の涅槃林の所に往詣し、既に彼に到り已るや、合掌して立ち、如來を瞻仰して目未だ會て捨てず、極めて戀慕を懷き深く敬重を生じて、是の念言を作さく。如來の、世に出でて大慈悲なるは、衆生を覆護するごとく舍宅に同じ。如何ぞ一旦速に般涅槃して、我等が類をして依る無く怙む無からしむる。と。舍利子、是の二大士は、如來の前に立ち戀仰を懷き、七日七夜足處を移さず、哀感に勝へずして、遂に立ちながら命終りて梵世に往生せり。既にして梵身受くるや、宿智力を得、大神通を以て上より來り下つて涅槃の會に至り、勝現王如來應正等覺の有らゆる舍利の爲めに罽塔波を起し、珍寶妙物もて世の莊嚴を極め、四十千歳にして方に成就するを得、諸の輪蓋を以て其上に安んじ施せり。舍利子、時に二菩薩は、彼の如來の爲めに罽塔波を起し已つて心大に歡喜し、合掌して其の福相を觀、倍欣慶を加へ、是くの如くすること又七十千歳を経て、方に始めて禮を致め、因つて、爾の命終と俱に瞻部洲の中の大轉輪王の家に生れて太后の胎に處り。舍利子、彼れの初めて生れ已るや、便ち過去に經し所の諸事を憶ひ、是くの如き言を作さく。我れ今に於ては、應當に最上第一なる不放逸の法に安住すべし。と。復、伽陀を以て自ら誡めて曰はく。

我れ今輪王の家に生れ處り 廣大なる財食は皆意の如くなれど 極りたる放逸に於て當に捨

【二】行迹。

異譯本に「正行」とあり。

【七】佛の隨念を修したり。

異譯本に「唯佛を專想せり。」とあり。

だ會て念を起したる身心の驚怖あらず。千歳の中に於て、未だ會て念を起したる身心の疲倦あらず。千歳の中に於て、未だ會て念を起したる懈怠・懶惰・放逸の心あらず。唯、是の念を興さく。我れ今阿耨多羅三藐三菩提を修行するに、何時に當に證すべきか、何時に當に得べきか。と。千歳の中に於て、未だ會て一返たりとも身心痛惱せず。千歳の中に於て、未だ會て念を起して我れ剃髮せんと欲せず。唯、四天王の、時に頭上に來り、其の神力を以て手にて摩して持ち去り、彼の天宮に於て、窣堵波を起し、衆寶もて莊嚴して供養を爲すを除く。千歳の中に於て、天王の、若しは來り若しは去るありと雖も、而も心に都べて去來の想無きなり。千歳の中に於て、未だ會て念を起して、陰影の處より光景の處に至り、炎熱の處より清涼の處に至らず。千歳の中に於て、嚴寒の時に於て、未だ會て念を起して、厚煖衣を覆ひて溫適を取らず。千歳の中に於て、未だ會て世間の無益の語を論說せざりき。

舍利子、是の二菩薩の、千歳の中に於て是等の如き堅固なる精進を行ぜる時に、惡魔の、愚癡念と名くるあり。我れ今者世間に出現するや、惡魔羅の愚癡念といふ者ある如く。舍利子、彼の時の惡魔は、壞亂を興さん故に、律儀菩薩の經行く所の道に於て、利刀を仰け布きて其の行く處に遍うせり。爾の時に、律儀菩薩は、彼の刀の道に於て微しく本心を失ひ、利刃の想を生ぜり。適想を生じ已るや、便即ち追悔し、大音聲を發して再返唱へて言はく。咄なる哉、奇事なり。我れ今如何にして放逸に住せる。と。舍利子、時に彼の菩薩の發せる音聲の、遍く三千大千世界に告ぐるや、上空の中に於て百千拘胝の天魔の徒黨ありしが、是の菩薩の憶念の音聲を聞き、即共に同時に菩薩に語つて言はく。汝の今者普く告げし聲の如きは、深く善説と爲す、深く善説と爲す。と。舍利子、是くの如き天の聲は、唯律儀のみ聞き、彼の住律儀は、諸天の聲及び此の菩薩の普く告げたる大聲に於ても、初より之れを聞きざるなり。爾の時に、律儀菩薩は天の語を聞き已るや、堅固なる大精進

【二五】窣堵波(stupa)。舊譯に浮圖と書し、塔廟の義なり。佛物又は經文を奉安し、又は死者、生存者の徳を標示するために、舍利・牙・髮等を埋めたる築造物なり。

爾の時に、佛は舍利子に告ぐらく。彼の過去世の勝現王如來の法中の律儀童子菩薩摩訶薩は、住
律儀童子菩薩摩訶薩と、彼の佛の所に於て大弘誓を發し、毘梨耶波羅蜜多を行ぜん故に、精勤して
懈らずに正道を修行せり。舍利子、彼の二菩薩の精進を行ぜざる時には、千歳の中に於て、乃至、未
だ會て彈指の頃の如きにも、睡眠の逼奪する所を被らず。千歳の中に於て、未だ會て臥息せんと念
欲する心を起さず。千歳の中に於て、未だ會て樂坐せんと念欲する心を起さず。千歳の中に於て、
未だ會て一返たりとも身を屈して蹲踞せず。唯、便利若しくは食飲の時には、便ち就いて住立する
を除く。千歳の中に於て、未だ會て再食せずして日に一食に止め、食は一搏に止め、飲水は一器の
み。千歳の中に於て、未だ會て念を起して食を欣樂せず。心には、我れ今極めて饑渴を爲せり。願
はくば、當に疾く是等の如き念の、初より生ずるある無きを得んことを。と謂へるが如し。千歳の
中に於て、未だ會て一返たりとも、量を過して飲み噉はず。千歳の中に於て、未だ會て念を起して
飲食を稱量せずして、此れは鹹、此れは淡、此れは甘、此れは苦・辛・酢・美・惡と、初より慮を興
す無きなり。千歳の中に於て、乞食の時毎に、一心に正念して、未だ會て彼の食を授くる人の面を
觀ずして、是の念を生ぜず。誰れか我れに食を與ふる。丈夫たりや、婦人たりや。と。乃至、童男・
童女をも皆瞻視せざるなり。千歳の中に於て樹下に居止して、未だ會て面を仰いで樹の相を觀ざる
なり。千歳の中に於て、著る所の衣服を未だ會て再び易へず。千歳の中に於て、未だ會て一念も欲
覺・悲覺・害覺を起さず。千歳の中に於て、未だ會て念を起して親里の覺を緣せず。若しくは父、若
しくは母・兄弟・姉妹及び餘の眷屬をも皆緣念せず。千歳の中に於て、未だ會て念を起して居る所の
家に於て、思覺の心を發さず。千歳の中に於て、未だ會て念を起して、仰いで虚空・日月・星宿・雲霞
等の色を觀ず。千歳の中に於て、未だ會て念を起して、身を以て若しくは壁若しくは樹に依倚せず。千
歳の中に於て、未だ會て念を起して、諸の酥油を以て用ひて肢體に塗らず。千歳の中に於て、未

【四】酥油(Ghee)牛乳より製せる油にして或は身に塗り或は食する物なり。

故に、心大に歡喜し踊躍すること無量なり。又、種種の上妙なる供具を以て供養を爲して、倍恭敬を加へ尊重讃嘆すること、半月間に於て中に斷絶する無かりき。是れを過ぎて已後、便ち佛前に於て鬚髮を除去し、袈裟の衣を被、淨信心を以て、家法を捨棄して非家に趣き、專志・精勤に諸の善法を求めたり。舍利子、時に、二童子は、善法を求め已り、心に正しく佛の菩提を了知し、俱に弘誓を發したるが、其の兄律儀は是の誓願を作さく。願はくば、我れ最も先に等正覺を成じ、其の佛の名を世間依怙放光大光明と曰はん。と。其の弟の住律儀も又誓願を發さく。願はくば、我れ最も先に正覺を成じ、其の佛の名を大導師主天人中尊と曰はん。と。

舍利子、爾の時に、律儀童子菩薩摩訶薩は、是の願を作し已るや、卽勝現王如來の前に於て、合掌して大誓を立て、莊嚴に伽陀を説いて曰はく。

我れ當に復更に安坐せず 亦身を放倚して眠臥する無く 專精に菩提の道を勤求すべし 一切の群生を利せん爲めの故に 我れ當に身と命とを觀ぜず 常に懶惰を捨て勤めて精進して 上妙なる菩提の道を志求すべし 一切の群生を利せん爲めの故に 假使ひ血肉都べて乾き竭き 皮骨筋脈皆枯燥すとも 要す懈怠及び身命を捨て 精勤して上菩提に越くを爲さん と。

舍利子、爾の時に、住律儀童子菩薩摩訶薩は、兄律儀童子菩薩摩訶薩の是の願を發し已れるを聞き、歡喜踊躍して、卽ち其の前に於て、伽陀を説いて曰はく。

今當に共に契同和好して 無上なる菩提の行を修行するに 最勝なる勤精進を興發すべし 一切の群生を利せん爲めの故に 我れ今薄く身命を濟ひ 彼の血肉の皆枯燥するに隨せ 千の精進を發して兄に隨つて學ばん 無上なる菩提を求めん爲めの故に 我れ當に獨り空閑山野林中に處在して勤めて精進して 常に微妙なる最勝智を求め 住に隨ひ大法王を莊嚴すべし と。

【三】住に隨ひ大法王を莊嚴すべし。異譯本に「法の清淨なるに於て自在を得ん。」とあり。

生を利益せん 我れ爾の時に於て便ち出家し 精勵して梵行を勤修し 當に斯の八妙道に安住し 復無量億の衆生を安んずべし 願はくば我れ諸の有識の衣となり 常に邪曲の徑を履まず 衆聖の訶毀したまふ極めて下劣なる 謂はゆる姪欲を我れ能く捐て 又當に諸の放逸を棄捐し 不放逸に於て恒に修學すべからんことを 願はくば我れ永く衆難に生れず 常に諸の淨信の家に生るるを得 生生に常に人中の尊に見え 見え已つて佛に於て深信を生ぜん 既に信を生じ已り恭敬を修め 妙華鬘及び塗香 種種の音樂を以て供養し已り 諸佛の深智慧を求むるを爲さん 是くの如くに廣く諸の供養を修し 乃ち無量なる拘胝劫を経とも 永く欲法を斷ち居家を捨て 精勤に清淨の行を修し奉らんことを と。

舍利子、爾の時に、住律儀童子は、是の頌を説き已るや、即讚する所の勝現王如來の處に於て、彼の如來の爲めに、赤梅檀を以て道場を建立し、高く華に綺飾すること四踰繕那にして、縱廣の莊嚴は諸の彫麗を備へたり。

爾の時に、童子は、既に道場を立て莊嚴成就するや、即ち以て彼の佛世尊に施し奉り、又、佛前に於て頌を説いて曰はく。

佛の安住せらるる 四種の住は 往昔より最勝の稱譽する所なり 我れ今是くの如き住を欣求す 惟願はくは善逝慈哀もて許したまはんことを 若し是の住する所に安住するあらば 心に常に無量の衆を了知し 及び過去未來の生を知らん 我れ今是くの如き住を欣求す 若し是の住に住せば 四種の正勝 四神足 及び四つの最勝無礙の辯を究竟するに至らん 我れ今是くの如き住を欣求す と。

舍利子、爾の時に、薄伽梵勝現王如來は、此の童子を哀み、其の獻する所の上勝なる道場を受け、苾芻僧と中に入つて居止せり。時に、彼の童子は、既に如來及び苾芻僧の、其の施を受くるを觀る

【一〇】 當に斯の八妙道に安住し等。異譯本に「柔く俱胝數の有情をして、安穩に皆八正道に住せしめん」とあり。

【二】 四種の住。四念住なり。

【三】 四種の正勝、乃至、究竟するに至らん。異譯本に「正斷及び神足を獲得し、四種の勝行を各了知す。」とあり。正勝は正斷に同じ。

病無き 亦憂愁悲歎等無き 願はくば斯の寂靜の法を聞くを爲さんことを 諸天世間を導利せん故に 若しくは法の貪瞋癡ある無き 亦諸慢及び渴愛無き 願はくば菩提と佛性との無爲なる清涼甘露の法を説かんことを 若しくは法の如來の安住したまふ所にして 天龍等に深く敬禮せらるるを 或は思慮有るにも或は思無きにも 願はくば斯の寂靜の法を聞くを爲さんことを 佛は是の處に住しながら能く 無量なる四方の諸佛の土を通照したまふこと 大焔の深暗中に發するが如し 願はくば斯くの如き等の甘露を證せんことを 若しくは諸べて一切の愛無愛の 性に常に依らず欲界 色界無色界にも亦依る無き 願はくば斯くの如き勝妙の法を説かんことを」と。

舍利子、爾の時に、住律儀童子は、兄律儀の是の頌を説くを聞き已り、便ち一具の新しき妙寶履を以て、勝現王如來に施し奉り、即佛前に於て伽陀を説いて曰はく。

願はくば我れ當に諸の群生の爲めに 救となり趣となり依舎となり 更に邪徑を履踐せず 恒に群迷を導いて正路を説くべからんことを 願はくば常に諸の貪欲 此れ乃ち愚夫の所行なるを習はず 永く一切の有爲法を離れて 恒に如來の世に出興したまふに値はんことを 既に明照世間者に逢はば 便ち應に兩足尊に供養して 無上なる佛菩提を勤求すべし 一切の群生を利せん爲めの故に 當に無量の香華鬘 高妙なる幢旛諸の寶蓋を以て 龍中の大龍に獻じ奉らん 一切の群生を利せん爲めの故に 復種種の上衣服 臥具飲食諸の醫藥を以て 俱に持ちて佛世尊に獻じ奉らん 一切の群生を利せん爲めの故に 大小鼓を擊ち螺貝を吹き及び簫管清歌等を奏し 俱に持ちて照世尊に獻じ奉らん 一切の群生を利せん爲めの故に 厚味の種種に極めて淳濃なる 世間の微妙として珍尙する所ものを 俱に持ちて救世尊に獻じ奉らん 一切の群生を利せん爲めの故に 廣く是くの如き供養を行じ已つて 無量の 諸の群

【九】或は思慮有るにも、或は思無きにも。異譯本に「有想・無想の諸の有情。」とあり。

及び最上なる丈夫の智を求むべく 爾く乃ち如來の所に往詣せん 父母家宅及び財寶 是等の如き重愛を生ずるものに於て 我れ今一時に皆棄捨し 爾く乃ち如來の所に往詣せん 若し當に成佛すべきを欲願し 又深く如來者を愛樂するあらば 宜しく速に諸の珍寶の聚を捐て 家法を捨離して非家に趣くべければなり と。

舍利子、爾の時に、住律儀童子は是の語を聞き已るや、即闍上より其の階道を下り、將に勝現玉如來應正等覺の所に往かんとするに、未だ至らざる頃に、其の兄律儀は、又重闍より速疾にして下り、馳せて佛の所に詣り敬を修め已れり。訖れる時に、住律儀は、後れて乃ち方に至れり。

爾の時に、律儀兄童子は、即ち十億の無價の寶衣を以て如來に獻じ奉り、又佛前に於てして頌を説いて曰はく。

我れ今妙相を求めんとて 如來に無價の衣を施し奉るにはあらず 惟願はくは當來に獲る所の報の 今の世尊の如くに等しくして 巽る無からんことを 一切の含靈の中の最勝は 一切の妙法に善く安住したまへり 惟願はくは當來に獲る所の報の 今の世尊の如くに等しくして 巽る無からんことを 無上なる智慧の藏を具足し 諸力正勤に善く安住したまひ 三十二相を身に持たる 願はくは速に當に人中の上を成すべからんことを 諸佛の十種の力を成就し 四無所畏に善く安住したまふ 惟願はくは當來に獲る所の報の 今の世尊の如くに等しくして 巽る無からんことを 佛の知る所の眞淨の法の如きは 唯佛のみ善住して皆明照したまふ 願はくは是くの如き法に演通することを賜り 我れをして速に上菩提を悟らしめんことを 我れ今妙なる色相を求めずして 佛に無價の勝上衣を奉れるは 唯寂靜なる妙菩提を希ひ 諸天世間を利せん爲めの故なり 如來の住する所の微妙の法は 一切の異論は傾け動す無し 我れ今是くの如き法を求めん爲めに 敢て無價の勝上衣を施せるなり 諸法の生無き老

發すべし 決定して成佛して人中の上たらんと 夫れ慳を懷く者の相は是くの如し 資産をば他をして知らしめんと欲せず 我れ今豈復沈黙を守らんや 尙身命をも捨つ況んや財寶をや 我れは家資を以て咸く布施して 菩提の道を求むる因縁を爲さん 及びび兄も家の財寶を分つて 盡く佛田に施せ深敬する故にて 誰れか是くの如き最勝尊の 三十二の妙相を具せる者を見て 發願して菩提に趣かさらん 唯諸の下劣の見を具せるものを除く 有らゆる家宅及び

財寶 父母并に諸の眷屬等を 我れ當に一切皆捨離して 速に善逝如來の所に往くべし 世の依怙として光明を作し 世を照す慈尊には極めて遇ひ難し 百千拘胝那庾劫にも 是くの如き勝相は甚だ聞き難し 我れ世尊の王都に入るに 大苾芻僧に圍遶せらるるを見るに 盛滿なる月の清天に在つて 流光洞に諸の依地を照すが如し 我れ世尊の四衢に遊ぶに 周遍に一切を莊嚴せるを見るに 猶彼の千光を具足せる日の 獨り虚空に滿ちて常に遍く照すが如し

我れ世尊の衆首に居て 莊嚴は苾芻僧を顯發せるを見るに 彼の蘇迷盧山王の 諸の寶山に映えて悉く嚴麗なるが如し 如來の威光は極めて熾盛なれば 此の土の諸の群生を通照し 妙相を圓成せる兩足尊の 榮光は諸の大衆を鑿飾せり 如來は大神通力に住すれば 善く

天龍非人等を御し 復無量種の變現を興して 衆生の爲めの故に王都に入りたまへり 誰れか斯くの如き正法主の 三十二相の大莊嚴を見て 復下劣の乘に希趣せん 唯不肖なる愚闇者を除くのみ 我れ今欣んで人中の尊を祝 得難き清淨信を發生したれば 含識を利し菩提に趣かんが爲めに 要す當に如來の所に往き觀ゆべし と。

舍利子、爾の時に、律儀童子は、又伽陀を以て其の弟に報いて曰はく。

我れ途路に於て懈怠して 速に如來の所に往かざるに非ず 我れ斯の重閣を下り已り 當に外宇に出でて諦に思惟すべきを待て 宜しく應に我想を捐捨すべく 又吾が身命を顧惜せず

せること大龍象の如く、澄靜にして無濁なること深泉池の如く、盛徳の巍巍たること金樓觀の如く、色相の超挺せること紫金山の如く、又大海の衆寶の充盈せる如く、帝釋主を諸天の圍遶せる如く、大梵王の心慮の寂靜なるが如く、舍利子、彼の薄伽梵には、是等の如き威相莊嚴ありき。長者の二子は、爾の時に當り、重閣の上に在つて、遙に勝現王佛の遠くよりして來れる容貌・威嚴・色像の第一なるを觀、歡喜の心を發して未曾有と歎じたり。舍利子、彼の住律儀童子は、先に佛を觀たるを以て、喜踊せる内心にて其の兄に白して曰はく。生れしより已來、兄願は曾て是くの如き端嚴なる含靈王を見たりや、不や。と。兄は弟に報いて曰はく。我れ生れしより來、實に未だ曾て是くの如き端嚴なる含靈中の王を見ず。と。弟は兄に白して言はく。我が惟ひ忖る如くんば、未來世に於て、定つて當に是の含靈中の王と作るべし。と。舍利子、爾の時に、住律儀童子は、即其の兄の爲めにとて頌を説いて曰はく。

律儀兄の今見らるる如くに 我れ當來に於て定つて是くの如く 大慈芻衆に圍遶せらるること
當に復今日に倍し勝るべし 菩提の道を求むる因縁の故にて 當に誓つて諸の飲食を噉は
ざるべく 兄は既に樂んで牢獄の中に居れども 我が意は決定して當に超勝すべし 是くの
如き一切衆生の尊は 譬へば衆星の滿月に等しければ 誰れか斯れを見て信を生ぜずして 居家
を樂んで出離せざるものあらん と。

舍利子、爾の時に、律儀童子は、即伽陀を以て其の弟に報いて曰く。
弟當に且く止めて高聲する勿るべし 但語言にては便ち事を遂ぐるものに非ず 我れ豈當に世
の語言を發すべけんや 誰れか先に在つて正覺を成ずるを試みんのみ と。
舍利子、爾の時に、住律儀童子は、復伽陀を以て其の兄に白して曰はく。

是くの如き無上菩提の道は 但弊鄙なる慳心にて證らるるに非ず 我れは當に大賢善なる聲を

【七】彼の住律儀童子は先に佛を觀たるを以て。異譯本に一時に淨住童子は、往昔に、已に曾て勝高如來應供正等正覺を見るを得たればとあり。

【八】含靈。靈魂を含む者の意にして、又、含識、今生とも云ひ、即ち有情を指す。

ん。と。是くの如き故に由り、即此の苾芻は、施主の家に於て三重の過を起すなり。一には、住處の過を起して、餘の苾芻を見て或は恨を起して、我れ今に於ては當に此の處を離るべしと言はん。二には、凡べて習近せる所なるに、當に未だ應と不應とを知らずと言はん。三には、不定の家に於ては妄に諸過を起さん。舍利子、彼の慳苾芻は、後に來る人に於ては三つの惡言を發せん。一には住處の過を説くに、諸の惡事を以て其の家を増益し、後の苾芻をして心に住することを樂はざらしめん。二には、後の苾芻の有つ所の實言に於て、反つて虛説と爲さん。三には、詐つて善相を現して是の人に詔附し、微隙あるを伺ひ衆に對して治擧するなり。舍利子、是くの如くに、苾芻の他の施家に於て慳嫉を生ずる者は、速に一切有つ所の白法を滅し、永く盡して遺すこと無けん。

復次に、舍利子、若し苾芻あつて、家に住して慳ならば、我れは是の人を説いて、不善者なれば則ち菩提の資糧を棄捨するを爲すものと爲さん。又、律儀に安住せる菩薩に隨逐して正法を修むる能はざる者と爲さん。又、舍利子、是の種の如き相を、我れ更に當に説くべし。乃ち、往昔の時に、無數・廣大・無量・不可思議なる阿僧企耶劫を過ぎて佛の出世せるあり。勝現王如來・應・正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛薄伽梵と名けたり。彼の佛の住せる壽は九十拘胝歳にして、聲聞の衆會は九十拘胝那庾多なりき。皆是れ大阿羅漢にして諸漏已に盡き、乃至、一切に心自在の第一究竟を得たり。舍利子、爾の時に當つて、大長者の名けて善擇と爲せるあり。其の家巨富・多饒にして財寶・資産・僮僕充遍せざる無し。一子あつて、一を律儀と名け、二を住律儀と名く。年幼稚に在りながら容貌端正にして淨色圓滿し、衆人見るを喜べり。舍利子、時に勝現王如來應正等覺は、晨朝の時に於て、衣を服し鉢を持ち、大苾芻僧は左右に翼從し、彼の佛世尊は僧の上首に居り、福利を爲さん故に乞食の法を現じて、彼の長者の住する所の大城に入るに、威儀庠序に、諸根寂定に、心意恬恬にして、調順奢摩他を逮得し、及び第一なる調順奢摩他を獲て諸根を修攝

【六】 調順奢摩他、乃至、獲て。異譯本に「奢摩他の諸根穩密の行に住し」とあり。

らく。若し是くの如くんば、彼の慳なる餓狗は、何等の故を以て、深毒の聲を出し牙を現して吠ゆるか。舍利子、言はく。我が意にて解する如くんば、恐くは彼に來れる人は美膳に貪著して必ず能く我が甘露の良味を奪はん。と。是くの如き意に由り、牙を現して吠ゆるのみ。佛、舍利子に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。汝の言ふ所の如し。當來の末世に諸の苾芻あつて、他の施主に於て家慳を勤習し、屎尿にも耽著して妄に纏裹を加へ、是くの如き具足無難に値ふと雖も、而も便ち委棄して修正せざらん。此の苾芻を檢するに、我れ其の行は前の癡狗の如しと説かん。舍利子、我れ今世に出でて、衆生を憐愍して、止息せんと欲するが故に、専ら此の事を思ひ、是等の如き諸の惡苾芻の爲めに此の譬喩を説くなり。

復次に、舍利子、是の諸の菩薩摩訶薩は、無量の衆生を利益し安樂にせんと欲する爲めの故に、佛智を求めて毘梨耶波羅蜜多を行するに、彼の諸の菩薩摩訶薩は、己が身肉に於てすら尙惠施を行すれば、況んや復妄想なる惡肉を規求して、他家に於て諸の慳嫉を起さんや。舍利子、彼の諸の苾芻は他家に慳なるが故に、我れは是の人を説いて、癡丈夫と爲し、活命者と爲し、財穀を守る奴僕、諱者と爲し、重く世財・寶玩に縛らるる者、唯衣食に於て欽尙する所の者と爲し、妄想にて惡肉を貪嗜することを求めて慳嫉を起す者と爲すなり。舍利子、我れ今更に是くの如き正法を説かん。彼の諸の苾芻は、先に他家に至るとも、應に餘の苾芻を見て嫉妬を生ずべからず。若し苾芻あつて、我が法教に違はば、餘の苾芻を見て或は是の言を作さん。此の施主の家は、先に我が識たり。汝何より來つて乃ち此に在るか。我れ此の家に於ては極めて親密・調護・交願を爲せり。汝何より來つて輒ち相ひ侵奪するか。と。舍利子、何等の故を以て、彼の慳苾芻は、後に來れる者に於て偏に嫉妬を生ずる。舍利子、諸の施家は、其の衣鉢・飲食・臥具・病緣の醫藥及び供身等の資生の什物を許すに由つて、彼れは是の念を作さん。恐くは、彼の施主は、先に許せる物を將つて後に來れる者に施さ

【五】他の施主に於て、乃至、修正せざらん。異譯本に「種族の中に於て、乃至、便利不淨にも、深く愛著に纏縛せらるるを生ずる是くの如き行相は、刹那の時に於てすら、佛事を成就する事は、亦得る能はじ」とあり。

女の 黃門ワウモン生盲の身を受け 又駝驢猪狗等を受けん 若し佛及び菩薩に於て 深く殷重なる
 愛敬の心を生じ 一切の障礙を遠離し已つて 相續して賢聖の道を修行し 父母妻子眷屬等
 も 恒に樂んで勤正法の中に安んじ 衆生の世を厭ひて出家を求むるには 讚美勸助して其れ
 をして果さしめ 若しくは眷屬をも正法の中に處かば 當に速に賢善の趣に往き登るべく 能
 く讚勸して出家せしむるあらば 速に無上なる佛の菩提を悟らん

復次に、舍利子、出家の菩薩にして、復五法を若し成就する者あらば、佛世に値はず、善友に親
 ます、無難を具へず、善根を失墮し、律儀に安住せる菩薩に隨つて正法を修學せずして、亦速に無
 上の菩提を悟らじ。舍利子、何等を名けて、出家の菩薩の成就する五法と爲す。一には、尸羅を毀
 犯するなり。二には、正法を誹謗するなり。三には、名利に貪著するなり。四には、我見を堅執す
 るなり。五には、能く他家に於て慳嫉を生ずるなり。舍利子、是くの如きを名けて、出家の菩薩の
 成就する五法と爲し、佛世に値はず、乃至、無上なる正等菩提を得ざるなり。舍利子、譬へば、餓
 るたる狗の、惶惶として路に緣れるに、瑣骨の久しく肉膩無きに遇ひ、但赤く塗れたるを見て、是
 れ厚味なりと言ひ、便ち就いて之れを銜へ、多くの人の處る四衢の道中に至り、貪味を以ての故に、
 涎を骨上に流し妄に甜美と謂ひて、或は齧み、或は舐め、或は齧み、或は吮ひ、歡び愛し、纏ひ附
 きて、初より捨て離す無き時に、刹帝利・婆羅門及び諸の長者の、皆大富貴なるあつて、此の路に來
 遊せり。時に、此の餓狗は、遙に彼れの來れるを見、心に熱惱を生じて是くの如き念を作さく。彼
 に來れる人は、將に我が重んずる所の美味を奪ふ無からんや。と。便ち是の人に於て大瞋恚を發し
 て、深毒の聲を出し、惡眼にて邪視し、齒邪を露現し、便ち行いて齧み害するが如し。舍利子、意
 に於て云何。彼の來れる人は、應に餘の事を爲すべきに、豈復此の肉無き赤く塗れたる骨瑣を求む
 べきか。舍利子、佛に白して言はく、世尊、不なり。世尊、不なり。善逝。と。佛、舍利子に告ぐ

【三】黃門(Pāṇḍita)生盲の身を受け。黃門は不男ともいふ性器の不具なるを謂ふ。異譯本に「當に人身の不具足を獲」とあり。

【四】刹帝利(Kṣatriya)利利と同じ。

或は邊地及び 蔑戾車・惡邪見の中に生ずるを謂ふ。在家の菩薩は、是の事を行ふ故にて佛の世に値はず、乃至、無上菩提を悟らざるなり。舍利子、是れを菩薩の成就する第四の損減の法と名く。

復次に、舍利子、在家の菩薩は、國王及び諸大臣、乃至、富貴にして自在を有つ者に依止して、弊惡の行を行ひ恃んで勢力を爲して、無量の衆生を譏訶し毀罵し輕蔑し戲弄せんか、舍利子、在家の菩薩は、此の語の惡行を成就するを以ての故に、速に能く諸の惡趣の報を招き集め、佛世に値はず、善友に遇はず、無難を得ず、善根を失壞し、律儀に安住せる菩薩に隨つて正法を修學せずして、速に無上の菩提を悟る能はざるなり。舍利子、是れを菩薩の成就する第五の損減の法と名く。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

菩薩にして五種の法を成就せば 是くの如き智慧は增長すること無く 既に如來を速疾に見たてまつらず 亦人中の上に逢事せし 或は王者の大師傳となり 諸の衆生を欺詐誑惑せば斯くの如き不善の業を具するに由り 世間の依怙者に遇はし 多くの有情をして怖畏を生ぜしめ 若しくは贖財を納れ若しくは損害する 斯くの如き惡業を興造し已らば 終まで人中の尊に値ひ奉らじ 或は諸尼の淨戒聚をして 破壞摧滅して悲苦を生ぜしめば 當に無量億の如來を離るべく 諸の無難をも成就するを得且し 其の父母妻子等の 障礙して法行を修せしめざるに於て 又正法を聽聞するを障へられば 速に愚癡覆蔽の果を感じん 若し人世を厭ひ出家を樂ふとも 便ち拘執の緣にて礙を留むるを致さば 當に無量の最勝尊に離るべく 諸の無難をも成就するを得且し 若し是くの如き法 謂はゆる空閑に住するを讚說するを聽聞するあつて 便ち不忍忿恚の心を生じ 謗毀して謂うて非法の説と爲し 是くの如き正法を謗毀し已るや 常に生盲の大劇苦に住せん 一切の重障なる罪業の中にも 斯れに方ぶるに十六して一にも及ばざれば 彼れは諸の如來を見奉り難く 設ひ見るとも信敬を懷く能はず

【二】蔑戾車(Mleccha) 垢濁種と譯し胡種の稱なり。

に、凡べて出す所の言は利の爲めに非るは無し。舍利子、是くの如き法に由つて善道を損減し、是くの如き法に由つて無難を損減すれども、是くの如き在家の菩薩は、身を養はん爲めの故に、諸の悪行を行ひて佛世に値はず、乃至、疾く阿耨多羅三藐三菩提を證せざるなり。舍利子、是れを菩薩の成就する第一の損減の法と名く。

復次に、舍利子、在家の菩薩は毀城の法に住す。何等を名けて、毀城の法に住すと爲す。舍利子、若し諸の如來應正等覺は世間に出現せんか、諸の天・人・魔・梵の爲めに法を説きて開示・宣暢するに、初・中・後に善く、文義巧妙・純一にして、清白なる梵行を圓滿せん。爾の時に、當に四衆の出現するあるべし。謂はゆる、苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・鄔波斯迦なり。時に苾芻尼は、村城・郊野・館舍・國邑・主都に依附して、戒を護らん爲めの故に中に在つて居り止るに、彼の諸の在家の菩薩は、是の住處に來り其の戒衆を汚さば、戒を毀つを以ての故にて、住毀城と名け、是の事を犯し已るや佛世に値はず、乃至、疾く無上菩提を悟る能はざるなり。舍利子、是れを菩薩の成就する第二の損減の法と名く。

復次に、舍利子、在家の菩薩は、諸べて善く法律を説くに依つて正法を演ぶる時に、便ち父母・兄弟・姉妹・妻妾・男女の眷屬及び諸の衆生に於つて法の障を爲さるるを見ん。舍利子、在家の菩薩の法を障礙し已ることは、長夜の中に於て自ら法律に於て常に障礙多きにて、佛世に値はず、乃至、疾く無上菩提を悟る能はざるなり。舍利子、是れを菩薩の成就する第三の損減の法と名く。

復次に、舍利子、在家の菩薩は、佛の經中に、如來の、少欲・知足を誨説し、要相を出して、應に獨り靜に山林にて苦の法を離るべしとするを聞き、心に不信・輕毀・誹謗を生じ、亦他人をして是くの如き見を起さしめんか、是の諸の在家の不善の菩薩は、如來の清淨なる教を毀訾し已れば、還つて復毀訾すべき趣に沈溺せん。何等を名けて毀訾すべき趣と爲す。地獄・畜生・焰魔の世界に墮し、

【一】住毀城と名け。異譯本に「是れを城中の障礙と名く」とあり。

卷の第四十七

菩薩藏會 第十二の十三

毘梨耶波羅蜜多品 第九の三

復次に、舍利子、是くの如き勇猛なる無倦正勤の菩薩摩訶薩は、五種の増進の法を成就して、便ち能く速に阿耨多羅三藐三菩提を悟るなり。舍利子、何等を名けて、五種の増進の法を成就すと爲す。謂はゆる、佛の出世に値ふを増進の法と爲し、善友に近くを得るを増進の法と爲し、無難を具するを得るを増進の法と爲し、一切の善法を修集する所に隨ひ永く失壞せざるを増進の法と爲し、彼の律儀に安住せる菩薩摩訶薩の所に於て、隨つて修學に従ふを増進の法と爲す。舍利子、是れを菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜多を修行するが故に、五法の増進不退なるを成就して、速に無上なる正等菩提を悟ると爲すなり。

爾の時に、長老舍利子は佛に白して言はく、世尊、頗は、菩薩は是の五法に於て損減するものありや、不や。佛言はく、有り。曰はく、何の謂ぞや、大德薄伽梵。何者か是れなるか、大德蘇揭多。佛舍利子に告ぐらく、五種の法を菩薩は成就するあらば、便ち能く損減するなり。何等を五と爲す。謂はく、佛の世に於て而ち値遇せず。彼の善友に於て親近を懷かず。無難の法を具すること而ち獲得せず。善法を修習するに多く失壞するあり。諸の律儀に安住せる菩薩に於て心隨ひ學ぶこと無し。是くの如き損減の法を具するに由る故に、亦速に無上菩提を悟らざるなり。舍利子、何等の五法をか菩薩は成就する。舍利子、在家の菩薩は、王の師傳と爲つて、威勢の力を以て衆生を恐怖せしめ、縁有るを致して務めて威福を祈請し、若しくは、是くの如き事を成辦する爲めには重く相ひ酬謝せしめ、而して、是の菩薩は世利を觀るが故に心に正直無ければ、便ち之れを爲作する

とは、遍く漏盡を知るなり。言ふ所の進とは、諸の念處を修し、言ふ所の止とは、念に功用無きなり。言ふ所の進とは、正斷の方便にして、言ふ所の止とは、善惡を俱に捨つるなり。言ふ所の進とは、神足を引發し、言ふ所の止とは、任運に作用するなり。言ふ所の進とは、諸根に善權にして、言ふ所の止とは、非根の性を觀するなり。言ふ所の進とは、諸力を攝受し、言ふ所の止とは、智にて制伏する無きなり。言ふ所の進とは、菩提分を生じ、言ふ所の止とは、智にて法を揀擇するなり。言ふ所の進とは、道の資糧を求め、言ふ所の止とは、來往の性無きなり。言ふ所の進とは、奢摩他を求め、言ふ所の止とは、心寂止に住するなり。言ふ所の進とは、勝觀を資助し、言ふ所の止とは、法性を伺察するなり。言ふ所の進とは、諸因を隨覺し、言ふ所の止とは、諸因に遍智なるなり。言ふ所の進とは、他に從つて音を聞き、言ふ所の止とは、法の如くに修行するなり。言ふ所の進とは、身の莊嚴を謂ひ、言ふ所の止とは、法性を謂ふなり。言ふ所の進とは、語の莊嚴を謂ひ、言ふ所の止とは、聖默然の性なり。言ふ所の進とは、解脫門を信じ、言ふ所の止とは、發起ある無きなり。言ふ所の進とは、四魔を遠離し、言ふ所の止とは、煩惱の習を捨つるなり。言ふ所の進とは、方便善巧にして、言ふ所の止とは、深慧を觀察するなり。言ふ所の進とは、緣境を觀察し、言ふ所の止とは、功用の觀無きなり。言ふ所の進とは、假名を觀察し、言ふ所の止とは、實義に了達するなり。舍利子、諸て是等の如き進止の相は、是れを菩薩摩訶薩の惟心の精進と名く。若し諸の菩薩摩訶薩は、是等の如き心の精進の相を聞かば、應當に勇猛なる無倦を發起して正勤を具足すべし。舍利子、是くの如きを名けて、菩薩摩訶薩の正勤波羅蜜多を修行するに厭倦ある無く勇猛に精進修習する相と名く。

【一】 諸因を隨覺し。
 【二】 諸因を斷斷し。
 【三】 諸因を斷斷し。
 【四】 諸因を斷斷し。
 【五】 諸因を斷斷し。

【六】 諸因を斷斷し。
 【七】 諸因を斷斷し。
 【八】 諸因を斷斷し。
 【九】 諸因を斷斷し。
 【十】 諸因を斷斷し。

【十一】 諸因を斷斷し。
 【十二】 諸因を斷斷し。
 【十三】 諸因を斷斷し。
 【十四】 諸因を斷斷し。
 【十五】 諸因を斷斷し。

【十六】 諸因を斷斷し。
 【十七】 諸因を斷斷し。
 【十八】 諸因を斷斷し。
 【十九】 諸因を斷斷し。
 【二十】 諸因を斷斷し。

【二十一】 諸因を斷斷し。
 【二十二】 諸因を斷斷し。
 【二十三】 諸因を斷斷し。
 【二十四】 諸因を斷斷し。
 【二十五】 諸因を斷斷し。

【二十六】 諸因を斷斷し。
 【二十七】 諸因を斷斷し。
 【二十八】 諸因を斷斷し。
 【二十九】 諸因を斷斷し。
 【三十】 諸因を斷斷し。

【三十一】 諸因を斷斷し。
 【三十二】 諸因を斷斷し。
 【三十三】 諸因を斷斷し。
 【三十四】 諸因を斷斷し。
 【三十五】 諸因を斷斷し。

【三十六】 諸因を斷斷し。
 【三十七】 諸因を斷斷し。
 【三十八】 諸因を斷斷し。
 【三十九】 諸因を斷斷し。
 【四十】 諸因を斷斷し。

【四十一】 諸因を斷斷し。
 【四十二】 諸因を斷斷し。
 【四十三】 諸因を斷斷し。
 【四十四】 諸因を斷斷し。
 【四十五】 諸因を斷斷し。

【四十六】 諸因を斷斷し。
 【四十七】 諸因を斷斷し。
 【四十八】 諸因を斷斷し。
 【四十九】 諸因を斷斷し。
 【五十】 諸因を斷斷し。

【五十一】 諸因を斷斷し。
 【五十二】 諸因を斷斷し。
 【五十三】 諸因を斷斷し。
 【五十四】 諸因を斷斷し。
 【五十五】 諸因を斷斷し。

【五十六】 諸因を斷斷し。
 【五十七】 諸因を斷斷し。
 【五十八】 諸因を斷斷し。
 【五十九】 諸因を斷斷し。
 【六十】 諸因を斷斷し。

【六十一】 諸因を斷斷し。
 【六十二】 諸因を斷斷し。
 【六十三】 諸因を斷斷し。
 【六十四】 諸因を斷斷し。
 【六十五】 諸因を斷斷し。

に同うし、速に衆生をして涅槃の道に住せしむべし。と。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、勇猛なる無倦正勤の波羅蜜多と名け、應に是くの如く學ぶべし。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、毘耶波羅蜜多に依る故に、勇猛無倦の精進に安住して、常に應に是くの如く正勤に修學すべく、修學を以ての故に、諸の善の身業に休廢ある無く、諸の善の語業に休廢ある無く、諸の善の心業に休廢ある無く、乃至、有らゆる一切に正勤を皆方便と爲して、菩薩の身・語・心の業を策進するなり。舍利子、然るに諸の世間は、但菩薩の身・語の二業の精進を説きて第一として、菩薩の心の精進の相を説かず。舍利子、菩薩摩訶薩の心の精進の相は無量無邊なれば、吾れ今略して説かん。何等を名けて心の精進の相と爲す。謂はく、菩薩の心に修行する正勤は、若しくは進み若しくは止る、是くの如きを相と爲すなり。舍利子、云何なるを名けて正勤の進止と爲す。舍利子、菩薩の大精進を修行するは、菩提の爲めの故に勤めて精進を行ふものにして、言ふ所の進とは、諸の衆生に於て大悲を發起し、言ふ所の止とは、無我の忍を謂ふなり。言ふ所の進とは、諸の衆生を攝し、言ふ所の止とは、法に於て取らざるなり。言ふ所の進とは、一切を盡く捨て、言ふ所の止とは、布施を厭はざるなり。言ふ所の進とは、淨戒を攝取し、言ふ所の止とは、尸羅を厭はざるなり。言ふ所の進とは、衆苦を堪忍し、言ふ所の止とは、心毀壞する無きなり。言ふ所の進とは、諸の善法を起し、言ふ所の止とは、心常に遠離するなり。言ふ所の進とは、靜慮を攝受し、言ふ所の止とは、心常に寂滅なるなり。言ふ所の進とは、法を聞いて厭ふ無く、言ふ所の止とは、理の如く善巧するなり。言ふ所の進とは、聽いて説くに倦むこと無く、言ふ所の止とは、戲論の法無きなり。言ふ所の進とは、慧の資糧を求め、言ふ所の止とは、諸の戲論を斷つなり。言ふ所の進とは、梵信を増長し、言ふ所の止とは、眞智にて捨を行ずるなり。言ふ所の進とは、五神通を具し、言ふ所の止

【一】 異譯本に「三界に於て都べて

【二】 得る所無し。」とあり。

【三】 理の如く善巧なるなり。

【四】 異譯本に「内心に於て專注すること善巧なり。」とあり。

【五】 梵信。

【六】 異譯本に「諸梵行」とあり。

【七】 眞智にて捨を行ずるなり。

【八】 異譯本に「諸の慧性」に於て、悉く能く棄捨す」とあり。

【九】 遍く漏盡を知るなり。

【一〇】 異譯本に「諸の有漏を盡す」となり。

【一一】 念處。

【一二】 四念處にして、又、四意止、四念住とも云ふ。

【一三】 正斷。

【一四】 四正斷にして、又、四意斷、四正勤とも云ふ。

【一五】 諸根。

【一六】 五根(信等の五善根)にして、第二卷、同名の解、參照。

【一七】 諸力。

【一八】 五力を謂ふ。

【一九】 菩提分。

【二〇】 七菩提分即ち七覺支なり。

【二一】 智にて法を揀擇するなり。

【二二】 異譯本に「諸法に於て分別智を離る」となり。

【二三】 道。

【二四】 八正道にして、又、八支と云ふ。

【二五】 奢摩他を求め。

皆悉く一生に繫屬せる菩薩の智を成就せしめて、如來の十力の一たる處非處の智に比せんと欲するに、百分・千分・百千萬分して一にも及ばず、僧佉分して一にも及ばず、迦羅分して一にも及ばず、伽拏那分して一にも及ばず、烏波尼沙陀分して一にも及ばず、烏波尼沙陀分して一にも及ばず、乃至、算數譬喩の及ぶ能はざる所なり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、毘利耶波羅密多を行ずる故に、如來の是くの如き甚深なる智解を聞く時にも、其の心は驚かず怖畏ある無く、是の智に入ることに於て樂欲の心を生じ、正勤を發起して中に廢捨する無く、是くの如き念を作さん。我れ今勇猛なる精進を修行すれば、假に我が身の皮・肉・骨・血・筋・脈・髓・腦をして、皆悉く枯燥爛壞して遺る無らしむとも、未だ如來の是くの如き處非處の智力を得ざる已來は、其の中間に於て大勇猛なる堅固の精進を發して、終まで懈發する無けん。と。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の勇猛なる無倦正勤波羅密多の堅固の相と名け、應に是くの如くに學ぶべし。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の、毘利耶波羅密多を行ぜん故に、大勇猛を發して無倦に正勤することは、常に應に是くの如くに精進に修學すべく、修學に由る故にて、能く衆生の諸の煩惱の火を滅するなり。舍利子、假に一切の衆生の、過去世に於て有つ所の諸心を、皆衆生の一心の中に入れて、是くの如き衆生の一一の諸心に轉じ、乃至、一切の衆生の一一に、各爾所の諸心の無量に繁雜すること了知すべき難きあつて、是くの如き一切の衆生の一一の心中に、各無量なる貪・瞋・癡等の諸惑の繁雜なるを見せるを、此の一切の衆生の有つ所の煩惱を以て、皆一衆生の一心の中に入れて轉せしめん。舍利子、假に一切の衆生に衆生に展轉して皆是くの如き無量なる煩惱の了知すべき難きを具せしむとも、菩薩摩訶薩は是くの如き念を作さん。我れは當に策勵して、勇猛に勤精進を發して、是くの如き智慧の資糧を尋求し、我が發す所の正勤の力に隨ひ、諸の衆生の貪・瞋・癡の火及び餘の熱惱に於て、我れは要す當に息滅せしめて遺す無く、毒害を斬除して摧碎・散壞すること灰燼

【五】處、非處の智。道理と非道理とを知る智力になり、佛の十力の最初の十力なり。

【六】但、菩薩の身語等。異譯本に「然れども三業に於て精進を發生するに、意を最勝と爲す」とあり。

【七】若しは進み、若しは止る。異譯本には「謂はく、無分別及び有分別なり」とあり。

【八】無我の忍を謂ふなり。此の「忍」は安住の義なり。

【九】法に於て取らざるなり。異譯本に「能く一切の有情を攝受すと雖も、取相無し」とあり。

【一〇】三界を得ざるなり。

難しと雖も、我れ當に精進の鎧甲を捨てずして大勇猛を發さば、必ず定つて速に無上菩提を悟ること難しと爲すに足らざるべく、既に成佛し已らば、我が意欲に隨ひ、法螺の相に於て大音聲を出して、遍く無量無邊なる一切の世界に告げ、諸の衆生の爲めに微妙の法を説き、根性に隨つて、解して皆歡喜せしめん。と。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の勇猛なる無倦正勤の相と名くるなり。

復次に、舍利子、勇猛なる無倦精進の菩薩は、毘利耶波羅蜜多に依る故に、常に應に是くの如き精進にて修學すべく、修學に由る故にて、一切の智慧を具足し成就するなり。舍利子、假に三千大千世界の有らゆる衆生をして、一切隨信行の智を成就せしめ、即ち此の智を用ひて、以て一の隨法行の智を成就せるに比せんと欲するに、百分して一にも及ばず、千分して一にも及ばず、百千萬分して一にも及ばず、僧位分して一にも及ばず、迦羅分して一にも及ばず、伽拏那分して一にも及ばず、烏波摩分して一にも及ばず、烏波尼沙陀分して一にも及ばざるなり。復次に、舍利子、假に三千大千世界の有らゆる衆生をして、一切隨法行の智を成就せしめ、以て一の第八人の智に比せんと欲するに、百分して一にも及ばず、乃至、烏波尼沙陀分して一にも及ばざるなり。復次に、舍利子、假に三千大千世界の有らゆる衆生をして、一切預流果の智を成就せしめ、以て一の預流果の智に比せんと欲するに、百分して一にも及ばず、乃至、烏波尼沙陀分して一にも及ばざるなり。復次に、舍利子、假に三千大千世界の有らゆる衆生をして、一切預流果の智を成就せしめ、以て一の比せんと欲するに、乃至、一來向の智にても是くの如く、一來果の智にても。乃至、不還果の智に比せんと欲するも是くの如く、乃至、阿羅漢の智、若しくは獨覺の智、若しくは百劫を過ぎたる菩薩の智、若しくは不退轉を成就せる菩薩の智に比せんと欲するも是くの如く、乃至、一生に繫屬せる菩薩の智に比せんと欲するにも、皆應に廣く説くべく、無量無邊にして算數譬喩の及ぶ能はざる所なり。是くの如くにして、舍利子、假に十方の無量無邊なる一切の世界の有らゆる衆生をして、

【二】隨信行。

他の言教に隨ひ信じて修行する意にして、聲聞乘中の見道の位の鈍根の者を謂ふ。

【三】隨法行。

自ら法を思惟して行を成ずる意にして、聲聞乘見道位の利根の者を謂ふ。

【三】第八人。

八人地と同じ。八人は八忍にして忍は認證の義なり。即ち苦・集・滅・道の四法忍と苦・集・滅道の四類忍との智を以て三界の見惑即ち種種の妄見を本として起る煩惱を斷ずる位なり。

【三】一來向。

一來果を得る修行中の位を謂ふ。

【三】一來果。

斯陀含果に同じ。聲聞乘の第二位なり。

【四】不還果。

阿那含果に同じ。聲聞乘の第三位なり。

して善根を積集し、一切智智を引生せんと欲する爲めに善根を積集し、諸の衆生を利益せんと欲する爲めの故に善根を積集するなり。舍利子、是くの如き無量の諸の大善根は、皆是れ菩薩摩訶薩の勇猛なる無倦の大精進力の集起する所なり。

復次に、舍利子、是くの如き勇猛なる不倦正勤の菩薩摩訶薩は、常に應に精進して是の法を修學すべくば得る所の福聚は無量無邊なり。今當に廣く福聚の相を説くべし。舍利子、我れ世間の一切衆生の有つ所の福聚を觀るに無量無邊なり。是くの如く、乃至、一切の有學、無學の有つ所の福聚、一切の獨覺の有つ所の福聚は、轉復無量なること不可思議なり。上の如くに有つ所の諸の福聚の等を、假に皆悉く衆生の一毛孔の中に内れ置き、是くの如き衆生の一の毛孔に、皆上の如き福德の聚あること無量無邊不可思議ならしめん。是くの如くにして、假に一切衆生は一切の毛孔に有つ所の福聚を、合集して一の關鍵無き會、大法祠の中に置かしめん。舍利子、是くの如き法祠の功德福聚を百に倍增せば、如來大丈夫身の色相の一を感得せん。是くの如くに、一一の大丈夫の相は、皆是くの如き功德を以て成ぜらるるなり。是くの如くに、一切、如來の身中の大丈夫の相の有つ所の福聚を、皆合して一の眉間毫の相を成じ、是くの如くに一の眉間毫の相に入れる福聚は、又此れに過ぐるること百千倍に滿ちたる大功德の聚合にて、如來の頂上なる觀見し能ふ無き烏瑟膩沙の大丈夫の相を成じ、是くの如くに一肉髻に入れる大功德聚は、又此れに過ぐるること拘瓔百千倍に滿ちたる大功德の聚合にて、如來の大法商佉の相を成ずるなり。舍利子、此の如來の大法螺の相は、無量種の功德の集成たること是くの如きを以ての故に由り、如來は意欲する所に隨ひ、大音聲を出して遍く無量無邊なる一切の世界に告げ、諸の有情の爲めに廣く妙法を説くこと、其の根性の如くにし、聞くに隨ひ信解して悉く歡喜せしむるなり。何を以ての故に。皆精進にて修學する所に由る故なり。舍利子、菩薩摩訶薩は應に是の念を作すべし。是くの如き無上なる正等菩提は、極めて得

【六】眉間毫。

白毫と同じ。三十二相中の一なり。

【七】烏瑟膩沙(Usurisa)佛頂又は肉髻と譯す。三十二相中の一なり。

【八】大法商佉。

大法螺と同じ。第二卷法螺の解、參照。

怯退する無きなり。又、舍利子、假使ひ三千大千世界に、中に滿ちたる熾なる火にても、勇猛正勤なる菩薩摩訶薩は、善根の因縁を生起せんと欲する爲めの故には、精進力を以て、是の熾なる火に於て、中より直に過ぎて怯退する無きなり。又、舍利子、假使ひ三千大千世界に、中に滿ちたる熾なる火にても、勇猛正勤なる菩薩摩訶薩は、諸の衆生を利益せんと欲する爲めの故には、精進力を以て、能く中に於て過ぐることはくの如く、他をして寂靜を得しめんと欲する爲めの故に、調伏するを得ん故に、是の火に逢ふと雖も、皆中より過ぎて怯退する無きなり。又、舍利子、勇猛なる不倦の正勤を發起せる菩薩摩訶薩は、他をして般涅槃せしめんと欲する爲めの故には、精進力を以て、是の火に逢ふと雖も、能く中に於て過ぎて怯退する無きなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の毘利耶波羅蜜多を修行する勇猛の相と名く。

復次に、舍利子、勇猛なる不倦正勤を發起せる菩薩摩訶薩は、毘利耶波羅蜜多を行する時に、懈倦せず堅固にして退かざるに由り、善根にて發す所の無上の大悲に熏ぜらるる故に、恒に勇猛なる大精進力を發し、諸の衆生に於て常に化導を行するなり。又、舍利子、是くの如くに勇猛なる不倦正勤を發起せる菩薩摩訶薩は、一切の時に於て、足を擧げ足を下すにも、常に大菩提心を捨離せず、佛・法・僧に於て恒に珍敬を生じて、念を繫いて前に在らしめ、諸の衆生に於て恒に遍く觀察して利益を爲さん故に、煩惱の勢力の逼奪する所を被らしむるを欲せざるなり。又、舍利子、勇猛なる不倦正勤を發起せる菩薩摩訶薩は、有らゆる已生の諸の妙善根を、一切無上菩提に廻向し、此の善根をして畢竟して盡くる無からしむること、譬へば少水を大海に投ずるに、乃至、劫燒の中にも盡くることある無きが如し。舍利子、菩薩摩訶薩も亦復是くの如くに、諸の善根を以て菩提に廻向するに、亦盡くるある無く、是れを菩薩摩訶薩の勇猛なる不倦の大精進力と名くるなり。又、舍利子、勇猛なる不倦精進の菩薩摩訶薩は平等の行を以て善根を積集するに、諸の衆生に於て平等の行を起

【二五】善根にて、乃至、薰ぜらるる故に。異譯本に「善不善に於て大悲愍を起し」とあり。

布して衆生を饒益すること、亦我が今般涅槃の後に、流布して供養せらるる如くに等しうして異なる無きなり。

舍利子、正勤に安住せる菩薩摩訶薩も亦復是くの如し。毘梨耶波羅蜜多を修行する時に、阿耨多羅三藐三菩提を求めん爲めの故に、能く是の經に於て正法を修行するに、倍勇猛なる正勤大精進力を増し振ひ發して、無量なる諸の衆生等を度脱すれば、我れ是の人を説いて善丈夫と爲す。思覺・觀察するに、倦まず退かずして、勇猛なる精進を明に心に繫在すればなり。舍利子、云何に菩薩摩訶薩は倦まずして精進する。舍利子、菩薩摩訶薩は衆生の爲めの故に菩提を求むる時に、應に數量を以てして求むる所有ることを限るべからず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は是の念を作さざるなり。爾所の劫に於ては我れ當に流轉すべきも、爾所の劫に於ては我れ流轉せじ。と。是くの如きを以ての故に、菩薩は爾の時に難思の鎧を被、生死に處つて是の念言を作さん。假使ひ、我が前際に經し所の生死の、是くの如くなる如く、更に勤苦を受けて生死を經ること倍、前際に過ぐとも、菩提を求むる爲す中には懈怠する無し。と。舍利子、菩薩摩訶薩の是くの如き堅固の弘誓を具足するを、則ち不倦の精進を成就すと名くるなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は云何に勇猛の精進を修行する。舍利子、假使ひ三千大千世界に、中に滿ちたる熾なる火にても、勇猛の正勤を發起せる菩薩摩訶薩は、彼の如來に往觀せんと欲する爲めの故には、精進力を以て、是の熾なる火に於て、中よりして過ぎて、怯れず退かざるなり。又、舍利子、勇猛正勤の菩薩摩訶薩は、大菩薩藏の微妙なる法門を聽聞することを求むる爲めの故には、精進力を以て、是の火に逢ふと雖も、中より直に過ぎて怯退する無きなり。又、舍利子、假使ひ三千大千世界に、中に滿ちたる熾なる火にても、勇猛正勤なる菩薩摩訶薩は、大菩薩藏の微妙なる法を宣説せんと欲する爲めの故には、精進力を以て、是の熾なる火に於て、中より直に過ぎて

し 子は已に我が家に生れたれば 願はくは後にも相ひ捨つる勿く 常に當に我れを憶念して 速に菩提を證せしむべし と。

舍利子、爾の時に、嬰兒は復伽陀を以て父母に報いて曰はく。

我が諸べて化導する所のもの 皆願はくは先づ成佛せんことを 最後に我れ當に 照世の人調御を成すべし と。

舍利子、汝、今當に觀すべし。彼の過去世の勝觀如來の法中の嬰兒は、豈異人ならんや。餘の疑を作す勿れ。今の大自在天子是れなることを。是れより已後、又俱胝那庾多劫を經とも更に退隱せず、是の劫を過ぎて後に轉輪王の聖種族の中に生れ、彼れの當來の父を號して名稱と曰ふこと、我が今の父の 淨飯大王の如く、彼れの當來の母を號して離暗と曰ふこと、我が今の母 摩訶摩耶の如く、彼れの當來の子を號して無憂と曰ふこと、我が今の子羅睺羅の如くならん。舍利子、彼れ既に出家して菩提を悟り已るや、佛と爲ることを成ずるを得、名けて大悲如來應正等覺と曰ひ、十號具足せん。其の佛の壽量は百千の俱胝歳を滿たし、佛身の常光は遍く照すこと、及ぶ所十踰繕那にして、佛の說法處には大會の充滿すること、百踰繕那なり。大悲如來の世に處つて教化するや、聲聞を度せんが爲めに三會に說法せん。第一の大會には、諸の弟子を度すること百俱胝あり。第二の大會には、諸の弟子を度すること那庾多俱胝あり。第三の大會には、諸の弟子を度すること百千の那庾多俱胝あらん。舍利子、其の弟子の中に、一俱胝を滿したるは皆是れ大阿羅漢にして、諸漏已に盡きて復の煩惱無く、自在の慧を得て八解脱を具し、靜慮及び 六神通を成就するなり。舍利子、大悲如來の度する所の聲聞阿羅漢衆の、上に説く所の三會の數量なる如くに、彼の菩薩衆の其の數も亦等し。皆是れ往世に生ぜる所の父母なり。彼の佛世尊は妙法を宣説し、無數の諸の衆生を利益し已り、然る後に涅槃せん。佛滅度の後に、正法の世に住ること俱胝歳を滿さん。舍利子を

【一】淨飯 (Suddhodana) 大王。迦毘羅衛國主にして、釋尊の父王なり。又、白淨と云ふ。何づれも首圖駄那の義譯なり。

【二】摩訶摩耶 (Mahāmāyā)。淨飯王の後妃にして、釋尊即ち悉達太子を生み、七日にして没し、忉利天に生ると謂はる。

【三】十號。人界に於ける佛の十の名稱なり。即ち如來 (Mahāgata)、應供 (Arhat)、正遍知 (正等覺、Samyaksambuddha)、明行足 (Vidyā-ānupā-sambhūta)、善逝 (Su-gata)、世間解 (Lokavid)、無上士 (Anantara)、調御丈夫 (Puruṣa-tanaya-sānubhūti)、天人師 (Śakya-śāstā)、佛 (Buddha-bhagavā) 是れなり。但し、此の中、無上士と調御丈夫、佛と世尊に就いて、開合の異説あり。

【四】六神通。約して六通とも云ふ。

衆生は、今日に至るまで嬰兒に隨逐して我が所に來り至り、又隨つて修學して、無上正等覺の心を發すなり。と。

爾の時に、勝觀如來は、重ねて此の義を宣べんと欲して、侍者苾芻の爲めにとて是の頌を説けり。苾芻當に觀すべし此の嬰兒及び現に前に住する多千の衆の其の心踊躍して誠言を發し我れ當來に法王の如くならんと願ふことを當に知るべし曾て過去世に於て上の如き數量の諸佛の所にて大導師を恭敬し供養し天人世間の者を利益し十那庾の諸佛の所に於て佛に依り家を捨てて正法を持し常に最勝の所行を行じて無上菩提を求めたる爲めの故なることを汝觀ぜよ八萬四千の衆の今現に皆如來の前に住するは曾て久遠の過去世に於て悉く是れ嬰兒の父母にして又此の嬰兒は曾て有らゆる生生の父母をば普く上正覺に安住せしめ更に女人の身を重ねて受けさせじと發願したれば彼れ皆隨つて嬰兒の行を學び菩提心を我が所に於て發せることを今我れ皆當に彼れに記を方に將に世の兩足尊と爲らんとすと授くべく此の因縁に由つて微笑を現せるにて彼れの勝行を我れ能く知り及び未來の諸の所作にて當に人中の大聖主を證すべければなり諸天龍神及び人等の無量百千那庾多は佛の彼れが爲めに授記するを聞き已らば勝觀尊に於て大喜を生ぜんと。

舍利子、爾の時に、嬰兒は佛の授記を聞き心に歡喜を生じ、踊躍すること無量に、悅意泰然として未曾有を得、速疾に其の父母の所に往き詣り、伽陀を説いて曰はく。

是くの如き多千の衆は我が前生の父母にして皆已に菩提に住せりと父母の心は何に趣くやと。

舍利子、爾の時に、父母は復伽陀を以て其の子に報いて曰はく。

子の志の趣く所の如く我が心も亦是くの如くに當に一切智を成すべく此に決定して疑無

【〇】 諸天龍神、以下。
異譯本に「汝等、天龍及び人衆の那由他の數は、我が前に在り。同じく、彼れが爲めに久しからずして當に二足尊を成すべし親しく授記するを聞け。」とあり。

因縁ぞや大善逝だいぜんし 微笑を現發したまふことや世間依せけんい 兩足世尊の微笑を現じたまへることは

其の相には因縁ある無きには非じ 願はくは微笑の因縁の本を演べたまへ 世間を利益する悲愍ひみんの故もて 今いま百千俱胝ひゃくせんくわいていの衆あつて 牟尼世尊むにせそんの前に現住し 耳みみを攝とらめ專注して聽聞せ

んことを樂たのふ 願はくば世間せけん依衆いしゆを愍あはんで説きたまへ 佛は一切衆生の眼まなこと爲し 舎しゃと爲し

救すくと爲し歸趣きしゆと爲して 能く衆生の有らゆる疑を斷じ 世間を憐愍れんみんする利益りやくしや者ものなり 如來は

善く諸の過去を知り 又能く未來に通達して 一切の法に於て疑を生ぜず 及び現在の諸佛

の土にても 遍智なる法王は論自在に 三世に出過したまへる妙如來 我れ今請問したてま

つる世間依 何等の因縁にて微笑を現したまへる 佛は能く永く他の疑網ぎまうを斷つに 一切の

法に於て自ら疑ふ無く 八音はつおんにて微妙の法を暢宣ちやうせんして 善く衆生の憂毒うゆどくの箭やを抜きたまふ

我が心の喜踊きうどすること陳説ちんせつし難く 十指じゆしゆを合せたる掌てのひらに恭敬きやうぎやうを懷いだき 敢て問ひたてまつる法王

大聖尊だいじやうそん 何等の因縁にて微笑を現したまへるかを と。

舍利子、爾その時に、勝觀如來應正等覺は侍者に告げて曰はく、苾芻びしゆ、汝今是の嬰兒の我が前に在るを見るや不なや。對へて曰はく、唯ただ然しかり。我れ今已に見る。勝觀佛言はく、此の嬰兒は、往昔過去

に、曾て六十四俱胝那由多むそくじゆないうた百千を佛の所に於て、供養し、恭敬し、尊重し、讚嘆し、諸の衣服・飲食・臥具・病緣の醫藥及び餘の資物を以て、持ち用ひて彼の諸佛に施し奉り已れり。三菩提に趣向せんと欲

せる爲めの故なり。又、過去の十那由多の佛の所に於て、梵行ぼんぎやうを修行して阿耨多羅三藐三菩提あうたらかんぼだいに廻向せり。苾芻、當に知るべし、今是の嬰兒の將まさある所の大衆の八萬四千は、過去の世に於て、並に

是れ嬰兒の本生の父母なりしことを。何を以ての故に。此の嬰兒は、曾て過去に於て是くの如き願を發せり。願はくば、我れ生を經る在在處處ざいざいじよじよにて有つ所の父母を、皆佛の菩提ぼだいに安住せしめ、又、

諸の母をして、更に第二には再び女身を受くる無からしめん。と。是の願に由る故にて、彼の諸の

【九】八音。佛の音聲に八種の徳あるを謂ふ。即ち極好・柔軟・利適・尊慧・不女・不誤・深遠・不竭の音是れなり。

羅華の如し 世の依怙として光明を作し 形色の微妙なるを甚だ圓具したまへり 世間は衆苦に逼迫せられて 眞の聖道を了知する能はず 正路を踏越して 迷逆するや 譬へば生盲の世に處るに等し 願はくは我れ此の世にて當に成佛して 今の勝觀人中の尊の如くに當に衆生の無量の苦を抜き 及び三次にて燒然する者を救ふべきことを 是くの如き無邊なる百千の衆は 皆我れに隨ひ來つて此に至れば 惟願はくは微妙の法を演宣して 悉く上菩提に安住せしめたまへ と。

舍利子、爾の時に、嬰兒は是の頤を説き已つて、勝觀如來應正等覺に白して言はく。世尊、願はくは、我れ來世に此の世間に於て、當に如來應正等覺を成じて諸の衆生の爲めに正法を顯揚すること、亦今者の勝觀如來の諸の大衆の爲めに廣く妙法を説きたまへるが如くならんことを。と。爾の時に、會中に八萬四千の衆生あつて、復勝觀如來に白して言はく。世尊、我等も亦願はくは、當來の世に於て如來應正等覺を成ずるを得て、衆生の爲めの故に正法を顯揚すること、亦今者の勝觀如來の如くに等しくして異なる無からんことを。と。爾の時に、勝觀如來應正等覺は、是くの如き八萬四千人の増上なる意を了知し已るや、即便に微笑せり。舍利子、諸佛の法爾として、微笑の時に於て、種種の光青・黃・赤・白・紅・頗藍色あつて佛の面門より自然にて發し、遍く無量無邊の佛の世界を照して上梵世に至り、一切の日月の光明を映蔽し、其の光遍く應に作すべき所を照し已つて復還り來り、勝觀如來を右に遶ること百千匝し、已つて薄伽梵の頂髻よりして入れり。

舍利子、爾の時に、勝觀如來に一の侍者ありしが、佛の神變にて微笑を現せるを觀已るや、坐よりして起ち、偏に左肩を覆ひ、右膝の輪を以て地に安處し、佛に向ひて合掌し、躬を曲げて禮敬し、即佛前に於て頤を以て問うて曰く。

我れ今問ひたてまつる佛勝觀尊の 端嚴なること希有にして衆の喜を生じたまへるに 何等の

舍利子、爾の時に、嬰兒は諸の大衆の爲めに伽陀を説き已るや、虚空の中に於て八萬四千の諸の大天子あつて同聲に讚じて言はく。善い哉、善い哉。と。便ち伽陀を説いて嬰兒を讚じて曰はく。善い哉善い哉大智慧。汝の宣説する所は正理に會へり。仁者後顧せば無理と爲らん。正理を有たん者は當に前に越くべし。と。

舍利子、爾の時に、嬰兒は又伽陀を以て諸天に報いて曰はく。

汝諸天の等しく宣説する所の 有理無理の正言を 我れ今汝に問へば汝當に 有理無理の實義を答ふべし。と。

舍利子、爾の時に、諸天は復伽陀を以て嬰兒に報いて曰はく。

若し諸の財寶に住せんと樂欲し 出離の行する所の處を樂はざる 是の無理なる諸の凡愚の如きは 地獄の前道に安住するなり 若し家を捨てて非家に越くを樂ひ 當應に欲を捨てて財寶を棄つべくば 是の人は世に於て正理を有するにて 久しからずして便ち解脱の門を開かん。と。

舍利子、爾の時に、嬰兒は復伽陀を以て諸天に報いて曰はく。

汝の説く所の理と無理との如きは 汝は全くは未だ明に曉る能はざるを觀る 是の有理無理の義の如きを 我れ深く此に於て正に開き悟さん。と。

舍利子、爾の時に、嬰兒は是の語を説き已るや、即便に前進して薄伽梵 毘鉢尸如來應正覺の大會の所に越き、既に到り已るや、佛足を頂禮し、右に遶ること三匝して却いて一面に住り、薄伽梵勝觀如來に於て深く敬仰を生じ、即伽陀を以てして讚頌して曰はく。

常に諸の世間を利益せんことを行する 勝觀の三明もて甘露を施したまへるは 大龍象大師子の如くなり 是れに由つて我れ今常に敬禮す 世間の明照の甚だ得難きことは 猶烏曇跋

【八】毗鉢尸(Vipassin)如來。勝觀と譯し、又、種種觀・種種見とも云ふ。謂はゆる過去七佛の第一佛なり。

と爲し藥又と爲すか。乃至、畢舍遮・非人と爲るかを觀るべし。と。舍利子、爾の時に、嬰兒は諸の大衆八萬四千の前後に圍遶せると與に、勝觀如來の止れる處に往き詣れり。此の嬰兒の佛所に往く時に當つて、福德の力を以て、風日に爲つて損弊せられんことを恐るる故に、上空の中より十千の寶蓋自然にて現じ、用つて其の身を覆へり。又嬰兒の由る所の路に於て、虚空の中に金網を羅ね布き、上妙の華及び細末の香を雨すに、諸天の常に散する所の香に超勝し、扇ぐ清涼の風は天香と合し、周流し飄散すること相ひ續いて斷たず。虚空の諸天は、又行く路に於て、諸の香水を以てして之れを灑ぐに用ひ、覆ふに金羅の種種なる珍服を以てせり。又、彼の諸天は華を雨して道に布くに、光彩相ひ曜き積つて膝に齊し。其の道の側に於て、無量百千の清涼なる池沼は自然に出現し、八功德の水は具足し盈滿して、諸の妙華謂はゆる彌鉢羅華・鉢特摩華・拘賀陀華・奔荼利華を生じ、鮮榮を舍發して池の内に彌滿せり。又、鳧・雁・鴛・鴦・異類の衆鳥の、水上に遊戲せるあり。舍利子、時に彼の嬰兒の由る所の路は、七寶の欄楯にて以て界し、道の側には、諸天の伎樂の、無量千の深遠なる妙音を具へたるが自然にして發り、左右の寶樹は行列して莊嚴し、大道の中に於て、復華を施きたる路は身の前に現れ、供養を爲さん故に以て嬰兒の其の上を遊履するを待ち、其の華の路に於て諸華を承け歩むに、足を擧ぐる時に自然に隱沒し、將に足を下さんとするに及ぶや、華便ち踊現せり。

爾の時に、嬰兒は此の華道を遊き、須臾の頃を経て即便ち廻顧して諸の大衆を觀、伽陀を説いて曰はく。

汝等無理をば應に行すべからず 我が此の路に異れる餘は非理なり 而して我れは常に此の正理に遊ぶ 故に有理最勝の處に往くなり 無量の那庾劫を超過したる 時に復一福もて人身に遇ひ 時に一佛の世間に出でたまふあり 時に勤修して淨き信慧を得 と。

聞衆は 猶烏曇華の如くにして 名稱甚だ聞き難し 億俱胝劫を過ぐとも と。

舍利子、時に兒の父母は是の法を聞き已るや、即家中の二十俱胝の上妙なる財寶を取り、將に兒の所に至つて、之れに語つて言はく。此の諸の財寶は、是れ汝が父母の有つ所の物なれば、汝當に之れを取り、汝の志意にて、信を生ぜる所に隨ひ、任持して施し奉るべし。と。

爾の時に、父母は即是の兒の爲めにとて、頌を説いて曰はく。

此れは是れ汝が父母の 致す所の諸の財寶なれば 心の敬信する所に隨ひ 汝當に持ちて布施すべし 若しは金若しは珍寶は 家中に甚だ豊積したり 心の敬信する所に隨ひ 汝當に持ちて速に施すべし 衣服坐臥の具 華鬘及び塗香も 心の敬信する所に隨ひ 汝持ちて歡喜して施せ 佛及び法僧 無上の福田の所に於て 諸の群生を利せん爲めに 當應に布施を行すべし と。

舍利子、爾の時に、嬰兒は其の父母の説く所の頌を聞き已り、復父母の爲めにとて頌を説いて曰はく。

我れ今勝觀 世間の依怙の所に往き 當に廣く供養を設くべし 群生を利せんが爲めの故に 有らゆるもの 天上人中の 樂を希求せんと欲せば 應に我れの 勝觀如來の所に詣る所に隨ふべし と。

舍利子、爾の時に、嬰兒は 念の正知を以て四方を觀視して、父母に白して曰はく。父母當に知るべし、我れ今應に 薄伽梵勝觀 如來應正等覺の所に往くべきことを。と。是に於て、衆人は是の語を聞き已るや、皆大に驚愕すらく。云何して、嬰兒は初めて生るる日に當りながら、便ち能く人と言議を往返し、又能く徒步にて造詣らるるありや。と。時に八萬四千の衆生あつて、是の奇異を聞き、皆來り雲集して是の言を作さく。我等當に、此の嬰兒は是れ何等の類にして、天と爲し龍

【六】 念の正知を以て。異譯本に「是の思惟を作して」とあり。

【七】 薄伽梵(Bhagavat)。婆伽婆と同じ。

は皆悉く盈滿せり。是の時に、長者は惡苾芻に爲つて教化せられ、既に其の語を受けて斷見を生じたり。長者に、妻の、名けて焔慧と爲すあり。容色盛美にして人に爲つて重んぜられしが、彼れ一男を生めり。形貌端嚴にして衆觀て厭ふこと無く、第一の圓滿なる淨色を成就せり。曾て過去の無量百千那由多拘胝の佛の所に於て諸の善本を植ゑたるが、初めて生るる時に當つて、三返微笑し、又是の言を發せり。奇なる哉、奇なる哉、云何にして今は斷見の家に生れたるか。と。其の母聞き已るや、驚恐・惶懼して身の毛爲めに堅ち、諸の女人と之れを棄てて逃避せり。舍利子、時に諸の女人は審に悉さんと欲する故に、還り來り近く住つて觀察すらく。是の兒は何等の類と爲す。天か、龍か、藥叉たるか。傳達縛たり、阿素洛たり、揭路茶たり、緊捺洛たり、牟呼洛伽たり、究槃茶たり、畢舍遮・人非人たるか。と。舍利子、時に此の嬰兒は再び是の言を發して、諸女に告げて曰はく。汝は怖れ走ると雖も我れは甚だ安樂なり。と。時に此の嬰兒は諸の女人の爲めにとて、頌を説いて曰はく。

汝當に義利を樂み 義利に於て怖るる勿るべし 我れ當に汝等を度して 邪道を脱せしむべし
汝安隱なれば怖るる勿れ 應に前の惡友を怖るべし 我れ當に汝等を度して 邪見を脱せしむべし と。

舍利子、時に彼の父母及び餘の大衆は、是の嬰兒の説ける伽陀を聞き已つて、便ち兒の所に往くに、爾の時に、嬰兒は其の父母の爲めにとて、頌を説いて曰はく。

家中に凡べて有る所の 廣大なる諸の財穀を 速に持ち來り見に與へて 佛及び聲聞に供へよ
彼の大聲聞衆たる 照世の勝觀尊は 三界圍輪の中にて 都べて與に等しき者無し

彼の大聲聞衆たる 照世の勝觀尊は 廣く妙法を闡揚して 諸の群品を利益したまふ 彼の大聲聞衆たる 照世の勝觀尊は 身に三十二の 大丈夫の威相を具したまへり 彼の佛聲

【五】天、乃至、牟呼洛伽。謂はゆる八部衆なり。

に以て之れを耕し、彼の一一の身は、又一百の極悪なる商法に爲つて啜食せられ、又、空中に於ける大熱鐵丸の猛焔の赫然として光色熾盛なるが、空よりして墮ちて常に其の身に雨れり。是れ諸の罪人の、惡業の故を以て、是くの如き等の種種の楚毒を受くるなり。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

鐵丸の猛焔は飛電の如く、畏るべき無量百千種なる。其の身に當つて墮墜し、熾然たるに恒に種種の苦を受く。又身内に於て遍く流轉する。炎熾の猛威は逢ひ近き難く、騰焔高く踊ると百由旬にして、流火は遍く身の毛孔より出づ。又彼の衆生の一の舌は、盡く無量の鐵犁に爲つて耕され、一切の舌分は皆分裂する。是くの如き苦受は恒に纏繞す。斯れ惡友に親近し已れるに由つて、能く斯くの如き大苦衆を感ぜるにて、又具戒者に遠離せるに由つて、速に惡道に墮せしむるを致せるなり。と。

舍利子、時に彼の非法の六の惡政芻は、惡教に由る故にて、命終の後に皆阿毘大地獄の中に生じ、一一の受身は縱廣等量にして三十踰繕那なり。彼の一一の身に皆千の口を生じ、一一の口に各二舌を生じ、是の一一の舌の廣長の量は等しく四踰繕那なり。一一の舌上に五百の鐵犁ありて、鐵牛之れを挽きて以て其の舌を耕すに、是の諸の罪人は苦痛を受くと雖も、大苦逼るが故に號叫するに遑あらず。又、頭上に於て、各萬億の獄卒あつて、手に害具の刀・鋸・矛・矧を執り、斫り刺し破り裂きて、其の身首を壊せり。此の獄中に在ること壽萬億歲にして、是くの如くに展轉して、復諸の餘の大地獄の中に往き、具に辛酸種種の苦楚を受けたり。何を以ての故に。彼れの佛の聖教を隳毀せるに由る故なり。

舍利子、爾の時に當つて、大長者あつて名けて安隱と曰へり。財富無量に資産具足して、多くの諸の珍寶たる金・銀・瑠璃・珊瑚・末尼・眞珠・貝玉は備り有らざる無く、又多くの僕使・奴婢・財穀・庫藏

【四】商法(Shan-fan)。螺貝と譯す。

の故に、彼の諸の惡苾芻の化する所の家に詣り、暫く其の門に至るや、便ち婦人、丈夫及び諸の男女に爲つて、共に毀罵し非理に訶責せられたり。兇惡の言を以て面挫辱を陳べ、諸の苾芻の爲めに、而ち頰を説いて曰はく。

汝等は正法を知る能はず 汝等は聖道を迷失せり 汝等は淨教を退捨せり 汝等は皆當に地獄に墮つべし と。

舍利子、彼の諸人等は、是の語を説き已つて、阿羅漢に於て倍更訶罵し、既に訶罵し已るや、復種種の言詞を以て佛を罵り、即佛前に於て伽陀を説いて曰はく。

如來の説く所の法は虚妄なり 謂はゆる諸行は悉く無常なりとは 又諸法は皆無我なり 及び恒無く變らざる無く 諸行にはすべて堅實ある無く 皆是れ虚偽忘失の法なりと説くは 説く所空華にして有る所無く 但能く彼の愚夫を誑惑するのみ と。

舍利子、彼の諸人等は、是くの如き語を説きて佛を輕んじ毀り已り、倍憤恚を増して、又、佛前に於て伽陀を説いて曰はく。

如來の説く所は一切の法には 決定して 我無く衆生無く 壽命ある無く數取無く 亦作者及び受者無しとなり 而るに今現に諸の世間を見るに 能く施を行ひ及び受くる所 并に餘の種種の受用の人 及び廣大なる諸受を覺する等あり 當に知るべし定つて我無しと宣説せば 一切皆應に惡道に墮すべきことを と。

舍利子、爾の時に當つて、諸の不善人の、同聲に是の非法の語を説ける者、大小の男女六十八俱胝千の衆生あり。皆惡苾芻に化導せられたる故なり。是の惡業を行へる彼れの命終し已るや、同じく無間大地獄の中に生れて、身を受くること龐大にして魚形人首に、其の舌は長廣にして地に彌り布けるに、周遍に釘を下さること薑を殖えたる田の如く、又、舌上に於て、衆多の鐵犂は常

【三】我、乃至、受者。何づれも、外道の主張する十六神我の各一なり。

子、是の六苾芻は、恒に非法を説きて、我有り、人有り、常有り、斷有りとし、結ぶこと固く、周旋更相ひ信任し、深き隱所に趣きて同じく共に謀議すらく。我等應當に各各人別百家を誘化し、用つて徒黨と爲すべく、又、百家をして眷屬に傳へ告げ、是くの如くに親姻に展轉して傳へ告げしめば、或は當に五十の百の等に至るべし。と。是の議を作し已るや、便ち往いて教化するに、若しは村若しは城、郊野・店肆より、或は王都及び餘の邦國に至るまで、一一の諸家に悉く皆往き趣き、既に彼に到り已るや、正法を説かずして、佛世尊に於て先づ毀謗を行へり。舍利子、彼の惡苾芻は云何に毀謗せるか。舍利子、諸の惡苾芻は衆人に告げて言はく。世間には、決定して我有り、衆生有り、壽命者有り、數取者有り。若し諸の世間に、定つて我及び諸法ある無くば、誰れか去り、誰れか來り、誰れか坐し、誰れか臥し、誰れか語り、誰れか默し、誰れか能く施を行ひ、誰れか是れ受くる所、誰れか能く受用し、誰れか苦樂を受け、誰れか能く不苦・不樂を受くるある。若し人の來つて汝等に語つて、世間には決定して我無く、衆生無く、壽命者無く、數取者無しと言ふあらば、當に知るべし、是の人は汝等の怨と爲し、汝の善友には非るなり。と。舍利子、爾の時に、諸の惡苾芻は重ねて更婦人、丈夫及び男女を誘化して、是くの如き言を作さく。若し人あつて、我等の法無しと説かば、當に知るべし、其の人は不善者たり暴惡者たり。是れ汝の惡友にして、汝の善友には非るなり。と。復更化して言はく。汝等諸人は是れ聰慧の者なれば、深く能く我が説く所の義を領解せん。今より已往、若し諸の惡友・非善友來つて、汝が爲めに、世間には決定して我等の法無しと説くに當つては、汝等は應に輒く相ひ親昵し、交願し、往還し、承事し、供養すべからず。と。舍利子、諸の惡苾芻は是くの如き化を行ふこと半月の間に於て、人ごとに各誘ひて、五百家の歸して其の見に従ふことを滿すを得たり。舍利子、爾の時に諸の苾芻あり。是れ阿羅漢なり。永く一切の煩惱の垢穢を離れて、是れ勝觀如來應正等覺の眞實の弟子なり。乞食等の諸の因縁の爲め

乃至、命終あうじゆうの中うちにても暫くも廢すること無かるべし。甚深なる空法をば當に勤めて信解して、乃至、命終の中うちにても暫くも廢すること無かるべきなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩ぼさつまかさつの、後の惡世に於て起す所の四法と爲す。若し是くの如き四法を成就する菩薩摩訶薩ぼさつまかさつあらば、當來の世に法の盡きんと欲する時、正法を誘そまする時、正法を滅ほろぼす時、犯戒の徒黨たうたうの大に強盛なる時、熾然しぜんとして順世外道の惡呪術あくじじゆつを追求する時、劫こふの濁亂する時、有情じゆうじやうの濁る時、壽命じゆめいの濁る時、煩惱ぼんごうの濁る時、諸見しよけんの濁る時に於て、菩薩摩訶薩ぼさつまかさつは、當に爾の時に於て、應に三處に住して依止いじと爲すべし。何等を三と爲す。謂はゆる應に阿蘭若あらんにやの處に住すべく、應に禪ぜんの息滅する處に住すべく、應に佛菩提ぶつぼだいの處に住すべし。舍利子、是れを菩薩摩訶薩ぼさつまかさつは當來の惡世には三處に住すと爲す。應に是くの如く持すべきは、是れ即ち毘梨耶波羅蜜ひりやはらみつ多を具足する故なればなり。

爾その時に、世尊は重ねて此の義を宣のべんと欲して、頌じゆを説いて曰はく。

最勝なる法に於て遠離せず 生老病死の苦を盡さん爲めに 常に勤精進こんじやうじんして妄念まうねん無くば 當に速に自他の利を成就すべし 若し是の善き説法に於て 聞き已まつて正しき思惟しゆいに安住するあ

らば 當に知るべし我れは彼れの大師たり 彼れは則ち是れ我が眞の弟子なることを 若し

是くの如き法を聽聞せず 設たまひ聞くとも正しき思惟しゆいに住せずんば 是の人は當に諸の惡道に趣くべきこと 猶彼の衆流しゆりうの大海に歸するが如し 百千の俱胝くじ那庾なご劫こふにも 諸佛の出現するは

甚だ難しと爲し 復暫くは遇ふと雖も親しく奉たげずんば 當に惡魔あくまに隨つて自在に轉ずべし

復次に、舍利子、乃往に過ぎ去ること九十一劫に、爾の時に當つて、佛あつて世に出で、名けて

勝觀しやうくわん如來・應正等覺おうしやうとうがく・明行めいぎやう・圓滿めいげん・善逝ぜんじ・世間解せけんげ・無上丈夫むじやうぢゆう・善調御士ぜんてうごし・天人師てんじんし・佛薄伽梵ぶつはくかふんと曰へり。舍利

子、彼の佛の法中に六の苾芻びしゆあつて、諸の惡行を行ひ恒に相ひ隨逐ずいじゆくせり。一を善見ぜんけんと名け、二を

善樂ぜんらくと名け、三を歡喜くわんぎと名け、四を調善てうぜんと名け、五を蘇逶遮そゑしやと名け、六を火天授くわてんじゆと名けたり。舍利

【二】劫こふ、乃至、濁る時。謂はゆる五濁の惡時代を指す。

衆を護らん爲めの故に前陣に處るに、惟果敢・雄猛なる丈夫あつて、驍勇を合せ率ゐて勍敵を抗拒し、己が衆を護らん爲めに大軍の前に處り、威を振ひて住るが如し。是くの如くに、舍利子、當來の世の正法の滅せん時に於て、正法を懷ふ者の當に現前すべき時に、諸の衆生あつて、深心を發起し寂滅を欣樂して、能く是の無上の法寶に於て、乃至、少分の要義だにをも受持すとも、當に知るべし、是の人も亦復是くの如くに、正勤堅固なる甲冑を被、勇猛なる大精進力を發起して、諸魔の有らゆる軍陣を摧碎するものなることを。何を以ての故に。舍利子、若し衆生あつて、是の經典に於て、乃至、一四句の頌だにをも受持して誹謗を生ぜず、隨喜し讚嘆して、此の經典は眞に是れ佛説なりと云うて、多くの人の前に於て廣く宣べて顯示せば、當に知るべし、是の人は即隨喜を爲して、去來・現在の諸佛の説かれたる經法を讚説するものなることを。舍利子、如來は、是の人は但少分の功德の果報を得とは説かずして、我れは、是の人は乃ち能く虚空の量の如き大功徳の聚を成就せりと説くなり。何を以ての故に。舍利子、我れは説いて、是等を名けて善人と爲せばなり。是の善人の如きは甚だ得難しと爲す。謂はく、恩を知る者及び恩を報する者なればなり。舍利子、是くの如き恩を知り及び恩を報する者は、當に知るべし、是れ人中の珍寶たることを。又、舍利子、當來の世の正法の滅せん時、諸の惡魔等の威勢の現ぜん時に、若し衆生あつて、如來の所に於て信重して捨てず、是の經を受持して遠離するある無くば、我れは是の人を第一の丈夫にして、善丈夫たり勝丈夫たり健丈夫たり大丈夫たりと説かん。當に知るべし、是の人は則ち如來の勝法の朋侶たるにて、惡黨を朋とすることを許し現すことを爲す者に非ることを。當に知るべし、是の人は實の行を行する者なることを。是くの如くなれば、舍利子、菩薩摩訶薩は應當に堅固なる正行を修習して、乃至、命終の中にも暫くも廢すること無かるべし。諸佛の所に於て、當に勤めて衛護して、乃至、命終の中にも暫くも廢すること無かるべし。正法の所に於て、當に勤めて攝受して、

【一】正行。
異譯本に「大乘の正行」とあり。

卷の第四十六

菩薩藏會 第十二の十二

毘梨耶波羅蜜多品 第九の二

復次に、舍利子、當來の世に、法の滅せんと欲する時に、復、菩薩摩訶薩の、大乘に安住して毘梨耶波羅蜜多を行ずる者あつて、是等の如き諸の惡業生の、是の正法を誹謗し毀滅するを見已るや、倍勇猛なる正勤大精進力を増し振ひ發して、是の經典、大菩薩藏の微妙なる法門に於て、慇懃に聽受し書持し讀誦して、廣く他人の爲めに開示し演說せん。舍利子、是くの如き菩薩摩訶薩は、爾の時に當つて應に四つの想を起すべし。何等を四と爲す。舍利子、謂ふ所のものは、我が父の寶藏は久しからずして當に滅すべし。此れを爲らん故に由つて、佛薄伽梵釋迦牟尼如來應正等覺は、百千那庾多拘胝無數の大劫に於て、精勤に難行・苦行を修習して、方に乃ち是の正法の寶藏を獲たまへるなるを。是の故に我れ當に勤精進を發して、此の藏を奉持し此の藏を遍持すべく、極めて當に此の藏を遍く持し廣く通すべし。法寶をして久しく滅せざらしめんと欲する故に。と。舍利子、譬へば、人の惟一子あつて憐念・愛重するに、大福相を具して觀るに厭き足ること無きあり。是の人、後の時に、趣く所あつて此の子を携へんと欲し、將に危難を涉らんとするに、顛墜せんことを恐るる故に手を以て執持し、又等しく遍く持ち、極めて等しく遍く持ちて、我が子をして險難の處に墮ちしむること勿きが如し。是くの如くにして、舍利子、彼の善男子も亦復是くの如くに、深く奉信を懷きて我れを敬重し、是くの如き無上の法寶を捨てざらんとて、志恒に清淨なる寂滅を希求し、惡世を經と雖も而も能く最勝なる正法を攝受するなり。舍利子、我れ今此の菩提の因縁を以て、無上の正法を是の人に付囑せん。又、舍利子、譬へば、世間にて大軍の戰ふ時に、少しく衆生あつて、

時には 惡魔は當に彼れの障礙を爲すべし 謂はく此れは最勝此れは眞實なりとて 非勝實なるに於て勝實の想もて 反つて誇毀を佛の正教に加ふれば 當に知るべし速に地獄に墮すべきことを 若しくは衆生あつて佛所に於て 深く堅牢なる愛と恭敬とを起し 是くの如き正法を聽聞し已り 歡喜し隨順して稱讃せんか 惡魔は彼れの既に喜を生ぜるを知り 諸の眷屬と同じく愁怖し 便ち種種なる驚畏の相を興して 彼の人の所に於て留難を生じ 或は當に苾芻の形を變作し 詐つて相ひ親しむを現じて竊に言議して 謂はく此れは正しき菩提の道に非るに 何故に此れに在いて奔り越くと 諸の衆生の是の經に於て 將に堅固に正勤に住するを發さんとするあるや 又誘附して輕弄せられ 斯を用つて廢捨して修學せじ 既に魔羅の惑亂する所を被れば 魔の意に隨ひ轉じて拘執せられ 乃ち此の經は正法に非ずと告げ 便ち寂滅に於て永く棄捨せん 彼れ又大導師を棄捨し 復無上の法を勤求せず 又復我愛を發生し已つて 速疾に彼の地獄の中に越かん 爾の時當に少しの衆生の 此の空法を樂欲し勤求するあるべからんも 和合して同じく修習するを得ずして 乃ち各他方の土に流散せん 是くの如き無上なる最勝の法も 諸べて當に聞く者は皆輕毀し 法を持する者は怖れて遠く逃避すべき 是の相當に未來世に興るべし 此の國には全く法を持する者無く 遠方に有りと雖も未だ多しと爲さず 縱ひ此の經を受持する者ありとも 悉く皆捐捨して諮問する無けん 世間の依怙たる聖教の中にて 是くの如き甚深なる無上の法なるも 無量の障礙の未來に在ることは 了然として猶現在住するが如し 時に法を持する賢善者あつて 身命を顧みず空閑に住して 是くの如き法を修習し演宣せば 速疾に往いて善趣に昇るなり 』と。

蜜多を行ぜん故に、是の經典に於て勇猛増上なる精進を發動して、書寫し受持し研尋し讀誦し、廣く他人の爲めに開示し演說するあらんに、彼の諸人は、等しく當に諸魔に爲つて執持せられ、煩惱・業障に覆蔽せられて、世間の業を喜び、世間の業を樂み、方便して世間の事業を勤求し、世の談論に於ては喜樂轉増し、方便して世間の談論を勤求し、睡眠を喜樂し、方便勤求して衆亂を喜び衆亂を樂み、方便勤求して衆亂に樂著し、是の經典に於ては受持する能はず。又轉誦して其の義を研尋せず。亦他の爲めに廣敷開示せざるなり。舍利子、佛の教中に於ては、餘の能く内損を爲す所のものある無く、餘の能く速に毀滅する所のある無し。唯懶惰の諸の惡苾芻のみを除く。是れを第十の障礙の法と名け、諸べて智ある者は應當に覺知すべく、應に隨ひ轉すべからざるなり。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

正法の滅せん時には障礙多く 當に種種なる惡魔の業を興し 白淨の法に於て修習せず 亦勝れたる涅槃を樂求せざるべし 薄少の智慧にて惡覺を具し 正法に安住することを求めずして 備に種種なる非法の行を行ひ 諸の惡趣に遊ぐこと定つて疑無し 彼の諸の衆生の命終に臨むに 能く救護を爲す者ある無く 又彼の親教し及び傳授するものも 命終るや當に三惡の趣に墮すべし 百千の拘胝那庾劫に 世の利を求めん爲めに諸苦に涉り 常に三火に爲つて燒然せらるるを 云何にして彼れをして速に解脱せしむる 我れ已に無等の覺を證成したれば 微妙なる梵法輪を轉じ 諸天世間の轉ずる能はざるを 今故に轉じて衆生を度せんと爲すなり 是くの如くなるに彼の時の諸の群生は 我が世間に得難き法を捨てて 惡魔の諸の品類に習近すれば 當に無邊なる極重の苦を受くべし 彼の施戒等 菩提聖道の因縁を習行するを障へ 若しくは佛教に精勤するあるには 當に彼の正道の路に迷惑せしむべし 諸べて是くの如き法 無我の諸の空理を宣說するを聽聞し 此の法に安住して正しく行するある

【二五】佛の教中に於ては、乃至、毀滅する所のある無し。異譯本に「時に、彼の苾芻の、如來の教に於て愛樂を生ずる者は、如來の聖教を斷滅することを欲せず」とあり。

惡見を起し、誹謗して信ぜず、凡べて遊履・經行・往來する所にて、種種の言を以て常に謗毀を興する者、如來は此に於て悉く能く了知するなり。舍利子、菩薩摩訶薩の、勤精進を發して大乘に住する者は、爾の時に當つて應に四つの想を起すべし。何等を四と爲す。一には、自を調伏する想を發起すべし。二には、應に自身の作す所の事業を觀すべく、應に他の有つ所の諸事を觀すべからず。三には、彼の有情に於て悲愍の想を起せ。四には、空閑の處に住して、自他の心に於て隨つて護る想を起せ。舍利子、是くの如き四想を、大乘に住する者は、若し誹謗せらるるとも應當に發起すべきなり。又、舍利子、當來の世には、無量の衆生は諸の邪見を受けて、彼の正法を演説する苾芻に於ては、信受する者は少くして、敬重を懷きて經義を請問せず、又、供養・親近・往來せず、亦、承事せずして返つて凌蔑を生じ、非法を説く苾芻に於ては信受する者多ければ、大勢力を得て、諸の衆生に爲つて、共に敬重して經義を請問せらる。是の非法者を供養・稱讚する此の緣に因る故にて、復是の經に於て毀謗・譏笑するなり。舍利子、爾の時に當つて、諸の衆生の、等しく是の經典に於て欣樂せざる者は、斯の毀謗を聞きて倍欣樂せず。諸の欣樂する者は、謗毀せらるる故に便ち此の經に於て樂欲することを捨離し、樂欲を離るることを教ふる諸の苾芻は、等しく轉更に熾盛に、是の經典を轉讀する者をして、衆會の前に於て開示するを得ざらしむるなり。是れを第八の障礙の法と名け、諸べて智ある者は應當に覺知すべく、應に隨ひ轉すべからざるなり。又、舍利子、當來の世には、諸の苾芻の、貪愛に蔽はれて多く劫盜を行ひ、世間の三種の弊法を欣樂するあらん。當來の世には、諸の苾芻の、貪愛に蔽はれて多く劫盜を行ひ、世間の三種の弊法を欣樂するあらん。何等を三と爲す。一には、世間の衣鉢を追求することを欣樂するなり。二には、世間の飲食を追求することを欣樂するなり。三には、世間の戲論・綺飾の文頌を追求することを欣樂するなり。是くの如き三法は是れを第九の障礙の法と名け、諸べて智ある者は應當に覺知すべく、應に隨ひ轉すべからざるなり。又、舍利子、當來の世に正法の滅せん時に、諸の菩薩の、大乘に安住して毘黎耶波羅

生じて、是の經典に於て流轉するを得ずして、意を起して諸餘の事業を造作せしむる、是れを第六の障礙の法と名け、諸べて智ある者は深く當に覺知すべく、應に隨ひ轉ずべからざるなり。又、舍利子、諸の苾芻の、勤精進を發して、是の經典に於て誦習を欲求するあらんに、爾の時に、惡魔は、將に壞り滅さんとする故に、諸の形相の、或は俗人の形或は出家の形を作して、其の所に來り至つて其の意を擾亂し、是の經に於て受持する能はずして、反つて謗毀を加へ、復更に心を起して餘の事業を樂はしむる、是れを第七の障礙の法と名け、諸べて智ある者は深く當に覺知すべく、應に隨ひ轉ずべからざるなり。又、舍利子、當來の世に正法の滅せんと欲するに、爾の時に諸の年少き苾芻あつて、是の經典に於て清淨なる信心を起して我が法律の中に在らんと愛樂を生じ、毘梨耶波羅蜜多を行ぜん爲めの故に、勤精進を發して阿耨多羅三藐三菩提に於て深心に安住し、又是の經に於て恭敬して聽聞し、既に聞くことを得已つて大歡喜を生ぜん時に、諸の年少の苾芻は、當に鄒波陀耶及び阿遮利耶の二の本の學師に爲つて障礙せられ、自法に於て樂欲することを生ぜざらしめられん。是の時に、二師は而ち之れに語つて言はん。汝の持する所の經は、此れは佛語に非ず、佛の菩提に非ず、是れ正法に非ず、毘奈耶に非ず、大師の教に非ず。と。時に彼の苾芻は、師の教誨を聞きて信受し領解し、佛の菩提に於て即便に棄捨せん。是の時に、二師は重ねて苾芻に語らん。汝等、應當に精進して、我が説く所の如き若しは法若しは律を修學すべし。と。時に諸の苾芻は、信受し領し已つて、先に修習せる所の増上の善根を、師に爲つて壞られて皆悉く斷滅せん。舍利子、彼の諸の苾芻は善根を斷じ已るや、復惡魔に爲つて誑惑せられ、誑惑に由る故にて佛の正教に於て障法の業を造り、命終の時に臨んで、惡境前に現じて惛癡・迷亂し、乃至、大死都べて皆集り現じ、而して復重ねて地獄の業を興し感ずるなり。舍利子、是くの如き當來の諸の不善の事を、如來は此に於て悉く能く了知するなり。又、舍利子、當來の世に、諸の年少き苾芻の、是の經典に於て諸の

覺知して、應に隨ひ轉すべからずと爲す。舍利子、諸の苾芻の、勤精進を發して、是の經典に於て求聞し誦習するあらんに、爾の時に、惡魔は、經を持つる者をして口噤して語らざらしめ、便ち是の經に於て建立するを得ざる、是れを第一の障礙の法と名け、諸べて智ある者は深く當に覺知すべく、應に隨ひ轉すべからざるなり。又、舍利子、諸の苾芻の、勤精進を發して、是の經典に於て求聞し誦習するあらんに、爾の時に、惡魔は、經を持つる者をして其の眼目を患へしめ、便ち是の經に於て建立するを得ざる、是れを第二の障礙の法と名け、諸べて智ある者は深く當に覺知すべく、應に隨ひ轉すべからざるなり。又、舍利子、諸の苾芻の、勤精進を發して、是の經典に於て求聞し誦習するあらんに、爾の時に、惡魔は、經を持つる者の身の諸の支節をして一時に皆病ましめ、便ち是の經に於て建立するを得ざる、是れを第三の障礙の法と名け、諸べて智ある者は深く當に覺知すべく、應に隨ひ轉すべからざるなり。又、舍利子、諸の苾芻の、勤精進を發して、是の經典に於て求聞し誦習するあらんに、爾の時に、惡魔は、經を持つる者をして、其の住處に於て心喜ばず、尋いで捨棄せんと欲せしめ、便ち是の經に於て建立するを得ざる、是れを第四の障礙の法と名け、諸べて智ある者は深く當に覺知すべく、應に隨ひ轉すべからざるなり。又、舍利子、諸の苾芻の、勤精進を發して、是の經典に於て求聞し誦習するあらんに、爾の時に、惡魔は、經を持つる者をして、互に忿恚を生じ、忿の爲めに心を壞つて殘害を相ひ加へしめ、便ち此の經に於て建立するを得ざる、是れを第五の障礙の法と名け、諸べて智ある者は深く當に覺知すべく、應に隨ひ轉すべからざるなり。又、舍利子、諸の苾芻の、勤精進を發して、是の經典に於て誦習を欲求するあらんに、爾の時に、惡魔は、經を持つる者をして、言諍の事を起し、鬪諍の事を起し、誹謗の事を起し、乖離の事を起し、誹罵の事を起し、是の事に由る故にて、彼此の口中に互に矛盾を生じて、互に相ひ言訟し、互に相ひ殘害し、互に相ひ乖競し、是くの如き諍競の事を起すに由る故にて便ち障礙を

雖も信ぜざるに 多福は聞き已るや 頂戴すること鬘の如けん 諸の少福の者は 聖教に非ずと言ひて 當に惡趣に墜つべきこと 盲の坑に墮する如し 多福の人の 聞いて歡喜を生じ 當に善趣に往くべきこと 酥を水に滴すが如し 諸の薄福の者は 聞いて憂惱を生じ 苦を長夜に受けて 黑暗を脱せじ 少聞を得と雖も 復魔に燒され 佛菩提を謗つて 速に地獄に入らんと。

復次に、舍利子、諸佛如來は清淨なる妙智を具足し成就して、乃至、能く四衆の心を知れば、若し一の苾芻・苾芻尼・卍波素迦・卍波斯迦だも、當來の世の正法の滅する時に於て、或は是くの如き經典を聽聞して、隨順し領受するあり、或は聞き已つて輕毀・誹謗するあり、或は衆生の全く聽聞せざるあらんか、是くの如き一切を、如來の淨智は悉く能く了知するなり。舍利子、若し菩薩摩訶薩及び餘の一切の諸有の衆生あつて、是くの如き經典を聞き已つて領受し、精進に修習せば、當に四種の無障清淨の法を成就するを得べし。何等を四と爲す。一には、尸羅の無障清淨を成就し、二には、具足の無難清淨を成就し、三には、諸佛に逢値して親事・供養する無障清淨を成就し、四には、慈氏佛に見ゆるに、初に見ゆるを得已る無障清淨を成就するなり。舍利子、彼の諸の衆生は、是の經を聞き已るや、上に説く所の如き諸の妙善根を其の方便に隨つて必ず當に獲得すべく、舍利子、是れを菩薩摩訶薩は正勤波羅蜜多を修行する故に、四種の無上清淨の法を成就すと名くるなり。

復次に、舍利子、當來の世に正法の滅する時に於て、諸の菩薩摩訶薩の、大乘に安住して正勤波羅蜜多を修行する者あつて、是の經典に於て勤めて修學を加へ、大精進を發して聽聞し・受持し・書寫し・讀誦して旨趣を窮尋し、廣く他の爲めに説きて敷揚・開顯せん。爾の時に、當に十の障礙の法の世間に出現すること、諸べて智ある者は深く當に覺知すべきも、應に隨ひ轉すべからずして、但當に勇猛の精進を發起して是の經を受持すべし。舍利子、何等を名けて十種の障礙を智者は

【四】 具足の無難清淨を成就し。異譯本に、「如理相應の諸の善根力を獲得し、清淨潔白無障礙の法を具足す。」とあり。

念を作さく。是の妙果の色・香・味を具せる如きは、我れ生れしより來未だ曾て食するを得ざりしなり。當に更に勤精進を發して、重ねて海中に入り、其の手足を運んで餘の果を斂收すべし。と。是の念を作し已つて海濱に至り、通逼して之れを観るに、了に復見えざれば、深く追悔を起して、大憂惱——我れ先きに何すれぞ多く收取せずして、乃ち是の無量の妙果を失はしめたるか。の——を生ずるが如し。是くの如くに舍利子、我が滅後の後の五百歳に、無上の正法の將に滅せんとする時に於て、當に無量の諸の衆生あつて、等しく少信・少施・少戒・少慧・少修精進なるが、何等かの差別を以ての因縁に隨ひ、是くの如き經寶を聽聞するを得るに遇ひ、既に法を聞き已つて、此の經中に於て但少分微淺の義を得、乃至、一四句の頌を受持するのみにて、復惡魔に擾亂・障蔽せられ、衆人に爲つて敬聞及び供養・稱讚・信奉せられざれば、是の持經の者は、彼の衆人の敬重せざるを知る故にて、便ち此の經に於て捨心に安住せるが、先に聞ける所の經中の句義の微細なる少分を持して、一靜處に往きて思惟し觀察するや、心に歡喜を生じ、而して復悔恨して、是くの如き言——嗚呼奇なる哉、我れ今に於ては大に善利を失せり。諸佛如來の無上の正教をば、如何ぞ多くの聽聞・領受をせざりしか——を作し、又如來に於て深重の心を起すこと、先より來正念を發せる者に於て倍すべし。舍利子、爾の時に當つて、諸の苾芻の惡魔に持せらるるあらんか、故もて是の經を聞き已るや、衆人の前に於て、當に誹謗の言——是の經典は諸の文華者の造作する所にして、實に佛説に非ず。との——を起すべく、是くの如き故に由つて、諸の苾芻の、是の教典に於て全く聽受せざるものあらん。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

是の法を聞き已らば 當に障礙無く 諸佛の法の 最上なるに於て疑無かるべし 諸の少福の者は 聽聞するを得ざれども 諸の多福の者は 是の經典を聞かん 少福の人は 聞くと

て、能く涅槃に近かしむるなり。舍利子、當來の世に於て、我れと汝と般涅槃の後、後の五百歲に、爾の時に多く薄福の衆生あつて、當に是の經に於て信重を生ぜずして、毀滅し捨棄せん。復無量の福徳の衆生あつて、飲んでは是の經を奉して理の如くに修學するに、勤めて精進を加へん。無上なる正等菩提を求めん爲めの故に、尸羅を求めん爲めの故に、多聞を求めん爲め、定・慧・解脫・解脫智見を求めん爲めの故に、一切の佛法を求め一切の衆生を利樂せん爲めの故に、邪見を捨て正見を修行せん爲めの故に、生死の流轉を捨て聖道を修めん爲めの故に、正法を演説して天魔を降伏せんと欲する爲めの故に、貪愛を捨離し、瞋心を調伏し、愚癡を摧破し、無明を除滅して慧明を發さん爲めの故なり。

復次に、舍利子、當來の世に、若し衆生あつて是の法を聞き已らば、一切の諸善法を求めん爲めの故に、當に増上なる勇猛の正勤を發すべく、是くの如き微妙の法を聞く故を以て、諸佛の法に於て障礙ある無く決定して疑ふこと無けん。舍利子、爾の時に復無量の衆生あつて、福果に資せられ増上の意に住し、無上なる正等覺を求めん爲めの故に且つ是の經典を聽き、聞き已るや當に廣大なる歡喜を獲、菩薩藏の微妙なる法門に於て極めて善く研習して、説の如くに修行すべし。又、舍利子、爾の時に、當に如來の教に於て樂うて法を聞く者あるべし。彼の諸の衆生は、何等かの差別を以ての因縁に隨ひ、是くの如き經典を聽聞することを得るに遇ひ、聞き已つて當に廣大なる歡喜を獲べく、歡喜を生じ已つて堅き精進を發し、能く是くの如き大菩薩藏の微妙なる法寶に於て少しの實分を取らん。舍利子、譬へば、大海の水上に漂流せる無量の種種なる熟果の、色・香・美味皆悉く具足せるに、一の丈夫あつて、勇猛なる大精進力を發起して、便ち海中に入り、手足を運動して彼の果を接取すること若しは二若しは三ならん。然も、是の丈夫は、此の果を執持し、海より出で、往いて一處に至り、取つて之れを嘗め、乃ち其の味の淳美なること希有なるを知り、即ち是の

【三】少しの實分を取らん。異譯本に「能く少分を以て他人の爲めに説かん」とあり。

等か三處なる。謂はゆる惡道に隨順し、惡道に趣向し、將に惡道に墮せんとするなり。是の故に、諸の菩薩摩訶薩は雜染の法に於ては終まで隨順せず、唯出離の戒・忍・多聞・白等の諸法を求むるなり。舍利子、世間の衆生は、多く無業に住して而も恒に自ら有業に住すと計し、世間の衆生は、多く諸べて懈怠して而も恒に自ら正勤を發起すと謂ふ。是の故に、舍利子、聰慧の菩薩摩訶薩は、終まで彼の無業・懈怠と共に相ひ習近せず。又亦其の數の中に墮せずして、唯同行の、正勤を發起せる諸大菩薩に與して、相ひ習近するなり。何を何ての故に。舍利子、衆生の、彼の最勝なる無染淨の相の一般涅槃に於て淨き信解を生ずること、菩薩の如き者あること無ければなり。舍利子、正勤波羅蜜多を發起せる菩薩摩訶薩は、唯自ら涅槃を證せん爲めの故にて勤精進を發すのみならず、然も一切の有情を攝受し、諸の衆生をして利樂を得しめん爲めの故に、修行せる正行に勤精進を發して開示教導し、衆生を聖道の路に安處するなり。故に、菩薩を説いて善丈夫と名く。と。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

正に勤めて緩慢なる無く 常に大精進を具へ 菩薩藏の法に於て 聰叡に恒に受持して 善く法義を思惟し 佛の不思議に於て 但淨法を勤求する 故に名けて菩薩と爲す 正勤の大慧者は 妙なる菩提樹に坐して 惡魔の軍を摧怖するは 嚴若の精進に由り 現に禁戒を守護し

諸の世間を任持して 衆生を利益せん爲めに 常に精進して限無し

復次に、舍利子、是くの如き大乘の大菩薩藏の微妙なる教典にして世に流布せんか、能く衆生をして大歡喜を發し、又能く福德・智慧を引生じて大財富を感じせしめ、其れをして增長して能く諸天の殊勝なる快樂を感じ、能く一切の圓滿なる具足を感じ、能く一切の諸佛如來の力・無所畏・無礙の智解・大慈・大悲・大喜・大捨・不共の佛法を生ぜしめん。略して之れを言はば、能く一切諸佛の法を引きて、塵怨を摧佈して心をして清淨ならしめ、能く猛慧を發して、生涯の本を窮め苦の邊際を盡し

【三】世間の衆生は等。異譯本に、「若し有情あつて、非善の業及び諸の懈怠を行はば」とあり。

訶薩は、正勤波羅蜜多を行ずる時に、是くの如き大忍力を具足する故に、假使ひ十方の無量の衆生は、各競うて百千の刀劍を執持して、菩薩の所に於て逆害を興し加ふとも、菩薩は爾の時に諸の有情に於て、終まで一念の瞋心を微發だもせざるなり。舍利子、是くの如くに菩薩摩訶薩は忍力に住する故に、大梵王の如く、天帝釋の如く、蘇迷盧四寶山王の如くに傾け動すべからずして、常に慈悲に住し、恒に意解を起して衆生を救療せんとて、諸の所行に於て終まで退轉する無く、而して是の菩薩の心は大地の如く、心は大水の如く、心は大火の如く、心は大風及び虚空の如くにして、又能く善く貪・瞋・癡等の栽植の根本を修め對治するなり。舍利子、若し菩薩摩訶薩あつて、殑伽沙等の無量の世界に盛滿せる一切の無價の珍寶を以て、持ち用ひて無量の如來應正等覺に施し奉らん。又、菩薩摩訶薩の、毘梨耶波羅蜜多を行ずる者あつて、是くの如き大菩薩藏の微妙なる法門を聽聞し、是の經を聞き已つて、空閑の處に往いて、念を繫けて是くの如き法を思惟し、精進に修學して、未だ修學せざる諸の菩薩等をして、愛樂して習行せしめん、舍利子、是の菩薩摩訶薩の如きは、正勤を行ぜざる故に、無量の諸の妙善根を攝持することは、彼の施を行ぜざるもの能く及ぶ所に非なり。何を以ての故に。舍利子、是の善根の如きは、阿耨多羅三藐三菩提に繫屬せる故なり。是の故に、諸の菩薩摩訶薩は、菩薩藏の微妙なる法門に於て、應當に聽聞し、受持し、讀誦し、若しくは復書寫し、廣く他の爲めに説くに、正勤を發起して勇猛に修習すべきなり。

復次に、舍利子、正勤の波羅蜜多を發起せる菩薩摩訶薩は、當應に不行の行處を修行すべし。舍利子、云何なるを名けて不行の行處と爲す。舍利子、不行の行處とは、謂はゆる涅槃なり。不行と言ふは、諸の惡天魔の行ぜざる所なる故にして、言ふ所の行とは、正勤の善人の行ずる所なる故なり。善人と言ふは、謂はゆる諸佛・獨覺及び佛弟子なり。所以は何ぞ。諸べて聖道に登る有らゆる善人及び佛世尊は、皆般涅槃に趣向するを爲す故なり。舍利子、一切の衆生は多く三處を行ず。何

【二】心は大地の如く等。異譯本には「心は大地の如くにして、一切平等なり。」とあり。

くに修學するなり。是れを菩薩摩訶薩の、菩薩の行を行すと名づく。舍利子、云何なるを名けて、
 身命を顧みずと爲す。舍利子、菩薩摩訶薩は正勤波羅蜜多を行する時に、設ひ他に爲つて恐怖を加
 へられて、是くの如き言——若し汝、此の菩薩藏の經に於て受持し讀誦し、乃至、廣く他人の爲め
 に開示書持して、理の如くに修學せば、我れ當に百具の箭・稍を以て汝の身を貫き擧げ、汝が命を
 除斷すべし——を作さるとも、舍利子、菩薩摩訶薩は、爾の時に當つて此の言を聞くと雖も、曾て
 心に入れずして、恐るる無く、怖るる無く、驚く無く、畏るる無く、四つの堅固勇猛なる威勢を發
 して菩薩藏の微妙なる法門に於て轉精進を加へ、棄てず、捨てず、遠らず、離れずして、猛利なる
 信解・堅固なる信解・堅固なる堪忍・堅固なる正勤を具足し成就するなり。舍利子、我れ當に汝が爲め
 に堅固の忍・堅固の正勤を説くに、方便譬喩して、菩薩をして堅固の忍・堅固の正勤を得て、菩薩の
 道を行するに身命を顧みざしむるを爲さん。舍利子、假使ひ三千大千世界の有らゆる衆生有情の攝
 むる所の、若しは卵生、若しは胎生、若しは濕生、若しは化生、若しは有色、若しは無色、若しは
 有想、若しは無想、若しは非有想・非無想、若しは可見、若しは不可見の彼の諸の衆生は、乃至、
 刹那の頃に於て皆人身を得、菩薩の所に於て、同じく百千の極重なる怨讐を結び、彼の諸怨は等し
 く菩薩に語つて、汝若し是の菩薩藏經の差別の文句に於て受持し、讀誦し、乃至、廣く他人の爲め
 に開示し、書持し、理の如くに修學せば、我等諸人は、同時に執へ縛して當に汝が命を斷つべしと
 言ふとも、舍利子、菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜多を行せる故に、爾の時に當つて此の語を聞くと雖
 も、都て一念の怖るる心をも發起する無く、但具に四種の正法を攝持して、専ら務めて大菩薩藏
 の微妙なる法門を尋求するなり。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、不退の正勤波羅蜜多を具足し成就
 せる故に、又復無邊の勢力・勇猛なる精進・正勤の勇健を成就して、心意勇健に、淨戒勇健に、大
 勇健に、等持勇健に、大慧勇健に、正行・勝智皆悉く勇健なりと名くるなり。舍利子、是の菩薩摩

【九】非有想・非無想。非想・非非想と同じ。第二卷、同名の解、參照。

【一〇】正行・勝智。異譯本には、單に「勝行」とあり。

し空に隨順しながら煩惱を滅せず、惑盡の性に於ても亦増益する無く、若し空に隨順しながら不善を滅せず、彼の善性に於ても亦増益する無く、若し空に隨順しながら有罪を滅せず、無罪の性に於ても亦増益する無く、是くの如くにして、乃至、若し空に隨順しながら生死を滅せず、涅槃の性に於ても亦増益する無く、舍利子、是等の如き相にて忍を生ぜば、則ち菩薩摩訶薩の畢竟の忍と名くるなり。舍利子、一切の諸法は、能生に非ず所生に非ず、已生に非ず現生に非ずして、一法として是に生起すべきある無く、生起無きが故に則ち盡くるある無し。若し能く此の無盡を知るあらば、則ち菩薩摩訶薩の畢竟の忍と名くるなり。舍利子、一切の諸法は是の有爲に非ず亦無爲に非ずして、増益ある無く、殖ゆる無く、増す無く、亦長養する無く、盛無く、衰無く、作者ある無く、起者ある無く、起る無き故に由つて亦盡くるある無し。と、是くの如き忍をば、則ち菩薩摩訶薩の無生の忍と名くるなり。舍利子、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提の爲めの故に菩薩の行を行するに、若し是くの如き忍を具足し成就するあらば、是れを菩薩摩訶薩の屬底波羅蜜多の圓滿なる成就と名くるなり。舍利子、若し菩薩摩訶薩にして是くの如き屬底波羅蜜多に安住し、精勤に修學して菩薩の行を行ぜば、諸魔の魔衆と天子とに爲つて擾亂せられず。又亦異道・邪論に爲つても能く摧伏せられざるなり。

毘梨耶波羅蜜多品 第九の一

爾の時に、佛は舍利子に告ぐらく、云何か菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提の爲めの故に、毘梨耶波羅蜜多に依つて菩薩の行を行する。舍利子、菩薩摩訶薩の、是の正勤波羅蜜多に於て精進に修學して菩薩の行を行するや、舍利子、菩薩摩訶薩は不退の正勤を具足し成就して、能く重んずる所の身命をも顧みずして大精進を發し、菩薩藏の微妙なる法門を求めて、殷重に聽聞し、受持し、讀誦し、究竟に研尋して義趣に通達し、廣く他人の爲めに敷演して開示し、或は復書持して理の如

【六】作者(Khandak)。衆生には、手足等を用ひて諸事を作す所の、我れと云ふ常住靈妙なる者ありと主張する者にして、數論外道等の立つる十六神我の一つなり。

【七】起者(Uttarak)。衆生には、後世の罪福の業を起す所の、常住靈妙の我れと云ふ者ありと主張する者にして、同じく十六神我の一つなり。

【八】毗梨耶波羅蜜多(Viryā-parāmitā)。精進(勸勵の義)と譯す。六波羅蜜の第四なり。

すと謂うて起す忍の若きをば、是れを則ち名けて俱生の忍と爲し、是くの如き忍は畢竟の忍に非るなり。誰れか能く罵を起し復何を罵る所ぞと謂うて起す忍の若きをば、是れを則ち名けて法を校べ計る忍と爲す。是れ眼は能く眼を罵らんやと謂うて起す忍の若きをば、是れを則ち名けて諸の處を觀する忍と爲す。此の中に能く罵らるるもの無しと謂うて起す忍の若きをば、是れを則ち名けて一切の無衆生に悟入せる忍と爲す。舍利子はくの如き諸忍は、皆菩薩の畢竟の忍には非るなり。又、舍利子、若し罵の聲は但諸の字あるのみなりと謂はば、是れ則ち名けて響の聲の忍と爲し、是くの如き忍は畢竟の忍には非るなり。若し彼我俱に無常なりと謂はば、是れ則ち名けて無常を悟れる忍と爲す。若し彼れに顛倒有れども我れには顛倒無しと謂はば、是れ則ち名けて高下の忍と爲す。若し彼れは正理に非ずして我れは是れ正理なりと謂はば、是れ相應・不相應の忍と名く。若し彼れは邪道に住すれども我れは正道に住すと謂はば、是れ則ち名けて二道別の忍と爲す。是くの如き忍は、畢竟の忍には非るなり。若し、我れは空を忍んで見趣を忍ばず、我れは無相を忍んで諸覺を忍ばず、我れは無願を忍んで志求を忍ばず、我れは無作を忍んで諸行を忍ばず、我れは惑盡を忍んで煩惱を忍ばず、我れは諸善を忍んで不善を忍ばず、我れは無罪を忍んで有罪を忍ばず、我れは無漏を忍んで有漏を忍ばず、我れは出世を忍んで世間を忍ばず、我れは清淨を忍んで雜染を忍ばず、我れは涅槃を忍んで生死を忍ばずと謂はば、舍利子、是くの如き諸忍をば、但名けて治斷の忍と爲すを得れども、皆菩薩の畢竟の忍には非るなり。

復次に、舍利子、云何なるは、菩薩摩訶薩の屢底波羅蜜多を行する時に修行する菩薩の畢竟の忍なる。舍利子、若し空に隨順しながら諸見を滅せず、彼の空性に於ても亦増益する無き、是くの如き忍をば、是れ菩薩の畢竟の忍と名くるなり。若し空に隨順しながら求願を滅せず、無願の性に於ても亦増益する無く、若し空に隨順しながら諸行を滅せず、無作の性に於ても亦増益する無く、若

共佛法・大慈・大悲・大喜・大捨の無量・圓滿なる諸佛の妙法は、皆是れ菩薩摩訶薩の屬底波羅蜜多の成就する所なることを。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は屬底波羅蜜多を行ずる時に、應當に諸忍の正行を具足すべし。舍利子、菩薩摩訶薩は、若し罵言を被るとも終まで返報する無きは、善く言語は響・聲の如くなるに達せる故なり。若し捶打を被るとも終まで返報する無きは、善く身形は影・像の如くなるに達せる故なり。若し忿怒を被るとも終まで返報する無きは、善く其の心は幻化の如くなるを觀ぜざる故なり。若し讚・毀を被るとも終まで愛恚する無きは、善く自身の徳の圓滿なるを知る故なり。得・失の利に於て欣・感を生ぜざるは、其の心を調伏して寂靜に住せる故なり。美稱を希はず、惡名を犯さざるは、善く能く觀察すること廣大なる慧の故なり。毀られて下らず、讚められて高らざるは、徳に善く安住して傾き動かざる故なり。諸の苦事に於て曾て厭惡する無きは、苦の衆生の所を深く懷戀する故なり。諸の樂の相に於て曾て欣愛する無きは、有爲の樂は性の無常なるを知れる故なり。世間の八法の染むる能はざる所なるは、一切の有趣の生に依らざるが故なり。諸の自の苦に於て善く能く堪忍するは、終まで他をして苦惱を受けしめざらん故なり。勝れたる菩提に於て心に退屈する無きは、覺分の資糧を善く圓滿せる故なり。節節支解せられ、乃至、首を斬らるるをも善く能く堪忍するは、如來の金剛身を希求する故なり。身肉を屠割せらるとも、善く能く堪忍するは、如來の妙なる相好を求めん爲めの故なり。諸の戀惡の事を善く能く堪忍するは、一切の善業力を殖さんが爲めの故なり。舍利子、是等の相の如きを、名けて、菩薩摩訶薩は屬底波羅蜜多を成就せりと爲せば、應に是くの如くに學ぶべし。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩の屬底波羅蜜多を行ずる時には、諸忍の相あり。謂はゆる菩薩摩訶薩の修行する忍は、是れ則ち名けて畢竟の堪忍と爲すなり。何を以ての故に。我れ能く毀罵を堪忍

れをして寂滅を證せしむべきが故なり。舍利子、是の諸の菩薩摩訶薩にして、若し忿恚の心の現に在る時には、應に是くの如き諸の大正念を生ずべし。若し是の念を生ぜば、諸の利益の事は速に圓滿するを得ん。舍利子、如來は過去世に於て、是くの如き屬底波羅蜜多の菩薩の行を行ぜざる由つて、阿耨多羅三藐三菩提を證得せるなり。是の故に、菩薩摩訶薩は、無上正等覺を求めんと欲せば、諸の忍力に於て常に具に成就して、一切の寒熱・饑渴・風日・蚊虻・蛇蝎等の觸を堪受し、又能く麤惡の言説・鄙陋の詞句を堪忍し、身に依つて生ずる所の猛利の諸苦・堅韌なる楚辛の、命を奪ひ死に至らしむる、是くの如き苦受をも、並に能く堪忍せよ。舍利子、是れを菩薩摩訶薩の、是の忍に安住して、速に能く屬底波羅蜜多を成就する故と名くるなり。

復次に、舍利子、云何か菩薩摩訶薩の屬底波羅蜜多にして、菩薩摩訶薩は之れに依つて修行して、忍法の相を具足し成滿する。舍利子、菩薩の忍とは、瞋恚ある無き、是れ菩薩の忍なり。忍對ある無き、是れ菩薩の忍なり。諸の怒害無き、是れ菩薩の忍なり。怨諍を起さざる、是れ菩薩の忍なり。諸の損惱無き、是れ菩薩の忍なり。善く能く自ら護る、是れ菩薩の忍なり。善く能く他を護る、是れ菩薩の忍なり。當に善く身を護る、是れ菩薩の忍なり。當に善く語を護る、是れ菩薩の忍なり。當に善く心を護る、是れ菩薩の忍なり。理の如くに觀察する、是れ菩薩の忍なり。諸欲を厭離する、是れ菩薩の忍なり。淨き業報を作る、是れ菩薩の忍なり。身の善く清淨なる、是れ菩薩の忍なり。語の善く清淨なる、是れ菩薩の忍なり。心の善く清淨なる、是れ菩薩の忍なり。諸の人天の圓滿なる淨樂を受くる、是れ菩薩の忍なり。如來の相好を圓滿に莊嚴する、是れ菩薩の忍なり。如來の言説の梵音の微妙なる、是れ菩薩の忍なり。菩薩の行を行じ、諸の善本を擲めて壞失せざる、是れ菩薩の忍なり。衆生の逼迫なる苦惱を出離する、是れ菩薩の忍なり。一切の諸惡・怨對を除滅する、是れ菩薩の忍なり。舍利子、略して之れを言はば、當に知るべし、一切如來の力・無所畏・不

【四】淨き業報を作る等。
異譯本に「業報に隨順する、是れを菩薩の忍と名く。」とあり。

【五】力、乃至、大捨。十力と四無所畏と十八不共法と四無量心となり。第一卷、同名の解、參照。

寂の處に於て志求の心無くば、當に知るべし、魔業なることを。無上正等の菩提を樂はずば、當に知るべし、魔業なることを。餘の智慧に於て恒に欣求して習はば、當に知るべし、魔業なることを。乃至、毘波陀耶、阿遮利耶の二勝師の所に於て、敬仰・恭順の心を修めずば、當に知るべし、魔業なることを。舍利子、諸べて是等の如くに、忿恚の心は、能く菩提に於て擾亂を爲すなり。舍利子、是れを則ち名けて擾亂心に住すと爲し、菩薩摩訶薩は、諸の惡魔に爲つて使はるる故に、諸の魔業を作すなり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、羸底波羅蜜多を行ずる時に是くの如き念を作さん。長夜の中に於て、諸の衆生の、等しく諸の惡魔に便を伺求せらるる者は、謂はゆる瞋恚なり。と。舍利子、我れ今汝が爲めに廣く其の事を説かん。我れ過去を念ふに、大仙人として修行處と名けし時に、惡魔あつて、五百の健罵なる丈夫に化作し、恒に我れに尋逐して諸の惡罵を興し、晝夜・去來・行住・坐臥に、僧坊・靜室・聚落・俗家に、若しは街巷に在つても、若しは空閑處にても、我れに隨つて坐し立てり。是の諸の惡魔は、龜惡の言を以て毀罵・訶責すること五百年に滿ちて、未だ曾て休み發せざりき。舍利子、我れ自ら憶ふに、昔五百歲の中、諸の魔羅に爲つて訶毀せられしも、未だ曾て彼れに於て微の恨心をも起さずして、恒に慈の救を興さんとて觀察を用ひたり。舍利子、我れ爾の時に於て、復是の念を作せり。若し諸の善男子あつて、尸羅を守護して衆の善法を具し、貪・瞋・癡に於て輕少ならば、唯彼れに於て諸の利益を作すと説くのみならず、我れは以て行じ難きを行する者と爲さん。又亦、唯彼れに於て諸の利益を作すのみならず、能く無上正等なる菩提を證せん。何を以ての故に。若し衆生の、剛強にして伏し難く、尸羅を毀犯し、諸の惡法を具して性を爲し、濁重なる貪・瞋・癡の者あらんに、若し我れ彼れに於て諸の利益を作さば、是れを則ち説いて、我れ難行の者と爲すは、我れ彼れに於て諸の利益を作すに由つて速に無上正等なる菩提を成ずれば、先づ當に彼

【三】我れ彼れに於て、乃至、寂滅を證せしむべきが故なり。異譯本に「善緣を作す故にて、阿耨多羅三藐三菩提を成熟するを得しめられたれば、我れ當來に等正覺を成ぜば、最初に諸の有情の類を度脱して、涅槃を得しめんと願じたり。」とあり。

世間の暴惡の誦の有情の刀毒等を以て害を相ひ加ふるを能く彼れを和合して善友と爲すは此れ則ち聖賢の聰慧の相なり。我れは常に世の愚夫を學ばざるべく又應に彼れと而ち異なるを爲すべし。凡夫と聖者との所行は流轉と寂滅との差別なる故なり。

復次に、舍利子、菩薩摩訶薩は、屢底波羅蜜多を行ずる時に、應に是くの如くに正法を修學すべし。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、復是の念を作さん。假使ひ百千の那庾多拘陁の大劫を経て、諸の衆生に常に刀杖・瓦石・土塊を以て種種に害を加へらるるとも、但須臾にても微命を存するを得しめば、猶應に欣慶して是くの如き念を作すべし。奇なる哉、是くの如き有情、聖者は、能く我が命に於て全くは斷つことを見ず。と。是の菩薩摩訶薩は、是れより已後に轉修學を増して、又是の念を作さん。假使ひ衆生は、七歩を行く頃に我が首を斬截すること殘伽沙に等しくとも、然も我れは彼れに於て、終まで若しは忿若しは悲を發起せじ。所以は何ぞ。夫れ忿恚は、速に能く百千の大劫に集めし所の善根を損害す。若し我が善根にして損害を爲しじらば、復當に百千の大劫に於て方に始より勤苦して聖道を修行すべく、若し是くの如くんば、阿耨多羅三藐三菩提は極めて得べき難ければなり。是の故に、我れは當に忍辱の鎧を被、堅固の力を以て忿恚の軍を推くべし。と。又、舍利子、菩薩摩訶薩の大乗に住する者、忿恚の心を起さんか、魔は其の便を得ん。既に便を得じらば、阿耨多羅三藐三菩提に於て能く障礙を爲さん。舍利子、忿恚の心は菩提の道に於て能く擾亂を爲し、擾亂の心は能く惡魔の有つ所の魔業を發すなり。此の中、云何なるを名けて魔業と爲す。若し菩薩あつて、心衣鉢に住して捨離する能はずば、當に知るべし、魔業なることを。心乞食に住して諸の施主の家を捨離する能はずば、當に知るべし、魔業なることを。心名聞に住して、恭敬・利養を捨離すること能はずば、當に知るべし、魔業なることを。出家の法に於て常に厭患を生ぜば、當に知るべし、魔業なることを。白淨の法に於て多く輕賤を生ぜば、當に知るべし、魔業なることを。空

は、謂はく、我れ當に大忍辱力を證すべし。にて、野干の聲とは、謂はく、衆生に於て瞋恚、訶毀等の相を行ふなり。舍利子、是の菩薩摩訶薩は、復是の念を作さん。世間の衆生は、若し彼れの利を得ば方に乃ち他を利す。我れも亦是くの如くに、衆生よりの利を得んとて方に彼れを利せば、我れと世間と何の差別有らん、何の殊異・希奇の相有らん。と。又、是の念を作さん。世間の衆生は、若し彼れは此れに於て無義利を作さば、此れは復彼れに於て無義利を作す。我れも亦是くの如くに、衆生我れに於て無義利を作すに、我れ復彼れに於て無義利を作さんか。若し此くの如くんば、我れと衆生と何の希奇・差別・殊異有らん。と。舍利子、菩薩摩訶薩は、是の法の中に於て應當に修學すべし、又、是の念を作さん。世間の衆生は、互に怨對を爲しながら、若し彼れの利を得ば善友たりと謂ひ、若し利を得ずんば更に相ひ殺害するなり。我れ是くの如き深き過失を見る故に、應當に一切衆生の、我れの身に於て諸の利樂を作し、及び我れの身に於て無義利を作すを觀ぜずして、但是の念を作すべし。我れ今に於ては、必ず當に一切衆生を饒益すべし。屢底波羅蜜多を満足せんと欲する爲めの故に。と。

爾の時に、世尊は、重ねて此の義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく。

設ひ彼れは我れに於て無利を爲すこと 多百の拘胝劫を經とも 彼の有情の衆苦を受くるを見
て 終まで捨心に安住する無けん 設ひ互に世の財利を得るあつて 更に相ひ稱讚して善友

と爲し 若しくは互に世の財利を得ずして 彼れ此れ怨對して相ひ殘害し 假使ひ此の 瞻部

洲の 或は復三千の佛世界に 盛滿せる珍寶を以て來つて相ひ惠みて 常に我れに賢善友たら

んことを求め 假使ひ利き刀劍を執持して 來つて我が身の諸の支節を解くとも 我れは當に

彼の諸の衆生に於て 平等に利益する心に二つ無けん 諸の毀罵に於ては我れは當に忍ぶべ

く 亦一切の諸難の苦を忍び 當に衆生の爲めに忍力を讚じ 亦自ら大忍の中に安住せん

【三】瞻部洲。閻浮洲と同じ。
第一卷、同名の解、參照。

爲さざれば、復更に、餘の無量の方便を以て、佛を思惟し菩提及及び法・僧を思惟せん。と。舍利子、菩薩摩訶薩は是の思を作し已つて、應當に觀察すべし。我れ今、彼の一切衆生と何の差別・殊異の相ある。何を以ての故に。彼の諸の衆生の、現に我が身に於て瞋害を起す者は、佛菩提及び法・僧に於て曾て思惟せざればなり。我れ若し彼れと同じく思惟せずば、諸の衆生と何の差別あらん、何の殊異・希奇の相あらん。と。舍利子、是の菩薩摩訶薩は又復思惟せん。若し他人に現に瞋害せらるる時に、心に便ち捨を生じて、佛菩提及び法・僧等に於て曾て思念する無くば、此れは我が宜には非ず。と。又、是の念を作さん。若し我れ、彼れに於て瞋害を起さば、則ち無智にして忍辱無しと爲さん。亦、本願に於て便ち棄捨せん。所以は何ぞ。若し瞋害を起さば、則ち是の心無ければなり。我れ當に一切衆生を攝受せん。我れ當に一切衆生を捨てざらん。と。我れ若し瞋を起すこと、一の有情だにも於てせば、菩薩の攝化の法と名けざれば、誰れか我れを請じて菩薩の道を行ぜしめん。而も況んや、往昔是くの如き願を發せるをや。我れ當に速に阿耨多羅三藐三菩提を證し已つて、廣く衆生の爲めに正法を宣説すべし。と。適に是くの如き弘誓を發せる時に、諸佛世尊は、同じく共に我れを證して、便ち是の念を作したまへり。此の族姓子の發心や、是くの如き無上なる正等覺に安住し已れば、當に衆生の爲めに廣く正法を宣ぶべし。と。又、今に於ては、諸佛世尊は無障礙の智・無障礙の見もて、現に我れを證知したまへり。是の故に、應に他に毀罵・訶責せらるる時に、若く瞋害を起すべからず。佛菩提・法・僧の所に於て、若く捨を生ずる者は應に憶念すべからず。何を以ての故に。現在の東方の屍伽沙の等の諸佛世界の、彼の世界の中に屍伽沙の等の如來應正等覺あつて、現在住持したまへるが、彼の佛世尊も亦我が心に生ぜる正願を證知したまひ、南西北方の四維・上下にも亦復是くの如くに、我が是の正願を發せる時に當つて、諸佛は同聲にて、我が忍力を讃じたまへばなり。故に、我れは應に師子吼を作し已つて、復野干の聲を作すべからず。師子吼と

事を樂はされば、豈應に樂うて毀罵・訶責を行ふべけんや。何を以ての故に。是くの如き訶・毀の諸の惡業は、是れ則ち名けて、相應せざる業・理に稱はざる業・愚夫の業と爲し、是れ下劣の業・非善人の業・非賢聖の業なれば、此の業に由るが故に、地獄・傍生・閻魔の世界に墮ち、又、此の業に由つて、諸の惡趣に與して眷屬となり、此の業に由るが故に、貧窮なる夜叉の身を感じし、又、此の業に由つて、貧夜叉の根本の果報を感じ、此の業に由るが故に、貧窮なる餓鬼の身を感じし、又、此の業に由つて、貧餓鬼の根本の果報を感じ、此の業に由るが故に、貧窮なる人趣の身を感じし、又、此の業に由つて、貧人趣の根本の果報を感じ、又、此くの如き訶・毀の業に由るが故に、下趣及び下趣の根本の果報を感じずればなり。我れ今は應に下劣の趣を求むべからず。所以は何ぞ。若し我れ是くの如き事を作すを求めば、諸の衆生と何の差別かあらん。然り、彼の衆生は理に順ぜざれども、我れは既に理に順じたれば、應に彼れに同すべからざればなり。と。舍利子、是に諸の菩薩摩訶薩の、屬底波羅蜜多を行ぜん者は、應當に我れに隨つて是の法を修學すべきなり。何を以ての故に。舍利子、是の諸の菩薩は、他に毀罵・訶責せらるる時には、便ち能く是の正法に依つて、作意思惟して忍受すればなり。是の菩薩摩訶薩は、是くの如き忍辱力を得る故に由つて、復無量の諸の妙善根を獲ること、假使ひ諸の珍寶の、佛世界の四大洲中に満ちたるを以て、持ちて布施に用ふとも、前の功德に比せんに、皆及ぶ能はざるなり。所以は何ぞ。是の忍辱の行は、極善の丈夫のみ方に能く修習すればなり。何を以ての故に。一切衆生の多くは、毀罵・訶責に爲つて拘執せられ、是くの如き故に由つて、生死に流轉して斷絶する能はざればなり。

復次に、舍利子、是に諸の菩薩摩訶薩の、屬底波羅蜜多を行する者は、應に自ら勉勵し審諦に觀察して、是くの如き念を作さん。我れ若し他に訶・毀せらるる時には、能き思惟を佛菩提及び法・僧に於て爲すや、不や。若し能く思惟せば、是れ則ち善と爲せども、若し思ふ能はずば、名けて善と

卷の第四十五

菩薩藏會 第十二の十一

屬底波羅蜜多品 第八

爾の時に、佛は舍利子に告ぐらく。云何なるを名けて、菩薩摩訶薩の屬底波羅蜜多と爲す。菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提の爲めの故に、是くの如き法に於て精勤に修學して菩薩の行を行するなり。舍利子、菩薩摩訶薩は、是くの如き屬底波羅蜜多に住する故に由つて、忍力を具足し、性を立つること堅正にして、諸の寒熱・饑渴・蛇蝎・蚊虻・風日等の觸に於て悉く能く堪忍し、又能く龜惡の言説・鄙陋の詞句を忍び、及び身に依つて起る所の猛迅なる苦受と、堅韌なる辛楚の命を奪ひ死に至らしむる諸べて是等の如き有らゆる苦受とを、並に能く堪忍するなり。舍利子、若きを諸の菩薩摩訶薩にして能く具足せば、是れを則ち名けて屬底波羅蜜多と爲すなり。

復次に、舍利子、我れ昔、長夜に未だ成佛せざりし時に、菩薩の行を行ぜるに、常に忍辱を修めたり。舍利子、佛に白して言はく。云何か世尊は菩薩たりし時に、忍辱を修集して菩薩の行を行じたまへる。佛、舍利子に告ぐらく。我れ過去に菩薩の行を行ぜるを憶ふに、多く衆生あつて、數來つて毀罵し、非法に訶責して、面り我が前に於て、諸の非法・弊惡なる言説を出せり。舍利子、我れ爾の時に於て、屬底波羅蜜多を行ぜる故に、其の心を制伏して忿恚・慳吝・憍慢を生ぜず、但是の念を作せり。諸行の中に於て、少しの法も、是に得べき易きこと、毀罵及び訶責に過ぎたる者あること無し。是の故に、我れは今應當に捨を修すべし。又、我れ彼れに於て應に慈悲を起すべし。何を以ての故に。世間の衆生の多分は毀罵・訶責に安住し、斯の業に由る故にて、還つて復是くの如き相、訶・毀の果報を感得し、存在の在る所にて常に醜陋惡むべき身を得ればなり。我れ今、醜陋の

◎「備考」
註解は、前卷までに一度出でたる者は再掲せず。

【一】屬底波羅蜜多(Kānti-paramita)。忍辱度無極と譯す。六波羅蜜(六度)の第三なり。

佛爲阿難說人處胎會第十二(卷の第五十五)〔九七—一〇一〕……………二〇三

佛說入胎藏會第十四(卷の第五十六)〔一〇二—一〇五〕……………二〇八

文殊師利授記會第十五(卷の第五十八)〔一〇五—一〇九七〕……………二五七

菩薩見實會第十六(卷の第六十一)〔一〇九八—一六三〕……………三〇四

菩薩見實會未完

序品第一……………二〇四

淨飯王詣佛品第二……………二一〇

阿修羅王授記品第三……………二二三

本事品第四……………二四〇

迦樓羅授記品第五……………二四三

龍女授記品第六……………二五〇

龍王授記品第七……………二五五

鳩槃荼授記品第八……………二五八

乾闥婆授記品第九……………二六三



索引……………卷末

大寶積經だいほうしやくきやう (全百二十卷中) (續第四十六卷至第六十四) (通頁) 〔七五—二六三〕……………一

菩薩藏會 第十一(續) (卷の第四十六) (續第五十四) 〔七五—九九六〕……………一

屬底波羅蜜多品第八……………〔七五—八〇四〕……………一

毘黎耶波羅蜜多品第九の一……………〔八〇四—八二五〕……………一〇

毘黎耶波羅蜜多品第九の二……………〔八二六—八三六〕……………三

毘黎耶波羅蜜多品第九の三……………〔八三七—八五八〕……………四

毘黎耶波羅蜜多品第九の四……………〔八五九—八七八〕……………六

靜慮波羅蜜多品第十の一……………〔八七九—八九九〕……………八

靜慮波羅蜜多品第十の二……………〔九〇〇—九〇五〕……………一〇

般若波羅蜜多品第十一の一……………〔九〇五—九一六〕……………二

般若波羅蜜多品第十一の二……………〔九一七—九三三〕……………三

般若波羅蜜多品第十一の三……………〔九三四—九五四〕……………四

般若波羅蜜多品第十一の四……………〔九五五—九七五〕……………六

大自在天授記品第十二……………〔九七六—九九六〕……………八



寶積部 三

長井眞琴譯



CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY,
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

23

國譯一切經

大東出版社藏版

四
第
一
册

大東出羽縣藏

23

國譯一切經

大正藏經

